乱世を往く！

新月　乙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
乱世を往く！

【Ｎコード】
Ｎ６６５４Ｐ

【作者名】
新月　乙夜

【あらすじ】
いつの時代も世間の評価を受けるのは華々しく活躍する魔導士たちだ。しかしその一方で魔導士以上に保護され厚遇され、そして管理されたのが魔道具を作る側である魔道具職人であった。
これはとある二つ名をもつ流浪の魔道具職人と、彼に関わる者たちのお話。
（４／１３、Ａｒｃａｄｉａにも投稿しました）

第一話　独立都市と聖銀の製法　プロローグ（前書き）

新月　乙夜と申します。

初投稿作品です。生暖かく見守ってくだされば幸いです。

第一話　独立都市と聖銀の製法　プロローグ

事実は一つ
真実は人の数ほどに

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第一話　独立都市と聖銀の製法

全ての生物は魔力を持っている。なぜなら魔力とは生命力と同義なのだから。より詳しく言うのなら、「魔力とは生命活動以外の用途に用いられる生命力」となる。普通に魔力を使っている分には命を削るようなことにはならない。もっとも命を削るような「禁忌の法」も確かに存在しているが。

人間は魔法を使うことができない。炎を生み出したり、風を操ったりという奇跡の技を人は行うことが出来ない。人にできるのはただ魔力を外に放出することだけだ。

だからこそ人は「魔道具」を作り上げた。魔力を注ぎ込むことで魔法を再現するための道具を作り出したのだ。

いつの時代も同様であるが、華々しい注目を集めるのは魔道具を扱う「魔導士」と呼ばれる人々である。戦乱の時代に名をはせた英雄たちや勇名轟く剣豪・用兵家。こういった人たちは皆魔道具を扱う側の魔導士であった。

一方、魔道具を作る側の人間のことを「魔導職人」あるいは単に「職人」といったりする。ちなみに魔導士と魔導職人の境目はひどく曖昧である。同一人物が製造と使用の両方に秀でていることが良くあるからだ。まあ、どちらを名乗るかは本人の自己申告といったところだろう。

ところで、華々しい注目を集めるのは魔導士であるが、その影で魔導士以上に保護され厚遇されそして管理されたのが魔導職人であった。

当然といえば当然である。１人の魔導士どれだけ強い力を有していようとも結局それは個人の力であり、極端なことを言ってしまえば死んでしまえばそれまでだ。しかし魔導職人は違う。より厳密にいえば彼らが造る魔道具は違う。強力な魔道具はそれを持つもの全てに力を与える。しかも使用者が死んでも彼らの「作品」は残るのだ。強力な魔道具が反抗勢力や賞金首の手に渡り甚大な被害が出る。それは権力者にとって当然想定されるべき事態であった。

強力な魔道具を作り出すことのできる優秀な職人達。権力者にとって彼らは武力を支える魔道具を生み出してくれる存在であると同時に、なんとしても囲い込み飼いならしておかなければならない存在であった。

さて、そんな世界に「アバサ・ロット」という流れの魔道具職人がいる。年齢性別一切不詳。恐らくこの世界で最も有名な流れの魔道具職人である、かの人の造る魔道具は全て一級品で、しかも気に入った相手にだけ譲ることで知られている。

千年の昔からアバサ・ロットはこのエルヴィヨン大陸を流浪し続けている。それは「アバサ・ロット」という名前が一種の称号とし

て親から子あるいは師から弟子に受け継がれているためだと考えられている。

卓越した魔道具製作の技術と知識を持つアバサ・ロットという職人を、これまで幾人もの権力者が探し出して召抱えようとした。しかし成功したものは未だかつて一人もいない。

そのくせかの職人が作る魔道具は、いつの時代も歴史を作り、あるいは塗り替えてきた。

かの人が魔道具を与えた王は、後に大陸を統一した。またある王女は与えられた魔道具を手に亡国を回復し「救国の聖女」と呼ばれた。かつて砂漠であったある土地は、かの職人が水を引いたことで一面穀倉地帯になり、その土地をめぐり流血の交渉がもたれたという。

本人が表舞台に出てこないにも関わらず、これほどまでに歴史に関わった職人は他にはいるまい。

この大陸で「アバサ・ロット」の名は、既に生ける伝説と化している。

とはいえやはり、アバサ・ロットという職人は例外的な存在であると言わざるを得ない。魔道具職人たちは工房に所属し黄金色の鎖で縛られる。そして優秀であればあるほど、その鎖は太く長くなる。それが一般的であるし、またそうでなければならなかった。

そのため多くの人は「アバサ・ロット」という存在は知っていても、どこか別の世界のことのように考えるのが常であった。かの人はあくまでも「伝説」なのだ。

それはここ「独立都市ヴェンツブルク」においても同様であった。魔道具職人たちは工房にいるのが普通で、魔道具は工房で作られる、というのが人々の常識であった。

ヴェンツブルクにおいて魔道具はそれぞれの種類で区別され取引が規制されている。また特に危険と判断された魔道具は個別に所持・使用・売買などの面で規制される。

特に規制が強いのは当たり前だが武器であり、職人は認可を受けた商人や資格（免許）を持った魔導士にしか売却が許可されていない。

だからこそ、リリーゼ・ラクラシアが魔導士ギルドの魔導士ライセンスを取ったお祝いのプレゼントとしてもらった「水面の魔剣」は父がヴェンツブルク最大の商会「レニムスケート商会」から買ったものだと、とくに深く考えずそう思っていた。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

ラクラシア家の現在の当主であるディグス・ラクラシアは開明的な人であった。自身の末っ子にして長女であるリリーゼ・ラクラシアが一般的なお嬢様の枠に収まらないことを悟ると、あっさりと彼女の人生を彼女自身の手にゆだねたのである。

その結果彼女は利発で活発な、悪く言えばおてんばに成長した。サロンでお茶を飲むよりは野山を駆け巡るほうを好み、ダンスの練習よりは魔導士としての訓練を好んだ。服装も動きやすい男装を好んだ。華美なドレスなど彼女にとっては豪華なばかりの拘束着と変わらないのだろう。

そんなリリーゼの様子に父親であるディグスとしては「もっと令嬢らしく・・・・」と一抹の不満を覚えないでもない。だがそれ以上に彼女のまっすぐな気性は政治的な駆け引きとやらに疲れたディグスにとって心地よいものだった。

そんな自慢の愛娘がこのたび魔導士ギルドの魔導士ライセンスを習得したのだ。魔導士ギルドのライセンスはもともとフリーの魔導士がギルドの仕事を請け負うためのものだ。それが、魔導士ギルドが拡大するにつれて身分証として使われたり、仕官する際の条件になったりしている。

独立都市ヴェンツブルクの三家のひとつラクラシア家の一員であるリリーゼに必要なものとは思えなかったが、「やりたいのならやって見なさい」といってディグスは試験を受けることをリリーゼに

許可したのだった。

今、ディグスの目の前ではリリーゼが発行されたライセンスプレートを見せながら試験の様子を家族に興奮気味に語っている。実技試験では相手の魔導士がなかなかのつわもので危なかったこと。攻めあぐねたこと。一瞬の隙を突いて何とか勝てたこと。その様子は本当に嬉しそうだ。頬を高揚させて話す愛娘にディグスは声をかけた。

「リー、ライセンス習得おめでとう。よくがんばりましたね」

リー、とはリリーゼの愛称だ。

「はい、父上。ありがとうございます！」

「ライセンス習得のお祝いにプレゼントがあります」細長い木箱をテーブルの上におきリリーゼに開けるように勧める。「合格するか分からなかったのに・・・・」と少々呆れ気味のリリーゼに「合格するまで隠しておくつもりでしたから」と冗談半分に返す。

木箱の中に入っていたのは一本の剣だった。それもただの剣ではない。鞘に収められたままでもその力を感じられる。リリーゼが息を呑む。

「抜いてみてもいいですか？」

ディグスの「どうぞ」という返事を聞いてからリリーゼはその剣を抜いた。そして眼を見張った。

優美。ただその一言がひたすらにふさわしい剣だった。柄に施された細工もすばらしいがそれ以上に美しいのはその刀身だ。細く美しい刀身は蒼白色に淡く輝き、そして向こう側が伺えるほどに薄い。さらに刀身には水面のように波紋が浮かび、その表情を時々刻々と変化させていた。

だが優美なだけの剣ではもちろん無い。鞘をしたままでも強い力を感じたが、こうして鞘から出すとその力をよりはっきりと感じることができた。強力な、しかし威圧することの無い、静謐を極める力だ。

「『水面の魔剣』。ご満足いただけたかな？」

ディグスが得意げに声をかけた。水面の魔剣になかば呆然と見入っていたリリーゼの表情が歓喜に染められていく。

「はい！ありがとうございます、父上！この魔剣に恥じぬ魔導士になるよういっそう励みます！」

「ハハハ、まぁ、ほどほどにね」

最後のディグスの言葉がリリーゼに届いたか、はなはだ疑問である。

リリーゼに水面の魔剣が贈られたその夜、ラクラシア家の次男クロード・ラクラシアは父であるディグスの書斎を訪ねた。扉をノックし許可を得てから中に入ると、そこには兄であるジュトラース・ラクラシアの姿もあった。

「兄上もこちらにいましたか」

「クロード、お前もあの魔剣についてか」

「はい。あれほどの魔剣が入荷されたという話は騎士団でも聞いていません。父上、アレはどこから仕入れたものですか」

クロードは自衛騎士団に所属し五つある大隊の一つを率いる。魔道具、その中でも武器の情報は騎士団に集まりやすいのだが、あの魔剣の話は聞いたことがない。ちなみに兄であるジュトラースは父親の右腕として政治畑でその手腕を発揮している。

息子二人の視線を受けてディグスは嬉しそうにうなずいた。
「あの魔剣についてすぐに違和感を抱けるとは・・・・・、成長したな、二人とも」

すぐに表情を硬いものに変じ、ディグスは二人の息子に告げた。
「あの魔剣はエメッサから買い取ったものだ。エメッサは手に入れてすぐに持ってきたといっていたよ」
「エメッサ・・・・。とすると闇ルートからの品か・・・」

ジュトラースが顎に手を当てながらいった。

エメッサはこの町で情報屋をやっている女性だが、同時に闇ルートに流れている魔道具も取り扱っている。もちろんこういった商売は違法なのだがあまり厳しく取り締まると逆効果になるので、違法性の高い商品やあからさまな盗品を扱わないといった暗黙の了解を守っているうちは黙認されているのだ。さらには闇ルートのほうが強力な魔道具を入手しやすいという事情もある。値段はともかく。

「エメッサの話では、あの魔剣を持ち込んだのは若い男だったそうだよ」
年の頃は２０代で身長は１７０半ば。髪は銀髪で瞳の色は青。左の頬に狼を模した刺青があり、モスグリーンの外套を羽織っていたという。

「その男があの魔剣を造ったのでしょうか・・・・？」
クロードの疑問にディグスが答えた。
「エメッサも同じ事を聞いたらしい。そうしたら・・・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『この魔剣、大層な逸品だけどあんたが造ったのかい？』
『ああ、そうだ』
『え・・・・？』
『冗談だよ』

エメッサがムッとした表情を浮かべると男はからかうように続けた。

『オレが造ったものだろうがそうじゃなかろうが、あんたに確認する術なんて無いんだ。だったら考えても無駄だと思わないか』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「見事にはぐらかされたな・・・・」
ジュトラースが苦く笑う。

「この際その男が実際に造ったかはさほど重要ではない」
無論、造った本人であることが最も望ましい。が、そうでなかったとしてもその男には強力な魔道具を手に入れるツテがあるということだ。しかも闇ルートで流したということは、そのツテはあの魔剣を造った職人に直でつながっている可能性が高い。何人も仲介させるとそれだけ発覚する可能性が高くなるため、普通はそういうことはしないからだ。

「その男、騎士団で捜しましょうか。それだけ特徴があればすぐに見つかると思いますが」
そう提案したクロードに答えたのはジュトラースだった。

「いや、今騎士団を動かすとガバリエリとラバンディエに感づかれ

る。いずれ感づかれるにしてもできるだけ後にしたい」
「ジュトラースの言うとおりだな。まずはラクラシア家の情報網を使って探すとしよう。穏便にすめばそれに越したことは無い」

他の二家に感づかれる前にその男を確保してしまうのが最善だ。仮に騎士団を動かすとしたらガバリエリやラバンディエと争奪戦になってからだ。

「ジュトラースはその銀髪の男の情報を集めてくれ。クロードはガバリエリとラバンディエの動きを監視、それと騎士団の情報を注視してくれ」
「「はい」」

ディグスが方針を決定し二人の息子に指示を出した。ジュトラースとクロードがうなずくとその場は散会となった。

第一話　独立都市と聖銀の製法？（後書き）

誤字・脱字がありましたら、教えていただけると幸いです。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

――独立都市ヴェンツブルク

エルヴィヨン大陸の東に位置する人口およそ三万人の独立都市である。都市の東側に天然の良港を持ち、貿易によって栄えている。ガバリエリ、ラクラシア、ラバンディエの三家の力が強い。八人の執政官の合議によって行政がなされており、八つある執政官の椅子のうち三つは三家が一つずつ占有し、残りの五つは選出によって選ばれる。治安の維持は自衛騎士団によってなされている。貿易港で人の出入りが激しいため、開放的で活気に満ちているが反面喧嘩などのいざこざも多い。

モントルムという国の東の端に位置していることになるが、もともとレジスタンスの集まりが起こりで独立の気風が強い。そのためモントルムの宗主権を認めているが、実質的には独立した自治権を持ち、また行使している。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そんな独立都市ヴェンツブルクの町を１人の男が歩いていた。年のころは二十歳の始めごろで背丈は１７０半ば。髪と瞳の色は黒で赤褐色の外套を羽織っている。顔立ちは整ってはいるがとりたてて美形というわけではない。

橋の上を通りかかると、そこで両替をしている男に彼は金貨を差し出して声をかけた。

「こいつを両替してくれ」

「金貨か・・・・。今のレートだと1シクは37ミルだな。手数料が20オムだ」

「シク」は金貨の単位で「ミル」は銀貨の、「オム」は銅貨の単位だ。1シクは大体37～40ミルで、1ミルは100オム固定だ。ちなみに銅貨には二種類あり一つは普通の銅貨で10オムである。普通「銅貨」といった場合には10オム銅貨をさす。もう一つは真ん中に正方形の穴が開いているもので1オム銅貨という。こちらは普通「銅銭」と呼ばれる。

なお、平均的な一般家庭の月収が3～5シクだといえば大まかな価値は分かってもらえると思う。

「・・・・レートあがった?この前までは1シク40ミルだったのに」

「教会が聖銀(ミスリル)を作るのに銀を集めているって話だ。そのせいじゃないのか」

銀貨の原料である銀そのものが市場で少なくなっているために、銀貨の価値が上がったのだ。少しばかり損をした気分だ。男が10オム銅貨2枚を手渡すと両替屋は銀貨を渡した。受け取った銀貨を財布にしまっていると両替屋が声をかけてきた。

「お客さん、外套なんて着ているところを見ると旅人かい?この都市には何しに来たんだい?行商の仕入れならいいところを紹介するよ」

実際交易で栄えているこの都市に来る旅人の多くはそっちが目的なのだろう。だがこの男は例外だった。

「ハズレ。都市の周りに遺跡があるだろ?そいつの見物」

「遺跡見物かい？大方調査は済んでいるはずだよ」
「いいんだよ。半分以上趣味なんだから」
「そうかい。・・・・そうそう、なにやら強力な魔道具が持ち込まれたらしい。そいつ関連で三家がなにやら動き回っているらしいぞ。誰が持ち込んだんだろうな」
「アバサ・ロットだったりしてな」

まさか、と両替屋は笑った。アバサ・ロットとは恐らくこの世界で最も有名なフリーの魔道具職人である。かの人の造る魔道具は全て一級品で、しかも気に入った相手にだけ譲ることで知られている。アバサ・ロットは千年近く昔からその存在が知られているが、これは「アバサ・ロット」という名前が一種の称号として親から子あるいは師から弟子に受け継がれているためだと考えられている。

両替屋ともう二言三言は話してから彼は橋をあとにした。その足で都市の外へと向かう。

「動きが速い・・・・。いや、大きい」顎に手を当て真剣な表情で考え込む。しばらくして顔を上げると気楽そうにこういった。「ま、何とかなるだろう」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リリーゼが「水面の魔剣」を手にしてから、つまりラクラシア家が「例の男」を探し始めてから三日が経過していた。この間に情報はガバリエリ家とラバンディエ家にもめでたく伝わり、今では三家の下っ端たちが入り混じって「例の男」を探している。

年の頃は２０代で身長は１７０半ばの男。髪は銀髪で瞳の色は青。左の頬に狼を模した刺青があり、モスグリーンの外套を羽織ってい

た。

これだけの情報がありながら、しかし情報は一向に集まらなかった。かといって都市から出たという情報も無い。手詰まりな感があったが三家が三家とも「他の二家に遅れをとるわけにはいかない」という対抗意識から手を引くに引けない状態となっている。外側からはそのように見えた。

さて、ここにもう一つ「例の男」を確保しようとしている勢力がある。

「三家の様子はどうですか」

いすに座り机にひじを付いて目の前の部下に声をかけたのは三十代始めに見える男だった。くすんだ蜂蜜色の髪を肩の辺りまで伸ばしている。体の線は細く一見して優男であるが、あいにくと彼の真価は首から上に由来するものだった。彼の名はジーニアス・クレオ。レニムスケート商会を率いる若き首領（ドルチェ）である。

レニムスケート商会の狙いはごく単純である。強力な魔道具を定期的に揃えられるようにして、それを売りにして商会の勢力を伸ばすことである。そのためには「水面の魔剣」の製作者と見つけなければならないが、その手がかりは「例の男」が握っている。

「相変わらず『例の男』を探しています。・・・・表向きは」

「でしょうね。この期に及んで特長そのままの『例の男』が実在していると考えるほど三家もバカではない。探しているように見せているのはこれ以上情報が漏れないようにするためでしょうね」

あからさま過ぎる特徴は裏を返せば変装していると公言している

ようなものだ。もっともそれこそが「例の男」の狙いなのだろう。報告をした部下もうなずいて続けた。

「現在三家が探しているは旅の魔導士です。しかも魔導士のライセンスを持っている者を優先的に探しています」

ここでいう「魔導士」とは単純に魔道具を扱う者のことではなく、国や都市・ギルドなどの組織が発行する正式なライセンスを持つ者のことだ。報告を聞くとジーニアスは頷いた。そして釈然としない様子の部下に声をかける。

「不思議ですか？なぜ捜索対象を魔導士に限定しているのか」

「そうですね。気にはなります」

変装用に使えそうな魔道具の規制はどれも厳しくはない。特別なライセンスを持っていなくても、一般市民でも入手は可能だ。それに加えて魔道具の密売と魔導士ライセンスはまったくといっていい程、関係がない。密売にライセンスが必要なんてことはないし、仮にライセンスを持っていたとしてもそれを提示する者はまずいない。確実に足がつくからだ。

つまり、「ライセンスを持っているかどうか」を調べても「魔道具の密売をしているかどうか」は分からないのだ。そんなことは三家も重々承知しているである。

「今回魔道具を持ち込んだ『例の男』は変装をしています。それも恐らくは魔道具を使って。加えて旅をしている。しかもどこかの密売組織が絡んでいるという可能性は低い」

強力な魔道具が闇ルートに流れる場合、盗品である場合を除けば、

その魔道具は職人本人か職人と近しい人が密売に関わっていることが多い。密売組織は多くの場合盗品を扱っており、公権力からは睨まれる存在だ。そのような犯罪組織と関わることを魔道具職人が嫌うのだ。

これが、ジーニアスが「例の男」が一人旅だと判断した理由だ。

「そういう、魔道具を所持して、時に密売に関わるような個人が旅をするなら魔導士としてのライセンスを持っていたほうが何かと便利でしょう？」

「なるほど」

ジーニアスの説明を聞いて部下は納得したようだった。その様子を確認してからレニムスケート商会を率いる若き首領（ドルチェ）は部下に次の指示を出した。

「当面は三家の動きを監視していてください。出し抜けるならよし、そうでなくとも我々には打つ手がある」

三家を出し抜いて「例の男」と直接交渉できるならば、それが最もいい。が、仮に直接交渉できなくても、「例の男」を押さえた家と交渉するという手がある。三家とて「水面の魔剣」の製作者を囲い込み、自分たちの息のかかった、というよりほとんど直営の工房で強力な魔道具を作らせるのが目的なのだ。そこから幾つか買い取ることは十分に可能なはずだ。

部下が部屋から出て行くと、ジーニアスは椅子の背もたれに体を預け、考えをめぐらせた。

（最大の懸案は、・・・・・もうすでに旅立っているかもしれない、

というとですね）

自分の考えに苦笑をもらす。もしそうであればどれだけ探しても無駄骨だ。だが、それでも・・・・・。

（それだけの価値があるということですよ。あの魔剣とそれを造った職人には）

第一話　独立都市と聖銀の製法？（後書き）

ようやく主人公の登場です。名前は次に出てきます。
誤字・脱字、見つけましたら教えていただけると幸いです。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

その日、リリーゼ・ラクラシアはヴェンツブルクの都市の郊外から少し行ったところにある湖に来ていた。小さな湖で名前などはない。いや、調べれば分かるのかも知れないが、あえて調べようという気にもならなかった。近くに３００年ほど前の小さな遺跡があるが、すでに調査は終わっており近づく人もいない。

静かで人気がなく、そして大量の水があるこの場所は父であるディグスから貰った「水面の魔剣」の修行には絶好の場所であった。

「水面の魔剣」を両手で持ち眼前に掲げる。眼を閉じ魔剣に意識を集中し魔力を込めると、刀身が蒼白色に淡く輝いた。しだいに湖に変化が現れる。大きく渦を巻くように水が動き始め、そして段々と速くなっていく。

リリーゼが「水面の魔剣」に込める魔力を増やす。刀身の蒼白色の輝きが強くなり、湖からは一本の水柱が重力に逆らって立ち上った。さらにその水柱は上下左右に、まるで生き物のように縦横無尽に動き回った。

二分弱ほど水を操ると、リリーゼのほうに限界が来た。魔剣の放つ蒼白色の輝きが弱くなり、動き回っていた水の蛇もただの水に戻り湖に落ちた。

「随分と慣れてきたな・・・・・」

大量の魔力を放出し、肩で息をしながらもリリーゼの顔は満足そうだった。最初は湖の水を少し動かすのが精一杯だったが、この三日でかなり上達しかなり思い通りに水を動かせるようになってきた。もっとも大量の水が近くにある状態なので、やりやすい環境なのは間違いない。が、父も兄も上達が早いと褒めてくれるのは嬉しい。この「水面の魔剣」と自分は相性がいいのかもしれない。

（いや、水の魔道具と、かな・・・？）

まぁどちらでもいいか、と思考を切り替える。と、そのとき・・・。

――――グァアアギャァアアアアア！！！

耳を劈（つんざ）くような獣の呼砲があたりに響いた。近くの茂みから1人の男が飛び出し、それを追って現れたのは、

「バロックベア！？」

バロックベアは大陸に広く生息する熊の一種である。気性が荒く、獰猛なことで知られている。土を食べる（主食ではない）習性があり、そのためか爪には希少な金属が含まれている。バロックベアの爪は鋭く安物の鎧などは紙切れの如く切り裂かれるとのことだ。一方でその爪は魔道具の素材などとしても用いられている。

今、リリーゼの前に現れたバロックベアは体長２ｍ、体重３００キロはあろうかという大物だ。純粋な野生の狂気に血走った眼をしており、その獣の発する殺気にリリーゼは身をすくませた。

幸いなことにバロックベアの獲物はリリーゼではなく、茂みから飛び出してきた男のほうであった。物理的圧力さえ感じる呼砲を撒

き散らしながらバロックベアは自慢の爪を男に突き立てようとした。

「たく・・・・」

男は手にした杖を眼前に突き出しその爪を防いだ。いや、杖とバロックベアの爪の間には魔方陣に似た幾何学模様が描かれており、それが鋭い凶器を防いでいた。

「たく・・・・、少し鼻先蹴り飛ばしたくらいでブチ切れやがって。獣風情が！」

「いやそれは怒るだろ！！」

バロックベアの放つ殺気のプレッシャーも忘れ、リリーゼは名も知らぬ男にツッコんだ。それがきっかけとなり彼女の体は自由を取り戻す。そして「水面の魔剣」に全力で魔力を注ぎ込む。

「さがれ！！」

ツッコミの勢いそのままに叫ぶ。男が後ろに飛びのくのと同時に大量の水をバロックベアに叩きつけ押し流す。しかし相手の体が大きいせいか、数メートルの距離を開けることしかできない。

「くっ・・・」

もう一度魔剣に魔力を注ぎ込み、今度は意識を集中して水の刃を作り出そうとしたそのとき。

――――ブベチ！！

すさまじい打撃音がした。男が持っていた杖をフルスイングしてバロックベアの鼻に叩き込んだのだ。

「はぁ！！？」

あまりの行動にリリーゼの思考はついていくことができず、全ての行動が一瞬フリーズする。だが彼女が固まっている間も事態は進行する。

バロックベアは己の鼻先に打撃を叩き込んだ無礼者を許しはしなかった。凄まじい雄たけびを上げると、男を切り裂かんとその鋭い爪を振り上げた。が、男の行動はそれよりも速かった。懐からなにやら小さな小袋を取り出すとそれをバロックベアに投げつけたのである。なにやら赤い粉末が広がったかと思うとバロックベアは狂ったように悲鳴をあげ、転がるようにして茂みの奥へと消えていった。

「はーはっはっはっはっは！善良な一般市民様に手ェ上げるとどうなるか分かったか！獣風情が！」

そして後には馬鹿笑いをしている男がひとり残っていた。

「・・・・さっきの赤い粉末は何なのだ・・・・？」

リリーゼとしては色々思うところもツッコミたいこともあったが、とりあえず一番気になっていることを聞いてみる。

「赤唐辛子、レッドペッパーの粉末だ」

こともなさげに男は答える。そして男はリリーゼに向き直り名を名乗った。

「イスト・ヴァーレだ。なにはともあれ助かったよ」

これが、緊迫していたのにどこか滑稽な感じがする、二人の出会いであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リリーゼとイストがどこ間の抜けた出会いをしていたその頃、ラクラシア家の次男であるクロード・ラクラシアは騎士団の本部でここ最近のヴェンツブルクにおける入出国記録を調べていた。その中で何かしらの魔導士ライセンスを提示した者を調べていく。ジーニアスが受けた報告の通り、彼はその中にあの「水面の魔剣」を持ち込んだ人物がいると当たりをつけている。

（さすがにこれは骨が折れる・・・・）

多くの国や都市がそうであるように、ここヴェンツブルクにおいても入国に際し入国税というものが発生する。魔導士ライセンスを提示するとこの税金が減税されたり、種類によっては免除されるのだ。そのため行商などを生業としていてもライセンスを持っている、という者も多く、該当者は膨大であった。

ざっと流しながら記録を確認していると、ここに三日で頻繁に出入国を繰り返している人物がいた。その名前は、

「イスト・ヴァーレ」

提示したライセンスは魔導士ギルドのもので、備考の欄には「遺跡探索・趣味」と書いてある。

自分の妹が今現在その人物と、気の抜けた邂逅を果たしているなど、クロードは知る由もない。しかし、その名はなぜか彼の記憶の

片隅に残ることになるのだった。

第一話　独立都市と聖銀の製法？（後書き）

誤字・脱字、お気づきのことありましたら教えてください。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

イスト・ヴァーレと名乗った男は整った目鼻立ちをしていたが、取り立てて美形というわけではなかった。だが悪戯っぽい光を放つ眼は彼の容貌以上に人の目を惹きつけ、彼の存在を無視できないものにしていた。

（まぁ、好き嫌いは分かれそうだな・・・）

独断と偏見に基づきそう評を下すと、リリーゼはイストのさらに全体を観察した。

年のころは二十歳の始めごろで背丈は１７０半ば。髪の色は黒で、瞳は黒に近い藍色とでも言えばいいのかもしれない。赤褐色の外套を羽織り、手には恐らく魔道具と思われる杖を持っている。彼の身長よりも少し大きいくらいの長さで、先端の歪曲した部分にはところどころ金属のコーティングがなされている杖だ。

リリーゼは知るよしもないことだが、橋の上で金貨を両替した男であった。

「リリーゼ・ラクラシアだ」

「ラクラシア・・・？ああ、ラクラシア家のご令嬢か」

イストにそう言われて、リリーゼは少し不満そうな表情をした。自分が一般的な「ご令嬢」の定義からは激しく逸脱していることを彼女は自覚しているし、またその定義を当てはめたいとも思わなか

った。

そんなリリーゼの様子を、恐らくは意図的に無視して、イストは腰につけた道具袋から一本の煙管を取り出し、口にくわえて吹かした。すぐに雁首から白い煙が立ち上る。火をつけなかったところを見ると、あの煙管も魔道具なのだろう。

「吸ってみるか？」

彼の様子を眺めていたリリーゼが煙管に興味があると思ったのか、イストはそう尋ねた。

「結構だ」

少々硬い調子で答える。リリーゼはタバコが嫌いだし、当然自分の周りで吸われるのもイヤだった。しかしイストの吸っている煙管からは不思議とタバコ臭い匂いはしない。

「ちなみにキシリトール味」

「キシリトール味！？」

「柑橘系や焼肉味に海鮮風味、大穴でトリカブトなんてのもある」

「タバコってそんなに色々な味があるものなのか・・・・？」

トリカブトはあえて無視して話を進める。

「ん？・・・ああ」

リリーゼの勘違いに気づいたイストは煙管について説明をする必要を感じた。どうでもいいことだが二人のテンションはどうにもかみ合わない。ちなみにトリカブトに食いついてくれなかったのでイ

ストは少々不満げだ。

「こいつは禁煙用魔道具『無煙』。タバコの葉は使ってないから臭いはもちろん中毒症状もない。ちなみに煙は水蒸気だ」

「禁煙しているのか」

「いや、前に頼まれて作ったんだけどな、出来が良かったから自分用にもう一つ作った」

口元が寂しいときがあってな、とイストは付け加えた。その辺りの感覚はリリーゼにはよく理解できなかった。禁煙をしているわけでもないのにそんなものを吹かすなんて、物好きなことだと思う。

（それよりも今、『自分で作った』みたいなことをいったよな・・・？）

それが意味するところを考え、リリーゼは怪訝な表情になる。

「ありゃ、切れたか」

リリーゼのことは、恐らくまたしても意図的に無視して、イストは呟いた。そして道具袋から手のひらくらいの大きさの木箱を取り出し、そこから小指大のカートリッジを一本選ぶ。煙管の雁首を取り外し、中に入っていたカートリッジを交換すると、雁首を元に戻して彼は美味そうに吸った。

「貴方は・・・魔道具職人なのか？」

半信半疑といった表情でリリーゼは尋ねた。職人はどこかの工房に属していてそこでしか魔道具を作れない、というのが彼女の、いや一般的な考え方だ。だがイストはあっさりとこう答えた。

「まあな。オレは流れの魔道具職人だし」
「いいのか？」

どこの工房にも属さず、自分勝手に魔道具を作っては売り歩く。その行為はリリーゼにとって立派な犯罪に思われた。

「なにか勘違いしているようだが魔道具の製造を規制している国なんてないぞ」

多くの国で規制しているのは魔道具の取引と所持であって、作ることそのものは規制されていない。その証拠に工房を開くのに必要な手続きは、普通の商店を開くのに必要な手続きとさして変わらない。

「武器ならともかく、こんな禁煙用の魔道具なんて作っても売っても規制になんて引っかからないさ」

イストはからかうようにしてそう言った。だがいわれたリリーゼはムッとして表情を歪めた。自分の無知を笑われたように思ったのだ。

「なら、その杖はどうなるんだ？立派な武器じゃないか」

自分で作ったものだろうと特別なライセンスを持たない限り武器の所持は規制されているのだ。少々むきになってリリーゼはイストにつかかった。

「魔導士ギルドのライセンスを持っている」
「ぐ・・・・・」

あっさりと言い返され、リリーゼは言葉に詰まった。その様子を見て満足したのか、イストは、じゃあな、といってその場を離れようとした。

「どこに行くんだ?街はそっちじゃないぞ」

茂みの中に入っていこうとするイストにリリーゼはそう声をかけた。

「この先に遺跡があるだろ。それを見に来たんだ」

「遺跡を・・・?」

リリーゼは首をかしげた。確かにこの先には小さな遺跡がある。だがこれといって珍しいものもない。既に調査・発掘は終了しているし、子供の遊び場には幾分街から遠い。そのためその遺跡に近づく人はほとんどいなかった。そのことをイストに告げると彼は笑って答えた。

「いいんだよ。半分以上趣味なんだから」

白い煙（水蒸気らしいが）を上げている煙管を片手にした彼はどことなく不真面目そうで、いわゆる遊び人を連想させた。

「何かよからぬことでも企んでいるのではないだろうな・・・・・」

彼の外見だけが原因だとすればリリーゼの言は少々偏見に影響されていると言わざるを得ないだろう。しかしいわれたイストは特に気にした様子もなかった。

「何もない遺跡でなにを企むってんだよ・・・・。そんなに心配なら一緒に来るか？」

「そ、そうだな。貴様が悪さをしないようにしっかり見張るとしよう」

いつのまにやら「貴方」から「貴様」に呼び方が変わっている。一瞬感じた動揺に気づかれないよう、リリーゼは生まれて初めて感情を表に出さない努力をするのであった。うまくいっているとはいいがたかったが。

第一話　独立都市と聖銀の製法？（後書き）

誤字・脱字、ありましたら教えていただけると幸いです。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

「はぁ～」

さして大きくもない遺跡を見回りながらリリーゼはため息をついた。

（どうも今日は調子が・・・・変だな・・・・）

より正確に言うならばイストにあってから、調子が狂いっぱなしだ。

（あのとき・・・・）

猛々しい狂気と殺気を放つバロックベアを目の前にしたあのとき、リリーゼは足がすくんで動けなかった。

（だがあの男は・・・・）

だがイストはその張り詰めた空気の中でごくごく普通に動いていた。別に手を出さなくても、彼なら自分であの危機を切り抜けられただろう。そもそもあの戦いが長引いていたのは、イストがバロックベアの鼻先に一撃を入れることにこだわっていたからで、最初からあの赤唐辛子の入った包みを使っていれば、もっと早く終わっていたはずである。そうリリーゼの前に現れる前に。

（それだけじゃない）

バロックベアが茂みの奥に消えた後、リリーゼは大きな安堵を感

じた。しかしイストのまとう空気は何も変わっていなかった。まるでさっきの状況は危機ではないかのように。意識の差、ひいては実力の差を見せ付けられたようでなんとも面白くない。しかも今そのことに思い至ったものだからなおのことだ。

さらにそのあと自分の無知を思い知らせれ、つっかかれば軽くいなされ、と彼女の不満は加速度的に増えていく。

（結局未熟なのだな、知識も経験も実力も・・・・）

そのことに気づいたからなのだろうか。イストの誘いに乗ってここに来たのは。

そこまで考えるとリリーゼは視線を上げ、イストの姿を探した。彼はなにやら下を向いて真剣な表情で何かを考えていた。ただ時折禁煙用魔道具・無煙をすっているためか、雰囲気は深刻になりきらない。

（あそこには確か魔法陣があったはずだ）

魔法陣とは魔道具の理論部分だけを図式化したものだ。逆を言えば魔法陣を小型化し最適化して使いやすい器に収めたものが魔道具といえる。

魔法陣はそれ自体に魔力を廻らせることで効果を得る、つまり魔法を再現できるのだが、いかんせん使い勝手が悪い。しかしその反面、理論のみで使えるので魔道具を作るための煩雑な作業が必要なくコストが安いというメリットもある。そのため、欲しい効果、再現したい魔法が決まっており、特に移動させる必要がない場合には魔法陣が用いられることが多々ある。

（確か、劣化が進んでいて半分近く読み取れなかったと思うが・・・・。なにをしているのだ？）

ふむ、と頷いたかと思うと、彼は魔法陣の真ん中に立ち手に持った杖で、カツン、と足元を突いた。すると魔法陣が光を放ち始めた。

「な・・・！？」

その光景にリリーゼは驚愕した。劣化が進み半分以上読み取れなくなっていた、つまりもはや用を成さなくなっていた魔法陣が彼女の目の前で息を吹き返したのだ。

「どうやら転送用の魔法陣らしい。一緒に来るか？」

目の前で起こったことが信じられず絶句しているリリーゼに、イストは至って普通の調子で声をかけた。まるで自分のしたことが特別なことではないかのように。

それがよかったのだろうか。彼に比べて己の未熟さを感じそのことが不満だったリリーゼは、徐々に驚愕から立ち直りその思考を回復していった。

「・・・・聞きたいことがある・・・・・」

「へぇ、聞こうか」

彼がそう言うと魔法陣の光を消し、リリーゼに体ごと視線を転じた。

「なにが聞きたいんだ？」

「その魔法陣の先には何があるんだ？」

ほとんど睨みつけるようにしてリリーゼは問いを発した。が、問われた本人はといえば、相変わらず煙管を吹かして白い煙（水蒸気だが）を燻らせていた。

「なんでオレがそんなこと知っていると思うんだ？ここに来たのは今日が初めてだぜ？」

「お前がその魔法陣を発動させたからだ」

劣化が進み、もはや原型がわからない魔法陣を発動させることなど何人に不可能だ。とすれば、イストが同じ魔法陣を仕込んだ魔道具を持っていて（恐らくはあの杖だ）その魔道具を使って魔法陣を発動させた、と考えるのが自然だ。

「そこまで周到な準備をしてきたんだ。ここのことを知っていて、この先に何があるのかも知っている。そう考えるのが自然だ」

どうだ、といわんばかりに自分の推理を披露する。

「はずれ。オレは魔法陣を仕込んだ魔道具なんてもってないよ」

「ウソをつくな。その杖がそうなのだろう？現にバロックベアの爪も魔法陣で防いでいたじゃないか」

証拠を突きつけると、じゃあ調べてみるか？といってイストは杖をリリーゼによこした。自信満々にその杖に魔力を込めてみると魔法陣が・・・・・

「え・・・・・？」

発動、しなかった。

「その杖は『光彩の杖』といってな、頭で思い描いたものを空中に光で描くことのできる魔道具だ。そもそも武器でさえないわけだ」

つまり光彩の杖を使って魔法陣を再現してみたわけだ、とイストはカラクリを説明した。

「だが、半分以上が読み取れない魔法陣だぞ。下調べしていなければ再現なんて出来るはずないだろう？」

「遺跡巡りが趣味なんだ。他の遺跡で同じ魔法陣を調べたことがあるのかもしれないぞ？」

考えていなかったであろう可能性を教えてやると、リリーゼは「ぬ？」と唸って考え込んでしまった。その様子を見て、扱いやすいお嬢様だな、とイストは笑った。笑われたことが不満なのか、リリーゼはむくれた。その姿にさらに笑う。

「この魔法陣の先に何があるかは本当に知らない。が、半分未満の“ここに来た目的”なら道すがら話してやれる」

どうする、と眼で問いかける。煙管を吹かしているその姿はやはりどこか真剣みに欠けている。だがそのことがリリーゼの緊張を解きほぐし、思考を硬直させずにいた。

（ちょっとした遊び感覚、なのだろうな。彼にとっては）

ならば私もそれなりに楽しもう、とリリーゼは思った。彼の言う“ここに来た目的”とやらも気になる。

リリーゼは半瞬だけ考えるとイストの立つ、魔法陣のほうに足を向けた。彼女から光彩の杖を受け取ると、イストは先ほどと同じようにしてカツン、と足元を突き魔法陣を発動させた。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

転送された先の空間は真っ暗だった。

「ちょっと待ってろ。今明かりをだす」

その声の少しあとに周りが明るくなった。イストの手にはランタンが握られている。リリーゼも知っている一般的な魔道具で「新月の月明かり」という魔道具だ。魔力を込めると一定時間月明かりを模した光を放つ。

「鍾乳洞みたいだな」

あたりを見回したイストが呟いた。

「寒いな」

リリーゼが腕をさすりながら言った。外は日差しもあり暖かかったのだが、ここはひんやりと肌寒い。

「これを羽織るといい」

そういってイストは腰の道具袋からモスグリーンの外套を取り出しリリーゼに渡した。こんな大きなものが普通に入るとは思えないから、あの道具袋は魔道具なのだろう。

外套を受け取り、着込みながらリリーゼは当然の疑問を口にした。

「なんで二着も外套を持っているのだ？」

「便利だぞ。野宿のときに下に敷いたりできる」

「つまりこの外套は地べたに敷く用なのか・・・・・」

なんともいえない顔をしているリリーゼに、イストはちゃんと洗ったよ、と声をかけた。そして、さて、と言って腰に付けた道具袋から先ほどカートリッジが入っていた小箱を取り出し、そこに入っている小さな黒い球体を取り出した。

「それは？」

「ペイントボール。本来は仮装パーティーなんかで使う魔道具なんだけどな、こうやって目印なんかにも使える」

そういってイストはペイントボールを壁に押し付け魔力を込める。すると球体は解けるようにして広がり、鳥が翼を広げる様子を模した図柄になった。

「他にも蛇、狼、獅子、馬、花とかいろいろある」

「暗いと見えないんじゃないのか？」

煙管を吹かしながら自慢するように説明するイストに、リリーゼは至極当然な疑問をぶつけた。

「そのペイントボールはオレが手を加えていて、こいつとリンクしている。まぁ、大まかな位置関係が分かるわけだ」

そういって彼が取り出したのは装飾の施された眼帯だった。視覚補助の魔道具で千里眼というらしい。

「その他にも髪の毛だとか眼の色だとかを変えられる魔道具も色々ある。なかなか楽しいぞ」

「まるで変装用だな」

リリーゼの感想に、鋭い、とイストは嬉しそうにいった。

「それよりもここに来た目的とやらを教えてくれ」

魔道具の説明談義に脱線していきそうなイストに釘を刺し、話を本筋に戻す。

「ああ、どこから説明したものかな・・・・」

とりあえず歩きながら話そう、ということでイストとリリーゼは一本道を歩き始めた。鍾乳洞の中は足元が湿っており、なかなかに歩きづらい。

「あの遺跡がどれくらい前のものか知ってるか?」

イストはそう唐突に尋ねた。

「３００年くらい前だろう?」

「そう。じゃあ、その頃このあたりで何があった?」

まるで教師が生徒を教えるときのように、イストは質問を重ねた。

確か、３００年前は大陸の東側一帯を支配した帝国の末期だったはずだ。各地で反政府活動やら反乱やらが起こり世の中は騒然としていたと、聞いた覚えがある。

「まぁその通り。んで、ヴェンツブルグの周りに点在している遺跡は、この地方で反乱を起こしたレジスタンスの活動拠点の名残というわけだ」

その反乱を指揮した中心人物の名はベルウィック・デルトゥードという。そして彼の下で働いた三人が後に三家の初代当主となる。

「まぁ、歴史の概観はこのくらいにして」

ベルウィック・デルトゥードの指揮する反乱軍は他の勢力と比べると比較的少数であった。にもかかわらず戦えば負けなしで、しかも潤沢な活動資金を持っていた。

「なぜだと思う？」
「それは・・・・・」
「強力な魔道具を製造していたからだ」
リリーゼが答えに窮するとイストはすぐに自分で答えを言った。

反乱軍の中に優秀な魔道具職人がいたのだろう。その人物の作る魔道具こそがベルウィック・デルトゥードの反乱軍の武力を支え、また他の反乱組織に売却することで資金を確保していたのだ。

「で、ここからが本題だ。魔道具を作るには当然、素材がいる。ここで作っていた魔道具はとある素材が主として使われていたんだけど、何か分かるか？」

「さっぱり」

もはや取り繕うこともやめて、リリーゼは正直に答えた。もともと知っているとは思ってなかったのだろう。イストは特に気にした様子もなく答えを告げた。

「聖銀（ミスリル）だ」
「聖銀（ミスリル）！？」

ここで聖銀（ミスリル）が出てくるとは思っていなかったのだろう。リリーゼは驚愕の声を上げた。

聖銀（ミスリル）とは銀をベースとした合成素材で、魔道具製作においては優良な素材である。現在その製法は教会が独占しており、市場に流れる聖銀（ミスリル）には法外な値段が付けられている。そこに生まれる利益たるや莫大なもので、教会は年間の活動資金のおよそ3割を聖銀（ミスリル）から得ていると言われている。

「教会が聖銀（ミスリル）の製造を始めたのがやっぱり３００年前くらいだから時期的にはあってるわな」

「つまり・・・どういうことだ・・・・？」

話が思いがけない方向に飛んで、リリーゼは少し混乱気味だ。煙管を吹かしながらイストは続けた。

「つまり、ベルウィックの反乱軍で作られていた魔道具に聖銀（ミスリル）が多量に使用されていた。で、調べてみたら反乱軍にフランシスコ・メーデーが協力していた、らしい」

「・・・・本当か・・・？」

フランシスコ・メーデーの名前が出てきてリリーゼは唸った。

フランシスコ・メーデーは聖銀（ミスリル）の製法を発見した人物だ。ただしそれは彼が教会直営の工房に身を寄せるようになってから、というのが定説だ。

「で、オレの“半分未満の目的”だけど、聖銀（ミスリル）の製法、あるいはその手がかりがのこってないかなぁ～、と言うわけだ」

「まさか。残っているわけがない。仮に残っていたのならば、教会

がもっと早く動いているはずだ」

イストの話に驚かされながらも、はっきりとその可能性をリリーゼは否定する。教会にとって聖銀（ミスリル）は重要な資金源だ。３００年もの間その製法の秘密を守っているのだから、その管理体制の厳重さが窺える。もし少しでも在野にその製法が残っている可能性があるとしたら、文字通り大陸中で草の根分けてでも探し出すはずである。教会にはそれだけの力があるのだから。

「いいんだよ。どうせ半分未満の目的で、半分以上は趣味なんだから」

こんな面白いものも見れたことだし結構満足してるよ、と白い煙（水蒸気だが）を吐きながら気楽そうにイストは言った。

リリーゼには言っていないが、イストが得た情報の中には「聖銀（ミスリル）の製法が壁に刻んであった」というものがあり、それが半分未満とはいえ目的の根拠となっている。なぜこのことをリリーゼに教えてやらないのかといえば、彼なりの腹黒い思惑があるからだ。

「それよりも、ベルウィックの反乱軍で作られていた魔道具に聖銀（ミスリル）が多量に使用されていた、なんて情報どこから手に入れたんだ？」

聖銀（ミスリル）の製法うんぬんも気になるが、リリーゼとしてはそのことも気になった。いわばここは地元なのにそんな話は聞いたことがない。

「ま、蛇の道は蛇ってやつだ」

疑問は軽くはぐらかされた。

道は続く。リリーゼはふと浮かんだ疑問をそのまま口に出した。

「ここで聖銀（ミスリル）が作られていたのなら、なぜヴェンツブルグには聖銀（ミスリル）の製法が伝わらなかったのだろうな・・・・」

「魔道具を作っていたその腕のいい職人は戦いが終わったあと、ここを離れたらしい」

職人がいなくなったことで、魔道具が作られなくなり、聖銀（ミスリル）の需要もなくなった。たがそれだけでは理由にならない。

「おかしいだろう。職人はその一人だけではなかったはずだ。それに聖銀（ミスリル）自体に需要があるはずだ」

「そもそも銀が手に入らなくなった、聖銀（ミスリル）を精錬するのに必要な素材や道具が手に入らなくなった、聖銀（ミスリル）の需要が減った。まぁ、それらしい理由ならいくらでも思いつくさ」

本当のところどうなのかは分からないけどね、とイストは肩をすくめた。

「しかし惜しいな。聖銀（ミスリル）の製法が残っていればヴェンツブルグは巨万の富を得られただろうに」

なにしろ教会の年間の活動資金のおよそ三割だ。ともすれば、小さな国ならばそのまま国家予算になりかねない金額だ。

「そうだな。が、とき既に遅し、というやつだ。仮にここで聖銀（ミスリル）の製法が見つかっても、普通に作って売っていたんじゃ、利ザヤは少ないだろうしな」

イストの言葉にリリーゼは反感を持った。現に教会は聖銀（ミスリル）から膨大な利潤を得ているではないか。なぜヴェンツブルグに同じことが

できないと言い切れるのか。

「教会から横槍が入る。売却益の9割は持っていかれるだろうな」

「そんな・・・・・」

それが政治って奴さ、とイストは無煙を吹かし、白い煙（水蒸気だが）を吐きながら言った。教会とヴェンツブルグの力の差は歴然で、言うなれば「月とスッポン」だ。圧力を掛けられれば屈せざるを得ない。

「まぁ、やり方を変えればそれなりに儲けられると思うけどな」

「どうするのだ?」

教会に横槍を入れさせず、大きな利益を上げる方法などあるのだろうか?

「自分のおつむで考えな」

ちょうどその時、一本道が終わり少し広い空間に出た。川の流れている音がする。新月の月明かりを掲げると、先が幾つかに枝分かれしていた。

イストは再び木箱を取り出し、壁にペイントボールを張り付け目印を残している。

「どれを選ぶのだ?」

枝分かれしている道はここから見えるだけで五つある。選んだ先がさらに分岐している可能性もあるから、全てをしらみつぶしに探索するのは無理だろう。

それが分かっているのかいないのか、イストはふむ、と顎に手を

当てて考えるしぐさをした。悔しいがさまになっている。

「・・・・話は変わるが、その腰の魔剣・・・・」

「・・・はぁ？・・・何だ？一体何だ・・・・・？」

話が唐突に飛びすぎてついていけない。

「だからその魔剣。かなりの業物だな。ずっと気になってたんだ。少し見せてくれないか？」

まったくこんな時にそんなことしなくてもいいじゃないか、とブツブツ文句を言いながらも水面の魔剣を鞘から抜いてイストに渡す。魔剣を受け取ったイストはその刃をためつすがめつ眺めて、

「な、ちょ！お前！」

いきなり魔剣に魔力を込めた。蒼白色の淡い光が闇に浮かび上がると、リリーゼは咄嗟に声を上げた。

悪い悪いあまりに見事だったものでついな、と明らかに悪かったと思っていない軽い調子で謝りながら、魔剣をリリーゼに返す。

「そうそう、今魔力を込めてみて分かったんだけどな。その魔剣、単なる水属性の魔道具ってだけじゃなさそうだ」

「どういうことだ・・・・・？」

扱いに熟練しているとはとてもいえないが、今まで使ってきた限りでは水を操る以外の能力などなかったはずだ。

「どうやら魔力を放出してその反射を観測することで周りの状況を

調べられるらしい」

水面に浮かぶ波紋の如くってわけだ、と白い煙（水蒸気だが）を吐きながら軽い調子でイストは言った。

慌てて取り返した水面の魔剣に魔力を込める。今度はそういう能力を使うつもりで。

（確かに魔力を放出して、それが反射して返ってくるような感じがするな）

イストが言うところの観測とやらは魔剣自体がやっているらしく、頭の中には大まかな地形が浮かんだ。

「故に『水面の魔剣』というわけか・・・・・」

少々複雑な心境だ。手にしてからまだまだ日が浅いとはいえ、自分の魔道具について今さっき触っただけの他人から教えられるとは。

（未熟だな・・・）

思い知らされる。

そんなリリーゼのセンチでブルーな心境を意図的に無視して、イストは右から二番目の通路を選んで先に進んでいく。その先が一番広くなっていたからだ。リリーゼも無理やり気持ちを切り替え、そのあとを追った。

進んでいくと回りの雰囲気が変わった。

「工房・・・・か？」

目の前に広がったその光景は工房と呼ぶのがもっともふさわしく思われた。どうやら反乱軍はここで魔道具を作っていたらしい。

「だが、工房というにはガランとしすぎていないか？」

「もともとは色々道具があったんだろうが、戦いが終わってから持ち出したんだろう」

そうやって資材をかき集めて町を作り、だんだんと成長して独立都市ヴェンツブルクとなったのだろう。知識として知っているのと、こうして遺跡を探索し肌で感じるのとでは、心に迫るものが違う。

「少し見て回るか」

そういってイストは古の工房跡に足を踏み入れた。足元は荒くではあるが舗装されており、先ほどまでと比べると格段に歩きやすい。無数に残る人工的に削られた跡や窪みが、ここで多くの人が働いていたことを無言のうちに物語っていた。

入ってすぐの空間が広くなっており、さらに左右の壁を掘って作ったのだろうか、幾つかの小部屋が連なっている。

その一つに、それはあった。

「これは、・・・・・まさか・・・・・」

壁に何かの文字が刻まれている。ただ現在は使われていない古代文字（エンシェントスペル）が使用されており、リリーゼには読めない。

「珍しいな。この時代の遺跡に古代文字（エンシェントスペル）が使われているなんて」

３００年前ならば既に現在使用されている常用文字（コモントスペル）が一般に普及していたはずだ。

「これじゃあ、何が書いてあるか読めないな・・・・」

これが聖銀（ミスリル）の製法かもしれないと思うと残念で仕方がない。

「だがまぁ、先人たちの足跡を見られただけでもためになったな。・・・・ってイスト？」

イストは眉間にしわを寄せながら壁に刻まれた古代文字（エンシェントスペル）を睨むようにしてみている。

「『我ら・・・・』」
「読めるのか！？」
「何とかな・・・・・」

集中しているのかイストの返事はいい加減だった。欠けていて読みにくいとか劣化が酷いとか色々ブツブツ言いながらイストは解読を試みている。

「何で古代文字（エンシェントスペル）が読めるんだ？」

今更この男にどんな秘密や特技があっても驚かないが、それでもやはり気にはなる。難しい顔をして解読するイストの背中に、リリーゼは問いかけた。

「オレの師匠が酔狂な人でな。自分が作った魔道具についての記録を古代文字（エンシェントスペル）で書くんだ。で、オレも覚えさせられたってわけ」

ま、今でも職人の中には使っている人もいるし、古い文献なんかは結構古代文字（エンシェントスペル）で書かれたものも多いから便利だぞ、とイストは事もなさげに答えた。

職人たちは自分の作った魔道具について詳細なレポートを残しておくことが多い。が、それは誰にでも見せてよいものでは断じてない。そこで現在は一般には使われていない古代文字（エンシェントスペル）や、仲間内で使う暗号を用いてレポートを書くのだ。

もっともこの話は一昔どころか二昔以上前のことで、現在はそういったレポートは各工房で厳重に管理されているのが普通だ。そのため使用される文字も常用文字（コモントスペル）が圧倒的多数で、古代文字（エンシェントスペル）などほとんど使われない。そんなご時勢にわざわざ古代文字（エンシェントスペル）を用いるイストの師匠は、そして恐らくは彼自身も、よほどの酔狂なのだろう。

そんなことを考えていると、解読が終わったのか、イストが立ち上がった。

「なにが書いてあったのだ？」

まさか本当に聖銀（ミスリル）の製法が書かれているとはさすがに思えないが、わざわざこんなところに、しかも古代文字（エンシェントスペル）を用いて書いている文章だ。人並みには興味がある。

「『我ら・・・・』」

我らは自由を求めるものなり
我らが求める自由は与えられるものにあらず

我らが求める自由は我らの手で掴むものなり
同志たちよ、忘れるなかれ
与えられし自由は、また奪われるもの
己が手で掴む自由こそが真の自由なり
我らはここに宣誓す
我らは諸人の自由を奪わず、我らの自由を奪わせず

朗々と、イストの声は響き渡った。

「宣誓文だったのだな」

余韻に浸りながら、リリーゼはポツリと呟いた。ベルウィック・デルトゥードとその同志たちはこの言葉と理念を胸に戦ったのだ。そしてその歴史は今まさに独立都市ヴェンツブルクへとつながっている。

「先人たちの理想と大望の上に私たちはいるのだな」

そう考えると胸が熱くなる。

イストの方を見ると、なにやらノートのようなものに壁の宣誓文を書き写していた。ちなみに古代文字（エンシェントスペル）のままだ。

「聖銀（ミスリル）の製法じゃなくて残念だったな」

「なに、もともとそんなに期待していなかったからな。それにこれはこれで予想以上に面白いものが見れた」

満足満足、とイストは白い煙（水蒸気だが）を吐きながら嬉しそうに言った。書き終えたノートをしまい、立ち上がる。

「さて、残り四つの分かれ道も探索してみるか」

そうして、大まかにではあるが鍾乳洞全体を探索し終えたのは、もうしばらく時間がたってからであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

転送用の魔法陣を使ってもとの遺跡に戻ってきたときには、あたりは黄昏時を迎えていた。頭上を見上げると、昼間と夜の曖昧な境界が地上を見下ろしている。これから時間が進むにつれて夜が深まっていくのだ。

「しまった！」

リリーゼが焦った大声を上げた。日の傾きが分からない場所にいたせいか、遅くなりすぎた。

「イスト、今日は本当に面白かった。それにためになった。それで、ええと・・・・」

「ああ、オレのことは気にしないで早くいきな。門限とかあるんだろ？」

焦っているせいかうまく言葉の出てこないリリーゼに苦笑しながらイストは声をかけた。それを聞くと挨拶もそこそこにリリーゼはモスグリーンの外套をイストに返し、脱兎の如く駆け出した。

「良家は門限にも厳しいか」

大変だな、と完全に他人事の調子で呟く。そして、さて、といっ

て表情を改めた。

左手の袖を軽くまくる。左手の手首には古めかしい腕輪が付けられていた。装飾は凝っているが派手な感じはしない。

その腕輪には魔力を込める。すると先ほどまで何もなかった空間に、突如石造りで蔦の絡みついた扉が出現した。

「アバサ・ロットが工房、『狭間の庵』へようこそ、ってか」

軽口を叩きながらイストは石造りの扉を開きその内側へ消えた。扉が完全に閉まりきると、その石造りの扉は宙に溶けるようにして消えていった。

第一話　独立都市と聖銀の製法？（後書き）

少し長めです。いや、今までのが短かっただけのような気が・・・・。

誤字・脱字、ありましたら教えてください。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

門限には何とか間に合った。遅れていたらと考えると恐ろしい。昔兄たちが門限を破ったときに受けたおしおきの数々は、幼かったからこそ聞いただけでもトラウマになっているのだ。電撃だの水攻めだの逆さ釣りにして回されるだの、そんな目には遭いたくない。ちなみにおしおきをするのは父ではなく母のほうだ。何を隠そうラクラシア家最強は母であるアリア・ラクラシアなのだ。

最近新作が試せなくてつまらないわ、などとアリアは不満げにぼやいていた。何の“新作”なのかは考えたくもないし、試されたくはもっとない。

ふう、と何度目か分からない安堵の息をつく。門限に遅れていたら今目の前にあるこの夕食も食べられなかったに違いない。食卓の上に所狭しと並べられたおいしそうな料理の数々は母であるアリアの作だ。

今日の夕食には家族が全員そろっていた。ここ最近仕事が忙しく家に帰ってきていなかった父や兄たちも、今日は合間を見つけたのかそろっている。

その席でリリーゼは今日体験した貴重な経験について語った。

「・・・・それで泉の近くである魔導士と出会ったんです。遺跡めぐりが趣味で、名前は確か・・・・」

「イスト・ヴァーレ？」

その名前を言ったのはクロードだった。
「そうです。そう名乗ってしました。どうしてクロード兄上がその名前をご存知なのですか？」
「騎士団で入出国表を確かめていたら、その人物がここ最近何度も出たり入ったりしていてね。備考の欄に遺跡めぐりが趣味だって書いてあったから、もしかしたらってね」

そうでしたか、と言ってからリリーゼはさらに話を進めた。
イストが光彩の杖で劣化して読み取れなくなっていた魔法陣を発動して見せたこと。転送された先が鍾乳洞だったこと。

「・・・それで目印を残したんです。ペイントボールという元々は仮装パーティーなんかで使う魔道具で、見せてもらったものは鳥が翼を広げる様子の絵柄でした。視覚補助用の魔道具とリンクしていて大まかな位置関係が分かるといっていました」

ペイントボールには他にも獅子や蛇、馬に狼など、他にも種類があると言っていましたね、とリリーゼはその時の様子を出来るだけ忠実に思い出しながら説明した。

狼か、と呟いて考え込んだのは長兄のジュトラースだった。

「他にはどんな魔道具を持っているといっていたのかね？」
ディグスが穏やかな口調でリリーゼに問いかけた。

「そうですね・・・、禁煙用で“無煙”という煙管型の魔道具とか、あと見せてもらってはいませんが、髪や眼の色を変えることが出来る魔道具も持っているようなことを言っていました」

そう、リリーゼが言った瞬間だった。和やかだった食卓の雰囲気

が変わったのは。ラクラシア家の男三人はそろって厳しい顔をして互いに視線を交錯させた。

「ジュトラース、手勢を集めろ。クロード、騎士団を動かせるようにしておけ。そのイスト・ヴァーレという魔導士を探すぞ」

は、と短い返事をして兄弟は食卓を後にした。ディグスもその後を追うようにして出て行く。後に残されたのはさっぱり事態が飲み込めていないリリーゼと、穏やかに微笑んでいるアリアだけだ。

「・・・母上、これは一体・・・・？」

「リーちゃんがお父様から頂いたあの魔剣、どうやらそのイスト・ヴァーレさんが持ち込んだみたいねぇ」

のんびりと答えるアリアには緊張感の欠片もないが、その言葉を聞いたリリーゼは殴られたような衝撃を受けた。これから起こるであろう事態が、頭の中を駆け巡る。

「くっ」

短いうめき声を残しリリーゼも走って食堂から出て行った。恐らくは一度部屋に戻り、水面の魔剣を帯びてから町へ駆けていくのだろう。

「あらあら、大変ねぇ」

ぜんぜん大変そうじゃない態度と口調と雰囲気のままでアリアはお茶を優雅に口にした。

「門限に関しては、今日は大目に見てあげましょう」

それからまだ多くの料理が残っているテーブルに目を向け、

「お料理、冷めちゃうわねぇ・・・・・」

そう、少し悲しそうに呟いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リリーゼが父であるディグスから貰った魔道具「水面の魔剣」は優れた魔道具である。が、今回問題なのは水面の魔剣そのものではなく、それがイスト・ヴァーレという魔導士によって持ち込まれた、という事実であった。

（おそらく闇ルートで売り払ったのだろう）

暗黙の了解を守っているうちはそういう商売が黙認されていることを、当然リリーゼも知っている。

さて、非合法のルートで魔剣が持ち込まれたということは、正式な工房に属していない職人がいるということだ。魔道具の製造は規制されていなくても、売買は法によって規制されているからだ。

もっとも在野（この場合の在野とは工房に属していないことを言う）に魔道具職人がいること事態は珍しいことではない。ただし水面の魔剣ほどの魔道具を作れる職人となれば話は別だ。これほどの腕をもった職人は滅多にいない。どんな手を使ってでも口説き落とし抱え込みたい、と少々の富や権力を持っているならば誰もがそう思うだろう。

（そしてヴェンツブルグの三家はそういう野心を抱くのに十分すぎ

るほどの富と権力を持っている）

手早く動きやすい服装に着替えながらリリーゼは苦い表情を浮かべた。

そして、水面の魔剣を作った職人への手がかりがあのイスト・ヴァーレなのだ。

恐らく、というかほとんど確実に、父と兄たちはラクラシア家の全力を挙げてイストを探すだろう。そしてラクラシア家が動けばガバリエリ家とラバンディエ家もそれを察知して動くだろう。

リリーゼはこのとき思い至ってないが、レニムスケート商会もまたイスト・ヴァーレの身柄を狙っていた。

「大変なことになるぞ・・・・・！」

おとなしくイスト・ヴァーレを探し回るだけならいい。だがそうはならないだろう。あちらこちらでいざこざが起こるはずだ。それだけなら三家の問題で収まるが、その混乱に乗じて狼藉を働く者たちが出てくるだろう。

今夜この都市は混沌の様相を呈するだろう。そのなかで自分に何が出来るだろうか。

「くっ・・・・・」

だが、だからといって「何もしない」という選択肢はリリーゼにはありえない。イストに関わった人間として、事態が収まるのをただ待つだけなど到底出来なかった。

何も出来ないかもしれない。自分が未熟なことなど、自分が一番よく分かっている。だがそれでも、

「何もしないよりはましだ」

そう自分に言い聞かせ「水面の魔剣」を掴むと、彼女は夜の帳が下りた街へと駆け出していった。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

「ハァハァハァ・・・・」

荒い呼吸を何とか整えていく。リリーゼが街を駆けずり始めてから、既に小一時間がたっていた。ラクラシア家の動きは既にガバリエリ家とラバンディエ家にも伝わったらしく、それらしい二、三人の集団がそこかしこにいる。

これまでイストが宿泊していたという宿屋を幾つか見つけた。しかしどの宿屋も出立した後ということで、本人を見つけるには至っていない。

「一日ごとに宿を変えているのか・・・？」

疲労と苛立ちが募る。

こういう事態を想定して一所に留まらないようにしていたのだろうか。あの男ならそういう思考をするのではないか。そう考えたら皮肉っぽい笑みを浮かべたイストの顔が浮かんだ。

（『気分』とか言いそうだな・・・・。想定していたなら、あの男のことだ、単なる嫌がらせに決まっている・・・・！）

短い、それこそ半日程度の付き合いしかしていないが、それでもリリーゼはイストに対して「軽薄で酔狂」という先入観を持っていたし、それは正しい感想であると言えるだろう。それがイスト・ヴァーレの一面であるという意味では。

頭を振り、考えを切り替える。今はイストの人間性についてあれ

これと考えている場合ではない。一刻も早く奴を見つけ、この事態を収拾する。それが今の目的だ。幸いなことに今のところ流血沙汰は起きていない。

一日ごとに宿を変えているならば、この時間は宿ではなく食事のできる食堂か酒場あたりにいるかもしれない。

「そちらをあたって見るか・・・・」

長い夜は続いていく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さらに二時間ほどが経過した。未だにどの勢力もイスト・ヴァーレを見つけることが出来ないでいる。それどころか有力な手がかりさえ見つけること出来ない。今朝の目撃情報を最後にこの都市で彼を見た者はいないのだ。

異常な事態である。三家たるラクラシア家、ガバリエリ家、ラバンディエ家、それにヴェンツブルグに拠点を置くレニムスケート商会。この四つの勢力が総力を挙げて探しているのである。しかも今回は名前と特徴まで分かっており、しかもイスト本人は自分が探されていることに気づいていないはずだ。まあ、これだけ大掛かりに捜索されれば気づくかもしれないが。

「それならあの男の性格からして自分のほうから出てくると思うのだが・・・・・」

とある可能性が頭をよぎる。もしかしたらイスト・ヴァーレはもうこの都市に居ないのではないか。恐らくは四つの勢力共にその可能性には気づいているはずだ。

だが、引くに引けない。いや、当事者が誰であれこの状況で諦める愚か者はいないだろう。一縷の望みさえあればそこに全力を傾けるはずだ。

（それだけの価値があるのだ。「水面の魔剣」を作った職人には）

腰に吊るした魔剣を無意識に触りながらリリーゼの思考は走る。

そもそもこれだけの腕を持った職人が今まで無名で、世間から気づかれずにいたこと事態が異常で、この都市の権力者たちからしてみれば奇跡なのだ。ほんの僅かな可能性さえもないと悟らない限り、この事態が収集されることはないだろう。

「くっ！」

他の勢力より早く見つけなければと気持ちは焦る。が、実際には何の成果もないまま走り回っている。

ただただ焦りとイライラだけが募っていく。

そしてそれはリリーゼ1人に限った話ではない。今宵この都市を縦横無尽に駆けずり回っている四つの勢力の全員に言えることだ。

既にあちらこちらで小競り合いが頻発している。道を通せだの通さないだの、ここはウチが調べるだのいやウチがだの、理由自体はくだらない。そんな理由で小競り合いを引き起こしてしまう精神状態こそが異常なのだ。

「くそっ！人の気も知らないで！」

頭に浮かんだイストに悪態をつく。

さっさと出て来い、イスト・ヴァーレ。でないと小競り合いで程度ではすまなくなるぞ。そう半ば呪うかの如くに念じながらリリーゼ・ラクラシアは夜のヴェンツブルグを疾走する。

そうやって疾走するリリーゼの視界に四人の男が入ってくる。三人が刃物をチラつかせながら一人を囲んでいる。

恐喝。思考は単語で走り、行動に直結する。

「痴れ者が！！」

「水面の魔剣」を抜き放つ。刃物を持った三人がリリーゼに気づいた。彼女の持っている剣が魔剣であることは一目瞭然だが、小娘と侮ったのかそれとも数を頼んだのか、それともその両方か、はたまた魔剣を奪おうとでも考えたのか、三人は目標をリリーゼに変えた。

最初の1人が正面から手にした刃物を突き出す。それを、右足を軸にして体を回すようにしてかわす。さらに勢いあまった男とすれ違う瞬間、体を回した勢いそのままに魔剣の柄を男の首筋に叩き込む。

（まず一人・・・・！）

倒れこむ男の存在はすぐに思考からはじき出し、残りの二人に意識を向ける。気配は左右。左が速い。

一人目に魔剣の柄をぶつけたことで体を回した際の勢いは既に死んでいる。突き出された刃を、僅かに体をズラす事でかわす。男が的を外し、体制を崩していく様子がやけにゆっくりと瞳に写る。

転ばないために男は大きく右足を踏み出す。一閃。その右足の太ももを右上段から魔剣で撫でるように斬る。足の筋を斬られた男は体重を支えることができず、そのまま倒れこんだ。

（二人・・・・！）

最後の気配は後ろ。倒れこむ男を避けるようにして飛んで間合いを開ける。体を反転させると、最後の男が刃物を斜めに振り下ろしてくる。それをバックステップでかわし、相手の右上腕部の筋を斬る。

「ちっ、覚えてろよ・・・・」

短く悪態をつくと男は傷口を押さえてその場から走り去った。恐喝されていた男を捜すと、既に逃げたのか姿はない。

礼が欲しかったわけではない。が、やはり虚しさは否めない。それは、一刻も早くイスト・ヴァーレを見つけなければならないのに、こんなところで格下のゴロツキ相手にチャンバラを演じなければならない、自分の現状に対しても言えることだ。

「ああ、もう・・・・」

募る苛立ちを押さえ、リリーゼは再び走り出した。あちらこちらから物騒な喧騒や悲鳴が聞こえた。

なぜ気づかなかったのだろう。

あの時、彼が「水面の魔剣」の探査能力を使って見せたときに。

あれは決して偶然などではない。彼は知っていたのだ。この魔剣にその能力があることを。当然だ。「水面の魔剣」の元々の所有者はイストなのだから。

そもそも自分に色々な魔道具を見せてくれたのは、その情報を父や兄たちに伝えさせてこの状況を招くためではなかったのか？

「だとしたら私は・・・・！」

とんでもない道化を演じさせられてことになる。仮にイストにその意図がなかったとしても、「水面の魔剣」の元々の所有者が彼であることに気づいていたなら、今のこの混沌とした状況は多少なりともマシになっていたはずだ。

「弱音を吐くな」

イストに怒りをぶつけるのも、自分を責めるのも後でいい。今は、「できることをする。そう決めたはずだ」

彼女の夜は長い。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

東の空が白んできた。

「朝か・・・・・」

疲れもあらわにリリーゼは呟いた。飲まず食わずの休みなし、というわけではなかったが、一晩中走り回ったのだ。正直、もう動きたくなかった。

そう、結局一晩中イストを探して街中を駆け巡ることとなったのだ。にも拘らず彼は見つからなかった。これはラクラシア家に限ったことではなく、他所でも同じだ。

「お嬢様、一度お屋敷にお戻りください」

途中から一緒に行動していたラクラシア家の私兵の1人がそう声をかけた。

「夜も明けました。さすがにバカ騒ぎも収束するでしょう」

「そうだな・・・・・」

一晩かけても手がかりはほとんど掴めなかった。これ以上は恐らく無意味だろうし、他の二家やレニムスケート商会もそれは承知しているだろう。それにリリーゼ本人としても空腹で疲れきっている。

「帰って休むとするか」

そう言ってリリーゼが魔剣を杖に腰を上げたとき、

「はっはー。朝も早よからお疲れのご様子。昨晩は何か楽しいことでもあったのかい？」

イスト・ヴァーレまさにその人が現れたのだった。

「な・・・・・？」

驚愕を顔に貼り付けてリリーゼは絶句した。つい先ほどまで街中を駆けずり回って探しても見つからなかったイスト・ヴァーレその人が、今まさに目の前にいるのだ。

驚愕は徐々に怒気へと変わっていく。

「き、貴様！今までどこにいた。私たちは一晩かけてお前のことを街中探し回ったのだぞ、イスト・ヴァーレ！」

「街中探し回って見つからなかったんなら答えは一つだろ」

「・・・・え？」

「街の外に居たんだよ」

昨日の月見酒は最高だった、と彼は笑った。無煙を吹かし白い煙（本人の自己申告を信じるならば水蒸気）を吐き出すその姿は忌々しいまでに軽薄だ。

「街の・・・外・・・だと・・・？」

単純にして驚愕の事実を聞かされ、リリーゼはその場に座り込んだ。一緒にいたラクラシア家の私兵たちも一様に驚いたような疲れ

たような、複雑な表情を浮かべている。

私たちが必死に街中を走り回っていたときに渦中のこいつは外で暢気に月見酒を煽っていたというのか・・・・・？

そう思うと、フツフツと怒りが再燃してくる。

「ともかくだ！ここであったが千年目。イスト・ヴァーレ、貴方にはラクラシア家までご足労願うとしよう」

拒否は認めない、と言い放つ。私兵たちも表情を厳しくして、断れば力ずくで、と無言のプレッシャーを掛ける。しかし、そんなプレッシャーなどまるでないかのようにイストは無煙を吹かしている。

「オレは別に構わないが、構う人たちもいるらしい」

そういってイストは路地に目を向ける。リリーゼもその視線を追う。すると、ガバリエリ家の私兵の一団が路地から現れた。さらにラバンディエ家、レニムスケート商会の私兵もなだれ込み、場は一気に緊迫した。

ラクラシア家、ガバリエリ家、ラバンディエ家にレニムスケート商会。四つの勢力が（下っ端ばかりとはいえ）勢ぞろいしてしまった。どの一団もこのイスト・ヴァーレを確保せんと気がはやっている。それぞれがそれぞれに間合いを計り、機先を制そうとしている。朝の、ともすれば肌寒いくらいの時間帯なのに、全身から汗が吹き出てくる。リリーゼも水面の魔剣を正面に構え、三つの一団が全て視界に入るように立ち位置を調整する。

まさに一色触発の事態だ。が、当のイストはといえばふてぶてし

くも無煙を吹かし白い煙（本人の自己申告を信じるならば水蒸気）を吐き出している。その表情はこの事態を楽しんでいるかのようだ。

「どいつもこいつも引く気はない、か・・・・」

緊迫した雰囲気の中、ただ1人その空気に飲まれることなく声を発したのはイストだった。

「予想通りっと。ま、そうでなくっちゃな」

そういってイストは、悪戯を成功させた子供のように笑った。

「とりあえずオレはラクラシア家にご招待されるとするよ。ご令嬢の形相が怖いからね」

冗談めかして言った彼の言葉にその場にいる人々は一気に色めき立った。緊張が膨れ上がり、場の均衡が崩れるその刹那、

「だから、それぞれの代表にラクラシア家まで来るように伝えてもらえるかな。話は役者が揃ったら聞くから」

そういったイストの言葉で場が落ち着きを取り戻す。が、当たり前だが、簡単にその提案を受け入れることはできないらしい。

「・・・・ここでお前を力ずくで連れて行けば同じことだ」

ガバリエリ家の私兵の一団のリーダーらしい男が唸るようにしていった。他の面々もその選択肢は捨てがたいらしく、表情には迷いが見える。

「ここで事を起こして俺の心証を悪くすると、ご主人サマの交渉に

響くぞ。そしたらお前らクビ、だな」

杖を持っていない左手でクビを切る仕草をしながら茶化すようにイストは告げた。言われた男は渋い顔をして黙り込んだ。皆が沈黙し、何も言わなくなるとイストはリリーゼに水を向けた。

「んじゃ、行こうか。あ、ついでに朝食を付けてくれると嬉しい」

メシまだなんだわ、と相当に厚かましい希望を沿えて。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

末娘のリリーゼが見知らぬ男を連れて帰宅したとき、父であるディグスは内心焦った。まさかこの一晩のうちに良からぬ男に引っかかったか、であればこの男どうしてくれよう。と顔には出さず物騒なことを考えていたが、そんな父親の心配は杞憂に終わった。

「父上、この男がイスト・ヴァーレです」

娘にそう紹介された男は、年のころは二十歳の始めごろで背丈は１７０半ば。髪と瞳の色は黒で赤褐色の外套を羽織っていた。右手には背丈より少し長い杖を持ち、左手で煙管を吹かしている。顔立ちは整ってはいるがとりたてて美形というわけではない。が、そのアクの強そうな瞳は容姿以上に彼に生気を与えていた。

ディグス・ラクラシアは狂喜した。が、そこは政に関わる者。己の感情は全て腹の中に押さえ込み、表にはおくびもださぬ。ただ万人向けの作り笑顔を向け、当家にようこそ、とこの重要な客人を迎えたのであった。

ラクラシア邸でイストが最初にしたことは、厚かましくも朝食の催促であった。朝食はすでにアリアが用意してあり、ラクラシア家の面々もまだ朝の食事を食べていなかったので、都合よく相伴することとなった。

食事の最中、ディグスは例の魔剣について、色々と（というか主に製作者について）尋ねたが、そのたびに「その話は役者が揃ってから」とはぐらかされた。

「リーちゃんの魔剣を売ったの、貴方なのですってねぇ」

おっとりとした口調で口を開いたのはアリア・ラクラシアであった。

「そうですよ、奥方」

他家の食卓で遠慮も緊張もすることなく、優雅に紅茶を楽しみながらイストは肯定した。この事はもはや公然の事実なので隠す必要がない。ちなみにこの男が丁寧な口調で話をすることにリリーゼはどうしても違和感を覚えてしまう。

「そのことが引き金となって、昨晩から今朝にかけての騒ぎとなったのですねぇ。幸い死者が出たという話は聞いておりませんが、けが人や物取りの被害に遭われた方々は１００人を超えるとか」

アリアは一旦間を取った。そして柔和な微笑を浮かべ続ける。

「この責任、どう取るおつもりですか？」

食卓の温度が凍りつくほどに下がった。アリアを見れば先ほどとまったく変わらぬ微笑を表面上は浮かべている。が、その笑顔は間

違いなく黒いし、背後には般若が見える。

リリーゼは背中に冷や汗が流れるのを感じた。二人の兄もご同様の様子だ。が、当のイストはといえば、アリアの物理的圧力さえ感じそうな笑顔もどこ吹く風、先ほどとまったく変わらず優雅に紅茶を啜っている。

「ホント、どうするんでしょうね」

「・・・・・・・・」

重たい沈黙が食卓にのしかかる。

「答えないおつもりですか」

アリアが初めて険のある声を出した。

「当然です。オレが問うたのですから、貴方たちに。どうするつもりなのか、と」

怪訝な顔をするラクラシア家の面々に対し、いいですか、と前置きしてからイストは言葉を続けた。

「オレは小さな火種を持ち込んだだけ。その火種に薪をくべ、油を注ぎ大火に仕立て上げたのは、他ならぬ三家とレニムスケート商会です。ならば責任を取るべきは彼らでしょう?」

「そもそも火種がなければ大火は起こらない。そうは思いませんか」

「火種なんてそこかしこに転がっていますよ。それともその全てに対して責任を求めるおつもりですか」

そもそも、とイストは続けた。ティーカップを置き、責めるように、からかうように瞳が光る。

「今回の一件、動きが大きすぎるんですよ。まったく関係のない両替屋のおっちゃんまで『強力な魔道具が持ち込まれたらしい』って話を知っていた。もっと秘密裏にやる方法はいくらでもあったでしょうに」

ディグスが苦い顔をする。やり方がまずかったことは自覚しているらしい。

「私にまったく責任がないとは言いません。しかし私より先に責任を問われるべき人々がいる、と思いますよ」

「・・・・・魔道具の密売は犯罪だ。その咎でお前を捕らえることもできるのだぞ」

いいように言いくるめられたことが悔しかったのか、クロードが唸るようにして脅した。論法を変えて、少し脅しておくつもりなのだろうか。

「なら密売品を非合法に買い取って、さらにその犯罪者と一緒に食事をしている皆さんも共犯ですね」

鮮やかに切り返され、すぐにクロードは言葉に詰まった。

「それにこんな話をするためにオレを呼んだのではないのでしょう？」

そう言ってイストが視線を向けた先にはラクラシア家の執事が腰を折っていて、来客を告げた。

第一話　独立都市と聖銀の製法？

舞台は客間に移る。

ラクラシア家の客間には五人の男がいた。三家たるガバリエリ家、ラクラシア家、ラバンディエ家のそれぞれの当主、レニムスケート商会の首領（ドルチェ）、そして「例の男」。今回のバカ騒ぎの中枢が一堂に会したのだ。ちなみにリリーゼも同席を希望したのだが、許可は下りなかった。

「夜更かしをしたのですから、その分ゆっくりと休まないと。お肌が荒れてしまいますよ？」

そう（黒い）笑顔を浮かべたアリアに押し切られ、今頃はベットの上だろう。

「さて方々、オレが『例の男』ことイスト・ヴァーレだ。以後お見知りおきを」

イストはそう挨拶したが、半分以上は儀礼的なものだ。

「我々を一堂に集めて何を話そうというのかね。部下の話では交渉といっていたそうだが」

早速口を開いたのはラバンディエ家の当主だ。

「交渉の前に二つほど言っておきたいことがある」

先ず一つ目、といってイストは人差し指を立てた。

「あの水面の魔剣を作ったのは、他でもないこのオレだ」

彼らが最も聞きたかった情報をあっさりと彼は提示した。色めき立つ当主たちを無視してイストは話を続ける。

「そして二つ目は、オレはどこの工房にも属す気はないってことだ」

イスト以外の四人は一様に難しい表情となった。目論見が潰えたから、ではない。むしろこの発言で「イストが水面の魔剣を作った」という話の信憑性は増した。工房に属す気がないくせにそんなウソをつく理由はないからだ。

「では、この場でどのような交渉をするおつもりですか？新たに魔道具を売却したいというのであれば、我が商会が買い取らせていただきますよ」

話を進めたのはレニムスケート商会の首領（ドルチェ）、ジーニアス・クレオであった。

「その話は又の機会に」

ジーニアスの誘いを柔らかく断り、さて、と彼は話を続けた。

「このまま何もなしでは方々としても収まりが付かないだろう。色々と物騒なことも考えかねないからな、水面の魔剣とは関係ないが別の交渉材料を用意した」

それがこれだ、といってイストは一枚の紙切れをテーブルの上においた。ガバリエリ家の当主がそれを手に取り、そして眉間にしわを寄せた。

「・・・・・・なんだ、これは」

そこに書かれていたのは彼らには読めない文字、古代文字（エンシェントスペル）だった。

「貴様ふざけているのか」

「そこには聖銀（ミスリル）の製法が記されている」

当主たちの怒りは一瞬にして霧散した。代わりに困惑が彼らを支配する。当然であろう。聖銀（ミスリル）の製法は教会が厳重という言葉が陳腐に聞こえるほどの仕方で管理しているのだ。そんな秘中の秘が今目の前にあるといわれてもそう関単に信じられるわけがない。

そんな当主たちの困惑を無視して、イストは一つの封筒を机の上に置いた。口は赤いロウで封がされている。

「そしてこいつにソレを常用文字（コモントスペル）に翻訳したものが入っている」

ああそれと、と思い出したようにイストは付け加えた。

「そっちの紙には細かい手順や数値は書いてないから」

「・・・・なぜ貴様が聖銀（ミスリル）の製法を知っている・・・・」

唸るようにしてそういったのはラバンディエ家の当主だ。

「この街の近くにある遺跡から見つけた」

こともなさげにイストは答えた。

「ソレが本当なら、その遺跡を探索すれば我々も同じものを見つけられるな」

リリーゼからあらかた話しを聞いているディグスがそういった。

それも古代文字（エンシェントスペル）で書かれているかも知れないが、古代文字（エンシェントスペル）が読める人物は探せば見つかるだろう。

「甘いな。オリジナルはもう潰した。判別は不可能だ」
ニヤリ、とイストは邪悪そうな笑みを浮かべた。

「そもそも、そこに入っている製法は本物なのか？」
かなり疑わしい、という目を封筒に向けるガバリエリ家の当主。

「実際に合成してみればいい。それで納得できるだろう？」

むぅ、と当主たちは押し黙った。そんな中、いち早く思考を商売に切り替えたのは、やはりというか商人ジーニアスだった。

「幾らで売りつけようというのです？その製法」
「１万シク」

金貨で１万枚。その金額に当主たちは難しい表情を浮かべた。法外だったから、ではない。むしろ破格といっていいだろう。

教会は聖銀（ミスリル）の売却益で年間の活動予算のおよそ三割をたたき出しているのだ。その金額たるや莫大で、ともすればそれだけで小国の国家予算並みの金額になる。仮に教会と客を二分するとしても、１万シクなど一年のうちに補完でき、さらには１０倍以上のおつりが来るだろう。

「四人だから、１人頭２５００シクでいいぜ」
「・・・・いいだろう。ただし、支払いはその製法が本物だと・・・・」

確認したあとでだ、と言おうとしたラバンディエ家の当主をジーニアスが遮った。

「――お待ちください」

若干の興奮も混じらぬ、冷静を通り越して冷徹な声。その目は獲物を狙うかのごとくに鋭くなっている。

「仮に聖銀（ミスリル）を合成して売ったとしてもそれほどの利益は望めません。十中八九、教会の横槍が入ります」

「だろうな」

ジーニアスの冷静な分析をイストは肯定した。

「とすれば1万シク高すぎます」

２０００～３０００が妥当でしょう、と彼は大胆に値切った。

「それは普通に聖銀（ミスリル）を合成して売ったときの話だろう？やり方を変えればいいだけの話だ」

「どうやるというのだ」

ディグスが疑わしそうに言った。そんな彼にイストは苦笑を向け、ジーニアスに視線を転じた。

「あんたなら当たりは付いてるんじゃないのか」

そんなイストの指摘をジーニアスは飄々と受け流した。

「私も是非知りたいですね。教えていただけますか」

イストは肩をすくめ、食えない人だとこぼしてからその方法を述べた。

「聖銀（ミスリル）ではなくその製法そのものを売る。今オレがやっているみたいにな。長期的な収入にはならないけどかなりの利潤が出るぞ」

そして、できる事なら一時期の間に大陸中の不特定多数の工房に売りつける。

「そうするとどうなる？」

大陸中の工房で聖銀（ミスリル）が製造されることになるだろう。

「その全てに介入して利ザヤをはねるなんていくら教会でもできっこない。というより得策じゃない」

教会とは国ではなく組織である。つまり自前の国土を持たない。その教会が大国並みの権力と富を持てる、その源泉はひとえに大陸中に存在する信者たちである。

しかし、工房に圧力を掛けて利ザヤをはねるという行為はどうしても敵を作る。端的に言えば信者が教会から離れてしまう。一つ二つの工房ならそう大した問題にはなるまい。が、大陸中不特定多数の工房となれば話は別である。そこに連なる人々の数たるやもはや国家単位の人口となるだろう。

その全てを敵に回せばどうなるか。教会の権力基盤は揺らぎ、発言力は低下する。それ以前に信者からの寄付金が目減りすれば活動そのものに差障るのだ。

長期的に見ても短期的に見てもリスクしかない。

「・・・・・どうやって大陸中にばら撒く？」

「おいおい、それぐらい自分たちで考えてくれよ」

一同は押し黙った。話は決まった。

第一話　独立都市と聖銀の製法　エピローグ

結局、三家の当主たちとジーニアスはイストの案に乗り、聖銀（ミスリル）の製法を1万シクで買い取ることになった。ただし実際に合成してみて本物であることを確認してから、という条件付。

（ま、筋書き通りだな）

今、イストはラクラシア家の一室にいる。聖銀（ミスリル）の合成実験は準備の関係上、明日行われることとなり、監視も含めてこの部屋をあてがわれたのだ。もっとも、まだ代金は一銭も受け取っていないので監視の必要などないのだが。

事の成り行きに満足し、イストは無煙を吹かして白い煙（水蒸気だが）を吐き出した。と・・・・・。

「イスト・ヴァーレ！ヴェンツブルグ近くの遺跡から聖銀（ミスリル）の製法を発見したとは一体どういうことだ！」

ドタバタと扉をけり破らんばかりの勢いで部屋に入ってきたのはリリーゼであった。が、当のイストはといえば、

「ノックぐらいしろよ」

まったく動じた様子もない。

「聖銀（ミスリル）の製法など、あの遺跡のどこにあったのだ！？」

「あの壁に刻んであったヤツ」

ぬけぬけと、彼は答えた。リリーゼはといえば「予想はしていた、が認めたくない」といった様子で頬を引きつらせている。

「じゃあ、あの宣誓文は！？」

「口からでまかせ。なかなかそれらしく聞こえただろ？」

下唇を噛み俯いてプルプル震えているリリーゼの肩に手を置き、いっそ清々しい笑顔でイストは最後に余計な一言を放つ。

「『おお、無知は罪なり』」

「返せ！わたしの感動を返せ！」

ちょっぴり涙目で叫ぶリリーゼの絶叫がラクラシア家にこだました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大陸暦１５６３年５月、このときより歴史は緩慢に動き出す。しかし、後の歴史家たちより転換点とされるのはこの先１ヵ月後の出来事である。

第一部、完。

第一話　独立都市と聖銀の製法　エピローグ（後書き）

とりあえず、これで第一話は終わりです。楽しんでいただけたでしょうか？

面白かったと言う方、感想を送ってください。乙夜が小躍りして喜びます。

面白くなかったと言う方、悪くありません。悪いのは文才のないこの私です。

この先も、ストックが尽きるまではそれなりのペースで投稿できると思います。

それでは第二話でまたお目にかかれることを願いながら、今日はここまでにしたいと思います。

番外編　約束

番外編　約束

「海、か……」

独立都市ヴェンツブルグは極東に位置する貿易都市であり、この地方で有数の良港を保有している。当然、ここでは海は身近な存在だ。

ヴェンツブルグに君臨する三つの名家を「三家」というが、その内の一つラクラシア家の屋敷に用意されたイストの部屋からも海を見ることができた。

水平線が明るくなり、空が白んでくる。

「日の出、か……」

屋敷を抜け出して港まで見に行こうか、と思いついたが止めておく。イストの部屋がわざわざラクラシア家に用意されたのは監視を含めてであり、それを考えれば警戒されるような行動は慎むべきであろう。もっとも聖銀（ミスリル）の製法の代金はまだ一銭も受け取っていないから、監視する必要などあってないようなものだ。製法にしたって実際に作ってみせるまでは眉唾物だろうし。

（それに朝飯の前だしな）

腹が減っているから動きたくない。実はそれが一番大きな理由だ。

「そういえば、海から朝日が昇るのを見るのは、あの時以来か……

…」

イストがまだ師匠であるオーヴァと旅をしていた頃、友人であるクロノワの姓がアルジャークではなくまだミュレットであった頃。自分と友人と師匠と三人で見た、あの朝日。世界は広いと、改めて感じたあの日。

「あの時にした約束は、まだ有効だよな……？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

バイエルト、という街がある。

アルジャーク帝国の辺境に位置する街だ。辺境と言っても帝都ケーヒンスブルグから離れており、そのため政治的な喧騒からは遠いと言う意味であって、規模はそれなりに大きい。

アルジャーク帝国は北国でありその冬は厳しいが、その大地は肥沃で夏になると奇跡のように命を育む。バイエルトの周囲も豊かな穀倉地帯であり、町の周りには麦畑が広がっていた。

平和な街であり、ここ百年は戦火に巻き込まれたことがない。ただ昔の名残で古めかしい城壁が、市街地とその外に広がる麦畑の間を隔てている。

季節は冬。収穫の終わった麦畑はすっかりと深い雪に覆われ、あたりは一面の銀世界となっていた。人が足を踏み入れることのない雪原には、ただ風だけが遊ぶように紋様を描いている。

バイエルトの街の郊外に一組の母子が暮らしている。母の名前はネリア・ミュレット、息子の名前はクロノワ・ミュレットという。

父親はいない。いや、生物学的にはきちんと存在しているのだろうが、少なくともクロノワは父親の顔も名前も知らなかった。

父親について、クロノワはある程度の推測は持っている。

母がこの街に来たのはおよそ十四年前。今のクロノワの年齢は十四歳であるから、どこか別の場所で自分の妊娠が発覚してから、この街に来たのだろう。母の親類がバイエルトの街にいるわけではないから、今住んでいる家と土地はここに来てから買ったことになる。借金をしたと言う話は聞かないし、つまりそれだけのお金を母は持っていたのだ。

さらに今、ネリアとクロノワの親子は小さなハーブ農園を経営している。だが、そこでの収入など微々たるものだ。一般家庭の平均的な月収は3～5シク（金貨3～5枚）と言われている。二人だけの家庭であるから、収入はもうすこし少なくても大丈夫なのかもしれないが、それにしたって農園の売り上げだけで生活していけるとは思えない。にもかかわらず生活に困窮しているわけではない。ということは、その分の財産を持っていると言うことになる。

（てことは、つまりアレだ……）

自分の妊娠が発覚した事で、母はかなりの額の手切れ金を渡されたのだろう。つまり自分の父親は相当額のお金を用意できる人間、ということになる。

（役人のお偉いさんか、金持ちの商人か……）

クロノワは自分の父親についてそう当りをつけていた。無論、母であるネリアに聞いたたことはない。そんなことをすれば困らせるだけだと分っている。

（まあ、別にもう、どうでもいいけどさ……）

顔も名前も知らない父親を憎んだことはある。一時期、それは激しく憎悪した。金持ちだったと確信した頃が、最も激しく憎んでいた。

金があるってことはその分、力が、権力があるってことだ。それなのになぜ自分で手をつけて、子どもを身ごもらせた女を手切れ金だけで放り出す？お前にとっては遊びで責任を取ったつもりなのかもしれないけど、母さんには母さんの人生があるんだ。それを狂わせといて金だけで済ませようなんて、最低じゃないか！

顔も名前も知らない相手に、恨み言やら呪いやら、吐き続けていた時期があった。が、今はどうでも良くなってしまった。

（疲れるんだよな……）

顔も名前も知らない相手を憎み続けるのは。

無論、“奴”を許したわけではない。憎み続けるのに疲れて、馬鹿馬鹿しくなっただけだ。ともかく金はあるんだから、それが尽きる前に自分が働いて母さんを支えてやればいい。今は、そう考えている。

「ご飯の準備は出来たわね。クロ、オーヴァさんとイストくんを呼んで来て」

「はい、母さん」

ネリアは息子であるクロノワのことを「クロ」と呼んでいた。無論名前を縮めたものだ。ちなみにクロノワの髪の毛も目も黒ではな

い。

この冬、クロノワの家には二人の客人がいた。

オーヴァ・ベルセリウスとイスト・ヴァーレ。本人たちの自己申告を信じるならば、流れの魔道具職人であるという。こうして一般の家を間借りするのは彼らにとって珍しくないらしい。普通はきちんと宿代を払うらしいがネリアが求めたのは食費だけで、「ずいぶんと安上がりで助かったわい」とオーヴァは喜んでいた。

ただネリアはもう一つオーヴァに条件を出していた。それは、

「春になったらクロノワに海を見せる」

というものだ。ネリアは理由を言わなかったしオーヴァも聞かなかったしイストは口を挟まなかったから本当のところは分らないが、もしかしたら“海”という目的地はさほど重要ではなく、この街の近辺しか知らない自分に広い世界を少しでも見せてやりたいと言うネリアの親心かもしれない。

バイエルトの街から海までは、徒歩でおよそ二週間といったところだろうか。往復で考えれば約一ヶ月必要になる。当然師弟と一緒に旅をするわけで、その間に旅慣れしていない自分がかける手間を考えればトントンかもしれない。もっともこの師弟が「面倒を見る」などという気の利いたことをするとも思えないけれど。

「自分のことは自分でやれ」

と問答無用で突き放されそうだ。

それはともかく。オーヴァとイストの師弟は外で雪かきをしているはずだ。昨晩も大雪が降ったらしく、家の周りにはかなりの量が積もっている。

師弟の雪かきの仕方は非常に独特である。「光彩の指輪」という、光で空中に図形を描く魔道具を使うのだ。師匠であるオーヴァが使っているのは「光彩の槌」というらしいが、効果は同じだと言う。同じ効果なのになぜ槌の形にしたのか、と聞いたら、

「ぶん殴るならこの形じゃろう」

と、残念な答えを頂戴した。というか描くための魔道具で殴るな、と言いたい。

それもまたともかく。この「光彩の指輪」で熱を生む魔法陣を描きそれをつかって雪を融かす、というのがこの師弟の“雪かき”だった。そのため一般的な雪かきと比べて非常に楽であるし、また速く終わり除雪した雪の置き場に困ることもない。時間がたつと雪解け水が凍ってしまい、道が滑りやすくなるのが問題だが、そばの雪壁を崩して雪で覆ってやればそれも解決する。

まだ雪かきの最中だろうかと思いながらクロノワが家の玄関を開けると、師弟が雪かきに励んで、

「これでどうじゃ！」

「甘い！まだまだぁ！」

いなかった。雪合戦をしていた。どうして家の中まで声が聞こえなかったのかと思い、そういえば雪には防音効果があるという話をどこかで聞いたな、と半ば現実逃避気味に考える。

目の前の雪合戦は、普通の雪合戦ではなかった。普通の雪合戦ならば魔法陣は使わないだろう。

イストが「光彩の指輪」をはめた手を雪にかざし魔法陣を展開する。すると雪がひとりでに集まってきて、こぶし大の雪玉を作っていく。雪玉が十個くらいできるとイストは魔法陣を書き換え、出来上がった雪玉を宙に浮かべた。

「いいいっけぇぇぇぇ！！」

魔法陣をさらに書き換え、イストは浮かべた雪玉を発射する。その速度は人が投げるよりも遥かに速い。

イストの攻撃（？）をオーヴァは防御用の魔法陣を展開して防ぐ。というか雪合戦で防御用の魔法陣使うってどうよ？

ああ魔道具職人が本気で雪合戦をするとこうなるのか、とクロノワは心の底から呆れた。とはいえ呆れてばかりもいられない。

「あの、そろそろ、ご飯……」

目の前の光景に圧倒され、クロノワの声は小さい。聞こえるはずがないと本人は思ったのだが、どうやら地獄耳のオーヴァは聞き取ったようである。

「うむ！ではそろそろ終わらせるとするかのう！」

そういってオーヴァは「光彩の槌」を雪に叩きつけ、魔法陣を展開する。すると一抱えはあろうかという巨大な雪玉が形成され宙に浮かび上がった。さらにオーヴァが魔法陣を書き換えると、その巨大な雪玉はみるみる圧縮されていきついにはこぶしくらいの大きさになってしまった。

「これで終いじゃ！」

オーヴァが「ドン！」と言う音と共に雪玉を発射する。イストはすかさず魔法陣を展開し、それを防ごうとするが……。

「危な！」

パリィィィン……、と鈴が鳴るような音を残しイストが張った不可視の盾が雪玉によって割られた。イストは転がって避けたので無傷だが、しかし雪玉であの盾を割るとは理不尽にして非常識な。

「おいクソ師匠！今の雪合戦の威力じゃない、ブホォォ！」

非常識な雪玉の威力に文句を言っていたイストの顔面に、オーヴァが投じた雪玉（圧縮してないやつ）が直撃しはじけた。

「勝〜利！」

ハーハッハッハッハッハッ！！と楽しそうに笑うオーヴァ。イストは雪の上に胡座をかいてそれを不機嫌そうに眺めていた。

「遊びこそ全力で」

いつか聞いた二人のモットーを思い出し、クロノワは苦笑するしかなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昼食を食べ終えた後、クロノワとイストの二人はバイエルトの街の城壁の内側、つまり市街地に来ていた。ここも雪に覆われてはいるが、やはり生活している人の数が違う。城壁の外とは活気が段違

いである。

そもそも家のつくりが違う。城壁の外側は木造の一軒建ての住宅が多いのだが、バイエルトの市街地はレンガや石造りの集合住宅が多い。ただ土地柄どちらの住宅も防寒対策はしっかりとなされている。

「あのクソ師匠め……！」

隣を歩くイストが忌々しそうにそうもらした。彼が根に持っているのは食事前の雪合戦のことだけではない、と知っているクロノワとしては苦笑するしかない。

「いい加減忘れれば？」

とはいえ無理だろうな、とクロノワも思っている。オーヴァの弟子の扱いは、彼の目から見ても少々ひどい。

ある時やはり雪合戦をしていたオーヴァは、大量の雪でイストを押しつぶし、そのまま埋めてしまった。雪に埋もれて見えなくなったイストはそのまま気絶したのか出てこない。にも関わらず、あろうことかオーヴァは弟子をそのまま放置したのだ。

曰く「あやつが着とる外套は、雪原で野宿しても大丈夫なやつじゃから、まあ大丈夫じゃろ、たぶん」

そしてちゃっかり弟子の分の食事もたいらげ、イストは一食抜きの憂き目に会ったのであった。

またある時、イストがテーブルに足を乗せイスの前足を浮かせ後

ろ足だけでバランスをとるという、お行儀の悪い格好でなにやら資料を読んでいた。食事をするテーブルに土足をのせているのだ。これには正直クロノワもいい気はしなかった。

そこに近づいてきたオーヴァ。彼はお行儀が悪いイストを見て眉をひそめると、おもむろにイスの後ろ足を払ったのだ。当然イストはバランスを崩し、ガタン！と大きな物音を立てて床に頭をしたたか打ち付け、読んでいた資料は散乱した。クロノワは目の前の光景に唖然として言葉もない。

「痛ってぇぇぇ……！なにすんだこのクソ師匠っ！！」

若干涙目になり、打ち付けた後頭部を擦りながらわめくイスト。が、そんな弟子の非難になど一向に耳を傾けずオーヴァはこういった。

「食卓に靴を履いたまま足を乗せるなっ！乗せるんなら靴、脱いでからにしろ！」

おいおい注意点はそこだけなのか、とクロノワは思った。思っただけで口には出さない。彼の目の前では仲のいい師弟が売り言葉に買い言葉で会話を楽しんでいる。火の粉が飛んでくる前にクロノワはその場を退散した。

「クロノワもそう思うよな！？っていねーし！！」

そんな絶叫を聞き流しながらクロノワは苦笑し、しかしイストに加勢しようとは露程にも思わなかった。二人がかりとはいえ、あのオーヴァに舌戦で勝てるとは思えなかったからだ。案の定イスト一人で勝てるわけもなく、孤軍奮闘虚しくいいように言いくるめられ

たらしい。

無論イストとてやられっ放しではない。この前などは赤唐辛子の粉末を大量に混入した「激辛コーヒー」で一矢報いていた。

ちなみにイストの「コーヒーシリーズ」はなかなかバラエティーに富んでいる。幾つか例を挙げるならば、ゲル状になるまで砂糖を入れた「激甘コーヒー」。塩を大量に入れたホイップクリームを上に乗せる「塩ウィンナー」。ミルクの代わりに豆乳を入れる「豆コーヒー」などがある。

あとお湯の上に泡立てた牛乳を乗せる、もはやコーヒーですらない「なんちゃってカプチーノ」などもあるのだが、これはネリアが間違って飲んでしまい、「騙された」と悔しがっていた。そしてその日の夕食はなぜかイストだけおかずが一品少なかった。

悪戯のためには手間を惜しまない師弟の攻防を安全圏から眺めていたクロノワはこう結論を下す。

「総じて仲のいい師弟だ」

我ながら当を得た評価だと内心で大いに満足する。

「ニヤニヤしてどうした？」

「……なんでもない」

イストがこちらの顔をのぞきこんでいるのに気づいて、クロノワは思考を現実に戻した。辺りを見渡せば随分と歩いたようで、目的地まで後少しとなっていた。

大通りをはずれて路地に入っていく。目的地はバイエルトの街に

乱立する集合住宅の一つ、レンガ造り五階建てアパートの三階の一室である。そこには「ロゼット爺さん」と呼ばれる一人の老人が住んでいる。

彼は様々な分野に深い知識を持つ博識な老人で、街の知恵袋と言えるだろう。街の子供らに勉強を教えたりもしているのだが、その子供らに自分のことを「老師」と呼ばせて楽しんでいた。無類の本好きで、彼の家には個人にしては大量の蔵書があるのだが、買ったものと自分で書いたものが半々くらいだろうか。

若い頃は講談師として世界中を旅して周り、各地方の逸話や寓話を集めたりしていたという。また日記の中でその地方の特産物や地理的な特徴、気候などについても詳細な記録を残していた。時折物好きな貴族の家などにやっかいになり、集めた話を聞かせる一方で日記の編纂などをして自分の蔵書を増やしていったのだという。

「ロッゼト爺さん、いる？」

ノックもそこそこにクロノワとイストは室内に入っていく。部屋の中に入ると、沢山の本がおいてある場所特有のあの匂いがした。それだけで随分と雰囲気が変わる。

「おお、クロノワとイストか。良く来た」

部屋の奥から一人の老紳士が現れた。頭は白いものが混じって灰色になり顔にもしわがきざまれているが、その目から理知的な光が失われることはなくまた腰も曲がってはいない。右目に引っ掛けたモノクルが良く似合っている。この部屋の主、ロッゼトである。自分のことは「老師」と呼ぶように、と茶目っ気をこめて注意してから、彼はクロノワとイストを部屋に招きいれた。

図書館のないバイエルトの街において、大量の蔵書が保管してあるロッゼトの家は稀有にして貴重な知識の泉だ。クロノワはもとより最近ではイストもよく彼の家に入り浸ってはその蔵書を読み漁っていた。

ロッゼトも若人たちが知識への探究心を持ってくれるのは嬉しいらしく、この二人組みの訪問を邪険に扱ったことは一度もない。もっともクロノワとイストは本を読むばかりではなく、主が執筆に没頭するあまり散乱しがちなロッゼトの部屋を掃除したり、簡単な食事を準備するなどして恩返しをしていた。

「しっかし、いつ来ても思うけど、すごい蔵書量だよな」

よく個人でこれだけ集めたもんだ、とイストは呆れながら感心する。クロノワもそれはまったくの同意見だったが、それを口に出す段階はとうの昔に通り過ぎているのだ。

「結構古いものも多いし、どうやって集めたんだ、老師？」

老師、と呼ばれて気分を良くしたのか、ロゼットは穏やかに微笑んだ。イストの疑問はもっともだろう。どう見たって個人が旅をしながら持ち運べる量ではない。そのことはクロノワも前から気にはなっていた。

ロゼットは得意げに種明かしをする。

旅をしていた頃、その途中でアバサ・ロットと出会ったことがあるという。求められるままに様々なことを話していたらどうやら気に入られたらしく、魔道具「ロロイヤの道具袋」をもらったのだそうだ。この魔道具のおかげで大量の資料を背負うことなく持ち運び

できるようになり、結果として彼の蔵書の量は加速度的に増えていった。

「食う物も食わず本を買いあさったものだ」

とロゼット爺さんは当時を思い返して笑った。

伝説の魔道具職人アバサ・ロットの名前が出て来て、クロノワは驚いた。もちろんかの人のことは知っていたが、どこか別の世界のことのようで現実味があるとは言いがたいものだ。なのにまさかこんな近くに接点があったとは。

イストも驚いているだろうと思って彼のほうを見ると、彼は「アバサ・ロットか……」と小さく呟いて何か考え込んでいた。

「弟子とか、一緒にいた？」

「いや、一人だったと思うが……、どうかしたかね？」

イストは、なるほどね、と納得したように小さく呟きそれから、なんでもない、と言って話を切り上げた。クロノワも不思議には思ったが追及はなにもしなかった。今彼の家に間借りしているオーヴァ・ベルセリウスがアバサ・ロットその人であるとクロノワが知るのは、彼の姓がアルジャークになってからである。

クロノワとイストの二人はロゼット老師に断ってから適当なイスに腰掛けると、目当ての本を開きその世界に没頭していく。ロゼットも二人が読書に集中し始めたのを見て満足そうに頷くと、自分の机に向かって執筆作業を再開した。

外では一時は晴れた雪がまた降り出した。深々と降る雪は雑音を遮り静寂を連れてくる。バイエルトの冬はこうして深まっていく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

オーヴァとイストの師弟がクロノワを連れて旅立ったのは、バイエルトの周りの麦畑の雪が完全に溶けきってからのことだった。遠くに見える山々の頂はまだ雪に覆われているが、平原にはすでに緑の草が芽生え始めている。

雪が溶けてなくなり春の足音が聞こえる季節とはいえ、やっぱり外はまだまだ寒い。一ヶ月程度とはいえ旅をするとなれば、その間は当然野宿が主になるだろう。温かいベッドが期待できるわけでもないし、であるならばもう少し気候が暖かくなってから旅立つのではとクロノワは思っていたが、聞くところによると師弟はもうむしろもっと早く旅立つ予定だったのだと言う。

（気を使ってくれたのかな……？）

初めての旅に臨む自分に。それは嬉しいし申し訳なし、「心配してくれなくても大丈夫なのに」という強がりを言ってみたりしたくもなるのだが、どうせならもう少し気を使ってくれればいいのに、と思わなくもない。主に出発の時期を遅らせる方向で。

とはいえクロノワは同伴させてもらう立場だ。それが、ネリアが出した冬の間宿泊するための条件だったとしても、依頼主のようにふんぞり返ることなど出来るわけがない。

そもそもオーヴァとイストの師弟の旅は、自分のように一ヶ月限定のものではない。その行動範囲が大陸規模である彼らにしてみれば、今回のこの海への旅は余計な寄り道に属するもので、義理以上の理由は持っていないはずだ。ならば自分が彼らに合わせるのが作

法と言うものであろう。

とまあグダグダ考えては見たものの、要するに「野宿きつそうだなぁ」というのがクロノワの心配事であった。まだまだ寒いこの時期、野宿したら凍死するのではないかと真面目に心配していた。

とはいえその心配は杞憂に終わった。当然と言えば当然である。なにしろオーヴァとイストの二人は旅慣れしており、初心者のクロノワが心配するような事案は最初から織り込み済みなのだから。

旅立つにあたり、オーヴァは一つの魔道具をクロノワに貸した。師弟が身につけている外套と同じもので、「旅人の外套（エルロンマント）」という魔道具だ。その能力は外套の内側の温度調節と防水、および風除けである。この外套を羽織っていれば季節が真夏であろうが真冬であろうが快適に過ごせるし、激しい雨に吹かれても体が濡れることはまずない。

（随分軽装だとは思っていたけど、これがタネか……）

思えばこの冬の間二人は常に、外だろうが家の中だろうがこの外套を身にまとっていた。室内はともかく外に出るときアレで大丈夫なのかと密かに心配していたのだが、実際にこの「旅人の外套（エルロンマント）」を羽織ってみればそんな心配は無用であったことがよくわかる。

（コレ、もっと早く教えてくれればよかったのに……）

一枚薄い外套を羽織っただけなのに非常に暖かい。しかも風除けの効果もあるので、冷たい風に吹かれて体温を奪われることもない。冬の間、モコモコと着膨れていたことを思い出し、クロノワはちょっぴり恨めしく思うのだった。

師弟との旅は、なんというか意外だった。意外に、まともだった。
オーヴァとイストが家に泊まっていた間、二人の奇想天外にして荒唐無稽な奇行の数々で楽しませてもらったクロノワは、旅の空の下でもそれは変わらないのだろうなと思っていたのだが、師弟の旅はなかなかどうして普通で、クロノワとしては拍子抜けをくらってしまった。

「あんな乱痴気騒ぎ毎日やってたら先に進めないし」

なるほどごもっとも。この師弟も旅が始まれば悪戯を仕掛けるより足を動かすことが優先らしい。

旅のペースはゆっくりとしたものだった。当然クロノワに合わせたものだが、オーヴァとイストにしても冬の間に鈍った体をならしているらしい。毎日派手に動き回っていたと思うのだが、それとは別問題のようだ。

歩を進めるのは基本的に明るい時間だけだ。そして暗くなる前に火を熾すなりして野宿の準備をする。暗くなってから動き回るのが面倒なのは、想像に難くない。なにより軽食が中心になる旅の中で、オーヴァとイストは夕飯は比較的しっかり作るので、それが楽しみになっていた。無論、手伝わされたが。

「やっぱり温かいものを食べると落ち着くなぁ」

食後の紅茶を手のひらで温めながらクロノワはしみじみと呟いた。
イストには、じじ臭い、と笑われたが。

夕飯後は雑談の時間である。クロノワを交えたこの一ヶ月の旅の

中で、最も多かった話題は「どんな魔道具が欲しいか」というものであった。

「そうだな、勝手に水が沸いて出てくるような魔道具があったら便利だと思うよ」

クロノワの言葉には実感がこもっている。

この時代、上下水道が設備されているのは一部の大都市に限られている。当然ネリア親子が住んでいるような郊外に、そのような便利な設備はない。日々の生活で使う水は井戸などから汲んでこなければならない。しかもそれを毎日しなければならないのだから、大変な仕事量である。

ちなみに下水がない地域の汚物の処理に関しては、地面に埋めるという知恵が一般に広まっている。

「アレ、使えるんじゃないかな」

イストの言う“アレ”とは「乾いた風の壷（ミストラル）」という魔道具である。室内除湿用の魔道具で、湿気を集めて水として壷の中に溜めていく魔道具だ。

「壷をもっと大きいやつにして、出力を上げればいけそうな気がするけど」

「あんまり強力だと、今度は乾燥しすぎるんじゃないの？」

「外に置けばいいじゃん」

なるほど確かにその通りである。室内に強力な「乾いた風の壷（ミストラル）」を置けば乾燥し過ぎに注意しなければいけないだろうが、外に置けば除湿しきれるわけもないので水が溜まるだけである。溜まる水の

量は季節によって変わってくるだろうが、霧が出たり地面が朝露に濡れるような季節であれば、雨が降らなくとも一晩外に置いておくだけで結構な量が集まりそうである。

「あ～、でも外に置くと、虫とか入りそうだな」

外に置くのだ。温かくなれば虫が寄ってくるだろうし、それだけではなくホコリや砂などが混じることだってあるだろう。

「それでも使い道はあるよ」

水を使うのはなにも料理だけではない。掃除や洗濯など、生活の様々な面で水は必要になる。飲み水や料理に使う水は井戸から汲んでくるにしても、それ以外に使う水をこの魔道具で確保できれば、日々の仕事量は随分と少なくなる。

「それにウチはハーブ農園をやってるから……」

植物を育てている以上、どうしても水は必要になる。その規模が大きければもはや雨を待つしか手はないが、幸か不幸かネリアのハーブ農園は小規模で、水をやろうと思えばやれてしまう。雨水を溜めておいたりもしているのだが、それにしても常に必要量があるわけではなく、足りない分は井戸から汲んでこなければいけない。

「それが結構手間でね」

水汲みは基本クロノワの仕事らしい。だからこそ「水が勝手に湧き出てくる魔道具」があったら便利だと思ったのだろう。

「にしても、こんな話してていいの？」

言うまでもなくイストは流れの魔道具職人であるオーヴァの弟子だ。どこかの宿に泊まっていればその限りではないが、一日中歩き続けなければいけないような日は、修行する時間は主に夕食後に限られる。つまり今雑談しているこの時間だ。イストにはイストなりのやるべきことがあるのではないだろうか。

「いーの、いーの。たまに一般人から意見を聞くのも参考になるし」

まったく師匠が奇天烈な変人だとなにが常識なのか分らなくなって困る、とイストはぼやいた。自分を一般人のくくりに入れなかったのは、自分も変人の類だと自覚しているからなのだろうか。

「まったく口の減らない弟子じゃ」

オーヴァが呆れたように口を挟んだ。変人呼ばわりされたことへの自己弁護がないのは、やっぱり自覚があるからなのだろうか。

「拾ったときは……、こんな性格じゃったか」

「そう、オレのこの性格は先天的な……っておい！」

そんな師弟の仲のいい会話に、クロノワは思わず笑ってしまう。

「それはそうと、さっき話していた『乾いた風（ミストラル）の壷』の改造計画じゃが……」

オーヴァがその話に乗ってきたことにクロノワは少し驚く。彼は先ほどの話の間中、チビチビと酒を飲んでいたので、興味はないものと思っていた。

「つまらんな」

ぶっきらぼうにオーヴァはそう言い放った。イストはその言わんとするところを理解できたのか眉をひそめているが、クロノワは目を丸くするばかりだ。魔道具に面白いもつまらないもないと思うのだが。

「もっと趣味に走った魔道具を作れ」

効率だの実用的だの、そんなことばかり考えているとつまらん人間になるぞ、とオーヴァは偉そうに高説をたれた。

（なるほど、こういう師匠につくから常識が吹っ飛ぶのか……）

妙なところにクロノワは納得した。その間もオーヴァの高説は続く。

「何事もやり過ぎるのが大切じゃ！」

「それは絶対ウソだ！」

間髪いれずにツッコミが出来る辺り、クロノワはまだまだ毒されてはいない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日は、朝日が昇る随分前に起きた。

辺りはまだ暗い。薄暗いのではなく、真っ暗である。家で暮らしているときはもちろんのこと、旅の間でさえこんなに早く起床するのは初めてである。

こんなにも早く起床したのには、もちろん理由がある。

海から昇る朝日を見るためである。

オーヴァ、イスト、クロノワの三人が今野宿をしているのは「ララバト山」という山の麓である。この山を越えた向こうに、目的地である海が広がっている。ララバト山は高くもなければ急峻でもない、むしろそれと真逆のなだらかで登りやすい山である。子どもの足でも半日あれば越えることは可能だろう。が、山はやはり山であり、その頂に立たなければ海を臨むことはできない。

「ちょうどいいから明日は早く起きて、頂上から朝日を見よう」

昨晩の夕飯時に、オーヴァはそう提案した。そのためにはかなり早い時間に起きなければならないことが目に見えており、当初はイストもクロノワも乗り気ではなかったのだが、「海から昇る朝日は一度も見たことがないじゃろう？アレは一度見ておいたほうがいい」と、オーヴァに説得されたのだ。いつもの、何かを企んでいる様子がなかったのも大きい。

火を熾すこともせず、「新月の月明かり」の光だけを頼りに冷たい朝食を詰め込み、三人は頂上を目指して歩き始めた。ララバト山がなだらかで登りやすい山とはいえ、山道は当然のことながら舗装などされていない。クロノワはランタン型魔道具「新月の月明かり」で、イストは「光彩の指輪」で、オーヴァは「光彩の槌」でそれぞれ足元を照らしながら注意深く山を登っていく。

旅をしている間中そうであったが、オーヴァとイストは足を動かしている間、話しをすることはほとんどない。クロノワも黙って二人の後についていく。

暗く、そして静かな山の木々の中を進んでいく。

（ああ、現実じゃない……）

旅の間、何度かお酒を飲んだことがある。見知らぬ、そして薄暗い夜明け前の山道を歩くクロノワは、酒精による酩酊とはまた別の現実からの乖離を感じた。見知らぬ山道だからなのか、それともまだまだ先が見通せないほどの暗さだからなのか、彼自身にも良く分らないがまるで異世界に迷い込んだかのような感覚を覚えたのだ。

ふと、思う。

――――遠くへ、行きたい。

それは心の奥底にあった、小さな願望。

自分はなんと言うか、老成しているのだと思う。クロノワは自分の性格について、そんなふうに思うことがある。それはきっと父親がいないことや、そのために自分が母親であるネリアを支えなければいけないという義務感に起因するものだろう。自分が不幸だとは思わないし、不幸自慢をしたいとも思わない。けれどもそれは「クロノワ」という人間が背負い込んだ、捨てることの出来ない荷物なのだ。

そういうものを、時たま非常に邪魔に感じることがある。あらゆるしがらみから切り離されて、ただの一個の人間に成りはてたいと思うことがあるのだ。

そんなことは不可能だと、分っている。どこに行こうが住もうが、そこに人がいて人間関係が存在する以上、大なり小なりしがらみは生まれるものだ。それはきっとどうしようもなく面倒で、逃れ得ないものなのだろう。

だから、というのは変かもしれない。しかしそれが正直な気持ち

でもある。

「遠くへ、行きたい」

と思うのだ。

ネリアがこの旅を用意してくれたのは、あるいは息子のそんな心のうちに気づいていたからかもしれない。

山頂が見えてきたときには、東の空はすでにたいぶ明るくなっていた。西の空には沈みかけの白い月がまだ浮かんでいるが、もう明りが要らないくらいには視界は良好だ。

「近いぞ、もうすぐじゃ」

オーヴァがそう声をかけると、イストが頂上めがけて走り出した。クロノワは反射的にその後を追う。木々の間を走りぬけそれが途切れたその先に、その光景は広がっていた。

――――海が、輝いている。

その光景は、なんというか、圧倒的だった。圧倒的な、現実だった。海から昇り世界を輝かせているその朝日は、クロノワがついさっきまで感じていた現実からの乖離するようなフワフワとした浮遊感を一瞬にして剥ぎ取り、圧倒的なリアリティーをもって彼にこう告げるのだ。

「ここが現実だ。ここは現実だ」と。

朝日は昇り続け、世界に新しい一日の始まりを告げている。その様子を、クロノワは夢から覚めるように見続けた。

「広い、なぁ……」

思わずそんな呟きがもれた。ララバト山の頂から見る海は広大で、遠くへと行けそうな気がしてくるのだ。

「まだまだ。世界はもっと広い」

隣に並んだイストが言う。そうだろうか、と思い一瞬の後に、そうだったと納得する。目で見える範囲だけが世界だなんて、そんなのつまらなすぎる。

――――遠くへ行きたい、と思った。

遠くへ行ってまだ見知らぬ世界をこの目で見たいと思った。しがらみから逃げたいとか捨てたいとか、そんな後ろ向きな考えはいつの間にか消え去っていた。

そんなものはくだらない。今この瞬間ならばはっきりとそう言える。世界はこんなにも広くて圧倒的なのに、そんな後ろ向きにみみっちく生きるなんて真っ平だ。この世界は心躍るもので満ちているはずなのだから。

「いつか二人で旅をしないか」

唐突に、イストがそんなことを言った。

「きっと楽しいと思うんだ」

朝日を横顔に受けて、イストは笑う。そう出来れば、本当に楽しそうだと思う。あの海の向こうにたどり着いたときに、まだ見ぬ秘

境に到達したときに、隣で一緒に笑って喜んでくれる友人がいれば、それはどんなにか素晴らしいことだろう。

「いいね。いつか一緒に世界を回ろう」

約束だ、とクロノワはイストのほうに振り返った。

それは他愛もない子どもの約束。けれども、いやだからこそ、とてもとても大切なもの。それをクロノワが実感するのは、もう少し先のことである。

第二話　モントルム遠征　プロローグ（前書き）

第二話です。

何を隠そうこの話、ほとんどイストが出てきません！

主人公なのにねぇ・・・・・・。

で、誰のお話かと言えば、それは呼んでのお楽しみ。

楽しんでいただけたらうれしいです。

第二話　モントルム遠征　プロローグ

決断に必要なのは決意ではない
覚悟である

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第二話　モントルム遠征

クロノワ・アルジャークは私生児である。ただし、彼の父親はエルヴィオン大陸の北東部に位置する大国、アルジャークの皇帝ベルトロワ・アルジャークであった。

彼の出生は一向に劇的でない。侍女として宮廷に上がっていた娘が皇帝の御手つきとなり子を身ごもったという、掃いて捨てるほどによくある話である。

クロノワの母の懐妊が発覚したとき、皇帝は彼女に暇を出し宮廷から去らせた。ただし身一つで放り出したわけではなく、辺境ではあるが小さな家と母子二人が慎ましく暮らしていくのに十分な金銭を与えている。

これが父である皇帝ベルトロワの愛情だったのか、それとも単に厄介払いをしただけなのか、クロノワはついに結論を得ることがなかった。恐らくはその両方であり、厳密に言えばそのどちらでもないのだろう。

なにはともあれ、クロノワの幼少期は静かなものであった。彼は自分が皇帝の血を引いているなど思いもしなかったし、母もおくびも出さなかった。さらにこの時期に、彼は1人の友を得るのだが、その話はまた別の機会にしよう。

平凡ながら静かな人生が一変したのは、クロノワが十五のときであった。前の年の冬から母の具合が悪かったのだが、年が明けてから容態が急変し、春を待たずにこの世を去った。

一人残され途方にくれる少年クロノワの前に現れたのは皇帝が遣したと言う一団であった。そしてこのとき初めて彼は自分が皇帝の血を引いていることを知ったのだった。

母の死の悲しみも果てぬうちに彼の生活の場は辺境の小さな家から帝都ケーヒンスブルグの宮殿へと変わった。そこで彼を待っていたのもまた、掃いて捨てるほどによくある話であった。

陰湿なイジメ、あからさまな陰口、公然とされる侮辱。彼の教師たちは隠すことなく軽蔑の視線を彼に投げつけ、同年代の子弟たちとの交友は一方的な暴力をもってなされた。自分をここに呼んだはずの皇帝は何もしてくれなかった。その妻である皇后はむしろ悪意の急先鋒であった。嬉しい誤算があったとすれば、クロノワの腹違いの兄であるレヴィナス・アルジャークが彼に無関心であったことだろう。ただこれは決して弟を気遣った結果ではない。レヴィナスの心情としては道端の石ころを無視するのと同じ感覚であったろう。

なによりも彼の内腑に突き刺さったのは母への侮辱であった。

「下賤な女の子供」

というレッテルはいつもクロノワに付きまとい、そして彼を苦しめた。彼に味方はおらず、彼の周りにあるもの（・・）は、敵意と消極的無視だけであった。

「ここは寒いな、イスト」

暖かいはずの部屋で彼がこぼした独り言は、歴史書には残っていない。

このように精神的に劣悪な環境の中でクロノワはまず味方を作ること（決して増やすことではない）から始めた。

まず、常に笑顔でいるように心がけた。誰に対しても挨拶し、失敗を犯せば許し時には庇ったりもした。教師たちには敬意を払い授業はまじめに受けた。嫌がらせ同然の仕事を頼まれても喜んで果たした。

とても十五の少年がたどり着ける境地ではない。自力でたどり着いたとすれば「悟りを開いた」とでも言うべき精神的な脱皮が必要である。その境地にたどり着いたのが自力にせよ他力にせよ、彼がとった味方を作るための行動は成功した。

この時期のことを後にクロノワはこう述懐している。

「私がいつ腹芸を身に付けたかといえば、間違いなくあの時期だろう。そして最も使ったのも。まったく、皇帝になってこんなに楽でいいのかと拍子抜けしたくらいだよ」

幾分冗談の成分が混じっているとはいえ、この時期は彼にとって最もつらい期間だったのだろう。

少しずつではあるが、クロノワの周りには人が集まるようになった。元々の人柄もあったのだろう。宮廷で働く人々はこの突然現れた第二皇子を徐々に受け入れていき、噂やさまざまな情報を教えてくれるようになった。教師たちも彼が優秀で敬意を持った生徒であることを理解すると、その態度は好意的なものになっていった。教えがいのある生徒だったのだろう。

比較的高い地位にいる人々もクロノワを受け入れ始めた。その筆頭ともう言うべき人物がアールヴェルツェ・ハーストレイトであった。彼はアルジャークの一軍を預かる壮年の将で、兵士からの信頼も厚い。彼が味方となったことでクロノワを取り巻く宮廷内の状況はかなり好転した。クロノワの警護をアールヴェルツェの部下が担当することになり、こうしてクロノワは少なくとも物理的に安全な空間を宮廷内に確保したのであった。

味方ができても敵が減ったわけではないので、向けられる悪意の量に大した変化はない。しかし少なくともクロノワは、その狂ってしまいそうな精神状態からはどうにか開放されたのであった。

転機が訪れたのはクロノワが十八のときのことであった。この年、彼は皇帝の勅命により国内をくまなく巡る視察に出ることとなった。一見すれば左遷である。しかし彼の感想は違っていた。

「うれしかった。その一言に尽きる。私にとってあの宮殿は悪意の巣窟だったからね。視察だろうがなんだろうが、離れられるならなんだってよかった。それに旅をしてみたいとずっと思っていたから」

とは言っても、いくら「下賤な女の子供」と軽蔑されているとはいえ皇子である。護衛も付けずに一人で視察に行けるわけもない。

三〇人ほどの護衛が付いた。皆、アールヴェルツェが選んだ者たちで、クロノワに対しては好意的だった。

この護衛隊を率いたのがグレイス・キーアという女騎士だった。士官学校を一桁台の席次で卒業した秀才で、また優秀な魔導士でもあった。彼女は元々アールヴェルツェの幕僚の一人なのだが、少々がんばりすぎて上から睨まれた。上、といっても将たるアールヴェルツェ自身が彼女を疎んだわけではない。彼女を白眼視したのは先輩に当たる幕僚たちであった。

「小娘が何を偉そうに」
といったところであろうか。

クロノワの護衛隊長として彼女を推したアールヴェルツェの思惑としては、「世界を見て回って大人になってきなさい」といったことを考えていたのかもしれない。

「不満ですか？」

出立に当たって顔を伏せ悔しそうにしているグレイスにクロノワはそう声をかけた。彼女は数瞬の沈黙の後、問いには答えずこういった。

「殿下は嬉しそうですね」

自らの問いの回答が得られなかったことをクロノワは特に気にしなかった。

「そうですね。実際嬉しいです。ずっと旅に出てみたいと思っていましたから」

余談であるが、この当時クロノワは誰に対しても、それこそ宮廷で働いている侍女に対しても、敬語を用いて話しをしていた。三年に及ぶ修行の成果と言えるだろう。

クロノワの言葉を聞き、グレイスは彼がこの三年間迫害され続けてきたことを思い出した。クロノワはグレイスたちといるときにはそのことをおくびも出さないから忘れがちではあるが、彼の精神は圧迫され続け休まることを知らない。

（強い方だな）

グレイスは素朴にそう思った。同時にこの視察の間に刺客に襲われるかもしれない、と思った。が、すぐにその可能性は低いと思い直した。

クロノワへの迫害の急先鋒といえば皇后であるが、この人が彼を迫害する理由はただ単に「憎し」という感情的なものであって、政治的な思惑はまったくといっていいほど絡んでいない。

なぜなら、次の皇帝は彼女の子供であるレヴィナスに決まっているのだから。皇太子として既に後継者としての地位を確保している以上、「下賤な女の子供」に付け入る隙などどこにあろう。であるならばわざわざ刺客を放ってクロノワを排する必要などない。視界に入らなくなれば忘れ去るだけだ。

大した見送りもないまま彼らは出立した。そして彼が現れるのはそのおよそ三週間後であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日は一日中移動に費やして、暗くなる前に野営の準備をしているところであった。クロノワは決して快適とは言いがたい野営にも文句を言わず、むしろ積極的にその準備を手伝っている。始めはグレイスたちも恐縮していたのだが、今では慣れてしまい好きなようにやらせていた。

「やれやれ、困ったお方だ」

そうこぼす愚痴には、隠すことなく親愛の情がこもっている。

そんな時であった。不審な男が近づいてきたのは。

「よう、クロノワ、いるか？」

そういってグレイスに話しかけたのは、クロノワ殿下と同じくらいの年の男だった。身長は一七〇半ばで赤褐色のローブを羽織、右手には身長より少し長い杖を持っている。顔立ちは整っているが、取り立てて美形というわけではない。だがその瞳には無視できない輝きがある。

「貴様、殿下を呼び捨てにするなど・・・・！大体貴様は何者だ！？」

グレイスが好意的な反応を示さなかった原因は多分にして男のほうにある。が、当の本人はといえばまったく気にした様子もない。こういう図太いところは、クロノワに通じるものがあるのかもしれない。

「イスト・ヴァーレ。あいつの友達」

「友人だと・・・？貴様のような得体の知れない輩と殿下に面識があるわけが・・・・・」
「あいつがまだ辺境にいた頃に知り合ったのさ」

そういってもまだグレイスは信用しきれないように、イストと名乗ったこの男を疑いの目で見ていた。ちょうどその時、騒ぎを聞きつけたクロノワ本人がやってきた。

「イスト・・・・・！なんでここに」
「や、久しぶり」

この先、影に日向に歴史を動かしていく、友人同士の久方ぶりの再会であった。

「ホント、久しぶりだな・・・・・」

感慨深そうにクロノワは呟いた。場所は彼の天幕の中だ。二人は向かい合って晩酌を楽しんでいた。野営ということありたいしたものはないが、それでもクロノワは上等な食料を選んでこの友人をもてなした。ちなみに二人が飲んでいるお酒はイストが持ち込んだものだ。

「最後にあったのが宮廷に入った直後だったから、かれこれ3年ぶりか・・・・・」

早いのかな、とイストはクビを傾げた。そんな、常人とはちょっと異なる感性をもつ友人にクロノワは苦笑した。

「オーヴァさんはどうしている？できれば礼を言いたいのだけど」

オーヴァはイストの師匠だ。クロノワが宮廷で暮らし始め陰湿な迫害に会い始めた頃、イストとオーヴァは彼に会いに来たのだが、そこでオーヴァはクロノワに味方を作るための「策」を授けたのだ。

「感謝してもしきれないよ。あの助言のおかげで生き延びた。そう思っている」

「師匠とは別れたよ。どこかの工房に落ち着くつもりだ、といっていたけど」

「そうか、残念だな」

それからクロノワはふと思い出したように尋ねた。

「じゃあ、名も継いだのか」

「ああ、オレが今の『アバサ・ロット』だ」

おめでとう、といってクロノワは杯を掲げた。どうも、といってイストも杯を掲げる。そして二人は同時に杯の中の琥珀色の液体を飲み干した。芳醇な香りと味が広がり、喉が焼かれたように熱くなる。

それから他愛もない話をした。お互いの近況、噂話、くだらない冗談。話題は次から次へと変わり、尽きることがない。

一本目の魔法瓶（魔道具。中の液体を任意の温度に保つ）を空にして二本目を飲み始めたとき、やおらイストの口調が真剣なものになった。

「クロノワ、オレと旅に出ないか」

昔、まだ少年だった頃、そんな約束をした。

「いつか一緒に世界を回ろう」

そんな約束をイストがまだ覚えていてくれたことが、素直に嬉しい。

確かに、今ならば可能かもしれない。自分が失踪したところでこの国の政は小揺るぎもいしないだろう。心配してくれる人より、手をたたいて喜ぶ人々のほうが多い。気心の知れた友人と世界を旅する。それは甘美な誘惑だ。だが・・・・・。

「・・・・いや、やめておくよ」

答えるまでに、クロノワは数瞬の沈黙を先立たせた。

「そっか」

軽く肩をすくめてイストは杯をあおった。

「理由、聞かないのか」

クロノワの声は暗い。

「ま、な。なんとなく分かったから」

イストの声はいつもと変わらない。チーズを一切れ口に放り込み杯を傾ける。

「おまえ、満足してるだろ?そんなヤツ、どうたきつけたって無駄

さ」

自分が満足しているとイストは言った。そうだろうか、とクロノワは内心クビをかしげた。不満は多々ある。しかし、現状それはあまり気にならない。というより割り切ることができている。それを満足というのだろうか。

「だとしたらそうかもしれないな」

「ま、お前を誘いに来たのはついでだしな」

そういってイストは腕輪を取り出した。聖銀（ミスリル）製で細かい装飾が施されており、小指の爪くらいの大きさの青い結晶が埋め込まれている。

「魔道具、『ロロイヤの腕輪』。小部屋一つ分くらいの亜空間が固定されていて、まぁいろいろ放り込める」

何も入ってないけど便利だぞ、といってイストは腕輪を投げてクロノワに渡した。

「お前の道具袋と同じか？」

「オレの道具袋は空間拡張型だけど、まぁ用途としては同じだな」

イストの道具袋は師匠であるオーヴァから貰ったもので、空間拡張型魔道具「ロロイヤの道具袋」という。

ロロイヤは初代アバサ・ロットの本名で、彼は空間拡張や亜空間といった類の魔道具製作で群を抜いていた。歴代のアバサ・ロットたちが工房として使ってきた「狭間の庵」も彼が作ったものだ。この類の魔道具に「ロロイヤ」の名前を冠すのは歴代のアバサ・ロッ

トたちの一種の慣例らしい。

「これを渡すためにわざわざここまで？」

クロノワは若干呆れ気味だ。

「ああ、名を継いだからそれらしいことをしたくてな」

アバサ・ロットは自分の気に入った人物にしか魔道具を作らない。イストが「アバサ・ロット」であることを知っているクロノワに魔道具を贈るということは、それは彼がクロノワのことを昔と変わらず大切な友人だと思っているということだ。

こそばゆい。が、同時にとても嬉しい。あるいは恥ずかしさを紛らわすためにイストは酒を出したのかもしれない。

「大切にするよ」

二人だけの宴は続く。

第二話　モントルム遠征　プロローグ（後書き）

第二話は第一話よりも長くなる予定です。

誤字・脱字、ありましたら教えてください。

第二話　モントルム遠征？

大陸暦一五六三年、このところのクロノワの評価は一時期に比べかなり改善されたといえる。その理由は彼が二年前、十九才のときに行った視察の旅に由来している。

視察、といっても大半の人間の意見が一致している通り左遷であったから、真面目にやる必要などない。テキトーに国内を回り、「皇子」の肩書きに物言わせて各地で豪遊を楽しんでもよかった。

が、クロノワはそれをよしとはしなかった。視察に訪れた各地を丹念に調べ、宮廷に詳細な報告書を上げた。その簡潔明瞭でなおかつ核心を突いた文章は、名文として後世でも高い評価を得ている。

その文章を読んだ者たちは一様にして感嘆の声を漏らしたという。各地の問題を客観的かつ多角的に分析し原因を抽出、そして現状に基づき実現可能な解決策を提案している。その文章は簡潔で回りくどくなく、誤解の余地がない。

「なかなかどうして、できるお方のようだ」

アルジャークには武官だけでなく文官にも実力主義の気風が根付いている。だからといって若輩者や成り上がり者に対する反発がなくなるわけではないが、今回はそれがいい方向に働いたようだ。

少しずつ政に関わるようになったクロノワは、もともと能力があったのだろう、すぐに頭角を現した。治水事業や新たな土地の開墾、盗賊団の討伐。この二年間、彼は実に多くの経験をした。

そして今、また新たな経験を積もうとしている。戦争という経験を。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日、クロノワは宮廷の一室でアールヴェルツェと会っていた。グレイスもいる。視察が終わってから彼女の評価も上がり、アールヴェルツェの幕僚の中でも一目おかれるようになっている。

「先日、モントルム出兵の指揮を執るよう陛下から内密に命を頂きました」

「・・・・・！」

クロノワの口調はいつもと変わらない。しかしその内容は衝撃的だ。

モントルムはアルジャークの南方に位置する小国だ。アルジャークが百二十州を保有しているのに対してモントルムの国土は三十州。1つの州の大きさはまばらだが、平均すると国土面積や国力はおおよそ州の数に比例する。つまりアルジャークはモントルムの四倍ちかい国土と国力を保有していることになる。

「ではついにオムージュに出兵するわけですね」

オムージュはアルジャークの西南、モントルムの西に位置しており、その国土は七十州。オムージュの大地は肥沃で、冬の長いアルジャークからすれば魅力的な土地だ。歴史の中で両国の国境線が書き換わったことは多々あるが、オムージュとモントルムが同盟を結んでからは国境線の変更は一度もない。オムージュとモントルムの国力をあわせれば百州となる。アルジャークの兵は精強をもって知

られており、同盟を結んでも勝つことは至難だ。しかし、負けないように戦うことは十分に可能であり、現にアルジャークはこれまでオムージュとモントルムが同盟を結んでから勝ちきれたことがない。

しかし、オムージュそしてモントルムを手に入れるための戦略がここ最近、形になり始めていることをアールヴェルツェも知っていた。

「レヴィナス兄上が十四万を率いてオムージュとの国境付近に展開、オムージュ軍をひきつけます。その間に我々は六万の軍を率いモントルムを攻略、さらにオムージュの国境を脅かす。というシナリオらしいです」

「オムージュとモントルムの軍を別々に叩く、というわけですな」

１４万の大軍が国境付近に展開していれば、オムージュもそれにあわせて国境に兵を集めざるを得ない。そうしてモントルムへ援軍を出させないようにし、またオムージュ軍がアルジャークへ侵入しないようにするのだ。

「つまり、レヴィナス殿下の軍が本命というわけですか」

グレイスは面白くなさそうだ。

クロノワがモントルムを攻略すると同時に、レヴィナスがオムージュ攻略に動く。当然こちらのほうが功は大きい。グレイスはそれが面白くないのだろう。

そんな彼女に苦笑しながらクロノワは説明を続ける。

「我々の目的はモントルムだけではありません」

「どういうことですか？」

「陛下は『南を制圧せよ』と仰せになりました。恐らく、ヴェンツブルグも目的の内です」

独立都市ヴェンツブルグはモントルムの東端に位置している。宗主国はモントルムだが、独立した主権を所有している。

「不凍港が欲しい、ということですな」

アルジャークにも港は幾つかある。しかし、皆冬になると凍り付いて使い物にならなくなるのだ。年間を通して使用できる不凍港はアルジャークの悲願であるともいえる。

「陛下は大陸の東側を、そしてそれ以上をお望みなのでしょう」

そういってクロノワは目を閉じた。短い沈黙が場を支配する。

「モントルム攻略に際しては、どのように兵を動かしますか？」

話題を実務に引き戻したのはアールヴェルツェだ。

「兵は６万といいましたが、内訳はどうなっています」

大雑把な内訳は歩兵三万、騎兵三万。これに補給部隊などが加わる。魔導士部隊は今回は加わっていない。

「モントルムのダーヴェス砦までは、歩兵に足を合わせなければなりません。六万では少々きついですね」

そういってグレイスは渋い顔をした。

モントルムの常備軍はおよそ四万。北のアルジャークとの国境に一万、南の国境に一万、そして王都オルスクに二万だ。ただし、国境付近に配置されている警備郡はその地方の治安維持もかねており、

常に砦に一万の兵がいるわけではない。これ以外にオムージュとの国境境にはまとまった兵はいない。ただし、これは通常の動員令に基づくもので、戦時召集をかければそれほど無理をせずともさらに四万の兵を集めることができる。北側で二万、南側で二万だ。

一度宣戦布告がなされればモントルムはダーヴェス砦に兵を集めるだろう。まず王都から援軍として一万、そして周辺から二万の兵が集まってくる。合計で四万。

「四万の兵に堅牢を誇るダーヴェス砦にこもられると厄介ですよ」

正面からダーヴェス砦を攻め落とすならせめて倍の八万は欲しい。六万では少々厳しい。攻めきれないだろう。

「一応、策はあります。聞いてもらえますか」

そういってクロノワは自分が考えた策を二人に話した。それを聞いたアールヴェルツェは腕を組んで唸った。

「奇策、ですな。いつも使えるわけではない」

「ですが今回に限れば・・・・・」

独り言のようにグレイスは呟いた。いま彼女の頭の中では実際に兵が動いているだろう。

「あらかじめ国境付近に兵糧を準備しておけば、かなり自由に動き回れると思います」

グレイスの意見にアールヴェルツェも賛成した。

「ではその方向で準備しましょう。次は・・・・・・」

着々と、準備は進む。

第二話　モントルム遠征？（後書き）

プロローグより短いです・・・・・・。

誤字・脱字、ありましたら教えてください。

第二話　モントルム遠征？

アルジャークがモントルムに宣戦布告したのは大陸暦一五六三年六月二日のことであった。ケーヒンスブルグに駐在しているモントルム大使を宮廷に呼び出し国交断絶を通達した。モントルム大使は蒼白な顔をしたが何も言わずこれを受け大使館に帰り、魔道具「共鳴の水鏡」を用いてこの報を自国にもたらした。同日、モントルム大使館が閉鎖され、軟禁状態となる。これはモントルムのアルジャーク大使館も同様である。

余談だが、ここで用いられた魔道具「共鳴の水鏡」は通信用の魔道具である。情報を正確に素早くやり取りすることは、国家戦略上大変重要である。そのため、通信用の魔道具も数多く製作されたが、皆一様に同じ問題を抱えることとなる。つまり通信距離が長くなると魔道具自体が巨大化していくのだ。実用化できる段階になるとても持ち運びのできない大きさになってしまう。なかには家一件分の大きさのものまであったらしい。

共鳴の水鏡も一部屋分くらいの大きさがあるのだが、使用する魔力の量が比較的少なく、通信の性能が安定しているため、現在大陸中の国家で広く使用されている。（ただし設置コストがなかなかお高いため、一般にはあまり普及していない）

その共鳴の水鏡でアルジャークとの国交断絶（事実上の宣戦布告）を伝えられたモントルムの廷臣は激震し、口々にかの国を罵った。

「北の餓狼め、それほどまでに南の大地が欲しいのか！」

「野蛮人どもは北の辺境に篭っていればよいのだ」

「六万程度の軍で我々を屈服させられると思ったか。さすがに蛮族は思考が浅はかだな」

数々の暴言を感情の赴くままに放ちともかく頭を冷却した彼らは、目の前に突きつけられているアルジャーク侵攻という事態に取り組み始めた。まずは同盟国であるオムージュにこのたびのことを伝え、協力して事態にあたることを確認した。戦時召集をかけ、アルジャークに対抗するための兵力を集め始めた。

一方、レヴィナスは宣戦布告がなされるその三日前に、既に十四万の兵を率いてオムージュとの国境付近にある砦、リガ砦に向けて出立している。リガ砦はもともとオムージュが一二〇年ほど前に立てた砦なのだが、およそ五〇年前にアルジャークがこの砦を攻略して、それ以来アルジャークが使用している。ちなみにリガ砦を落とされたことでオムージュはモントルムとの同盟に踏み切ったのだ。

これに対しオムージュは既に十二万の軍を組織し、さらにモントルムに援軍を要請している。アルジャークの兵は精強をもって知られている。たとえ同数の戦力をそろえたとしても勝つどころか負けないことも難しい。まして数で劣っているとなれば事態は深刻である。それはモントルムとしても理解している。オムージュが負けてしまえばモントルムなど風前の灯である。是が非でも援軍を送り、勝てなくとも負けないようにしなければならない。が、同時にモントルムとしては、自身に降りかかる火の粉をも払わねばならない。オムージュに送る援軍を集めると同時にダーヴェス砦に兵を集めた。

ダーヴェス砦に集める兵の内訳はクロノワたちが予想したのとほぼ同じである。王都オルスクから援軍として一万、そして周辺から二万の兵を集める。合計で四万となる。これだけの兵力を集めれば、いかにアルジャークの兵が精強を誇ろうとも六万程度であればダー

ヴェス砦を死守することは十分可能である。

もちろんすぐにこれだけの兵を集めることができるわけではない。それなりに時間がかかる。砦には常に一万の兵が駐留しているわけではないが、一両日中には召集が可能だろう。王都からの援軍は歩兵が中心になるため、ダーヴェス砦に着くまでにおそらく八～十日程度かかるであろう。周辺から集まってくる兵が二万人に届くまでにはさらに時間がかかると思われる。とはいえアルジャーク軍も歩兵に足を合わせる以上、ダーヴェス砦まで十五日程度はかかるはずで、それまでには十分に間にあう。間に合うはずであった。

白金色の甲冑に身を包み、クロノワは出陣を控えていた。目を閉じ深く瞑想している。これからの戦いに思いをはせている、と普通ならば判断するべきだろう。しかし、彼が考えているのはまったく別のことであった。

「これが最後の機会、だな・・・・・」

友人と、世界を旅するための。全てを放り出し、ただ未知を求めてこの広い世界を歩く。それを想像するだけでどうしようもなく心が躍る。

評価が上がったとはいえ、陰湿で悪質ないじめがなくなったわけではない。その全てから開放は彼が願ってやまないものだ。

現状からの開放と元来の欲求。イストと共に旅に出ればその二つを満たすことができる。しかし・・・・・。

「殿下、そろそろお時間です」

グレイスの声で目を開ける。

「今、行きます」

剣を手にして立ちかがる。その足取りはしっかりとしていた。

モントルムの廷臣たちは実際に刃を交えることになるのは六月十七か十八日であろうと予測していた。しかし最初に戦火の火蓋が切って落とされたのは、彼らの予想よりも早い六月八日、モントルムの王都からダーヴェス砦に至る街道でのことであった。

第二話　モントルム遠征？（後書き）

短めです。短いのでもう一話投稿します。

誤字・脱字、教えていただけると嬉しいです。

第二話　モントルム遠征？

ダーヴェス砦はアルジャークからモントルム王都オルスクにいたる街道の国境付近に位置している。街道というのは大雑把に言えば旅をしやすいように整備されている道のことである。歩きやすいよう、荷車や馬車が通りやすいようにされている。盗賊団などによってあらされることのないように警備がなされ、一日の行程ごとに宿が用意されている。当然、軍隊を移動させるのにも街道を使うのが一番やりやすい。

モントルムの王都を出立してダーヴェス砦に向かう一万の援軍も街道を用いていた。士気は可もなく不可もなくといったところだ。いまだ戦場となるはずのダーヴェス砦からは離れているからこれは仕方がない。しかし緊張感を欠いていたと言わざるを得ない。兵士たちは編隊を乱してバラバラに歩いており、同僚とのおしゃべりに興じている者が大多数だった。

ソレが起こったのは昼前のことであった。彼方から土煙が巻き起こり、ついで甲冑を着込んだ騎兵が姿を現した。このときですら彼らは突如として姿を現したこの騎兵隊が敵軍であるとは思わなかった。

なぜならばそんなことは彼らの常識としてありえないからだ。アルジャーク軍がまず攻撃を仕掛けるのはダーヴェス砦である。砦が健在であればそこを拠点に補給線を襲うことができ、そうなればアルジャーク軍はこの先戦うことができなくなるからだ。そんなことは初歩的なことは、敵軍も重々承知しているはずで、ダーヴェス砦よりも内側にいる自分たちの前に敵軍が現れるなどありえないこと

であった。

しかし彼らの常識は次の瞬間に無残にも打ち砕かれることとなる。騎兵三万の掲げる旗がアルジャークのものだったからだ。

「アルジャーク軍！！」

「敵襲！！」

絶叫は悲鳴となり、全軍から起こった。

それから始まったものは戦闘と呼べるようなものではなく、むしろ一方的な殺戮であった。アルジャーク軍騎兵三万に対し、モントルム軍歩兵およそ一万。三倍ちかい戦力差に加え、モントルム軍は逃げるところから戦闘が始まったのだ。まともに戦えるわけがない。

最初の一撃でモントルム軍は突き崩され、もはや集団として指揮されることが不可能になった。

武器を捨て甲冑を脱いで逃げるモントルム兵にアルジャーク軍は襲い掛かった。歩兵の足ではどうあがいても騎兵からは逃げられない。血しぶきが舞い、あちらこちらから断末魔が上がる。モントルム軍は散々に追い回され、もはや軍隊として用を成さないまでに追い散らされた。

モントルム兵がバラバラの方角に逃げ去り、もはや脅威とはなりえない事を確認してから、アルジャーク軍騎兵三万は悠々とその戦場を離れたのである。

このときのモントルム側の戦死者は五千とも六千とも言われている。戦力の三割を失えば大敗といわれることを考えれば、なんとも

無残な負け方をしたといえる。一方アルジャーク側の損失はといえば、ただ一言だけが歴史書に記録されている。「軽微」と。

敗走したモントルム軍の代わりに街道をダーヴェス砦に向けて駆け上るアルジャーク軍の、その馬上でクロノワは青い顔をしながらこみ上げてくるものを必死に飲み込んでいた。

彼にとって先ほどの戦闘が初陣であった。いや、戦いを見たことがないわけではない。だが小さな小競り合いはここまで鮮烈で過酷な様相を呈することはなかった。国境沿いで戦闘が発生した際に派遣されたことは何度かあったが、それでも彼自身は後ろで控えていることが多かった。そもそもアルジャーク帝国はここ最近、大きな対外戦争をおこなっていない。だからクロノワにとってこれほどまでに大規模で生々しく凄惨な戦場は初めてで、そういう意味でこれが彼の、本当の意味での初陣であったと言える。

結局彼自身は誰一人として討ち取ることはなかったし、そもそも敵兵と剣を鳴り合わせて戦うことさえなかった。それでも眼前で展開された戦闘は十分すぎるほどに生々しく、衝撃的であった。

背中には嫌な汗が流れている。こみ上げてくるのは吐き気だけではない。寒気、不快感、罪悪感、恐怖。その全てを腹の中に押し戻す。

（逃げはしない。いや、・・・・）

逃げてはいけない。あそこで死んだ者たちの、その死の責任のおよそ半分は自分が背負うべきものなのだから。

「いかがしましたか」

アールヴェルツェがクロノワの顔をのぞき込む。

「いえ、なんでもありません。それよりも急ぎましょう。次はダーヴェス砦に周辺から集まってくる援軍を一つでも多く叩かなくては」

疾風が駆け抜ける。死をもたらす黒い甲冑の疾風が、北へ向けて疾風怒濤の字の如くに。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アルジャークからダーヴェス砦まで歩兵の足にあわせて移動していては敵の援軍が集結しきってしまう。そうなれば砦を落とすのは至難となる。

だが、騎兵だけならば？騎兵だけならば行軍速度は飛躍的に加速する。歩兵に比べれば三分の一から四分の一、ともすればそれ以下になる。これならば砦に援軍が集結する前に各個撃破を仕掛けることができる。今回、クロノワたちはそれをやった。

奇策である。兵力を分散するため通常であれば各個撃破される危険性が付きまとう。しかし今回はモントルム側も兵力を集めている最中である。砦に一万。街道から一万。周辺から集まってくるものが二万。ただし、これは全てが砦に集まれば二万ということであって、砦までは百数十から千数百の単位で砦を目指すから、いわば小魚の群れである。

つまり、アルジャーク軍騎兵三万を凌駕するような戦力はこの時点では存在しない。であるならば、十分に実行可能な作戦であるといえる。

ちなみに砦を攻めなかったのは、そのための装備を持ってこなかったからだ。それは歩兵部隊が持ってくる。

無論、問題もある。砦が健在な以上、補給線を延ばすことはできない。とすれば活動時間に大きな制約がかかることになる。とはいえ、補給物資は歩兵部隊と一緒に来るので、そのときまでもてばよい。クロノワたちはあらかじめ国境近くに補給物資を用意しておくことでこの問題に対処した。

甲冑を身にまとった黒き風が駆け抜ける。

街道からやってくる一万の援軍を完膚なきまでに叩き潰した彼らの次の目標は、周辺から集まってくる小魚である。

第二話　モントルム遠征？

結局、小魚との戦闘は片手で数えられる程度しか起こらなかった。ダーヴェス砦以南にアルジャーク軍が既に三万騎もいることを知った小魚たちは、砦に近づくこともできず、さりとて戦いを挑めるはずもなく、ただ隠れていることしかできない。アルジャーク軍としては探し出して叩いてもよかったのだが、クロノワは砦と合流さえしなければよい、といってそれをしなかった。

砦も息を潜めて動かない。否、動けない。砦の戦力は一万。アルジャーク軍騎兵三万と正面から戦って勝てるはずもない。奇襲も考えたが、歩兵が主力の砦の兵とはなにぶん足が違う。中途半端な戦力で奇襲を仕掛けても意味がないのでやるならば全軍でやることになるが、その間に砦を落とされては目も当てられぬ。

結局、動けない。そうやって日数だけが過ぎていく。援軍もやってこない。王都からやって来るはずの一万が既に壊滅していることはダーヴェス砦にも伝わっている。アルジャーク軍が睨みをきかせているので、周辺からやって来るはずの援軍は集結できない。まさに孤立無援の状態であった。

そしてついに砦の北側にアルジャーク軍の歩兵部隊三万が現れたのである。

「どうやら歩兵部隊が到着したようです」
「そうですか。思ったより早かったですね」

現在クロノワたちはダーヴェス砦の南側に街道を封鎖する形で布

陣している。歩兵部隊が到着したのであれば、南北から挟み込む形で砦を包囲することができる。

「アールヴェルツェ将軍、歩兵部隊と合流したほうがいいと思いますか」

「いえ、南側を空けると周辺から援軍が集結することが考えられます。このままにしておいたほうがよいでしょう」

そうですね、といってクロノワは砦に視線を転じた。六万の戦力が整い、しかも敵戦力が一万しかない以上、砦を攻略することはたやすい。総攻撃を仕掛ければおそらく一日で落ちるだろう。

が、気乗りしない。それを想像すると少々鬱にさえなる。

（あの街道での戦闘のせい、でしょうか・・・・・？）

そうかもしれないと思う。あのような戦い経験すれば良し悪しはともかくとして変わらずにはいられない。

「とはいえ騎馬隊の兵糧も少なくなってきています。早めにけりをつけたほうが良いでしょう」

明日にも総攻撃を、とアールヴェルツェは言った。

「降伏勧告をしてみませんか」

そういってクロノワはアールヴェルツェと視線を合わせた。一瞬、緊張が走る。

「・・・・・・・勧告をするなら今日中にすべきでしょう。回答の

期限は明日の夜明けまで。もし受け入れない場合は・・・・・」

総攻撃を仕掛けます、とはアールヴェルツェは言わなかった。しかし、もし砦が降伏を受け入れなかった場合、そうしなければいけないことはクロノワにもよく分かっていた。ダーヴェス砦を落として終わりではないのだ。

「勝てないと分かっている戦いを、わざわざする必要はないでしょう・・・・？」

砦に視線を向け、クロノワは一人そう呟いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

降伏勧告の文章はアールヴェルツェやその幕僚たちの意見を聞きつつ、クロノワ自身が書いた。かつて彼が視察先から送った報告書がみな名文だったことも関係しているのだろう。

彼が書いた降伏勧告文の要点をまとめると以下のようになる。

一つ、アルジャーク軍は三万ずつ南北に展開している。

二つ、王都オルスクからの援軍は、すでにこれをアルジャーク軍が壊滅させており、ダーヴェス砦にやってくることはない。

三つ、周辺からやってくる援軍も騎兵三万が砦の南側にいる以上、集結することはできない。

四つ、である以上砦の戦力一万のみでアルジャーク軍六万と戦わなければならず、モントルム軍に勝ち目はない。

五つ、当方は無用な流血を好まず、降伏を受け入れるならば一兵たりとも死なせないことを誓う。

六つ、回答の期限は明日の夜明けまで。

七つ、回答がない場合、総攻撃を仕掛ける。

これらのことが無駄な装飾を一切用いず、要点のみが述べられている。それが一層彼らの自信を表しているようであった。

さらにクロノワは策略家としての一面ものぞかせた。勧告文の内容を砦の兵たちにもわかるように情報を流したのである。ダーヴェス砦の将ウォルト・ガバリエリは忠臣で、たとえ勝てないとわかっている戦いでも、それでも戦うのが忠義の道だと思っている。しかし下々の兵はそうではない。彼らにしてみれば勝てないとわかりきっている戦いで命を落とすなど、愚の骨頂であった。

兵たちは降伏を受け入れるよう徒党を組んでウォルトに直訴した。いや、直訴という言葉では穏当すぎる。脅迫したといったほうがよい。なにしろ槍を持ち出し剣の柄に手をかけていたのだ。

「降伏を受け入れないのであれば、貴方の首を取ってでも・・・・・！」

と彼らは迫った。

ウォルトは死を恐れるような人物ではなかったが、兵士たちの心がもはや降伏に傾いていることを知ると、ついに心が折れた。これでは時間稼ぎもできないと思ったのだろう。

ウォルトは共鳴の水鏡を使って王都に降伏する旨を伝えると白旗を掲げさせた。このときウォルトは自決するつもりであったが部下の一人が止めた。

「差し出がましいようですが、閣下のお命は砦の兵士たちのためにお使いください」

「なるほど。生贄には将たるワシがふさわしい、ということか」

アルジャークが責任者の命を求めるかもしれない。死ぬならばそのときに、ということである。申し訳ありません、とうな垂れる部下の肩を彼はポンポンと叩いて慰めた。

ダーヴェス砦は戦わずして降伏した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ダーヴェス砦に入ったクロノワは約束どおり、ただの一滴も血を流さなかった。砦の兵たちは武装解除させて砦から去らせた。一万人の捕虜を収容しておく場所も養うための食料もないのだ。ただしウォルト・ガバリエリ以下幕僚たちは地下牢に押し込めてある。扇の要となる存在を自由にしておくわけにはいかないからだ。

余談ではあるがウォルト・ガバリエリはこの先モントルムがアルジャーク領となってからもダーヴェス砦を任された。もっとも国境警備の砦ではなくなったので兵員は大幅に減らされている。彼は栄達の機会が何度かあったがその全てを断り、終生この砦を預かって過ごした。地域住民からの評判もよく、彼の葬儀には献花の列が絶えなかったという。

第二話　モントルム遠征？

レヴィナスがリガ砦に着いたのは六月十五日のことであった。幾分ゆっくりと軍を進めているようだが、補給部隊に足を合わせているのでこれは仕方がない。それにクロノワがモントルムのダーヴェス砦を攻略してからオムージュに進攻するというのが元々の計画であった。

もっともレヴィナスとしては腹違いの弟にそれほど期待してはいない。たとえクロノワがダーヴェス砦を落とせず、モントルムからの援軍がオムージュ軍と合流して数の上で凌駕されたとしても勝てる、とごく自然に考えていた。

オムージュに対して宣戦布告するのは予定では六月二十日である。ただ既にこうしてアルジャーク軍が国境の砦であるリガ砦に兵を集めている以上、オムージュ側もそれに対抗すべく兵を集めているはずだ。モントルムに援軍の要請もしているだろう。

オムージュ方面軍の司令官は皇太子であるレヴィナスであるが、実質的に軍を動かすのはアレクセイ・ガンドール将軍である。

壮年を超えようかという年齢だが未だその眼光は衰えを知らぬ。常勝無敗を誇り、その輝かしい軍歴はモントルム方面軍を実質的に動かしているアールヴェルツェをも凌ぐといわれている。まさにアルジャーク軍にとって至宝とも言うべき武将である。

彼は今、これから進攻するオムージュの大地をリガ砦から遠望していた。どうその大地を切り取るかを考えていると思ったのだろう、部下たちは気を利かせて話しかけてこない。が、彼が考えていたの

はまったく別のことであった。

（思いのほか思慮のある方であった）

今回の遠征に当たって彼が頭を悩ませていたのは戦略戦術のことではない。形式上とはいえ彼の上に立つことになる皇太子レヴィナスのことであった。

（いかに皇太子とはいえ行軍中に優雅だの風雅だの美だのいわれてはかなわんからな）

レヴィナスの「美しさ」に対する執着はアルジャークの万人の知るところである。今回彼が身に付けている甲冑や剣は全てレヴィナス自信が指示を出しながら製作された特注品で、凝った意匠の装飾が施されている。

（おそらくバカバカしいくらいの費用がかかっておるのだろう・・・・）

骨の髄まで武人であるアレクセイとしてはため息もつきたくなる。とはいえそうして作られた戦装束をまとったレヴィナスは神々しいほどに輝いていた。将として常に冷静でいることを心がけているアレクセイさえもが、

「英雄とはこういうものか」

とつい思ってしまったほどである。兵たちの間で信仰じみた人気が生まれたもの、頷けるというものだ。

（いや、あの甲冑はよいのだ）

レヴィナスはいわば象徴であって実際に剣を振るい戦うわけではない。であるならば兵たちの士気と結束を高めるために、着飾ることももむしろ必要であるといえる。

だから、アレクセイが心配していたのはそんなことではない。

レヴィナスの「美しさ」に対する執着は彼の手の届く範囲全てに及ぶ。普段着る衣服から身の回りの調度品。特に彼の住まう宮殿の一角は別世界かと思われるほどに他とは雰囲気が異なる。神々しく神秘的で荘厳。褒め称える言葉が陳腐に聞こえるほど、すばらしく整えられている。

それはいい。問題はそれを行軍中にされることである。

彼のこだわりのために「兵士の甲冑をかえろ」だの「この行軍は美しくない」だのアレクセイにはまったく理解できないことを口走り、軍の運用に支障をきたすことを恐れたのだ。さらにいえば数日滞在することになるリガ砦とりでについても、「こんな汚いところにはいられない」などと駄々をこねるのではないかと心配していた。

もっとも、この心配はアレクセイの杞憂に終わった。レヴィナスは軍や砦が戦争のために存在しており、それに自分が求める「美」を要求するのはむしろ滑稽であると十分に理解していた。もっとも自らの使用する物品については品のよい一級品を用いていたが。

（この様子であればこの先の遠征も心配あるまい）

それでもアレクセイの胸には一抹の不安が残る。

もし、レヴィナスの手の届く範囲が劇的に拡大したら、それこそ一国の規模で自由にできるようになったら・・・・・・。

（殿下はどのような執政をしかれるのだろうか・・・・・・？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

前にも述べたが、アルジャークがモントルムに国交断絶を突きつけ、事実上の宣戦布告をしてから、ケーヒンスブルグのモントルム大使館は閉鎖され大使以下職員は軟禁状態となっている。そしてそれはモントルム王都オルスクにあるアルジャーク大使館においても同様であった。

「暇ですねぇ・・・・・・」

ストラトス・シュメイルはそういってもう何度目かわからないため息をついた。大使館が閉鎖され軟禁状態になってから既に十日近くが経つ。なかなか時間がなくて読めなかった本を読んだりして時間をつぶしてはいたのだが、いかんせん暇すぎる。

「まったく、何でこんなに暇なのでしょう？」

ストラトス・シュメイル、二十四歳。若輩ながら大使として外交の最前線に立つ秀才である。が、やる気を見せたがらない性格のためか、あるいは若輩者へのやっかみか、彼が赴任したのはアルジャークにとって格下の小国であるモントルムであった。

仕事に熱心な性質（たち）ではない。少なくともそう見せている。

窓から外を眺めると完全武装したモントルム兵が何人も大使館の

周りを歩いている。決して狭くない大使館の四方全てを鼠一匹逃がさぬように固めているのだから頭が下がる。物々しい厳戒態勢だ。

「腕力のない文民相手にご苦労なことです」

とはいえ、やはりいい気はしないのだろう。言葉に軽い毒が混じる。

「大使、なにを暢気なことを言っているのです・・・・・。いつ殺されるかもわからないというのに・・・・・」

オロオロしながらストラトスの執務室に入ってきたのは彼の書記官である。優秀な男なのだが少々気が小さい。

「大使、戦況はどうなっているのでしょう・・・・?もしアルジャークが負けでもしたら我々は・・・・・」

「さて、書記官殿もご存知の通り外の情報はまったく入ってきませんからねぇ・・・・」

今にも泣きそうな書記官に対しストラトスの口調は他人事のようで真剣みに欠けた。

「大使!」

書記官が非難の声を上げるのを彼は聞き流す。いつものことだ。この大使館に留まっている者たちは多かれ少なかれ同じ不安を抱いている。頭でいくら理性的に考えてみても、やはり感情に引きずられる。

そんな中、ストラトスはどこまでも他人事のようにそしらぬ顔を

している。不安は多少なりともあるが、周りがあまりにも取り乱すので逆に落ち着いてしまったともいえる。まぁ、もともと飄々と構えていたがる男ではあったが。

それに自分たちが殺されることはまずないだろうとも思っていた。アルジャーク軍が勝てばストラトスたちは戦勝国の人間ということになる。そんな人間を殺してアルジャークの心象を悪くする愚を冒すとは思えない。

負けたとしてもその確信は変わらない。モントルムに逆侵攻をかける余力があるとは思えないから後は外交処理となるだろう。となれば自分がそれに関わる可能性は高い。とはいえ・・・・・

「負ければこの国での仕事はやりにくくなるでしょうし、勝って併合されてしまえばそもそも大使館をおく必要がなくなりますし・・・・」

どちらにしても私にとっては嫌な未来予想図ですねぇ、とどこまでも他人事に考えるストラトスであった。

第二話　モントルム遠征？（後書き）

誤字・脱字、教えていただけるとうれしいです。

第二話　モントルム遠征？

ダーヴェス砦降伏の報はモントルムの王宮を激震させた。廷臣たちは慌てふためき、意味もなく右往左往した。

「なんと言うことだ・・・・・。ダーヴェス砦がこうも簡単に落とされるとは・・・・・」

彼らの戦略を一言でいえば「負けないこと」であった。勝つ必要はない。砦に兵を集めアルジャーク軍を足止めし、その間にオムージュに援軍を送る。オムージュに侵攻する本隊さえ押し返せば、モントルム側に来ている敵軍も連鎖的に撤退するはずであった。

それがこうも簡単に砦を落とされてしまった。王都までの間には兵を配置し敵を防ぐための城郭は存在しない。仮に戦うとすれば野戦となる。

今現在、モントルムは少々無理をして五万の兵を王都に集めている。これは元々オムージュに援軍として送るつもりだったのだが、ダーヴェス砦をアルジャーク軍に落とされ議論が割れてしまった。

今、モントルムの王宮には三つの主張がある。

一、最初の思惑通りオムージュに援軍を送る。
二、アルジャーク軍に対して野戦を仕掛ける。
三、降伏する。

どの案もモントルムにとっては苦渋の選択となる。オムージュに援軍を送れば王都が空になり進攻してくるアルジャーク軍に落とさ

れてしまう。かといって野戦を仕掛けても勝てる見込みはほとんどない。それに援軍を送らなければオムージュが負けてしまい、それはモントルムも滅ぶことを意味している。かといって降伏すれば全てが終わってしまう。

議論は白熱しそして一向にまとまらない。時間だけが無為に過ぎていった。

事態が動いたのはダーヴェス砦が降伏してから二日後のことであった。モントルム方面進攻軍司令官クロノワ・アルジャークから共鳴の水鏡を用いて通信が入ったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お初にお目にかかります。この度アルジャーク軍の司令官を務めているクロノワ・アルジャークです」

「モントルム王、ラーゴスタ・モントルムである」

共鳴の水鏡を用いてではあるが、二人の始めての対談は上のような差障りのない挨拶から始まった。

「ご存知のことと思いますが、ダーヴェス砦は既に我が軍の手に落ちています。この先、王都までの間に我々を防ぐための城郭はモントルムにはありません」

「承知している」

圧倒的に不利な情勢にあるにもかかわらず、ラーゴスタはそれをおくびもださぬ。泰然と言った。このあたりさすが一国の王と言うべきであろう。

「単刀直入に言います。降伏しませんか？」
「・・・・・・・」
ラーゴスタはなにも言わなかった。それを気にするでもなく、クロノワは続ける。
「オムージュに援軍を送ってしまえば王都ががら空きになります。かといって我々に野戦を挑んでもモントルムに勝つ見込みはほとんどない。そもそも援軍を送らなければオムージュ軍は負けるでしょうしね。とすれば残る道は降伏のみだと思いますが？モントルム王陛下」
クロノワの言っていることに間違いはない。が、言葉の端々に勝者の余裕とでも言うべきものが感じられ、それがラーゴスタの癇に障った。
（小僧が・・・・・）
苦々しく胸のうちで呟く。無論、表には微塵も出さない。
「降伏、ですか。無論そういう選択肢もある。しかしそう軽々しく選んでよいものでもない」
「すでに出ている答えを無視するのは賢明とはいえません」
「さて、我々としても意見をまとめている最中。今しばらくお時間を頂きたい」
「英断を期待しています」
そういって通信は終了した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「世間知らずの小僧が。既に勝った気でおるらしい」

通信が終わるとモントルム王ラーゴスタ・モントルムはそう苦々しく吐き捨てた。あんな小僧にしてやられたのかと思うと本当に腹立たしい。

「陛下、いかがなさるのですか・・・・・？」

廷臣の一人が恐る恐る声をかける。ラーゴスタは目を閉じ一つ息をついた。目を開けたときにはすでに落ち着いている。

「主だったものを集めよ。今後の方針を決めるぞ」

「もしや本当に降伏なさるのですか？」

ニヤリ、と笑ってラーゴスタはその考えを否定した。

「愚か者に、政のしたたかさを教えてやるのだ」

会議室に集まった主だった面々に対してラーゴスタはまずこういった。

「降伏はしない」

といった。

さらに、軍をどう動かすかについては、

「五万の兵を集め、オムージュに援軍として送る」

オムージュに援軍を送りアルジャーク軍を押し返し、その戦力を持ってモントルムを回復する。結局一縷の望みを託すならそうするしかないのだ。

五万の援軍を送ることができればオムージュ・モントルム連合軍の兵力は十七万となり、数の上ではアルジャーク軍十四万を上回ることができる。しかしそれでも負けないかどうか微妙なところである。それほどまでにアルジャークの兵は強い。

「しかし、ダーヴェス砦のアルジャーク軍がどう動くか・・・・・・」

それが問題だった。五万の兵を整えるにはまだ時間がかかる。その間に今ダーヴェス砦にいるであろう六万の敵軍に動かれてしまうと援軍を送るに送れなくなってしまう。そうなれば滅亡あるのみだ。

「そこで、共鳴の水鏡を用いて奴らと交渉を行う。降伏を前提にすれば乗ってくるだろう」

ラーゴスタは自信をのぞかせてそういった。

しかし会議室に集まった面々は懐疑的だ。

「共鳴の水鏡で降伏交渉を行うなど、聞いたことがありませぬ」

このような交渉であるならば、本来は双方の代表者が条件を書面にしたためて交換し合い、さらに直接言葉を交わして条件をすり合わせていく、というのが本来のやり方だ。そうでなければ合意文章を作成することができないのだから。

「もとより奴らのほうから共鳴の水鏡を用いて降伏を勧めてきたのだ。問題あるまい」

それこそが、ラーゴスタがクロノワを若輩者の世間知らずと侮っ

たもっとも大きな要因なのだ。

「しかし、交渉が早くまとまってしまったらいかがいたします？」

「とぼければよい」

事もなさげにラーゴスタは臣下の問いに答えた。

もともと共鳴の水鏡を用いて交渉を行うということ事態が非常識なのだ。それに交渉がまとまったとしても当然合意文章など存在しない。ならばとぼけることは十分に可能だ、とラーゴスタは考えたのだ。

彼が考えた作戦を要約するとこのようになる。

つまり、一方では降伏を前提とした交渉で時間を稼ぎ、他方では援軍を整えオムージュへ向かわせるのである。しかも降伏交渉がまとまっても合意文章がないのを盾にとぼけて知らぬ存ぜぬで通す。

詐術のような作戦である。しかしモントルムが生き残るにはそれしかないように思われた。ラーゴスタがさらに意見を求めると一人の臣下が立ち上がった。

「オムージュへの援軍としては親征となさるのがよろしいでしょう」

つまりはラーゴスタ自身が総司令官として軍を率いるということだ。

ラーゴスタは黙って先を促した。

「援軍を送ればそれはアルジャーク軍も知るところとなります」

そうなれば彼らは王都オルスクを目指して進軍してくるだろう。

そのときには王都には戦力と呼べるものはなく、降伏するほかない。

そのときラーゴスタがアルジャークに捕らえられてはもともこもない。

「ですか陛下がご健在ならば、オムージュよりアルジャーク軍を追い返した後、モントルムを回復するのが容易になりましょう」

軍を催すにしてもラーゴスタが先頭に立てば兵の士気が上がるだろう。あるいはオムージュに亡命政権を立てて民衆に決起を呼びかけてもよい。彼さえ無事ならばとるべき手段は幾らでもある。

ラーゴスタは機嫌よく頷くとその案を採用した。

「アルジャークの小僧が。目に物見せてくれようぞ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・といったあたりで向こうの議論は落ち着いているところでしょうかね」

そういってクロノワは今モントルムの王宮でなされている会議の内容をほぼ正確に言い当てて見せた。

「それよりも、グレイスにはまた貧乏くじを引かせてしまいましたね。申し訳ないです」

そうクロノワに言われ、ダーヴェス砦の居残り組みを指揮することとなったグレイスは笑った。

「いえ、そんなことはないですよ。殿下の悪巧みがうまくいくか興味もありますし」

「悪巧み、ですか。なるほど、言いえて妙ですね」

グレイスの評価にクロノワも笑った。そして窓の外に視線を転じる。砦から王都に通じる街道が見えた。

「アールヴェルツェ、よろしくたのみましたよ・・・・・」

次の日、共鳴の水鏡に通信が王宮から入った。相手はまさに官僚といった感じの男で外務次官と名乗り、和平交渉を行いたいと申し込んできた。この交渉に関しては全権を委任された大使であるという。

「降伏」という言葉を使わなかったのは国の全てをくれてやるつもりはないという意思表示で、裏を返せば条件を渋って交渉を長引かせようという腹なのだろう。

「ご英断ですね。これで双方共に無駄な血を流さずに済みます」

「ええ、ラーゴスタ陛下も同じように仰せでした」

「最初に言っておきますが、我々としては長々と交渉を行うつもりはありませんので」

「承知しております」

そういわれても外務次官の仕事はこの交渉をできるだけ長引かせて時間を稼ぐことだろう、と既にクロノワはあたりを付けている。そしてそれは彼にとっても好都合なことだ。それでも「交渉を長引かせるつもりがない」と警告しておいたのは、一応の保険と今後の布石だ。

（さて、口先八丁でどこまで時間を稼ぐのでしょうね・・・・・）

クロノワとしてもこのような交渉の席に着くのは初めてだ。茶番劇とはいえそれなりに本気でやってくれるだろう。是非とも今後のために経験値を稼がせてもらおうと思う。この先彼が公人として活動するにはそれがきっと必要になってくるのだから。

「それでは早速交渉に移るとしましょう。モントルム側の条件を聞かせていただけますか」

「国土より三州をアルジャークに割譲します。それで軍を引いていただきたい」

三州とはいえ、彼らにとっては国土の十分の一である。それなりに、それらしい条件を用意してきたらしい。

「三州、ですか。ちなみにどこでしょう」

大使が地名を挙げる。

「わが国と国境を接していないばかりか、三州それぞれも飛び地ではありませんか。これでは頂いても困るばかりです」

「ですが提示しました三州はどれもモントルムでは肥沃な土地ばかり。必ずや気に入っていただけるものと自負しております」

クロノワは一つ頷くと、今度はアルジャーク側の条件を提示した。

「モントルムの保有する領地のうち北側十五州をアルジャークに割譲し、さらに今回の遠征の戦費を全額モントルム側が負担する」

クロノワの提示した条件にモントルム大使は少なからず動揺した

ようだ。

「そ、それは無茶というものでしょう」

「ですがここで和平が成らなければモントルムとしては最悪の結果になってしまいますよ？ならばたとえ国土が半減しようとも国家を存続させることを最優先させるべきではないでしょうか」

大使は顔を歪め、葛藤を表現した。

（あれが演技だとしたら大層な役者ですね・・・・・。なぜ役人なんてやっているのでしょう・・・・・？）

役者になればいいのに、とクロノワは目の前の男のした職業選択に身勝手な文句を付けた。

数泊の沈黙の後、大使が口を開いた。

「・・・・提示いただいた条件は当方が考えていたものよりも重大です。今しばらく考えるお時間を頂きたい・・・・・」

搾り出すようにしていう。しかしクロノワは騙されない。

（うまく時間が稼げると腹の中では笑っているのでしょうね・・・・・）

が、それは元々織り込み済み。

「わかりました。賢い決断を期待しています」

こうして交渉初日は終わった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最初の交渉から既に数日が経過している。

「交渉にまったく進展が見られませんね。いえ、最初から予想済みのことですが・・・・・」

そう言いながらもグレイスは不満げだ。軍人である彼女からしてみればこういう時間稼ぎは気に入らないどころか唾棄すべきものなのだろう。

「あちらはきっと喜んでいるのでしょうね・・・・・」

思いのほか時間が稼げて、とクロノワは皮肉っぽく言った。グレイスの言ったとおりこの展開は予想済みのものだが、それでも遅々として進まない交渉をだらだらと続けるのは疲れるばかりでまったく報われない。さすがのクロノワもストレスがたまり始めている。

すでにオムージュへの宣戦布告がなされているはずだ。モントルムには「援軍を早く送れ」と矢の催促がされているはずだ。

「とはいえアールヴェルツェがそろそろ着く頃ですね。あとはあちらに任せるとしましょうか」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

モントルム国王ラーゴスタはほくそ笑んだ。全ては彼の思惑通りだった。

「そうかそうか。アルジャークの小僧め、イラついてきおったか」

「はい。さすがに怒鳴りはしませんでしたが苛立ちは隠せない様子でした」

和平交渉はまったくといって良いほど進んでいない。それはアルジャークにとっては無為に時間を浪費したことを意味し、またモントルムにとっては援軍を整えるための時間を稼いだことを意味している。

「オムージュに送る援軍はどうなっておる」
「は、近いうちに準備は完了します」

オムージュからは「早く援軍を送ってくれ」と連日催促されている。そしていわれるまでも無くラーゴスタはそのつもりであった。決戦に遅れてしまっては、愚か者として歴史に名を残すことになる。

（それはアルジャークの小僧だけでよい）

自分はこの危機からモントルムを救った英雄として歴史に名を残そう。そうなるであろうはずの未来を思い描いて、ラーゴスタはもう一度ほくそ笑んだ。

第二話　モントルム遠征？

オムージュへの援軍がモントルムの王都オルスクを出立したその日は、まるで彼らの出陣を祝うかのような快晴であった。かねてからの計画通り、この援軍五万はラーゴスタ自身が率いており、親征である。

馬上でラーゴスタは上機嫌だった。全て彼の計画通りにことが運んでいる。最後の大仕事はオムージュ軍と共にアルジャーク軍十四万を撃退することであるが、それも勝利が約束されたかのような気分である。

（アルジャークの小僧の悔しがる姿が目に浮かぶようだ。己の不明を恨むがよい）

しかし彼こそが己の不明を恨むことになるのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日の夜は新月であった。雲は少なく無数の星が輝いているがみえるが、やはり暗い。そのせいか野営の陣のあちこちで燃やしている焚き火がやたらと目立った。

（月明かりがあればもう少し進めたのだがな・・・・・）

オムージュへの援軍は早ければ早いほど良い。夜を徹して進みたい気持ちもあったが、この暗がりを進むのは危険だ。

（まぁ、疲れ果てた兵を連れて行っても役に立たぬしな・・・・・）

そう考えることで自分を納得させ、ラーゴスタは杯をあおった。中身はモントルムの誇る白ワインだ。行軍の初日ではあるが、うまくアルジャークの小僧を出し抜き気分を良くしたラーゴスタは早速一本目を開けたのだった。

程なくして軽く酔いが回り始めたラーゴスタはそのまま天幕の中に横になった。今アルジャーク軍はダーヴェス砦にいる。敵襲の心配は無い。全ては計画通りである。

いい夢が見られそうであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ここから西におよそ五キロのところに篝火が多数認められました。恐らくはモントルム軍の野営かと」

アールヴェルツェは斥候の報告を聞くと一つ頷いた。そして全軍に出陣を指示した。

「よいか、音を立てるな。馬にはくつわをかけて嘶きをたてさせるな。兵は葉を口に挟んで落とすな」

夜陰に紛れアルジャーク軍が動く。ダーヴェス砦にいるはずの六万の軍隊が。

残念ながらラーゴスタの安眠は朝まで続かなかった。あるいは永眠とならなかったことを感謝すべきなのかもしれない。

鳴り響く銅鑼の音で彼は飛び起きた。

「敵襲!!」

見張りの兵が狂ったように叫び、同僚たちを必死にたたき起こしている。

一瞬、ラーゴスタの思考は停止した。敵襲?誰が我々に夜襲を仕掛けるというのか?いや誰が仕掛けられるというのか?

「アルジャーク軍襲来!」

彼は疑問の答えを兵士の悲鳴によって得た。

「くっ・・・・・」

背中に氷刃を差し込まれたような悪寒が走る。だがそれによってラーゴスタは冷静さを無理やりにではあるが取り戻した。甲冑を身に付けることもせず、彼は天幕から飛び出した。

「陣を整えよ!敵を防ぐのだ!」

だが、アルジャーク軍は速かった。いや、モントルム軍がアルジャーク軍の接近に気づくのに遅れ、距離が縮まったのだ。それは新月だったことが要因の一つだし、アルジャーク軍を率いているアールヴェルツェが音を立てないよう、細心の注意を払ったからでもある。

満足な陣容を整えることができないまま、モントルム軍はアルジャーク軍と交戦状態には入ったのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ラーゴスタの計画は、共鳴の水鏡を用いた和平交渉で時間を稼ぎ、その間に援軍を整えオムージュに向かう、というものであった。仮に交渉がまとまっても合意文章が無いことを盾に白を切るつもりであった。

が、クロノワはそれを予想していた。いや、そういう風に誘導したといってもいい。

モントルムが生き残るにはどうしてもオムージュに援軍を送る必要がある。だがそれにはダーヴェス砦に入っている六万のアルジャーク軍が邪魔になる。この軍に動き回られると援軍を送るに送れなくなるのだ。

ゆえに、是が非でも足止めをしなければならない。

一方、クロノワたちにとって一番困るのはモントルム軍が王都オルスクに立て篭もってしまうことだ。王都を戦場にしてしまえば必ずや住民との間に軋轢が残る。それは今後の統治にしこりを残すことになるため、可能な限り避けたい。

かといって手をこまねいていては、レヴィナスの率いる十四万の軍が先にオムージュを制圧してしまう。

そうなると、援軍を送らせないという点では成功していても、クロノワの功績は小さく見られてしまうだろう。いや、クロノワ一人の話ならばそれでも良い。だがアールヴェルツェやグレイス達も同じように見られてしまうだろう。それはクロノワにとって望むもの

ではない。

とすれば、どうにかしてモントルム軍をオルスクから引きずりださねばならない。

そこでクロノワが使ったエサが「共鳴の水鏡を使った交渉」であった。

本来の交渉で共鳴の水鏡を使わないことくらいクロノワとて知っている。それでもあえて用いることでアルジャーク軍はダーヴェス砦にいると相手に思い込ませたのだ。

こちらから「降伏しないか」と持ちかけた以上、モントルム側は和平交渉を申し込めば必ず乗ってくると判断したはずだ。それに共鳴の水鏡を使ったことでラーゴスタがクロノワのことを青二才の愚か者と誤解したのも、アルジャーク側にはプラスに働いた。まぁ、この時点では知らないことだが。

ダーヴェス砦にクロノワと共に残ったのは、当初戦力として数えていなかった補給部隊で、いわば弱兵である。これをグレイスが率いていた。

そしてアールヴェルツェはほぼ無傷の本隊六万を率いて王都オルスクへと向かっていた。当然そこから出立する援軍を野戦で叩くためである。

とはいえ六万の軍が移動しているのに気づかなかったのだろうか？それには三つ理由がある。

第一にモントルム側の消極的な思い込みである。

国王ラーゴスタをはじめとして廷臣たちは、アルジャーク軍はダ

ーヴェス砦にいると思い込んでいた。もちろんそれらしい情報は入っていたが、彼らはそれを斥候かなにかぐらいにしか考えなかったのである。クロノワによって思考をそう誘導されていたとはいえ、柔軟性を欠いていたといえる。

第二にダーヴェス砦にモントルムの詳細な地図があったことが挙げられる。

その地図を手に入れたことでアールヴェルツェはなるべく人目に付かないルートを選びながら移動することができたのだ。これは幸運というよりは砦を預かっていたウォルト・ガバリエリの不手際だろう。いかに配下の兵士たちに押し切られたとはいえ、こういった重要な書類は廃棄しておいて然るべきだったろうに。

あるいはこの事を悔やんで彼はこの後の栄達一切を拒んだのかもしれない。

第三にアールヴェルツェの行軍の仕方である。

彼は移動に際し周辺に斥候を放ち周到に情報を集め、なるべく人目を避けて王都オルスクを目指したのである。

これらの理由が重なり合い、王都オルスクにいるモントルムの首脳部はアルジャーク軍の接近を感知できなかったのである。

陣容をまともに整える時間が無かったモントルム軍は最初の接触でアルジャーク軍騎兵隊の突入を許してしまった。

アールヴェルツェが直接指揮している騎兵三万はまるで一つの生き物のようにモントルム軍の陣内を縦横無尽に動き回った。かと思えば数千の単位に分かれて敵軍を翻弄したり、分断したりしていった。

このときの状況について騎兵を率いていたアールヴェルツェ・ハーストレイトは後にこう語っている。

「とても暗く、人がいることくらいしか分からなかった。当然敵味方の区別など付かない。モントルム軍は歩兵が主体になっていたから騎兵には『指示があるまで歩兵は全て敵だと思え』といい、味方の歩兵には『騎兵には近づくな』と指示した」

同士討ちが起こったかどうかは記録されていない。

追い散らされるモントルム兵にアルジャークの騎兵は容赦なく戦斧を振り下ろし、槍を突き刺した。視界が赤いのは炎が広がったからか、舞い上がる血しぶきがそう見せるのか。騎兵が通り過ぎた跡にはただ死が残った。

分裂と集合を繰り返しながら戦場を駆け巡る騎兵。ここまで自由自在に動き回る騎兵は大陸広しといえどもアルジャークにしかいないであろう。その練度たるや他国の騎兵とは太い一線を画している。

モントルム王ラーゴスタはそのことを最悪の形で思い知らされたのであった。とはいえ、彼とて自軍が崩壊していく様を座して眺めていただけではない。

「騎兵の足を止めろ！とめてしまえば的でしかないぞ！」

無論、モントルムの兵士たちはそれを実行しようとした。が、そのつどアルジャーク軍の歩兵部隊に邪魔をされた。騎兵隊の側面を突こうとすれば長槍を持ったアルジャークの兵士たちがそれを阻んだ。兵をまとめようとすれば矢の雨が降り注ぎ、集結することなく散らされた。

アルジャークの歩兵はそうやって騎兵が動き回れるようサポートに徹した。

モントルム軍が崩壊するのにそれほど時間はかからなかった。もとより新月の夜である。一度暗がりに紛れてしまえば逃げるのはそれほど難しくは無い。一人またひとりと武器を捨て甲冑を脱ぎ捨て夜陰の向こうへと逃げていった。

歩兵部隊と合流したアールヴェルツェのもとに一人の男が引き出された。身に付けている甲冑はきらびやかで、身分の高いことを示している。

「モントルム国王、ラーゴスタ陛下とお見受けする」

「・・・・これが一国の王に対する扱いか！」

アールヴェルツェは非礼を認めると彼を拘束していた兵士に下がるよう指示した。兵士たちは短く返事をしてラーゴスタを放したがすぐ後ろに立って睨みを利かせている。不審な行動をすればすぐに取り押さえるためだ。

「なぜ・・・・貴軍がここにいる・・・・・。ダーヴェス砦にいるのではなかったのか」

「そう思わせるのがクロノワ殿下の策です」

アールヴェルツェからクロノワの策略のあらまわしを聞くと、ラーゴスタはうなだれた。

和平交渉中に兵を動かすとは何事か、と非難することもできない。完全にお互い様だからだ。いや、そもそも和平交渉など行っていないと突っぱねられるだろう。ラーゴスタ自身が最初に目を付けたと

おり、共鳴の水鏡を用いて交渉を行うなど通常はありえないのだから。

クロノワはそれさえも計算に入れていたに違いない。

余談ではあるが、このモントルム攻略の一連の采配を通して世間はクロノワに対し「策略家」というイメージを抱くようになる。それさえも彼は利用していくのだが、それはまた別の話だ。

「世間知らずの青二才と侮り、策に乗せられたのは我であったか・・・・」

こうしてラーゴスタは己が不明を悔やむこととなったのである。

モントルムは陥落した。

第二話　モントルム遠征？

時間は少し遡る。

アルジャークがモントルムに国交断絶を突きつけ、事実上の宣戦布告を行ったとき、その報はモントルム経由で同盟国であるオムージュにも届けられた。

アルジャークの真の目的がオムージュであり、モントルム侵攻はその布石であると誰もが理解していた。

とはいえこの時点では、オムージュの王都ベルーカに揃った廷臣たちは状況をまだ楽観視していた。

モントルムに侵攻したアルジャーク軍は六万。これならばダーヴェス砦に四万の兵を集めれば十分に足止めが可能である。その間に援軍を送ってもらえばオムージュに侵攻してくるアルジャーク軍の本隊を追い返すことができるであろう。

それがダーヴェス砦はあっさりと陥落してしまった。それはモントルムがオムージュに対して援軍を送れない可能性が跳ね上がったことを意味している。

王都ベルーカの城中は、この事態の急変に際しにわかに騒がしくなった。

「かりに援軍が来なかったとして、我が軍はアルジャークに勝てるのか・・・・？」

「バカな。ただでさえオムージュの兵はアルジャーク兵に劣るのだ。

同数でも勝つのは至難だぞ」

「宣戦布告と同時に和平交渉を行ってはどうか。十州もくれてやればアルジャークも矛を収めるのではないか」

「そしてまた別の機会に、その無傷の矛を突き立ててくるでしょうな」

そう冷静に言い放ったのはオムージュの将軍エルグ・コークスであった。武人らしいその簡潔な物言いに一同は黙った。

彼らとて分かっているのだ。ここでオムージュがなにもしなければ遠からずモントルムはアルジャークに併合されるだろう。さらに和平のために十州を割譲したとすればアルジャークの国力は百六十州となる。そうなれば国力を六十州に減らしたオムージュに抗する手段など無い。

「それに奴らが望んでいるのはこのオムージュの大地全て。十州で和平に応じるとは思えませんな。援軍が来ないのならなおのことです」

あまりの正論に反論が出ない。

「・・・・いっそのことアーデルハイト姫をレヴィナス皇太子に嫁がせてはいかがか？」

アーデルハイト・オムージュは国王コルグス・オムージュの一人娘で今年十九になる。美姫として周辺各国に知られており、コルグスの一人娘でなければあるいは既にどこかに嫁いでいたかもしれない。

アーデルハイトがレヴィナスに嫁ぎその子供がゆくゆくはアルジ

ャーク帝国の皇帝となれば、長い目で見た勝利ともいえる。

「このタイミングで受けるかどうか・・・・・。それにレヴィナス皇太子率いる軍がすでに動いていると聞く。かのアレクセイ・ガンドールも同行しているとか」

「さよう。仮にアルジャークがその話を受けたとしても、我々の思うような結果となるかどうか・・・・・」

彼らが恐れているのはオムージュの民に不幸が降りかかることではない。アルジャーク主導でオムージュの再編が行われた結果、自分たちが権力の座から遠ざかることを恐れているのだ。

妙案はでない。いや、リスクを恐れ選択することができない。結局、一戦交える準備をしつつも外交努力を続けるという、ありきたりな結論に落ち着くこととなった。

アーデルハイトはテラスから城の中庭を眺めていた。かといって庭に興味があるわけではない。いや、彼女はなにに対しても興味を抱くことが無かった。

近々アルジャークと戦端が開かれるらしい。が、特に気になるわけでもない。いや、彼女にとってはこの国の行く末さえもどうでもよいことであった。

（なんとこの世界はつまらないのだろう・・・・・）

恋い焦がれるものが欲しい、と思った。人でも、モノでも、芸術でもなんでもよい。我を失うほどに夢中になれるものが欲しかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

国交断絶（事実上の宣戦布告）がなされたとの報が共鳴の水鏡を通してリガ砦にもたらされると、レヴィナスはすぐに指示を出し全軍を出立させた。

国境を越え、オムージュ領に入っても敵軍の姿はどこにも見当たらなかった。また先行して潜り込ませている斥候からもオムージュ軍を発見できていない。それはつまりモントルムからの援軍がまだ到着していないことを示している。

「クロノワ殿下はうまくやっておられるようですな」

アレクセイは誰にともなく呟いた。

「今はまだ、な。大方アールヴェルツェがうまくやっているのだろうよ」

そう言うレヴィナスの声からは、腹違いの弟を気への気遣いは感じられない。未だに彼にとってのクロノワの存在は、無意識に忘れ去ってしまえるほど小さいものだった。

「それよりも先を急ぐぞ。あれがいつまで援軍を抑えていられるか分からないからな」

オムージュ軍がいまだ現れないとはいえ、レヴィナス率いる十四万の軍は無人の野を往くわけではない。行く先々には村があり街があり、そしてそこには人々が生活している。

レヴィナスは配下の軍勢に一切の強奪と暴行を禁じ、アレクセイもそれを支持した。まあ、アレクセイはともかくレヴィナスが強奪

および暴行を禁じた理由は、単純にその行為が美しくなく、彼の趣味に著しく反しているからである。政治的な配慮とは無縁のところでオムージュの民は人災を免れたのであった。

オムージュからの使者が到着したのはアルジャーク軍が国境を越えてから三日目のことであった。

フェンデル伯爵を筆頭にして大使は全部で六人。大使たちは甲冑の代わりに装飾過多な絹の礼服を身にまとい、一兵の兵も連れることなくアルジャーク軍の陣にやってきたのである。

「われらにどのような罪があってアルジャークは此度の遠征に及ばれたのか」

フェンデル伯爵は鋭く研ぎ澄ました剣の切っ先を突きつける代わりに、十分に油をしみこませてきたその舌を必死に回転させた。

儀礼的で中身の薄い言葉を数百秒ほど聞いた頃、レヴィナスは飽きた。

「そなたらの罪は唯一つ。この美しき大地を汚したことだ。その罪に罰をくれてやるまでのことだ」

滑らかに回転を続けるフェンデル伯爵の舌の運動を遮ってレヴィナスは言い放った。伯爵は一瞬絶句した後、先ほどまでの倍のスピードで舌を回転させ始めた。

が、すでにレヴィナスは興味を失っている。大使たちが着込んできた礼服が彼の趣味に合わなかったのも一因かもしれない。既に席を立ちフェンデル伯爵たちには背を向けていた。同席していたアレ

クセイもまた、このような小細工でこれ以上時間を浪費することに、なんら意味を見出さなかった。

「大使たちのお帰りだ！」

大使たちは絹の衣ではなく鋼の甲冑を身にまとった非友好的な兵士たちに、両脇から抱えられるようにして立たされレヴィナスの前から連れて行かれた。彼らは馬の鞍に括り付けられ、馬の尻を槍の柄で叩かれ望まぬ帰路につかされることになったのである。

彼らの悲鳴と共に、オムージュの望む平和的な解決も遠ざかっていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「もはや一戦避けることかなわず！」

フェンデル伯爵らが何の成果もなく帰ってきたことでオムージュの王宮は一気に主戦論に傾いた。しかしそこは腐っても政に関わる集団、熱狂的な雰囲気に呑まれて「玉砕あるのみ」の単純思考には陥っていかない。政府が政府としてまともに機能しているといえるだろう。

「しかし戦うとしてなにを目指して戦うのだ？」

「緒戦に勝ち、そのまま講和に持ち込む。これしかありますまい」

「しかし相手が受けるかどうか・・・・・」

「その際にアーデルハイト姫との婚約の話を持ち出せばよいのではないか？アルジャークとしてもオムージュを合法的に手に入れることができ、王家の血統も残る。この辺りが程よいおとしどころだと思うが・・・・・」

一同は頷いた。そうすれば王家の血筋と共に彼らの発言力も残るだろう。緒戦に勝ち有利な状態で和平交渉に入れるのだから。

今後の方針が決まりオムージュ国王コルグス・オムージュの了承を得て、城中はにわかにあわただしくなってきた。

既にエルグ・コークスをはじめとするオムージュの将たちは、軍を集め準備を整えている。その数十二万。十四万のアルジャーク軍には及ばない。また、こととここに及んではモントルムからの援軍も期待できない。勝てる見込みは低いと言わざるを得ない。

「数で劣り、兵の質で劣る。がここは我らの祖国。いかにアルジャークの兵が精強を誇るとはいえ、そう易々と負けてやるつもりはないぞ」

弱小と侮っているならばそれでよい。その驕りに最大限付け込むまでだ。

壮絶な決意を胸に秘め、勇将エルグ・コークスは全軍に出陣を命じた。

第二話　モントルム遠征？（後書き）

新年初投稿です！

感想を書き込んでもらえると、うれしいです。

第二話　モントルム遠征？

クロノワがモントルム王都オルクスに入ったのは、アールヴェルツェが国王ラーゴスタを捕虜にした日があけてから三日目のことであった。「共鳴の水鏡」を用いた通信でアールヴェルツェからとりあえずの停戦が成ったという報告を聞くとダーヴェス砦をグレイスに任せ、自身はただ十騎ほどの護衛を引き連れて街道を王都に向けひた走ったのである。途中、アールヴェルツェのよこした百騎ほどの騎兵隊と合流して王都オルクスに入ったのであった。

オルスクは良く治まっていた。婦女暴行をしたアルジャーク兵が公開処刑されてからはそれに類する事件は起こっておらず、また住民の心象も良いと護衛を率いている隊長が教えてくれた。

「アールヴェルツェはうまくやっているようですね」

混乱なくオルスクが治まっていることにクロノワは満足した。

王城である「ボルフイスク城」に入城すると、アールヴェルツェが迎えてくれた。その隣には見慣れない男性が一人立っている。痩身で線が細く、武官らしい荒々しさには欠けている。だがその目には油断ならない光がある。

「そちらの方は？」

アールヴェルツェに戦勝の祝いと治安を維持してくれたことへの礼を述べてから、クロノワはその男について尋ねた。

「アルジャークのモントルム駐在大使、ストラトス・シュメイル殿

です」

もともと軟禁されていたのですが、我々がここに入ってからは主に行政面で色々と助けていただきました、といってアールヴェルツェはストラトスを紹介した。

「そうでしたか。ご協力感謝します」

「いえ、モントルム駐在大使の役職自体この先不要になるでしょうからね。今のうちに就職活動をしていたのですよ」

その自虐とも皮肉ともとれる台詞。が、それを口にしているストラトスが実にいい笑顔なので嫌な感じがしない。

（ああ、この人はけっこう腹黒だな・・・・・）

万人を安心させそうなストラトスの笑顔だったが、クロノワは初見でその裏に秘められた黒さを看破した。

「そうですか。それでは今後とも是非、力をお貸しいただきたいですね」

そしてクロノワもまた完璧な笑顔で応える。

これが、この先結構長い付き合いになる二人の出会いであった。

二人と別れると、クロノワは次にモントルム国王ラーゴスタ・モントルムの元へと向かった。アールヴェルツェに捕らえられて以来、彼はボルフイスク城の一室に軟禁されていた。

「ひとつ、お尋ねしたい」

幾つか儀礼的な会話を交わしたあと、ラーゴスタがそういった。

「伺いましょう」

クロノワはひとつ頷き、ラーゴスタの顔をまともに見た。

「六万の軍でモントルムを攻略、無茶だとは思われなかったのか。すでにそれを成した貴殿に問うのも無意味なことと思うが、聞かせていただければ幸いだ」

ラーゴスタ自身をはじめモントルムの廷臣たちがそうであったように、六万程度の軍であればダーヴェス砦に四万の兵を集めれば十分に足止めが可能である。つまりこの戦力では少なすぎるのだ。

もともとクロノワには十万近い兵力が与えられるはずであった。それが皇后をはじめとする面々の横槍で六万まで減らされてしまったのだ。だが、クロノワはそのことをこの場で言おうとは思わなかった。

「無茶は承知の上。しかし与えられた機会をモノにしていくしか、私にはありませんから」

ラーゴスタは頷いた。

彼には妃がいない。また私生児を含め子供は一人もいない。それは彼が女人を嫌っていたからではない。結婚ひとつするにも、また子供ひとりつくるにも、そのつど微妙な問題が持ち上がってくるのだ。それが小国モントルムの舵取りをおこなわなければならない者の宿命ともいえる。

そういう微妙なパワーバランスの上に政を行っていたラーゴスタだけに、クロノワの言葉の裏にあるものを感じ取ったのかもしれない。

「・・・・・この国のこと、民のこと、お願い申し上げる」

「心得ました」

その後まもなく、国王ラーゴスタより勅命が発せられ、モントルムの統治権は「平和裏に」アルジャークに譲渡されたのである。

南方の国境を守っているブレンス砦は当初、城門を閉ざし抵抗の構えを取っていたが、正式な勅命が発せられると門を開き降伏した。

こうしてモントルムにおけるアルジャークの軍事行動は終了したのである。

第二話　モントルム遠征？

レヴィナス率いるアルジャーク軍十四万がオムージュ軍十二万と相対したのはローレンシア平原でのことであった。

「なかなかに見事な陣容だな」

「左様ですな」

オムージュ軍の整然たる様子を見て、レヴィナスはそういった。オムージュ軍は、本陣・右翼・左翼の三つに軍を分けている。だが、その三つが非常に近い位置に集結している。一塊になって行動するつもりなのだろう。

対するアルジャーク軍は軍を四つに分けている。主翼七万、右翼三万、左翼三万そして本陣一万だ。本陣は戦力というよりはレヴィナスの護衛だろう。全体としてはアルジャーク軍の方が数は多い。が、一つ一つではオムージュ軍十二万には及ばない。局地戦では不利になるだろう。

「全軍をもって真正面からぶつかる。初手は相手の思惑通りになりそうですな」

レヴィナスは何も言わず頷き、全軍に前進を指示した。

「もはや逃げ場はない」

全軍の将兵をまえに、エルグ・コークスは静かに宣言した。ここ

にいる全員が、この戦い勝機は薄いと知っている。それでも自分と共に戦うことを選んでくれた彼らに、エルグは感謝している。

「お前たちの立っているこの大地は我らの祖国。我らの後ろにいるのは戦うすべを持たぬ同胞たち」

一旦言葉を切る。アルジャーク軍が動き出した。

「戦って戦って戦って！一縷の希望を奪い取れ！！」

剣を抜き、高く掲げる。

「全軍、突撃！！」

オムージュ軍はまずアルジャーク軍の主翼とぶつかった。

オムージュ軍は押して押して、押しまくった。全軍十二万、もとより全て死兵。防御を捨てただひたすらに前進した。

アルジャーク軍の前衛付近で炎が上がり紫電が輝く。オムージュの魔導士部隊だ。あちらこちらで爆発が起こり、そのたびにアルジャーク軍は一歩後退し、オムージュ軍は一歩前進した。

アルジャーク軍の両翼が戦いに加わってもその勢いはとまらない。オムージュの兵たちは戦意というよりは狂気に満ちて前進した。

ある者は腹を貫かれながらも相手の胸を突き刺しそのまま死んだ。腕を切り落とされながらも戦う兵士がいる。文字どおりはいつくばって進み敵兵を押し倒すものがいる。

「足を止めるな！狙うは大将の首ただ一つ！」

エルグも馬上で槍を振り回し、剣をふるって戦った。戦いながら全軍を鼓舞し、一つにまとめ上げてアルジャーク軍に叩きつけてゆく。

「魔導士部隊、一斉攻撃！」

彼の指揮に従って、魔導士たちが火炎弾を投げつけ雷を放つ。さらに魔剣や魔槍を装備した者たちが敵陣に突っ込んで綻びをつくる。

「弓隊、放てぇぇぇ！！」

無数の矢が飛来し、アルジャーク軍の綻びを大きくしていく。そこにエルグはすかさず突撃を指示する。

アルジャーク軍の隊列に綻びを見つければ、歩兵を差し向けそれを大きくし、騎兵を突撃させてこれを破る。整然と抵抗を試みられれば、魔導士部隊の一斉攻撃で無理にでも後退させる。

戦力の出し惜しみなどしない。むしろこれでも足りないくらいだ。現状、足りない分はここの兵士たちが死力を尽くして補っている。それは指揮官たるエルグにも同じことが言えた。

（だが、そう長くはもつまい・・・・・）

しかし、エルグは冷静さまでは失っていなかった。こんな状態がいつまでも続くわけがないと見切りを付けている。それはアルジャーク軍を率いているアレクセイ・ガンドールにしても同じだろう。

（一刻も早くこれを突破せねば・・・・・！）

声を張り上げ、兵士を鼓舞する。

「オムージュ軍主将エルグ・コークス殿とお見受けする！その首、頂戴いたす！」

一人のアルジャークの騎兵がエルグに向かって突進してくる。その騎士に向かってエルグは馬首を向けた。互いが互いを正面に捕らえ、その距離を縮めていく。雄叫びを上げ、戦斧を振り上げるアルジャークの騎士に対し、エルグはひたすら無言であった。しかし彼の目はどんな諸刃の剣よりも鋭く敵を見据えている。

二つの騎影が一瞬重なり、そしてすぐに離れた。二人の騎士の姿は対照的であった。一人は槍で喉を貫かれ既に絶命している。もう一人は肩当てを飛ばされているが、それ以外はまったくの無傷である。

生き残った騎士、エルグ・コークスは別の槍を手にすると、すぐに一人の騎士から主将へと戻り、全軍の指揮に当たった。彼の勇姿をみて、兵たちの士気はさらに一層上がっている。

また一歩また一歩とオムージュ軍は前進し、同じだけアルジャーク軍は後退していった。

「押されているな」

本陣から戦況を眺めて、レヴィナスは不満そうにそう呟いた。

オムージュ軍の勢いが凄まじい。いま敵軍は凸の形で猛然と攻め

立てており、友軍はそれを凹形で受け止めるという具合になっている。

戦場のあちこちで爆発が起こり、閃光が走り、炎が上がっている。そしてそのたびにオムージュ軍は、アルジャーク軍の中央部（主翼）を後退させこの本陣に近づいてくる。

「敵軍は魔導士部隊を多く引き連れてきたようです。まぁ、彼らにすれば祖国の興亡のかかった戦いですならな」

本来、魔導士部隊は「虎の子」だ。それは彼らが特殊で高度な訓練を受けており、そう簡単に補充の利く人員ではないからだ。

逆を言えば、その虎の子の魔導士部隊を大量に投入しているということは、いかに彼らがこの戦いに全力を傾けているかを物語っている。

「とはいえそれも予想のうち。ご心配めされるな」

「心配などしていない」

アレクセイの物言いにレヴィナスは不快げに反応した。

戦況が動いたのはそれからしばらくしてのことだった。オムージュ軍はアルジャーク軍を押し込んでいき、ついにアルジャーク軍の陣形はU字となった。

アレクセイが動いたのはまさにそのときであった。

「発光弾、黄！」

すかさず部下の一人が、長さが三十センチくらいの筒型の魔道具を空に向けて構え魔力を込めた。黄色い光の発光弾が空へと上がる。そしてそれは戦場に劇的な変化をもたらした。

アルジャーク軍の主翼が動きを止め、初めてオムージュ軍の突撃を防いだ。さらに数千の矢の雨を降らせ進軍の速度を落とす。同時に両翼が前進しオムージュ軍を半包囲していく。

「発光弾、赤！」

アレクセイが再び指示をだし、今度は赤い光が上がった。

次の瞬間、戦場、オムージュ軍の只中にいくつもの火炎弾が打ち込まれた。それだけではない。雷が鳴り響き、暴風が吹荒れ、氷刃が舞った。

続けて近接戦闘用の魔道具を装備したアルジャークの魔導士たちが、敵陣に踊り込み縦横無尽にその力を振るう。

今まで温存されていたアルジャークの魔導士戦力は、これまでやりこまれていたその憂さを晴らすかのように存分にその威をふるった。

魔導士たちが穿った穴に無数の矢が打ち込まれ、さらに騎兵隊が突撃してゆく。騎兵に攻撃を集中しようとすると、長槍を持った兵士たちがそれを阻んだ。

もはや戦場の流れは逆転した。アルジャーク軍は半包囲の陣形を

さらに縮めながらオムージュ軍を追い詰めていく。それでもなおオムージュ軍は前に進もうとした。だが正面からは押しもどされ、さらに左右から交互に叩かれて損害ばかりが増えてゆく。

オムージュ軍を率いる勇将エルグ・コークスは敗北を悟った。

戦況の推移事態は彼の推測したとおりだった。正面からの突破を試みる限り、数において上回るアルジャーク軍はこちらを包囲する形になるだろうと思っていた。そして実際そのとおりになった。

包囲陣形を敷けば、一点の密度は薄くなる。そこを全力で突破するつもりだった。

（牙とどかず、か・・・・）

悔しさは感じない。その前にやることがある。

腰の辺りに付けておいた筒状の魔道具を掲げ魔力を込める。三色の信号弾が同時に上がった。撤退の合図だ。

撤退信号をうけ、オムージュ軍は唯一包囲されていない後方へと下がり、戦場からの離脱を開始した。それにつられるようにアルジャーク軍は、撤退するオムージュ軍を追いかけ追い討ちをかけようとする。

アルジャーク軍の両翼が伸び、中央部の密度が下がった、その瞬間――――。

「――――！」

エルグは駆けた。彼は何も言わなかった。そして何も命じなかった。だが、ただ一騎で敵陣へと駆けるその姿をみて、近くにいた兵士たちは自分たちの将の後を追い、駆けた。

まさに絶妙のタイミングで突撃を仕掛けたその一団は、ついにアルジャーク軍の鉄壁の包囲網に生じた小さな綻びをついに突破した。

エルグと共に最後の突撃を仕掛けた兵の数はおよそ三千弱。後ろから爆音が聞こえた。追撃しようとしたアルジャーク軍を魔導士部隊がけん制してくれたのだろう。

何も言わずともこれだけの兵が付いてきてくれた。それも撤退の最中に、だ。そしてそれを援護してくれる味方がいた。

つくづく自分は部下に、味方に恵まれた。そうエルグは思う。

眼前には最後の敵。アルジャーク軍の、恐らくは最精鋭の騎兵。その数およそ一万。

エルグは剣を振りかざし、最後の命令を下した。

「敵将の首をとり、我らの祖国を守れ」

息をいっぱいに吸う。

「突撃ィィィィィィイイイ！！」

オムージュ軍の最後の死兵が一団となって迫ってくる様子をアレクセイは見た。

「敵ながら見事・・・・・！」

全身の血がたぎる。顔には笑みが浮かんでいるのかもしれない。知らず、レヴィナスよりも前に出た。

「これより戦場を駆け抜け、敵将を討ちまする。殿下はここに残られよ」

うむ、とレヴィナスは応えた。それを聞き、アレクセイは手元に残っている全軍を率いて駆け出した。

このときの様子を歴史書はこう記している。

「皇太子の傍らには一兵も残らず」

アレクセイの聞いたレヴィナスの声はいつもと同じように思われた。だから彼は振り返らなかった。故に、彼は知らない。このときレヴィナスが青白い顔をしていたことを。

オムージュ軍はアルジャーク軍とほぼ互角に戦った。弱兵と侮られていた兵士たちが、精強を誇るアルジャーク軍の最精鋭の騎兵、しかも三倍ちかい数を相手に互角に戦ったのだ。

このときのことをアレクセイは後日こう述懐している。

「あの時敵にあと千の兵がいたら、負けていたかも知れぬ」

アルジャークの至宝と呼ばれた名将のこの言葉から、オムージュ軍の、いや勇将エルグ・コークスと彼に従った決死隊の奮戦の凄まじさが窺える。

当初、両軍は互角に戦っていた。だが、徐々に決死隊が押され始める。当然といえば当然だ。力と体力を温存していたアルジャーク軍に対し、決死隊は戦いにはじめから加わっており、一兵として無傷の兵はいなかったのだから。

一人、また一人と倒れていく。

エルグも馬から落とされ倒れた。全身傷だらけで、もはやどれが致命傷かも分からない。体が温かいのは流れた血のせいか、あるいは大地の熱のおかげか。

兵たちはうまく撤退できただろうか。敵将は討ち取れなかったが、ここで戦ったことで一人でも多くの兵が命を拾っていれば、この戦いには意味があったと思う。

手を動かし、青々とした草に触れる。

豊かな大地だ。この大地のおかげで人々は餓えることなく暮らして行ける。それはとても幸せなことだと思う。

それを守りたかった。できることならばこの手で。

歴史書にはこの戦いの結末についてこう記されている。

「決死隊、一兵も帰らず」

ローレンシア会戦は終結した。

エルグの首は蝋蜜漬けにされてオムージュの王都ベルーカの王宮に送りつけられた。体のほうは鄭重に葬られている。アレクセイが武人の礼を示したのだ。

蝋蜜漬けにされた勇将エルグ・コークスのくびを見た王宮の廷臣たちは色を失った。国王たるコルグス・オムージュも同様であった。痛み出した胃を押さえながら彼はついに決断した。

「もはやアルジャークに抗する手段はない。かくなる上は降伏をもって民の安息を守らん」

降伏は早すぎると思った廷臣たちもいたが、反対するなら対案を出さねばならない。事態がここにおよぶと、誰も責任を取りたくなかった。

それに誰もがわかっていた。もはやアルジャーク軍をとめるだけの戦力はない。武力を背景にした交渉ができない以上、アルジャーク側から譲歩を引き出すことは不可能だ。

コルグスより命が出された。降伏する旨をしたためた正式な書簡が作成され、それがアルジャーク軍に届けられた。

こうしてオムージュも陥落した。

第二話　モントルム遠征？

レヴィナスがオムージュの王都ベルーカに入る少し前、クロノワは緊急を要する戦後処理を何とか終わらせた。

有体に言えば粛清である。

クロノワはこのような方法をもとより好みはしなかったが、一部の貴族たちによる彼に対する暗殺計画（お粗末なものだったが）が明るみに出ると、もはや彼個人の好き嫌いを言っていられなくなった。

計画に加担していた貴族や領主の処刑執行令状にサインし、さらに彼らの財産は全て没収する。こうしてボルフイスク城内は粛然としたのである。

クロノワは粛清の大鎌を一振り二降りしたがそれをボルフイスク城内だけにおさめ、市民生活にはそよ風程度の影響も及ぼさなかった。それができたのは元モントルム駐在大使ストラトス・シュメイルの協力があったからに他ならない。

アールヴェルツェは優秀な将軍であったが、彼とその幕僚たちにはモントルム軍を掌握するという別の大仕事がある。そこでクロノワはストラトスに行政面でのサポートを依頼したのである。

彼の働きは得がたいものだった。モントルムが戦後すぐのこの時期に、大した混乱もなく治まった功績の半分近くは彼のものであろう。

それに大きな混乱がなかったからこそ、クロノワは思いがけず早い時期にこの遠征の“仕上げ”に取り掛かることができた。それはアルジャーク帝国の求める不凍港を持つ都市、独立都市ヴェンツブルグの“説得”である。

アールヴェルツェに事情を話し、騎兵を五千騎ほど用意させた。率いているのはグレイス・キーアだ。若輩ということもあり、なかなか重要な仕事を先輩の幕僚からまわしてもらえず無聊を託っていたのだ。

だが、彼女はあるいは運が良かったのかもしれない。ヴェンツブルグはこれより先クロノワの政略上、重要な位置を占めることになる。その都市を恭順させるための会談、まさにその場に居合わせることができたのだから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

街道の彼方に騎兵の巻き上げる土ぼこりを見たとき、独立都市ヴェンツブルグの門を警備する門兵は、血の気を失うかのような緊張に襲われた。事前にこの事態が訪れるであろうことを教えられていても、足が震え、暖かい陽気にもかかわらず寒気がした。

同僚たち顔を見合わせる。皆、青い顔をしていた。きっと自分もそうなのだろう。それを確認したら少し気が楽になった。あらかじめ指示されていた通り、自衛騎士団本部に事態を知らせるために何人かが足早にかけて行った。

知らず知らずの内に唾を飲み込む。あの土ぼこりを巻き上げている騎兵はアルジャーク軍だ。モントルムを平定した彼らは、ついにその矛をこの独立都市ヴェンツブルグに向けたのだ。

「いきなり攻撃してくることはないだろう」

門兵の所属する大隊の隊長であるクロード・ラクラシアはそういっていた。だが、不安と恐怖を消し去ることなどできはしない。正直なところ、逃げ出したかった。

だが彼の職責に対する責任感と、生まれ育った都市への思いはそれを許さなかった。結局、彼は使いのアルジャーク兵に事情を説明するまで、極度の緊張にさらされ続けることになるのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

使いに出した兵は報告を済ませるとすぐに下がった。

「ふさわしい者が来るまで待って欲しいとのことでしたが、時間稼ぎではないのですか」

ここに来ているアルジャーク軍は騎兵ばかりが五千騎だけだが、それでもヴェンツブルグを落とすには十分すぎる。それを恐れて時間稼ぎをしているのではないかとグレイスは思った。

「あなたならこのような形で時間稼ぎをしますか？するとして何の為に？」

「・・・・そうですね、時間稼ぎではない。失礼しました」

無意識とはいえ自分の驕りをたしなめられたようでグレイスは恥じ入った。

時間稼ぎをしたいのであれば、もっとうまいやり方が幾らでもある。こんな瀬戸際までアルジャーク軍が迫っているこの状態で時間稼ぎをしても意味はない。彼らは都市を捨ててどこかに逃げるわけには行かないし、またどこかの国に応援を頼むこともできない。

グレイスが今この場で思い至る程度のことだ。ヴェンツブルグの執政官たちが頭を悩ませ考え付かないわけがない。

つまりグレイスは彼らのことを侮ったのだ。無意識とはいえ、政でそれは危険だ。

「ですがこのような都市を相手にわざわざ交渉の席に着く必要があるのですか」

いぶかしむようにグレイスは言った。

アルジャーク帝国と独立都市ヴェンツブルグの力の差は、いわば「月と砂粒」で本来まともに相手をする必要はない。武力を持って押しつぶし制圧してしまったほうが、後腐れがなくてよいと思ったのだろう。

「ヴェンツブルグは独立の気風がつよい都市です。力ずくで恭順させようとすれば住民全てレジスタンスに、なることはないでしょうが、非協力的になっていろいろとやり難くなるでしょうね」

武力制圧したほうが、後腐れがあるのだ。

「それに最悪、不凍港が使えればそれでいいわけですし」

「そんなものでしょうか・・・・・」

純粋な武人であるグレイスにとって、こういう思考は迂遠なもの

に感じられるのだろう。クロノワ自身だってそうだ。彼自身、自分の思考に疲れることがあった。

そうこうしているうちに、ヴェンツブルグから騎影が二つ、こちらに近づいてきた。一人は初老の男で、年のころはアールヴェルツェよりも一回り程度上かと思われた。もう一人は二十代初めと思しき男だ。二人とも自衛騎士団の所属らしく、鎧を着込んでいるが剣は持っていない。戦うつもりはない、という意思表示らしい。

「自衛騎士団騎士団長、アッゼン・ウロンジです」
「同じく、第三大隊隊長、クロード・ラクラシアです」

二人とも名前は知っている。というよりもある程度事前に調べてある。

自衛騎士団騎士団長たるアッゼン・ウロンジは一兵卒から、いわば「叩き上げ」で騎士団長まで上り詰めた人物で、それゆえに騎士団員や都市の住民からも信頼が厚い。大柄な体格と豪胆な気性ゆえに万事に大雑把と思われがちだが、細かい心配りを忘れない人物だと報告されている。

クロード・ラクラシアについては、それほど詳細な報告は上がっていない。ただ一点、三家の一つ、ラクラシア家の次男ということだけが載せられていた。

「アルジャーク帝国モントルム方面遠征軍司令官、クロノワ・アルジャークです」

儀礼的な挨拶を交わした後、アッゼンが本題を促した。

「それで、本日はいかなるご用件でこのヴェンツブルグにいらした

のですかな」
「アルジャーク帝国と独立都市ヴェンツブルグの今後のお付き合いの仕方について色々とお話をしたいと思いまして」
極上の笑みを浮かべてクロノワは応えた。自分の意思でこういう表情ができる辺り、修行の成果といえるだろう。
「五千騎ちかい騎兵を引き連れて、ですか・・・・」
クロードが後ろに控えている騎兵たちを見て言った。その口調は若干苦々しい。話し合いといっておきながら武力で威圧するとはどういう了見だ、と思っているのだろう。
だがクロノワはそんなことは意に介さない。もとより外交交渉とはそういうものだ。
「護衛ですよ。モントルムを平定したとはいえ、まだ日が浅い。まさか身一つでここまで来るわけにもいかないですから」
「でしたらこの先は必要ありませんな。我々が責任を持ってお守りいたしますゆえ、護衛の方々はここでお待ちいただけますかな」
このアッゼンの言葉に反応したのはグレイスだった。
「それは承服いたしかねます。殿下の護衛は我々の任務。いかなる理由があるとはいえそれを放棄するわけにはいきません」
交渉のすえ、クロノワの護衛として都市に入るのは二十人となった。

アッゼンとクロードを先頭にして一同は都市の中を、執政官の合議がおこなわれる執政院に向けて歩いていく。

都市の様子は思ったよりも活気に満ちていた。戦争中だっただけに、この都市にやってくる商人の数はすかなかろうと思っていたのだが、どうして彼らはたくましい。それにヴェンツブルグは貿易港だから、船でやってくる貿易商も多いのだろう。

しかし、これからどうなるかは分からない。街道を行き来する人々の邪魔にならないように野営場所を移動させてきたとはいえ、この独立都市ヴェンツブルグのすぐ外にアルジャーク軍の騎兵五千が目を光らせているのである。人々が萎縮しても仕方がない。

（心苦しいかぎりです・・・・）

クロノワは心の中でこの都市の人々に謝った。

武力を背景にして交渉ごとを有利に進めるのは、この時代の外交の常套手段である。それにヴェンツブルグはもともとモントルムの宗主権の下におり、アルジャークにしてみれば、いわば敵勢力の一部である。

武力を用いるのは理にかなっている。そう頭では割り切っている。だが感情面ではどうしても心苦しさをぬぐえない。

（私は甘いのでしょうか・・・・・）

そうなのだろうと思う。そして、それでもいいと思ってしまう。

案内された執政院は、白塗りの壁で四階建ての建物だった。執政官たちの合議だけでなく、この都市の行政に関わる中枢がこの建物

の中に詰まっていることになる。

一行はひとまず待合室に通された。

「執政官方が揃われるまで、こちらの部屋でおくつろぎください」

そういってクロードは出て行った。部屋にはティーセットとちょっとしたお茶菓子が置かれている。勝手にどうぞ、ということらしい。

護衛についてきた騎士たちは、皆それぞれに談笑している。クロノワは今窓辺に椅子を置き、ぼんやりと外を眺めていた。

「なにをご覧になっているのですか」

そう言いながらお茶と菓子を差し出したのは、紅一点のグレイスだった。こういう気遣いはいかにも女性らしい。クロノワは礼を言って受け取った。

「海を、見ていました」

比較的高い場所に位置しているらしい執政院の、さらに三階にあるこの部屋からは海を臨むことができた。帆船の白い帆が幾つか見え、ここが良い貿易港であることを無言のうちに証明している。

「初めてですか」

「いえ、宮廷で暮らすようになる前に一度だけ。友人と彼の師匠と三人で二ヶ月ほど旅をしたのですが、その時に」

「あのイスト・ヴァーレとかいう男ですか・・・・」

グレイスの口調は苦い。どうやら彼女はイストにいい感情を持っていないらしい。そんな彼女の様子にクロノワは苦笑した。

イストは権力におもねるということをしない。というより嫌っている節がある。権力嫌いというよりは、それを既成特権としてしか考えずもてあそぶような輩に嫌気がさしているのだろう。その感情はもはや憎悪と言ったほうがいいのかもしれない。

なにが彼をそうしたのか、イストは話そうとはしなかったからクロノワは知らない。だが彼のそういう態度は、軍という規律と上下関係の厳しい世界に身をおいているグレイスにとっては不遜と映り、それゆえに相容れない。

クロノワはとくに友人のことを弁護しなかった。イストのあの飄々とした皮肉っぽい態度は確かに彼の一面だが、それだけが彼の全てではないことをクロノワは知っている。だが同時に誰かに弁解してもらうことを、あの変わり者の友人が嫌がるであろうことも分かっていたからだ。

グレイスはまだ渋い顔をしている。本当は付き合いをやめるように言いたいのかもしれない。だが、クロノワには味方が少ないことを知っているため、あまり強く言いたくもないのだろう。

クロノワは素知らぬ顔でお茶を啜った。執政官たちが揃いましたと知らせが来たのは、それから少ししてからだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はじめまして。アルジャーク帝国モントルム方面遠征軍司令官、クロノワ・アルジャークです。本日はこのような場を設けていただ

き感謝しております」

目の前に居並ぶ八人の執政官たちを前に、クロノワはまずそう挨拶した。

「前置きはいい。早速だが用件を窺おう」

やや苛立った様子で口を開いたのは、選出された五人の執政官の一人であるブレンステッド・テームである。

「それでは単刀直入に申します」

クロノワは一旦そこで間を取った。

「独立都市ヴェンツブルクにアルジャーク帝国の宗主権を認めていただきたい」

それはこの独立都市ヴェンツブルクにアルジャーク帝国の一部になれということだ。執政官たちは一様に押し黙った。これまでモントルムに対して、そうしていたことを考えれば同じといえば同じだ。だが、新たになにを要求されるか分かったものではない。

「これまでここヴェンツブルクは、モントルムの宗主権の下に自治を認められてきました」

これはただの事実確認だ。執政官たちも何も言わない。

「ですが、もはやモントルムという国は存在しません。我々アルジャークが併合しました。ならばヴェンツブルクはモントルムの代わりに、アルジャークの宗主権を認めるべきではないでしょうか」

クロノワの主張には一応の理が通っている。

「認めない場合はどうする？武力行使かね？」
そう言う執政官の声には皮肉の色が混じっている。

ヴェンツブルクの住民は独立の気風が強く、彼らは力で押さえつけられた支配を良しとはするまい。だいいち武力制圧したとしても、破壊されたあるいは焼き払われた港が何の役に立つというのだろう。

無論、そのことはクロノワも承知している。

「武力行使をするつもりはありません。ですが、色々と制約をかけることは必要になるでしょう」

行き来する人々の荷物の検閲、貿易品の関税の引き上げ、もっと単純に高い通行税をかけることもできるだろう。

執政官たちの顔が青ざめた。

（そんなことをされれば・・・・）

そんなことをされれば、この独立都市ヴェンツブルクは干上がってしまう。

ヴェンツブルクはあくまでも「都市」なのだ。良港を持ち貿易によって栄えてはいても、そこは生産の場所ではない。人為的にとはいえその立地条件が崩されれば、個人の行商人を含め貿易商たちはこの都市を訪れなくなる。そうなれば自然とヴェンツブルクは衰退していく。

そして住民たちの不満は、アルジャーク帝国にではなく執政院に向くだろう。そうなればアルジャーク帝国がこの都市に介入する余

地が生まれる。そこまで計算しているのだろう、このクロノワ・アルジャークという皇子は。

「無論、そのような策は我々としても好ましくありません。せっかくの不凍港、有効に使いたいですから」

そう言われて執政官たちは思い出した。アルジャークには不凍港がないことを。港がないわけではない。だが地形の問題も絡んで北よりの地域にしか港がなく、そういった港は冬になると海水が凍ってしまうのだ。

今回の遠征で併合したモントルムも貿易港として使える港はヴェンツブルクだけだし、オムージュにいったっては内陸国のため、そもそも海に面していない。

（アルジャークにとってこのヴェンツブルクは、一年を通して使える唯一の港、というわけだ・・・・）

「オムージュは落ちたも同然です。そうなればアルジャーク帝国の国土は二二〇州。商人の方々にとっては魅力的な市場でしょうね」

そしてその商人たちの拠点となるのが、この独立都市ヴェンツブルクなのだ。当然人が集まるところには、物と金もあつまる。

執政官たちは視線を合わせ、頷きあった。

「アルジャーク帝国の宗主権を認めること、我々としてもやぶさかではない」

「だが、それは今までと同程度の自治が認められるならばの話だ」

「その点、アルジャーク帝国としての立場はいかがか、クロノワ殿」

ここまでで大筋では合意したことになる。

「そうですね・・・・・」

さらにこれから細かい詰めの協議に入るのだ。

第二話　モントルム遠征？

結局話し合いは、昼食をはさんで夜まで続いた。大方の内容は決まり、明日にはアルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークに届ける正式な書簡を作成できるだろう。

クロノワ・アルジャークは護衛たちと共に、都市の外に待たせている騎馬隊のところへ戻っていった。迎賓館を用意するつもりだったのだが、

「部下に野営を命じておきながら、私だけ暖かいベッドで眠るわけにもいきませんから」

といってクロノワ自身が断ったのだ。

いまさら暗殺を警戒したわけでもないだろう。それはつまり、兵の信頼を得るすべを心得ているのであり、ただの温室育ちの皇子様ではないということだ。そうディグス・ラクラシアは思った。

いまディグスは家族と共に夕食を楽しんでいた。一日中頭と神経を酷使していたためか、食事にあわせて開けた赤ワインは体に染み渡るようで、彼はなんともいえない倦怠感に身を任せた。

「まぁ、合意文章の作成はそれほど問題なく終わるだろうね」

杯に入ったワインを飲みながら作業の進行状況と今後の見通しを家族に語っていた。

「ではなにが問題なのですか？」

そう尋ねたのはリリーゼだ。ディグスは言いにくそうに苦笑いを浮かべている。

「だれが使者になるか、でしょ？」

代わりに応えたのはアリアだった。

正式な書簡を作成してそれで終わりではない。それをアルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークに届け、そして皇帝の承諾を得て初めて独立都市ヴェンツブルクの立ち位置が決まるのだ。

問題になっているのは、その書簡を持っていくヴェンツブルク側の代表を誰にするか、ということである。本来であれば執政官の一人が使者となって赴くのが筋である。だが、今回だれも行きたがらないのだ。

露骨なことを言ってしまえば、誰も責任を取りたくないのである。

クロノワとの間で合意した条項を皇帝が認めず、その場で無茶な要求を追加してくるかもしれない。通常の国家間の話であればこういう事はありえない。だがアルジャーク帝国と独立都市ヴェンツブルクの力関係は、いっそ笑いたくなるほどで、こういう心配もしなければならないのだ。

そうなってしまえば呑まないわけにはいかないだろう。その責任を誰も取りたくないのだ。

「私に、私に行かせてください！」

そういって立ち上がったのは、なんとリリーゼであった。

一瞬、リリーゼはなぜそんなことを言ったのか、自分でも理解できなかった。だがその言葉はすぐに彼女のものとなり、血脈に沿って体に染み渡っていった。

精神が高揚し体が熱くなる。大仰に言えば運命を感じたのだ。そう、眠っていた自分を叩き起こす、稲妻の閃光のような運命を。

「私に行かせてください、父上。使者としてアルジャーク帝国へ」

誰にも渡さない。この運命は私のものだ。そう決意を込め、ほとんど睨むようにしてリリーゼは父であるディグスに懇願した。

ディグスはリリーゼのその視線をしっかりと受け止め、しかし何も言わなかった。

「だめだ！それならば私が行く！」

声を荒げそういったのは長兄のジュトラースだ。次兄であるクロードも賛同し、妹を説得しようとする。

そんな中、父であるディグスの頭の中では素早く計算がなされていた。アルコールが入っているとはいえ、彼の頭脳は明晰を保っているといっていい。

ヴェンツブルクが、というより執政官たちがもっとも恐れているのは、アルジャーク帝国皇帝が直々に新たな要求をしてくることである。だが、もしされれば使者が誰であろうと、その要求を呑まなければならなくなるだろう。

ディグスは一つ息をついた。諦めが付いたといってもいいかもし

れない。

そう、諦めるしかないのだ。国力も武力も財力も発言力も、何もかもが違いすぎる格上の相手になにをしても無駄なのだ。それならばいっそ・・・・・・。

ならばいっそのこと、政も駆け引きもなにも分からない者を使者に立てたほうが、かえって相手の心象はいいかもしれない。それは暗に、すべてを委ねます、といっていることになるのだから。

「・・・・いいでしょう」

「父上!?」

ジュトラースとクロードが悲鳴に似た声を上げる。彼らとしてはまず真っ先にこの人が反対するだろうと思っていたのだ。

息子たちの悲鳴を無視してディグスは話を進める。

「ですが、私の一存で決めてしまうことはできません。執政院に諮ってからです。もしそこで許可が下りなければ諦めなさい」

いいですね?とディグスは末娘に言った。リリーゼは視線をそらすことなく彼を注視している。

「分かりました」

一瞬の迷いもなく彼女は応えた。その目は自身が使者になることを微塵も疑っていないように思われた。そんな末娘の様子をみて、ディグスは内心苦笑をもらした。

(やはり育て方を間違えたでしょうか・・・・?)

彼はこの末娘を花よ蝶よと育てた覚えはない。自分の娘が一般的な良家の令嬢の枠に収まりきらないことを悟った彼は、自らの人生を彼女自身の手に委ねたのだ。それが間違っていたとは思わない。

しかし、自身の人生を手にした彼女は、ディグスの知らぬ間に大きな翼を育てていたようだ。そしてその翼でこの狭い鳥かごから飛び立っていくのだろう。そんな娘をディグスは眩しく、また誇りに思う。しかし、一抹の寂しさはどうしても消えなかった。

次の日、クロノワ・アルジャークとヴェンツブルグ執政院の間で合意文章が作成された。その中ではまず、アルジャーク帝国が独立都市ヴェンツブルグの宗主権を持つことが明記されている。

さらに、その内容を要約すると以下のようになる。

一つ、独立都市ヴェンツブルグはこれまでと同程度の自治権をもつ。

一つ、アルジャーク帝国より執政官を一人派遣し、九人で合議をおこなう。

一つ、アルジャーク帝国より派遣される執政官の権限は、他の八人の執政官たちと同じとする。

一つ、戦時などの緊急事態においては、独立都市ヴェンツブルグはアルジャーク帝国に最大限協力する。

これらの内容に加えてさらに細々とした取り決めが幾つか記載された。

また、執政院でリリーゼ・ラクラシアを使者とすることが承認された。もちろん使者団を組んで帝都ケーヒンスブルグへ向かうことになるが、中心は彼女だ。クロノワは少し驚いた様子だったが何も言わなかった。

会合の後、クロノワはディグス・ラクラシアから声をかけられた。

「娘をよろしくお願い致します」

「承知しました。ご安心ください」

思いつめた様子で頭を下げるディグスに、クロノワは当たり障りのない返答しか出来なかった。親心の機微はクロノワには理解しがたい。死んだ母もきっとこんなふうに自分のことを心配してくれていたのだろう。そう考えると少しこそばゆい。

ふと思った。父親たる皇帝もそうなのだろうか、と。彼は頭を軽く振ってその問いを追い出し、答えは不明のままになった。

出立は明日の朝。一度オルクスまで戻り、そこから帝都ケーヒンスブルグへ向かうことになる。

第二話　モントルム遠征？

レヴィナス率いるオムージュ方面遠征軍は、ついにオムージュの王都ベルーカに入った。すでに降伏する旨が届けられており、大きな混乱もなくレヴィナスは入城したのであった。

ベルーカに入ってすぐ目に付いたのは、建設途中の建物であった。既に八割がたが完成しているらしく、大まかな造形は見て取れた。

「あれは、劇場か何かか・・・？」

心の琴線にふれるものがあったらしく、レヴィナスの言葉は熱を帯びている。

「そういえば、オムージュ国王コルグス陛下は優れた才をお持ちだと聞いたことがあります」

そういいながらアレクセイもレヴィナスの視線を追いかけた。その建物は壮麗にして荘厳で、なるほど完成すれば傑作と呼ぶにふさわしい姿となるだろう。

王宮に入ると、レヴィナスはまず部屋を一つ一つ見て回った。廊下を歩けばあちらこちらから黄色い悲鳴が聞こえ、すれちがう女官たちは魂を抜かれたように惚けて立ち尽くした。皆、レヴィナス・アルジャークのその美貌にあてられたのである。

とある部屋に入ると、そこには美しく着飾り正装した一人の姫君がたたずんでいた。アーデルハイト王女その人である。

「姫の評判はアルジャークにも届いております。いずれお会いした

いと思っておりました」
万人を魅了する笑顔でレヴィナスは亡国の姫に挨拶をした。

「もったいないお言葉でございます」

姫の言葉は丁寧であったが卑下た様子はいなかった。それから二人はしばらくの間、語り合った。レヴィナスはこういう場での話題を数多く知っていたし、なにより話術が巧みであった。アーデルハイトもまんざらではない様子であった。何よりも目が熱っぽく、表情が生きいきとしている。レヴィナスが平素の彼女を知っていれば驚いたであろう。実際、彼女の部屋で給仕をしていた女官は驚いていた。

「姫様のあのようなご様子は初めて見ました」

レヴィナスの美貌よりもそのことに驚いたというから、ただ事ではあるまい。

「何か不自由されることがあれば、遠慮なく申されよ」
名残惜しそうにするアーデルハイトにそう声をかけ、レヴィナスは辞した。

その日の晩餐に、レヴィナスはコルグスを招待した。彼に建築の才があることを知ったレヴィナスが話を聞きたいと思ったのだ。

「それはそれは。光栄ですな」

現れたコルグスはすっきりとした表情をしていた。「憑き物が落ちた」という表現が合うかもしれない。国家という重圧から解放された人間は、こういう表情が出来るのかもしれない。

レヴィナスは凱旋途中に見た建設途中の建物をしきりに褒めた。やはりあれは劇場だったらしい。

「完成すれば東国一、いや大陸一の名作として後世までその名を轟かすでしょう」

さらにあの劇場の基本設計をコルグス自身がおこなったことを知ると、レヴィナスはさらに驚き彼を賞賛した。

コルグスとしても彼が二十年以上をかけて進めてきた肝いりの計画が、この麗人によって評価されたことが嬉しかったらしい。全国各地で同時進行させている建築計画の図面をレヴィナスに見せ、凝らされた数々の意匠とこだわりを熱っぽく語った。レヴィナスも自身のアイディアを告げたりと、二人の議論は自然と白熱していった。

「ケーヒンスブルグに凱旋したあかつきには、私はおそらく父上からこの旧オムージュ領の総督に任命されるでしょう。そのときには是非、貴方にこれらの計画の仕上げをお願いしたい」

レヴィナスは若干興奮気味に亡国の王に求めた。

コルグスは一瞬、押し黙った。レヴィナスの申し出が癇に障ったから、ではない。戦に負けたにせよ一国の王であった者に征服者の下で働け、というのは普通侮辱以外の何者でもなかろう。しかし、コルグスがもっとも心血を注いできたのは、なにを隠そうこれらの一連の建設計画なのである。その最後の仕上げが自分で出来るのであれば、それはむしろ僥倖であるといえる。

しかし彼は首を振り、若い征服者の申し出を断った。

「亡国の王であった者が大きな事業を任されたとあっては、部下の方々が不満に思われましょう」

彼も一国を治めていた王。こういった政治的な考え方は嫌というほどしてきたのだろう。だがレヴィナスは諦めなかった。

「では、アーデルハイト姫を私にくださらないか」

無論、妃として迎えたいという意味である。

「なんと、娘を・・・・」

コルグスは絶句した。

「左様。そうすれば貴方は私の義理の父。誰も文句は言いますまい」

悪い話ではない。それどころか格別にいい話といっていい。

レヴィナスはアルジャーク帝国の皇太子である。その彼とアーデルハイトが結婚し、その間に生まれた子供が将来的にアルジャーク帝国の版図を受け継ぐことになれば、オムージュ王家の血統は考えうる最高の形で守られる。それにレヴィナスがアーデルハイトを娶れば、旧オムージュ王国の臣下や国民も新しい為政者であるレヴィナスを受け入れやすくなるだろう。

それにレヴィナスが言ったとおり、コルグスが建設計画を取り仕切っても不満が出ることはあるまい。

そう、これはいい話なのだ。オムージュという国とコルグス個人の両方にとって。

コルグスは立ち上がり、たたずまいを正した。そして若く美しい征服者に、また彼の義理の息子とも主君ともなる人物に深く頭を下げた。

「娘のこと、国民と臣下のこと、全てお願い申し上げる」

レヴィナスは鷹揚に頷いたのであった。

第二話　モントルム遠征　エピローグ

独立都市ヴェンツブルグからオルクスに戻ったクロノワは、すぐに部下たちに帝都ケーヒンスブルグに凱旋するための準備をさせた。アールヴェルツェの話ではあと三日ほどで準備は完了するそうだ。

その日の夜半過ぎ、クロノワは一人謁見の間にある石造りの玉座に座っていた。謁見のまの天井はガラス張りになっており、月の光が室内をほのかに明るくしていた。

月に向かって手を伸ばす。

「石の玉座の座り心地はどうだ」

突然聞こえてきた声にクロノワは苦笑をもらした。動揺も戦慄もしない。彼の良く知る声だったからだ。

「硬いよ。クッションが必要だね」

正面に視線を戻すと、月明かりに照らされた友人の姿があった。赤褐色のローブを羽織、身長よりも少し長いくらいの杖を手にしている。最後に会った二年前よりも、精悍さがましたように思われた。

「君はいつも突然に現れる、イスト」

「いちいちアポ取るのも面倒だからな」

肩をすくめながら、イストはそういった。それから急に真剣な表情になる。

「お前、このままいくつもりか」

クロノワは何も言わない。

「これが最後の機会だと、そう思うんだがな」

全てを放り出し、この広い世界を旅するための。だがクロノワは、はっきりと否定した。

「それは違うよ、イスト」

自然、視線が月に向いた。満月は過ぎ欠けてゆく、それでもまだ十分に明るい月がガラス越しの空に煌々と輝いている。

「この遠征に出るまでが最後の機会だった。私はそう思っている」

イストは何も言わない。月を見ているから表情も分からなかった。独白するようにクロノワは続けた。

「この戦争でたくさんの血が流れた。その少なくとも半分は私が背負うべきなんだ。それを放り出すことは出来るとは思わないし、したいとも思わない」

視線を戻す。イストは何か言いたそうに顔を歪めていた。しかしすぐに諦めたように首を振った。

「ああ、まったく。言葉はいつだって多すぎる。そのくせいつだって、言いたいことは言えやしない」

そういってイストは何かをほうった。受け取ってみると手のひら

に収まるくらいの木箱であった。あけてみると指輪がおさめられていた。恐らくは聖銀（ミスリル）製で、幅が広く細かい透かしの細工が施されている。

「婚約指輪？」

「三点」

「・・・・低い・・・・・」

冗談とはいえ、間髪入れないイストの辛口な採点に、がっくりと肩を落とす。

「魔道具『雷神の槌（トールハンマー）』。なかなかいい魔道具ができてな、そいつの簡易版だ」

「指輪なのに槌（ハンマー）？」

イメージとしてはなかなか結びつかない。

「ああ、なかなかいい威力だからな。試し撃ちをするなら、人と物のないところをお勧めするぜ」

彼の口調からは自分の作品への自信が窺える。こうなるとこの「簡易版」の元になった魔道具が気になった。

「魔弓だからな、お前には向かないよ。それに『簡易版』といったが『劣化版』といった覚えはないぞ」

「・・・・・いいのか・・・・・？」

自分はこの友人との約束を破るのだ。

子供の頃に軽い気持ちでかわした約束だ。今となってはお互いに

立場が違う。だから仕方がない。もっともらしい理由なら幾らでも浮かんだ。

だがそんな薄っぺらい理由が浮かべば浮かぶほどに、心苦しくなっていく。自分はこの大切な友人を裏切ってしまった。それなのにイストは自分に怒るでもなく、こうしてまだ友人として接してくれている。

それが、どうしようもないほどにつらかった。

「お前のために作った祝いの品だ。要らないなら捨てるしかないな」

肩をすくめながらイストはそういった。まるで、

「馬鹿なことを言うな」

とでも言う様に。

「ありがとう」

あらゆる思いを詰め込んで、クロノワは礼を言った。それに満足したのか、イストは笑顔で頷いた。

「じゃあな」

「イスト！」

背を向け暗がりに溶け込むようにして去ろうとする親友を、クロノワは呼び止めた。

「私は、いや、俺はこの世界を狭くしてみせる」

玉座から立ち上がり、月光を浴びながらクロノワはそう宣言した。
これが、彼が自分の野望を口にした最初であった。

イストの顔は暗がりに隠れてよく見えない。だがクロノワは彼がニヤリと笑ったのが分かった。

「楽しい時代になりそうじゃないか」

そういい残して、イストの気配は消えた。

クロノワは再び月に視線を転じた。

彼の胸の中には、はじめての野望が確かにある。ふつふつと湧き上がる気持ちの名前を彼は知らない。だが彼は、今までにない高揚を感じていた。

―第二部、完―

第二話　モントルム遠征　エピローグ（後書き）

というわけで「第二話　モントルム遠征」楽しんでいただけたでしょうか。

既にお読み頂いた方はお分かりと思いますが、この第二話はクロノワの話になっています。

イストはあくまでも魔道具職人。歴史の表舞台にはほとんど出てきません。なのでどうしても表の歴史を動かす人物が必要なんですよねぇ・・・・・。

そんなわけで創ったキャラがこの「クロノワ・アルジャーク」という人物です。彼の言う「野望」の内容は、おいおい明らかにしていきたいと思います。

次からは「第三話　糸のない操り人形」が始まります。こちらも宜しくお願いします。

第三話　糸のない操り人形　プロローグ（前書き）

第三話です。

今回はアバサ・ロットを意識した話にしたつもりです。
でもそのせいか、やっぱり主人公は出番が少ないような・・・・・。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

第三話　糸のない操り人形　プロローグ

名は存在のために
姓は血筋のために
そして、
決断は未来のために

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第三話　糸のない操り人形

「納得できません！！」

若い女性、というよりまだ少女だろう。少女の声が校長室に響き渡った。

カンタルク王国という国がある。
エルヴィヨン大陸の中央部からやや東、オムージュの西南に位置している国で、版図は六三州。大国というほどではないが、他国からの一方的な圧力に屈しない程度の国力を保持している。

その王都フレイスブルグにカンタルク王立士官学校がある。ここで育成された軍人たちは、いわゆる「叩き上げ」の兵士たちとは異なりエリートであり、組織の運営や運用に関わっていくことになる。

この学校に入る生徒たちはさまざまな階級や生活背景をもっているが、大別すれば大きく二つのグループに分けることができる。

まず第一に貴族の子弟たち。固有の領地を持たない下級貴族の子弟や、大貴族でも家督を継がない次男・三男などは、士官学校に入り軍での栄達を目指すことが多い。

第二に貧しい者たち。士官学校の学費は基本的に無料だ。タダで学問を学べ、しかも少ないながらも小遣いまでもらえる士官学校には、苦しい生活をしている平民の子供たちが多く入学を希望する。人買いに非合法に売るよりはずっといいと思うのだろう、女子の生徒数が多いのも特徴の一つだ。あくまで、他国に比べて、だが。

「なぜ魔導科首席卒業のわたしが、志望部隊に配属されないのです！？」

カンタルク王立士官学校には幾つかの科があるが、中でも最も人気があるのが魔導科だ。この科は卒業すると自動的に「カンタルク王国認定魔導士」の資格を得ることができる。

卒業後の部隊配属の希望は成績上位者が優先される。しかし、大陸暦１５６１年度の魔導科首席卒業生、アズリア・クリークは志望部隊への配属を拒否されたのだ。

アズリア・クリークは母子家庭で育った。母は若い頃に貴族の屋敷で下働きをしており、そこで御手つきになって彼女を身ごもったのだ。アズリアは自身の出生についてある程度知っているが、父親に当たる貴族の名前と家名は知らない。

「それについては私（わたくし）からご説明いたしましょう」

目の前の校長は一向に口を開こうとしない。声のしたほうを見る

と、燕尾服を一部の隙もなく着込んだ初老の男が立っていた。

「私(わたくし)はヴァーダー侯爵家の執事でエルマーと申します」

「ヴァーダー侯爵家・・・・・・」

いきなり出てきた大貴族の名にアズリアは驚いた。

ヴァーダー侯爵家は代々カンタルク王国の魔導士を統率する立場にあり、その当主は「魔導卿」と呼ばれている。その立場ゆえに当主も優秀な魔導士であることが求められており、そのため血筋よりも実力を重視する家風がある。

「ヴァーダー侯爵家が一学生に何の用でしょうか」

自身の生まれのせいか、アズリアは貴族というモノが嫌いだ。自然、言葉も刺々しくなってしまう。

「アズリア様の部隊配属の件ですが、侯爵家が裏から手を回させていただきました」

「なっ！？」

今度こそ、アズリアは言葉を失った。確かに軍に発言力のあるヴァーダー侯爵家ならば、学生一人の部隊配属に介入して握りつぶすぐらい、わけないだろう。

「ですから、アズリア様が正規の手続きでどこかの部隊に入ることは不可能とお思いくださいい」

淡々とそう告げるエルマーの目は、濁ってはいない。濁ってはいないが輝いてもいない。鏡のようにただ目の前にあるもののみを映

している。どこまでも冷たいその瞳からは、一切の感情が窺えない。

「なぜです！？」

アズリアは叫んだ。なぜ大貴族のヴァーダー侯爵家が平民の一学生であるアズリアの部隊配属に関与してくるのか。

「当主のビスマルク様がお会いになられます。馬車を表に用意してありますので、説明は道すがらにいたしましょう」

「お断りします！」

反射的にアズリアは拒否した。それは頭で考えたものではなく、ひどく感情的な判断で、生理的嫌悪ともいえるものだった。

「学費はどうするのかね」

無情な校長の一言が、彼女の感情のうねりに歯止めをかけた。カンタルク王立士官学校の学費は基本的に無料だ。しかし、対価として卒業後は一定期間軍務に付かなければならない。逆を言えば、軍務に付かない場合は学費を全額納めなければならないのだ。

アズリアはこぶしを握り締め、悔しそうに俯いた。

母は二年前に他界しており、彼女は天涯孤独の身だ。学費を全額など、払えるわけがない。彼女に残った理性はそれを十分に理解していた。

「貴女に拒否権はないのです」

エルマーが静かに、そういった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

馬車に乗り込んでからずっと、アズリアは無言だった。現状は不満だらけだが、それゆえに子どもっぽい抵抗を試みているわけではない。起こった事柄を、ひとまず感情は抜きにして自分の中に収めようと必死なのだ。

それが分かっているのか、エルマーも何も話しかけてこない。

ふう、とアズリアは一つ息をついた。泣くのも憤るのも絶望するのも喚くのも、全ては事態を完全に把握してからだ。

「教えていただきたい、エルマー殿。ヴァーダー侯爵家の魔導卿がわたしに一体何のようがあるというのです」

まるでアズリアから言い出すのを待っていたかのように、エルマーは静かに目を開き彼女を見た。

「では、結論から申し上げましょう」

そういってエルマーは一拍おいた。そして、

「貴女には次期当主となり、ヴァーダー侯爵家を継いでいただきます、アズリアお嬢様」

アズリアの予想をはるかに上回ることを告げた。絶句し、もはや何もいえなくなっている彼女に構わず、エルマーは言葉を続ける。

「ヴァーダー侯爵家が血筋よりも実力を重んじる家風なのはご存知

でしょう」

ヴァーダー侯爵家は、代々カンタルク王国の魔導士を統率する立場にある。しかし、魔導士という連中は、その性質上集団としての修練よりも個人を鍛えることが重視され、そのためか我が強く扱いにくい者が多い。

ゆえにそれを統率する魔導卿たるヴァーダー侯爵は、自身も優秀な魔導士であることが求められるのだ。そのため外から力のある魔導士を当主に迎えるということが、ごく普通におこなわれてきた。現ヴァーダー侯爵であるビスマルク・フォン・ヴァーダー卿も、もとは辺境の下級貴族の出身だし、その妻であるノラ夫人も他の貴族の家から嫁いできた身だ。つまり今のヴァーダー侯爵家は一世代前のヴァーダー侯爵家とは、血縁的なつながりが全くないのである。

ヴァーダー侯爵が魔導卿になるのではない。魔導卿がヴァーダー侯爵になるのだ。

「それは知っています。ですが、なぜわたしが・・・・・」

なぜそこで自分が関係してくるのか。

いくら王立士官学校の魔導科を首席で卒業したからといって、所詮はただの学生である。実力を示したこともなければ、当然実績もない。将来はともかくとして、現状の自分にそのような話が舞い込んでくるのは、いかにも不可解だ。

「旦那様と奥様のあいだにはお子様が一人おられます。長男のフロイトロース様、今年で七歳におなりになります」

だったらなおのことわけが分からない。そうであればアズリアよりもその子どもに期待するのが筋ではないだろうか。

「左様でございます。普通でしたらそれが筋でございます。ですが・・・」

エルマーは痛ましげに嘆息した。

「フロイトロース様は生まれつき足が不自由なのです」

それを聞いたとき、アズリアが感じたのはどうしようもない不快感だった。

「わたしは、そのご子息の代わりということですか」

気に入らなかった。自分が誰かの身代わりとして選ばれたこともそうだし、そんなふうにして自分の子どもを切り捨てる親もそうだ。何もかもが気に入らなかった。

「でしたら、わたしなどよりも魔導卿にふさわしい魔導士はたくさんいると思いますが」

アズリアの口調は苦々しい。だがエルマーは気にせず続けた。

「いえ、貴女でなければいけないのです。アズリアお嬢様」

「お嬢様はやめていただきたい。わたしはまだヴァーダー侯爵家とはなんの関わりもない」

たとえ近い将来養女になるとしても今現在は法的にも血統的にも

無関係のはずである。小さいといえば小さいことだが、不快感も重なりアズリアはかたくなにそう主張した。しかし、

「いえ、貴女にはそう呼ばれる資格がございます。なぜなら・・・・」

エルマーはアズリアにあの鋭い視線をぶつける。

「なぜなら、貴女はビスマルク・フォン・ヴァーダー卿の実のご令嬢なのですから」

第三話　糸のない操り人形？

「入れ」

執務室の向こうから重厚な声がした。その声だけで既に威厳が満ちており、精神的に混乱しているアズリアは声だけで押しつぶされそうになった。

緻密な彫り物細工が施された扉を開け執務室に入る。そこに魔導卿ことビスマルク・フォン・ヴァーダー卿がいた。

年の頃は四十の始めくらいだと聞いた。しかし気苦労のためか、髪の毛には一筋の白髪が混じり、顔にはしわが現れている。だが、その眼光は研ぎ澄まされた剣のように鋭い。その視線を向けられたアズリアは思わず後ずさりそうになる。五腎六腑を刺し通し切り分けるかのような視線だ、とアズリアは思った。

「私がビスマルク・フォン・ヴァーダーだ」

「・・・・・アズリア・クリークです」

かたくなにクリークの姓を名乗ったアズリアにビスマルクはなにも言わなかった。

「エルマーから話は聞いているな」

「・・・・・はい」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あの後、アズリアがビスマルクの娘だと知らされた後、それでもアズリアは抵抗した。何の証拠があるのかと。

「クレア・クリーク様からお手紙を頂きました。自分が死んだ後、娘を頼むと」

その手紙を見せてもらうと、確かに死んだ母クレアの筆跡であった。日付は二年前の母が死ぬ二ヶ月前のものだ。

「母が下働きをしていたのは、ヴァーダー侯爵家だったのですね・・・・」

自身の出生の秘密が明らかになっても、少しの嬉しさもなかった。あるのはただの苦さだけだ。

「で、ですが、わたしがビスマルク卿の実の娘だとして、それでも不可解です」

動揺しつつもアズリアは冷静であろうとした。魔導卿になるには、ヴァーダー侯爵家を継ぐには実力が何よりも重要だと、さきほどエルマー自身がそう言ったではないか。そしてそれは魔導卿たるビスマルクが誰よりもよく理解していることだろう。

「なのになぜ未熟者のわたしに目をつけるのです」

もっとふさわしい魔導士を、もっとふさわしい時期に選んで魔導卿の地位に据えればよいではないか。げんにビスマルクもそうして魔導卿に、そしてヴァーダー侯爵になったはずだ。

「魔導卿になるために必要な資質は魔導士として優秀なことだけで

はありませんからな」

魔導士たちを束ねる立場にある魔導卿は、カンタルク王国国内における魔道具の管理をもおこなっている。そのため魔道具の製造から販売にいたる流通の全て、また素材の価格や種類にいたるあらゆる知識が必要なのだ。

また、軍内部に強力な発言力がある以上、魔導士以外の運用についても知っておかなければならない。それだけではなく周辺諸国とのパワーバランスや、はてには外交関係までをも考えねばならないのだ。

「旦那様はヴァーダー家の養子となられる前は魔導士一本のお方でして、そのため色々と苦労なされたのです」

それゆえ、早い段階から魔導卿に必要な教育を受けさせようというのだ。そのためには若い方がいい。

「だからこそ、貴女が選ばれたのです。アズリアお嬢様」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「午前は講義だ。魔導卿に必要な知識を学べ。午後からは魔導士の訓練。時間があれば私も稽古をつけてやる。夜は社交界のマナーを身につけろ」

淡々と、事務連絡のように淡々とビスマルクは告げた。

「何か質問はあるか」

「・・・・・なぜ今になってわたしを呼んだのですか・・・・・

」

搾り出すようにして、アズリアはいった。

「必要になった。だから呼んだ。それだけだ」

アズリアが何も言わないのを見ると、ビスマルクは彼女に下がるように命じた。執務室の扉が完全に閉まってから、エルマーは主に少々非難めいたことを言った。

「少し・・・・冷たすぎるのではありませんか・・・・・」

諸事情とさまざまな思惑が複雑に絡まって此度の事態になったとはいえ、父と娘の始めての対面である。そう少しそれらしい言葉や態度があってもいいのではないか。

ビスマルクはただ「フッ」と笑った。それは嘲笑の笑いではなく、面白がるような笑い方だった。

「あれも私を父だなどとは思いたくなかろうよ」

先ほど見た自分の娘を思い出す。恐らくは母親似だろう。自分に似なくて良かったと思うのは親馬鹿に似た心境かもしれない。

「しかし運が悪い・・・・・」

手紙を受け取るまでもなく、かつてこの屋敷で下働きをしていたクレア・クリークが自分の子どもを産んでいることは知っていた。よほどのことがない限り干渉するつもりはなかったが、それは逆を言えばいつでも手を出す準備は出来ていたということだ。

「士官学校に入らなければ、魔導科に入らなければ、首席にならなければ・・・・・・」

こんな、およそ考えうる最悪の形で手を出すことはなかった。

「本当に、運が悪い。が、諦めてもらうほかないな」

「旦那様・・・・・」

「魔道具は好きなものを選ばせてやれ」

感傷は終わりだ。魔導卿として、ヴァーダー侯爵としてやるべきことは際限なくあり、そして自分にはそれをこなし続ける責務がある。

「御意に」

エルマーが下がると、ビスマルクは仕事に戻った。

やるべきことは多く時間は少ない。魔導卿とは、ヴァーダー侯爵とは、貴族という言葉から連想されるほどに優雅な存在ではない。いうなれば純然たる役職なのだ。

第三話　糸のない操り人形？

大陸暦一五六三年九月始め、クロノワ率いるアルジャーク軍五万は帝都ケーヒンスブルグへの帰路にあった。オルクスには一万の兵を残してあり、これを元モントルム駐在大使のストラトス・シュメイルが指揮している。

本来、彼はそのような地位にはいないのだが、彼を除けばクロノワしか旧モントルム領の政を掌握できる人物が居らず、かといってクロノワを残してアルジャーク帝国帝都ケーヒンスブルグに凱旋しても意味がない。

「猫の手も借りたいときに、立派な人の手があるのです。使わないわけにいかないでしょう？」

そういってクロノワはストラトスに万事を押し付けたのであった。もっともこれは暫定的な処置であり、旧モントルム領をどのように扱うかは、アルジャーク帝国皇帝ベルトロワが最終的に決めるだろう。

モントルムにおける戦闘は終止アルジャーク軍が優位に立っており、クロノワはその兵力をほとんど損することなく此度の戦争をおえた。そのことは既にアルジャーク本国にも報告されており、これで日陰者だったクロノワ殿下もようやく正しい評価を受けられるとアールヴェルツェなどは、我がことのように喜んでいた。

特に急ぐ理由もないため、移動の速度は比較的ゆっくりとしたものだった。それが、旅に慣れていない人たちには幸いしたらしい。

「使者団の方々の様子はいかがですか、リリーゼ嬢」
「皆疲れてはいますが、一晩休めば大丈夫です。クロノワ殿下」

そう、独立都市ヴェンツブルグの使者団もクロノワたちと一緒に帝都ケーヒンスブルグを目指しているのだ。彼らは基本的に文官でいくら馬に乗っているとはいえ、アルジャーク軍の本気の行軍についていくのはとてもではないが無理だ。

行軍中にリリーゼとクロノワは何度か話をしたのだが、そのとき共通の知人がいることが判明した。すなわちイスト・ヴァーレという知人が。

「なるほど。あいつはそんなことをしていたんですか」

こらえきれず笑いながら、クロノワは楽しそうに言った。リリーゼからヴェンツブルグでの聖銀（ミスリル）にかかわる一連の騒動について聞いたのだ。

「あの・・・殿下・・・・、聖銀（ミスリル）の製法のことは・・・・・・」

話の勢いとはいえ、極秘であるはずの聖銀（ミスリル）の製法について喋ってしまったリリーゼは、かなりあせった様子だ。「やらかした！」と全身で表現している。

「ええ、分かっています。他言はしません。それに、なにか手伝えることがあるかもしれませんね」

聖銀（ミスリル）の製法を大陸中の不特定多数の工房に売る。それが独立都市ヴェンツブルグの、比較的上にいる人たちがやろうとしていること

だ。だが如何せん一都市だけの力では限界がある。大国アルジャーク帝国の助力があればかなりやりやすくなるだろう。

「それにアルジャークが後ろにいれば、万が一教会にバレても、一方的な干渉を受けずにすみますしね」

此度の大併合の結果、アルジャーク帝国の版図は二二〇州になった。このエルヴィヨン大陸でも一、二を争う大国になったのだ。その大国に教会が真正面から対抗してくるとは思えない。

「はぁ・・・・・、そうですね・・・・・」

リリーゼも何とか納得したようだ。

「それにしても・・・・・・」

気を取り直すようにしてリリーゼが話題を変える。

「殿下とあの男が友人同士だったなんて・・・・・」

リリーゼの言う「あの男」とはもちろんイスト・ヴァーレのことだ。

「面白いヤツでしょう?」

「面白いって・・・・・。製法を独り占めするような男ですよ?」

いくら古代文字(エンシェントスペル)が用いられておりリリーゼには読めなかったにせよ、確かにあの時彼女はその場にいたのだ。あの壁に刻まれていた物が聖銀(ミスリル)の製法だと教えてくれてもいいではないか。

「しかもそれらしい宣誓文を捏造してまで・・・・・!」

そのときの怒りを思い出したのか語尾が震えている。

「感動したのに・・・・・・！」

それが口からでまかせで、しかも製法を隠すための方便だったのだ。あの時味わったなんともいえない寂しい落胆と激しい怒りは、決して忘れることが出来ないだろう。

「でも、宣誓文についてはまるっきりの捏造ではありませんよ」

ヴェンツブルグ付近の反乱を指揮していたのはベルウィック・デルトゥードだが、彼の掲げた理想が確かそんな内容だったはずだ。

「下調べの際に見たのを覚えていたのでしょうね。相変わらず芸が細かい」

仮にリリーゼがベルウィック・デルトゥードの反乱について詳しく知っていても、宣誓文の内容に疑問を感じないように、きちんと考えてつくっている。

むぅ、とリリーゼは不機嫌そうに唸った。そんな彼女の様子を見てクロノワはクスリと微笑みをこぼした。

「・・・何でしょうか」

「いえ、なにも」

ギロリと睨むリリーゼを軽く受け流す。

どうにも新鮮な体験だ。十五歳から宮廷で暮らすようになってからというもの、クロノワが親しく付き合ったのは皆彼より年上で、

しかも感情よりも理性や責任を優先させる人たちばかりだった。だからリリーゼのような感情を素直に表現する年下の女の子（彼女が聞いたら怒りそうな評価だが）とこうして話しているのはとても新鮮に感じられた。

「失礼します。お二人とも食事の準備が整いました」

そういって近づいてきたのはアルジャーク軍の女性士官グレイス・キーアだった。

「ありがとうございます、グレイス殿」

女同士のためか、リリーゼとグレイスはすぐに仲が良くなった。二人で色々と男にはいえない話もしているらしい。

クロノワも礼をいい、立ち上がった。空をみればもうすっかり夜の帳が下りている。雲もなく月が良く見えた。

（さて、イスト。君はどこでなにをしているのだろうね・・・・・）

珍しく話題に上った友人をおもい、クロノワは月を見上げた。

第三話　糸のない操り人形？

クロノワが月を見上げていた頃からさらに数時間後、イストは行商のキャラバン隊の馬車の中にいた。勝手に乗り込んだわけではない。護衛の仕事を請けたのだ。

こういった仕事の場合、それほど報酬はよくない。だが目的地までは馬車に揺られて移動ができ、しかも一日三回の食事の心配をしなくていいとあって、イストの様に魔導士ライセンスをもつ旅人にはうってつけの仕事であった。

既に夜半を過ぎている。見張り番は起きているだろうが、大半は寝静まっていた。壁にもたれかかり眠っていたイストが、僅かに身じろぎそして目を開けた。よく見れば薄く汗をかいている。

「・・・また・・・悪夢・・・・・か」

小さく呟くイストの声に動揺は見られない。ただ寂しさと苦さだけが含まれていた。

イストの記憶は孤児院から始まる。人里はなれた孤児院で、古い寺院のようなものを利用していた。

イスト・ヴァーレは己が身の素性を知らない。両親のことを知らず、誕生日も分からない。自分が今何歳なのかさえ、正確にはわからない。

ただ、それを気にしたことはなかった。気にするような年齢でも

なかったこともあるが、回りにいる兄弟たちは皆同じような身の上で、それでもたくましく生きていた。そう思う。

幸せだったのだろう。少なくともあのときまでは。

孤児院を襲ったのは、なんてことのないただの盗賊だった。しかし成人男性のいない、女子どもだけの孤児院には十分すぎるほどの脅威であった。

みんな、殺された。

ついさっきまで暮らしていた家は轟々と炎のなかで朽ちていき、駆けずり回って遊んだ広場には兄弟たちが血を流しその屍をさらしていた。

小さな口が僅かに動く。

「助けて」

と、言ったのだろうか。目から命が消えていく。

悲鳴、振り上げられる凶刃、赤く染まった兄弟たち、血の臭い、炎の熱、激痛、鉄の味、うつろな瞳・・・・・・。

不思議と、盗賊どものことはあまり覚えていない。

あのときの記憶はひどく断片的で、しかしそれだけに一コマ一コマは強烈に焼きついている。

赤い、赤い悪夢だ。

盗賊があの孤児院を襲った理由は後で知った。なんでも大昔の魔道具が封印されているという情報を掴んでいたらしい。そして結局デマだったそうだ。

あの時、イストは逃げた。逃げて逃げて逃げて森の中をさまよい、そしてその当時のアバサ・ロットであるオーヴァ・ベルセリウスに拾われ、そのまま弟子として魔道具製作のイロハを教わることになった。

それはいい。あの時オーヴァに拾われたのは、望みうる最大の幸運だった。だが、それゆえに考えてしまうのだ。

（あの時、逃げていなかったら）

と、そう考えてしまう。

埒もないことだと分かっている。逃げていなければ、殺されていただろう。逃げることは、あの時できる最善の行動だった。生き残ったことを喜びこそすれ、責める人間などいない。死んでしまった兄弟たちの分も精一杯生きることが、自分にできる最大のことだ。運よく魔道具職人としての才能にも恵まれた。自分なら出来ることがたくさんある。そういう仕事をしていけば、きっとみんなうかばれる。

正当化する言葉なら、いくらでも浮かんだ。でも同時に分かってしまうのだ。その言葉がどうしようもなく軽くて薄っぺらなことが。そしてその言葉を、自分はどうしても信じられないということが。

（あの時、オレにはできることがあったんじゃないだろうか・・・・

・・）

分かっている。それは傲慢な想像だ。

だが分かっていても、考えるのを止められないのだ。あの時自分には出来ることが、やるべきことがあって、それをしていればもっとマシな未来になっていたのではないか、と。どうしてもそう考えてしまう。

そういう思考はいい。だが、そういうことを考え続けている自分を想像すると、鬱になる。

「酒が・・・・・飲みたいな・・・・・」

あいにくと、切らしている。

悪夢を見るようになったのは、オーヴァに拾われてからすぐのことだ。そして悪夢を紛らわせるために、酒を飲むようになったのも。以来、十年以上の付き合いになる。元々酒に強い質ではなかったことが幸いしたのだろう。ギリギリの綱渡りは、足を踏み外すことなく今日まで続いている。

酒を飲めば現実から離れることができた。夢と現の間を漂えば悪夢の痛みを、たとえ一時的にとはいえ忘れることができた。靄のかかった鈍い思考でなら、全てを皮肉っぽく眺めることができた。

悪夢で起きた夜は、いつも酒を飲んだ。

オーヴァは何も言わなかった。深い思慮があったのかもしれないが、あの師匠は判断基準が吹っ飛んでいたから、子どもの飲酒を問

題視していなかった公算が強い。自分から飲み比べを挑むような人だし。

孤児院を襲った盗賊たちは、その国の国境警備隊によって壊滅させられたらしい。事件は既に解決され、もはや過去のことになったのだ。

過去には涙と花束を。時間は残酷なまでに平等で優しい。

もはや、手を伸ばすことさえできはしない。風化していくはずの傷跡は、赤い悪夢を見るたびに新しくなっていくというのに。

盗賊どもを自分の手で殺せていたら、この悪夢は自分から離れるのだろうか。

（それは・・・・・ない、な・・・・・）

悪夢を見た後、盗賊どもへの憎悪は残らない。そもそも、あの悪夢に盗賊ははっきりとは出てこない。恐怖は随分前になくなった。今残っているのは、無力で滑稽な自分だけだ。

「ああ、まったく・・・・・」

イストは考える。自分はこの悪夢を克服できるのだろうか。乗り越えてその先に進めるのだろうか。

そういう自分が、まったく想像できない。

目を閉じる。今夜はもう眠れそうにない。

第三話　糸のない操り人形？

悪夢を見た夜から数えて二日後、イストはカンタルク王国サンバント州のとある町に来ていた。

朝食が終わり、人々が本格的に働き出す時間帯だ。乾いた空気は心地よく、青く澄み渡った空は、人々の営みを祝福しているかのようだ。

イスト・ヴァーレはご機嫌だった。しかも、この清々しい陽気とはまったく関係のない理由で。

「・・・本当に・・・・よろしいのですか・・・・・？」

呆れを通り越し、もはや驚愕の域に達した酒屋の店員の女性がイストに再度確認する。

「うん、よろしく～」

「はぁ・・・・」

彼女の前には空の魔法瓶が並べられている。

魔法瓶は中に入れた液体の温度や品質を一定に保つ効果のある魔道具だ。この時代、ガラスは比較的普及していたが、それでもある程度値が張った。つまり、お酒を買うたびにガラスの入れ物も買っていると、結構な出費になるのだ。そこで、魔法瓶などの容器を自分で用意して、酒屋に買いに来る客が多かった。

そういう意味では目の前のこの客も、一般的な部類に入るのだろう。

その、魔法瓶の数さえ考えなければ。

カウンターに並べられた魔法瓶は、軽く三十本はあるだろう。さらに彼の足元をのぞけば魔法瓶を納めた木箱が一つ二つ・・・・・。

どんだけ買う気ですか・・・・・。

「では確認しますが、赤ワインと白ワインがそれぞれ十本ずつ、ブランデーとウィスキーが五本ずつ、残りはワイン以外の果実酒や各種リキュールを、でよろしいのですね」

「そそ、それでよろしく」

では、といって店員は奥に下がっていった。一人では手に余るから応援を呼びに行ったのだろう。すぐに複数の店員が出てきて作業を始めた。カウンターの奥にある酒樽から魔法瓶にお酒を移していく。

「いやいや、香りさえ久しぶり」

とは言っても三日程度の話だが。

「そういやさ～、町の外れに結構いいつくりの屋敷があるよな」

芳醇な香りを楽しみながら、イストは店員に声をかけた。

「ああ、ヴァーダー侯爵の別荘ですよ」

ヴァーダー侯爵と聞いて、イストは頭の端っこでホコリを被って

いた情報を引っ張り出す。確か、カンタルクの魔導士の親分だったはずだ。

「親分って・・・・・。まぁ、似たようなものですが」

店員の話によると、ヴァーダー侯爵自身があの別荘に来ることは稀らしい。今のヴァーダー侯爵であるビスマルク卿は一度も来たことがない。

「じゃあ、あの屋敷は使ってないのか。もったいない」

「いえ、ご子息のフロイトロース様があの屋敷で暮らしておいでです」

ビスマルクとその夫人ノラの間に生まれた子供、それがフロイトロース・フォン・ヴァーダーである。魔道卿の子として生まれ、当然のことながら次期魔道卿そして次期ヴァーダー侯爵になることを期待される身である。だが今現在、彼には欠片の期待も寄せられていない。

なぜなら、フロイトロース・フォン・ヴァーダーは生まれながらに足が不自由だったからである。

ビスマルク卿は、というよりもノラ夫人は考えうる限りの手を尽くしたらしい。国中の名医を集めて息子の足を治療させようとした。だが、帰ってきた答えはいつも「治療は不可能です」という答えだった。

また、治せそうな魔道具も探した。だが、見つからなかった。夫たる魔道卿の情報網を用いてもフロイトロースの足を治せそうな魔道具は見つからなかったのである。

万策尽きたとき、ノラ夫人は自身の息子をこの王都から遠く離れたサンバント州の別荘に移した。いや、「移した」という表現は穏当すぎるだろう。「軟禁した」というべきであろう。少なくとも彼女は自身の「汚点」が一生涯人の目に触れないことを望んでいたのだから。

フロイトロースがあの町外れの屋敷で暮らすようになってから、今年で四年がたつという。今年で八歳というから、およそ人生の半分をあの屋敷で過ごしたことになる。だが、彼の感じ方は恐らくこうだろう。

「物心ついた頃からずっと」

幼い貴族に同情するように中年の女性が口を開く。

「きっと、ご両親のお顔もお声もご存知でないのだろうねぇ・・・・」

イストはただ肩をすくめただけだった。他人がどれだけ不本意な境遇にあろうとも、彼は興味を示さない。そこから抜け出すかどうか、そういう選択を含めそいつの人生だと割り切っているからだ。

「やりたいことは誰かから許可を貰って、まして命じられてやるもんじゃない」

そう、イスト・ヴァーレという人間は考えている。

「最近、何か変わったことは？」

フロイトロースの話しに一区切りを付けて、イストは話題を転じ

た。

「そういえば・・・・・・」

フロイトロースの腹違いの姉にあたる、アズリア・フォン・ヴァーダーがあの屋敷に来ているらしい。

「へぇ・・・・・」

彼女の話は、カンタルク王国に入ったばかりのイストも聞いている。さすがに貴族のゴシップは広がるのが早い。

（おもしろくなりそうじゃないか・・・・・）

イストは内心、ほくそ笑んだ。

ちょうど、魔法瓶にお酒を移す作業が終わった。代金は三八ミル（銀貨三八枚）で、およそ一シク（金貨一枚）だ。酒代に金貨を使うという、一般人には到底考えられないお金の使い方をして、イストは酒屋を後にしたのだった。

第三話　糸のない操り人形？

「フロイト、入るぞ」

そう声をかけて部屋に入る。つい最近会ったばかりの弟は、大きなベッドから上半身だけを起こしていた。そして、こちらを見て満面の笑顔を浮かべた。

「姉上！」

まだ声変わりしていない、かん高い子供の声。同じ年頃の子どもと比べればおとなしい声だ。いや、「おとなしい」という評価は正しくない。「弱々しい」というのが正しい。

ビスマルクもノラも、アズリアのことを彼に知らせていなかった。彼女がヴァーダーの姓を名乗るようになってから、既におよそ一年半がたつというのに、だ。それでも、フロイトは数日前に突然できたこの腹違いの姉に、無邪気に懐いてた。

フロイトの満面の笑顔に、自然とアズリアの表情も緩んだ。

「ん、顔色はいいな。今日はどうする」

「庭に出たいです」

今日もまた、同じお願い。

八年という決して長くないこれまでの人生のほとんどを、ベッドの上で過ごしてきた少年にとって、ほんの数歩先の「外の世界」で

さえ、驚きと発見に満ちた新世界であった。

「分かった。車椅子があるから、下まで行こうか」

はい、とフロイトが返事をする。弟の背中と膝に手を回し抱き上げる。フロイトもアズリアの首に手を回して体を固定する。

抱き上げたフロイトは軽い。特に動くことのない足は、本当に細く骨と皮だけだ。

「今日は天気がいいぞ。湖の方まで足を伸ばしてみようか」

一瞬胸の中に生まれた哀れみをフロイトに悟られぬよう、アズリアはことさら明るい声を出した。きっと、自分には彼を哀れむ資格などないのだから。彼女の提案にフロイトも喜ぶ。

車椅子は、屋敷の侍女が階段の下に用意していた。その車椅子にフロイトを座らせる。

「さあ、行こうか」

待ちきれない様子のフロイトに、後ろから声をかける。彼の興奮が、車椅子を押す手に伝わってきた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

およそ二ヶ月前、アルジャーク帝国がモントルム王国とオムージュ王国を滅ぼして併合した。カンタルク王国はオムージュと北東の国境を接している。ともすればアルジャーク帝国の脅威が、このカンタルク王国にも及ぶかもしれない。

カンタルクの宮中は大騒ぎになり、人々は意味もなく右往左往した。アルジャークの版図は二二〇州。カンタルクの実に三倍以上だ。もしもアルジャークが牙をむけば、カンタルク一国で抗することは不可能だろう。

「この事態に際し、対応を協議する」

という名目で、王都フレイスブルグでは連日、主だった貴族たちを集めて会議がおこなわれている。

「このカンタルク一国でアルジャークと事を構えることは不可能である。いざ戦端が開かれる前に同盟を締結すべでござろう」

「馬鹿な。わざわざ格下の相手と同盟を結ぶ国がどこにある。よしんば結べたとして、それは属国の立場に甘んずるということだ」

「左様。ここは周辺諸国に呼びかけ、対アルジャーク同盟を締結することが最善であろう」

「それは南のポルトールにも声をかけるということか」

「馬鹿馬鹿しい！我がカンタルクとポルトールは因縁の間柄。かの国の力を借りるくらいならば、アルジャークの属国に甘んじるべきであろう！

「それは暴言が過ぎますぞ！そもそも・・・・・・」

まとまるはずのない会議だ。とはいえその立場上、魔道卿たるビスマルクはこういった会議に出席せざるをえない。

「しばらくはそちらにかかりきりになるだろう。お前がこの家に来てからまともな休みはなかったし、いい機会だ、しばらく休むといい」

国家の大事を「いい機会」とは不謹慎な気もするが、実際アズリアがヴァーダー侯爵家に来てからのおよそ一年半、文字通り休日など存在しなかった。

そんなわけで、アズリアは彼女の意思や都合とはまったく関係のない理由で、しばしの休暇を得ることになった。そして、休暇を取るのであれば、この機会に腹違いの弟に当たるフロイトロースに合っておきたいと、そう彼女は思ったのだ。

ゆえに、今彼女はここ、ヴァーダー侯爵家の領地であるサンバント州にある別荘に来ている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昼食の後、午前中にフロイトを連れてきた湖に、アズリアは一人で来ていた。魔道具の訓練をするためだ。

午前中のフロイトのはしゃぎようはすごかった。目を輝かせて視界に入るもの全てに興味を示し、なんにでも手を伸ばした。危うく車椅子から落ちそうになったことも、一度や二度ではない。

午後も来たいといっていたが、やはり疲れていたのだろう、お昼を食べたら眠ってしまった。幸せそうな弟の寝顔を思い出し、自然とアズリアも微笑を浮かべた。

「さて・・・・」

黒いケースから魔弓を取り出し、意識を訓練のほうに集中する。この魔弓はアズリアがヴァーダーの姓を名乗るようになったとき、彼女が自分で選んだものだ。以来、約一年半の付き合いになる。勘

められて魔剣も一緒に選び、そちらも訓練を積んでいるが、やはり合っていると思えるのは魔弓のほうだ。

魔弓は二種類に分けることができる。矢を用いるものと、用いないものだ。前者は矢の飛距離や威力を上げる魔道具で、後者は使用者の魔力を練り上げて放つタイプのものだ。アズリアの使っている魔弓は後者に当たる。

「ようやく手に馴染んできたな」

そう実感する。

彼女がヴァーダーの姓を名乗るようになってから今日までのおよそ一年半、文字通り一日として欠かさず訓練を積んできた。いつも稽古を付けてくれるエルマーや、「時間があれば相手をしてやる」といったその言葉通りにしてくれているビスマルクといった教師たちは、いずれもアズリアよりも格上の強兵（つわもの）たちだ。彼らの稽古は厳しいが、確実に糧になっているという実感がある。

「ふぅぅぅぅ」

息を大きく吐き、集中に入る。余計な思考が消え、神経が研ぎ澄まされていく。

手ごろな大きさの石を湖の水面に向かって投げる。左手に持っていた魔弓をすぐさまかまえ、弦を引き魔力を練り上げて矢を形成する。石が水面に落ちる寸前を見計らって射る。

――――ピィィィン・・・・・

射抜かれた石は粉々に砕け、いくつもの波紋を水面に作り上げた。

弦の奏でる音だけが余韻に残る。

同じ動作を何度も繰り返す。石を投げては射り、また投げては射る。石を投げる高さや距離を変えながら、何度も何度も同じ動作を繰り返していく。

「ふむ」

四十射ほどしてからアズリアは手を止めた。命中率は八割半ばといったところか。

「まだまだ甘い」

額に浮かんだ汗を拭う。大きく深呼吸してから、後ろに意識を向ける。

「それで？わたしに何か用か」
「あれ、気づいてたのか」
「なにを白々しい」

気配を隠そうともしていなかったくせに。

後ろを振り返る。そこにいたのは一人の男だった。年の頃は二十代の始めくらいで、背丈は１７０半ばといったところか。整った目鼻立ちをしているが、取り立てて美形というわけでもない。だが、黒にちかい藍色の瞳は皮肉っぽい光と強い意思を放っており、彼の存在に生気を与えていた。

右手で抱えるようにして、杖を寄りかかった木に立てかけている。彼の身長より少し長いくらいの杖で、先端の歪曲した部分にはとこ

ろどころ金属のコーティングがなされている。そして左手には、なにやらパイプのようなものが白い煙を吐き出していた。

「タバコは遠慮してもらいたい」

アズリアはタバコ嫌いだ。臭いはしていないが、それでも気持ちのいいものではない。

「ん？ああ、これか」

そういって男は左手に持ったパイプのようなものをもてあそんだ。

「こいつは煙管型禁煙用魔道具『無煙』。タバコじゃないから大丈夫だよ」

煙も水蒸気だしな、と男は笑った。そういう問題ではないと言おうとしたがやめた。なにを言っても無駄な気がしたのだ。

内心ため息をつく。

そんなアズリアの心のうちを、恐らくは意図的に無視して、男は「無煙」とかいう煙管型の魔道具を吹かした。白い煙（本人の言を信じるならば水蒸気）を吐き出す。忌々しいがその姿は様になっている。

「それで、お前は何者だ」

少々うんざりしながら、男に正体を尋ねる。

「イスト・ヴァーレ。しがない流れの魔道具職人さ」

肩をすくめて男は飄々と答えた。頭が痛くなってくる。こういう手合いにはさっさとお引取り願うとする。

「ここはヴァーダー侯爵家の私有地だ。関係のない者は立ち去ることだ」

「お前がそんなことを言うのか？アズリア・クリーク」

「・・・・・・もはや意味のない名だ」

アズリアは答えるまでに数瞬の沈黙を先立たせた。そうかい、と言ってイストは肩をすくめ、白い煙（水蒸気らしいが）を、フゥ、とはいた。彼が手に持った「無煙」とかいうらしい魔道具の火皿からも同じものが立ち上っている。

なぜこの男は、今更私を「クリーク」の姓で呼ぶのだろう。ヴァーダーの姓を名乗るようになっておよそ一年半。ようやく違和感がなくなってきた。だが、それは同時にクリークの姓を名乗っていた頃の自分が、消されていくかのような、そんな気持ちになることがある。

名の否定は、存在と過去の否定だ。

ヴァーダーの姓を呼ばれるたびに、過去の自分が、思い出が、消えて聞くように感じる。母が精一杯育ててくれたことも、自分が努力したことも、全て消されて無かったことになるようで、虚しさと寂しさを感じることがある。

だからと言うのは変かもしれない。けれどもクリークの姓で呼ばれることに、鈍い痛みが伴うのは、どうしようもない事実だ。

「そういや、お前の弟・・・・」

「フロイトがどうかしたのか」

言葉に険がこもる。フロイトには会ってからほんの数日しかたっていないが、アズリアは事情を良く知らない他人が彼の話をするのを嫌っている。足が動かなくてかわいそうとか、そういう安っぽい同情はたくさんだった。

だが、イストが口にしたのは、アズリアが予想しなかった言葉だった。

「足、動かすだけなら方法はあるかもしれないぞ、と」

「フロイトの足を治せるのか！？」

アズリアは思わずイストに詰め寄った。

「治すのは無理だ。オレは医者じゃないからな。だが、結果的に動くようになるだけなら、意外と方法はあるもんだ」

実際に見てみないとわかんないけどな、とイストは付け足した。

「なんだっていい。あの子の足が動くのなら・・・・・」

きっと、喜ぶだろう。日陰者扱いの生活も変わるに違いない。

「嬉しそうだな」

意外そうにイストはそういった。アズリアとしては、彼がなぜそんな反応を示すのか、そのほうが意外だった。

「嬉しいさ。嬉しいに決まっている」

「本当に考えてないのか、考えないようにしているのか・・・・・・。まぁいい」

無煙を吸い、白い煙（水蒸気らしいが）を吐き出す。それから誰にともなく、呟くようにしてこういった。

「フロイトロース・フォン・ヴァーダーの足が動くようになるとはどういうことか、一度良く考えてみることだ」

そういって、イストは背を向けて去っていった。アズリア・フォン・ヴァーダーに、意味深な言葉を一つ残して。

第三話　糸のない操り人形？

ノラ・フォン・ヴァーダーにとって自身を取り巻く昨今の状況は、決して面白いものではなかった。

「すべてフロイトロースが悪いのです」

自身の息子であるフロイトロースの足が不自由で、魔道卿になるのが不可能であることや、その後釜に座ったのがアズリアなどという、どこの馬の骨ともしれない娘であったことも、すべてが面白くなかった。

ノラの父はヴィトゲンシュタイン伯爵といい、カンタルク王国において由緒正しい家柄である。彼は自身の娘を愛してはいたが、貴族としてごく普通に彼女に政略結婚をするよう求めたし、またノラ自身もそのことを当然と思い受け入れていた。

ヴィトゲンシュタイン伯爵が愛娘の嫁ぎ先として目を付けたのは、政治と軍の両方に強力な発言力のある魔道卿、ヴァーダー侯爵家であった。当時結婚などするつもりのなかったビスマルクに、彼は強引に娘を娶らせ、またノラもおしかけるようにしてビスマルクのもとに来たのであった。

魔道卿の義理の父として権勢を振るうつもりでいたヴィトゲンシュタイン伯爵のもくろみは、しかしすぐに崩れた。ビスマルクは彼の介入を、政治であれ軍事であれ一切許さなかったのだ。

「これは魔道卿の責ゆえ、口出しは無用に願いたい」

そういうビスマルクのプレッシャーに押され、ヴィトゲンシュタイン伯は引き下がらざるを得なかった。ビスマルクにしてみれば、たかだか姻戚関係ごときを盾にして、国の行く末に関わる決定に口出しをされてはたまったものではなかったのだろう。魔道卿の権力は、有象無象の貴族どもがゲーム感覚で玩ぶそれとは図太い一線を画しており、それゆえに資格の無いものが関与することは許されないのである。

しかしヴィトゲンシュタイン伯は諦めなかった。目の前の権力を諦められないという意味で、彼は正しく有象無象の貴族でしかなかったわけだ。

「ノラよ、男の子を産むのだ。次の魔道卿をな」

彼が次に目を付けたのは、魔道卿の祖父という地位だった。幼い頃から自分の影響下に置き、魔道卿になった暁には傀儡にしようという魂胆だった。しかしここでも彼は浅はかであったと言うしかない。魔道卿とは血筋よりも実力が重視される役職だ。ビスマルク自身もそうして選ばれたし、またそういう基準で後継者を選ぶだろう。

今、後継者として育成しているアズリアでさえ、不適格と思えば躊躇なく切り捨てるに違いない。そもそも彼女が後継者として選ばれたのも、王立士官学校の魔道科を首席で卒業するという秀逸な成績を残したからであり、ただビスマルクの娘だからという理由ではないのだ。

だが、ノラやヴィトゲンシュタイン伯にはそれがわからない。フロイトロースの足が動かなかったから、次の魔道卿になれないから、これ幸いと自分が下働きの女に産ませた娘に後を継がせようとして

いると、そう考えた。

「足さえ、フロイトロースの足さえ動けば・・・・・」

そう思うヴィトゲンシュタイン伯親子の思いは怨念に近い。

ノラはフロイトロースが次の魔道卿にならない限り、自分がビスマルクと政略結婚した意味がないと正しく理解している。ならば今の自分はただの役立たずではないか。そんなこと、彼女のプライドが許さない。

ヴィトゲンシュタイン伯にしてみれば、絶大な権力まであと一歩なのだ。少なくともそう思っている。ヴィトゲンシュタイン伯は有象無象の貴族らしく権力に対する執着心は人一倍で、そんな彼がこの現状で諦めが付くはずがないのだ。

ヴィトゲンシュタイン伯は早く次の子どもを産むようノラをせっついた。ノラはまだ十分に若く魅力に溢れた女性だ。二人目はすぐにできると彼は思っていた。しかし、彼女はどうしてもそうしようとはしなかった。

欠陥品も一人だけであれば偶然ですむ。そして自分は少なくとも人々から同情を受けることはできるだろう。だがもしも、もしも次の子供も、体が不自由な欠陥品であったとしたら・・・・？

（わたくしまで、まるで欠陥品みたいではありませんか・・・・！）

その言い訳のできない欠点を、彼女のプライドは恐れる。故に彼女は二人目の子どもをつくらない。否、つくれない。

それぞれが、それぞれに思惑を持っている。複雑に絡み合ったそ

れは、一見どうしようもなく堅牢そうに見える。そういう現状の上に、アズリアとフロイトロースの姉弟は立っている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フロイトロースが目を覚ますと、そこには見慣れた天井があった。窓からは光が差し込んでおり、まだ十分に明るい。

（お昼を食べて、そのまま・・・・・）

寝てしまった。寝起きのぼんやりとした頭でもそれはすぐに分かった。

体を引きずるようにして起こす。枕を重ねて背もたれにし、体重を預ける。

窓に目をやる。ほんの数メートルしか離れていないはずの窓が、ひどく遠く感じた。姉上に頼めばすぐに外に連れて行ってくれるだろう。いや外に出るだけなら、この屋敷の侍女に頼めば出られるだろう。

（でも、僕一人じゃ、できない・・・・）

その事実は少年の心を重くする。

姉のアズリアが来てからは楽しかった。毎日外に連れて行ってもらい、たくさんのものを見た。けれでもそんな毎日は、押し殺したはずの夢を思い出させる。

歩こうと練習したことはある。だが、結局一度として立つことすら出来なかった。どれだけ念じても願っても、彼の両足はそれを無視した。あざと失望ばかりが増え、歩くことを諦めるまでにそう時

間はかからなかった。

（でも、本当は・・・・）

歩きたい。自分の足で立って、歩き、そして走りたい。そうすればきっと・・・・。

俯き奥歯を食いしばり掛け布団を握り締めて、フロイトロースは小さな体を震わせた。

無性に、叫びたかった。

「歩きたいか？」

突然、声をかけられた。誰もいないはずなのに。

驚いて顔を上げると、魔法使いがいた。たぶん魔法使いだ。なにしろそれっぽい杖を持っている。だけど黒いローブも着ていないし、細長いパイプのようなものを吸っている。

フロイトは自分の直感を信じ切れなかった。

「あの、どなたでしょうか・・・・？」

「ああ？そうだな、魔法使いだ」

男はそう答えた。それからニヤリ、と笑って、

「それも、極悪非道で意地悪な」

と、付け加えた。

はあ、と答えるしかない。どうやら自分の直感は間違っていなか

ったらしいが、最近の魔法使いはみんなこうなのだろうか。お話に出てくる魔法使いたちは、もっと真面目と言うか、こんなに軽いキャラではなかったように思う。良いヤツか悪いヤツなのかは別としても。

「魔法使いなんてこんなもんだぞ。みんな自己中で軽いヤツばっか」

そうなのか、とフロイトは納得した。何しろ魔法使い本人がそういうのだから間違いない。

こうして極悪非道で意地悪な魔法使いことイスト・ヴァーレは、純朴な少年を騙した、もとい、からかったのであった。大きくなってこの世に本当の魔法使いなどいない、ということを悟ったとき、彼は自分がからかわれたことに気づくのだろう。

「それはそうと、歩きたいか?」

魔法使いは最初の質問を繰り返した。

「治せるんですか!?」

魔法使いならあるいは、とフロイトは期待のこもった目で彼を見た。

「治すのは無理だ。なにしろ極悪非道で意地悪だからな。オレは」

男はフロイトの期待をバッサリと切って捨てた。

「が、ただ動くようにはできるかもしれん」

フロイトが失望するよりも早く、魔法使いはそういった。ただフロイトには「治す」ことと「ただ動く」ようにすることの違いは良

くわからない。

「分かんなくていいよ。結果的に同じだから」

とりあえず足を見せてみな、と言って魔法使いはフロイトの足を見た。フロイトは思わず目をそらした。動かない自分の足を見るのは嫌いだった。

「ふむ、外傷は特になし。関節も正常。痩せすぎていることを除けば、特にへんなところはないな」

膝や指を曲げながら魔法使いはそう呟いた。

「触られているのは分かるか？」

軽く叩くようにして、魔法使いはフロイトの足に触れた。

「はい」

触覚は正常、と呟いた。そして、

「痛っ」

つねられた。

「痛覚も正常、っと」

恨みがましい目を向けるが、恐らくは意図的に、魔法使いはスルーする。白い煙のようなものを吐きながら、なにやら考えているようだった。

「・・・・動くようになりますか・・・・・」

一縷の望みを込めて、尋ねる。

「過去は未来を保障しない。そして否定も」
「・・・・よく、分かりません・・・・・」
「諦めるな、ってことさ」

寝具をフロイトに掛けなおし、魔法使いは彼の頭をワシワシと撫でた。少し痛い。

「じゃあな」

そっけなくそう言うと、魔法使いはフロイトに背を向けた。その背中はだんだんと透けていき、そして唐突に魔法使いは部屋からいなくなった。なんともそれらしい帰り方だと思った。

寝具の下の、自分の足を見る。何も変わってはいない。けれども、フロイトの心は少し軽くなっていた。

「諦めるな・・・・・か・・・・・」

可能性を否定されなかった。今は、それだけでいい。そう思った。

さっきまでいた、フロイトロース・フォン・ヴァーダーの部屋を外から見上げている男がいる。魔法使いことイスト・ヴァーレである。

「ありゃ、本当に動かないだけ、だな」

なぜ、動かないのかはさっぱり解らない。が、イストはそんなことは微塵も気にしない。なぜなら彼は医者ではなく、魔道具職人だから。そして、

（治すことは無理でも、動かすだけならできる。そういう魔道具なら造れる）

そう考えているから。

（でもまぁ、歩けるようになるかは、結局フロイトロースの手の届かないところで決まるんだけどな）

そういう魔道具を作ることはできる。イメージは既に頭の中で出来上がっているし、そもそもアバサ・ロットの名を持つ彼にとって、それほど難しい魔道具ではない。

だが、出来上がった魔道具をフロイトロースに、あの歩くことを渇望している少年に、直接わたす気は、毛頭ない。そう、なぜなら彼は極悪非道で意地悪なのだから。

（すべてはアズリア・フォン・ヴァーダーしだい・・・・・）

彼女はどんな決定を下すのだろうか。そして、その過程で何を思うのだろうか。

（楽しくなってきたじゃないか・・・・・！）

邪悪に、彼は笑う。これから起こるであろう、苦悩に満ちた喜劇を思い、彼は笑う。

全ては、彼がアバサ・ロットであるがための、その名を継いでいるが故の、茶番だ。けれどもそれはアバサ・ロットが、アバサ・ロットであるためにどうしても必要な茶番なのだと、そうイストは考える。

（さて、お前は認めさせてくれるのかな）

すべては彼女しだい。「アバサ・ロット」とはそういう名で、そういう存在なのだから。

第三話　糸のない操り人形？

「姉上、どうかしましたか？」

フロイトロースのその声で、アズリアは我に返った。視線を落とすと、膝の上に座ったフロイトがこちらを見上げている。

「あ、ああ。すまない。考え事をしてしまった」

今、二人は屋敷の書庫にいる。夕食後にフロイトがねだったので、ここで本を読んでやっているのだ。

フロイトは既に絵本を卒業したらしく、今読んでいるのは子供向けの小説だ。文字が大きく平易な言葉で書かれており、絵本ほどではないが挿絵も多い。船乗りの少年が宝の地図を手に入れ、仲間と協力しながら海賊たちと戦い、ついには財宝を手に入れて恋人と幸せに暮らす、という内容だ。

この屋敷に来てから、毎晩少しずつこうして読んでやっている。

「『水平線の彼方から、黒い帆を張りドクロマークの海賊旗を掲げた船が、こちらに向かってすごい速さで近づいてきます。・・・・・・』」

続きを読む。けれどもアズリアの思考は、別のところへと離れていく。

『フロイトロース・フォン・ヴァーダーの足が動くようになるとは

どういうことか、一度良く考えてみることだ』

あの、イスト・ヴァーレとかいう魔道具職人が去り際に言ったその言葉は、彼女の心に言いようのない影を落としている。

気にする必要はない。無視すればいい。そう分かっている。けれども、彼が語った言葉はそれを許さない。

『足、動かすだけなら方法はあるかもしれないぞ、と』

治すことは無理だ。けれども動かすだけなら、意外と方法はある。彼はそういったのだ。

ゆえに、アズリア・フォン・ヴァーダーは考えねばならない。

フロイトロース・フォン・ヴァーダーの足が動くようになったとき、自分にはどのような影響があるのか、ということを。

「『・・・・船乗りたちは船の積荷を次々と海に捨てていきます。少しでも船を軽くして、海賊たちに追いつかれないようにするためです。・・・・・・』」

昨日、この屋敷の侍女長に泣かれた。

「アズリア様がいらしてから、お坊ちゃまは本当によく笑われます。あんな楽しそうなお坊ちゃまを見るのは初めてです・・・・・！」

そういって、侍女長は泣きながら自分に礼を言ったのだ。

歩けるようになれば、フロイトは喜ぶだろう。そして、もっと笑うようになるに違いない。恐らくは、王都フレイスブルグのヴァーダー侯爵家の屋敷で生活するようになるのだろう。今現在のように、

日陰者扱いされることもなくなる。

足さえ動けば万事うまくいきフロイトは幸せになれる、などと安直に考えられるほどアズリアは子どもではない。足が動こうがそうでなかろうが、苦労も苦痛も後悔も苛立ちも、経験していかなければならない。けれども少なくとも歩ければ、その苦労も苦痛も後悔も苛立ちも、前向きにしていけるのではないかと思うのだ。

「・・・・・突然、空に黒い雲が現れました。風が強くなり、雨が降り始めます。雷の鋭い光と大きな音が響くと、雨がさらに激しくなりました。・・・・・・」

フロイトの足が動くようになったら、ビスマルクは喜ぶだろうか。アズリアがヴァーダーの姓を名乗るようになってからおよそ一年半。ビスマルクは一度として父親の顔を見せはしなかった。彼は良くも悪くも厳格な魔道卿で、その領分を越えてアズリアと接することはなかった。

だから、フロイトが歩けるようになったからといって、ビスマルクが感情を表に出して喜んでいる姿をアズリアは想像できない。もっともこれは、多分にして彼女の独断と偏見に基づく予想だが。

まあ、それでも、嬉しいか嬉しくないかの二択を突きつけられれば、嬉しいと答えるのだろう。彼とて人の親。それくらいの感情は持ち合わせているはずだ。これもまた、多分にして彼女の独断と偏見に基づく予想だが。

ノラ夫人はどうだろう。アズリアとノラにはほとんど接点がない。この一年半の間、姿を見かけることは稀だったし、挨拶程度の簡単な会話でさえ、あるいは両手の指の数ほどもしていないかも知れな

い。

アズリアとしては積極的に彼女を避けたつもりはないが、あるいはノラのほうがアズリアを避けていたのかもしれない。

ゆえに、アズリアはノラ夫人の人となりを知らない。だが、なぜ彼女がヴァーダー侯爵家に来たかは耳に入っている。そういう類のゴシップは、たとえ耳を塞いでいても聞こえてくるものだった。

だからきっと、ノラ夫人はフロイトが歩けるようになれば喜ぶだろう。彼女の父であるヴィトゲンシュタイン伯ともども、狂喜すると言ってもいいはずだ。

喜んで、狂喜して・・・・・・、どうするのだろう・・・・・。

「『・・・・突然の嵐を切り抜けると、海賊船の姿は見えなくなっていました。船員たちはほっと安心しました。さらに、嬉しいことがおきました。鳥が見つかったのです。その鳥は、陸地の近くにしか住んでいない鳥でした。・・・・・』」

では、翻ってわが身はどうだろう。この、アズリア・フォン・ヴァーダーは。

もちろんフロイトが歩けるようになれば嬉しい。嬉しいに決まっている。

アズリアがヴァーダーの姓を名乗るようになった、そもそもの理由の一つはフロイトが生まれつき歩けなかったからだ。少なくとも彼女はそう思っている。そして、その意識は常に小さな痛みをアズリアに与え続けている。フロイトロース・フォン・ヴァーダーの不幸と苦しみの上に今の、少なくとも世間一般には恵まれているとい

える、自分がいる。そういうふうに考えてしまうのだ。

これは、はっきりと分かる。

（わたしは、フロイトに負い目を感じている・・・・）

フロイトが歩けるようになれば、この負い目から解放される。だから嬉しいのだろうか。そう考えると鬱になる。なんだか、彼を純粋に祝福できていないようで。

（自分が楽になりたいがために、フロイトの足が動くことを望んでいるみたいだ・・・・・）

それは、嫌だ。

「『・・・・・その日の夕方、彼らは島に着きました。どうやら、ここが宝の島のようです。急ぐ必要はないと思った船長は、みんなにキャンプの準備をさせました。ですが、彼らは知りません。海賊たちもまた、この島に流れ着いていることを』」

そこまで読んでパタンと本を閉じる。

「今日はここまでにしよう」

フロイトは「もっと」せがんだが、夜も更け彼にはもう寝る時間だ。不満げなフロイトも、また明日と約束すると納得してくれた。

弟を部屋に送ってから、アズリアも自室に下がる。本来は客室なのだが、ほんの数日でもそこで生活すれば愛着が沸く。

（そういうことにこだわるタチではないと、自分では思っていたの

だがな・・・・・）

思えば士官学校の寮を出るときも寂しく感じた。

ベッドに腰を下ろし、再び考え始める。

フロイトの足が動くようになり、彼が歩けるようになれば、自分は彼を祝福できるだろう。しかし、その祝福はともすれば自分の負い目からくるもので、心から喜んでいることにはならないかもしれない。

「心から祝福してあげたいのだけれど・・・・・」

そのために、何か理由がほしいと思った。けれども何も浮かばない。いや、そうやって理由を求めること自体が、なにやら不純な気がするのだ。

ふと、思う。

歩けるようになったフロイトを、心から、負い目とか関係なく祝福してあげたいと思うこと。それは我儘なのだろうか。

（そうかもしれないな・・・・）

結局それはアズリアの問題であって、フロイトの問題ではない。

歩けるようになるのも、それによって環境ががらりと変わるのも、全てはフロイトの問題だ。わたし、アズリア・フォン・ヴァーダーは結局それを外から眺めていることしかできない。わたしが何を思っていたとしても、それでフロイトが歩けるようになるわけではないし、その逆もまたしかりだろう。

二つの違う問題を、ごっちゃに考えていたから悪かったのだ。そう思うと、なにやら気が楽になった。

（フロイトの問題が解決したことを喜べばいい。わたしのほうは、まぁおいおい・・・・）

ひとまず結論らしきものが得られたことに、アズリアは満足した。

第三話　糸のない操り人形？

「一同、面を上げよ」

謁見の間に重々しい威厳に満ちた声が響いた。アルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークの声である。彼の目の前で膝をつき頭をたれているのは、モントルム遠征より今まさに凱旋したクロノワ・アルジャーク以下主だった将兵一同である。

「此度の遠征について、詳細は既に聞き及んでおる。いたずらに兵を損することなくかの国を平定した手腕、見事である」

褒めてつかわす、という形式的な褒め言葉に、クロノワも

「ありがたき幸せにございます」

と、これまた形式的に礼を返す。もとよりこの場でこうして謁見していること自体が、かなり形式的で儀礼的な行事なのだ。大筋が慣例に従った流れになるのは、むしろ当然のことといえる。

皇帝ベルトロワはクロノワの後ろに控えている者たちに視線を向ける。

「アールヴェルツェ将軍も大儀であった。軍の指揮経験のないクロノワが首尾よく遠征をおこなえたのも、ひとえに将軍の勲（いさお）であろう」

「恐縮にございます。殿下の助けとなれたのであれば幸いと存じます」

さらに決まりきったやり取りが幾つか続く。それからふいにベルトロワは話題を転じた。

「ところで見慣れぬご令嬢がおられるが、どなたかな」

まずはクロノワが答えた。

「はっ、こちらは独立都市ヴェンツブルグより参られた使者で、リリーゼ・ラクラシア嬢でございます」

「ああ、ヴェンツブルグの三家が一つ、ラクラシア家のご令嬢か」

三家がヴェンツブルグにおいて強い力を持っているとはいえ、それはたかだか一都市でのことである。にもかかわらず皇帝ベルトロワが、格下の存在であるラクラシア家を知っていたことにリリーゼは少なからず驚いた。

とはいえこれはある意味で当然のことであった。ベルトロワは不凍港を欲しており、そしてアルジャークに最も近い不凍港が独立都市ヴェンツブルグなのである。当然、その都市の情勢はすでに調べ上げている。

リリーゼが一歩前に出て挨拶をする。

「お初にお目にかかります、ベルトロワ皇帝陛下。リリーゼと申します。このたびは独立都市ヴェンツブルグの執政院より親書を持参いたしました」

「この場で目を通していただければ幸いです」

そういうクロノワにベルトロワも、

「拝見しよう」

と、答えた。

親書の入った木箱を手に、リリーゼはいそいそと皇帝の前に出た。ちなみに、このときクロノワは、

（転ばないでくださいよ・・・・）

と、極めて低次元の心配をしていた。そんなクロノワの心配を知ってか知らずか（いや、確実に知らなかったと思われるが）、リリーゼはそんな大ポカをすることなく、親書をベルトロワに渡した。

今、ベルトロワが親書に目を通している。

クロノワは先ほどとは別の意味で緊張してきた。あの親書はヴェンツブルグの執政官たちとクロノワの間で作成したものである。だが現時点では何の効力もない。この場でアルジャーク帝国皇帝たるベルトロワが承認して初めて、効力を発するのだ。彼が気に入らなければこの場で破り捨てられてしまうかもしれない。

（まるで目の前でテストの採点をされているようです）

なんともいえない嫌な緊張感だ。だがそれも長くは続かなかった。

「委細承知した」

その一言で、クロノワの肩の荷が一気に下りた。この瞬間、彼のモントルム遠征が本当に終わったといっていい。

「後日、返事の親書をしたため、リリーゼ嬢が帰路につく際に届けていただくとしよう」

そういってからベルトロワはクロノワに目を向けた。

「親書によれば執政官を一人アルジャーク側から送り込むことになっているが、クロノワよ、誰か意中の人物でもいるのか」

皇帝は試すような目をクロノワに向ける。

「私はヴェンツブルグに関して、なんら権限を持っておりません。どうぞ陛下がお決めになってください」

そう答えたクロノワに対しベルトロワは、

「ふむ」

といっただけで、それ以上は何も言わなかった。おそらくまた後日考えるつもりなのだろう。

「クロノワよ、此度の遠征、まことに大儀であった。褒美を取らせるゆえ、なにか希望があれば申してみよ」

ベルトロワの一言で、場が一気に緊張した。他人ならばいざしらず、皇子であるクロノワがこの場で何を求めるのか、それは多分にして政治的な意味合いと思惑を持つのだ。

この場合恩賞を断ると言うのは、かえって失礼にあたる。かといって分不相応な地位や権限を求めれば、皇帝の椅子を狙っているのではないかという、あらぬ疑いを掛けられるかも知れぬ。

（まがりなりにも皇帝の血をひいていると言うのは、なんとも面倒なことです）

そんなクロノワの内心に、周りにいる高官や武将たちは気づかない。

（さて、クロノワ殿下は何を求めるのか・・・・・）

ある者は目踏みをするように、ある者は見定めるように、それぞれクロノワを注視する。

無難なところで、屋敷だろうか。この宮廷がクロノワにとって決して居心地の良い場所ではないことは、周知の事実だ。精神的にも快適な生活空間を手に入れたいと思うのは、ごく自然なことに思える。

あるいは帝国に伝わる宝物や名剣、魔道具さらには名馬、といった選択肢も考えられる。つまるところ政治的に差障りのないものを願い出るだろうと、その場にいた人々は思っていたのである。

「では、アルジャーク帝国版図二二〇州の全ての行き来について、通行税やそれに類する税を課されないよう進言いたします」

クロノワは頭をたれる。

「この進言、お聞き入れくだされば、これに勝る恩賞はございませぬ」

その場にいた一同は唖然とした。

国境の行き来は言うまでのなく、国内に通行税やそれに類するものが存在すること自体はさほど珍しいものではない。貴族たちが自分の領地に入るものに税を課すことは良くあることだし、自治権を持つ都市（例えばヴェンツブルグのような）においても同様の税をとることが普通だ。

今回の大併合で、アルジャーク帝国はオムージュとモントルムの版図を得た。それは国境線が三つ消えたことを意味している。それぞれの国境で課されていた入国税や通行税などは、ひとまず減額されるが当面は（名目は変わるだろうが）残るだろう、というのが大方の予想であった。

クロノワはそれを、一度に廃止せよという。

クロノワした進言の意味はわかる。これは帝国国内の行き来を自由にせよ、ということだ。その目的は物流の拡大と商業の活性化だろう。人やモノの往来を自由にすることによって経済を発展させるというのは、古来より用いられてきた手法だ。

だからその場にいた一同は進言の目的を図りかねたのではない。そう進言したクロノワの意図を図りかねたのだ。

ただ一人、ベルトロワだけはクロノワの意図をほとんど察していた。

（人やモノが動けば、すなわち道ができる）

大量の水を流すためには大きな川が必要なように、大量の人やモノそして金が動けば、そこには自然と太い道が出来上がるのだ。もちろん整備や安全維持のために多額の資金が必要になるだろうが、それは活性化した経済が補ってなおお釣りが来るであろう。

（そうやって出来上がった道は、経済だけではなく軍事にも有用だ）

切り開かれていない森や整備されていない荒れ野を移動するよりも、人が踏み固めた街道を行くほうがはるかに容易だ。そしてそれは軍の移動にも当てはまる。いや、集団で行動しなければならない

以上、個人の旅人と比べ時間的な差はより顕著に現れるだろう。さらなる覇道を求めるベルトロワにとって、これは無視できない要素（ファクター）だ。

（恐らくクロノワが太くしたいと思っている道は二つ・・・）

一つは帝都ケーヒンスブルグから独立都市ヴェンツブルグに至る道。そしてもう一つはオムージュの旧王都ベルーカからヴェンツブルグに至る道だろう。

有事の際には前者は軍の移動に、後者は補給物資の搬送に用いることができる。そして独立都市ヴェンツブルグは帝国唯一の不凍港として、軍と補給物資の集積と移動のための拠点となるのだ。

つまりクロノワは、

「さらなる覇道を求めるならば、そのための下地を作るべきだ」

といっているのである。無論、経済の活性化による税収の増加もその一つだろう。

（広い視野を持つようになったな）

もっともベルトロワもクロノワの考えの全てを察したわけではない。彼は独立都市ヴェンツブルグを人とモノと金が集まる一大拠点とすることで、ここを訪れる船の数を増やそうと考えたのだ。これはベルトロワの覇道のためというよりはむしろ、友人であるイストに語った、

「この世界を小さくして見せる」

という己の野望のための第一歩である。

「その言、確かに聞き入れた」

ベルトロワが宣言する。帝国国内の移動については、通行税やそれに類する税は一切課さない、と。さらに、

「クロノワよ、そなたを旧モントルム領総督に任命する。また独立都市ヴェンツブルグの執政官の選出についてはモントルム総督に一任する」

場がざわめいた。モントルム遠征軍を任されたとはいえ、クロノワは未だ正式な役職を持っておらず、そういう意味では彼はまだ日陰者のままであった。が、此度の功績により彼はモントルム総督に任命された。この帝国内において、一種独立した権限を任されたのである。これはベルトロワが、クロノワのこれまでの仕事や功績を鑑みて、重責に耐えうると判断したと言うことでもある。そう考えるならば、先ほどの問いかけは皇帝が最後の試験をした、とも考えられる。

「謹んで拝命いたします」

片膝をつき頭をたれるクロノワの声を聞きながら、その場にいた人々は正しく二つのことを理解した。

クロノワ・アルジャークはもはや日陰者ではなく、国を支える柱の一つになったということ。そして、

（旧オムージュ領の総督になるのは、レヴィナス皇太子か・・・・・）

ということであった。

クロノワのことはともかく、レヴィナスが旧オムージュ領を任されるであろうことは、この遠征の前からある程度予測されていた。それがこの瞬間、確信へと変わったのである。あのクロノワがモントルム総督に任じられたのであれば、オムージュを平定したレヴィナスがそれ以上の恩賞を受けるのは至極当然な流れであり、であるならば自らが切り取ったオムージュの土地を任せるのが最も無難なのだから。

それにこれならば皇后も文句は言うまい。同じ総督であっても、レヴィナスが任された旧オムージュ領は七〇州であり、クロノワが任された旧モントルム領三〇州の倍以上ある。力関係は歴然だ。

ただ、クロノワとしては任されたのが旧モントルム領でよかった、否、旧モントルム領でなければならなかった、と思っていた。なぜなら旧オムージュ領は内陸であり、海に面していないのだから。彼の野望のためには、海が、港が、船が、どうしても必要だからだ。そのため、独立都市ヴェンツブルグという良港をもつモントルム領の総督に任じられたのは、彼にとって最大の僥倖であったといえる。

このときより、彼の野望が動き出したといっていい。

第三話　糸のない操り人形？

ふう、とビスマルクは大きく息をついた。夕方とはいえまだまだ九月。ここカンタルクは南国ではないが、気温はまだまだ生温い。それでも吸い込んだ新鮮な空気は彼を浄化していくようであった。

「お疲れのようですな、魔道卿？」

声をかけられ振り返ると、大柄な初老の老人が立っていた。顔には年相応のしわが刻まれているが、体には十分すぎる生気が満ちている。声にも張りがあり、老人特有のかすれた声ではない。

「ウォーゲン大将軍」

老人の名はウォーゲン・グリフォード。カンタルク王国の全軍を指揮する大将軍である。役職的にはもう一つ上に「軍事総監」という役職があるが、これは軍隊と言う組織全体をすべる役職であり、ウォーゲンは数々の戦場を監督する総司令官とも言うべき存在である。

難しく考える必要はない。数いる将軍の中で、一番偉い人と思っておけばそれで良い。

ちなみに軍歴もカンタルク軍の中では最も長い。十三歳で初陣に臨み、今年で六十二歳。大小八〇を超える戦場を経験し、未だ衰えを知らぬ。アルジャークの至宝と称されるアレクセイ・ガンドールでさえ、彼の軍歴には及ばないだろう。

「結論の出るはずのない会議じゃが、貴族どものガス抜きも必要じ

ゃろうて」

老将軍の飾り気のない、というより飾る気のまったくない言葉に思わず苦笑する。その点に関しては自分もまったくの同意見だが、さすがにここまで率直にはいえない。この王宮内にあって言いたいことをいえるのは、この老将軍の特権だろう。

とは言え決して粗野な人物ではない。細かい気配りもできるし、何よりも年相応以上の老練さをも身につけているため、腹に一物あるような者にとっては悪魔の如くに恐れられている。

「いえ、そのようなことは。それよりもそちらに研修に出した魔導士たちの様子はいかがですかな」

さすがに同調するわけにもいかず、話題をそらした。ウォーゲンも心得ているのか、それ以上会議については何も言わなかった。

「兵士が命令を聞いてくれると、涙を流して喜んでおったよ。相も変わらず、苦労人ばかりじゃ」

そういって老将軍は声を上げて豪快に笑った。かつて同じ道を通ったビスマルクとしては苦笑するしかない。

この時代、鋳型に溶かした金属を流し込んで形をつくる「鋳造」の技術により、剣や槍、鎧などの武器を大量生産することはある程度可能になっている。しかし、魔道具を作るには下準備も含めれば一週間単位の時間がかかることもザラであり、しかもその全てを職人たちが手作業で行っている。そのため魔道具の大量生産体制は未だ確立されていなかった。

つまるところ、魔道具（特に武器は）需要に対しは絶対数が少なくそのため高価であり、同じものを揃えることが難しいのだ。軍隊と言う、人数が多くて、一定の力を継続的に維持しなければならない組織にとっては、頭痛の種であると言える。

魔道具を十分な数確保できない以上、戦力向上のためには個々の魔導士の質を高めるしかない。それは国軍の一部たる魔導士部隊においても同様である。そこでは何よりも個人の実力が重視され、組織的な訓練よりも個人修練に時間が割かれている。

そのため魔導士という連中は基本的に個人主義であり、言葉を選んで評するならば「変人」が多い。自己鍛錬の名の下に、己が個性を強烈に成長させていく奴らが多いのだ。そして、困ったことにその傾向は優秀であればあるほど強くなる。命令無視ぐらいのことは日常茶飯事である。

個人主義者の集まりである魔導士部隊は、当然のことながら団体行動だの集団生活といった言葉とは疎遠である。しかし軍の一部である以上、最低限度の指揮統率は必要となる。そこで適正のある人材（はっきりといってしまえば我の強い問題児どもを引率する苦労人）が選ばれ、通常の部隊で指揮統率の研修を行うのだ。

普段言うことを聞いてくれない問題児の相手ばかりしている彼らにとって、一般の部隊の規律正しさは新鮮にうつる。

「おぬしの娘も、そのうち来るのであろう？」

およそ一年半前にヴァーダー侯爵家に迎え入れた自身の娘、アズリアについてはかなり初期のうちに話が広まっている。別に隠すつもりはなかったが、貴族どものこういう話に対する嗅覚は、異常な

ほどに鋭い。

「さて、あれに魔道卿になるだけの器量があれば、の話ですな」

ヴァーダー侯爵が魔道卿となるのではない。魔道卿の責に耐える魔導士こそがヴァーダー侯爵になるのだ。その信念は、ビスマルクの中でいささかも変わっていない。アズリアとて彼にとっては駒の一つに過ぎぬ。ふさわしくないと判断すれば切り捨てるだけだ。それを知ってか、ウォーゲンは苦笑した。

「相変わらずじゃな」

「魔道卿は国を支える柱の一つ。半端者にその席を譲るわけにはいきませぬゆえ」

然り、とウォーゲンは頷いた。それから話題を転ずる。

「陛下のご容態はいかがか」

カンタルク王国の国王、アウフ・ヘーベン・カンタルクは今現在病床にある。血の病らしく、宮廷の医師たちでも進行を遅らせることしかできていない。

自分の知りうる限りのことを教えると、ウォーゲンは苦虫を噛み潰したような表情になった。

「では今のうちにあの小僧を再教育せねばならんな・・・・・」

ウォーゲンのいう「小僧」とは第一王子ゲゼルト・シャフト・カンタルクのことである。王子とはいっても今年で三十六歳となり、すでに国内の有力な貴族の令嬢と結婚しており子どももいる。当然

のことながら次の王位継承者の最有力者であるが、そんな彼を「小僧」呼ばわりできる人間はこのカンタルク内においてウォーゲンただ一人であろう。

「そうですな・・・・」

さすがにゲゼルト殿下を「小僧」呼ばわりはできないが、ビスマルクの心情はウォーゲンに近い。

（殿下におかれては国を統べるという意識が低すぎる・・・・・）

ゲゼルト・シャフト・カンタルクは決して愚鈍な男ではない。だが、それ以上に自己顕示欲と虚栄心、そして情欲の塊のような人物であった。

陛下の死期は近く、もはや逃れ難い。ビスマルクは既にそう見切りを付けている。その事実は一臣下としての彼の心を曇らせるが、魔道卿としての職責は彼にその先を考えるよう強要する。おそらくはウォーゲンも同様だろう。そして大半の貴族たちも同様で、しかもより積極的であるといえるだろう。ここ数日行われている会議にしても、実際のところはアウフ・ヘーベン陛下亡き後の権力争いが名前を変えて行われているに過ぎない。

（まったく、この国は貴族どもの力が強すぎる）

そのために血筋よりも実力を重視し、魔導士と言う一種劇薬的な存在を統括する魔道卿と、その社会的地位を保証するヴァーダー侯爵家が生まれたともいえる。貴族たちがその財力にものを言わせて魔導士戦力を囲いこまないように、予防線を張ったのだ。魔道卿にはそういう側面が確かにある。

それはさておき、このカンタルクでは貴族の発言力が強い。そのため王座に付く人物には、貴族に流されず惑わされず、この国を導くための器量が求められるのだ。

「残念ながら、あの小僧にそれがあるとは思えんがのう」

「ウォーゲン大将軍、人に聞かれますぞ」

老将軍のあまりに率直な物言いを、ビスマルクはさすがにたしなめた。しかし彼とてまったくの同意見なのだ。

（殿下がこのまま玉座におつきになれば・・・・）

この国は一部の貴族たちに私物化されてしまうかもしれない。

「まあそうならぬよう、陛下がご存命の内にあの小僧の意識改革を促すしかあるまいて」

老将軍の、妙にさばさばした物言いに、ビスマルクは神妙に頷くしかなかった。

第三話　糸のない操り人形？

アズリア・フォン・ヴァーダーのもとにイスト・ヴァーレと名乗る怪しい流れの魔道具職人（これさえも彼の自己申告でしかないが）が再び現れたのは、最初に会ってから三日後のことであった。場所は最初と同じで、湖のすぐ近くだ。

「また来たのか」

彼女の言葉は刺々しい。

イストは三日前と変わらず、煙管型禁煙用魔道具「無煙」を吹かしては白い煙（本人の自己申告によれば水蒸気）を吐き出している。その飄々とした姿は、理由もなくアズリアの神経を逆なでする。きっとこの男に慣れることはあっても、好きになることは決してないだろう。

「いや、来なきゃ魔道具渡せないし」

そういって彼は木箱を放った。受け取ってみると、アズリアの手のひらになんとか収まるくらいのサイズの木箱だ。開けてみると、中には直径が一センチくらいの黒い球体が五つ、そして折りたたまれた紙が一枚入っていた。この場にリリーゼがいれば、イストがあの洞窟で見せた、ペイントボールに良く似ていると気づいたことだろう。実際、それをもとに作った魔道具だった。

「魔道具『糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）』。体に貼り付けて使うタイプの魔道具で、魔道具を動かすことで結果的にそれを貼り付けている体も動く、って訳だ。まぁ、細かい説明はそっちの紙に書いておいたから、後で見てくれ」

「・・・・・ずいぶん速いな」

三日前、自分と会った後に彼がフロイトの下を訪れたことは、フロイト本人から既に聞いている。魔道具を作り始めたとすればその後からだろう。とすれば今自分の手のひらの上にあるこの「糸のない操り人形（マリオネット）」は三日足らずでつくられた事になる。

アズリアは魔道具製作に関してはまったくの素人であるが、それでも三日足らずで一から魔道具を作ることが異常である事は容易に想像が付く。

「いったろ、それほど難しくないって」

そういってイストは肩をすくめただけだ。まるで、この程度なんでもない、と言うかのように。

ため息をつく。

（どうやらこの男に一般常識は通じないらしい・・・・・）

そう思い、さっさと意識を変える。

「この魔道具、いくらだ」

まさかタダということはあるまい。少々、いやかなり強引な押し売りではあるが、これでフロイトの足が治る、いや動くようになるのであれば多少高くともそれだけの価値はあるだろう。

しかし、イストは軽薄に笑いながら首を振った。

「いや、金なんて要らないよ。てか、金取ったら違法じゃないのか」

ここの法律なんて知らないけど、と彼は続ける。

カンタルクのみならず、多くの国で魔道具の売買は規制されている。イストはこの国で魔道具を売買する許可など持っていないから、ここでアズリアから代金を受け取れば、それは確実にアウトだ。

「オレはそれでもいいが、お前はまずいんじゃないのか」

魔道卿という、このカンタルクにいるすべての魔導士を統率し、またその規範となるべき存在を目指している彼女が、法を犯してしまうのは確かにいささか問題がある。

だが、お金さえ取らなければそれは売買には当たらないから、当然法を犯すこともない。まるで屁理屈だ。というより魔道具をタダで誰かに譲るなんて、よほど親しい間柄でなければ誰も想定していないだろう。

「だが、な・・・・・」

まったくの無償というのは気が引ける。「タダより高いものはない」とも言うし、なによりこの男に貸しを作っておくと、あとで法外なリターンを要求されそうだ。

「だがまあ、代金の代わりというか、聞いてみたいことはある」

「・・・・・なんだ？答えられるものと、答えられないものがあるが」

この男が自分に何を聞きたいと言うのだろう。接点などないに等しいし、自分個人に興味があるようにも見受けられない。ヴァーダー侯爵家令嬢に聞きたいことがあるのかもしれないが、毎日訓練漬

けだったためか、あいにくと社交界には疎い。

（まあ、もとより貴族の社交界など、興味はないが）

あんな、笑顔の仮面の下で剣を研ぎ策謀を巡らせるような世界など、こちらから願い下げだ。誰もかれもうわべは綺麗に着飾っているが、腹の中は真っ黒でどろどろとした欲望をその身に充たしている。

「高貴な血、選ばれた民」

その考えそのものがどれだけ醜いものか、彼らは恐らく一生理解できないだろう。いや、理解しようとはしないだろう。

自身の生まれのせいでもともと貴族嫌いであったが、このおよそ一年半の間にその思いはさらに強くなった。

アズリアが自身の貴族嫌いの思考にはまりかけたとき、イストの声がして彼女は意識を目の前の男に戻した。

「なに、簡単なことさ」

そういってイストは「無煙」を吹かす。ふう、と白い煙（本人の自己申告を信じるならば水蒸気）を吐き出し、こちらを見た。

その目には、まるで試すかのような色がある。

（さて、どんなことを聞かれるのやら・・・・・）

内心、身構える。

「きちんと考えたかなってね」

何を、と言おうとしてすぐに思い至る。恐らくは三日前、イストが去り際に残したあの言葉のことだろう。

『フロイトロース・フォン・ヴァーダーの足が動くようになるとはどういうことか、一度良く考えてみることだ』

「なんだ、そのことか」

思ったよりも軽い内容で、肩の力が抜ける。

「うむ。いちおう結論めいたものは出たぞ」

「へぇ、是非聞かせてもらいたいね」

イストの目に好奇の色が混じる。面白がっていることが傍目にも良くわかった。ただ、それが本心なのかはよく分からない。この辺がこの男を好きになれない理由だろう。

（この男の意図は、どうにも読みにくい・・・・・）

まあ、そのあたりの観察はこの際だから横においておくことにしよう。その先、この男とさらに接点があるとは思えない。

そう考え、アズリアは己の結論を口にする。

「わたしはフロイトに負い目を感じている。フロイトの不幸の上に今のわたしがあるように感じるからだ」

相変わらず煙管を吹かすイストから視線を外し、空へと上げる。

「だからあの子の足が動くようになったとき素直に、純粋に喜んで

上げられないような気がした。まるで自分が負い目から解放されたことを喜んでいるかのようで」

今日も空は青く澄み渡っている。木陰に吹く風は乾燥していて爽やかだ。

「だけどこれは別々の問題なんだ。あの子の足が動くようになることと、わたしの負い目云々は。だからあの子が歩けるようになったら祝福してあげたいと思う」

そう、これが結論だ。

「まあ、わたしの方はおいおい考えるさ」

少々、照れくさい。照れ隠しに苦笑いを浮かべながらイストの方を見る。彼は、

「・・・・・何を、笑っている・・・・・」

思わず、声に険がこもる。

イスト・ヴァーレは笑っていた。声を押し殺しながらも、確実に彼は笑っていた。しかも気持ちの良い笑い方ではない。どこか嘲笑が混じっているように感じるのは間違いではないはずだ。

自分が精一杯考えた結論を、嗤われたのだ。

「なにが可笑しい！」

思わず、怒鳴る。それでもイストは嘲笑を引っ込めようとはしなかった。

「なぁ、本当に何も考えていないのか？」

「考えたさ！考えただろう！？」

そうだ。わたしはちゃんと考えたはずだ。自分の気持ちと向かい合って、心の黒い部分をちゃんと見つめたはずだ。

なのに、この男は、わたしが何も考えていないと言う。

「考えていないのならそれはそれで別にいいが、まあオレはオレの楽しみのために教えてやるとしよう」

彼はまだ笑っている。しかしその笑みがひどく酷薄なものに変化したように思われた。瞳に宿る光もまた、面白がるようなものからアズリアの心を暴くかのようなものに変わる。

そして、彼は告げた。

「フロイトロース・フォン・ヴァーダーの足が動くようになったら、はたしてノラ夫人やヴィトゲンシュタイン伯はなにを思い、どう動くのだろうなあ？」

「・・・・喜ぶ、のだろう・・・・？」

返答の声が小さく弱い。見たくないもの、聞きたくないことを突きつけられようとしていることを、本能的に感じる。

「そう喜ぶだろうな。で、喜んでどうする？」

「・・・・喜んで、喜んで・・・・・・、」

言葉が詰まる。ノラ夫人やヴィトゲンシュタイン伯が喜んでその後どう行動するのかは、あの時考えても分からなかった。いや、考えたくなかったのだ。

心臓の鼓動が激しくなる。手のひらや背中に、嫌な汗が出てくる。

「分からないのか？それとも考えたくないのか？ならオレが言ってやる」

彼の口調は変わらない。だがアズリアはまるで剣の切っ先を突きつけられたかのように感じた。

「有象無象の貴族でしかない奴らは、まず間違いなく自分たちの直接の血縁であるフロイトロース・フォン・ヴァーダーを次の魔道卿にしようと画策するだろうな」

「・・・・それが、何だと言うのだ・・・・」

魔道卿は血筋によって決まるものではない。それはアズリア自身、体に叩き込まれて分かっていることだし、それはノラ夫人やヴィトゲンシュタイン伯とて同じはずだ。

「同じじゃないさ。言っただろう？奴らはどこまでいっても有象無象の貴族でしかない。目の前にチラつかされた魔道卿という権力を諦めるなんて、できやしない、いや考えもしないだろうさ」

「・・・・・っ」

反論できない。そして否定も。自分自身が貴族嫌いであるためか、イストの言うことはどうしようもなく真実であると思ってしまう。

「で、だ。フロイトロース・フォン・ヴァーダーを次の魔道卿にするために、奴らは何をするだろうなあ」

「・・・・やめろ・・・・」

その先は、聞きたくない。

「奴らはこう思うだろう。『まず目の前の邪魔な障害物を取り除かなくては』と」
「やめろと言った！」
しかし、彼は言葉を続ける。
「すなわち、アズリア・フォン・ヴァーダーという目の上のたんこぶを、な」

第三話　糸のない操り人形？

アルジャーク帝国にはいわゆる貴族という階級は存在しない。しかしそれは名門や名家の存在を否定するものではない。いやむしろ貴族というものがいないからこそ、名門名家といった存在がより目立つようになった、といっていい。

例えばガンドール家。かのアルジャークの至宝、アレクセイ・ガンドールを輩出したこの家は、武門の名家として知られ、これまで幾人もの著名な武人や将軍を世に送り出してきた。

他にもさまざまな名門名家がアルジャークには存在している。文門の名家や有名な塾はこれまでに優秀な官僚たちを幾人も歴史の表舞台に送り出してきたし、政治や武芸のみならず芸術にも同様のことが言える。固有の領地を持たない彼らは、優秀な人材を輩出することでアルジャーク内での地位を確立してきたのだ。

そういう意味では、帝国学術院を卒業し官僚の道に入った彼も、名門の出身といえる。さらには名家の生まれでもある。彼の家は代々役人となる者が多いのだから。ただ、あまり有名であるとはいえないが。

「ここにおられましたか、先生」

そこは宮廷の敷地内にある図書館だ。アルジャーク帝国最大の図書館で、その蔵書数は三十万冊とも言われている。一般にも開放されているのだが、難しい歴史の専門書が並ぶこの辺りには人影はただ二人分しかない。

一人は、クロノワ・アルジャーク。先日モントルム遠征を成功させ、そして旧モントルム領の総督に任じられた第二皇子だ。

もう一人の男、そのクロノワが「先生」と呼ぶのは、オルドナス・バスティエ。アルジャークの歴史を編纂する官僚で、かつて彼の史学の教師を務めていた男だ。

「これはクロノワ殿下、それともモントルム総督閣下とお呼びしたほうがよろしいですかな？」

彼の口調にはおよそ愛想というものが感じられない。しかしクロノワはそのことを不快には思わなかった。むしろその口調は懐かしくさえある。

「どちらでもかまいませんよ」

「では殿下、遠征の成功と総督就任の義、おめでとうございます」

無愛想な口調のままオルドナスが祝辞を述べる。きっとこんなときまで無愛想だから出世しないのだろう。もっとも本人は気にしていないどころか、

「無用な気苦労を負うことがなく、むしろ幸いです」

とでも言うだろう。恐らくは無愛想なままに。

「ありがとうございます。先生もお変わりない様で安心しました」

「それで、このしがない歴史家に何か用ですかな」

そのあまりにも率直で単刀直入な物言いにクロノワは苦笑した。そしてまた、同時に安心する。

（本当にお変わりない・・・・）

宮廷で暮らし始めた当初、クロノワに味方はいなかった。それは彼に学問を授ける教師たちも同様で、ひどい者などはあからさまに侮蔑してきた。

史学を担当していたオルドナス・バスティエもまた、クロノワの味方ではなかった。しかし、敵でもなかった。彼は周りの喧騒にはまったく影響されず、ただ己の知識をクロノワに授けることにのみ集中した。クロノワに味方ができ、そして徐々に増え、それにともなって教師たちの態度が変わっていっても、彼の態度は一切変わらなかった。そのことを寂しく思いもしたが、

（それが、先生を信頼する最も大きな理由ですしね・・・・）

この頑固で偏屈な史学者をクロノワは心から信頼していし、またその信頼に足る人物だと見定めている。それで十分だ。

「独立都市ヴェンツブルグの執政院に九つ目の椅子を用意し、そこに座る人物の選出をモントルム総督に一任されていることはご存知ですか」

「ええ、存じております」

「つまり私が決めるわけですが、その執政官の椅子、先生に座っていただきたい」

そういった途端、オルドナスの眉がピクリと不快げに動いた。

「先生のその鉄面皮を崩せただけでも、この話を持ってきて良かったですよ」

クロノワは嬉しそうだ。

「先ほども申し上げたとおり私はしがない歴史家です。ここで書物を相手に仕事をしているのが分相応と言うものでしょう」

遠まわしにオルドナスはかつての教え子の申し出を断った。その顔が不快げに、いやバツが悪そうに見えるのは、あるいはクロノワの思い過ごしかもしれない。

「ヴェンツブルグはこれから大きく発展します。いえ、させます」

そうクロノワは言い切った。そう、己の野望のためにはヴェンツブルグを発展させねばならない。

「先生にはそのための下地作りと、成長にともなう混乱の抑制をお願いしたいのです」

これから先、ヴェンツブルグに集まる人とモノと金は急激に増えていく。それらを受け入れるため準備をしなければ、ヴェンツブルグは容易く無法地帯になってしまう。また準備をしていても混乱、とくに喧嘩や窃盗などの軽犯罪の増加は避けられないだろう。そのための対策も必要だ。

「私は歴史家です。政治家の真似事などとても。ましてそのような激動期であればなおのこと私には荷が重いでしょう」

オルドナスは頑なに拒否する。それをクロノワは不快には思わない。しかしだからといってここで引き下がるつもりもなかった。

「過去、急激な成長を遂げた国や都市は数多くあります。成功したもの、失敗したもの、先生はそういった事例をたくさんご存知なの

ではないですか」

オルドナスは何も言わない。それを見てクロノワは話を続けた。

「そういう成功した政策をヴェンツブルグで再現していただきたいのです。もちろん実情に合わせて、ですが」

「・・・・私が持ち合わせているのは知識だけ。それで政を行えるとは思えません」

ただの謙遜ではない。自分の知識とこれまでの実績を鑑みるに、提案を述べることはできても、それを実際の状況に合わせて臨機応変に変化させるなど、自分にはできないと冷静に判断したのだ。

「それは他の執政官たちに任せればよいでしょう。先生に足りないものを彼らが補い、彼らに足りないものを先生が補う。それでよいのではありませんか」

「さて、他の方々が私の話を聞いてくだされればよいのですが」

いきなりやってきたよそ者に、彼らが良い感情を抱くはずもない。そんな状況では少なからず腹芸が必要になるだろうが、その「腹芸」こそがオルドナスの最も苦手とする分野なのだ。

「心配ありませんよ。先生はアルジャーク帝国が派遣する執政官なのですから。権力と後ろ盾は使うためにあるんです」

そういうとオルドナスは、あまりに素直な物言いに苦笑した。

「やれやれ、どこでそのような考え方を学ばれたのやら」

「そうですね、先生からは教わりませんでした」

二人は顔を見合わせて笑った。その笑いを収めてからオルドナスが問うた。

「なぜそこまでヴェンツブルグに拘るのですか」

「陛下が不凍港を欲しておられること、先生もご存知のことと思いますが」

クロノワはまず一般論を答えた。しかしオルドナスはそれでは満足しない。

「では、貴方が拘る理由をお聞きしたい」

彼の目は鋭いく、真実だけを求めている。クロノワ・アルジャークと言う人物を、改めて見定めるために。

「・・・・・私はかつて友人とある約束をしました」

それはイストとかわしたあの約束だ。

「いつか一緒に世界を回ろう」

何も知らない子どもが気まぐれにかわした口約束。そういってしまえばそれまでの話だ。けれどもイストはその約束を覚えていたし、クロノワも心のどこかでその夢が実現することを願っていた。

「けれどもその約束は、結局果たされることはありませんでした」

あの頃とは、立場が違う。責任が違う。そんな言い訳をクロノワはしたくない。

「だから、と言うのは変かもしれません。けれどもそれが正直な気持ちでもあります。自分のいる世界を広くしよう。そう、思ったんです」

オルドナスは何も言わない。そしてその視線の鋭さも変わらなかった。ただ、静かに見定めようとしている。そうクロノワは感じた。

「私はこの世界を狭くしてみせます。ヴェンツブルグは、そのための一歩です」

クロノワが自分の野望についてはっきりと宣言したのは、このときが二度目で、彼が二人目であった。

「どうやら、壮大な野望をお持ちのようだ」

オルドナスはかつての教え子が志している野望について、おおよそを悟った。「世界を狭くする」というその言葉と、ヴェンツブルグという立地。成功すれば、歴史的な事業になるだろう。

「浅学のこの身、どこまでお役に立てるか分かりませんが、執政官の話、お受けいたしましょう」

「ありがとうございます」

こうしてクロノワは己の野望を理解し、そのために働いてくれる最初の人物を得たのである。後にオルドナス・バスティエはこう述懐している。

「歴史を調べ、そして記録するだけの官僚だった私が、あの時歴史を作る側に回ったのだ。まったく、人生と言うヤツは数奇なものだ」

第三話　糸のない操り人形？

パタリ、と後ろ手に自室の扉を閉めた。すでに日は完全に沈み、夜の帳が世界を支配している。ランプの火はつけない。カーテンを閉めていない窓からは月明かりが差し込み、書物を読むのでもない限りはとくに不自由しないだけの明るさがある。

「・・・・・・・・」

机の引き出しを開け、奥からあるモノを引っ張り出す。それは、アズリアの決して大きくない手のひらに、なんとか収まるくらいの大きさの木箱だった。

「わたしに、どうしろと言うのだ・・・・・」

あの時、イスト・ヴァーレが去り際に残した言葉が、頭から離れない。

『忘れるなよ。オレはその魔道具を、「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」をお前に預けたんだ。フロイトロース・フォン・ヴァーダーではなく、アズリア・フォン・ヴァーダーに。それを決して忘れるな』

そういって彼が残していった魔道具、「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」。フロイトの足を動かすことのできる魔道具。けれどもその魔道具を今手にしているのは、必要としているフロイトではなくアズリアだった。

「こんなものをわたしに寄越して、どうしろと言うのだ・・・・・」

答えは出ない。出ないまま、既に二日が過ぎてしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あの日、イスト・ヴァーレという流れの魔道具職人は「やめろ！」と叫ぶアズリアを無視して言葉を続けた。

「・・・・フロイトロース・フォン・ヴァーダーが歩けるようになれば、ノラ夫人やヴィトゲンシュタイン伯は当然、自分たちの息子であり孫である彼を次の魔道卿にしようとする。そうなればアズリア・フォン・ヴァーダーは用済みどころか邪魔者以外の何者でもない」

実際にフロイトが次の魔道卿になれるかどうかは、彼らにとってさして重要ではない。というよりもそこまで考えてなどいないだろう。さらなる利権と権力を求めて邁進するのが貴族と言う生き物である。目の前にぶら下げられたソレを諦めることなど考えもしないだろうし、そもそもできないだろう。

「あの手この手を使って侯爵家から追い出そうとするだろうよ」

その光景はいとも簡単に想像できた。否定する要素はなにもない。そしてまた、妨げる要素もないだろう。

「よかったな、侯爵家から出られて。嫌いだったんだろう？貴族」

酷薄な笑みを浮かべて、イストが笑う。

「・・・・ふざけるな・・・・・」

湧き上がるようにして言葉は出た。もう、止められない。

「ふざけるな！自分勝手な都合でわたしの人生を狂わせておいて、用済みになれば捨てるのか！？ふざけるな！ふざけるなよ！」

こぶしを硬く握り締める。最後にアズリアは搾り出すようにこういった。

「・・・・わたしの今までの努力は、一体なんだったのだ・・・・！」

自分で言って、殴られたような衝撃を受けた。

いま侯爵家を追い出されたら、今までの努力がすべて無駄になる。この一年半の努力だけではない。考えようによっては士官学校に入校してからの彼女の努力、その全てが水泡に帰すのだ。

アズリアは言いようのない苦さと共に、ようやく理解した。イスト・ヴァーレのあの問いの意味を。

『フロイトロース・フォン・ヴァーダーの足が動くようになるとはどういうことか、一度良く考えてみることだ』

そう、フロイトロース・フォン・ヴァーダーの足が動くようになるとは、アズリア・フォン・ヴァーダーが全てを失うということなのだ、と。

呆然とするアズリアを無視するように、イストは口を開く。いやになるくらい自然で、どこか突き放すような響きだ。

「選択権はお前が持っている。どうするかは、お前が決めるといい」

そういわれて、アズリアは木箱とそこに入っている魔道具、「糸（ノー・ストリング・マリオネット）のない操り人形」の存在を思い出した。フロイトが歩けるようになるための魔道具。逆を言えば、これがなければフロイトは歩けない。

「・・・・っつ・・・・！」

黒い欲望が頭をもたげる。自分の醜い心を、苦い思いと共にアズリアは自覚した。

そして去り際に、イスト・ヴァーレは先の言葉をいい残したのだ。

「忘れるなよ。オレはその魔道具を、『糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）』をお前に預けたんだ。フロイトロース・フォン・ヴァーダーではなく、アズリア・フォン・ヴァーダーに。それを決して忘れるな」

それは初めて聞く彼の真剣な声だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「わたしは、どうすればいいのだ・・・・・？」

言葉は夜闇にとけて消えていく。答えはどこからも帰ってこなかった。

ありきたりなハッピーエンドが好きだった。

貧乏ながらも心優しく、そして王子様に見初められた少女。約束を交わし、離れ離れになっても再会を果たす少年と少女。

逆境を乗り越え、苦難を克服し、そして最後にはみんなが幸せになる。そんなありきたりなハッピーエンドが好きだった。

けれども今現実に突きつけられた二択は、一人分の幸せしか約束していない。誰も彼もが幸せになれる、そんなありきたりなハッピーエンドが一番難しいと、現実は声ならざる声をもって彼女に宣告する。

手のひらに載せた木箱が、どうしようもなく重く感じた。

「二人分の運命だ。重いに決まっている・・・・・」

この魔道具を、「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」をフロイトに渡せば、あの子は歩けるようになるだろう。一度自分で試してみたが、イストの言ったことは本当だった。右手に使ってみたのだが、確かに腕ではなくて魔道具を動かすことで、結果的にわたしの右手は動いた。フロイトの足も本当に動かないだけで、関節などには異常はないから、この魔道具で動くようになるだろう。扱う感覚が少々掴みにくかったが、それは慣れればいいだけの話だ。

あの魔道具「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」をフロイトに渡せば、あの子は歩けるようになる。これはもう確実だ。だからこそこんなにも悩んでいるのだ。

「・・・・いやになる・・・・・」

悩めば悩むほどに、自分の醜い部分を突きつけられた。

なぜこの魔道具は今自分の手の中にあるのだろう。なぜあの男はこれをわたしに渡したのだろう。自分の手の届かない場所ですべてが決まってしまえば、どんなにか楽なことだろう。

自分で自分のことを決める。ただそれだけのことが、こんなにも

辛いとは思わなかった。
立って歩く。ただそれだけのことを、フロイトがどれだけ望んでいるか。その心のうちは慮るだけでもおこがましように思う。

まさに渇望。
まさに羨望。

それを叶えられるはずのアズリアはしかし、躊躇っている。

「・・・・嫌な女だな、わたしは・・・・」

それを責められる人間はいないだろう。フロイトの人生をのせた天秤の反対側、そこにのせるのはアズリア自身の人生だ。これまで決して恵まれていたとはいえない環境の中で、必死に努力を積み重ねてきた今までの人生。ヴァーダーの姓を捨てることは、同時にそれさえも捨てることになる。

「それだけなら、まだいいが・・・・」

ヴァーダーの姓を捨てクリークの姓を再び名乗ったとしても、彼女がビスマルク・フォン・ヴァーダーの娘であるという事実は消えない。一度日の目を見たその事実を、再び闇に葬ることなど不可能だ。侯爵家と無関係の存在になったとしても、その血はどこまでもアズリアについてまわる。彼女自身が気にしなくとも周りが騒ぐ。ある者は彼女を遠ざけ、ある者は利用しようとし、またある者はいわれのない軽蔑や妬みを抱くだろう。

ビスマルクの、魔道卿の力を使えば、あるいは平穏に暮らすことはできるかもしれない。しかしそれはアズリアのあらゆる可能性と引き換えに得る平穏だ。今までの人生を否定することに変わりはな

い。

それが嫌ならば、この国を離れるしかない。

「わたしは、どうしたいのだ・・・・？」

魔道卿になりたいわけではない。魔導士になりたかったわけではない。軍人になりたかったわけでもない。

士官学校に入ったのは、端的に言ってしまえばお金がなかったからだ。無料で学を得られる場所がそこしかなかったからだ。魔道科に進んだのも、その延長であったと言える。

「状況ゆえに、か・・・・・」

自らの人生を思い返し、思わず苦笑が漏れる。

しかしだからといって腐っていたわけでは、無論ない。選択肢の少ない状況であろうとも、確かに自分で求め、そして選び、研鑽を重ねてきたのだ。そんな今の自分を誇りこそすれ、自ら蔑むことなど決してない。

「ああ、だからこそいやになる」

自分は精一杯やってきた。そう自負している。けれどもその果ての二択がこれかと思うと本当にいやになる。約束された幸せは一人分。自分か、フロイトか。

「なんにせよ決まっているのは・・・・」

なんにせよ決まっているのは、どちらを選んだとしても自分は後

悔するだろうと言うことだ。

「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」をフロイトに渡せば、落ちぶれた自分の状況を嘆き後悔するだろう。あの時渡していなければこんなことにはならなかったのに、と。

渡さなければ、一生自分はフロイトに罪悪感を持ち続けるだろう。なぜあの時、わが身を優先したのだろうかと、ベッドに横たわるあの子を見るたびに後悔するのだろう。

「ああ、もう本当に・・・・・」

渡すか渡さないか。なぜ選択肢はこの二つしかないのだろう。ありきたりでもいい、物語のようなハッピーエンドを迎えるための、一種劇薬じみた出来事が起これればいいのに、と本気で願った。

第三話　糸のない操り人形？（後書き）

そろそろ第三話も佳境。

感想をいただけると嬉しいです。

第三話　糸のない操り人形？

フロイトロース・ファン・ヴァーダーはこの当時まだ八歳で、当然のように子どもであった。しかし子どもであるがゆえに、敏感であったともいえる。少なくとも彼がこのときまだ子どもだったことが、時代と言う水面に一石を投じる結果となったのだから。

彼には姉がいる。つい最近、突然にできた姉だ。きれいで優しい、大好きな姉上だ。そんな大好きな姉上の様子がおかしいと思い始めたのは、二日前からだった。

なにがどう様子がおかしいのか、表現すべき言葉を少年は知らない。強いてあらわすならば「ズレ」だろうか。

ここではないどこかを見ているような気がするときがある。頭を撫でてくれる手からは、今までになかった硬さを感じる。笑いかけてくれても、その目にはどことなく悲しみが滲んでいる。

それを感じるのは、いつもほんの一瞬だ。次の瞬間には、いつもの姉上に戻っている。あるいは気のせいだと思うこともできる。けれどもその一瞬は決してなくならない。それが、言いようのない不安をつれてくる。

「どうして・・・・」

その「ズレ」てしまった理由など、少年は知らない。ただ「ズレ」てしまった結果だけが目の前にある。

そう、理由など分からない。だが、

「寂しそう、だった」

ただ一度、それもほんの一瞬だけ、姉上はとてもとても寂しそうな表情をしたのだ。ともすれば「気のせい」という、ありきたりな理由で埋没してしまいそうなその一瞬は、しかしフロイトの記憶に焼きつき離れることがない。

「笑って、欲しいな・・・・」

あの魔法使いに、自称極悪非道で意地悪な魔法使いに会ったことはその日の夜に姉上に話した。

「諦めるな」

と、言われたこと。そして嬉しかったこと。すべて話した。そのとき、姉上もとても嬉しそうだった。とても嬉しそうに笑ってくれた。

けれどこの二日、姉上の本当の笑顔を見ていない。笑いかけてはくれる。けれどもその笑顔には、どこか影があるように思ってしまうのだ。

「もう一度、見たいな」

あの笑顔を。どうすれば見られるのだろうか。

「歩ければ・・・・・」

歩ければ、歩けるようになれば、アズリア姉上は笑ってくれるだろうか。喜んでくれるだろうか。

「きっと」
喜んでくれる。

少年は頷いた。瞳には固い決意が宿っている。不可能に挑む決意を、こうもたやすくできるのはあるいは幼さゆえの特権かもしれない。

少なくともこのとき、舞台の外で放っておかれた一人の少年は、自らの足でその舞台に上がったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なにやら物音がして、アズリアは目を覚ました。きちんとベッドに横になって寝ていたわけではない。どうやら色々と考えているうちに、そのまま眠ってしまったらしい。季節柄肌寒いこともなく、風邪をひいてしまったという心配もない。

ともかく今はこの物音だ。

「何の音だ・・・・？」

物取りだろうか。そう考えてしかし即座に否定した。物音は断続的に、しかし絶えることなく聞こえてくる。そこからは自らの存在を隠す意図など微塵も感じられない。仮に物取りだとすれば、随分と度胸のある、しかし知恵のない愚か者であろう。

しかし万が一の事態を想定し、アズリアは愛用の魔剣を手にして部屋を出た。物音は寝静まった屋敷の中で断続的に響いている。

「どこからだ・・・・？」

音の出所を求めて、耳を澄ます。

「アズリア様」

声のした方に振り向くと侍女長が階段の下にいた。この物音を聞きつけて様子を見に来たのだろう。緊張した様子を見せていないので、何かしらの心当たりがあるのだろう。

「この物音は一体・・・・？」

そう聞く間も、物音は断続的に続いている。

「恐らくはフロイトロース様でしょう。いつもはベルを鳴らしていただけるのですけれど、何かあったのでしょうか」

その言葉でアズリアは現状何が起きているか、おおよその察しがついた。と同時にフロイトの部屋に急ぐ。思ったとおり、扉の向こうからは物音が聞こえている。

「フロイト、どうし・・・・・」

そこまで言って、言葉を失った。

彼の部屋は、当然のことながら明かりはついていない。しかし窓から差し込む青白い月明かりは、中の様子を窺い知るには十分であった。

そう、月明かりが部屋を照らしている。だからかもしれない。目の前の光景は、どこか現実感が薄く、幻想的であった。

それはある意味では予想通りの光景だった。ベッドから落ちたフ

ロイトが、必死にもがいていた。だが、ベッドに戻るためにもがいているのではないと、アズリアはすぐに気がついた。

ベッドのふちに手をかけ、腕の力で体を持ち上げて、少なくとも立っているように見える姿勢をつくり、それから手を離す。だがしかしフロイトの足は主を支えることはなく、彼の体は崩れ落ち床に叩きつけられた。

（いったい何を・・・・！？）

アズリアは混乱した。寝床に戻りたいのであれば、体を起こしてからそのままベッドに倒れこめばよい。いや、それ以前にベルを鳴らせば侍女がやってくるのだ。

では今、彼はいったい何をしているのか。

彼の顔に、悲しみは浮かんでいない。怒りも絶望も焦りも苦痛も諦めも、そこには浮かんでいない。そこに浮かんでいるのは、金剛石の如くに純粋で美しく、そして強固な意志であった。

そこにいたのは一個の挑戦者であった。挑む壁は不可能と言う名の現実。だがそれゆえに、見る者は奇跡を期待するのかもしれない。

そのとき、フロイトロース・フォン・ヴァーダーは己の足で立とうと、必死でもがいていたのだ。そしてその姿はどうしようもなくアズリアの心を揺さぶった。

アズリア・フォン・ヴァーダーは理解している。フロイトロース・フォン・ヴァーダーが歩けるようになると言うことは、彼女が今まで積み上げてきたのもが無駄になると言う事だと、正しく理解して

いる。

（それがどうした・・・・・！それがどうしたと言うのだ・・・・！？）

それでもなお、そんなことが気にならないくらい、彼女もまた期待したのだ。月明かりの下で必死にもがいている少年が、その二本の足で立って歩くという奇跡を期待したのだ。そしてその奇跡を起こすための魔道具は、今彼女の手の中にある。

「・・・・姉上・・・・・？」

気が付けばアズリアはフロイトを抱きしめていた。彼の不思議そうな声が腕の中から聞こえる。

「・・・・なんで、泣いてるんですか・・・・？」

そうフロイトに言われて、アズリアは自分が泣いていることに初めて気づいた。いつ泣き始めたのか、まったく分からない。目の前の光景に、意識の全てが集中していた。

気づいてしまえば、後はあふれ出るだけだ。フロイトをさらにきつく抱きしめ、アズリアは泣いた。

（ああ、涙は雪どけ水のようだ・・・・・）

凍てついていた心は融け出し、後は流れていくだけ。

「フロイト・・・・・」

「・・・・はい・・・・・？」

なんでこんなことを、と聞こうとしてやめた。字面の上とはいえ、彼が立ち向かったことを、こんなこと、なんて言いたくなかった。だから、

「頑張った、ね」

そういって、泣きながら彼の頭を撫でた。

「・・・・姉上に、笑って欲しくて・・・・」

胸の奥が、じんわりと温かくなる。そこには締め付けられるような苦しさと、いいようのないくすぐったさが同居している。

「・・・・ありがとう・・・・」

もう、心は決まっていた。

「実はね、フロイト、魔法使いから預かったものがあるの」

言葉は自然と出た。そのせいか、口調がいつもより柔らかい。けれども気にはならなかった。思惑も何も関係ない。素の自分でいられることが心地よかった。

「魔道具『糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）』。わたしも試してみたけどあれなら多分、フロイトも歩けるようになるよ」

「本当!?」

腕の中でフロイトが歓声をあげる。それが素直に嬉しい。

「本当。でも今日はもうダメ。しっかりと眠って、明日元気になったら、ね?」

フロイトは不満そうに、
「はぁい」
と返事をする。そのむくれた様子がなんとも可愛い。

フロイトをベッドに戻し、寝かしつける。興奮している様子だったが、やはり体は疲れていたのだろう。すぐに寝息が聞こえてきた。その無垢な寝顔に思わず微笑がもれた。柔らかい髪の毛をもう一度だけ撫でて、部屋を出た。

「アズリア様・・・・・」

部屋の外で見守っていた侍女長が心配そうに声をかけてくる。彼女にしてみれば聞きたいことや言いたいことがたくさんあるのだろう。魔法使いとやらのこと、魔道具のこと、そしてフロイトが歩けるようになったあとのアズリアのこと。

けれどもアズリアは何も言わなかった。ただ彼女の肩に、ポン、と手を置いただけだ。侍女長も、結局何も言わなかった。何か言いたそうにはしたが何も言わず、ただ万感の思いを込めて頭を下げた。

後に彼女はこう語る。

「あのとき、アズリア様は驚くほど穏やかな表情をしていらっしゃいました。そう、まるですべて分かった上で、その全てを受け入れるかのように。その表情を見たら、何もいえなくなりました」

第三話　糸のない操り人形？

ノラ・フォン・ヴァーダーはその日、狂喜していた。

理由は二十日ほど前に届いたフロイトからの手紙である。これまでも息子から手紙が届くことは度々あった。しかし歩けない息子にまったく関心のない彼女は、その全てを、返事を含め、侍女に押し付けて自分はまったく関与しようとしなかった。

今回の手紙もそうだった。侍女に押し付け、それっきり忘れていた。血相を変えた侍女がその手紙を持ってくるまでは。

そこには、フロイトが歩けるようになった、と書いてあったのだ。

「私（わたくし）の、私（わたくし）の可愛いフロイトが、歩けるように・・・・！」

彼女が口にした「可愛い」という言葉からは、どうしようもなくグロテスクな響きを感じざるをえない。

何はともあれ彼女は狂喜し、その日のうちに活動を始めた。夫たるビスマルクに話をし、侯爵家に息子のための部屋を用意した。父であるヴィトゲンシュタイン伯と連絡を取り合い、邪魔者を追い出すための手はずを整える。

そう、勘違いしてはいけない。彼女はフロイトロースが歩けるようになった、そのことを喜んでいるのではない。彼が歩けるようになり、魔道卿という権力に近づくための道筋が見えてきたことを喜んでいるのだ。そしてさらに言えば、自分の「役立たずの欠陥品」という汚名を返上できることを喜んでいるのだ。

馬車が到着する。フロイトロース・フォン・ヴァーダーを、彼女の愛すべき息子が乗った馬車が、ヴァーダー侯爵家へと到着する。

その日、ビスマルク・フォン・ヴァーダーはいいようのない苦さを抱えながらその場にいた。

原因は二十日ほど前に届いたアズリアからの手紙である。そこにはフロイトが歩けるようになった経緯が端的に報告されていた。それからフロイトが普通に歩けるようになるまでリハビリをすること、そして彼を送り届けたら自分は侯爵家を出るつもりであることが書かれていた。

「追い出されるよりは自分で、か・・・・・」

その決断は誇り高い。だが同時に苛立ちを感じさせる。

誰に対してか？

それを見ているしかない自分に対してだ。

「なにが魔道卿か。まったく笑わせる」

実際、アズリアを庇うのは難しいだろう。すでに圧力は掛けられ始めている。押し切られるのは時間の問題だろうし、本人が帰ってくればさらに激化するだろう。

そう考えれば、あの自分から出て行くと宣言したアズリアの態度は、ある種ビスマルクに対して見切りをつけたと言えるのかもしれない。

「見限られた、ということか。この私が」

なにやら小気味良く感じる。これもまた、親ばかに似た心境かも知れぬ。

とはいえ、苦さは消えない。

おそらくアズリアは侯爵家を出る共に、このカンタルクからも出て行くつもりだろう。一度ヴァーダーの姓を名乗りその血筋であることが露になった以上、その事実はこの先どこまでも彼女に付きまとう。血筋を利用しようとしないばかりか、かえって迷惑だとでも言わんばかりの娘の態度は、かつて懐妊が分かったと同時に暇を願い出た彼女の母、クレア・クリークの潔さと重なる。

その身の振り方は高潔だと思う。しかし、人材と言う観点で考えれば、

「惜しいな・・・・・」

このおよそ一年半、ビスマルクはアズリアの成長を間近で見てきた。さすがに王立士官学校魔道科首席卒だけあって優秀で飲み込みが早い。あるいは親の贔屓目が混じっているのかもしれないが、それを差し引いても十分に秀逸な人材だと言えるし、また現状に満足しない向上心ももっている。さらに言えば、苦労人気質なので将来的には問題児の多い魔導士部隊を率いる、指揮官クラスへと成長することも十分に考えられる。

そういう人材が外に流れていくのは、このカンタルクにとって間違いなく不利益だ。

「親として考えるならば、あるいは・・・・・」

親として考えるならば、あるいは娘の選択を尊重するべきなのかもしれない。ただでさえ無理やり介入して人生を狂わせたのだ。好きにさせてやるほうが、親としては正しい選択なのかもしれない。

「少し、手を回しておくか・・・・・」

そう、あくまで少しだけ。選択の余地が残るように。

親としては間違っているのかもしれない。けれどもビスマルクは魔道卿だ。

「国の行く末は、個人の感情に勝る」

それが、魔道卿ビスマルクの信念だ。

馬車が到着する。彼の二人の子どもを乗せた馬車が、侯爵家の門をくぐる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ふう」

決して多くない私物を鞄に詰め込み、アズリアは一息ついた。それからもう一度自室を見回す。ここを出て行くことにもはやなんの未練もないが、一抹の寂しさはどうしても拭えない。

（そういうことにこだわるタチではないと思っていたけど・・・・・）

実は、そうでもないのかもしれない。そんなことでも素直に認められるようになったのは、心が軽くなったおかげかもしれない。

（いや、決して認めたわけではないが・・・・・）

自分に言い訳をして、少しへこむ。

一息ついて心機一転。部屋の出口に立って、部屋を眺め一礼する。それから部屋を出た。もう心残りはない。

部屋を出ると、大きな話し声がした。フロイトとノラ夫人だ。楽しげな話し声を聞く限り、どうやら親子関係は順調な出だしらしい。この先自分は関わることはないだろうが、それでも安心する。

（願わくば、ここがフロイトにとって幸せな家庭でありますように・・・・・）

後ろ髪引かれる思いを、あえて無視する。それから、ハタと思いつく。

「父上のところにもよっていかないとな」

まがりなりにもおよそ一年半お世話になったのだ。挨拶ぐらいはしないとだろう。そう思いビスマルクの執務室に足を向けた。

扉の前に立ち、ノックする。

「入れ」

執務室の向こうから重厚な声がする。威厳に満ちたその声は、執事であるエルマーに連れられて初めてここに来たあの時と同じだ。ただ精神的に押しつぶされなくなったのは、確実に成長しているからだろう。

「失礼します」

執務室に入ると、ビスマルクはやはりあの時と同じく鋭い目をアズリアに向けた。ただそこからは冷たさよりも懐かしさを感じる。

「短い間でしたが、お世話になりました」

「・・・・行くのか」

「はい。フロイトのこと、宜しくお願いします」

ビスマルクはしばしの間、目を閉じ瞑想した。

「魔道具は持っていくといい。餞別だ」

「ありがとうございます」

それから二言三言言葉を交わしてから、アズリアは執務室を出た。最後の最後まで態度を変えなかったビスマルクに、人知れず笑いがこぼれた。

玄関に足を向けると、エルマーがいた。

「エルマー。エルマーにも世話になった。礼を言う」

ありがとう、と言ってアズリアが頭を下げると、エルマーは慌てたように手を振った。

「とんでもございません！私こそ、なんの力にもなれず・・・・・」

アズリアが侯爵家を出ると決めたこの状況に、実直な彼は少なからず責任を感じているようだった。

「わたしが自分で決めたことだ。状況ゆえとか、そんな理由じゃないさ」

「アズリアお嬢様・・・・・」

だから気にしないでくれ、と言うアズリアにエルマーは頭を下げた。

「できれば、フロイトにはうまく言っておいてくれ」

少し冗談めかして、アズリアは頼んだ。

「それはまた無理難題ですな。ですがこのエルマー、必ずやお嬢様のご期待に応えてみせましょう」

エルマーに別れを告げて、アズリアは侯爵家を後にした。状況だけ見れば、自分はいわゆる「お先真っ暗」な境遇だろう。だが、不思議と悲観的にはなっていない。

積み上げてきたもの全てが瓦解するわけではない。身に付けた実力や知識は、どのような立場や状況になっても役に立つだろう。

「大丈夫だ。わたしはやっていける」

心は晴れやかで、気持ちは前向きだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

とりあえず、貴族たちの屋敷が立ち並ぶ区画から、一般の人々が暮らす市街地へと足を向ける。姓もクリークに戻り、これより新たな人生が始まると、晴れ晴れした気持ちであることに間違いはないが、現実問題としてひとまず腰を落ち着けてこれからの身の振り方を考える必要がある。

（ひとまず市街地で宿を取って、細かいことはそこで考えるとしよう）

幸いにも懐具合にはいささかの余裕がある。ゆっくりと考える時間くらいはあるだろう。この国を出ることは間違いないだろうが、やはり後悔のない選択をしたい。

（あのときウジウジ悩んでいたことを思えば、随分と楽しく考えられるだろうし）

あの時イスト・ヴァーレという流れの職人から預かった、魔道具「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」をフロイトに渡すかどうかを悩んでいたときに比べれば、この先どこでどう生きていくかを考えることは、随分と精神的には楽なはずだ。

（ま、気軽に考えるとしよう）

なんにしても魔導士ギルドのライセンスは取っておいたほうがいいかな、とかそんなことを考えながら道を歩く。

そのとき、後ろから声をかけられた。

「失礼、お前さんがアズリア・クリーク嬢かな」

相手は大柄な初老の老人だった。頭は白くなり、顔にも年相応のしわが刻まれているが、体には十分すぎる生気が満ちており声にも張りがある。

「そうですが、なにか御用でしょうか」

「なに、あの魔道卿ビスマルクを見限ったという令嬢を見に来ただけじゃよ」

そういって老人は面白そうに笑った。貴族たちがよくするような、

相手を小ばかにした笑い方ではなく、豪快で何の遠慮もない笑い方だった。

「はぁ・・・・・」

いろいろと語弊のある言い方だったが、あっけに取られたアズリアは、結局訂正はしなかった。

「それで、どちら様でしょうか。直接の面識はないと思うのですが」

ないはずだ。身にまとっている衣服は地味だが上等な品だから、この御老体は間違いなく貴族などの上流階級に属する人物であろう。だがヴァーダー侯爵家にいたおよそ一年半の間は文字通り訓練漬けの毎日で、アズリアは社交界の事情には疎い。ゆえにそのような人物とは接点がほとんどない。

「なに、ウォーゲン・グリフォードとかいうしがない老人じゃよ」

おどけるようにしてウォーゲンは自己紹介をした。だがアズリアはと言うと、あまりのビックネームに硬直していた。

「ウォーゲン・グリフォード大将軍閣下・・・・・・！」

このカンタルクで彼を「しがない老人」扱いできる人物は、本人以外は誰もいないであろう。

王立士官学校に通ったことのある人間ならば、その名を知らない人物はまずいない。五十年近い軍歴を誇る彼は、もはや生けるカンタルクの軍事年鑑といっても過言ではない。大小八〇以上の戦場を経験し数多くの武功を上げた彼は、いまだ「軍人未満」の存在であ

るアズリアにとってはまさに雲の上の人物であると言える。

士官学校で耳にしたウォーゲン大将軍の数々の武勇伝が頭をよぎる。

「し、失礼いたしましたっ！！」

荷物を放り出してアズリアは最敬礼した。そんな彼女の様子にウォーゲンは苦笑する。こういった若手の反応は彼にとって特に珍しいものではない。だがいつも、

「儂も偉くなったもんだ」

と、こそばゆい想いにとらわれる。

「まあ、そう硬くならずに。お茶を一杯、この老人に付き合ってくれんかな、お嬢さん」

落ち着いて話したいことがあるらしい。思いがけないお誘いだが、アズリアに断る理由はない。快諾した。

「はい。わたしでよろしければ」

良く来る店だ、といって案内されたのは、市街地にある日差しの良い通りに面したオープンカフェであった。店の外に用意された席に、ウォーゲンは慣れた様子で腰掛ける。それから向かいの席をアズリアに進め、顔見知りらしい店員に注文を済ませる。メニューを見もしないあたり、本当に常連らしい。

談笑している間にウォーゲンが注文した品が運ばれてきた。紅茶が二つとクッキーが一皿。おそらくクッキーはアズリアに気を利か

せてくれたのだろう。

「ここのクッキーは絶品でな、食べてみるといい」

本人も食べたかったらしい。偉大な大将軍の意外な一面だ。

「いただきます」

クッキーを口に入れると、やさしい甘さが広がった。ウォーゲンが絶品と太鼓判を押しただけのことはあって、アズリアが侯爵家でつまんでいたものと比べても、なんら遜色がない。

「アズリア嬢の諸事情は、大まかだが聞き及んでおる。して、これからいかがするおつもりかな」

一杯目の紅茶を飲み終わり、店員が二杯目を注いで下がった頃にウォーゲンはごく自然に切り出した。

「カンタルクを出るつもりではいますが、詳しいことはまだ何も。今後のことは宿を取って二、三日ゆっくりと考えるつもりです」

「ふむ、そうか。実は今日こうして話をしにきたのは、おぬしを儂の副官にと思ったからじゃ。今後のことを考えると言うのであれば、そちらも考えてみてくれんかのう？」

さらりと告げられたその提案に、アズリアの思考は一瞬停止した。そしてフリーズが回復すると、思わず叫んだ。

「わたしを閣下の副官に、ですか！？」

大将軍たるウォーゲンの副官になるということは、それは将来が

約束されたと同義である。しかも彼の傍はこのカンタルクでは一種聖域じみた場所で、国内では貴族たちの影響力が及ばぬ唯一の場所と言える。

仮にこの国に留まるのであれば、これ以上の居場所は存在しないであろう。しかしアズリアの表情は冴えなかった。

（どんな流言飛語が飛び交うことやら・・・・）

想像がつくだけに、憂鬱になる。そういう世界とはおさらばしようと思っていただけに、なおいっそう嫌になる。

「舌が滑らかなだけの輩になど、言わせておけばよい」

そんなアズリアの心のうちを察したようにウォーゲンは言った。そういえばこの老人も貴族嫌いで有名だった。

「なぜ、そこまで言ってくださるのですか」

大将軍ウォーゲンの副官ともなれば、多くの若手有望株がその席を狙っており、選ぶ立場からすればより取り見取りのはずだ。その中には既に軍務を経験し、功績を挙げている人材も当然いるだろう。にもかかわらず功績など皆無でさらには、この国を出ようとさえ考えていたアズリアを自身の副官として望むのはなぜなのか。

「そうおかしなことでもあるまい。そなたは士官学校魔道科を首席で卒業し、その後およそ一年半の間魔道卿の下で訓練を積んだのじゃ。将来を見据えて、そのような優秀な人材を手元において育てたいと思うのは当然のことじゃろう」

ウォーゲンは紅茶を一口啜ってから言葉を続けた。

「副官と言っても、既に二人おって三人目じゃ。仕事は先任の者に教わりながら覚えていけばよい」

将軍以上の役職にあるものが副官を複数人持つことはさほど珍しくはない。

だがウォーゲンのその説明にアズリアは納得しなかった。彼が述べたのはあくまでも一般論であり、そもそも一般論を述べるのであれば、副官に「軍人未満」の人物を抜擢する道理はない。

「閣下ご自身も、そのようにお考えなのですか」

失礼とは思いながら、アズリアは試すような目をウォーゲンに向けた。その視線を彼は真正面から受け止める。

「公人も私人もこの儂である以上、儂の考えの一面であることは間違いない。だがな」

老将軍の厳しい目が、幾分和らぐ。

「極めて個人的なことを言わせてもらえば、あの堅物のビスマルクが私的に話を持ってくるような人物に興味が湧いたからじゃ」

「父上が！？」

思わぬ個人名詞にアズリアは驚いた。ビスマルクがアズリアの行く末を案じてウォーゲンに便宜を図ってくれるように頼み込んだのだろうか。

「おっと、口が滑ってしまったのう」

明らかにワザとであるが、ウォーゲンはそういっておどけてみせた。その仕草からアズリアは自分の推測が決して間違ってはいないと判断した。秘密をばらしてみせたのは彼なりの悪戯なのだろう。

「今すぐに返事をもらおうとは思わぬ。先ほどもこれからのことを考えるつもりだと言っておったし、選択肢の一つとして考えて見てはくれぬか」

「・・・・はい・・・・」

思わぬ方向に話が進みアズリアの頭は少々混乱している。一度クールダウンしなければ熟慮などできる状態ではない。そう、答えるしかなかった。

それで、お茶会は散会となった。

第三話　糸のない操り人形　エピローグ（前書き）

第一話のプロローグに加筆しました。よろしければそちらも見てください。

とはいってもアバサ・ロットの説明を加えただけなので、面白くなっているかは微妙なんですけどねぇ～。（オイッ！）

第三話　糸のない操り人形　エピローグ

夕食を終えて宿に戻ると、辺りはすっかり夜の帳が下りていた。窓からは月明かりが差し込み、フロイトに「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」を渡すか渡さないかを悩んでいたあの時と雰囲気が似ている。

そして今また、自分は悩んでいる。

「悩んでばかりだな、わたしは」

苦笑する。

それでもともかく悩まねばならない。これからの身の振り方を。これから自分がどう生きていくのかを。

カンタルクに残るのか、それとも国を出るのか。残るならばそれはウォーゲンの副官になるということとほぼ同義だが、出国するならばどこへ行き何をするのか。

物思いにふけりながら明かりをつけようと思い、ランプに手を伸ばす。その時、風がアズリアの髪を揺らした。

（……！？）

驚いて窓に目を向けると、閉まっていたはずの窓は開け放たれ、窓枠に一人の男が腰掛けていた。

「こんばんは」

おどけたように男が挨拶する。その人物に、アズリアはいやと言うほど見覚えがあった。いつもの杖は持っておらず、またあの煙管

（無煙と言うらしいが）もすっていない。代わりにかなり大き目の黒いケースを抱えている。

「イスト・ヴァーレ・・・・」

驚くよりも先に呆れた。なぜわざわざ窓から入ってくるのだろう。しかもこの部屋は二階だと言うのに。

「どうして窓から」

とは聞かない。まともな答えが返ってくるとは思えないから。だからさっさと本題に入ることにした。

「それで、何のようだ？」

「あらら、ツッコミはなし？」

恐らくはこの状況についてだろう。あいにくとツッコむと話が無駄に長くなるのが目に見えているので、心を鬼にして可能な限り機械的に素早く素っ気なくスルーする。

「なしだ。さっさと用件を言え」

そう言うとイストは情けないような苦笑いするような顔をして、肩をすくめた。だんだんとこいつの扱い方が判ってきた気がする。

「こいつを渡そうと思ってな」

そういってイストは抱えた黒いケースを叩いた。入っていいか、と聞かれたので許可すると、彼は身軽に飛んで部屋の中に降り立った。

備え付けの机の上にケースを置く。

「これは・・・・・！」

中身を見てアズリアは絶句した。

ケースの中に入っていたのは一張の魔弓だ。色合いは白銀で統一されており、造りはシンプルでどことなく無骨な印象を受ける。

（ただの魔弓ではない）

それどころかこれほどの一品、仮に魔道卿の情報網を駆使して探したとして、それでも見つかるかどうか。魔力を込めてみるどころか、まだ手にとってさえいないのにアズリアはそう確信した。

そこに込められた力と、その存在感が他の魔弓とは格が違う。アズリアがもっている魔弓もかなりいい品なのだが、この白銀の魔弓はそのさらに二、三段は格が上だろう。ほんの一握りの魔道具にしかない、魔道具それ自体が放つ存在感をアズリアは肌で感じ、しばし呆然とした。

「魔弓『夜空（ミーティア）を切り裂く箒星』。気に入ってもらえたかな」

期待通りの反応が見られて満足したのだろう。ニヤリ、とイストは笑った。とりあえず説明な、といって彼は「夜空（ミーティア）を切り裂く箒星」を指差した。

「知ってると思うけど魔弓には矢を使うものと使わないものがある。こいつは兼用。ただし使う矢は専用のものだ」

そういってイストは二段になっているケースの下の段を見せた。

そこには銀色の矢が十本ほど矢筒に納められている。

「矢も魔道具だ。名は『流れ星の欠片』。消耗品だから設計図を一緒に入れておいた。なくなったら、どこか適当な工房に依頼して作ってもらうといい」

行き届いている、とアズリアは感じた。同時に消耗品とはいえ、こうも簡単に魔道具の設計図を明かしてしまうイストに驚きを禁じえない。普通、魔道具職人は自分の作った魔道具に関する情報を、どんな些細なものであろうとも、すべて秘匿する。なのに設計図を開示するということは、つまりそれだけ自分の腕に自信があるということなのだろう。

「同じものなんて作れっこない」

と言うことではなく、

「技術を盗まれてもなんら問題ない」

と言うことだ。

「後は実際に使ってみてもらうしかないが、結構な威力だからな、試し撃ちは人がいなくて壊れると困るのもがない場所でやることをお勧めする」

その何気ない言葉から、彼の自分の作品に対する自信が窺えた。過大評価や色眼鏡ではないだろう。実際に「夜空を切り裂く箒星（ミーティア）」を目の当たりにして、その存在感を肌で感じたアズリアとしては、彼のその自信を疑うことなど決してできない。

「最後に注意点。矢を使わないとき、つまり魔力を束ねて放つだけならそうでもないんだが、『流れ星の欠片』を使うと魔力の消費量

がハンパじゃない。だから一日に使えるのは三本まで。それ以上使ったら命の保障はしない」

恐ろしいことを、イストはさらりと言った。魔力とはすなわち生命力だ。魔力を使いすぎたことで、魔導士が死に至る例は決して少なくない。アズリアは神妙に頷いた。

「さて、何か質問は？」

「・・・・・お前は一体何者なんだ・・・・？」

ずっと気になっていたことをアズリアはついに口にした。

実を言えば、「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」を受け取ったときから気にはなっていた。どれだけ優れた職人であろうとも魔道具をたった二、三日で、しかも一から作り上げるなど、尋常ではない。あのときはストックしておいたものがあったのかもしれないとも考えたが、今こうして一般のレベルからは逸脱しすぎた魔道具である「夜空（ミー）を切り裂く（ティア）箒星」を手にするにあたり、目の前の人物に対する疑問は深まるばかりだ。

「最初に会ったときに言っただろう。オレはイスト・ヴァーレ。しがない流れの魔道具職人さ」

「それは偽名だろう？ただの流れの魔道具職人が、これほどの魔道具を作れるとは思えないな」

これほどまでに秀逸な魔道具を作れる職人ならば、引く手あまただろう。考えうる限り最高の条件で工房を任されるはずだ。言い換えれば、それは厚遇されると同時に囲われ管理されると言うことなのだが、それが普通だし、むしろそうでなければならないとアズリアは考えている。

強力な魔道具を作ることのできる優秀な魔道具職人は、魔導士たちよりもはっきりと稀有で危険な存在だ。例えばこの「夜空（ミー）を切り裂く箒星（ティア）」と同レベルの魔道具を無作為にばら撒かれたら、このカンタルクのパワーバランスなど、あっというまに崩壊してしまう。

魔道具職人は厚遇される代わりに管理される。職人が優秀であればあるほど、この傾向は強い。

翻ってこのイスト・ヴァーレという職人はどうだろう。彼が秀逸な職人であることは間違いない。にもかかわらず、彼はいずれの工房にも属していないと言う。そんな人物に対して不審や疑問を感じるのは至極当然のことだろう。

「いやいや、イスト・ヴァーレという名前は本名さ。少なくとも魔導士ギルドのライセンスにはそう記載されている」

そういってイストがアズリアにみせたプレート状のライセンスには、確かに「イスト・ヴァーレ」の名前が刻まれている。しかしアズリアは納得しない。

「だからと言ってそれが、本名だとは限らないだろう」

確かにその通りではある。だが、ではどう本名だと証明すれば良いのだろう。しかしイストはそのことには触れなかった。

「だがまあ、偽名じゃないが、受け継いだ二つ名ならある」

「・・・・・まさか・・・・・」

神がかり的な腕と二つ名を持つ流浪の魔道具職人。そんな存在は、一つしか思い浮かばない。

「・・・・アバサ・ロット・・・・？」

イストの口が、ニヤリ、とつり上がった。

アバサ・ロット。その名は恐らく世界で最も良く知られた魔道具職人の名である。性別年齢一切が不明。だがかの者が作る魔道具はどれも超一級品ばかりで、しかも気に入った相手にだけ譲ることで知られている。アバサ・ロットは千年近く昔からその存在が知られているが、これは「アバサ・ロット」という名前が一種の称号として親から子あるいは師から弟子に受け継がれているためだと考えられている。

いつの時代もアバサ・ロットの存在は噂の域を出ない。しかしその一方でその存在が虚構のものになることもまた決してない。なぜならば彼（彼女？）の作品がいつの時代にも存在しているのだから。

これだけ有名であるにも関わらず、アバサ・ロットの偽者が出てくることはまずない。なぜならばその名に見合うだけの腕がなければすぐに偽者とばれてしまうからだ。さらに言えばアバサ・ロットは流浪の魔道具職人だ。名門工房に入りたいがために、あるいは為政者たちから厚遇を受けたいがために、その名を騙ったとしても、そもそもアバサ・ロットはどこかの工房に属すると言うことはなく、すぐにウソだとばれてしまう。それどころか世間知らずのモグリだと評価を落とされるのがオチだ。

気に入った相手にしか魔道具を作らず、しかも決して代金を受け取ろうとしない。これもまた偽者が現れない理由の一つだ。

あらゆる意味で伝説の魔道具職人。それがアバサ・ロットだ。

「誇るがいいさ、アズリア・クリーク。家名の力でもなければまして血筋でもない。お前はお前の力で、自分をアバサ・ロットに認めさせたんだ」

ほんの一握りの偉人たちしか成し遂げたことのない偉業だ誇るがいいさ、とイストは、いやアバサ・ロットは尊大に笑った。

その様子をアズリアは、半ば呆然として眺めていた。アバサ・ロットに自分を認めさせたというが、何をどうして認めさせたのだろう。

「フロイトに『糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）』を渡したからか・・・・？」

思い当たる節はそれしかない。渡すかどうかが試験だったとすれば一応の筋は通る。

「いや、渡すかどうかは、実際にはどーでも良かったんだ」

しかしイストはその可能性をあっけらかんと否定した。

「じゃあどうして・・・・」

「お前、ちゃんと悩んだだろう？」

確かにあの時、アズリアは悩んだ。悩みぬいた、といっていい。どちらを選んだとしても結局いつかは後悔するであろうその選択を、しかし目を逸らすことなく真正面から見据えて悩み、そして結論を出したのだ。

「それは賞賛に値する」

イストがそう言う。今まで聞いたことがないくらい、穏やかな声だった。

「・・・・・・イスト・・・・・・」

「ん？」

名前を呼ばれた男が振り向く。その顔に、いや顔はまずい。とりあえず腹に・・・・・。

――――ドスッ

アズリアの握り締めた拳がイストの腹筋にめり込んだ。鳩尾を狙わなかったのは彼女なりの温情か。

「とりあえず一発殴らせろ」

「・・・・・殴ってから・・・・・言うな・・・・・」

殴られた腹を押さえながらイストがげっそりとした顔でこちらを睨む。

「せっかくいい事言ったのに・・・・・」

「もとはといえば、すべてお前が仕組んだことだろうが」

当然の報いだ、とアズリアはイストの恨み言をばっさり切り捨てた。

「だからその舞台の中でしっかりと悩んだお前をこうして褒めに・・・・・」

まだグチグチ言っているイストから、アズリアは、ふん、といっ

てそっぽを向いた。そして、

「・・・・ありがとう・・・・・・」

とてもとても小さな声でそういった。その声がイストに届いたのかどうかは分からない。彼はただ肩をすくめ、

「おう」

と言っただけだった。

アズリアは思う。これから先の人生の中で、どんな道を歩もうとも多くの難題に直面するだろう。そしてそのたびに選択と決断を迫られる。正しい答えや、すべての人が幸せになれる選択肢のない問題を前に、わたしはまた苦しむのだろう。

それでもきっと大丈夫だ。わたしはきちんと悩むことができた。目を逸らさず問題を真正面から見据えて苦しみ、その上で悩み決断を下すことができた。そしてそれが大切だと言ってくれる人がいた。

（だから、わたしはきっと大丈夫だ・・・・・）

アズリアはそう思う。

アズリア・クリークが大将軍ウォーゲン・グリフォードの三番目の副官として正式に任命されたのは、この日から三日後のことであった。その手には白銀の魔弓があったという。

―第三話　完―

第三話　糸のない操り人形　エピローグ（後書き）

というわけで「第三話　糸のない操り人形」楽しんでいただけたでしょうか。

今回は「アバサ・ロット」を意識して書いてみました。

「アバサ・ロットは気に入った相手にしか魔道具を譲らない」
そのエゴのために結構エグイことやってますね。

「うわ～イスト嫌なヤツ」と思われた方もいるのではないでしょうか？
実際著者も書いててそう思うことがありましたし。

本編を読まれた方は既にご存知と思いますが、今回タイトルに使った「糸のない操り人形」というのは魔道具の名前です。
ですが、それに加えて「自分ではどうしようもない状況に流される人」みたいな意味も込めたつもりです。
気づいていただけたでしょうか？

次はちょっと幕間を挟もうと思っています。

幕間　ヴィンテージ　前編

「いっよぉぉおおお！！レスカ！！嫁さんもらって色惚けてるってブハァアア！！」

突然屋内に押し入った妙にテンションの高い男、イスト・ヴァーレの顔面に木製のコップが直撃した。

「親父から手紙を見せられたときから、いつかはこのときが来ると思っていたがな。からかいたいだけなら帰れ」

コップを投げつけた男、レスカ・リーサルはうんざりしたようにいった。イストとは対照的にローテンションだ。恐らく今までに散々からかわれたのだろう。

「フッ！昔の偉そうな人が偉そうにこう言った！『汝、新婚からかうべし！』故にオレはお前をからかう！これはもはや世界の摂理！お前はからかわれるべくしてからかわれるのだ！」

「おい、人の話を聞いているか」

「プロポーズはなんて言ったんだ！？当然お前からだよな！？女性にそんなこと言わせる男なんてそこらの犬畜生以下だもんな！さあ吐け！」

「地獄に堕ちろ」

「まさに殺し文句！！」

――――ドスッ！

恐らくは意図的に自分に都合のいい解釈をして、楽しそうに叫んでいたイストの鳩尾にレスカのつま先がめり込んでいる。これには

さすがのイストもたまらず、鳩尾を押さえてうずくまった。

「お、おま・・・・。ちょ、みぞおちは・・・・・・、マジで・・・・・、地獄に、堕ちるから・・・・・・」

「フン」

恨みがましいイストの視線を、レスカはばっさりと切り捨てる。

オルレアン、という国がある。カンタルクの東、オムージュの南に位置する国で、国土は五二州。そのオルレアンにナプレスという都市がある。この地方の英雄ナプレウスから名を取った都市だ。この辺りの地域は農業が盛んで、収穫期には豊かな大地の実りを求めて多くの商人がこの都市を訪れる。

この都市でジノ・リーサルという人物が工房を営んでいる。彼は優れた鍛造の技術を持つ鍛冶師で、先代のアバサ・ロットでありイストの師匠でもあるオーヴァ・ベルセリウスと親交があり、魔道具の素体となる刀剣類をよく作っていた。

その縁でイストは彼の長男であるレスカ・リーサルと親しくなった。ある時などは彼の家に部屋を借りて、一冬を越したこともある。

イストがオーヴァから魔道具製作のイロハを教わったように、レスカもまたその父であるジノから鍛造の技術を学び、鍛冶師としての腕を磨いてきた。

「いやだってジノさんの工房に行ったら、お前、結婚して独立したっていうじゃん。これはもうからかうしかない！って思ったわけよ」

「あのクソ親父め・・・・・」

カンタルクでアズリアに「糸のない操り人形（ノー・ストリング・マリオネット）」を渡した後、イス

トは魔道具の素体として刀を一本ジノに手紙で依頼していたのだが、カンタルクでの一件を終えてその品物を取りに彼の工房に行ったところ、レスカの近況を耳にしたというわけだ。

「それに依頼の品はお前が作ったって言ったし」

結婚を機に父親の工房から独立したレスカは、市街地と農地の境目くらいのところに自分の工房を開いた。工房の名前は「ヴィンテージ」。もともとはブドウの収穫年号やいわゆる「当たり年」を表す言葉なのだが、その派生として名品や一級品を指す言葉としても用いられており、

「いい品物しか作らない」

というレスカのこだわりが現れている。鋳造の技術が発達したこの時代にあって、鍛造での仕事にこだわる彼らしい名前と言えるだろう。

「お客様ですか、あなた」

そういって奥から出てきたエプロン姿の女性こそが、レスカの妻であるルーシェ・リーサルだ。レスカよりも三つ年下で、今年十八になる。もともと二人は幼馴染なのだが、その縁でイストはルーシェとも面識がある。

「まあ、イストさんでしたか。お久しぶりです」

ルーシェの表情が嬉しそうに華やいだ。

「ん、久しぶり。ルーシェちゃん」

そういってからイストは少し首を傾げた。どうやら、人妻に「ちゃん」付けはよくないか、などと考えているらしい。そして、

「ルーシェさん」

と言いなおした。

「ジノさんから聞いたよ。結婚、おめでとう」

「ありがとうございます。イストさん、こっちから連絡取れないから、早くいらっしゃるといいなぁ、って思っていたんです」

ルーシェは満面の笑みでそういった。

「で、プロポーズの言葉、なんて言われた？」

「貴様、まだ引っ張るか」

レスカが顔をしかめる。

「え、えーっと、プ、プロ、ポーズの、こ、言葉、ですか・・・・！？」

ルーシェが顔を真っ赤にしてうろたえる。言われたその瞬間を思い出しているのか、その表情は恥ずかしそうだが、同時にとても幸せそうだ。

「あう、あう、あう」

と、真っ赤に染まった頬に両手を当てて、身もだえしている。

「くそう！無言で惚気られたぜ！」

イストが再びハイテンションになる。その様子は実に楽しそうだ。

「おい」

レスカが口を挟むがイストは無視する。ルーシェにいたっては気づいている様子さえない。

「の、のろけだなんで、わたし、そんな・・・・・」

彼女の赤い顔がさらに赤くなる。湯気が立ってきそうだ。

「いやあ、幸せそうでなによりなにより」

イストが、うんうん、と腕を組んで頷く。

「おい！」

レスカがさっきよりも大きな声で口を挟む。が、イストは再びスルーした。ルーシェはいまだに気づく気配が無い。

「で、プロポーズはなんていわれたのかな!?さっさと吐いて楽になるがよろし！」

「そ、それはですね・・・・・・」

イストの勢いにのまれる形でルーシェがその言葉を洩らそうとしたその時。

「貴様ら！人の！話を！聞けぇぇぇぇえええええええ！！」

レスカの絶叫が、その言葉をかき消した。

幕間　ヴィンテージ　後編

「イストさんは紅茶でしたよね」

イストの半分以上意図的なハイテンションもなんとか収まり、一同は居間に置かれた木製の机を囲んでいる。

「そそ、良く覚えてたね」

イストからそう言われたルーシェは、嬉しそうに笑った。そしてイストに紅茶を差し出し、レスカにはコーヒーを出した。

「相変わらずのコーヒー党か」

「当然」

イストは紅茶を、そしてレスカはコーヒーを好む。この点に関してはお互い譲らず、どちらが優れた嗜好品か、を巡って言い争いになることがしばしばあった。

イストに言わせれば、コーヒーなどと言うものは、

「苦いだけの汚水」

であり、一方レスカは紅茶のことを、

「味のしない香り水」

と決め付けている。

お互いに暴言をもって酷評しあっているわけであるが、しかしその反面イストだってコーヒーを飲むこともあるし、レスカも紅茶を

嗜む。だからそれを知っているルーシェあたりに言わせるならばこの二人の口論は、

「口の悪いじゃれ合い」

ということになる。実に妥当な観察と言えるだろう。

「そうそう、土産があるんだ。ただの土産のつもりが、結婚祝いになっちまったけどな」

きちんと包装してくればよかった、とぼやきながらイストが机の上に乗せたのは二つの木箱だった。一つは黒い漆塗りの箱で、もう一つは凝った装飾の施された木目調が美しい小箱だ。

「漆塗りのがレスカで、こっちの小箱がルーシェさんね」

そういってイストは二人に土産を手渡した。

「これは、『無煙』か」

漆塗りの箱に入っていたのはイストも愛用している煙管型禁煙用魔道具「無煙」だった。予備のカートリッジも何種類か一緒に入っている。別にレスカはタバコを吸っているわけでもなければ、まして禁煙をしているわけでもない。だが夫がこの土産を喜んでいることをルーシェは敏感に察した。

「ジノさんとお揃いだ。ま、オレなりにお前の腕に敬意を表したってことさ

「・・・・知ってるか?敬意ってのは、言葉にすると薄っぺらくなるんだ」

そりゃ失礼、といってイストは肩をすくめた。憎まれ口を叩きながらも、レスカはやはり嬉しそうだ。イストがアバサ・ロットであることを知っているレスカとしては、そのイストから腕を認められるのはやはり嬉しいのだろう。

ちなみに「無煙」を最初に依頼したのは彼の父であるジノだ。こちらは完全に禁煙を目的としていたが。それでも禁煙が成功した今現在でも「無煙」を使っているから、それなりに気に入ってはいるのだろう。

「あら、綺麗・・・・・」

小箱を開けたルーシェの感想だ。小箱には左半分に台座に固定された結晶体が入っており、残り半分のスペースは小物を入れるようになっている。

ちなみに結晶体は、魔道具の核としてよく使用される合成結晶と呼ばれるものだ。

「それも魔道具だ。ちょっと魔力を込めてみ」

ルーシェが言われたとおりに結晶体に魔力を込めると・・・・・・、

「～～♪～～～～♪～～♪♪～～♪」

朗々とした歌姫の美声が響き渡る。

「まあ、素敵・・・・・」

ルーシェはうっとりとその歌声に聞き入っている。

「魔道具『歌姫（ディーヴァ）』。ま、オルゴールの魔道具版だな」

録音されている歌は、この前まで滞在していたカンタルクの王都フレイスブルグで評判の歌姫に頼み込んで歌ってもらったものだ。幸いこの魔道具に興味を持ったらしく、報酬として「歌姫（ディーヴァ）」を一つ贈るということで引き受けてくれた。

「キルシュちゃんにあげた『歌姫（ディーヴァ）』には別の曲が入ってる。興味があったら、今度聞かせてもらうといいよ」

「はい、そうします」

ルーシェは嬉しそうに礼を言った。

「そういえばキルシュちゃんといえば、本格的に細工師になるらしいな」

キルシェとはレスカの妹だ。

「ああ、親父の工房で細工師の親方に習ってる」

そういってレスカはコーヒーを口に運ぶ。

「細工の仕事も増えてきているみたいだし、まあちょうどいいだろう」

工房を継ぐ気なのかは知らないが、とレスカは付け加えた。キルシュは男勝りで勝気な性格だから、兄のように独立して自分の工房を持ちたがるかもしれない。

「やっぱり鍛造の仕事は少なくなってるのか」

「ああ、今じゃほとんど鋳造で作っている。元々は鍛造で仕事をし

ていた工房だからな、親父は寂しがっていたが・・・・・・」
まあこれも技術の進歩ってやつだな、とレスカは肩をすくめた。

熱した金属を槌で叩きながら鍛え成型する技術を鍛造と言う。一方で溶かした金属を鋳型に流し込み成型する技術を鋳造と言う。

彼の父であるジノの工房は、もともとはジノの父、つまりレスカの祖父が開いたものだ。この時代ではまだ金属を溶かすほどの高温を得るためには、魔道具を使うしかなかったのだが、その魔道具が高価であったため鋳造の技術は一般には普及していなかった。それが今から五〇年ほど前に魔道具を使わずに高温を得る方法が確立され、鋳造の技術は一気に広まった。

ジノは彼の父から鍛造の技術を学び鍛冶師として身を立ててきたわけだが、彼が職人として活躍していた時代は、鋳造が鍛造に取って代わるまさにその変遷期であり、それゆえに思うところも多々あるのだろう。

「しかたがないさ。鋳型を使えば品質の安定したものを、安く大量に生産できる。一般大衆に受け入れられるのは当然だ」
レスカがどこか突き放すようにそういった。

「いいのか？そんなこと言って。お前、鋳造には手を出さないんだろ？」

レスカは鍛造の職人である。彼の工房「ヴィンテージ」では鋳型を用いた大量生産をすることはない。

「仕事はある。工房を大きくする気がないなら、このままでも十分だ」

仕事といっても、鉄なべの穴を塞いでくれだの、斧や鍬を作ってくれだの、そんな依頼が多い。

「町の魔道具工房から依頼が来ることもあるしな」

魔道具は量産ができない。そのため魔道具職人たちは自然と一つ一つの魔道具の質を高めることに腐心するようになり、そのため魔道具の素体もよりよいものを使いたがる。これはアバサ・ロットたるイストも同じだ。

「一つ一つの品物を比べるなら、鍛造で作ったほうが断然いいものができる。仕事は少なくはなったが、無くなりはしないさ」

その意見にはイストも賛成だった。

「と、無駄話はここまでにするとしてだ、依頼した品物はもうできているんだろうな」

イストの目が鋭くなる。彼が今日ここを訪れたのはそれが目的なのだ。

「ああ、もう完成している。今持って来る」

そういってレスカは席を立って奥の部屋に入っていった。戻ってきた彼の手には細長い布の袋が握られていた。

その中に入っていたのは、一振りの刀だった。レスカはその刀をイストに手渡す。

「拝見する」

イストは刀を鞘から抜いて、その刃をためつすがめつ眺める。

軽くそっており優美な曲線を描く鏡の如くに磨かれた刀身。浮かぶ波紋は乱れ乱刃。刃は薄く透明感を持っている。間違いなく第一級の大業物だ。

刃を何度も返しながら食い入るように見つめ、それからイストは刀を鞘に納めた。

「眼福」

短い、しかし最大級の賛辞をイストはレスカに贈った。

「さすがだな。オレも自分で打ったりするが、さすがにこれほどの品は無理だ」

「俺に言わせれば、ド素人のはずのお前があれだけのレベルの品を作れるほうが、よっぽど不思議なんだがな」

レスカは苦笑する。

イストは自分で魔道具の素体を作ることがあるのだが、その品質は「ぎりぎり一級品」といったレベルだ。イストが鍛冶師としては素人であることを知っているレスカとしては、不思議に思うのも当然だろう。

「ま、それには種も仕掛けもあるってことで」

自分の技量だけではないことを、イストは否定しない。

「で、それで幾らだ」

「二〇シク（金貨二十枚）」

二〇シクといえば、一般家庭の五〜七ヶ月ぶんの収入に相当する。町の武器屋に行けばこのお金で二〇本近くの剣が買えるだろう。しかしイストはこの額にすぐに応じた。この刀にはそれだけの価値がある。

「妥当だな」

すぐに金貨を二〇枚数えてレスカに渡す。ルーシェは普段目にすることの少ない金貨の山に目を丸くしている。

「どんな魔道具にするつもりなんだ」

自分の作った作品の行く末はやはり気になるのか、レスカがそう尋ねた。

「まだ決めてない。これから冬だし、ゆっくり考えようと思ってる」

冬季は旅がしにくいのか、どこかに腰をすえて春を待つということを彼はよくする。そしてその間に溜め込んだアイディアを形にするのだ。

「また親父の工房を使うのか」

「いや、まだ温かいし、ポルポート辺りにでも行こうかと思ってる」

そうか、とレスカは呟いた。

「でも、今日はうちでお食事を食べていってくださいね。イストさん」

仕事の話が終わったと思ったのか、ルーシェがそう声をかけた。いいですよね、とレスカに確認を取ると彼も、かまわない、と言った。夫が了承したのを見ると彼女は手を叩いて喜び、早速食事の支

度を始める。

（今更断るのもアレだな・・・・・）

せっかくだしご相伴にあずかるとしよう。さてどのお酒を出そうかと、ぼんやり考えるイストであった。

幕間　ヴィンテージ　後編（後書き）

感想お待ちしています。

第四話　工房と職人　プロローグ（前書き）

今回の話は、魔道具職人の仕事について書きたいなぁ～と思っております。

第四話　工房と職人　プロローグ

流れに身を任せて生きていくのも
流れに逆らい生きていくのも
どちらも等しく容易ではない

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第四話　工房と職人

ポルポートという国がある。カンタルクの南に位置し、そのさらに南には海が広がっている。国土は六七州であり、この国が北のカンタルクと因縁の仲であることは良く知られている。

このポルポートの王都アムネスティアから程近い位置にパートームという街がある。もともとは街道沿いにあるただの村でしかなかったのだが、ここ十年程で急速に発展した街でありさらにもう二十年後には、ポルポートにおける一大都市になっているであろうと言われている。

その理由はこの街に作られた国営の魔道具工房「エバン・リゲルト」である。本来は王都に建てるつもりであったらしいのだが、適当な土地が見当たらないと言う理由でパートームに置かれることになったのだ。この国内最大の工房のおかげでパートームはポルトールにおける魔道具の一大生産拠点となり、それまでとは桁違いの人・モノ・金が流入するようになったのである。

そのパートームのとある飲食店に一人の男がいた。

背丈は一七〇半ばくらいで、年の頃は二十代の始めといったところか。整った目鼻立ちをしているが、取り立てて美形というわけではない。注文したサンドイッチを片手でパクつきながら、机の上に広げた本やノートとなにやら難しい顔でにらめっこしている。

余談ながら、彼が今食べているこの「サンドイッチ」という食べ物は、とある伯爵がカードゲームを楽しみながら食べられる食事として、コックに作らせたのが始まりとされている。その伯爵の名前はサンドイッチ伯爵。大した事をしていない人物だが、恐らくは本人も考えていなかった分野で歴史に名を残すことになった。

「ふむ、やっぱりこの術式は複雑になるな。合成もするし、もう少し簡略化できないもんかね」

ぶつぶつ独り言を言いながら、男はノートにペンを走らせる。しかし今もし誰かが彼のノートを覗き見したとしても、その内容を理解することはできなかっただろう。なぜならばそこで使われていたのは一般に普及している常用文字（コモンスペル）ではなく、すでに廃れてしまった古代文字（エンシェントスペル）だったからだ。

もっともお客の少ないこの時間帯、ぶつぶつと独り言をもらしている人物に近づく物好きなどいなかったが。

店の扉が開き、一人の少女が入ってくる。

「おばさん、研ぎ終わった包丁、持って来ました」

そういって少女はカウンターの奥にいる女主人の方に近づいていく。

「おや、ニーナちゃん、ありがとうね。自分で研いだりもするんだ

けど、やっぱりニーナちゃんのところでやってもらうと、違うからねぇ」

そういわれると、ニーナと呼ばれた少女の表情が綻んだ。

「ありがとうございます。今後ともご贔屓に」

包丁を受け取った女主人は一つ一つ手にとって、その研ぎ具合を確かめてゆく。最後の包丁を確かめ終わると、満足したように頷いた。

「でも悪いねぇ。ニーナちゃんの所って本当は魔道具工房なのに、包丁砥ぎなんてさせちゃってさぁ」

「いえそんな。うちには刃物を研ぐための魔道具がありますから」

ニーナはそういったが、彼女の表情はどこか暗い。多少なりとも現状に不満を持っているのだろう。

「それに、文句ばっかり言っていても仕方ありませんし」

少女がそういうと女主人は、そうかい、と言ってそれ以上は何も言わなかった。この飲食店は「エバン・リゲルト」ができて、パートームが発展する以前からここで店を構えている。当然ここの女主人は、ニーナや彼女の父ガノスの工房である「ドワーフの穴倉」についても古くから知っている。そのため今日の現状が彼女たちにとってあまりよいものではないことも重々承知していたが、軽々しく口にすべきではないと思っているのだ。

「お金は月末にまとめて集金しますので、その時におねがいします」

「あいよ。お父さんにもよろしく伝えといとくれ」

一言礼を言ってニーナは足を出口に向けた。その時、あのサンドイッチを食べていた男が机に広げていた本やノートが、彼女の視界に入った。

「・・・・・術式理論？」

何気なく呟いたニーナのその独り言は、男の耳に届いていた。

「そうだが、古代文字（エンシェントスペル）が読めるのか？」

これがニーナ・ミザリの人生を大きく変える、イスト・ヴァーレとの出会いであった。

第四話　工房と職人　プロローグ（後書き）

ちなみにサンドイッチ伯爵の話はマジ話です。

第四話　工房と職人？

「すると、親父さんの工房はもともとニーナさんのお祖父さんがはじめたものなのか」
「そうです。あ、あとわたしのことはニーナでいいです」
「じゃ、オレも呼び捨てにして」

イストは今ニーナと一緒に彼女の父親の工房である「ドワーフの穴倉」に向かっている。さきほどの飲食店でイストは魔道具に刻む術式、つまり魔法陣の理論設計をしていた。それを見たニーナは、彼が「エバン・リゲルト」の職人ではないかと思ったらしい。

「違うよ。オレは流れの職人だから、どこの工房にも属してはいない」
イストのその説明を彼女はあっさりと信じた。

「お祖父ちゃんのお師匠さんも、流れの魔道具職人だったらしいんです」
そのせいか、彼女にとって流れの魔道具職人と言うのは、世間一般が考えるよりもずっと身近な存在らしい。

さらに聞くところによれば、その師匠は魔道具の記録を付けるのに古代文字（エンシェントスペル）を用いており、当然ながら弟子にもこの現在は廃れてしまった言語を覚えるよう強要したという。

「その流れでウチの工房はいまだに古代文字（エンシェントスペル）を使っていて、わたしもお祖父ちゃんから習ったんです」
あんまり役に立ってはいないんですけどね～、とニーナは笑った。

そんな彼女の話に相槌をうちながら、イストは古代文字（エンシェントスペル）を用いる流れの魔道具職人について考えていた。

（もしかすると、アバサ・ロットかもしれない・・・・・）

というか、それ以外心当たりが無い。

ニーナの祖父がその人に弟子入りしたということらしいから、イストの師匠で先代であるオーヴァの若かりし頃か、あるいはその前の代の、つまり先々代のアバサ・ロットかもしれない。

（ま、確かめる術はないけれど・・・）

ニーナの祖父はすでに他界しているらしい。もし仮に彼の師匠がアバサ・ロットだったとしても、それを家族に話しているとは思えない。かの魔道具職人に関する情報は軽々しく人に話すにはあまりにも危険で、そのことはアバサ・ロットの近くにいればいるほど良く分かる。

（直接の弟子だったんなら、師匠の名を使わなくたって自立していけるだろうし）

実際に自分で工房を開いて、それが今現在まで残っている。彼の人生はそれなりに順調だったのだろう。

「それよりもいいのか、オレが親父さんの工房にお邪魔しちゃって」

今イストがニーナに連れられてドワーフの穴倉に向かっているのは、イストが流れの職人だと知ったニーナが、

「それならうちの工房を使ってください」

と言ったからだ。

どうやら祖父とその師匠が、たびたびどこかの工房を借りて作品を作っていたという話を聞いていたらしい。

「大丈夫です。設備も整ってますし、お父さん、一人で持て余してますから」

そこまで言うと、ニーナはふいに俯いた。その表情は心なしか暗い。

「エバン・リゲルトができるまでは、お父さんの工房、結構評判良かったんです。それなのに・・・・・」

エバン・リゲルトができる前、「ドワーフの穴倉」では六人の職人が働いていた。創業者であるニーナの父祖はもう引退していたが、彼の息子であるガノスを中心に弟子たちが工房を守っていたのだ。

だが国営の魔道具工房である「エバン・リゲルト」ができたことで、ドワーフの穴倉の状況は悪化する。

「お祖父ちゃんのお弟子さんたち、みんなあっちに引き抜かれちゃって・・・・・」

魔道具職人の引き抜きは、日常茶飯事である。職人たちもまたそれを普通とし、より良い条件を提示する工房には多くの職人たちが集まってくる。そして当然のことながら各工房にはそれぞれの規則があり、職人たちはそれを遵守するよう求められる。

いやな言い方をするならば、この世界はそうやって黄金色の鎖を使い、魔道具職人たちを囲い込みまた管理しているのだ。

「『エバン・リゲルト』ができてパートームは大きくなったけど、ウチは細る一方です・・・・」

イストは肩をすくめるだけで、何も言わなかった。

彼に言わせるならば「ドワーフの穴倉」が零細に陥っているのは、ひとえにガノス・ミザリの腕が不足しているせいである。

魔道具職人の世界は冷徹なまでの実力主義だ。成果主義と言い換えてもいい。強力な、そして便利な魔道具を作ることができる職人のみが、高い評価と破格の待遇を得ることができるのである。

逆に言えばどこかの工房に属したりしなくても、秀逸な魔道具さえ作れればそれは高値で売ることができる。実際イストをはじめとする歴代のアバサ・ロットたちは、そうやって旅や開発の資金を得てきたのだから。もっとも魔道具を売るさいには「アバサ・ロット」の名を名乗ることは決してしないが。

ゆえにイスト・ヴァーレという魔道具職人はこう考える。

「工房が細る一方なのは、ガノスの腕が未熟だからだ」

とはいえこれは卓越した技術と知識をもっている彼の、アバサ・ロットのエゴだろう。独立都市ヴェンツブルグでの騒動をみれば分かるように、イストほどの腕を持つ職人というのは本当に稀少な存在で、誰もが彼のように優秀な魔道具を作ることができるわけではないのだから。

そもそも新しい魔道具を一から作ろうとすればそれなりの開発費がかかる。天然の宝石でも使おうとすれば、十～二十シク（金貨十

～二十枚）かかることはザラだ。加えて開発には時間がかかり、その間の生活費も必要になる。職人が少なく一度経営が傾いた工房は、職人の腕如何にかかわらず、なかなか新魔道具の開発に手を出せないのが現実だ。

「あ、ここです」

少々くらい話をしている間に、どうやら「ドワーフの穴倉」についたらしい。一時期は創業者であるニーナの父祖を含めて七人が働いていただけのことはあり、工房はそれなりに大きく作りも重厚である。だが中から響いてくる音は小さく工房内が閑散としていることを示しており、それがそこはかとなく哀愁を感じさせる。

「お父さん、ただいま」

そういってニーナが工房の中に入っている。イストも、おじゃましますと、と声をかけて中に入った。

工房の中を見回してみると、なるほど確かにニーナが言ったとおり設備は整っている。

（庵はもっとすごいけど・・・・・）

イストの言う「庵」とはアバサ・ロットの工房「狭間の庵」のことである。確かにあそこの設備はここよりも充実している。歴代のアバサ・ロットたちが、

「あると便利だから」

と言う理由で自作の機材を作っていった結果、原材料さえあれば

一から魔道具製作が可能なほど設備は充実している。たった一人のためにあれだけの設備を用意したのだ。普通の工房からすれば開いた口がふさがらないであろう。

「でね、お父さん。冬の間、イストにここを使わせてあげたいんだけど、ダメかな」

イストが工房内を物色している間に、ニーナが説明を済ませたらしい。

「差し支えなければ、そうさせていただけるとありがたい」

イストも頼み込む。ただダメだった場合、「狭間の庵」を使えばいいと思っているせいか、どうにも真剣味に欠ける。

ガノスは娘を見た。彼女は何も言わなかったが、その目は言葉以上に切実な思いを伝えてくる。

「・・・・・ここでよろしければ、いくらでも使ってください」

イストが礼をいい、ニーナは手を叩いて喜んだ。そんな娘の様子を見て、ガノスは己のふがいなさを思いため息をついた。

第四話　工房と職人？

ニーナ・ミザリは魔道具職人に憧れている。

ニーナを知る多くの人はあるいは否定するかもしれない。しかし父親であるガノスはそのことを確信していた。

ガノスの妻はニーナを産んだ後、産後の肥立ちが思わしくなくニーナが二歳のときにこの世を去った。以来ガノスは彼女を男手一つで育ててきた。

（いや、ワシは育てることしかできんかった・・・・・）

ニーナは幼い頃から工房に出入りしていた。それも仕方が無い。幼い子どもを家で一人にしておくわけにもいかなかったのだ。ガノスの父が始めた工房「ドワーフの穴倉」で、彼女は職人たちの仕事を見ながら成長していった。

彼女が最も憧れた職人は、まず間違いなく創業者であるその祖父であろう。彼の仕事を、目を輝かせながら魅入っているニーナの姿を、ガノスは良く覚えている。祖父もまた、孫が自分の仕事に興味を持ってくれているのが嬉しかったのだろう。時間を見つけては色々と教えていた。古代文字（エンシェントスペル）も彼がニーナに教えたのだ。

だが父祖が他界し、「エバン・リゲルト」ができて状況は一変した。弟子たちは工房を去り、「ドワーフの穴倉」は一気に落ち込んだ。ガノス自身もまた「エバン・リゲルト」から勧誘を受けていたが、死んだ父の遺したこの工房を畳む気にはどうしてもなれなかった。

（ワシのくだらないプライドのせいで、ニーナに不自由をさせている・・・・・）

魔道具職人になる方法は主に二つある。

一つは専門の学校に通って知識を得ること。

そしてもう一つはどこかの工房に弟子入りして、そのイロハを学ぶこと。

工房主の娘であるニーナは、本来ならばごく自然にその知識を得られるはずであった。しかし「ドワーフの穴倉」の経営が傾いたことで、ガノスはその日の糧を稼ぐだけで精一杯の状態で、とてもではないが娘を教えることなどできない。新しい魔道具を作りたくとも先立つものがない。

当然、専門の学校に通わせるだけの余裕も無い。

別の工房である「エバン・リゲルト」に弟子入りするという手段もあるが、ガノスがこの街で「ドワーフの穴倉」を経営している以上、先方が受け入れないであろう。

どうにも、打つ手が無い。

ニーナ自身は、魔道具職人になりたいとは言わないし、またそのそぶりも見せない。だがニーナがイスト・ヴァーレと名乗る流れの魔道具職人を連れてきたとき、ガノスは彼女がまだ夢を諦められないでいることを悟った。

（この一冬の間に、色々と教わりたいのであろうな・・・・・）

自分ではなく、イストから。

恐らくは気を使ってくれたのだろう。ガノスは教えたくとも、教えてやることができない。そう考えれば、仕方ないともいえる。しかしそれでも、

（なんとも情けない親だ・・・・・）

そう思わずにはいられなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ニーナに連れられてイストが案内されたのは、工房の二階にある一室であった。さして広くも無い部屋ではあるが、ベッドと机それにタンスが用意されていた。

「もともとはお弟子さんの部屋なんですけど、空いちゃっているのでここを使ってください」

そういってニーナはさらに説明を続ける。

「わたしとお父さんは工房の隣の家に住んでいます。ご飯はそっちで用意するので、食べに来てくださいね」

それから、といって彼女は指を折りながら細々とした説明をしていく。

「何か足りないものがあったら言ってください。すぐ用意しますから」

「ん、ありがと。そうさせてもらう」

そう礼をいってからイストは、ああそれから、と思い出したように付け加えた。

「八シク（金貨八枚）でいいか」
「えっと、なんでしょう？」

本当に分からないのか、ニーナは首をかしげた。そんな彼女に対しイストは「食費部屋代その他諸々のお金」と答えた。

「三・四ヶ月ここにお世話になるんだ。八シクなら不足はないと思うんだが」

そういって財布を取り出すイストに、ニーナのほうが慌てて声を上げた。

「そんな！いくらなんでも八シクなんて頂きすぎです！」

しかしイストはそんなことは気にしなかった。財布から金貨を八枚取り出すとニーナの手に握らせた。

「イスト！」
「気にすんな。オレとしても金払っといた方が、心置きなく迷惑かけられるからな」

冗談めかしてそういうことで、イストはニーナの気持ちを軽くした。

イストが「食費部屋代その他諸々」として八シクの金額を提示したのは、決して感傷や安っぽい同情ゆえではない。工房という専門的な施設を借りる以上、それくらいの金額を払うのが筋だと考えているのだ。

「少し前に、まとまった金も入ったことだし」

当然、独立都市ヴェンツブルグで聖銀（ミスリル）の製法を売りつけた際の一万シクのことだ。もっとも実際に受け取ったのは四つの勢力から五百シクのみで、残りの八千シクはレニムスケート商会も加わっている商業ギルドの預金口座に振り込まれている。それでもイストの懐には二千シクの現金が舞い込んだわけで、確かにその金額に比べれば八シクなどさして気にはならないのかもしれない。それに現在リリーゼが持っている「水面の魔剣」を売却したお金もまだ残っている。

「それじゃあ、頂いておきますね・・・・・」

そういうと、ニーナはおっかなびっくり手のひらの金貨を懐にしまいこんだ。それから何か思いついたように、パッと顔を輝かせた。

「それじゃあ！今晩のお食事は豪華にしますね！」

「いいな。そうしてくれ」

イストがそういうと、ニーナは嬉しそうに返事をして部屋から出て行った。その後姿を見送ると、ふいにイストの表情が鋭くなった。

「さて、今のうちに庵から必要なものを取り出しておかないとだな」

さすがにアレを見られるわけにはいかない。手早く済ませる必要がある。

左の手首にはめられた古い腕輪に魔力を込める。何も無いはずの空間に突如として現れた石造りで蔦の絡みついた扉、その扉の奥にイストは消えていった。

その日の夜の食事はガノスが目を丸くするほど豪華なものだった。共に酒（イストが持ち込んだ）を酌み交わしたせいか、ガノスとイストはすぐに打ち解けることができた。

久しぶりに快酔した夜であった。

第四話　工房と職人？

シーヴァ・オズワルド、という人物がいる。

この人物が何を成したのか、ここでは書かない。読み進んでいただければ、いずれ筆を取る機会もあるだろう。

だが、この時代の歴史書を紐解くと、必ず彼の名前を目にする。ゆえに彼を舞台に登場させないことには、この物語も前に進まない。

彼を舞台に上げるにあたり、とりあえず彼の出身地であるアルテンシア半島について記述したいと思う。

アルテンシア半島はエルヴィヨン大陸の北西に突き出る形で位置している半島である。半島の先端の緯度はアルジャークよりも少し北に位置し、その付け根はオムージュやモントルムよりも南にあり、大陸の中央部にも近い。アルテンシア半島が巨大な半島であることは分かっていただけよう。

アルテンシア半島の歴史は悲惨である。

もっとも歴史書からさして独創的でもない言葉を引用するならば、「歴史は流血のインクで記されている」

ということになる。だがそれでもアルテンシア半島における「インク」の量が他と比べて群を抜いていることは、多くの歴史家たちが認めている。

アルテンシア半島における「インク」の量が多くなるのは、多く

の都市国家が乱立する頃からである。これらの都市国家はそれぞれが一州から多くとも五州程度の領地を支配し、それぞれ独自の文化を育んでいった。

支配単位が複数あれば、流血の交渉がもたれるのは、歴史としてはごく自然な流れである。

アルテンシア半島の版図は二三七州。この広大な版図の中で七十人強の領主たちが互いに凌ぎをけずり合ったのである。この頃の歴史を紐解けば、一日のうちに複数の戦場で流血がなされている事例を数多く見つけることができる。

どこかの村が消えてなくなった。どこそこの街が火の海になった。食料庫が襲撃を受けた。境界線があちらにこちらに書き変わった。これらのことはごくごく日常的なことであった。

アルテンシア半島の悲劇は続く。

この土地があるいは独立した島であれば、そのうち英雄が現れ統一を成し遂げたかもしれない。しかし残念なことにこの土地は大陸にくっついた半島であった。

半島の南や南東から、侵略者が押し寄せてきた。領地拡大と言う国家の欲望の前では、混乱をきたしている半島など格好の獲物でしかなかった。加えて、半島と言う地理的な立地は大陸とは異なる文化が育つ土壌となりうるが、アルテンシア半島の場合もそうであった。そして人は異文化に対し、時として想像を絶する蛮行をもってのぞむことがあり、それはこの半島において現実に行われた。

アルテンシア半島を脅かす侵略者は、大陸側からのみやってきた

わけではない。

半島の先端のさらにその先に、ロム・バオアと呼ばれる大きな島がある。この島は冬が長く、土地がやせているため、穀物は育たない。同じ北国でもアルジャークなどは土地が肥沃で夏になれば奇跡のように実りを産するが、そのことと比べれば不幸な島であると言えるだろう。

だがそのような島でも人は住んでいる。大陸の人々が蛮族というところのゼゼトの民である。彼らは狩猟民族であった。

一般的な話であるが、狩猟民族や遊牧民族の直接的な収入源は動物の肉や毛皮である。では彼らが主食として肉を食べているかと言えば、実はそうではない。彼らの主食もまた穀物なのだ。ではその穀物をどうやって手に入れるかというと、早い話が肉や毛皮と物々交換するのである。

ゼゼトの民もまた同じであった。彼らは狩猟によって得た肉や毛皮をアルテンシア半島に持ち込み、そこで穀物などと交換していた。

そんな彼らが、大陸側からの侵略とほぼ時を同じくして、略奪を活発化させたのだ。

理由は幾つか考えられる。

まず第一にこの半島における混乱は彼らの目にも好機と映ったのだろう。略奪ならば思うままに欲望を遂げることができる。人の理性のたがは外れやすい。

加えて混乱により穀物を得ることができなくなったとも考えられ

る。穀物を手に入れなければ彼らとて餓えるしかなく（肉ばかり食べていてはすぐに獲物がいなくなってしまう）、それを避けるためにはあるところから奪うしかない。

こうしてアルテンシア半島は南北双方から侵略を受け、その混乱と惨状たるや悲惨なものであった。ここの領主たちが足並みを揃えることなく、個々に対処を試みていた時期はとくにそうであった。

ここここに至りついに、アルテンシア半島の領主たちは団結という選択に踏み切ることとなる。アルテンシア同盟の結成である。この同盟に参加した領主は当初十三人で、最終的には五十六人にまで増えた。

同盟の締結により状況は好転した。

細かい記述は避けるが、侵略軍の中で最も兵力が多かった（十三万五〇〇〇人と記録されている）軍を打ち破ったのを皮切りに、アルテンシア同盟軍は各地で勝利を積み重ねていった。

同盟軍が強いと見るや、侵略者たちは内輪もめを始めるようになった。彼らの目的はあくまでも侵略と略奪で、奪う相手はなにも同盟軍なくともよかったのだ。

混乱に付け込み、付け込まれる関係は、ここにおいて逆転した。侵略者たちはあれよあれよと言う間にアルテンシア半島から追い出されたのである。

残るは蛮族のみである。もっともこちらはすぐに終わった。混乱が収束するのと比例するように、ゼゼトの略奪隊はなりをひそめていったのである。

侵略者はいなくなった。しかしアルテンシア半島の人々の心には……大陸人とゼゼトの民への言いようのない恐怖が残っている。その恐怖は克服されねばならず、彼らはそのために行動を起こした。

大陸側に関しては半島の付け根に堅牢な要塞を築き、いわば半島の出入り口に栓をした。この要塞はゼーデンブルグ要塞といい、なんと常時十万の兵を駐在させ大量の兵糧を抱え込んだ大要塞であった。

ゼゼトの民に対しては、要塞を築く場所が問題となった。彼らの略奪隊はいわばゲリラであり、不特定多数の場所に出現する。半島内のどこか一箇所に要塞を設けたとしても意味がない。設けるのであればロム・バオアに設けなければならない。

同盟軍は兵を催し、ロム・バオアに出兵した。そして破竹の勢いでロム・バオアの南半分よりゼゼトの民を駆逐し（多くのゼゼトの民は北のほうに逃れた）、そしてそこにゼーデンブルグ要塞と同規模の要塞である、パルスブルグ要塞を建設した。これによりアルテンシア同盟は、半島とロム・バオアのあいだの制海権を獲得し、ゼゼトの民を北へと追いやったのである。

これだけの事業を、侵略によって痛めつけられたアルテンシア半島の人々がやってのけたのである。いかに彼らの恐怖が深刻であったが、慮ることができる。

二つの大要塞に守られて、アルテンシア半島はようやく侵略者から解放された。領主たちも同盟の必要性を重々認識しており、内輪もめもひとまずは収まった。こうして半島に住まう人々は安息を手に入れたのである。

第四話　工房と職人？

以下、シーヴァを舞台に上げるため、続けて記す。

ゼーデンブルグ及びパルスブルグの両要塞はもちろん、建設工事用の魔道具が存在するとはいえ、完成までにそれなりの年月を費やしている。だがその基礎となる部分は比較的早い段階で完成した。

このときより、アルテンシア半島の人々は血みどろの戦争から解放されたと言っていい。そして次に始まるのは復興である。

あるいはこの時代が、アルテンシア半島の人々にとって最もよい時代だったのかもしれない。

領主と領民は等しく被害者であり、また復興を志す同志であった。今日の努力が明日には報われ、流した汗の量だけ幸せになれると、人々は本気で考えることができた。苦難の先には成功と豊かさがあり、十年二十年先の未来は輝かしいと、ごく素朴に信じることが許される時代であった。

だが、そんなよき時代もいずれは終わりを告げる。

復興を果たし豊かになった土地をただ受け継いだだけの領主たちの時代になると、半島の住民たちの上に再び暗雲が立ちこみ始めた。

アルテンシア同盟への参加により、領主たちは外敵に警戒する必要がほとんどなくなったといっていい。半島外の侵略者は二つの大要塞（この時期にはすでに完成している）がこれを防ぐだろう。他

の領地を侵略することなどできないが、逆に自分の領地を侵略される恐れもない。

自然、彼らの目は自分たちの領地に向く。

領主たちは互いに競い合うようにしながら、自分たちの周りを豪華絢爛に飾り付けていった。壮麗な城と屋敷をいくつも建て、何人もの愛妾を囲い込んだ者がいる。黄金と宝石を溜め込んだ者がいる。珍しい魔道具を買い漁った者がいる。

これらの出費はすべて、領民たちの血税によってまかなわれていた。小幅ながら繰り返し行われた増税によって、税率はついに六割を超えている。

役人たちも腐敗した。賄賂を贈らなければ何もできない。貧しい者が無実の罪で獄へと引いていかれる。犯人捜査の名目で略奪が行われることも度々あった。

アルテンシア同盟と言う「家」を支える、いわば「柱」が腐りもはや腐臭さえ放っている時代。それがシーヴァ・オズワルドという男が舞台に上がる時代であった。

アルテンシア同盟には二種類の軍隊がある。

一つは同盟軍と呼ばれ、同盟に参加している領主たちが資金を出して運営し、半島全体から兵を募っている。同盟を一つの国と考えれば国軍に相当する存在である。

もう一つは警備隊と呼ばれている。これは各領主が自身の領地におくもので、軍隊と言うよりも警察機構を想像したほうが、役割と

しては近い。ただ実質的に領主の私兵であり、それゆえに腐敗するスピードも速かった。

シーヴァは同盟軍の将軍であった。役職名はパルスブルグ要塞司令官及び要塞常備軍司令官。パルスブルグ要塞を預かり、ロム・バオアにてゼゼトの民からアルテンシア半島を守る、北方の守護者であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一人の男が城壁の上から雪原を眺めている。長身痩躯で、歳の頃は三十と少しといったところか。無造作に伸ばされた黒い髪の毛をもてあそぶ風は、刃にも似て鋭く冷たい。

「ここにおったか、シーヴァ」

その声を聞いてシーヴァはすぐに相手を察した。この要塞の中で彼を呼び捨てにする人間など一人しかしない。

「珍しいですな。ベルセリウス老がここに来るとは」

城壁に現れたのは一人の老人であった。その眼光は鋭く、この人物が曲者であることが傍目にも良く分かる。

「お主に少し用事がな」

そう言ってから、ベルセリウス老と呼ばれた老人は身を震わせた。

「しかし、ここは寒いな」

その言葉にシーヴァは苦笑する。要塞の一角に設けられたベルセリウス老の工房は、要塞内いやロム・バオアで間違いなく最も暖かい部屋である。兵士たちが老人の工房に温みにいって捕まり、そのまま強制労働させられていた事件は記憶に新しい。開放された兵士たちは、

「助かりました！もうサボりません！」

と、泣きながら言ったそうな。厳しい訓練を積んだ屈強な兵士たちに、トラウマじみた恐怖を植えつけた強制労働について、シーヴァは深く考えないことにしている。

「して、要件は何ですかな」

要塞内で起こった珍事件についての記憶はひとまずおいておき、シーヴァはベルセリウス老に尋ねた。

「依頼のあった魔弓『とく速き射手の弓（アルテミス）』注文通り三十張、完成した」

「そうですか。ありがとうございます」

シーヴァが礼を言うと、ベルセリウス老はつまらなそうに「ふん」と鼻を鳴らした。

「退屈な仕事だった。二度とやらせるな」

あまりに率直過ぎる物言いにシーヴァは再び苦笑した。

「そうするとしましょう。なにせ老公を怒らせると後が怖い」

シーヴァは肩をすくめるようにしてそういった。ベルセリウス老

は特に何も言わなかった。あるいは自覚しているのかもしれない。

「・・・・・もうすぐか」

「ええ、老公に造って頂いた魔道具のおかげでかなり戦力に余裕ができた。ゼゼトの民を引き込めれば御の字」

シーヴァの目に危険な光が宿る。

「お主は好きにやれ。儂は儂の作品が世界と歴史を動かす様子を見物させてもうとする」

アルジャーク帝国がそうであったように、この時代歴史は極寒の大地から動く。

第四話　工房と職人？

イストが「ドワーフの穴倉」で間借りするようになってから、およそ一週間が過ぎた。この間、イストは魔法陣の理論構成に精を出していた。工房の二階に設けられた彼の部屋には、資料が散乱し足の踏み場もない状況になっている。（寝るときに蹴落としているのか、ベッドの上はきれいだった）

「ど、どこからこの資料、取り出したんですか！？」

驚愕するニーナにイストは「玩具の本棚（ミニチュア・ブック・シェルフ）」という魔道具を見せた。この魔道具、見た目は本当に玩具の本棚なのだが、魔力を込めると本物サイズの本棚になる。ここに資料を収めてもう一度魔力を込めると、資料ごと玩具サイズに戻る。確かにこの魔道具があれば大量の資料を持ち運ぶことができるだろう。

二階で魔法陣の術式を構成し、下におりてきてそれを試し（さすがに狭いところではやりたくないらしい）、その結果を記録しまた二階に戻って術式の構成を考える。ちなみにイストは魔法陣を試すとき、「光彩の杖」を使って魔法陣を描いているのだが、これにはニーナだけでなくガノスも驚いていた。ただイストに言わせれば、

「紙や地べたに描くよりもよっぽど効率的」

なのだという。たしかに「光彩の杖」を使えば術式の書き換えも容易で、効率的といえるだろう。ただし「光彩の杖」の扱いに熟練していれば、だが。

とはいえニーナはちょっぴり不満である。イストが現在取り組んでいる魔法陣はどれも高度に難解なものばかりで、いくら古代文字（エンシェントスペル）

が読めるとはいっても、その内容を理解することなどできはしない。部屋に散乱している資料を読んでもみたのだが、さっぱり理解できなかった。魔道具職人としての知識なり技術なりを、この一冬の間にイストから盗もうと画策している彼女としてはなんともどかしい。

「まったく新しい魔道具を一から作ろうとしたら、魔道具職人の仕事の半分は術式構成だ。技術職っていうよりは、どっちかって言うと理論屋だな」

あるときイストは彼の部屋で資料とにらめっこしていたニーナにそういった。だとすれば彼女にとって由々しき事態である。これらの資料を理解できない彼女は、魔道具職人にはなれないことになってしまう。

なんとか知識を得たいとは思う。しかし忙しくしているイストに、弟子でもない自分が教えを請うのは躊躇われた。悶々とした思いを抱えながら、ニーナはここ数日を過ごしていた。

ニーナがイストから街の案内をすることになったのは、一晩中降り続いた雨が上がり随分と寒くなった朝のことであった。

「合成結晶体を見に行きたいんだが、店を教えてくれないか」

合成結晶体とは魔道具の素材の一つで、主に核として用いられることが多い。本来は自然界に存在する結晶、簡単に言えば宝石を用いていたのだが、如何せんコストがかかりすぎるため、人工的に合成されたものが出回るようになった。

これらの結晶体は「練金炉」と呼ばれる魔道具を用いて合成され

るのだが、もともと宝石を模してつくられており、その見た目の美しさから装飾品としても用いられるようになっている。

「結晶のストックが無くなりそうだから買っておきたい」

だから扱っている店を教えて欲しい、と頼んできたイストに対しニーナは自分が案内すると申し出たのである。もちろん彼女の腹のうちには、そうやってついて行けば何か教えてもらえるのではないかと言う思惑がある。

イストは彼女の思惑について、おおよそは察しているのだろう。特に何も言わず好きにさせていた。知識や技術に対して貪欲な姿勢は、彼も嫌いではない。だから、店に向かう道すがら彼がこんなことを言い出したのは、あるいはただの気まぐれではなかったのかもしれない。

「人工石（合成結晶体のこと）と天然の宝石、何が違うと思う？」

煙管型禁煙用魔道具「無煙」を吸い、白い煙（水蒸気だという）ながら、ごく自然にイストはそうニーナに聞いた。

「えっと、値段、じゃないんですか」

すっかり見慣れてしまった「無煙」を吸うその姿はどこまでも自然体だ。しかしニーナは欲していた知識を得られる機会が突然やってきたことに驚いた。

「一応正解。確かに人工石と天然石ではコストが違う」

だが、とイストは続けた。その口調はまるで生徒を教える教師のようだ。

「今でも天然石のほうを好んで使う職人さんはたくさんいる。コストがかかることを承知で、だ」
なんでだ、とイストはニーナに問いかけた。
「見栄え、ですか・・・・・？」
それ以外、思いつかなかった。
「三十点」
イストの採点は辛口だった。というより何点満点なのだろう？
「確かに王族や貴族から依頼された品は、見栄えを気にして天然石を使うことが多い。だけどちゃんと技術的な理由もある」
分かるか？とイストは「無煙」を吹かしながら聞いた。
「・・・・・分かりません・・・・・」
小さな声で、呻くようにしてニーナは答えた。俯き悔しそうに下唇を噛む。自分の無知が恨めしかった。
そんなニーナの様子を、イストは恐らくは意図的に無視して、それまでと一向に変わらない調子で正解を口にした。
「天然石には一個一個、くせとも言うべきものがあるんだな」
「えっと、それはつまり宝石の種類ごとに特性があるってことですか・・・・・？」
横目で窺うようにしてニーナが尋ねた。
「確かに天然石にはその種類ごとに特性がある」

例えば赤い石は炎と相性が良く、青い石は水や氷と、緑の石は風と相性が良い、と言ったふうだ。この場合、「相性がいい」とはすなわち「魔法陣（術式）と相性がいい」と言うことであり、「刻み込んだ術式以上の効果を得られる」ということだ。一種のブースターのようなものだと思えばよい。

「ただ、これは人工石も同じだ。そもそも人工石は天然石を模して作られたものだし」

人工石にもまた、天然石と同様の特性がある。まったく特性を持たない人工石もあるが、これは例外的な存在だ。程度の幅こそあれ、その点では人工石と天然石には差異はないといえる。

「だから、さっきオレが言ったくせってやつはそういう特性とはべツモノだ」

イストは「無煙」を吹かし、白い煙（水蒸気らしい）を吐き出した。

「赤い石、例えばルビーやガーネットは炎と相性がいい。これは種類に共通した特性だ。だが同じ種類、ルビーならルビーでも一つ一つの石が別の特性を持っている。これをくせと言うわけだ」

「・・・・・良く分かりません・・・・・・」

首を捻るニーナに、イストはさらに説明を続ける。

「例えば『鳳凰の剣』ってあるだろ？」

「鳳凰の剣」とは世間一般に良く知られた炎の魔剣だ。生み出された炎が優美な鳥の姿に似ていることからこの名前が付けられた。

「あの魔剣は大粒のルビーを核に使っているんだが、術式だけ見れば炎が鳥の形になる訳がないんだ」

つまり核に使用されたルビーの特性によってそうなったと言える。

「だけどルビーを核に使っている炎の魔剣なんて、この世に幾らでもあるだろう？」

だがその中でただ一本「鳳凰の剣」のみが、鳥を模した炎を生み出すことができる。これはつまり「ルビーの特性」によるのではなく、「使用されたルビーの特性」によるものだと考えることができる。

「・・・・つまり結晶体にはその種類ごとに特性があって、その中でも特に天然石は一つ一つの石が異なる特性を持っている、ってことですか？」

分かるような、分からないような。

「そう。もっと簡単に言えば『天然石は特性を二つ持っている』ともいえる」

なるほど、そう言われれば簡単だ。

「あの、一つ質問があるんですけど・・・・・」

とりあえず分った気になったところで、ふとニーナの頭に疑問が浮かんだ。

「ん？」

「そのいわゆるくせって使う前に分るものなんですか」

でないと物凄く使い勝手が悪いような気がする。

「いや、術式を刻んでみるまでは分らない」

ビックリ箱みたいで面白いよな、とイストは笑った。だがニーナとしてはそこまで楽天的にはなれない。

「それじゃあ設計もできないんじゃないんですか」

「特性に反するくせはないし、刻んだ魔法陣と反発するなんてことも聞いたことがない」

完全な予想はできないが、まるっきり想定外のものができ上がるという事もない。そういうものらしい。

そんな講義を聞いているうちに、二人は目的の店に着いたのであった。

第四話　工房と職人？

ニーナに連れられてやってきたのは、なんてことはない普通の宝石店だった。この店は「エバン・リゲルト」ができて、パートームが村から街に発展するその過渡期にできたのだと言う。奥は小さな工房になっており、選んだ宝石を指輪や首飾りにはめ込んだりといった加工もしているらしい。

「人工石を見せてくれ」

店に入ると、イストはカウンターの向こう側にいた品のいい中年男性の店員にそう声をかけた。

「合成石（人工石のこと）が目当てと言うことは、お客様は『エバン・リゲルト』の新しい職人さんでしょうか？」

天然石に比べて廉価な合成石は、装飾品としても広く流通している。だがこの街では装飾品としてよりも、魔道具の素材としての需要のほうが多いのだろう。後で知った話だが、この店で取り扱っている商品の実に八割が人工石だという。

「ハズレ。オレは流れの職人だよ。今は『ドワーフの穴倉』に厄介になってる」

流れの職人なんているんですねぇ、と妙なところに感心して、店員はカウンターの上に箱を幾つか並べた。その中には色とりどりの石が納まっている。言うまでもなくすべて合成石だ。

「さすがにクオーツはないか・・・・・」
並べられた人工石を眺めながら、イストはそうもらした。

「クオーツ？水晶でしたら、ございますが・・・・・」
「あ、いや。オレの言うクオーツってのは『エレメントクオーツ』のことだ」
そういってイストは商品を取り出そうとする店員を制した。

「エレメントクオーツ？」

聞きなれない単語にニーナは首を捻る。

「ん？親父さんの工房では使わないのか？」
「ということは魔道具の素材ですか？」

宝石にはその種類ごとに特性があり、一つ一つがくせをもつ。これはすでに説明した。だがそれはあくまでも術式を刻んだ後に現れるのもであって、その前はただの宝石でしかない。

エレメントクオーツとは、言うなれば「自前の術式をもった結晶体」だ。

例えば炎のエレメントクオーツは、魔力を込めるだけで炎を生み出すことができる。こうして刻む術式を簡略化できるのだ。

「確かにそのような商品は、当店では扱っておりませんね・・・・・」
「ま、人工石と違って魔道具にしか使い道のない素材だからな。当たり前か」

間違って魔力を込めたときに、いちいち炎を吹いたり雷が奔ったりしていては危なすぎる。イストは特に気落ちするでもなく、目の前に並べられた合成石に意識を戻した。

「いいのが揃ってるな」
「ありがとうございます」
「とはいえ一応は、だけど」

そういってイストは懐からルーペを取り出し右目に装着した。その横でニーナが展開についていけず、首を捻っている。並べられた合成石は確かにどれも綺麗だ。しかしイストは魔道具の素材として合成石を見に来たわけで、見た目は関係ないはずだ。どこを見て「いいもの」と判断したのだろう。

今イストは人工石を一つ一つルーペで鑑定している。ジャマをするのは気が引けたが、とても気になるのだ。

「ん？どうかしたか」

気が付くと、ニーナは彼の服を引っ張っていた。こうなってはもう腹をくくって聞くしかない。

「どこを見ればいいのかな～って・・・・・」

少々誤魔化しながらそういうと、イストはすぐに、ああ、といって得心したようだった。

「結晶体を選ぶ際の第一条件は『見た目』だ。綺麗にカッティングされているものは魔力の通りがいい。ちなみに大きさは特に関係ない」

これは天然石と人工石の両方とも同じな、とイストは説明した。
それから右目に付けていたルーペをニーナに渡す。
「そいつは魔道具『目利きのルーペ』。魔力の流れを可視化してくれる魔道具だ」

この結晶に魔力を流してそいつで見てみ、とイストはニーナに結晶体を一つ手渡した。言われたとおり結晶体に魔力を流して「目利きのルーペ」で見てみる。

「うわぁぁ・・・・・」

それは、はじめて見る光景だった。結晶体の中を、筋状の青い光が幾つも流れるように奔っている。魔力を見たのが初めてということも重なり、それはとても幻想的だった。

「今度はこっち」

そういってイストはもう一つ結晶体を手渡す。そちらも同じようにして見てみると、

「ん？」

さっきの結晶よりも、青い光が少ないように思われる。ルーペを外して二つの結晶体を比べてみると、大きさや色、形に特に差はない。

「青い光の量が違っただろう？」
「はい。最初に見たほうが多かったです」
「つまり最初の人工石のほうが、魔道具素材としてはいいってこと

だ」

なるほど、とニーナは感心した。それら、ふと疑問が浮かぶ。

「どれだけ魔力を通せばいいのか、基準みたいのはあるんですか？」

「ないな。経験積んで自分なりの基準をつくるしかない」

ニーナからルーペを受け取ると、イストは鑑定を再開する。

（やりたい・・・・・！）

とても、とてもやりたい。経験を積むしかないのであれば、この場でその経験を積みたい。やりたくて、やりたくてウズウズしているのが自分でも分った。

あるいは、その空気が伝わったのかもしれない。

「やってみるか」

「いいんですか！？」

ニーナのあまりに嬉しそうな様子に、イストは苦笑した。是非やらせてください、と迫るニーナに「目利きのルーペ」を渡す。

「じゃ、五・六個選んでみて」

イストと同じように右目にルーペを装着し、ニーナは結晶体を一つ一つ鑑定してくる。そして魔力の通りがよさそうなものを取り分けていく。一回りしたら、今度は選り分けた物の中からさらに選別していく。それを繰り返し、最後には色も大きさもまばらな五つが残った。

「・・・・終わりました・・・・・」
「ん、じゃ、みして」

ニーナから「目利きのルーペ」を受け取ると、イストは彼女が選んだ五つの人工石を確かめていく。その様子を見守るニーナは妙な緊張感に包まれていた。

「大丈夫だな。じゃ、これお願いします」

イストがそう店員にいったとき、ニーナは自分の目利きが間違っていなかったことを知った。彼女のうちに、じわじわと歓喜と安堵が湧き上がってくる。

代金は三十ミル（銀貨三十枚）だった。イスト曰く、

「これが天然石だったら、銀貨が金貨になる」

とのこと。もはや年収だ。合成石が普及した理由が良く分る。

カウンターの向こうで店員が合成石を手早く包装していく。彼らが現れたのは、そんなときであった。

「おやじ、人工石を見せてくれ」

そういって若い男が三人ほど、店内に入ってくる。

「いらっしゃいませ。いつも御贔屓にしていただいてありがとうございます」

店員はそういって頭を下げた。どうやら見知った客らしい。

「品物はこちらに出ておりますので、ご自由にご覧ください」

先ほどまでイストたちが見ていた合成石をさして、彼はそういった。既に買い物を終えているイストとニーナは、端によって男たちに場所を空けた。

「ん？お前たちも人工石をみていたのか」
「まあな。とはいえもう選んだから、気にしてくれなくていい」

イストがそう答えると男たちは了解したようで、それぞれが「目利きのルーペ」を取り出して鑑定を始めた。

（あいつら、「エバン・リゲルト」の職人か・・・・・・）

この街で「目利きのルーペ」を使って人工石を鑑定する人間など、それ以外にいるまい。ニーナには気づいていないみたいだから、「ドワーフの穴倉」にいたという職人たちではないのだろう。

「なんだこれは！？」
「どれもこれもクズばっかりじゃないか」
「かろうじてこれが平均くらいだが、いやしかしなぜ・・・・・・。今までこんなことはなかったのに・・・・・・」

男たちの目線が、先ほどまで同じ商品を見ていたイストたちに向かう。

「お前が買ったのか？」
「何を？」

イストはとぼけてみせた。それが勘にさわったのか、男たちの雰囲気が険しくなる。

「魔道具素材として優れている人工石を、私たちより先に買ったのはお前か？」

ことさら詳しく丁寧に言ってみせたのは、苛立っていることの裏返しだろう。とはいえ既に確信しているのだろう。イストが何か言う前に、別の男が声をあげる。

「それは我々が使うものだ。代金は払うから、渡してもらおう」

「おやじ、その包んであるヤツはいくらだ。こちらで払う」

「おいおい」

先に買った人間の意見を無視して勝手に話を進めようとする男たちに、イストは怒るよりもむしろ呆れた。職人としての腕は分らないが、先に人が選んだものを横からシャシャリ出てきて掠め取るとは、礼儀以前に常識をわきまえているのだろうか。

「お客様・・・・・」

店員も困った様子でこちらを見ている。

「お前が買った人工石、見せてもらっていいだろうか」

最初に質問してきた男が、イストにそう尋ねた。イストは軽く頷いて了承してみせと、男は店員から包みを受け取り、中に入っている人工石を先ほどと同じように「目利きのルーペ」を使って鑑定していく。

「お前、魔道具職人か」

鑑定を終えた男が、疑問系ではなく断定するようにそういった。あれだけの質の人工石を選んで買っているのだ。それ以外には考え

られないだろう。

「ご名答」

イストが短く肯定すると、男の視線が鋭くなった。

「そうか。ウチでないとすると『ドワーフの穴倉』の新しい職人か？」

そう言いながら男は包みを店員に返す。受け取った店員は簡単に包装しなおすと、それをイストに渡した。

「ハズレ。オレは流れだからな。とはいえこの冬の間、間借りするつもりではいるが」

いいながらイストは店員から包みを受け取り、そのまま懐にねじ込んだ。横から掠め取ろうとしていた二人が声を上げるが、目の前の男がそれを押しとどめた。

「先客が居たんだ。仕方ないだろう」

どうやらこの男がリーダー格らしい。そういわれて二人は押し黙った。それでも不満で一杯らしいことは見れば分る。

「流れの職人など聞いたことがないが、それなら『エバン・リゲルト』に来る気はないか。腕相応の待遇を約束できるが」

腕が未知数であっても、一人でも多くの職人を囲い込みたいのが一般的な工房の本音だろう。今までも何度か工房に誘われることはあった。とはいえイストの答えはいつも同じだ。

「お断りするよ。オレは流れのほうが性にあってる」

肩をすくめながら軽い調子で答える。すると後ろの二人は小ばかにしたように嘲笑を浮かべた。

「ふん。たいした腕じゃないから、流れをやるしかないのだろう」

「寂れて自分のことで手一杯な『ドワーフの穴倉』なら、技術なり知識なり、盗まれる心配もないもんなぁ？いや、逆に盗むつもりで入り込んだんじゃないのか？」

だったら無駄足だったな、あそこには盗むほどの技術も知識もない、と二人は嗤った。イストとしてはこういう馬鹿な手合いが何を言ったところで、相手をしてやる気はさらさらない。だがニーナはそうではなかったようだ。頭に血が上っているのが、傍目にも良く分った。

（ここで言い争いになっても、面倒なだけだしな・・・・・）

そう思ったイストはさっさと機先を制することにした。

「何か問題があるのか」

「なに？」

面倒くさそうにそういうと、男たちとニーナの視線がイストに集まった。

「知識や技術の十や二十、盗まれたところで何の問題がある？」

「・・・・・・・！」

イストのその発言にその場の一同は絶句した。

知識や技術の流出は工房にとって最大の悪夢であり、それゆえにどの工房でも情報は厳重すぎるほどの厳重さで管理されている。当

然だろう。なぜならそれこそが工房と職人にとって富と名誉の源泉なのだから。

ゆえに、それを盗まれてもかまわないというイストの発言は、ニーナも含めたその場にいる人物たちにとってあまりにも不可解なものだった。

「その程度のことでオタオタしているようでは、『エバン・リゲルト』も大したことはないな」

そう言い放つと、イストはさっさと出口に向かって歩き始めた。ニーナがその後を慌てて追う。

「ま、まてっ！」

店から出ようとする二人を「エバン・リゲルト」の職人たちが呼び止める。

「盗まれてもかまわないというなら、教えてもらおうじゃないか！」

「そうだ！どれほどの腕を持っているのかみせてもらおう」

未知の知識と技術は新たな富と名誉への最短コースだ。彼らが目の色を変えているのも当然だろう。だがしかしイストはそこまでお人よしではない。

「阿呆。オレは盗まれても問題はないって言ったんだ。教えてやるなんて一言も言ってない」

白い煙（水蒸気らしい）を吐きながら「無煙」を吹かし、そう冷たく突き放す。そして、今度こそ二人は店の外へ出て行ったのであった。

第四話　工房と職人？（後書き）

感想お待ちしています。

第四話　工房と職人？

ふう、と一息ついてクロノワはペンを置いた。そのまま椅子の背もたれに身を預ける。執務机の上を見れば、未だに書類の山が残っている。その現実からしばし逃れるため、クロノワは席を立ち窓から外を見た。

「雪、ですか・・・・」

窓の外には雪が舞っている。モントルムの旧王都オルスクでこの天候では、さらにその北であるアルジャーク帝国は、既に一面の銀世界だろう。

「早めにこちらに赴任してきて正解でしたね」

クロノワがケーヒンスブルグに凱旋してから遅れることおよそ二週間後、レヴィナスもまたオムージュ遠征から凱旋した。クロノワと同じく凱旋報告の席で皇帝ベルトロワから褒美を与えられることになったとき、彼が求めたのはオムージュの王女アーデルハイト姫との結婚の許しだった。今まで婚約者のいなかったレヴィナスがいきなり婚姻の許しを求めたことにその場はどよめいたが、皇帝が許しを与えたことでどよめきはすぐに祝福へと変わったのだった。

その後開かれた任命式でレヴィナスはオムージュ総督に、クロノワはモントルム総督にそれぞれ正式に任命された。新年を帝都ケーヒンスブルグで迎えてからオルクスに来るという選択肢もあったのだが、真冬のアルジャークを旅するのは危険で、そうなると春まで待つしかなくなる。それを嫌ったクロノワは凱旋記念パーティーに

出席すると、本格的な冬が始まる前にモントルムへ総督として赴任したのである。

「失礼します」

その声と共に部屋に入ってきたのは、クロノワと同い年くらいの若い男だった。名前はフィリオ・マルキス。クロノワと同じくオルドナスの教え子であり、その縁で友人として付き合ってきた。同年代の友人がほとんどいないクロノワにとっては貴重な存在である。そんな彼は今現在、主席秘書としてクロノワを支えている。

「ああ、フィリオですか。何かありましたか」

「はい。オルドナス先生、いえ執政官から報告が届きました。無事に着任したとのことです」

オルドナスやリリーゼを始めとするヴェンツブルグの使節団もまた、クロノワたちと共にケーヒンスブルグからオルクスへと旅をし、そこから分かれて彼らは独立都市へと向かったのだ。

「それと聖銀（ミスリル）の件ですが、例の方向で執政院の合意が取れた、とのことです」

彼の言う「例の方向」とは、つまるところ聖銀（ミスリル）の製法を大陸中の工房に売りつけるにあたり、モントルム総督府のひいてはアルジャーク帝国の関与を認めるということだ。ヴェンツブルグ一都市だけでは思うように事が進まないということをリリーゼから聞いたクロノワが、新たな執政官となるオルドナスに相談してみたのだ。

「そうですか。思ったよりも早かったですね。あちらも手詰まりだったのでしょう」

「ええ、これからヴェンツブルグはお金が必要になりますし、そういう腹もあったのではないかと」

フィリオの言葉にクロノワは頷いた。

モントルム総督府が口を出すために、製法の購入額である一万シクを総督府が肩代わりすることになっている。その代わり製法の売却でえた純利益の一割が総督府の取り分となり、残りの九割は三家とレニムスケート商会の懐に入れるのではなく、ヴェンツブルグの発展のために用いる、というのが取り決めだ。確かにこれからヴェンツブルグが発展するにあたり、お金はいくらあっても足りない。それを考えれば、製法の売却益は良い収入源となるだろうが・・・・・。

「総督府の取り分が一割というのは、少なすぎますよね・・・・・・」

「そこは教え子の弱み、と言うヤツですね」

クロノワの言葉にフィリオも、ですよね～、と同意した。かつて教師と生徒の関係だった二人は、オルドナスに対して頭の上がらないところがある。

「よろしいですね」

と、あの厳しい面でズイッと迫られては反対もできない。

「そういえば、リリーゼ嬢も春を待ってこちらに来るそうですよ」

親御さんを説得できたみたいですね、とフィリオは嬉しそうだ。

常々職場の男性比率が高すぎる、とフィリオが文句を言っているのをクロノワは知っている。

「きちんと一仕事終えたようですね」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

凱旋記念のパーティーで、日陰者から一目置かれる存在となったクロノワの周りには、多くの人が群がった。そんな人の波も一段落し彼がバルコニーで涼んでいたところ、淡いグリーンのドレスで正装したリリーゼが近づいてきたのだ。

「良くお似合いですよ」

「ありがとうございます、殿下」

彼女はドレスやアクセサリーで着飾るのは好きではないと言っていたが、そこはやはり年頃の女の子。まんざらでもない様子だ。

リリーゼはごく自然にクロノワの隣にたたずんだ。

「使節団のみんなと話し合ったのですが、帰りもご一緒させていただければと思います」

本格的な冬が始まる前にモントルムへ赴任するつもりであることは、既に彼女たちにも伝えてある。一緒に行ったほうが何かと都合がよいと判断したのだろう。

「そうですか。では後で詳しい日程をお知らせします」

クロノワがそういうと、会話がたえた。人々の笑い声や音楽が、かろうじて二人の耳に届く。

「あの・・・・・・」

意を決したように、リリーゼが声を上げた。クロノワに近づいてきたのは、何か話したいことがあるからなのだろう。

「帰りもご一緒するとなると、一度オルクスに立ち寄ることになりますよね」

「そうですね。そうなります」

クロノワたちの目的地はオルクスだ。一緒に行くというのであれば、立ち寄ることになる。

「そのまま総督府で働かせてはもらえませんか。知りたいことが沢山あるんです」

アルジャーク帝国への使者に立候補した時、あのときに感じた稲妻の閃光のような運命は、日に日にリリーゼを未知なる世界へと駆り立てる。その内なる衝動に、彼女はむしろ進んで身を任せた。

「それはヴェンツブルグには戻らずに、と言うことですか」

「はい」

「でしたら賛成しかねます」

驚いたようにリリーゼはクロノワを見つめた。焦った様子でなおも言い募ろうとする。しかし彼女が言葉を発するよりも先に、クロノワが口を開いた。

「貴女は望んで使者となったのでしょう？でしたらまずは使者としての仕事を果たすべきです」

彼の口調はキツイものではない。しかしその内容は厳しく、目に

見えてリリーゼの勢いをそいだ。

「それに、少なくとも私は途中で仕事を放り出すような部下は欲しくありません」

そうトドメを刺され、リリーゼは己の敗北を悟った。肩を落としともすれば泣きそうになっている彼女を見て、クロノワは気づかれないように微笑をもらす。

「きちんと親御さんを説得して、それから来なさい。そうしたら考えてあげます」

クロノワにそう言われ、リリーゼはさっきまで落ち込んでいたのがウソのようにパッと顔を輝かせた。これで終わりではない、自分はもっと先に行ける。そう実感できるのがたまらなく嬉しいのだろう。

そんな彼女の様子を見て、クロノワはこう思ったのだ。

（やっぱり、彼女といると新鮮ですねぇ）

宴の夜は更けていく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「リリーゼ嬢が来る前に、閣下も剣術の腕を上げておかなければいけませんね」

「さて、なんのことやら」

フィリオにからかわれ、クロノワはとぼけた。

実はケーヒンスブルグに滞在している間に、クロノワはリリーゼと手合わせをしたことがある。その時に、なんとクロノワは負けてしまったのだ。それが悔しかったのか、以来彼はアールヴェルツェを始めとする騎士たちから稽古を付けてもらっている。

「まあ、彼女に偉そうな事を言っておいて、私たちが仕事を疎かにしてはいけませんね。早いとこ今日の分を片付けてしまいましょう」

強引に話題をすり替えた主に、フィリオは笑いをこらえるだけで何も言わなかった。

「アールヴェルツェはどうしていますか」

「はい。将軍は・・・・・・・」

モントルムの冬は深まっていく。

第四話　工房と職人？

「『知識や技術の十や二十、盗まれたところで何の問題がある？』か……」

パートームの街にある工房「エバン・リゲルト」の一室に、男の声が響いた。男の名はカイゼル・ファラー。年の頃は五十の始めといったところか。かつて「ドワーフの穴倉」でニーナの祖父の弟子として働いていた魔道具職人だ。

「なんというか衝撃的な発言だな、トレイズ」

そういってカイゼルは自身の愛弟子を振り返った。弟子の名はトレイズ・サンドル。宝石店でイストと揉めた三人のなかで、一人冷静だったあの人物だ。商家の三男坊なのだが、自分は商人には向かないと見切りをつけて、カイゼルの弟子となったのだ。

「はい。さすがに私も耳を疑いました」

魔道具職人にとって命よりも大切なものがあるとすれば、それは間違いなく自身や工房が積み上げ蓄積してきた知識と技術である。それが盗まれることになんの危機感も示さないあの男の言い草に、トレイズは呆れるよりも先に恐怖を感じた。

「流れの職人というのは、こうも我々と価値観が違うのでしょうか」

「さて、我が師も流れの職人に師事したと言っておられたが、情報の管理は徹底しておられた」

その男が異常なだけだろう、とカイゼルは結論した。それよりも

問題なのは、その男が口にした言葉そのものだ。もし本気で言ったのであれば・・・・・・。

「久しぶりに顔を出してみるか……」

古巣である「ドワーフの穴倉」に。

「本気ですか、師匠」

商売敵であるはずの相手がのこのことやってくるのだ。門前払いをくらう公算が大である。それにたかだか流れの職人から何かを学ぼうと言う姿勢を快く思わない者もいるだろう。

「なにも『ドワーフの穴倉』から盗もうと言うのではなし、その男の口ぶりからすれば、側で見ている分には問題あるまい」

それに未知に対し貪欲になれと言うのが我が師の教えでな、といってカイゼルはさっさと準備を始めた。

「ですが……」

先方にしてみればカイゼルは工房を捨てた裏切り者だ。あの流れの職人はいいかもしれないが、工房主であるガノス・ミザリがはたして敷居をまたがせるかどうか。

「かまわん」

弟子の逡巡を断ち切るようにカイゼルは強い調子で言った。しかしその言葉から漂ういい様のない苦さを感じ取ったのは、彼自身だけではないはずだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

優秀な魔道具職人というのは、優れた魔道具を作れる職人ではなく、考え出せる職人のことである。少なくともカイゼルはそう考えている。

個々の質にピンキリはあれど、作ることを主眼に考えるならば、魔道具製作はそれほど難しい作業ではない。もし仮に魔道具が量産できるとするならば、この世界の魔道具職人の数は現在の一〇〇倍から二〇〇倍、あるいはそれ以上になっていてもおかしくはないだろう。

だが魔道具は量産できない。ゆえに作る側には個々の質を高めることが求められ、それに答えることのできる職人だけが富と名声を得ることができるのだ。魔道具職人たちは一つ作品を作り上げたならば、次はそれを上回る作品を求められる。

「今できる最高のものを。次はさらに良いものを」

高みを目指す果てのない階段を上っていくようなものだ。魔道具職人を志す多くの者たちが、途中でその歩みをやめてしまう。歩みを止めずその階段をひたすら駆け上がって行ける者、その者こそが本当に優秀な魔道具職人であるとカイゼルは考えている。

そういう意味で、ガノス・ミザリは優秀な魔道具職人であると、カイゼルは知っている。

彼の父に師事しかつて共に働いたことのあるカイゼルは、ガノスの腕と才を知っている。そのために日々の糧を稼ぐことに精一杯で、職人として十分な仕事が出来ていないガノスの現状がもどかしくて

仕方がない。

「いつまで『ドワーフの穴倉』にこだわっているつもりだ」

そう思わずにはいられない。

カイゼル自身は「ドワーフの穴倉」を捨てて「エバン・リゲルト」に鞍替えしたことを後悔していない。というよりも魔道具職人とはそういうものだ。

魔道具職人の人生とは、すなわち新たな魔道具の開発の日々であり、そのためにより良い環境を整えてくれる工房へ移るのはごく自然なことである。

それにガノス自身も「エバン・リゲルト」から現在進行形で勧誘されているのだ。その誘いを断り続け、「ドワーフの穴倉」にこだわっているのは彼自身だ。

「それで職人としての仕事ができなくなっては本末転倒ではないか」

彼の娘であるニーナについても、カイゼルは幼い頃から良く知っている。彼女が魔道具職人に憧れていることは、薄々は察していた。

ガノスやニーナを良く知るゆえに、カイゼルのもどかしさは大きい。

そのためかもしれない。己の選択を何一つ後悔していないはずの彼の胸のうちには、しかし拭いきれない罪悪感が残っている。

自分が抜けたことで「ドワーフの穴倉」が傾いたとは思わない。カイゼルはそこまで過大に自分を評価していない。それでも、その責の一旦は間違いなく自分が負うべきものだ。

かつての同門であり互いに切磋琢磨しあったガノスと、彼の娘であるニーナがくすぶっている、そうするしかない現状は無言のうちにカイゼルを責め立てている。何かしたいと思っても、互いの立場ゆえに動くこともままならない。気が付けば、時間だけが過ぎてしまった。

（なにか、変わってくれればよいが……）

ゆえにカイゼルは期待する。誰もが考えていなかった“流れの魔道具職人”、その登場に。自分ではどうしようもなかったこの現状を、あるいは変えてくれるのではないだろうか、と期待する。

だからこそ、積極的に関わろうと思ったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

久方ぶりに見上げる古巣の外観は、あの頃となんら変わっていない。しかし活気に溢れていたあの頃とは違い、そこから力強さを感じることはなかった。

そんな思いを悟られないように、カイゼルは努めて普通を装いその門を叩いた。

「はい、どちら様でしょうか」

門を開けたのはガノスの娘であるニーナだった。彼女は少し見ない間に、随分と綺麗になっていた。恐らくは母親似だろう。

「自分に似ないでよかった」

昔ガノスがそう言っていたことを思い出す。

（だがこの子の気性は間違いなくお前譲りだよ、ガノス）

少しばかり感傷に浸っていると、ニーナも訪問者が誰なのか気づいたようだ。

「・・・カイゼル・・・・さん・・・・・」

名前に「さん」付けをするまでに、一拍の沈黙があった。

昔は「カイゼルおじさん」と呼ばれていた。だがこれが今の自分と彼女の距離感なのだろう。

一瞬感じた寂しさを、カイゼルは黙殺した。

「ここに流れの魔道具職人がいると聞いてな。取り次いでもらえるかな」

「イストに、ですか……」

どうやらその職人の名前はイストと言うらしい。

「オレになんか用か？」

ニーナの後ろから見知らぬ男が現れた。どうやらこの男がイストらしい。おそらく自分の名前を聞きつけてこっちに来たのだろう。

「はじめまして、だな。カイゼル・ファラーという。こっちは弟子の・・・・・」

「トレイズ・サンドルです。先日は同僚が失礼して、申し訳ない」

そういってトレイズは頭を下げた。ただイストは特に気にしてい

る様ではなかった。トレイズの顔を見て、ああ宝石店で、と呟いただけで後は何も言わなかった。

「イスト・ヴァーレだ。で、何のようだ？」

イストが例のいざこざを蒸し返さずに本題に入ってくれたことに、カイゼルは感謝した。

「お前さんから、技術や知識を盗みに来た」

ニヤリと笑い、カイゼルはここに来た目的を隠すことなく率直に告げた。あまりの率直さに隣にいたトレイズのほうが慌てている。だが言われた当のイストは、なんと笑っていた。それも蔑むような笑い方ではない。呆れたような、それでいて面白がっているような、そんな笑い方だった。

「いいよ。邪魔しないでくれるなら、勝手に盗んでいけ」

実にあっさりと、イストは承諾した。ただ間借りしている身としては、工房主の意向を確かめなければならない。ガノスに聞きにいくと、彼も簡単に許可を出した。

失礼すると断りながら、カイゼルは久方ぶりに「ドワーフの穴倉」へと足を踏み入れた。工房の中はあの頃と変わっていなかった。だが使っていないのか、ホコリを被った機材が多い。それがそこはとない寂しさをかもしだしていた。

「お前も早く来んか」

その寂しさを隠すようにして、カイゼルはトレイズに声をかけた。

とんとん拍子に進む話に彼は目を白黒させていたが、慌てて師の後を追う。

イストは既に、定位置と決めているらしい工房の角の一画に座り込み準備を始めていた。ビンから粉末を匙で陶器の器に移し、そこに水を入れて粉末を溶かしていく。

足元に置いてあった布の巻かれた長細い包みを解くと、そこには一本の刀が包まれていた。柄も鍔も、ましてや鞘もない、ただの鉄の塊である裸の刀だ。イストがレスカから買ったあの刀だ。

その優美に反った刀身、透明感のある鋭い刃。鍛冶師としてはド素人であるトレイズから見ても、相当な業物であることが分る。イストはその刀身に水で溶いた粉末をはけで丁寧に塗っていく。

「うわぁ……」

魔力を込めたのか、刀身が青く光る。その様子にニーナが感嘆の声を漏らした。

（あの粉末は『星屑の砂』だったのか……）

目の前の光景から、トレイズはそう当りをつけた。

「星屑の砂」は魔道具の一種で、イストがしたように水に溶き、例えば金属などに塗るとそこを流れる魔力を可視化してくれるのだ。人工石の鑑定に使った「目利きのルーペ」と同じ効果なのだが、ルーペでは一点しか見ることができないため、結晶体の鑑定以外ではこの「星屑の砂」が使われる。

「見事だな」

青く輝く刀身を見て、カイゼルがそう感想をもらした。トレイズも同じ意見だ。刀身に浮かぶ青い光の筋はまだムラや澱みがあるが、それは彼らの目から見れば無視していいものに思えた。恐らく既に下準備を終えているのだろう。

しかし、彼らのその考えはすぐに否定される。

「ああ、まだ下準備もなにもしていないのに、これだけ均一に魔力が流れる。流石だな」

「まだ下準備をしていないのか！？」

カイゼルが驚いたように声を上げた。それはトレイズも同じだ。まだ下準備をしていないということもそうだが、それにもかかわらずあれだけ魔力を均一に流せる素体を彼は初めて見た。

「ああ、下準備はこれからする」

こともなさげにイストはそう答える。それを聞いてトレイズが感じたのは、しかし落胆だった。下準備は魔道具製作における基礎中の基礎で、それを見学したからといって知識や技術を盗めるとは思えない。

（出直したほうがいいのでは？）

そんな思いを込めて振り返ると、師であるカイゼルは難しい顔をして腕を組み、ほとんど睨むようにしてイストの仕事を観察していた。

「トレイズ、よく見ておけ」

滅多に見られないものが見られるから。そういうカイゼルの声は、トレイズが今まで聞いたことがないほど強張っていた。

第四話　工房と職人？

魔道具素材の良し悪しを定めるパラメータとして「魔力導伝率」というのもがある。これは素材がどれだけ魔力を通しやすいかを表すパラメータで、水の導伝率を１として、これを基準としている。もっとも一般的な鉄の導伝率が０．９８であるため、職人たちはこちらを目安にすることが多い。

さて、導伝率が１の金属板があったとしよう。ここでいう「導伝率が１」とは「金属板全体の導伝率の平均値は１」ということである。つまり金属板をいくつかに区切って見てみれば、導伝率にはばらつきがあるのだ。「星屑の砂」を使った際に際に見える魔力のムラや澱みは、この導伝率のばらつきが原因である。

このばらつきを最大限整えるのが、魔道製作における基礎中の基礎、「下準備」と呼ばれる作業である。

下準備を行えば素材の導伝率を上げることができる（ただしどれだけ上がるかは職人の腕によるところが大きい）。また下準備をしたかしないかで、術式がスムーズに発動できるなど、魔道具の性能そのものにも影響してくる。

ゆえに魔道具職人はまず、この下準備の作業を徹底的に叩き込まれるのだ。

下準備は極めて地味な作業である。

素材に「星屑の砂」を水に溶かして塗り、魔力を込めてその流れを可視化する。そして流れのむらや澱みに、指から直接魔力を流し

込んで矯正していくのだ。

言葉で書いてしまえば簡単だがこの作業、実はとてつもなく時間がかかる。トレイズが過去におこなった下準備で最も時間がかかった時には、なんと一週間もかかった。そしてこれこそが、魔道具が大量生産できない最大の理由であった。

今、トレイズの目の前でイストがその作業をおこなっている。その雰囲気にトレイズは呑まれていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

イストは左手に刀を持ち、魔力を流し込んでいく。青く光る刀身、そこに浮かぶ澱みの一つに右手を沿え、人差し指からゆっくりと魔力を流し込んでいく。人差し指を沿えた部分だけ青い光が強くなる。

スッとイストの右手が刀身に沿って動いた。その時にはもう澱みはなくなっている。

（たった一回で・・・・・！）

トレイズの場合、どんなに集中しても一つの澱みを矯正するのに、同じ作業を四・五回は繰り返さなければならない。実に分りやすく技量の差を見せ付けられ、彼は愕然とした。

冬の、息を吐けば白くなるような気候ながら、イストは今大量の汗をかいている。激しい運動をしているからではない。彼の凄まじい集中力が全身に熱を生じさせ、汗が吹き出しているのだ。

頬をつたい顎から落ちていく汗にイストは気づかない。いや、そ

もそもこうしてトレイズたちが脇で見ていることや時間の経過でさえも、今の彼にとっては意識の外のことなのだろう。

一心不乱に右手を刀身に沿えて魔力を流し込み、澱みやムラを一つ一つ丁寧にならしていく。

一つ一つの所作は、イストが熟練の職人であることを証明している。その妥協を許さない姿勢は、彼の職人としての意識の高さとプライドを物語っている。

自分が今までどれだけぬるい態度でこの世界にいたのか思い知らされ、トレイズは爪が手のひらに食い込むほどほど強く拳を握り締めた。

「凄まじいな」
「ガノス」

気が付けば工房主であるガノスが近くに来ていた。

「『決して妥協するな』。かつて父にそう言われたことがある」

ガノスの言葉にカイゼルは頷いた。彼らの師は、確かに口癖のようにそういっていた。その言葉の意味を理解していたつもりではあったのだが。

「彼の仕事を見ていると、その意味が良く分る」

それっきり、誰も喋らなくなった。その場にいる全員が、場の雰囲気にのまれ食い入るようにしてイストの仕事を見つめていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局、四時間立ちっ放しだった。

お昼の時間はとうに過ぎているが、空腹を訴えるものは誰もいない。その場の緊張感が空腹を忘れさせていた。

「すごい……」

ニーナがポツリともらしたその呟きに、トレイズは無言でしかし激しく同意した。未熟ではあるが魔道具職人である以上、その思いはニーナよりも強くあるいは嫉妬にさえ似ているかもしれない。

彼らの目の前には青く輝く刀がある。その輝きにはもはや一点のムラも澱みもなく、全体が均一に光っている。まさに「完璧」な下準備だ。

「焼き付けをするから、目をつぶっていろ」

作業を開始してから初めてイストが口を開いた。

彼の言う「焼き付け」とは、下準備を終えたその状態を保存しておくための作業だ。これをしておくことで、この先再びムラや澱みが現れるのを防ぐのだ。コツは大量の魔力をできるだけ一瞬のうちに流し込むこと。

目を閉じて待っていると、青白い閃光が一瞬だけ輝いたのが目蓋の上からでも分った。魔道具製作の経験のある者は、その光の強さからイストがかなり大量の魔力を流しこんだことを察した。

ふう、とイストは白い息を吐いた。そして裸の刀を再び布に包ん

でいく。それを見て、周りで見物していた面々もそれぞれに息をつき、緊張から脱したのであった。

「腹が減ったよ」

鳴いた腹の虫は、さて誰のものであったか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

腹が減ったよとイストに言われたニーナは、すでにお昼の時間を随分と過ぎていることにようやく気がついた。慌てて家に戻り、急いで遅い昼食の支度をする。

焼いたベーコンをパンに挟み、後は具沢山のスープでも作ればいいだろう。テキパキと食事の支度をしながらも彼女が考えているのは、先ほどまで見ていたイストの仕事の様子だった。

（あの目。お祖父ちゃんの目に良く似ていた……）

一点のムラもなく青く輝く刀身は確かに綺麗だったが、それ以上に彼女が惹きつけられたのはイストの目であった。作業に一心不乱に没頭する彼の目は、幼い頃に見た工房で仕事をしている時の父祖の目に驚くほど良く似ていた。憧れた魔道具職人の姿が、そこにはあったのだ。

「弟子に、してくれないかなぁ……」

無意識とはいえ自分が呟いたその言葉に、ニーナは驚いた。だが口に出してしまったその願望はすぐに彼女の胸の内に根を下ろし、瞬く間に大樹へと成長してしまった。そしてその大樹はいつの頃からか積み上げてきた堤防を少しずつ侵食し、塞き止めていたはずの

夢を溢れさせようとする。

（ダメ……！）

イストの弟子になるなど、出来るはずもない。彼は流れの職人だ。ここに腰を落ち着けることなどしないだろう。彼から教えを受けようとすれば、一緒に旅をして回ることになる。そうなればこの家は、父は、工房はどうなるのか。

無視しようとするにはあまりに大きくかといって叶えられそうもないその夢を、ニーナは必死に心の奥底に押し込めようとした。

トレイズは今「エバン・リゲルト」の近くにある馴染みの食堂で、遅い昼食としてサンドイッチをパクついている。師匠であるカイゼルがガノスとなにやら話しこんでいたため、一言断ってから先に帰ってきたのだ。

（どうにも力が入りきらないな……）

こうして馴染みの店でよくたのむメニューを食べているというのに、どうにも現実感が薄く、まるで夢でも見ているかのようだった。この感覚を無理にでもたとえるならば、まるで・・・・・・、

（まるで酔っているようだ）

実際自分は酔っているのだろう。先ほど見たあの光景に。

「滅多に見られないものが見られる」

そういった師匠の言葉は正しかった。確かにあの光景は衝撃的で、トレイズが少なからず持っていた職人としての自負やプライドを木っ端微塵にしてくれた。

「ただの下準備なのにな……」

あるいは単純作業であればこそ、衝撃が強いのかもしれない。努力さえすれば同じところにたどり着けるのではないかと、そう思ってしまう。

「不可能じゃ、ないよな……」

なにしろあれはただの下準備で、誰もができる単純作業なのだ。時間さえかければ、同じ仕事をするのは決して不可能ではない。

必要なのは集中力と根気、そして妥協を許さない態度。これらは先天的な才能でなければ、後天的に身につける技術でもない。ならば誰にだって、できるはずだ。

体に力が戻ってくる。

こうしてトレイズは職人として明確な目標を一つ、見つけたのであった。

恐らく気を利かせたのだろう。先に戻りますと断りに来た弟子の背中を、カイゼルは見送った。

「彼はお前の弟子か」

隣にいたガノスがポツリともらした。

「ああ、まだまだ未熟だが、将来は有望だ。今日のこともいい刺激になっただろう」

確かにいい刺激になっただろう。ただしトレイズだけでなく、既に魔道具職人としてメシを食っているカイゼルとガノスにとっても、イストの仕事は刺激的で衝撃的だった。

「そうだな。腕のいい職人だろうとは思っていたが、いや想像以上だった」

ガノスは少しばかり興奮した様子だった。

ふと、会話が途切れた。

「お前、この先どうするつもりだ」

短いその言葉に、カイゼルはありったけの思いを詰め込んだ。

先の見えた工房にいつまで拘っている。その腕をいつまで錆付かせているつもりだ。娘のニーナのことはどうする。

「わかっている」

ガノスは短く答えた。カイゼルはなおも言い募ろうとしたが、彼の顔を見てやめた。いつの頃からか張り付いていた疲れや影が薄くなっている。

「なあ、カイゼル」

「なんだ」

「また、魔道具を創りたくなったよ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日の晩、工房に小さな明かりが付いているのをニーナは見つけた。覗いてみるとイストがあの刀の刃をためつすがめつ眺めていた。刀には既に柄と鍔が取り付けられており、彼の足元には鞘もあった。

「なにをしてるんですか？」

「ん？ああ、ニーナか」

イストはニーナの姿を確認すると、すぐに視線を刀に戻した。

「なんつうか、『声』が聞こえないかと思ってね」

「声？」

「そう。陶器師にしろガラス職人にしろ、熟練の職人たちはみんな素材の『声』を聞く」

どうしてそんなにも素晴らしい作品を作れるのかと問われると、彼らは皆口を揃えてこう答える。曰く「自分はこういう形を作ろうとしているのではない。土が、ガラスがなりたいと言っているその形をなぞっているに過ぎない」と。

「もちろん生き物ですらない土やガラスが実際の声を上げるなんてことはありえない」

だがしかし、職人たちが五感を通して素材から受け取るその情報は、あたかも意志を伝える声であるかのように彼らには感じられるのだ。

「面白いと思わないか？」

イストはニーナを見上げて笑った。

「……イストも、その『声』が聞こえるんですか」

「その域に達するのはなかなか難しい」

そういってイストは苦笑する。

「ただ、こうやって素体を眺めていると、これだって術式を閃くことがある」

そういうときは結構満足できるものが出来る。そうイストは言った。それがきっと彼に聞こえる「声」なのだろう。

イストが刀を鞘に納め、さらに布を巻いていく。

「閃いたんですか？」

「ん。だいたい固まった」

そういってイストは立ち上がった。

「イスト……」

二階の部屋に戻ろうとする彼の背中に、ニーナは思わず声をかけてしまった。その直後にはしまったと後悔している。

「ん？」

「あ、いや……。おやすみ、なさい」

かろうじてそれだけを口にする。イストも、おやすみ、といって二階に上がっていく。その背中を見送ってから、ニーナは一人ため息をついた。弟子にしてくれ、なんてとてもいえなかった。

第四話　工房と職人？（後書き）

感想お待ちしております。

第四話　工房と職人？

吹雪、とはよく言ったもので強い風に吹かれた雪は、下に落ちるのではなくほとんど水平に飛んでいく。地吹雪が雪原に風の模様を描くロム・バオアの大地に、移動式のテントが幾つか立っている。ゼゼトの民が使用する「パオ」と呼ばれるもので、気密性に優れており中は驚くほど温かく、骨組みがしっかりしているおかげで強風下でも壊れることはほとんどない。

それらのバオの中の一つに、ある男が胡坐をかいて座っている。長身痩躯で、歳の頃は三十と少しといったところか。黒い髪を無造作に伸ばしている。彼のすぐ脇には一本の大剣が鞘に収められて置かれていた。魔剣「災いの一枝《レヴァンテイン》」。パルスブルグ要塞司令官及び要塞常備軍司令官シーヴァ・オズワルドの愛剣である。

シーヴァは背筋を伸ばしてすわり腕を組み、目をつぶって瞑想している。後ろに控えている女性仕官もまた声を発しない。

「司令、客人がお見えになりました」

声はパオの外から聞こえてきた。扉が開き兵士に案内されて、三人のゼゼトの民が中に入ってくる。その姿を確認し、シーヴァと女性仕官は立ち上がった。

「招きに応じていただけたことを感謝する。私がシーヴァ・オズワルドだ。それとこちらが私の副将を勤めている……」

「ヴェート・エフニートです」

自己紹介を済ませると彼女はそれ以上なにも言わず、またすぐにシーヴァの後ろに控えたたずんだ。

「ワシはエムゾー族族長ウルリックという」

ゼゼトの民は、エムゾー族、ベレグサ族、トルドナ族、シジュナ族、クセノニア族の五つの氏族に分かれている。姓名は基本的にはなく、無理に名乗るのであればそれぞれの氏族の名を名乗ることになる。例えばウルリック・エムゾーといったふうだ。

ウルリックと名乗った男は、ゼゼトの民としては小柄なほうだった。とはいえ服の上からでも分るそのがっしりとした体つきは、彼がまぎれもなくゼゼトの男であることを証明している。

「五人の族長で話し合った結果、ワシが代表になった」

ひとまずお手柔らかに頼む、とウルリックはシーヴァに手を差し出した。シーヴァはその手を握り、内心でひとまず胸をなでおろした。

（冷静な話し合いには応じてもらえるようだ）

とはいえ油断や侮りはない。たとえ相手が蛮族であっても、そういった先入観をもって臨めば思わず足をすくわれるだろう。実際ウルリックの言葉は明瞭だし、その目は油断がならない。

「それとこっちの男はガビアル。トルドナ族族長の息子じゃ」

紹介された男は典型的なゼゼトの民であるように思われた。背が高くて肩幅が広く、胸板が厚い。まさしく巨躯である。そしてその

巨躯にふさわしい大剣を持っていた。シーヴァも長身だが彼よりも背が高く、肩幅にいたっては二倍近くあるかもしれない。

カビアルは軽く頭を下げたが、なにも言わなかった。その目には友好的とは言いがたい光が宿っている。

「それとこの娘はメーヴェ。恥ずかしながら我が娘じゃ」

どうしても付いて行くといって聞かんでな、とウルリックは頭を掻いた。

ゼゼトの民で規格外なのはどうやら男だけらしい。メーヴェと呼ばれた娘は少なくとも表面上は普通の女性に見えた。目鼻立ちは整っている。可愛いというよりは鋭利とでも言うべき顔立ちをしており、その鋭い視線も重なり氷や刃を連想させた。こちらは弓と矢の詰まった矢筒を携えている。

一通りの紹介が終わると、シーヴァは腰を下ろすように勧めた。三人と二人はパオの真ん中に置かれた暖炉をはさんで向かい合うようにして座った。

「すでに承知していると思うが改めてお願いしたい。手を貸してほしい」

アルテンシア半島を切り崩す為に、とはシーヴァは言わなかった。この場にいる人々にとっては既にそのことを知っているからだ。この会談の前にシーヴァは一度ゼゼトの民に話を通してある。

「受けるにしても断るにしても、一度あって話をさせてほしい」

そういうわけで、この度の席が設けられたのだ。ゼゼトの民のほ

うでも、ある程度は話し合いが成されてきたはずだ。

「ふざけるなよ……！」

代表であるはずのウルリックは黙してなにも語らない。代わりにほとんど唸るようにして声を上げたのはガビアルであった。

「ロム・バオアの大地に上がりこみ我々を北に押し込めたのは貴様らだろうが！それをこの期に及んで手を貸せとは虫が良すぎる！」

納まりが付かないのか、ガビアルは積年の恨みを吼えるようにしてまくし立てた。それに同調するようにウルリックの娘であるメーヴェも声をあげる。

「十分な食料を得られないせいで、冬を越せない子どもたちが何人いたと思う！？同胞がなめてきた辛酸をわかっているのか！？」

「なにを勝手な・・・・・！」

たまりかねたのか、ヴェートが身を乗り出してくる。シーヴァはそれを、片手を上げて制した。

彼女が言いたいことはわかる。もともと先に略奪を行い始めたのはゼゼトの民が先である。ロム・バオアにパルスブルグ要塞を建造してゼゼトの民を北に追いやりその活動範囲を制限したのも、制海権を確保しゼゼトの民が半島に来られないようにしたのも、穀物を渡さず食糧事情を圧迫したのも、全てはアルテンシア半島の民を守るためであった。

しかし、シーヴァはそれらの事情をこの場で言うつもりはない。言ってしまえばそれこそ双方納まりが付かなくなる。それではこの

席を設けた意味がなくなってしまう。

「力を貸していただければ、要塞を除いて我々はロム・バオアから撤退する。後は自由にされるがよかろう。交易で半島に渡ってこられる分には、これを妨げるつもりはない」

略奪をするようであれば相応の覚悟をしていただくが、とシーヴァは付け加えた。ガビアルがまたなにか吼えるが、それを無視して彼は続ける。

「無論、協力していただいた礼は存分にさせていただくつもりだ。好きなものを望まれるがよかろう」

如何か、とシーヴァはウルリックに返答を促した。

「……確かにお前さんが砦の長になってから、ワシらは随分と楽になった」

「親父殿!?」

メーヴェが驚いたように父親の顔をのぞきこんだ。そんな娘を嗜めるようにウルリックは言葉を続ける。

「本当のことじゃろ。豊かになったとは言いがたいが、この男が穀物を融通してくれるようになってからは、餓えて死んだものはほとんどいない」

シーヴァは要塞司令になると、それまで制限されていたゼゼトの民との交易を大幅に緩和した。もちろん彼らが海を越えて半島へ渡っていくのを許可したわけではないが、それでも要塞近くでの取引を認めたことにより、ゼゼトの民は主に獣の肉や毛皮と交換することで、小麦をはじめとする穀物を手に入れられるようになったのだ。

ちなみにこのパオも、穀物と交換したものだった。シーヴァの側からすれば、半島から肉類を持ってくるよりもゼゼトの民から仕入れたほうが安上がりである、という理由もあった。

「だが同胞たちの恨みは！」

「それは双方同じこと。それにこのままではどうにもならんと思ったからこそワシらはこの場に来たのじゃ」

先の見えておらんガキはだまっておれ、とウルリックは睨むようにして叫ぶ娘を黙らせた。彼の気迫に押されてガビアルも言葉を詰まらせる。若者二人を黙らせてから、エムゾー族の族長はシーヴァに向かい合った。

「シーヴァよ、お主が言ったことすべてを守ってくれるならば、我々としても力を貸すのはやぶさかではない。それが族長たちで話し合った結果じゃ」

ウルリックの後ろに控えていたメーヴェとガビアルが驚いたように顔を上げる。どうやら彼らもこの話は知らなかったようだ。

「それはありがたい。無論約は守るが、さてどうすればそれを信じていただけるのか」

大陸に住む人々の常識からすれば、このような場合は約束の内容を書面にしたため、そこに双方が署名をする、というのが一般的だ。

「お主たちの紙切れになんぞ用はない。そんなものがあろうがなかろうが、守るものは守るし、破るものは破る」

その言葉を聞いてヴェートが唸った。国同士の条約が破られただ

のそんな事例は歴史書を紐解けばいくらでも見つかる。それを知っているだけにウルリックの言葉を否定することが出来ないのだろう。

ようはシーヴァ・オズワルドという人間が信頼できるかどうかだ、とエムゾー族の族長は視線を鋭くして言った。

「ふむ。信頼を得るために私になにをしろと？」

そう言うと、ウルリックは悪戯を思いついたように笑った。

「そうじゃの、ここにいるガビアルと仕合ってもらおうかのう」

そのとっぴな提案に、シーヴァも思わず笑いが漏れる。

「勝てばよいのかな」

そういうことにしておくか、と嘯くウルリックにシーヴァは了承を伝えた。

第四話　工房と職人？

さすがにパオの中で立ち会うわけにもいかず、シーヴァたちは外に出た。

「本当に仕合をなさるおつもりですか」

ヴェートが心配そうに近づいてくる。アルテンシア半島の人間にとって、ゼゼトの民への恐怖や不信感はそう簡単に拭えるものではないのだろう。

（それは向こうも同じだろうが）

シーヴァは横目に少し離れたところにいる三人のゼゼトの民を見た。まさしく先ほどウルリックが言ったとおり、双方同じこと、だ。

「仕合にかこつけて閣下を殺害するつもりでは……」

それはシーヴァも考えている。だが、彼のうちにはウルリックに対する奇妙な信頼感が既に芽生え始めていた。この男ならそのようなことはするまい、ということではない。彼ならば命を狙うにしても堂々とやるであろうということだ。

「ウルリックが立ち合いの中で何を見たいのかは分らん。が、やれという以上やるしかあるまい」

胸のうちのその“信頼”をシーヴァはヴェートには言わなかった。確証があるわけではないし、こういうものは自分が確信していれば

よい。

「ですが……」

未だに心配そうな副将の肩に、シーヴァは手を置いた。

「ヴェートよ。そなたの上官はこのようなところで死ぬ男か？」

なんら理論的な説得ではなかったが、彼女を安心させるにはそれで十分であった。

「いえ。閣下はこのようなところで倒れるお方ではありません」

シーヴァとヴェートが話しているのを横目に、メーヴェは父親に詰め寄っていた。

「親父殿！これはどういうことだ！？あたしたちはなにも聞いていないぞ！」

怒髪天を突く（風に髪があおられているのでそうみえる）勢いで彼女はウルリックに詰問する。

「言っとらんのだから知らなくて当然じゃ」

ウルリックは飄々と娘を受け流した。そのまま突然立ち会えと言われたガビアルに視線を移す。

「エムゾーの族長殿……」

彼の様子には少しばかりの戸惑いが見られる。ただし戦うことに関してではない。ゼゼトの民で、しかも戦士である以上そこに戸惑うとこなどありえない。ガビアルはただ自分にどんな役回りが求め

られているのか、図りかねているのだ。

「ガビアル……」

ゼゼトの民の中でも屈指の戦士の名を呼び、横目でシーヴァを窺う。

「殺してええぞ」

それを聞き、メーヴェは目を見開いた。そしてガビアルは壮絶な笑みを浮かべるのであった。

雪原でシーヴァとガビアルはそれぞれ剣を手にして向かい合った。シーヴァが手にしているのは愛剣たる魔剣「災いの一枝（レヴァンテイン）」だ。漆黒の大剣で、片刃の刃には黄金に輝く古代文字（エンシェントスペル）が印字されている。

「天より高き極光の」

この場に古代文字（エンシェントスペル）が読める者がいれば、印字された文字をこのように読んだであろう。

一方ガビアルの剣も、片刃の大剣であった。いや鉈を大剣のサイズまで大きくしたもの、といったほうが正しいかもしれない。刃は分厚く、切っ先は垂直になっている。

「最初に言っておくが、俺は全力でやる。そのつもりでいろ」

ガビアルが不敵な笑みを浮かべながら、シーヴァにそう宣告する。それを見てシーヴァはガビアルが自分を殺すつもりでいることを察した。とはいえそのことに危機感は感じない。ヴェートがそうであったように、シーヴァ自身も己の力と力量を信じている。

何も言わずシーヴァは「災いの一枝（レヴァンテイン）」を構えた。ガビアルもそれに倣う。

睨みあいは数瞬。

先に動いたのはガビアルだった。雄たけびを上げながらシーヴァに迫り、分厚い大剣を振りかぶり真正面から振り下ろす。切り裂くためというよりは押しつぶすためのその一撃を「災いの一枝（レヴァンテイン）」で受けとめた瞬間、シーヴァは凄まじい圧力を全身に感じた。彼は柔らかく膝を使いその圧力を上手く逃がしながら、ガビアルの一撃を捌く。

上からの力と下からの力が拮抗する。ギチギチと刃がこすれる音が雪原に響く。

この拮抗に先に焦れてきたのはガビアルのほうであった。自慢の怪力で押し切れないことに苛立っているのか、顔がゆがんでいく。一方シーヴァはどこまでも無表情で、そのくせ眼だけはどこまでも鋭い。それがさらにガビアルを苛立たせる。

ガビアルの集中が、一瞬途切れる。その瞬間、シーヴァは膨大な魔力を愛剣に喰わせ、その威を解き放った。

「黒き風よ……！」

黒い魔力の奔流が「災いの一枝（レヴァンテイン）」から放たれる。解き放たれた黒き風はその威を十分に発揮し、ガビアルの巨体を五、六メートル向こうに吹き飛ばした。

「これでよいのかな？」

シーヴァはウルリックに問いかける。ウルリックはなにも言わない。代わりに吼えるようにして声を上げたのはガビアルであった。

「ふざけるな！！」

全身に雪をつけながら、巨躯の戦士は吼える。その眼は怒りで血走っている。

「そんな卑怯な勝ち方、俺は認めぬぞ！」

「卑怯？」

面白がるようにシーヴァは笑った。彼が何をさして“卑怯”と叫んでいるのか、彼は当然承知していたがあえて問いかける。

「なにが卑怯なのだ？」

「その剣だ！」

雪を振り払いながらゼゼトの青年が立ち上がる。自分はその魔剣に負けたのであってお前に負けたわけではない。その魔剣が強いのであってお前が強いのではない。そんなことをガビアルは叫んだ。

「ふむ。ではこの『災いの一枝（レヴァンテイン）』、お前が使ってみるか？」

そういってシーヴァは「災いの一枝（レヴァンテイン）」を彼の方に放った。その行動に三人のゼゼトの民は一様に驚いたが、最も驚いたのはガビアルだろう。自分の前に突き刺さった漆黒の魔剣を恐る恐る引き抜いた。

「・・・・・いい、のか？」

彼の声には先ほどまでの勢いがない。明らかに戸惑っていた。シーヴァは、かまわん、と言って、自身はヴェートから剣を借りた。こちらは魔剣ではなくただの剣だ。

剣を構えるシーヴァを見て、ガビアルはひとまず考えることを止めた。シーヴァがなぜこの魔剣を自分に使わせるのか、その腹のうちは分らない。

（だが殺してしまえば同じだ……）

そのための最高の道具は、今ガビアルの手の内にある。その魔道具「災いの一枝（レヴァンテイン）」に彼が魔力を込めたその瞬間……。

「!?」

突然視界が回った。貧血を起こしたかのように四肢に力が入らず、ガビアルは思わず膝をついた。

（終わったな……）

膝をついて青い顔をしているガビアルをみて、ヴェートはそう断じた。シーヴァのあの魔剣「災いの一枝（レヴァンテイン）」は確かに強力な魔道具である。だがその力を発動するには膨大な魔力を喰わせる必要があるのだ。しかも一度魔力を込めると、あとは半強制的に魔力を吸い上げるという厄介な性質（ともすれば致命的な欠点）を持っている。そのため魔力量の少ないものや、量はあっても訓練を受けていないものが使おうとすると、全身の魔力を根こそぎ喰い尽くされ今のガビアルと同じ状態、いやともすれば死に至る危険さえある。あの魔剣「災いの一枝（レヴァンテイン）」を自在に操れる人間を、ヴェートは自身の上官以

外知らない。

冷や汗を流して荒く息をして動けないでいるガビアルに、シーヴァは剣を持ったまま近づいていく。

「お前は先ほどこう言ったな」

自分はその魔剣に負けたのであってお前に負けたわけではない。その魔剣が強いのであってお前が強いのではない、と。

「ではその魔剣すら使えないでいるお前は何だ？」

シーヴァの言葉に嘲笑が混じる。それを聞いたガビアルは血走った眼を彼に向けた。死よりも嘲笑と侮辱を、彼の誇りは許さない。

歯を食いしばり、立ち上がる。漆黒の大剣を両手で構え、そしてガビアルは吼えた。

「オ、オオ、オオオオオオオオ！！」

ありったけの魔力をガビアルは「災いの一枝（レヴァンテイン）」に喰わせた。彼の魔力を喰い尽くし魔剣はその威をシーヴァに向かって発動する。放たれた黒き風はしかしまともに狙いをつけられてはおらず、そのほとんどはただ雪原をえぐり雪を巻き上げるだけで、シーヴァには届かなかった。

舞い上がった雪が風に吹かれてどこかへ行き、シーヴァの姿が現れる。

「見事」

短くゼゼトの青年を賞賛する彼の頬には、赤い線が一筋走っている。発動させることさえ難しい「災いの一枝（レヴァンテイン）」を使ってガビアルが放った黒き風は、確かにシーヴァに届いたのだ。

だがそれをガビアルが見ることはなかった。ありったけの魔力を「災いの一枝（レヴァンテイン）」に喰わせた彼は、力尽きて今は雪原に倒れてしまっていた。死んだわけではない。気絶しているだけだ。

「さて、ウルリック殿。こういう結果になったが？」

立っているシーヴァと、倒れてしまい少しも動かないガビアル。勝敗は明らかだった。それを見てエムゾー族の族長は満足そうに頷いた。

「シーヴァ・オズワルドよ、そなたを信用にたる誇り高き戦士と認めよう」

第四話　工房と職人？

素体にあわせて最適化された魔法陣や術式を「魔導回路」とよぶ。剣を魔剣にするためには、そこに魔導回路を刻み込まなければならない。これはこの世界の一般常識であり、魔道具製作についてなにも知らない子どもたちでさえ知っている。

刻み込む作業は「刻印」と呼ばれるのだが、ではどのように「刻印する」のかといえば、細工用のナイフを用いてチマチマと、というわけではない。というより術式は複雑すぎて手作業では刻み込めない、といったほうが正しい。

魔法陣は素体に対し、直接刻み込むのだ。

魔法陣の基本は円である。その形が魔力を巡らせるのに最も適しているからだ。その円の外側にもう一つ同心円を描く。そしてその帯の部分に「刻印するための魔法陣」を描く。次にその二つの魔法陣の中心に刻印を施す素体を置く。剣であれば中心に突き立てるのが一般的だ。大きな素体の場合、三重の同心円を用意し、一番内側の円の中に素体を置くのが良いとされている。

準備が整ったら、一番外側に描かれている「刻印するための魔法陣」を発動させると、後は自動的に魔導回路が刻印されていく。ちなみに「刻印するための魔法陣」というのは広く知られており、専門書を紐解けばすぐにその知識を得ることが可能だ。

「とまあ、これが一番基本的な刻印式工法だな」

とは言え、刻印する魔導回路が一つだけということはほとんどな

い。

例えば「炎を自在に操る」ためには、炎を「発生させる」回路と「操作する」回路の二つが必要になる。だが通常一つの魔道具に二つ以上の魔導回路を刻印することはしない。魔導回路が二つ以上あると、魔力を流したときにそれぞれが干渉しあい、最悪の場合暴走に至るからだ。

「そこで必要になるのが……」

「合成、ですね」

ニーナが答えると、イストは、その通り、と言って説明を続ける。

合成とは、呼んで字の如く「二つ以上の魔法陣を一つに合成すること」だ。ただし回路を一つに合成するのは理論段階ではなく、実際に回路を刻印する段階で、である。

例えば三つの魔法陣を合成するとする。その場合、まず三つの魔法陣を個々に用意する。次に三つの魔法陣を大きな円の中に収める。最後に円の内側の空白部分に刻印するための魔法陣を書き込めば準備は完了。円の中心に素体を置き、刻印用の魔方陣を発動させればよい。

準備は簡単だが実際の刻印作業は、魔法陣が一つのときと比べて格段に難しい。職人たちが言うとことの「バランスを取りながら」行う必要があるのだが、これがなかなか感覚的な作業で、例えばイストは「水が澱まないように流す感じ」というし、その師であるオーヴァ・ベルセリウスは「天秤をつりあわせる感じ」と言っている。そのためこの技術のコツを他人に教えるのはとても難しい。

そういわれたニーナは腕を組んで、むむ、と唸った。

「なにかセオリーみたいのってないんですか」
「そうだな、一般に魔法陣を小さくすると刻印しやすくなると言われている」
それゆえに魔道具職人たちは、図面と睨めっこしながら少しでも無駄を削ることに心血を注ぐ。
「イストと同じですね……」
工房の二階に設けられた部屋に行けば、彼はいつも机に向かってペンを走らせているか、部屋に散乱した資料を読み漁っているかのどちらかであった。そうやって少しでも魔法陣を簡略化し、工房に下りてきては「光彩の杖」を使って試し、またさらに簡略化するという作業を繰り返していたのだ。ただいつも「無煙」を吹かしていたせいか、なぜか緊張しきらないのが常であった。
「ま、術式も固まってきたし、そろそろ刻印するかな」
イストとしては何気なく呟いたセリフであろうが、ニーナは勢い良く反応した。読んでいた資料（とはいっても内容は理解できていないし、そもそもイストの講義を聴いていたため字面を眺めていただけであるが）から物凄い勢いで視線をイストに移す。
「見学していいですか！？」
「ん？別にいいよ」
熱意溢れるニーナに、イストは「無煙」を吹かして資料を眺め、気のない返事をする。ニーナは手を叩いて喜んだ。そんな彼女の様子を、イストは面白そうに眺めていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

工房におりて準備をしていると、なぜかガノスもその様子を見ていた。どうやらイストが刻印を施すと察したらしく、こちらもまた見学を申し出てきたのであった。

イストが鞘から刀を抜くと、その刀身にはつい先日まではなかった古代文字（エンシェントスペル）が刻み込まれていた。

「闇より深き深遠の……？」

刻まれた古代文字（エンシェントスペル）はそう読むことができる。どういう意味なのかとニーナが頭を捻っていると、イストがさっさとネタばらしをした。

「ただの飾りだよ」

見た目も大切ってことさ、とイストは笑った。

ニーナは知らないがことだが、この呪文（スペル）は初代アバサ・ロットであるロロイヤ・ロットが残したものだ。他の三つの呪文（スペル）も含め、あるいは深い意味があるのかもしれないが、それは今日までは伝わっていない。

イストや彼の師であるオーヴァは、ロロイヤへの敬意も合わせ魔道具の装飾にこれらの呪文（スペル）を用いることがよくあった。

さて、とイストは呟き集中を高めていく。右手には抜き身の刀を、左手には「光彩の杖」を持っている。集中が高まるにつれて彼の目からはあらゆる感情が剥がれ落ちていき、感情のない乾燥した、しかし何事にも動じない精神状態へと移行していく。

（刻印にもあの杖を使うのか……）

予想していたこととはいえ、ガノスは唸った。

通常刻印する魔法陣は地面に描くか、あるいはすでに描かれている紙か石版を使う。イストの仕事ぶりを脇から見て、彼が優秀な魔道具職人であることは十分に分っている。だから彼が刻印に「光彩の杖」を使うのも何か意味があるからなのだろうが、生憎とガノスには閃くものがない。

（さて、お手並み拝見……）

好奇心がうずく。こんな感覚は久しぶりだ。

イストは刀の切っ先を工房の石畳につけ固定した。そして「光彩の杖」魔力を込め、刻み付ける術式をイメージする。

刀の刃を囲むようにして現れた魔法陣は三つ。

一つ目は「強化」。刀身の強度を上げ、折れたり曲がったり、さらには刃毀れしたりするのを防ぐ術式だ。

二つ目は「切断」。これは刃物の切れ味を鋭くするための術式だ。ちなみに槍などに施す術式で「貫通」というものがあるが、これは字面が違うだけで中身は「切断」とほぼ同じだ。

そして三つ目が「干渉」。これは言葉で説明するのが難しい。相手の魔力に「干渉」しさまざまに邪魔をしたりするというものなのだが、如何せんイメージが漠然としすぎており、製作者のイストでさえこの刀は持ち手を選ぶだろうと思っている。しかしその一方で然るべき使い手にめぐり会えば、歴史に名を残す名刀になるだろう

とも思っていた。

三つの魔法陣の外側にさらにもう一つ円が描き出され、その内側の空白部分に刻印のための術式が描かれていく。

刻印のための最終準備が整った。ここから先が本当の意味での勝負。失敗は許されない。仮に失敗したとすれば、一度溶かして成型しなおすほか刻印した術式をキャンセルする方法はない。そうなれば全てが水の泡だ。

イストの集中がさらに高まる。凄まじい集中力は時間の感覚を歪ませる。今の彼は一秒でさえ一日の如くに感じ、また逆に一日さえ一秒の如くに感じるだろう。

イストは「光彩の杖」を操作し、描いた術式をゆっくりと刀身に沿わせて動かしながら刻印を施していく。

（そんな方法があったのか……！！）

目の前の光景に、ガノスは殴られたような衝撃を受けた。術式を動かしながら刻印を施す理由は分らない。そもそも「刻印作業は術式も素体も動かさずにおこなうもの」という既成概念があり、ガノスも含めて一般の職人はこのような技法は思いつかないだろう。

魔法陣は切っ先の少し手前で止まり、そして消えた。イストは、ふぅ、と一息つき脱力した。作業時間はおよそ三十秒。しかしたったそれだけの時間だったにも関わらず、極度の緊張を強いられていたイストの顔には大粒の汗が幾つも浮かんでおり、また彼自身息が荒い。それでも大仕事を終えた彼の表情は晴々としていた。

「刻印用の魔法陣を動かしていたが、その理由を聞いても良いか」
最後の保護処置をしているイストにガノスが疑問をぶつけた。

「素体と魔法陣の両方を固定したまま刻印を施すと、魔導回路は均一に刻まれず粗密ができてしまう」

そうなると魔力の流れに少なからずムラができるのだ、とイストは言う。そこで魔法陣を動かしながら刻印することで、魔導回路の粗密を均一にするのだという。ただ素体のほうを動かそうとすると手ぶれで狂ってしまうので、「光彩の杖」で制御が可能な魔法陣のほうを動かしているそうだ。

「でもまあ、両方固定してやったほうが簡単なのも事実だ。最後の最後に失敗してたんじゃ、目も当てられない」

保護処置の終わった刀、いや魔刀とでも言うべきか、ともかく今まさに完成した魔道具をイストは鞘に収めた。

「その魔道具、名前は決まっているんですか？」
ニーナが尋ねると、イストは頭を振った。

「まだ決めてない。ま、そのうちな」

後にこの魔道具はとある剣士の手に渡り、その剣士が名前をつけることになるのだが、それはまた別のお話である。

第四話　工房と職人　エピローグ

「ニーナ」

夕飯の後片付けも終わり、食堂でぼんやりしていたニーナにガノスは声をかけた。何かあったのだろうかと思い、ニーナは頬杖をついていた顔を父親のほうに向けた。

「お前、もうイスト君に弟子にしてくれと頼んだのか？」

――――ガタンッ！！

ニーナは思いっきりテーブルに頭をぶつけた。

「え？ええ？え？えええっ？」

「なんだ、まだだったのか」

早くしたほうがいいぞ、とガノスは椅子を引きニーナの正面の席に座った。

「お父さん！！」

「何だ？」

あまりにも予想外の展開に狼狽し叫ぶニーナに対し、ガノスはどこまでも冷静だった。いや、ワタワタと取り乱す娘を見て楽しんでいるフシさえある。

「何だって……、いいの？」

「なりたいのだろ？お祖父ちゃんのような魔道具職人に」

もちろん、なりたい。それがニーナの子どものころからの夢だ。そしてそのためにはイストの弟子にならなければならない。現状彼しかツテがないのだから。しかし彼の弟子になるということは、この家から離れるということだ。一人父を残していって、本当に大丈夫なのだろうか。

「なに、なんとするさ。それが男という生き物だ」

「でも……」

ガノスは不器用におどけてみせた。しかしニーナの心配は尽きない。現状ただでさえ零細で、微妙なバランスの上に「ドワーフの穴倉」の経営はある。自分が離れたことで一気に崩壊に向かってしまわないか、ニーナは心配だった。

「イスト君から受け取った八シク（金貨八枚）を元手に、新しい魔道具を作ってみようと思っておる」

その新しい魔道具をイストが旅立つ春先までに完成させ、ニーナが安心してイストに付いて行けるようにする、というのがガノスの腹積もりだった。いつ完成するかは正確にはわからないが、そのメドだけは意地でもつける気でいる。

「なあ、ニーナ……」

「なに、お父さん？」

ガノスの目が、ふと優しいものになる。

「『ドワーフの穴倉』は、好きか？」

「うん、好き。大好き」

ニーナは即答した。その一瞬の迷いもない返答に、ガノスは微笑をもらした。

「そうか……。ならお前が帰ってくるまで、工房はワシが守っておく」

新しい魔道具の製作を始めれば、これまでにも増してニーナを魔道具職人として育てることなどできなくなる。ならば娘が一人前の職人になって帰ってくるまでこの工房を守ること、それがガノスに出来る唯一にして最大の事のように思われた。

「本当に……、いい……の？」

ニーナの声が震えている。だが彼女の目は輝いており、その震えが歓喜ゆえのものであることは誰が見ても明らかだった。

「ああ、もちろんだとも。だから早くイスト君に頼んでくるといい」

きっと彼は断らないだろうから、とガノスが言い終えるより前に、ニーナは飛び上がり足をもつれさせながら駆け出していった。

その後姿に、ガノスは一人独白を投げかける。

「巣立ち、か……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「弟子にしてください！！」

「いいよ」
「……はい……？」
「どうした。呆けた声出しやがって」

ほとんどドアを蹴り破るようにしてイストの部屋に入り弟子入りを願い出たニーナは、頭を下げたその格好のままで固まってしまった。ガノスの言ったとおり、イストが驚くほど簡単に彼女の弟子入りを承諾したからだ。

「えっと……、いいん……です……か……？」
体の硬直が未だに解けていないニーナは、上目遣いにイストを見た。

「うん、いいよ」

機嫌よく「無煙」を吸い白い煙（水蒸気らしいが）を吐き出しながら、イストはもう一度弟子入り承諾を伝える。

「しっかし、決意するまでに随分時間がかかったな～」

時間は有効活用しなきゃいかんぜ、と「無煙」をクルクルと回してもてあそびながら、イストは偉そうにのたまった。

その言葉で自分が魔道具職人になりたがっていることが、かなり早い段階からイストにバレていたことをニーナは知った。だとするならば現状を鑑みるに、ニーナが魔道具職人になるためにはイストの弟子になるしかない。その結論に至った瞬間から、イストは彼女が自分から言い出すのを待っていたのだろう。

逆を言えば、自分で言い出さない限りは弟子にするつもりはなか

った、ということだが。

――――徐々に、体の奥底から歓喜が湧き上がってくる。

「師匠！よろしくお願いします！！」

「あいよ」

大陸暦一五六三年、にわかに歴史が動き出したこの年の暮れ、ニーナ・ミザリは魔道具職人イスト・ヴァーレの弟子となり、その夢への第一歩を踏み出すこととなる。

しばらく後に師弟はこのときのとこを思い出してこんな会話をかわす。

「どうしてわたしを弟子にしようと思ったんですか？」

「そうさな。向いている、と思ったから、かな」

「向いている……？」

「そ。才能の有無はともかくとして、姿勢というか態度というか、まあそういうものが魔道具職人に向いていると思ったから、だな」

―第四話　完―

第四話　工房と職人　エピローグ（後書き）

というわけで第四話「工房と職人」どうだったでしょうか。

今回の話は職人としてのイストにスポットライトをあててみました。
第三話のときと比べると、主人公が随分マイルドな気がしますねぇ。
まあ第三話のときはワザとやってたところもあるんですけどね。

次回はまた幕間を挟もうと思っています。

それではまた。

あ、あと感想いただけるとうれしいです。

幕間　とある総督府の日常　前編

幕間　とある総督府の日常

それほど厳密なくくりではないが、魔道具には属性が存在する。火・水・風・雷・土などといったものだ。一見して属性を当てはめるのが難しい魔道具もあるため、それほど重要視されてはいないが、性能を説明する上では大切なパラメータだ。

さて上に記した五つの属性のうち、水と土は他の三つとは一線を画している。それは火・風・雷といったものがエネルギー体であるのに対し、水と土は物質であるからだ。魔道具を触媒として魔力をエネルギーや力場に変換することは容易だ。しかし、魔力を用いて物質を生み出す術は未だ確立されていない。

それゆえ何がおこるかというと、水や土といった物質を操る魔道具の場合、対象となる物質の有無によってその性能は著しく異なってくる。

土の魔道具はまだいい。船にでも乗らない限り足の下には大地が広がっており、土がなくて困るなどという事態はおよそありえない。

だが、水の魔道具はそうはいかない。近くに川があるのでもない限り、十分な量の水を確保することは難しい。そのため水の魔道具を使う魔導士が戦場に赴く際、水の入った樽を抱えながら従軍するといった傍から見れば滑稽な様子が見られるわけだが、本人たちにしてみればいたって大真面目だ。それが有るか無いかで、自分の発揮できる実力が大きく変化してしまうのだから。

こうして説明してみると、水の魔道具は火や雷の魔道具と比べ、使い勝手が悪いように思われるかもしれない。だがしかし、水の魔道具には大きなメリットがある。水さえ十分にあれば大きな効果を容易に得られるのだ。

古来より優れた用兵家たちはこの性質をうまく用いて軍を進めてきた。

「水のある戦場は気をつけろ」

とはこの世界ではよく言われてきた格言である。

どれだけ容易に大きな効果が得られるのかといえば、魔道具を使い始めてから一年くらいの未熟者でも、巨大な水柱を作り出すくらいのことはやってのける。そう、今まさにリリーゼ・ラクラシアがそうしているように。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大陸暦一五六四年四月、モントルム領総督府の置かれた旧王都オルスク、そこにある城の堀から一本の水柱が音をたてて立ち上がった。朝日が昇りきっていない時間帯とはいえ、町には人影がある。しかし誰もこの光景を目の当たりにして、驚いたり取り乱したりはしていない。

「あら、昨日より高くなったかしら」

などと暢気に感想を述べている婦人もいる。初めこそ総督府に質問が殺到したが、ここ二週間ほどですっかりと見慣れた光景になってしまった。城壁の上から見張りをしている兵士たちもまったく気

にしていない。中にはこれを使って賭け事をしている者もいるとかいないとか。

自分の朝の訓練がすっかりオルスクの名物になってしまったことを、しかし当のリリーゼはまったく気づいていなかった。

「うん。いい調子だ」

あれだけの水柱を操ってみても、初めのころのように息切れするということはない。随分と扱いに慣れてきた証拠だろう。思えば操る水の量も多くなった気がする。複雑な水の動きもだんだんと制御できるようになってきて、このところのリリーゼの自主鍛錬は充実していた。

手にした「水面の魔剣」はリリーゼの魔力を受け、その刀身に波紋のように揺らぐ光を輝かせている。最近気づいたことだが、この輝き自体が一種のバロメータになっており、その日の調子を測ることができるのだ。

（本当に綺麗な魔剣だ……）

時々刻々と変化するその刀身の輝きは見ていて飽きることがない。暗いところでやれば、その輝きはより神秘的になり、見る人を惹き付ける。月のない晩に星明りの下でその輝きを眺めるのが、リリーゼの密かな楽しみとなっていた。

「まったく、本当にあの男は何者なんだろうな……」

イスト・ヴァーレ。この「水面の魔剣」を作った流れの魔道具職人。魔剣から連想するようにその男を思い出した。リリーゼは魔導

士としてはまだまだ未熟だが、それでもこの魔剣が“超”がつく一級品であることは用意に想像がつく。

「こんなに美しい魔剣を作れるような人間には見えないのだけど」

それは偏見が過ぎるか、とリリーゼは頭を振った。とはいえその考えを否定できない自分もいる。

これだけ優秀な腕を持ちながら、特定の工房には属さない流れの魔道具職人。本人の言葉を信じるならば遺跡巡りが趣味で、知識も豊富な様子だった。加えてクロノワ閣下の友人。

「滅茶苦茶な人間だな」

思わず苦笑がもれる。彼に騙された記憶は苦々しいが、今となってはそれほどの怒りは感じない。聖銀（ミスリル）の製法は確かにヴェンツブルグの利益になったわけだし、そろそろあの事件に自分の中での決着をつけてもいいころだと思う。

「と、いけない。集中集中」

意識を朝の訓練に引き戻す。この場にいない男の正体を勘ぐってみたところでどうしようもない。今の彼女にはきちんとした仕事があり、そのため時間は限られている。ならば密度の濃い訓練をしなければならない。

目を閉じて「水面の魔剣」を正面に構える。流し込まれた魔力に反応して、魔剣の刀身に淡い光が揺らいだ。堀の水が今度は幾筋もの水柱になって立ち上がり、整然と動いたかと思えばバラバラに動いたりと、複雑な運動を繰り返す。

オルクスの朝の名物は、日が昇りきるまで続く。

ちなみに……、

「今日は私の勝ちですね」
「負けちゃいましたねぇ～。まあ、全体としてはまだ僕のほうが勝ってますけど」
「今までの負けの分も、そのうち返してもらいますよ」
「……お二人共、リリーゼ嬢の訓練で賭け事をするのはいかがかと……」

賭けの結果に一喜一憂する総督とその主席秘書、そしてそんな二人に苦い顔をする女騎士がいたとか。

モントルム領は、今日も平和だ。

幕間　とある総督府の日常　中編（前書き）

後編と思わせといて中編です。

幕間　とある総督府の日常　中編

リリーゼ・ラクラシアのモントルム総督府における役職は、総督クロノワの秘書である。とはいえ四人いるうちの下っ端で、書類をあちこちの部署へ持っていったり持ってきたりと、現時点ではデスクワークよりも肉体労働のほうが割合としては多い。その他にもクロノワにお茶を出したりしているのだが、彼の仕事を横から見たりフィリオをはじめとする先輩たちが色々なことを教えてくれるため、リリーゼの毎日は充実していた。

今、彼女の目の前で主席秘書のフィリオが総督であるクロノワに、

「聖銀（ミスリル）の製法ですが、当初の思惑通り大陸中の工房に売却することができました。細かい数は報告書を上げてあるので、そちらを見てください」

クロノワは報告書と思しき書類をめくりながらフィリオの報告を黙って聞いている。彼は終生、人の話しに口を挟むということをほとんどしなかった。

「……次にこの件での収入と支出についてですが、まあ細かい項目は報告書を参照してもらうとして、純利益だけでいいですよね」

一から十まで説明するのが面倒くさいのか、フィリオは報告を大幅に端折った。クロノワもそれを咎めない。全てを聞いていては時間がないからだ。

「純利益はおよそ二四三万シク。総督府の取り分が全体の一割ですから、およそ二四万シクとなります」

二四三万シクといえば独立都市ヴェンツブルグの年間予算の四倍近くだ。これでヴェンツブルグを発展させるために必要な資金に、ひとまずメドが立ったことになる。

「……最後に教会の動向ですが、内部でごたごたしているようですが、今のところこちらに横槍を入れてくる気配はありません。製法を買い取った工房にも圧力を掛けている様子はありませんし、こちらの思惑通りにいったと考えて良いのではないかと。報告は以上です」

フィリオの報告を聞いて、クロノワは一つ頷いた。純利益二四三万シク、今のところ教会が何かしてくる気配はない。上々の結果だ。

「懸念があるとすれば、突然巨額の資金を手にしたヴェンツブルグに教会が疑いを抱く、といったところでしょうか」

「そうなったら『その資金は城に隠してあった財宝から総督府が出したものだ』とでも説明しましょう」

クロノワが言った通り、この城の隠し部屋には財宝が隠されていた。ただ、その大部分は彼が凱旋する際に戦利品として持ち帰っている。

「それで総督府の取り分である二四万シクですが……」

「はい。かねてからの予定通り、帆船を購入します。まずは五隻程度でしょうか。じつは既に目星も付いていまして、船員を含め早ければ五月中には動かすことが出来ると思います」

フィリオの報告にクロノワは満足そうに頷いた。
その帆船は「種」だ。いずれ種は花を咲かせ、そして花は新たな種をつけるだろう。そうやって花が増えていき、世界中に種を落とすときクロノワの野望は成就する。

（この世界を小さくするための、これは第一歩）

ひとまずは順調な滑り出しと言うべきだろう。

「とはいえ、利ザヤが出るまでどれくらいかかることやら……」

クロノワがやろうとしていることは海上貿易だ。しかも世界規模の。商売である以上、利益が出なければ続けていくことはできない。しかし始めてすぐに黒字を確保できると考えるほど、クロノワは楽観的ではなかった。

「それでもよそが一から始めるよりは、断然有利な立場だと思いますよ」

フィリオの言葉は正しいだろう。ヴェンツブルグのレニムスケート商会がいろいろと力を貸してくれる手筈になっているし、モントルム総督府ひいてはアルジャーク帝国という申し分ない後ろ盾がある。

「そうですね。通貨も統一されていて商売はやりやすい環境ですし、せいぜい頑張るとしましょう」
「はい。普通は異常なんですが、今は感謝ですね」

フィリオのいう“異常”という単語が、リリーゼには引っ掛かった。それでつい口を挟んでしまった。

「あの、なにが“異常”なんですか？」

クロノワとフィリオが揃って彼女のほうを向いた。ただ、彼らの目は優しい。それがリリーゼを安心させた。

「ではリリーゼ嬢のために、一つ講義をいたしましょう」

恐れながらクロノワ閣下も必要な知識がおありか試させていただきます、とフィリオは大仰に一礼してみせた。大事になってしまったとリリーゼは焦ったが、クロノワを見ると、おや私もですか、と笑っていて楽しんでいるように思われた。

「さて、まずは硬貨についてです」

右手の親指をピンと立ててフィリオが説明を始める。

この時代、通常硬貨には貴金属が用いられている。しかし金貨にしろ銀貨にしろ、同量の素材と比べた場合、硬貨のほうがあるかに価値が高い。それはなぜか。

「その硬貨を発行している国が、その価値を補償しているからです」

逆を言えば、既に存在していない国の硬貨や信用を失ってしまった国の硬貨は、通貨としての価値を失うことになる。

「では、そもそも国家はどうして通貨を発行すると思いますか」

リリーゼ嬢どうぞ、とフィリオはリリーゼに話を振った。

「ええっと、お金があるほうが便利だから、ですか」

「二十点ですね。それならば他国の通貨を使ってもいいことになる」

フィリオの採点は辛口だ。リリーゼはがっくりとうな垂れた。

そんなリリーゼの様子を微笑ましく見守りながら、フィリオは説明を続ける。

「簡単に言えば、自国の経済を他国に牛耳られないようにするため、です」

通貨の価値は、それを発行する国が決める。今まで使っていたお金の価値が、ある日突然十分の一になってしまったら、経済の混乱は避けられない。それに通貨を支配されるということは経済を支配されることと同義で、そんなことになれば国を則乗っ取られるのと同じだ。

「ですから、国家が複数あれば通貨も複数ある、というのが普通です」

ゆえに、国が複数ありながら通貨が一つしかないこの大陸は異常なのだ。

「でもどうして通貨は一つになったんですか」

「大昔にこのエルヴィヨン大陸は一度、統一されたのは知っていますね」

リリーゼに答えたのはクロノワだった。

大陸の統一を成し遂げた国が断行した政策が、度量衡と通貨の統一だった。さまざまに反発を呼びながらも、かの国はついにそれを成し遂げる。

「そのときの度量衡と通貨が今も使われています。不思議なことにね」

度量衡はともかくとして、存在しない国の通貨が価値を失わずに流通している。これは不思議な現象だ。

「理由はいくつか考えられます」

統一国家が倒れた後の混乱期において、円滑な商取引を行うためにはそれまでの通貨を使ったほうが都合が良かった。新しい通貨が発行されても、商人の大部分が古い通貨を使いたがった。それまで通貨が統一されていたため、両替商がいなかったこと。

「きっと、さまざまな理由が絡み合っての現状でしょうね」

クロノワがそう締めくくった。

「さて、そういうわけでこの大陸の通貨は今現在一つだけなわけですが、通貨政策で絶対にやってはいけないとされている“禁じ手”があります」

さてなんでしょう、とフィリオが問題を出した。

「通貨の大量鋳造と純度の引き下げですね。もっともこれらは通貨が複数あっても当然のことですが」

「閣下ぁ～、リリーゼ嬢に答えさせなきゃ意味ないじゃないですか」

ジト目で睨むフィリオに対し、これは失礼、とクロノワは肩をすくめてみせた。まったくもう、とため息をついてからフィリオは説明を続ける。

「先ほどお話したように、金貨というのは同量の金よりも価値があります。つまり金貨で金を買いその金で金貨を作れば、理論上必ず利ザヤが出ます」

「じゃあ、どうして“禁じ手”なんですか」

必ず利益が出るなら、誰かやりそうなものだが。

「理由はいくつかあります」

第一に大量の貴金属を買い占めようとすれば、当然市場での価格が上がり、その結果利ザヤは少なくなってしまうから。

第二にお金を大量に作りすぎると金余りの状態になり、経済が混乱し損害のほうが大きくなってしまうから。

第三にいきなり羽振りが良くなると、隣国から「戦争をするつもりでは？」と疑われてしまうから。

「このほかにも色々と理由はありますが、簡単に言ってしまえば、やりすぎてしまうとメリットよりデメリットのほうが大きくなってしまうんです」

だからこれは禁じ手、まともな国なら手を出さないことです、とフィリオはいう。

「それじゃあ、純度の引き下げというのは？」

例えば金貨二枚分の金で金貨三枚を作れれば、金貨一枚分の利ザヤができる。だが一枚一枚の金貨を比べると、使われている金の量は少なくなってしまう。

「こちらはもっと深刻ですね。通貨そのものの価値、ひいては信頼に問題が起こります」

誰だって純度が低いと分っている硬貨は使いたくない。そんな粗悪品が多く出回ってしまえば、人々はお金というものを使わなくなり、経済は大混乱に陥るだろう。

「もっとも、その心配はほとんどありませんがね」

「どうしてですか？」

「純度を測定するための魔道具があるのですよ」

答えたのはクロノワだった。

純度を測定する魔道具は「真実の目」というのだが、この魔道具があるおかげでこの大陸の通貨は品質を一定に保つことが出来ている。仮にある国が純度の低い硬貨を作ったとしても、結局それは早い段階でバレてしまい、最終的には周りの国から商取引を拒否されるというハメになるだろう。

「ま、ズルしてもいい事なんてないってことですね」

フィリオが綺麗にまとめて、講義は終わりとなったのだった。

幕間　とある総督府の日常　中編（後書き）

通貨うんぬんは見なかったことにしてください……。

自分の無知が恨めしい……（泣）

幕間　とある総督府の日常　後編（前書き）

「魔道具は使っていませんよ。カツ丼を出しただけです」ってやりたかった。

カツ丼は自白率１００％、後遺症なし、違法性なしの最強の自白剤なのです！

え？違う？

ソンナバカナ

（本文を読んでもらえれば分るかと思います）

幕間　とある総督府の日常　後編

ドタドタドタ！と騒がしい足音が、総督執務室の外の廊下から聞こえてくる。そんな騒がしい音が響いているにもかかわらず、室内の三人はしかし少しも取り乱してはいなかった。

「今日もまたアレですか」
「今日もまたアレですねぇ～」
「ストラトス執務補佐官もいい加減にすればいいのに……」

クロノワ、フィリオ、リリーゼの三人が若干呆れ気味にしていると、執務室の扉が勢いよく開いた。

「こちらにストラトスが逃げてきていませんか！？」

鬼の形相で入ってきたのは、女騎士のグレイス・キーアであった。よほど気が立っているのか、執務補佐官のことを呼び捨てにしている。

「いえ、来ていませんよ」
「失礼しました！」

クロノワが穏やかに答えると、グレイスは来たときと同じくすごい勢いで去っていった。

「注意しなくていいんですか？閣下」

リリーゼが控えめに尋ねた。グレイスのことではない。ストラト

スのことだ。

元モントルム駐在大使ストラトス・シュメイルは、モントルムという国家がなくなりアルジャーク帝国の一地方になったことで、駐在大使の任を解かれいわば失業していたのだが、モントルムにおけるその豊富な知識量を買われて今は総督府で執務補佐官の役職にあった。総督たるクロノワが直接採決する必要のない案件は、ほとんどが彼のところに集まるようになっている。

ストラトスは優秀な人材ではあるのだが、如何せんなかなかやる気をみせようとはせず斜めに構えていたがる人物で、毎日のように自分の執務室から逃げ出してはグレイスを困らせているのだった。

「仕事が滞ったことはありませんし、問題はありませんよ」

実際ストラトスが逃げ回ることでクロノワの仕事が増えたことはない。それにグレイスが城内の警備兵を動員してストラトスを捜索することで、警備兵の練度が上がっているという側面もある。それでも容易には捕獲されない彼には、ある種敬意さえ覚える。

「それにグレイスさんがあの形相で走り回っているおかげで、他の部署の方々は仕事をサボることもなく能率が上がっているとも聞きます。差し引きはむしろプラスですね」

「フィリオさんまで……」

直属の上司たる主席秘書官まで容認論に回ってしまい、リリーゼはがっくりと肩を落とした。リリーゼとグレイスは同室で寝起きしているから、彼女の気苦労について色々と聞かされているのだろう。

そもそもグレイスは騎士であり、ストラトスは文官である。仕事畑の違う二人がどのようにして出会ったのかといえば、とある事件

がきっかけだったという。

あるとき凶暴な犯罪者が城の地下牢に収監された。だがこの男が暴れまわって手がつけられず、取り調べも出来ない。どうしたものか、という話がグレイスのところまで来ており、彼女も頭を悩ませていたときにストラトスと出会ったのだ。

「どうしましたか？」

ひょっこりと現れた彼は（今思えばこのときも仕事をサボってフラついていたのだろう）、難しい顔をしているグレイスから一通りの話を聞くと一つ頷き、何とかしてみましょう、と言ったそうだ。

それから二・三日もすると、例の男は突然大人しくなり取調べにも応じるようになったという。驚いたグレイスはストラトスに「どんな魔道具を使ったのか」と聞いた。すると彼は笑ってこう答えたという。

「魔道具は使っていませんよ。食事から塩を抜いただけです」

なるほど、確かに塩が不足すると力は出ない。そんな手があったのか、と感心するグレイスに彼はさらにこう言った。

「なまじ魔道具という便利なものが存在するから、人間は不可解な事象を見たときにすぐに魔道具のせいにします」

それは思考の硬直ですよ、とストラトスは賢しい顔でのたまったのだった。

例えば、あるときとある船乗りが風に向かって船を進めてみせた。帆船は帆に風を受けて進むものであるから、当然「風に向かって」

走ることなど出来ない。だからそれを見た人々はまず「どんな魔道具を使ったのか」と尋ね、次に魔道具を使っていないことが判明すると人外の力を使ったとしてその船乗りを教会の弾劾裁判にかけてしまった。

種明かしをすれば、風に対しジグザクに船を進めることで「風に向かって」走っていたのだが、結局それを実演して見せることで船乗りは裁判を乗り切った。人の思考がいかに硬直しやすいかを示す事例だろう。

「一般の人々はそれでいいかもしれませんが、人の上に立つ人間がそれでは困りますよ」

そう言われてグレイスは大いに赤面したという。だが事が今に至れば彼女にだって言いたいことがある。

「なるほど柔軟な思考は必要かもしれないが、それも常識の範疇内での話。貴方の逃亡癖は常識を欠いている！」

これは全面的にグレイスが正しいと言っていいだろう。しかしどれだけ正論を吼えてみたところでストラトスは逃げるし、逃げる以上グレイスは追わなければならない（いつのまにかそんな役回りになってしまった……）。

「あの二人はなかなか相性が良いと思いますよ」

そのクロノワの言葉には賛成しかねるリリーゼであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時間は少し遡る。

エムゾー族の族長ウルリックは海を見ていた。ロム・バオアは北限の島、二月といえば真冬の盛りだ。だが目の前の海は穏やかだった。波は少し高いが、それでも荒ぶる様子はない。

その海に無数の戦船が浮かんでいる。大きさとしては様々にあるが、大別すれば種類は二つだろう。帆船とゼゼトの民の舟である。

「まさか、ここからこの海を見る日が来るとはな」

「シジュナの族長殿」

ウルリックの隣に立ったのは、ゼゼトの民らしい巨躯の男だった。厳しい面構えで、立派な顎ひげを湛えている。

今二人の族長が立っている場所はパルスブルグ要塞の船着場の近くで、眺めている海はロム・バオアとアルテンシア半島の間の海、バラバクア海峡であった。

「静かなる海。ゼゼトの民のもう一つの生命線」

ウルリックの言葉にシジュナ族の族長は頷いた。

ゼゼトの民はバラバクア海峡のことを「静かなる海」と呼んでいる。海流や季節風の影響なのか知らないが、この海は一年を通して穏やかでほとんど荒れることがない。ゼゼトの民は昔からこの海で漁をしてその恵を得てきた。

しかしパルスブルグ要塞ができこの海の制海権を奪われてからは、満足に漁を行うことが出来なくなった。ゼゼトの民の食糧事情が悪化したのは、穀物を手に入れにくくなったこともあるが、同時にこ

の海で漁を行えなくなったことも一因だ。ゼゼトの族長たちがシーヴァの誘いに応じたのは、この海を取り戻したかったからでもある。

「大陸との行き来ができるようになれば、また自由に漁ができるようになるな」

シジュナ族の族長は満足そうに頷いた。

「さて、それもシーヴァが約を守れば、だが」

「おぬしが見極めたのだ。信頼していいと思うが」

形だけの紙切れなど意味はない、とウルリックは言ったが、後日シーヴァは書類を用意して届けさせている。

「紙切れに意味はないかもしれないが、用意しておくことで防げるイザコザもある」

とシーヴァは言った。形が中身を守ることも確かにあるのだ。シーヴァが彼なりの方法で誠意を見せたといっていいだろう。

「そういえばおぬしの娘だが……」

「いやあ、お恥ずかしい限りだ」

からかうような目を向けるシジュナ族の族長にウルリックは苦笑した。彼の娘であるメーヴェは今現在シーヴァに張り付いている。

「裏切ったときに殺すため」

本人はそう言っていたが、ガビアルを倒したシーヴァに興味が湧いたというのが本音だろうと、父親であるウルリックは見当をつけている。

「それを許可したのはおぬしであろう？」
「押し切られただけのこと」

ウルリックは苦笑いをしてシジュナの族長の追及をかわした。ウルリックとしてはシーヴァとゼゼトの民の間に橋渡しをする人間がいると便利だと思いメーヴェに許可を出したわけだが、思惑通りの働きをしてくれるか我が娘ながら不安なところがあった。

「なんにせよ戦いに勝たねばどうにもならん」

そういってウルリックは至るべき戦いに意識を向けた。この戦いにもし負けるようなことがあれば、ゼゼトの民への締め付けはこれまで以上に厳しくなるだろう。そうなってしまえばもはや氏族としてこの土地で暮らしていくのは不可能かもしれない。

「あの男にはあの男なりの勝算があるはずだが……」
シジュナの族長が顎ひげを撫でながら呟いた。

「それをここで言い合ってもどうしようもない」
ウルリックがそういうと、確かにな、とシジュナの族長は応じた。

「お前が見極めたのだ。正直なところあの男は信じられんが、お前の目は信じている」

結果から言えば、このときのゼゼトの民の選択は正しかった。そのことを証明する戦いは、もう目の前に迫っている。

幕間　とある総督府の日常　後編（後書き）

今日は重大な発表があります。

それは……

ストックが切れたーーーーーーーーーーー！！！！！！

えー、というわけで（泣）

次回からは時間がかかってしまうこと請け合いです！

あーちょっとまってそこの人どこ行くのー？

と、ともかく見放すことなく生暖かく見守ってください。

お願いします！！

第五話　傾国の一撃　プロローグ（前書き）

ようやく乱世っぽくなってきました。

なってきたはずです。

第五話　傾国の一撃　プロローグ

外なる敵は破壊をもたらし
内なる敵は腐敗をもたらす
さて、どちらがマシなのか
それが問題だ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第五話　傾国の一撃

カンタルクとポルトール。この二カ国が因縁の間柄であることは、既に何度か記した。ではその原因は何かといえば、それは“塩”であった。

カンタルクとポルトールは、元々は一つの国であった。塩は海水から作るものであるから、その産地は当然海に面した南側、つまり今のポルトールの側であった。この塩が北側、つまりカンタルクにつくまでにかなり値上がりしてしまったのだ。

理由は貴族たちが自分の領地を通る品物にかける通行税であった。一つの領地を通るたびに通行税を払わなければならないのだから、自然と品物の値段は上がっていく。しかも塩は生活必需品で、それがなければ人は生きていけない。高くても売れる、高くしても売れる、そういう有様であった。

こういった場合、国が塩に対し課税を禁止すれば問題はそれで解決するはずであった。しかし貴族の力が強く、そういった話は握り

つぶされるのが常であった。余談になるが、カンタルクとそしてポルトールで貴族の力が強いのは、この時代からの流れであるといっていい。

民の困窮を見るに見かねて、ついに北側の貴族たちは兵を起こした。カンタルクの歴史ではそうなっている。確かにそういう側面もあるのだろうが、より生々しい内情を暴露するならば、塩の課税で富を蓄えていた南側の貴族たちへの嫉妬が大きいだろう。その富を奪うためにもっともらしい口実を考えたのだ。

こうして内戦が勃発し、国は北と南の二つに分かたれた。カンタルク軍は一時期ポルトールの半分を切り取るまでに迫ったが、そこからポルトール軍が反撃。自国の領内から敵軍を駆逐した。そしてポルトールはカンタルクの侵略を防ぐために一つの魔道具を作ることとなる。

魔道具「守護竜の門」

それは厚さ十センチもある巨大な銅の城門で、カンタルクとの国境付近にあるブレントーダ砦に置かれた。二枚一組の城門で、左右の扉にはそれぞれ宝珠を握った竜が描かれている。この宝珠こそが魔道具の核であった。

この魔道具の効果はいたって単純である。不可視の結界を発生させる。ただそれだけである。ただしその効果は絶大だ。記録によれば二十万の大軍を押しとどめたこともある。もはや戦術級、いや国境の要衝にあるのだから戦略級の魔道具といえるだろう。

この魔道具「守護竜の門」には二つの核があるからその効果、つまり結界の展開の仕方も二つある。

右側の扉に埋め込まれた「右竜の宝珠」は、宝珠を中心にして内側から外側に向け敵軍を押し戻すようにして結界を展開する。この結界によって押し戻されると当然隊列は乱れ、そこに砦から大量の矢が降り注ぎ大量の失血を強いるのだ。

左側の扉に埋め込まれた「左竜の宝珠」は、発動されると特定の位置に結界を展開し、その内側と外側に敵軍を分断する。そして結界の内側に取り残され孤立無援となった敵軍を徹底的に叩くのだ。

ただこの「守護竜の門」は使いやすい魔道具では、決してない。大量の魔力を消費するため発動には五十人以上の魔導士が必要だし、発動させても時間的な制約が付きまとう。だがその運用如何では絶大な効力を発揮することを、これまでポルトール軍は証明し続けてきたし、そしてこれからも証明し続けるだろう。ポルトール王国第一王子、シミオン・ポルトールはそう信じていた。

彼は今甲冑を身につけ、ブレントーダ砦の城壁の上からカンタルクの方を眺めていた。眼下の青草が茂り始めた平原には、甲冑を身にまとった非友好的な一団が迫っている。掲げられた旗には翼を持つ獅子が描かれており、その一団がカンタルク軍であることを示している。

総勢およそ十八万。軍を率いるのはかの大将軍、ウォーゲン・グリフォードであるという。

「先王の喪が明けた途端にこれか」

浅慮なことだな、とシミオンは嗤った。

先のカンタルク国王アウフ・ヘーベン・カンタルクは、冬の初め

に病が悪化して息を引き取った。そして王座を継いだのが現国王ゲゼル・シャフト・カンタルクであった。彼は父の喪が明けるとすぐに、勅令を発しポルトールに宣戦布告をしたのだ。

「手始めに箔をつけておきたいのだろう」

それがポルトール宮中の一致した意見で、シミオンもその通りだろうと考えていた。というか彼の人となりを知る者ならば、それ以外の解釈はないだろう。

「ゲゼル・シャフトよ、残念ながらお前が手にするのは屈辱と失笑だけだ」

名誉と栄光は我が手にする、とシミオンは口にせず心の中で呟いた。彼の父である国王ザルゼス・ポルトールは今病床に臥せっており、その余命は幾ばくもないと思われている。父王の後を継ぐのは第一王子であるシミオンなのだが、王位継承の前にここで大きな戦果をあげれば、それこそ箔がつくというものだ。

余談になるが、とある歴史家がこんな言葉を述べている。

「カンタルクとポルトール。この因縁の二カ国で同時期に国王が死病で病床に臥せっていたという事実は、まるで古い時代の終わりと新しい時代の到来を象徴しているかのようである」

遠目にではあるがカンタルク軍のその堂々たる陣容を見て、しかしシミオンが恐怖を感じることは皆無であった。彼は己の勝利を信じて欠片も疑っていない。

その自信には根拠がある。なぜならこれまで幾度もカンタルク軍はこのブレントーダ砦に対して攻撃を仕掛け、そしてただの一度も

攻略に成功していないのだから。「守護竜の門」は常に敵軍を押しとどめ押し返し、ポルトール軍に勝利をもたらしてきた。

「歴史は繰り返される。此度も我々が勝利する」

その確信はシミオンただ一人のものではない。この砦にいる兵士全てに共通した確信だった。勝利は約束されている。ゆえに兵士たちの士気は高かった。

ただ勝利を確信しているとはいえ、シミオンは決して油断しているわけではなかった。その証拠にこの砦にいる軍の数はおよそ十万。仮に「守護竜の門」がなかったとしても堅牢を誇るこのブレントーダ砦を落とすことは、あるいは二倍の軍勢をそろえても難しいだろう。

「『守護竜の門』があり、敵軍は二倍に届かない。もはや勝ったも同然だ」

しかし彼は思慮深かった、とは言えないだろう。過去幾つもの難攻不落を誇った砦や要塞が陥落している。ならばどうしてこのブレントーダ砦だけが例外でいられよう。

そう、「歴史は繰り返される」。

立ち止まっていたカンタルク軍がゆっくりと動き出す。

後の歴史家たちが言うところの、「傾城の一撃」が今まさに放たれようとしていた。

第五話　傾国の一撃　プロローグ（後書き）

つ、次も一週間以内に投稿できるようにがんばります……！

第五話　傾国の一撃？

一人の青年が執務机に向かって書類と格闘していた。年の頃は二十代の半ばといったところか。赤銅色の髪と目をしている。彼の名はランスロー・フォン・ティルニア。ティルニア伯爵家の婿養子であった。

余談ながら貴族にはその階級を示すミドルネーム「フォン」がある。に対し、王族がミドルネームを用いることはほとんどない。国名を冠するその姓こそが、彼らの誇りであった。ちなみにカンタルクの王族のミドルネーム、例えばゲゼル・シャフト・カンタルクの「シャフト」は両親のうち王族でないほうの姓である。

書類仕事でランスローの対応は三つに分かれる。一つ目はただサインをして判子を押すだけ。二つ目は注意点を書き添えて、サインをして判子を押す。三つ目は要再考。これにはサインはしないし判子も押さない。

ランスローは休むことなく書類に目を通し、決済していく。その仕事は素早くも確実で、彼の取り決めは小気味よい。ティルニア伯爵家に婿養子に来てからおよそ五年。もはや彼を「青二才の押しかけ婿」と馬鹿にする者はいない。ランスロー自身としても領地を切り盛りし、領軍を組織する仕事にはやり甲斐を感じていた。

「これも父上のおかげ、か」

ランスローは皮肉っぽく笑った。

ここでいう「父上」とはティルニア伯爵ことミクロージュ・フォン・ティルニアのことではない。実の父であるコステア・フォン・

アポストル公爵のことだ。ランスローは彼の三男坊で、本来ならば受け継ぐべき領地もなく、騎士として身を立てるか学者になるか、最悪なところで穀潰しになるかぐらいしか人生の選択肢はなかった。

「それが婿養子とはいえ領地を受け継ぐことができた。これを幸運と呼ばずして何と呼ぶのか」

とはいえ彼の声音から皮肉の色が消えることはない。

彼がティルニア伯爵家に婿に来ることになったその理由は、ごくごくありふれた政治的なものだった。

ポルトールの王宮中では二つの派閥が互いに凌ぎを削りあっている。一つはエンドレ・フォン・ラディアント公爵を筆頭とする軍閥貴族の派閥で、この派閥は国の南部に勢力を持っている。そしてもう一つがランスローの父であるコステア・フォン・アポストル公爵を中心とした文民貴族の派閥で、こちらは国の北部に勢力を持っていた。

事態を極大化してみればラディアント公とアポストル公の対立なわけだが、現在はアポストル公の側に軍配が上がっている。シミオン第一王子の妃であるミラベルが彼の妹だからだ。すでに第一子であるマルト・ポルトール王子（厳密には違うが面倒なので王子と称する）も生まれており、その地盤は磐石だ。ラディアント公は第二王子であるラザール王子を担いでいるが、第一位王位継承者の血縁者であるアポストル公とはどうしても一歩及ばないところがある。

政治の主導権を握ったアポストル公が円滑な政を行うために打った手が、すなわち自身の三男ランスローのティルニア伯爵家への婿入りであった。

ティルニア伯爵家は代々軍閥貴族であり、元々はラディアント公の派閥に属していた。しかし先々代の当主が大ポカをやらかしたおかげで、派閥内では肩身が狭くなり、また政治の中枢からも遠ざかっていた。領地を召し上げられた訳ではないので、経済的に困窮しているということはないが、ティルニア伯としてみれば面白いわけがない。領地に押し込められて無聊を囲っている、と感じても無理からぬことであろう。

「そこに目をつけたのが、我が父上アポストル公だったわけだ」

アポストル公のような大貴族からの縁談話に、ティルニア伯は狂喜乱舞した。もとよりティルニア伯爵家は派閥内では肩身が狭くなっているし、他の軍閥貴族たちとも疎遠になっている。相手が敵対派閥の筆頭格とはいえ、表立って反対してくる者はいないであろう。なによりも伯爵家が再び表舞台に上がるためには、この話を受けるほかないように思われた。

アポストル公の狙いは様々にある。

ティルニア伯爵家は代々の軍閥貴族。疎遠になっているとはいえ、他の軍閥貴族たちとの良いパイプ役になるだろう。これによって派閥同士の摩擦が減り、円滑な政が行えるとこをアポストル公は期待していた。

とはいえこの期待は外れてもよい。ティルニア伯を引き込めれば、その分だけラディアント公の派閥は弱体化し、自分の派閥は強力になる。それだけでも十分に意味のあることといえる。

また婿にやるのは彼自身の三男である。であるならばティルニア

伯爵家はもはや彼のものになったも同然ではないか。

「なんともまあ見事なまでの政略結婚じゃないか」

こうして自分がティルニアの姓を名乗るに至る経緯を眺めてみると、ランスローとしてはどうしても皮肉な思いを禁じえなかった。

「別に恋愛結婚がしたかったわけじゃないが……」

彼とてアポストル公爵家の端くれである。結婚に対しそんな甘い幻想を抱くはずもない。ただ実際の当事者であるはずの自分たちが、父たちにとっては完全に道具でしかないことがあまりにも滑稽なだけだ。

「まあいい」

望んでもいない状況に置かれてしまうのは、万人に共通の悩みだろう。人は己の生まれを選べないのだから。

「私は幸運だ。そう思うことにしよう」

細かい感情と事情は四捨五入してそう結論を下す。と、その時……。

――――コンコン。

執務室の扉を誰かが控えめにノックした。

「失礼します、ランスロー様」

少しよろしいでしょうか、といって部屋に入ってきたのは妙齢の女性だった。白いブラウスと青いスカートを着込み、プラチナブロンドの細毛を背中の半ば辺りまで伸ばして楚々とたたずんでいる。

（二つ目の幸運……）

愛おしい人の姿を認め、ランスローは心の中でそう呟いた。

「？何かおっしゃいましたか、ランスロー様」

「いや、なんでもない。それよりどうした、カルティエ」

女性の名はカルティエ・フォン・ティルニア。ミクロージュの一人娘にしてランスローの伴侶その人である。

「小耳に挟んだのですが、まもなくカンタルク軍との戦端が開かれる、というのは本当でしょうか」

カルティエは心配そうにそう尋ねた。

かりにカンタルクとの全面戦争になれば、軍閥貴族たるティルニア家も兵を出すことになるだろう。その時領軍を率いて陣頭に立つのはランスローだ。

ティルニア伯爵家当主たるミクロージュはランスローが婿に来てからの五年間、王宮中での工作に日夜走り回っており、領地には年に数えるほどしか帰ってこない。その間領地の管理と領軍の訓練はもっぱらランスローが行っており、つまり有事の際にティルニア軍を率いることができるのは彼だけなのだ。

そのことはカルティエも十分に理解していた。だからこそ、ともすれば夫が戦場に赴かなければならないこの状況が心配なのだろう。

「すでにシミオン王子がブレントーダ砦に向かわれた。私の出番はないさ」

戦いが長引けばその限りではないが、そのことはあえて無視しランスローは妻を安心させた。

「だと、よいのですが……」

カルティエはまだ心配そうだ。そんな彼女をランスローは優しく抱き寄せた。

「ブレントーダ砦には『守護竜の門』がある。きっと大丈夫だ」

これまで幾度もカンタルク軍の侵攻を防いできた魔道具「守護竜の門」には、ひとつの言い伝えがある。それはこの魔道具が、かの伝説の魔道具職人アバサ・ロットの作だというものだ。考案者の名前が正確に残っていないという現状が、皮肉なことにこの言い伝えに信憑性を持たせ、国民の間に一種信仰じみた確信を生み出していた。

ただランスロー自身は「守護竜の門」を過大評価してはいなかった。完全無欠で絶対無敵の魔道具など、彼は信じていない。

しかし「守護竜の門」の名前はカルティエを安心させる効果はあったようだ。ようやく笑顔を見せてくれた彼女に、ランスローも安心する。

「今日は仕事も少ない。午後からは遠乗りでもしようか」

ランスローがそういうと、カルティエの表情がパッと華やいだ。その清楚で可憐な外見に反して、実は彼女は活動的で屋敷の内よりは外を好む気性であった。

「素敵です。お弁当を用意しておきますわ」

ランスローから身を離し、約束ですよ?と念を押してから、カルティエは足取りも軽く執務室を後にした。

執務室で再び一人になったランスローは苦笑をもらす。思いがけず入れてしまったデートの予定。あれだけ喜んでくれたのだ。まさか反故にするわけにもいかない。

「さて、仕事仕事」

約束を守るため、ランスローはいつもより多い書類の山に取り掛かるのであった。

第五話　傾国の一撃？　（後書き）

感想、お待ちしています。

第五話　傾国の一撃？

「あれがブレントーダ砦……」

無意識のうちにアズリアは白銀の魔弓「夜空を切り裂く箒星（ミーティア）」に触れていた。

その砦において最も目を引くのは、間違いなくその城門だ。左右に向かい合うように描かれた竜と、その竜がもつ巨大な宝珠は遠くからでも確認することができた。

「そうだ。そして我が国にとって文字通りの“鬼門”でもある」

カンタルク軍を率いる大将軍ウォーゲン・グリフォードはほとんど唸るようにしてそう言った。カンタルクにおいて最も長い軍歴を誇る彼は、最も多くこの砦に挑み、そして同じ数だけの敗走を経験している。さらに言うならば、最も多くの戦友をこの地で失っているのも彼に他ならない。

「守護竜たちよ、今日こそはその宝珠、砕かせてもらうぞ」

老将軍はそう静かに宣言した。

カンタルクの貴族たちが好んで使うよう「忌々しい」とか「血に餓えた」とかいう枕詞を、ウォーゲンは使わなかった。戦争で血が流れるのは始まる前から分っていることで、自軍が流した血を敵のせいにするのは愚かなことだと彼は思っている。血を流したくなければ戦争などしなければよい。まして自分から仕掛けた戦争の責任を相手に押し付けるなど、言語道断である。

（そういう意味では、あの魔道具はよくできている）

戦争をすれば必ず血は流れる。ならば自軍の損耗を最小限に抑えたいと願うのは、ヒトとして当然の性だろう。その果てに生み出されたのがあの魔道具「守護竜の門」であると考えれば、数限りなく煮え湯を飲まされてきたウォーゲンであっても、道具そのものを憎む境地にはなれなかった。むしろ敬意さえ覚える。

とはいえ、今の彼はカンタルク軍の総司令官である。向かい合う二匹の守護竜が持つ宝珠を砕かないことには、カンタルク軍はまたもやこの地で大量の血を流すことになる。ポルトールが自国を守るために「守護竜の門」を作ったのであれば、ウォーゲンは配下の兵を生きて祖国に帰すためこれを砕かねばならない。

そのための手段を、彼は用意している。

「アズリアよ、調子はどうじゃ」

これが初陣となる自分の副官にウォーゲンは声をかけた。

「……やるべきことをやるまでです」

その声からは緊張が窺える。だがそれだけだ。恐れはなく気負いも少ない、良い状態だといえる。こういう時、人はいい働きができるものだ。

「そうか。期待しておる」

そう言ってウォーゲンは砦に視線を戻した。さて、と呟き大きく深呼吸をする。

「全軍前進。ただし近寄りすぎるなよ」

ウォーゲンが手を掲げると、カンタルク軍がゆっくりと動き始める。アズリア・クリークの初陣が始まろうとしていた。

カンタルク軍の動きに、シミオンは眉をひそめた。

「あやつら、あんなところで立ち止まってどうするつもりだ……？」

動き出したかと思ったカンタルク軍は、砦の前の平原で再び足を止めている。あの位置では砦から矢を射掛けてもカンタルク軍には届かない。当然のことながらカンタルク軍の攻撃も届かない。あの場所でとまった敵軍の意図を、シミオンは図りかねた。

（こちらから軍を出し、おびき寄せてみるか……？）

まさにシミオンがそう考えた瞬間のことであった。一筋の閃光が飛来し、右竜の宝珠を破壊したのは。

後に言われるところの「傾城の一撃」。この一撃で戦いの趨勢が決まったといっていい。

その一撃を放った途端、アズリアは言いようのない虚脱感に襲われた。まるで貧血でも起こしたかのように、体には力が入らず肺と喉は空気を求めて喘いだ。

（それでも……）

それでも彼女の放った一撃は、絶大な効果を及ぼした。白銀の魔弓「夜空を切り裂く箒星（ミーティア）」とその専用の矢である「流れ星の欠片」は、所有者たるアズリアの魔力を喰い尽くしその威を存分に発揮したのだ。

放たれた閃光は右竜の宝珠を打ち砕き、さらには厚さ十センチの銅の城門にこぶし大の穴を開けて貫通し、その内側に破壊を及ぼした。

――――オオオオオオオオオオオオ！！！！！

味方から、地を震わすかのような歓声が沸きあがった。古参の兵の中には、泣いている者さえいた。

一番心に迫るものを感じているのは、最も長い軍歴を持つウォーゲンだろう。しかし彼がそれを表に出すことはなかった。一切の感情を感じさせない冷たい目で砦を睨みつけたまま、彼は自分の副官に命じた。

「アズリア、第二射急げ。奴らを立ち直らせてはいかん」

「……はいっ！！」

大きな声を出し、自らを奮い立たせる。手にした白銀の魔弓に再び銀色の矢をつがえ魔力を込め、そして込められた魔力は「流れ星の欠片」へと収束していく。その間アズリアは全身から魔力をしぼり取られていく、その暴力的とさえ思える虚脱感に耐えていた。

（まだだ……！まだ、足りない……！）

歯を食いしばり四肢になけなしの力を込めなんとか姿勢を維持する。

その横で、ウォーゲンが眉をひそめた。左竜の宝珠が輝きを放ち、その守護結界が発動したのだ。その動きからはブレントーダ砦の焦りが感じられた。

今までの例を考えれば、守護竜の結界は軍隊に対して用いられるものだ。なのに軍が動いていないにもかかわらず、砦は結界を発動させた。稼働時間には限界があるのだから、先に発動させては意味がない。消えるのを待ってから軍を動かせばよいのだから。

とはいえこのタイミングで結界を発動させた砦側の思惑も理解できる。なんとかして右竜の宝珠を砕いた一撃を防ぎたいのだろう。

結界が展開されたのはアズリアとて目にしている。しかし彼女は魔力を込めることを止めようとはしなかった。

（今更止められるか……！）

かりに止めてしまえば込めた魔力は霧散し、後に残るのはこの耐え難い虚脱感だけである。さらに言うならば、ただでさえ一日に三発までしか打てない、その内の一発を無駄にすることになる。

「一日に使えるのは三本まで。それ以上使ったら命の保障はしない」

この魔弓と矢をアズリアに与えたアバサ・ロットことイスト・ヴァーレの言葉だ。その言葉がまさしく正しいものであると、今彼女は実感していた。

白銀の魔弓につがえられた矢が一際大きな輝きを放ったその瞬間……。

「！！」

第二射が放たれた。放たれた二射目はすでに展開されていた結界を、まるで紙切れか何かの如くに突き破り、再び銅の城門にこぶし大の穴を開けた。

――――ピィキィィィイイインンン……。

戦場にまるで鈴の音のようなものが響いた。それが守護竜の結界の破られた音であることを理解するまでに、その場にいる人々は数瞬を要した。いまだかつてこの戦場において響き渡ったことのない音を彼らは耳にしたのだ。その音はポルトール軍には絶望を、カンタルク軍にはさらなる歓喜をもたらした。

――――オオオオオオオオオオオ！！！！！

再び大地を揺るがして歓声が上がった。しかし最大の功労者であるはずのアズリアには、喜びに浸るほどの余裕はなかった。

（くっ、外した……）

結界に当たったことで狙いがそれたのか、左竜の宝珠は無事だ。

体に力が入らなかった。四つん這いになっているが、それさえも辛い。いっそ完全に倒れてしまわないのが自分でも不思議だった。激しい運動をしたわけでもないのに、呼吸が乱れどれだけ空気を吸っても楽にならない。春先の、ともすれば汗ばむような陽気にも関わらず、全身が冷たく寒気がした。

「アズリア、大丈夫か！？」

一人の男が慌てて駆け寄り、彼女の青白い顔を覗きこむ。彼の名はウィクリフ・フォン・ハバナ。ウォーゲンの副官の一人で、アズリアにしてみれば先輩に当たる。そのミドルネームが示すとおり彼は貴族の血筋だが、それを感じさせない気さくな人柄でアズリアも仕事を教えてもらったりと良くしてもらっていた。

「大将軍、これ以上は無理です！左竜の宝珠は明日にしてください！」

アズリアの体を気遣い、ウィクリフがそう進言する。しかし……。

「……大丈夫……です……。できます……」

ウォーゲンが何か言う前に、アズリアは立ち上がりそういった。そんな彼女をウィクリフは慌てた様子で制止する。

「無茶だ！止すんだ、アズリア！」

「左竜の宝珠は今砕かなければ意味がありません。それは先輩も承知しているはずです」

「だが……！！」

かりに二つの宝珠が砕かれ、あの城門が魔道具「守護竜の門」として機能しなくなっても、銅の城門そのものは健在でありブレントーダ砦が強固な砦であることも変わらない。さらには十万近い兵が詰めているのだ。「守護竜の門」がなくなったからといって楽に落とせる砦では決してない。

「明日になれば敵の士気は回復します。落とすのであれば今しかありません」

目の前で宝珠の一つが砕かれ、さらには結界そのものまでも破られて敵軍の士気はもはや最低にまで下がっている。今こそが、ブレントーダ砦を落とすための千載一遇の好機なのだ。そしてその好機をより確実なものにするためには、なんとしてももう一つの宝珠を砕かなければならない。

「アズリア」
「はい」

ウォーゲンが青い顔をした自分の副官を見据える。

「存分にやれ」
「……はい！」

ウォーゲンの言葉に背中を押され、アズリアは三度「夜空（ミー）を切り裂く（ティア）箒星」を構えた。ウィクリフが何か言っているようだが、もはや聞くだけの余裕もない。力の入らない四肢で必死に踏ん張り、魔弓の弦を引き魔力を込めた。

「ぐぅ……」

凄まじい倦怠感が全身を襲う。いや、もはや倦怠感を通り越し痛い。全身をねじ切られるかのような錯覚に陥ってしまう。

頭が痛い。吐き気がする。膝が笑い、平衡感覚さえなくなってきた。その全てに歯をくいしばって耐え、魔力を注ぎつづける。

――――血涙が、流れた。

「……アアアアアアアアアアアアアア！！」

もはや空っぽのはずの魔力を、声を上げて無理やりしぼり出す。

その瞬間、「流れ星の欠片」が一際大きな光を放つ。

放たれた閃光はもはや遮るもののない空を駆け抜け、左竜の宝珠を正確に射抜いた。

三度、大地を揺るがす歓声が上がった。

（やった……）

その歓声を意識の遠くで聞き、ささやかな満足を感じながらアズリアは意識を手放した。

第五話　傾国の一撃？（後書き）

「アバサ・ロットは歴史の表舞台には出てこない。しかし彼の作った魔道具はいつの時代も歴史を創り、あるいは変える」

これはこの作品「乱世を往く！」の基本コンセプトの一つです。

今回は、この基本コンセプトを話しにしてみました。如何だったでしょうか？

新月としてはなかなか満足しているのですが、物足りなく感じる方もおられるかも知れませんね。

そういう方、悪くありません。悪いのは文才のない新月です。

なんとか話を盛り上げようとはしているのですが、これがなかなか難しい。今後も努力です。

あ、あと感想をいただけると嬉しいです。

第五話　傾国の一撃？

「失礼します、クロノワ閣下。アルテンシア半島の情勢について、新しい情報が入りました」

報告してもよろしいでしょうか、と主席秘書官のフィリオは尋ねた。彼はいつも温厚でその声からも常に余裕が感じられるのだが、このときは少々いつもとは違っていた。それだけで彼の持ってきた情報が、重大なものであることがリリーゼにも想像できた。

「聞かせてください」

クロノワの声にも少し硬いものが混じる。手に持ったティーカップは、結局口をつけることなくそのまま受け皿に戻す。

アルジャーク帝国モントルム領旧王都オルスクの本日の天気はまさに小春日和で、日差しが燦々と降り注ぐこの総督執務室を十分に暖めている。にもかかわらず、リリーゼは室内の温度が下がったかのような錯覚を覚えた。

では、と前置きしてからフィリオが報告を始めた。

「結論から申し上げますと、シーヴァ・オズワルドがアルテンシア半島の北側を切り取りました。詳しい規模は分りませんが、恐らくはその版図九十州以上かと」

その報告を聞いてリリーゼは殴られたような衝撃を受けた。クロノワも視線が鋭くなっている。

アルテンシア同盟がロム・バオアに造った大要塞、パルスブルグ要塞の司令であるシーヴァ・オズワルドが同盟に対して反旗を翻した、という情報はすでにモントルム総督府でもつかんでいた。ただ彼が軍をもよおしたのはどんなに早くても今年の二月ごろだったはずだ。逆算するに二ヶ月たらずで九十州以上の版図を切り取ったことになる。

「速い。速すぎる」

一度遠征を経験したことのあるクロノワはその速度の異常性を正しく理解している。加えてあのアルテンシア半島だ。

「一体幾つの城や砦を落としたことやら」

アルテンシア同盟は領主たちの集合体だ。例えば一人の領主が三州ずつの領地を持っているとすると、九十州を切り取るには三十人の領主を相手にしなければならず、単純に考えれば最低でも三十個の城を落とさなければならない。実際には野戦で決着をつけた戦いもあるのだろうが、それにしてもたったの二ヶ月で成し遂げたというのであれば、驚愕を通り越して呆れるばかりだ。

「どうやら領主たちは領民に見放されたようです」

フィリオの話によると、シーヴァが侵攻をしかけるのと時期を同じくして各地で民衆の決起が相次いだのだという。

「なるほど。アルテンシア同盟は腐っているという話でしたからね」

クロノワは一応の納得をみせた。

アルテンシア半島における領主たちの腐敗ぶりはクロノワも知っている。そんな状態がいつまでも続くわけがないとは思っていたが、とうとう領民から三行半を突きつけられたというわけだ。

「外と内の両方から崩された、ということですね……」

そういってリリーゼも、うんうんと頷いた。

「閣下、これからシーヴァはどう動くと思われますか」

フィリオにそう問われ、クロノワは少し考え込んだ。

「そうですね……。単純にアルテンシア半島を手に入れたいのであれば、同盟に参加するのが最も手っ取り早いと思います」

「同盟に、ですか……？」

「そうです」

アルテンシア同盟とはすなわち領主たちの集合体だ。同盟内において一人一人の領主たちのパワーバランスを考えた場合、それはその領主が保有している州の数そのものに比例することになる。今までは領主一人につき三～七州で平均化されていて突出した力を持つ者がいなかったため、同盟に参加している領主たちは皆平等でいられた。

「ですがそこに九十州以上の版図を持っているシーヴァが加わったらどうなるでしょう」

当然、シーヴァが同盟内で最も力を持っていることになり、自然と彼が主導権を握るだろう。そうなれば名実共にアルテンシア半島の盟主になれる。

「ですが他の領主たちが参加を認めるでしょうか？」

彼らにしてみればシーヴァは同盟に反旗を翻した裏切り者だ。その裏切り者を再び同盟の枠内に入れることをよしとする者がいるのか、リリーゼは懐疑的だった。

「残った領主たちにしてみればシーヴァが奪った版図なんて所詮人事ですからね。擦り寄って甘い汁を吸おうと考える者がいてもおかしくはありません」

そんなものかと釈然としないものを感じながらも、リリーゼは一応納得した。だが、

「ですが今回シーヴァがその策をとるとは考えられませんね」

フィリオは真っ向からクロノワの意見を否定した。

「今回シーヴァの侵攻がこの短期間にこれだけの成果を上げられたのは、領民の支持があったからです」

そのシーヴァが同盟に参加すると言い出したら、領民たちはどう思うだろうか。

「『彼も他の領主と同じだ』。そう思うでしょうね」

そうなれば今度はシーヴァ自身が領民から三行半を突きつけられることになる。

「住民が期待する『新たな支配者』であるためにも、シーヴァは同盟に参加するわけにはいかない」

フィリオはそう断じた。

「というか閣下も分ってたんじゃないんですか？」

面白そうに詰問するフィリオを、クロノワは肩をすくめてかわした。

「アルテンシア半島のことを、これ以上ここで考えても仕方がありません」

半島とアルジャークはエルヴィヨン大陸の端と端だ。国境を接するほどに、シーヴァと凌ぎを削りあうことはないだろうとクロノワは考えていた。巨大市場としてのアルテンシア半島に興味はあるが、今はそれだけだ。

「情報は引き続き集めるようにしてください」

「分りました」

そういってフィリオは頷いた。シーヴァ・オズワルドに関する話が一段落したところで、クロノワは意識を別の問題に向ける。

「さて、当面の問題はオムージュ領ですね……」

そうクロノワがいうと、フィリオも苦い顔をした。

「そうですね……。まったく、レヴィナス様もなにを考えていらっしゃるのか」

「あの……、オムージュ領がどうかしたのですか？」

一人話しについていけないリリーゼは、つい口を挟んでしまった。

「増税、です。いや、増税なんですけど……」

歯切れの悪いフィリオの答えにリリーゼは首をかしげた。増税が実施されたのであれば、それは民衆にとって一大事だ。それが問題なのではないのだろうか。

「問題はその増税を過去にさかのぼって適用したことです」

クロノワが苦い顔で補足した。

例えば今まで三割だった税金が五割に増えたとする。つまり二割の増税だ。ここまではいい。増税は褒められたことではないが、普通の政策だからだ。だがこれを過去五年間にさかのぼって適用したとするとどうだろう。そうなれば民衆は十割、つまり年収分を追加して納めなければならなくなる。

「そんなの払えるわけがないじゃないですか！？」

リリーゼが悲鳴にも似た声を上げた。

「ええ。払えるはずがありません」

「問題はそれだけではありません」

フィリオがクロノワに劣らず苦い声で続ける。

「そもそも法律を過去にさかのぼって適用すること自体が禁じ手です」

これこれの行為は、昨日は合法だったが今日からは違法で、お前は昨日これこれの行為をしたから有罪だ、といわれたらどうだろうか。そんな無茶苦茶な、と思われるだろう。しかしこれが「法律を過去にさかのぼって適用する」ということなのだ。

「そんなことをしたら、法を作る側の恣意的な感情で、特定の個人を合法的に陥れることができてしまいます」

それでは独裁だ。もはや法治主義が成り立たない。アルジャーク帝国は確かに皇帝が絶大な権力を持っているが、それでも法によって体制を維持しているのだ。法治主義が成り立たなくなれば、帝国そのものが立ち行かなくなる。

「兄上がどこまでやるのかは分かりませんが、事と次第によっては皇帝陛下にお話しなければなりませんね」

そんな事態にならないことを祈るばかりだ。

「ひとまずモントルム総督府として、不測の事態に備えておきましょう」

「分りました」

クロノワの言葉にフィリオが頷く。直接の関係者ではないため、できることは少ないだろうが、それでも「備え有れば憂い無し」だ。難民などの受け入れ態勢を整えておくだけでも、混乱を抑えることができるだろう。

「そういえば閣下は五月の下旬ごろにオムージュ領に行かれるんですよね？」

「ええ。兄上とアーデルハイト姫の結婚式に招待されていますので」

本来であれば帝都ケーヒンスブルグで行えばよいのだが、レヴィナスの強い希望によってオムージュの旧王都ベルーカで式を挙げることになった。

「気に入った建物でもあったのだろう」
というのが目下一致した見解である。

「その時にレヴィナス様と直接お話されてはいかがでしょうか」
「さて、その機会があればよいのですが……」

結婚式の招待状が送られてきたと言うことは、クロノワはレヴィナスの中で一定の評価を受けたということになる。ただそれでも下から数えたほうが断然速いくらいの順位だろうと、クロノワは思っていた。果たして自分が言ったところであの兄が聞くかどうか、不安なところがある。

「そこをなんとか。オムージュ領が混乱すればこのモントルム領も巻き込まれます」
「……努力はしてみます」

クロノワは力なく答え、冷めた紅茶を啜るのであった。

第五話　傾国の一撃？（後書き）

感想お待ちしております。

第五話　傾国の一撃？

実の父であるコステア・フォン・アポストル公爵の名で送られてきた手紙の内容は、にわかには信じがたいものであった。

ブレントーダ砦が落ちた。しかもシミオン王子が戦死されたという。

その手紙を読んだとき、ランスローはさすがに内容を疑った。しかし手紙に押されている紋は、確かにアポストル公爵家のもので、その筆跡も父コステアのものだ。あの父親にユーモアのセンスがないとは言わないが、それにしてもこの状況でこんなウソをつく必要などどこにもない。それどころか危険でさえあるだろう。

「だとすれば……、まさか、本当に……？」

ジワリ、と嫌な緊張が体を支配する。

砦を落としたカンタルク軍の動向は？派閥のパワーバランスはどうなる？この国は一致して外敵に立ち向かえるのか？様々な懸念が頭の中を駆け巡る。

「くそっ！」

一つ悪態をついて無理やり頭を切り替える。手紙を読み進むと、すぐに領軍を率いて王都アムネスティアに来るように、との指示があった。

落ち着け、と自分に言い聞かせる。なんにせよ情報が少なすぎる。今この場で性急に判断を下さないほうがいい。全ては王都アムネスティアで父たちに会ってからだ。

しかしこうなると国王であるザルゼス・ポルトール陛下が、病床に臥せっているとはいえ存命であることは不幸中の幸いであるように思われる。後継者を巡る派閥同士のイザコザも陛下の鶴の声によって解決する。

ふう、と息をつき動揺をひとまず自身の体の中に押さえ込む。それからランスローは執務机の端っこに用意してある二つのベルのうち、片方を鳴らした。

「お呼びでしょうか、ランスロー様」

すぐにティルニア家の執事であるテオドールが現れた。初老の男性で頭にはすでに半分以上白くなっているが、腰はまっすぐに伸びており声にも張りがある。

「テオドール、イエルガ将軍を呼んできてもらえるか」

イエルガ・フォン・シーザスはティルニア軍の将軍である。大まかな指示はランスローが出しているが、実際に軍を動かしているのは彼だ。ミドルネームが示すとおり貴族であるが、彼の家系は治めるべき領地を持っていない。

「かしこまりました。すぐに」

「ああ、それとカルティエは今どうしている？」

一礼して執務室を出ようとするテオドールに、ランスローは妻の

ことを聞いた。王都に行くことになればしばらく家を空けることになる。一声かけておいたほうがいいだろう。

（あまり気は進まないが……）

観光に行くわけではないし、それどころか権力闘争の真っ只中に飛び込んでいくのだ。心配をかけるに決まっている。

「お嬢様でしたら庭にいらっしゃるはずです。お呼びしましょうか？」

子どものころからカルティエのことを見守ってきた初老の執事は彼女のことを「お嬢様」と呼ぶ。カルティエ自身は止めるように言っているらしいのだが、現状改める気はないらしい。

「いや、いい。後でこちらから出向くことにする」

承知しました、とテオドールはもう一度腰を折ってから部屋を出た。

一人になったランスローは思考を巡らせていた。

（さて、どれほどの兵を連れて行くべきか……）

父であるアポストル公の派閥は文官の貴族が中心である。それぞれが領地に軍を持っているとはいえ、生粋の軍閥貴族が集まっているラディアント公の派閥と比べればその戦力差は如何ともしがたい。アポストル公としてはランスローが連れて行く兵をアテにしたいところだろう。とすれば兵の数は多いほうが良いのだろうが……。

（あまりに多くの兵を連れて行ってラディアント公を刺激するのは

良くないな）

自分が原因で武力衝突が起きるなどという事態は、なんとしても避けなければならない。それに兵力をアテにされて権力闘争に巻き込まれなくない、というランスロー個人の願望もある。

（あと注意すべき点は……）

時間であろう。のんびりと構えている時間は当然ない。可能な限り速やかに王都アムネスティアに向かわなければならない。

さらに頭の中でグルグルと思考を巡らせていると、執務室の扉がノックされた。

「お呼びでしょうか、ランスロー様」

視線を上げると、腰に剣をさした一人の男が立っていた。その眼光は鋭く、彼が生粋の武人であることを如実に物語っている。

「急に呼び出してすまない、イエルガ」

ランスローが事情を説明すると、目の前の武人の表情は見る見るうちに険しいものへと変わっていった。

「ブレントーダ砦が落ち、しかもシミオン王子が戦死されたとは……、にわかには信じられませんな……」

「とはいえ父上がこのようなウソをつくとは考えられないし、事実なのだろう」

そういうランスロー自身、やはり心のどこかでは信じ切れていな

い。それほどまでにポルトールの国民は「守護竜の門」を信頼していた。イエルガの困惑も当然であろう。

「父上から軍を率いて王都に来るよう要請を受けた」

そう告げると、イエルガはひとまず困惑を自分の中に収めてくれた。

「数は二千。兵の選抜は貴方に一任するが、全て騎兵にするように。準備にどのくらい時間がかかる？」

「三日ほどあれば」

「二日で終わらせてほしい」

「了解しました」

その後細かい内容を話し合ってから、イエルガは執務室を後にした。再び一人になったランスローは一つ息をつき、そして気を引き締め直す。

「さて、もう一仕事」

どう考えても、これが一番大きな仕事のように思われるのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「お仕事はもうよろしいのですか」

庭に設けられた石造りの東屋にいたカルティエは、ランスローの姿を認め嬉しそうに微笑んだ。ランスローが勧められるままにカルティエの隣に座ると、彼女は手ずからお茶を淹れて差し出した。

（話したくないなぁ……）

差し出されたお茶を飲みながら、ランスローは心の中で弱音を漏らした。

とはいえ二日後には王都アムネスティアへ向けて出立しなければならない。ここで隠しておいたところで、バレてしまうのは時間の問題だ。ならば今のうちに自分の口からきちんと説明しておきたい。

「カルティエ、大切な話がある」

「大切なお話？何でしょうか？」

カルティエはそういってティーカップを机の上に戻すと、ランスローのほうに体を向けた。

「ブレントーダ砦が落ちた。シミオン王子も戦死されたらしい」

そう告げた瞬間、カルティエは大きく目を見開き、その顔から一切の表情が抜け落ちた。それから徐々に表情が険しくなっていき、口元を手で隠した。

「父上から軍を連れて王都に来るよう、手紙で指示を受けた。二日後には出立するつもりだ」

「……ではランスロー様は、カンタルク軍と戦われるのですか……？」

カルティエはランスローに体を寄せながら、震える声で尋ねた。そんな妻をランスローは抱き寄せた。

「着いてすぐに戦いになることはないと思う」

ポルトール軍がその全力を挙げてカンタルク軍に立ち向かうため

に兵を集めるのであれば、あの手紙はアポストル公の名前ではなく国王陛下の名前で署名がされていなければならない。そうでなかったということは、父であるアポストル公が期待しているのは派閥抗争における威圧力、ラディアント公に対抗するための武力のはずだ。

「この状況で内戦を起こすほど、父上もラディアント公も愚かではないさ」

そう言ってみても、まだカルティエの表情は硬い。

「ですが、いずれは戦場に立たれることも……！」

「ああ、十分に有り得る」

その可能性をランスローは否定しなかった。否定してみたところでカルティエが信じるはずもないし、なによりこの場限りのウソで妻を欺くようなことをランスローはしたくなかった。

少しの間、沈黙が流れる。抱き寄せたカルティエの温かさが今は胸に痛い。

「……わたくしも、貴族の家柄。……覚悟は、できております」

下から覗き込むようにカルティエが顔を上げる。その表情は幾分柔らかくなっていた。

「ですが、今夜は一人にしないでくださいね？」

第五話　傾国の一撃？（後書き）

感想お待ちしています

第五話　傾国の一撃？

目が覚めると、そこには味も素っ気もない天井があった。

（味や素っ気のある天井も嫌だけど……）

背中から伝わる感触は、自分が寝ているのが硬い地面の上ではなく、普通のベッドであることを教えてくれた。

（ということは、ここはブレントーダ砦の中か……）

体を起こし、辺りを見渡す。アズリアが眠っていたのは、石造りの簡素な部屋だった。ベッドのほかにはタンスと小さな机しかない。ベッドの隣に置かれたその机の上に、白銀の魔弓「夜空（ミーテ）を切り裂く箒星（イア）」が矢筒と共に置かれている。どうやら捕虜になったという可能性は排除してよさそうだ。

（どうやらブレントーダ砦は落とせたらしい）

そのことに歓喜よりもまず安堵を感じる。今回の遠征でアズリアに明確な役割があるとすれば、それは「守護竜の門」の宝珠を砕くことだ。宝珠を砕き、砦を制圧した以上、この遠征における彼女の仕事の八割は終わったといっていいだろう。後はウォーゲン大将軍の副官としていつもどおり仕事をこなせばよい。

（肩の荷が下りたな……）

それゆえの安堵だ。

「それはそうと、わたしはどれくらい眠っていたんだ？」

二つ目の宝珠を砕き、意識が遠のいたところまでは覚えている。そのまま気絶して、誰かがここまで運んでくれたのだろうが、一体どれほどの時間が経過したのか。

窓の外を確認すると、既に日は傾き始め、空は夕方に向かっている。砦の攻略を始めたのが午前中の日の高いころだったから、眠っていた時間は四・五時間といったところだろうか。

「にしても、矢を三本使っただけでこの有様か。なんとも凶悪な魔道具だな」

専用の矢である「流れ星の欠片」を「夜空（ミーティア）を切り裂く箒星」につがえて魔力を込めたときの、あの全身をねじ切られるかのような暴力的な感覚を思い出し、アズリアは思わず苦笑をもらした。以前試し撃ちをしたときからある程度覚悟はしていたが、いやはやそれ以上だった。

「一日に使えるのは三本まで。それ以上使ったら命の保障はしない」

そう語ったイスト・ヴァーレの言葉は正しかったわけだが、もう少し安全な魔道具を作って欲しいと思うのは、決して我儘ではないはずだ。

「まあそれでも、感謝しなければなんだろうな……」

白銀の魔弓の表面を指でなぞるようにして撫でる。この「夜空（ミ）を切り裂く（ーティア）箒星」はアズリアにとって間違いなく一番の宝物である。

あるいは魔導士としての性かもしれないが、己の分身のように感じることさえあった。

自分のこの魔弓をめぐり合わせてくれたこと。弟であるフロイトロースを歩けるようにしてくれたこと。イストには色々と感謝しなければならないと思うのだが、あの「無煙」を吹かしている姿を思い出すと素直に感謝する気になれないのもまた事実であった。

（しかもそのことに罪悪感を覚えないし……）

その原因はもっぱらイストの側にあるだろう。と、アズリアがそんなことを考えていたその時。

――――コンコン。

誰かが、部屋の扉をノックした。

「あ、はい。起きてます」

扉を開けて入ってきたのは、ウィクリフ・フォン・ハバナであった。アズリアと同じくウォーゲン大将軍の副官で、先輩に当たる人物だ。

「気がついたか、アズリア」

ベッドの上で身を起こしているアズリアの姿を認め、ウィクリフは安堵したように息を吐いた。が、すぐに眉間にしわを寄せて厳しい顔をつくる。

「まったく、いきなり倒れやがって。心配したんだぞ」

「すみません、先輩。反省しています」
「そうだ。心から反省しろ」

腕を組み、ウィクリフは偉そうにのたまった。だがすぐに吹き出して自分で笑ってしまった。つられてアズリアも笑う。

「ま、体の調子もよさそうだし、なによりだ」
「ご心配をおかけしました」

アズリアがもう一度謝ると、ウィクリフは気にするなと言わんばかりに手をひらひらと振った。

「にしても、とんでもない魔道具だな、その魔弓は」

ウィクリフの視線が「夜空を切り裂く箒星（ミーティア）」に移る。軽いその口調とは裏腹に、彼の目は剣呑だった。

「たった三発ぶっ放しただけで三日も寝込むなんて、まともな魔道具じゃないな」

まさか一発につき一日寝込むとかそんなんじゃないよな、と彼は軽口を叩いた。しかし、あいにくとアズリアは彼の軽口には付き合えなかった。

「……先輩。今、なんと？」
「いや、だからこいつはまともな魔道具じゃないって……」
「その前！その前に何て言いました！？」

珍しく取り乱すアズリアを押さえるようにしながら、ウィクリフはその台詞を繰り返した。

「たった三発ぶっ放しただけで三日も寝込むなんて、って言ったんだが……」

どうやら聞き間違いではなかったらしいその言葉に、アズリアは呆然とした。

「三日も……、寝込んで……いた……？」

なんという失態だろう。砦を落とした後もろもろの雑事が山のようにあることは、これが初陣であるアズリアでも容易に想像できる。大将軍の副官という立場上、本来ならば忙しく働かなければならないその間中、自分はずっと呑気に寝ていたというのか。

「ま、まあ、気にするな。殺人的に忙しかったけど、お前が頑張ってくれなきゃ、そもそもこの砦落とせなかったんだから」

すっかり小さくなってしまったアズリアに慌ててウィクリフはそう声をかけた。しかし「殺人的に忙しかった」と言われたアズリアはさらに小さくなってしまう。そんな後輩の様子を見てウィクリフも自分の失言を悟って顔を引きつらせ、かけるべき言葉を求めて目をさまよわせた。

「本当に……ご迷惑おかけしました……」

消え入りそうな声でアズリアが謝る。

「ああ、うんまあ、なんだ、気にするな」

うまい言葉が見つからず、結局ウィクリフは当たり障りのない言葉を選んだ。もちろんそんな言葉でアズリアを慰められるわけもなく、二人の間には沈黙が漂い部屋の空気は加速度的に重くなってい

った。

「だ、だからそこでだな！ここ三日のことをかいつまんで説明してやろうと、こう思ったわけだ！」

その空気を打ち破るようにしてウィクリフが声を上げた。ただ、半ばヤケクソ気味だったことは否めない。

「これも仕事のうちだ。ちゃんと聞くように！」

アズリアの生真面目な性分を把握しているウィクリフは、「仕事」という言葉を使うことで彼女の気持ちを軽くした。それが功を奏したのか、部屋の空気が幾分マシになりウィクリフは胸をなで下ろす。

「ま、お茶でも飲みながらにしよう」

「……そうですね」

ウィクリフの軽い調子の提案に、アズリアもつい微笑んでしまう。部屋の雰囲気が随分と明るくなったその時。

――――クゥゥ……。

「あ……」

遠慮のない腹の虫が、可愛らしく自己主張をする。三日間なにも食べていないのだから当然といえば当然だが、このタイミングはあんまりだ。

「お茶じゃなくてメシのほうがいいか」

ウィクリフが努めて軽い調子でそういってくれたのは、はたして救いか追い討ちか。

「……はい……」

真っ赤になったアズリアは頷くことしかできなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それでは、ポルトールのシミオン王子を討ち取ったのですか」

「ああ、そうだ。まあ、あちらはあちらで箔を付けときたかったんだろうな」

ウチの新国王陛下と同じ思惑だったってことさ、とウィクリフは軽い調子で言った。その遠慮のない物言いに、アズリアは思わず辺りを見渡してしまう。この時間、食堂に人気は少ないとはいえまったくの無人ではない。

「人に聞かれますよ……」

小声で嗜めて見てもウィクリフは「かまうもんか」と意に介さない。今回従軍したカンタルク軍の兵士の中で、彼と意見を異にする者はアズリアを含めほとんどいないだろう。ただそれを公言するのはさすがにはばかられる。それを気にしないのはウォーゲンただ一人だと思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

「大将軍に似てきましたね……」

「朱に染まればなんとやら、ってやつさ」

ニヤリ、とウィクリフは笑った。その表情は誇らしげだ。ウォー

ゲン・グリフォードは間違いなく尊敬に値する上官である。部下に対しては公正で、怒鳴りつけたり暴力を振るったりすることはまったくない。外からの、つまり貴族たちからの圧力に屈することはなく、平民出身の兵士たちからの信頼も厚かった。豪快で大雑把な性格が玉にキズのように思われることもあったが、完全無欠の無味無臭な性格よりよほど親しみやすいとアズリアは思っている。

そんな大将軍に似てきたといわれて嫌な気分になるものは、この砦にいるカンタルク軍の中、特に一般の兵士の中には一人もいないだろう。

「それで、ポルトールからなにか接触はあったんですか？」

最後のパンの一欠けらを口に放り込み、ナプキンで口元を拭ってからアズリアは気になっていたことを尋ねた。

「まだ何も。ただ大将軍は『ラザール王子の名前で和平交渉を申し込んでくるだろう』と仰っていた」

「ラザール王子……。確かポルトールの第二王子でしたね……」

ポルトールの国王ザルゼス・ポルトールは病床にあり政を行えず第一王子たるシミオンが戦死した以上、第二王子のラザールが交渉の矢面に立つのは順当な配役だろう。シミオンにはマルト王子という子どもがいるが、こちらはあまりにも幼すぎる。

「大将軍はその交渉を受けるでしょうか……」

「受ける。だが、タダでは受けない」

「……どういうことですか……？」

ウィクリフの言い回しが良く理解できず、アズリアは首をかしげ

た。交渉を受けるにあたって、何か「条件」を付けるということだろうか？だが交渉というのはその「条件」を話し合うものではないのだろうか。

「なに、ウォーゲン・グリフォードの老獪な一手というやつさ」

ウィクリフはこの一手を「老獪な一手」と称したが、後の歴史家たちは彼とは異なる呼び名を与えている。

すなわち、「傾国の一手」と。

第五話　傾国の一撃？（後書き）

今回の話を読まれてもうお気づきの方もいると思いますが、第五話のタイトル「傾国の一撃」は「傾城の一撃」と「傾国の一手」をあわせたものです。

これから先、話の比重としては「傾国の一手」のほうが大きくなります。
その中身については、次の話で明らかにしたいと思います。

第五話　傾国の一撃？

「ザルゼス陛下が崩御された……？」

目の前が真っ暗になるのを、ランスローは自覚した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カルティエに見送られたランスローは、騎兵ばかり二千を率いてポルトトール王都アムネスティアへと駆け上った。王都に着いた彼はイエルガに軍を預けて郊外に残し、自身は数騎の護衛を引き連れてまずはティルニア伯爵邸を目指したのである。

そこで義父であるミクロージュと数ヶ月ぶりに再会したランスローは、挨拶もそこそこに今度は実の父であるアポストル公爵のもとへと向かったのであった。

五年ぶりに再会した父は、随分と老け込んでしまったように見えた。ランスローと同じ色の髪の毛は細くなり、しわの数が増えている。体から溢れる“覇気”は五年前と変わっていないが、老いのせいかどこか狂気じみたものを感じてしまう。

「連れてきたのは騎兵ばかりを二千騎か……」

自分の三男からあらかたの報告を受けたアポストル公は、不満そうな声を隠そうともせずにそう唸った。

「なるべく早くアムネスティアに来たほうが良いと思いまして。ただ準備はさせてありますので、呼び寄せることは可能ですが」

権力闘争に巻き込まれたくない、という極めて個人的な理由はおくびも出さず、ランスローは涼しい顔で答えた。それが聞こえているのかいないのか、アポストル公は眉間にしわを寄せ、難しい顔で考え込んでいる。

「……どうかされましたか？」

父であるアポストル公が“思慮を重ねている”様子はランスローとて何度も見ている。しかし今アポストル公は明らかに“悩んで”いる。父が悩む様子など見たことのなかったランスローは、その姿に不安を感じる。

（つまりそれほどまでに状況は切迫しているのか……？）

彼のその予感は最悪の形で的中することとなる。

「お前はまだ知らないようだから教えておいてやろう」

そういって視線を上げるアポストル公の眼には、やはり狂気が混じっている。そして彼はその重大な事実を告げたのだ。

「ザルゼス陛下が崩御された」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ザルゼス陛下が崩御された……？」

目の前が真っ暗になるのを、ランスローは自覚した。

「シミオン殿下の戦死を聞かれ、心が折れたのだろう。病状が悪化し、そのままお亡くなりになられた」

「まさか、そんな……」

無意識のうちにもれた自分の声でランスローは我に返った。あらゆる動揺と浮かんでは消える思考をひとまず全て自分の中に押し込め、最大の懸案事項を口にした。

「……それで……、王位継承について、何かご遺言は……？」

ほとんど祈るような気持ちでランスローは父であるアポストル公に問いかけた。ラザール王子にしろマルト王子にしろ、ザルゼス陛下が自分の後継者を指名していれば、国を二分する問題を未然に防ぐことができる。しかし彼の期待は裏切られた。

「なにも。遺書が開封されたが、シミオン殿下を喪主に、としか書かれていなかった」

家長の葬儀の際に喪主を務めるのは、その家を継ぎ家長となるものである。であるから、この場合「シミオンを喪主に」と言っているのは、「シミオンを次の王に」と言っているのと同義、ということになる。

しかし、すでにシミオンが戦死している以上、そんな遺言書には何の意味もない。

ランスローは愕然とする一方で、どこか納得するものを感じていた。それは父アポストル公から感じる狂気の、その理由だ。

（マルト王子を玉座に。それを諦められないということか……）

我がことではないにせよ、自嘲に似た想いがこみ上げてくる。あるいは、それはこれから起こるであろう権力闘争に巻き込まれたくないと思いながらも、すでに諦めてしまっている自分に対するものなのかもしれなかった。

「それで、陛下の葬儀の日程は？」

「詳しくは決まっていない。シミオン王子のご遺体が戻られてから合同でおこなわれる」

略式だがな、とアポストル公は続けた。ブレントーダ砦をカンタルク軍に占拠された今の状況では、確かに大掛かりな式を催すことは困難だろう。事態を収束してから改めて正式な葬儀をおこなうのだろう。

「喪主はサントリア侯爵で、ということになっている」

それを聞いてランスローは頷いた。サントリア侯爵という人選はこの状況下では容易に想像できたし、また納得もできるものであった。

サントリア侯爵家は王家の外戚で、王家の外にあってその血筋を保全してきた。ただ政治的権力とは無縁で、代々ポルトール王国の歴史の編纂を家業としている。当然政治的には中立の立場で、それゆえに派閥抗争の調停役として声がかかることが度々あった。

「カンタルク軍への対応はいかがなさるおつもりですか」

ザルゼス国王の葬儀の話が一段落すると、ランスローは急を要することに話を変えた。途端にアポストル公の表情が苦々しく歪む。

その様子を見てランスローはだいたいの事情を察した。すなわちアポストル公の思い通りにはならなかったのだろう、と。

「ラザール殿下を摂政に据え、和平交渉を申し込むことが決まった」

妥当な決定であろう。アポストル公としてはマルト王子を交渉の矢面に立たせたかったはずだが、お飾りであることが明白である以上味方の士気にまで悪影響が及んでしまう。ラザール王子にしても、ラディアント公のお飾りであることに変わりはないのだが、少なくとも彼は成人男性であり体面を保つことはできるだろう。摂政にしたのは王位継承の問題を先延ばしにするためか。

さらに野戦を挑むのではなく和平交渉を申し込むというが、こちらも少し考えればすぐに納得できる。カンタルク軍はポルトールの北側から南下してくるのであり、国の北側に勢力を持っているのはアポストル公を中心とする文官貴族の勢力だ。当然戦は苦手で、仮にカンタルク軍と同数の兵を集めたとしても抗しきれるのか、はなはだ疑問である。であるならば早期に和平交渉をまとめ損害を最小限にしたい、というふうに思考が傾いたのだろう。

また南部に勢力を持つ軍閥貴族たちにしても、ライバルの土地を守るためにわざわざ兵を出し遠征するというのを嫌ったと考えられる。

「ふん！ラディアント公の考えることなど見え透いておるわ」

アポストル公は苦々しく鼻をならした。

ラディアント公の思惑としては、ラザール王子の名で早期に交渉をまとめ上げその功績をもって彼を至高の座つける、といったところだろう。

事態がこのまま進めば、アポストル公にそれを阻む術はない。シミオン王子の義理の兄として権力の座に最も近かったはずが、最後の最後で大逆転負け。狂いたくもなるというものだ。ラディアント公もこの事態に狂っているだろう。ただしそのベクトルの方向は真逆のはずだが。

「何か……、何か手はないものか……」

アポストル公が呻く。そんな父の様子をランスローは冷めた目で見ていた。彼としては今後の方針がきちんと決定し、派閥抗争に巻き込まれずに済みそうなのを歓迎する気持ちのほうが強い。

（どうかこのまま収束に向かって欲しい……）

しかしそんなランスローの願いは、またもや打ち砕かれることになる。

「父上！！」

そう叫んでアポストル公の執務室に飛び込んできたのは、アポストル公爵家の長男でランスローの兄でもある、ライシュ・フォン・アポストルであった。随分と急いで来たらしく肩で息をしているが、その表情からは明らかな喜色が窺える。

兄のその顔を見て嫌な予感にとらわれたのは、どうやらランスロー一人だけのようであった。

「どうした！？なにがあった！？」

アポストル公の声も、さきほどより幾分弾んでいる。

「先程、『共鳴の水鏡』でブレントーダ砦のカンタルク軍から通信が入りまして……」

ライシュは一旦そこで息を整えた。そしてウォーゲン・グリフォードが打ってきた「傾国の一手」を明かしたのだ。

「交渉の相手役としてマルト王子を指名する、と！」

第五話　傾国の一撃？（後書き）

ようやく「傾国の一手」が明らかになりました。

どんな狙いがあるのかはまた次のお話で。お楽しみに。

第五話　傾国の一撃？

「解せないという顔じゃな、アズリアよ」

からかうようなウォーゲンの声で、アズリアは我に返り顔を上げた。その視線の先には面白そうに微笑んでいるウォーゲンがいた。

「仕事も一段落着いた。なんぞ聞きたいことがあるなら言ってみるがよい」

ウォーゲンの声は穏やかだった。部下があれこれとでしゃばったり疑問をさしはさんだりすることを嫌う者もいるが、彼はそういうタイプの上官ではない。むしろ話せる範囲内のことは全て話し、部下たちに明確な目的意識を持たせるのがウォーゲン流だった。それはアズリアも良く知っている。

「ではお聞きしたいのですが……、マルト王子を交渉の相手役に指名することには、どんな意味があるのでしょうか？」

アズリアがそういうとウォーゲンは、ふむ、と呟いて顎の無精ひげを撫でた。

「まず、ポルトールという国の権力構図がどうなっているか、分るか？」

「たしか、貴族たちが二つの派閥に分かれてしのぎを削りあっているとか」

アポストル公を中心とする文官貴族の派閥と、ラディアント公を中心とする軍閥貴族の派閥が対立していることは他国の、しかも大

して政治に興味のないアズリアでも知っている。それほどに有名な話だ。

「そうじゃ。そしてアポストル公はシミオン王子を、ラディアント公はラザール王子をそれぞれ担いでおる」

もっともシミオン王子は既に戦死しているので、アポストル公が今現在担ぎ上げているのは、シミオン王子の嫡子であるマルト王子だ。

「今回、摂政に就任し交渉を申し込んできたのはラザール王子じゃ。つまりラディアント公の派閥が現在優勢、ということじゃろう」

「そこまでは分ります。ですがそこでなぜ……」

なぜ、マルト王子の名前が出てくるのか。

「ラザール王子の名前で交渉を申し込んできたからと言って、実際にかの人がその席に着くことはないじゃろう」

実際に交渉を取り仕切るのはラディアント公であるはずだ。つまりラザール王子の名前を使ったのは、王族という血筋を使って対外的な体面を保つためと、どちらの派閥に主導権があるのかをはっきりさせるためである。

「ラディアント公の思惑としては、交渉をまとめた功績を盾にラザール王子を王座に付ける、といったところじゃな」

「それでなおのことこちらからマルト王子を指名したとしても、相手にされないのではないのでしょうか？」

それに相手に言われて交渉役を変えていては国家の面子に関わる

だろう。「ポルトールの交渉役はカンタルクが決めるのか」と、まともな政治感覚を持っているものならば必ず反対する。

「さよう。普通ならば突っぱねられる」

ウォーゲンもそれを認めた。

「ではなぜ……？」

困惑顔のアズリアを見てウォーゲンはニヤリと笑った。

「さて、ここで問題になるのはアポストル公じゃ」

これまでの派閥抗争で優位に立っていたのは、シミオン王子の義理の兄であるアポストル公だ。それが、シミオン王子が戦死したことで事態が急転する。あれよあれよ言う間にラザール王子が交渉の顔役になり、事態の主導権をラディアント公の派閥に持っていかれてしまった。

国王の義理の兄として絶大な権力を手にするまで後一歩というところだったのに、最後の最後で大逆転負け。面白いはずがない。

「そんなときにマルト王子を交渉役に指名されたら、アポストル公はどう思うかのう？」

「どうって……、分りません」

「『カンタルクがマルト王子を次期国王として認めた』。そう主張することができると、こう考えるのではないかな」

「あ……！」

実際にカンタルクが国家としてマルト王子を次期国王として認めているのか、それ自体は実はどうでもいい。アポストル公にとって

重要なのはそう解釈できる、ということなのだ。そうすればマルト王子を担ぐ派閥として、事態に関与する余地ができる。

その先の思惑は、固有名詞を入れ替えればラディアント公とほぼ同じであろう。すなわち、

「交渉をまとめた功績を盾にマルト王子を王座に付ける」

ということだ。

「ですが、それをラディアント公が認めるでしょうか……？」

「認めるわけがないじゃろうな」

さも当然、といったふうにウォーゲンは答えた。こちらを試すような、それでいてからかうかのような彼の声音に、アズリアは困惑を深める。

「結局のところ、なにが目的なのですか？」

「結局のところ、内戦を起こさせるのが目的じゃ」

ウォーゲンは悪戯を成功させたような、そんな楽しげな調子でそう言った。だが言われた内容は衝撃的だった。ウォーゲンは続ける。

「交渉をまとめた派閥、そこが次の王を決める。それを分っておるから、双方とも決して引くまい」

そうなれば自然と対立は深刻化し激化していく。カンタルク軍の側からそれを煽ってやれればさらに良い。その果てにあるのは武力衝突、すなわち内戦だ。

「内戦が起これば、後はこちらのものじゃ」

互いに潰しあうのを傍観し、残ったほうを叩いて漁夫の利を得るもよし。どちらか一方に肩入れして、新政権に対して影響力を持てるようにしてもよし。内戦を戦っている隙に国境際の土地を切り取ってもよし。無数の選択肢があると言えるだろう。

「ですが、そう思惑通りにいくでしょうか？」

こちらの思惑通りにポルトールが踊ってくれる保障などどこにもない。アポストル公にしろラディアント公にしろ、政に関わっている以上この状況下で内戦を起こすことがどれだけ愚かしいことか、重々承知しているはずだ。

「さそいに乗ってこないならばそれでもよい」

こちらは一言伝えただけで、失うものなど何もない。突っぱねられても普通の交渉を行うだけだ。

「ブレントーダ砦を落とした以上、国境際の五～十州を割譲させるのはそれほど難しくあるまい」

もともとゲゼル・シャフト・カンタルクの虚栄心から始まった遠征だ。勝ったという体裁さえ整えば陛下も満足するだろう、とウォーゲンは考えていた。

さらに言えば交渉自体は決裂してもいい。そうなれば改めて軍を進め、自らの手で土地を切り取ればよいのだから。

「深いお考えあってのことだったのですね……！」

アズリアに尊敬の眼差しで見られ、ウォーゲンは年甲斐もなく恥

ずかしそうにするのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ふむ……」

ポルトールへの遠征に向かっているウォーゲン・グリフォード大将軍から届いた、途中経過の報告書を読んだゲゼル・シャフト・カンタルクは不満そうな声を漏らした。

「大将軍はどういうつもりなのだ？」

報告書には、ブレントーダ砦を落としシミオン王子を討ち取ったこと、その遺体は既に砦の明け渡しを条件に返還したこと、さらにポルトールとの和平交渉に入るつもりだ、ということが書かれていた。

シミオン王子の遺体の返還など、どうでもよい。遺体や首をさらして敵の戦意を挫くという手もあったが、ゲゼル・シャフトは死体には興味がない。だが和平交渉は別だ。砦を落としたということは、今カンタルク軍の目の前に広がっているのは、阻むもののないポルトールの土地だ。なぜ切り取ろうとしないのか。

「こうも早期に交渉を始めるなど、ウォーゲンはなにを考えている？」

ゲゼル・シャフトの視線が報告を持ってきたウォーゲンの副官である、モイジュ・フォン・ハルゲンドに止まった。そのミドルネームが示すとおり貴族の家柄で、そのせいかウォーゲンなどからは「硬い思考をする」と言われている。ただ一般的な話をすれば、彼の

物の考え方は貴族としてはごくごく普通だし、まともであるとも言える。ウォーゲンの影響を受けているウィクリフなどのほうが、貴族の中にあっては異端的であると言えるだろう。

モイジュは、「アポストル公とラディアント公の派閥対立を煽り、激化かつ深刻化させることで内乱を誘発する」というウォーゲンの策略を手短に説明した。

「わざわざラザール王子に摂政という肩書きを与えたことを考えますと、ポルトールの次期王位継承者は未だ正式には決まっていないものと思われます」

モイジュの説明を聞いても、ゲゼル・シャフトは不満そうだった。

「大将軍も迂遠なことをする。もっと直接的に侵攻を図ればよいものを」

「この交渉において、カンタルクが損をすることはありえません。陛下が望まれるだけの成果が得られなければ、大将軍はすぐにでも兵を動かされるでしょう」

ゲゼル・シャフトはまだ不満そうである。そこでモイジュはこの策略におけるウォーゲンの最大の狙いについて語った。

「大将軍がおっしゃるところによると『うまくいけばポルトールを属国化することができる』と……」

「なに？ポルトールを属国にとな」

「はっ」

ゲゼル・シャフトの声の調子が変わった。

仮にポルトールを完全に併合してしまえば、その国土や臣民につ

いて最終的に責任を被るのは国王たるゲゼル・シャフト・カンタルクである。

しかし併合せずに属国としてしまえばどうか。その国土や臣民について責任を持つべきはポルトールの王であり、カンタルクの国王であるゲゼル・シャフトは完全に無責任でいられる。

つまり責任を取ることなく、ポルトールからその富を存分に搾り取ることができるのだ。考えようによっては完全に併合してしまうよりも征服者側にとって都合がよく、また悪質であるとさえ言えるだろう。

「そうできれば確かに最上の結果よな」

ゲゼル・シャフトの声が弾みだした。

因縁の敵国を併合するのではなく属国とする。ポルトールの民は我が奴隷となり、ポルトールの王がこの自分の前に膝をつくのだ。そうなればどちらの国が格上であるか、一目瞭然ではないか。そしてこのゲゼル・シャフト・カンタルクは、国史上初めてポルトールという国を完全に屈服させるのだ。彼らには誇りある滅びすら与えない。

（言わなければ良かったか……？）

ゲゼル・シャフトが己の虚栄心を際限なく肥大化させていく様子を見ながら、モイジュは己の判断の正否を決めかねていた。

ゲゼル・シャフトの様子を見る限りウォーゲンの方針に許可が下りるのはまず間違いない。そういう意味では彼の判断は正しかったといえる。しかし「属国化うんぬん」は最大限うまくいった場合で

あって、そうならない可能性も十分にある。そうなった場合、ゲゼル・シャフトの期待に沿えなかった仕官や兵士たちが、断罪されるようなことにはなるまいか。そうなってしまえば彼の判断は間違っていたことになる。

「大将軍には、このままやるように伝えよ」

興奮が窺える声で、ゲゼル・シャフトはそう勅命を下した。モイジュは短く返答すると、深く頭をたれた。

（こうなってしまっては、もはや私の手には負えぬ……）

無責任かもしれないが、後はウォーゲン・グリフォード大将軍の手腕に期待するだけだ。

「ああ、それと……」

苦い思考にはまりかけていたモイジュを、ゲゼル・シャフトの声が現実に引き戻した。その声は先程よりも幾分冷静になっている。

「大将軍の隷下にある軍のうち、歩兵五万を新兵と入れ替える」

「それは……！！」

言われた内容にモイジュは呆然とした。今回ウォーゲンが率いているのはカンタルク軍の中でも精鋭と呼ばれる兵士ばかりだ。それを新兵と入れ替えるという。訓練を始めて間もない新兵が、精鋭と同じ働きができるわけもないから、兵の数は同じでも実質的には戦力ダウンである。最前線の戦力を増やすどころか減らすとは、一体ゲゼル・シャフトはなにを考えているのか。

「交渉ごとがメインであれば、大将軍も暇であろう。新兵の鍛錬などして時間を潰すがよかろう」

「……承りました。そのようにお伝えいたします」

まさか一副官の身分で国王に意見するわけにもいかない。モイジュは静かに頭をたれた。しかし彼の胸のうちには微かな安心が芽生えていた。

派遣した軍が独立し牙を向くという事態は、為政者にとっては常に想定すべき悪夢である。ウォーゲンの当面の活動は交渉ごとであり、軍を直接動かすことは少ない。であるならば万が一ということも、とゲゼル・シャフトは考えたのだろう。大将軍に限ってそのようなことはありえないとカンタルクの軍人ならば誰もが知っているが、あえてやって見せることで将来同じような事態が起きたときに、前例をもってけん制することも思惑のうちなのだろう。このような判断ができる辺り、ただ虚栄心が強いだけの愚王ではない。

（思ったよりも冷静でおられるようだ……）

このような冷静な判断が下せるということは、仮にポルトールを属国化できなかったとしても、そのことが理由で断罪を受けることはないだろう。モイジュはそう考えるのであった。

第五話　傾国の一撃？（後書き）

腹黒い思惑が好きです。
だから今回は書いていて結構楽しかったですｗｗｗ

第五話　傾国の一撃？（前書き）

主人公、久しぶりの出番です。

第五話　傾国の一撃？

ポルトールの王都アムネスティアに程近い街道沿いの街パートーム。その街にある魔道具工房「ドワーフの穴倉」で、冬の間イストは魔道具製作に励んだ。

風の上を滑るようにして空を駆ける「風渡りの靴」。直径が五十センチほどの戦輪と、それを自在に操るための腕輪をセットにした「戦場を駆ける者（ワルキューレ）」。そして未だに名前が決まっていないあの魔剣。

イストは他にも様々な魔道具を作った。眼を見張るほど素晴らしいものからなぜ作ったのかよくわからないものまで、手当たりしだいに乱造したといっていい。

「よくそんなに次から次へと違う魔道具を考えられますね……」

図らずもこの街で弟子にしたニーナ・ミザリが、感嘆とも呆れともとれない声音でそういった。

「旅の中で理論は完成させておいて、後は作るだけにしてあるからな。この街で頭に捻って理論仕上げたのはあの魔剣だけだし」

弟子になったとはいえ、ニーナは師匠であるイスト手ずから教えを受けているわけではなかった。弟子になったその日のうちに古代文字（エンシェントスペル）で書かれた古い三冊の本をわたされて、

「百回読み通せ」

といわれたのだ。百回というのはさすがに冗談だろうが、出鼻に

本を読んで自習しろと言われ、さすがにニーナも落胆を隠せなかった。

「人から与えられただけの知識に何の価値がある？自分で頭ひねって血肉に染込ませろ」

イストの言葉は厳しい。それでも「解説ぐらいしてくれてもいいのに」と、ニーナが思ったのは当然のことだろう。

とはいえ、ニーナはすぐに解説が基本的に不要であることを知った。手渡された三冊の本は、魔道具製作の知識と技術について基礎の基礎から解説しており、さらに平易な言葉で書かれているので、かつてイストの部屋で睨めっこしていた資料などと比べればはるかに理解しやすい内容であった。

とはいえ書かれている内容の一から十まで、全て理解できているわけではもちろんない。解らない箇所は多々あり、そういったところはイストに聞いてみたのだが、

「とりあえず先に読み進んでみろ。自然と解るようになるから」

と言って彼は取り合ってくれなかった。これに関してはさすがにニーナも半信半疑であったが、二度三度と読み返してみると、本当に理解できるようになっていて驚いた。恐らくだが知識が増えるにしたがって、知識が互いに補完しあい理解が及ぶようになったのだろう。それでも解らないところは、さすがに解説してもらったが。

こうしてニーナはイストが「ドワーフの穴倉」を間借りしている期間、ひたすら渡された書物を読み漁り読みふけっていたわけだが、思えばこの間中弟子らしいことは何もしていなかった。例えばカイ

ゼルとトレイズの師弟のように、世間一般的には弟子は師匠の作業を手伝ったり、様々な雑用を任されたりするものだが、イストはニーナにそういうことを一切言いつけなかった。

「あの……、何か手伝いましょうか……？」

そう遠慮がちに申し出たニーナを、イストは「馬鹿野郎！」と叱り飛ばした。

「弟子は師匠を踏み台にしてのし上ればいいんだよ！」

「師匠……！」

「まあそう簡単に踏み台になってやる気はないけどな」

「師匠……」

同じ台詞でもイントネーションが明らかに異なった、その理由は推して知るべし。とは言え、いろいろと残念な気分にさせられはしたが、イストは自分の言葉を決して曲げなかった。ニーナは彼の弟子であった間、「アレをやれ、コレをやれ」と頭ごなしに雑用を指示されることはついになかったのだから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アルジャークなどと比べるとポルトールの春は早い。三月の半ばに差し掛かる少し前、日が十分に長くなり気候が安定してきたのを見計らったイストは、ガノスとニーナにそろそろ旅立つことを告げた。ニーナがイストに師事して、彼らか魔道具製作のイロハを教わるためには、彼女もまた共に旅立たねばならない。一度旅立ってしまえば再びここに帰ってくるのは、さて何年後になるのか今は予想すらつかない。

「今ならまだ止められるぞ」

イストはそう言ったがニーナの心はもう決まっているし、ガノスもそれを受け入れている。とはいえ永遠ならざる別れを思い、気分が少なからず落ち込んでしまうのは仕方がないことであろう。

ちなみに、ガノスが製作していた魔道具はまだ完成していないが、すでにそのメドは立っている。これでひとまず工房「ドワーフの穴倉」は大丈夫だろう。

「必ず、立派な魔道具職人になって帰ってきます……！」

固い決意を胸に、ニーナは故郷の街を旅立ったのである。

さて、旅立つにあたり問題が一つあった。それは国境を越えるための身分証である。これをもっていないと国境の関所を越えられない。もっともこの問題はすぐに解決した。イストがニーナに魔導士ギルドの準ライセンスを取得させたからだ。

準ライセンスとは正式なライセンスの一ランク下に位置づけられているもので、もともとは魔導士が弟子に持たせるものだ。これをもっていると身分証の代わりとなったり、魔道具が所持できたりするようになる。ただし、魔道具（特に武器）の所持に関しては正ライセンスを持っている者の監督が必要だが。

正ライセンスの取得はリリーゼの場合のように試験を受けなければならないが、準ライセンスにはそのような試験はない。申請用紙に必要事項を記入して提出すれば、その日のうちにライセンスカードを発行してもらえる。ちなみに発行手数料はイストが出した。

「出世払いの三倍返しな」

恐縮するニーナに、イストはそう気軽に告げた。それから彼女に一つ宿題を出す。

「仕事柄、ライセンスを持っていると便利なことが多いから、その内ちゃんと取るように」

「わたしに取れるでしょうか……？」

自慢できることではないが、ぜんぜん自信がない。

ニーナ・ミザリの戦闘能力は当然ながら皆無であし、また自分にそっち方面の才能があるとは到底思えない。そんな体たくらで正ライセンスなど取れるのだろうか。

「試験と言っても戦闘技術を見るものばかりじゃない。比較的簡単に取れる試験もあるから、今度教えてやるよ」

ちなみに試験の中身は様々にあれど、発行されるライセンスは全て同じである。要はどれだけ魔道具を扱えるかを見る試験なのだ。

イストが彼の最大の秘密、すなわち「アバサ・ロット」の二つ名をニーナに明かしたのは、旅立った日の夜のことであった。告げられた当初はさすがにニーナも半信半疑であったが、何もない空間に忽然と現れた石造りの扉と、その扉の先にあるアバサ・ロットの工房「狭間の庵」を見せられ、その非常識さに言葉を失った。

「な、何なんですか、コレは！？」

目ん玉が飛び出るとか顎が外れるとか、そういう表現をありったけ集めたようなニーナの反応に、イストは満足そうに意地悪な笑み

を浮かべるのであった。

イストの個人工房である「狭間の庵」は、彼が常に肌身離さず付けている腕輪に固定された亜空間の中にある。この魔道具を作ったのは初代アバサ・ロットであるロロイヤ・ロットである。彼は空間拡張型や亜空間設置型の魔道具の製作に比類のない才能を示し、この分野に関していえば彼を越える才能は未だに現れていない。ロロイヤの遺した作品は多々あるが、その中でもこの「狭間の庵」は最高傑作であると、歴代のアバサ・ロットたちは意見を同じにしている。

工房は地上二階建ての地下一階付きで、一階は作業場、二階は資料室、地下一階は物置となっている。

まず一階の作業場に入ったニーナは、そこで再び目をひんむいて驚くこととなる。床面積は「ドワーフの穴倉」と同じくらいで、そこには魔道具製作に必要なあらゆる機器が備わっていた。これらの機器は歴代のアバサ・ロットたちが、

「あると便利だから」

という理由で次から次へと作っていったもので、その結果例えば鉄鉱石などの原料さえあれば、一から魔道具が作れるようになっている。金属の精錬・成型・鍛錬、あるいは宝石の研磨や革製品の加工に織物の機械まで、本当になんでもある。

世間一般から見れば明らかなオーバースペックで、「ドワーフの穴倉」という比較対象を見知っているニーナはその設備の異常な充実度を正しく理解できた。できてしまった。

「も、もう何でもアリですね……」

驚けばいいのか呆れればいいのか分からない。そんな様子でニーナは呟いた。明らかに異常な設備をたった一人の魔道具職人のために用意する。それがアバサ・ロットという伝説の魔道具職人の一面であることを、幸か不幸かニーナはこのときまだ理解していなかった。

「こっちだ」

イストはまずニーナを地下の物置に案内した。そこは物置と言う言葉から連想されるような散らかった場所ではなく、むしろ一見して整理されていることがわかった。結晶体などの細々とした素材はその種類ごとに棚に収められ、鉄や銅といったものも種類ごとに樽に入れて保管されていた。工具類もひと目で必要なものが見つかるようになっている。

またここには完成した魔道具も保管されていると言う。少し見ただけでも、それとわかる魔剣や魔槍、鎧などが置かれていた。

「なんていうか……、これだけでもう一財産ですよね……」

しかもその全てが、かのアバサ・ロットの作品なのだ。見る人が見れば卒倒してもおかしくない光景である。

「歴代のアバサ・ロットたちは自分の作品以外興味がないからな。しかも完成させてしまえば次の作品に興味は移る」

その結果、しかるべき使い手にめぐり合えなかった作品たちはここに積み上げられ、日の目を見ることなくホコリを被っていると言

うわけである。時の権力者たちが強力な魔道具を血眼になって探しているその裏で、歴代のアバサ・ロットたちは魔道具を作りっぱなしにして物置に放置していたのだ。武力をもって覇道を志す者たちが知ったら、悲鳴を上げて喚くか、呪いの言葉を吐くか、目の色を変えて狂うか、いずれにしても正気ではいられないだろう。もっとも、後でこの感想を聞いたイストは、

「そんな器の小さい連中が覇道を遂げられるものか」

といって相手にしなかったが。

さらに聞くところによれば、空間拡張型の魔道具を利用して保管しているため、今目に見える範囲のものでさえほんの一部であると言う。もし全ての魔道具が世に出ていたら一体幾つの伝説を作り上げたのだろうと、ニーナは呆れた。呆れて、次の瞬間には背筋が寒くなった。

この時代、魔道具が伝説を作ると言うことは、大量の血が流れることと同義である。もしここに保管されている魔道具全てが世に出たら、一体どれだけの血を流し、どれほどの町や村を焼き払い、幾つの国を覆し、幾筋の涙を人に強要するのだろう。

世界のパワーバランスの一端が、実はこんなところにあったのかと、ニーナは呆れればいいのか怖がればいいのか判断に迷った。しかも歴代のアバサ・ロットたちがこれらの魔道具を表に出さなかったのは単に、「興味がなかったから」だ。そんなごくごく個人的な感情を理由に力の暴発が防がれていることに、ニーナはうすら寒いものを感じずにはいられなかった。

「おーい、こっちこっち」

世界を覆す力を保管している、現代のアバサ・ロットが手を振っている。その能天気な様子に、一抹の不安を感じずにはいられないニーナであった。

（大丈夫なのかな、この世界は……？）

とはいえ今の彼女の身分は「魔道具職人見習い」あるいは「アバサ・ロットの弟子」であって、いうまでもなく世界をどうこうなどできる筈もない。せいぜい師匠たるイストの良識を願うばかりだ。

「今行きます」

小走りにイストのもとに駆け寄ると、彼はタンスから若葉色でフードつきのローブを取り出してニーナに渡した。色は少々くすんでしまっているが、十分に実用に耐えうるローブだ。羽織ってみるとサイズもちょうどいい。どうやらこのローブは女性用らしい。

「そっちを使うといいよ。オレのヤツはでかいだろうから」

旅立ちにあたり、ニーナはイストからモスグリーンの外套を借りている。が、如何せん大きすぎて何かと都合が悪かった。

「女性のアバサ・ロットが使っていた品らしい。オレが貸してたやつと同じで魔道具だから、役に立つぞ」

イストが使っている外套は「旅人の外套（エルロンマント）」という魔道具である。その能力は外套の内側の温度調節と防水、および風除けである。この外套を羽織っていれば季節が真夏であろうが真冬であろうが快適に過ごせるし、激しい雨に吹かれても体が濡れることはまずない。

「コレさえあれば雪原で野宿をすることになっても大丈夫！」
というのが謳い文句らしい。ただしイストからは、
「狼に喰われるから止めておけ」
と言われた。たしかに魔道具だけではどうしようもない限界というやつがある。ただ便利であることは間違いなく、なまじ服を何枚も用意するより「旅人の外套（エルロンマント）」を一枚持っていたほうがよほど役に立つと、歴代のアバサ・ロットたちも重宝したらしい。
ニーナは礼を言ってからその若葉色のローブを受け取り、借りていたモスグリーンの外套をイストに返した。
「それと、ホイ、これ」
次に手渡されたのは、イストが持っているのと同じ道具袋だった。魔道具「ロロイヤの道具袋」。空間拡張型の魔道具だ。確認してみたが中身は空っぽだった。
「オレが前に作ったヤツだ。必要になるから持っとけ」
師匠にこういわれては断るわけにもいかない。ニーナは素直に道具袋を受け取った。ただ、聞いたところによれば「ロロイヤの道具袋」の容量は、小さな部屋ほどもあるらしく、本当にそんなに必要なものがあるのか、少々懐疑的であったことは否めない。
「さて次だ」
次にイストが向かったのは二階の資料室だった。

「うわ……」

その部屋に一歩足を踏み入れた瞬間、ニーナは空気が変わったことに気づいた。部屋は古い紙のにおいで満ちていて図書館を連想させ、そのせいかひどく落ち着いた雰囲気が漂っている。

二階は本棚で埋め尽くされていた。人が両手を広げたくらいの幅の通路が、本棚の間を縫うようにしてあるほかは、一面すべて本棚であった。

以外なことに、製本された本は少ない。ここに保管されている資料のほとんどが紙の束をまとめただけのもので、糸で縫いとめてあればいい方だった。

「初代から数えておよそ千年。千年の間アバサ・ロットたちが蓄積してきた、知識と技術だ」

もしオレにこの頭と腕より重いものがあるとすれば間違いなくコレだ、と語るイストの口調からは間違いなく誇りが感じられた。

「師匠が作った魔道具の資料もここに保管してあるんですか？」

「ああ、こっちにある」

イストは本棚の二つを使って資料を保管していた。魔道具ごとにそれぞれの資料を紙袋に入れて戸棚に並べてある。ベージュ色の紙袋は二つの金具に紐を回して封をするタイプで、表には魔道具の名前が記されており、中に入っている資料がなんなのか一目でわかるようになっていた。天井にまで達する高さの本棚が既に一つは一杯になり、もう一つも半分以上紙袋で占領されており、イストのコレまでの遍歴を垣間見せている。

「すごい量ですね……」

未だ作品数ゼロのニーナとしては、そういうしかない。同時に師匠に劣らぬ職人になろうと、決意を新たにもした。

「まあ、オレのはいいから。それよりお前さんに必要なのはコッチだ」

そういってイストはニーナに資料の束を渡した。

「それとコレとコレと、はいコレも」

「え？あ、ちょ、ちょっと……！」

またたく間にニーナの手には資料が積み上げられていった。当然その資料は古代文字（エンシェントスペル）で書かれている。積み上げられた厚さは三十センチ程度はあるだろうか。結構重い。

「……全部読むんですか？コレ……」

顔が引きつりそうになるのを堪えながら、ニーナはイストに聞いた。本を三冊渡されてひたすら読みまくっていた記憶は新しい。今度はこの資料を「百回読め」と言われるのだろうか。

「いや、必ずしも全部読む必要はない」

イストが言うところによれば、これらの資料は全てとある一つの魔道具の資料らしい。この魔道具は練習用に作るのにとてもよく、イストをはじめ多くのアバサ・ロットたちが弟子時代にこれを作ったという。

「じゃあコレは全部同じ魔道具の資料なんですか？」
何でこんなに大量にあるのか。
「一言でいえば“意地”だな」
「意地？」
つまりは「人と同じレポートを作りたくない」というアバサ・ロットたちの意地だ。その結果、一つの基本的な魔道具について多角的な解析と解説がなされ、さらに非常に多彩なアイディアや発想が生まれたのだと言う。
「とりあえずその資料読んで、自分なりにレポートにまとめろ。で、それができたら実際に作ってみる。できた作品がダメだったら作り直し。合格だったら次の課題だ」
この先、ニーナの修行は万事この調子であった。いきなり魔道具を作らせてもらえるとは思っていなかったニーナは目を輝かせる。
「分らないところがあったら、渡しといた本を見ろ。それでも分んなきゃ聞きに来い」
「はい。わかりました」
それと最後に、といってイストはニーナを見た。その目はいつになく真剣だ。
「『決して妥協するな』。これが唯一のルールだ」
忘れるなよ、とイストはいった。
こうしてニーナは魔道具職人として、また一歩前に進んだのであった。

第五話　傾国の一撃？（前書き）

お気に入り登録件数が２００件を突破しました！！
え？微妙にきりが悪い？すみません、１００件のときは素で忘れてました・・・・・。

なにはともあれ、これも読んでくださる皆様のおかげです。活動報告にも載せたのですが、改めてお礼を言わせてください。

いつも読んでくださる方々、感想をくださった方々、ポイントを入れてくださった方々、本当にありがとうございます。
特に感想は、時々読み返してはやる気と気力を頂いております。

頑張っていくので、今後とも宜しくお願いします。

第五話　傾国の一撃？

「どういうおつもりですか！？父上！」

ダンッ！と勢いよく執務机に両手を付き、身を乗り出すようにしてランスローは父であるコステア・フォン・アポストルに迫った。その声からは、怒りと焦りが感じられる。

「カンタルク軍の世迷言を真に受けて独自に交渉を行うなど……！父上はこの国を内戦で割るおつもりか！？」

事の始まりはカンタルク軍の通達だった。

「和平交渉の相手としてマルト王子を指名する」

この通達が来るより前に、ポルトールの宮中ではラザール王子を摂政とし、この事態の収束にあたるという対応が決定している。であるならばカンタルクとの和平交渉において顔役になるのは、当然ラザール王子であるべきである。いかにカンタルクがマルト王子を指名しようとも、それは突っぱねるべきなのだ。

なのに、アポストル公はこの申し出を受け入れてしまった。

「これはカンタルクと言う国家が、マルト王子を次期王位継承者として認めたと言うことだ！」

ウォーゲンが予想したようにアポストル公はそう主張し己の予測、いや願望を根拠に独自に交渉を開始した。当然、ラディアント公ら

には秘密裏に、である。

この対応は三つの意味で間違っていると、ランスローは考えている。

まず第一に相手国、ましてや敵国に要求されて交渉の顔役を変えていては、国家の体面を保てない。交渉役が決まっていない段階であるならばともかく、すでに決まっている交渉役を敵国にいわれて変えるなど、そんな馬鹿な話があるだろうか。それは自国が格下であると認めるようなものであり、将来に対して禍根を残すことになるだろう。

ラザール王子を交渉の顔役にというのが曲りなりも国家の決定である。にもかかわらず一部の貴族がその決定を無視し独自に交渉をまとめてしまえば、「国家の意思を貴族の意思が超越する」という悪しき前例を残すことになってしまう。そうなれば国の体制そのものが揺らいでしまう。これが第二の理由だ。

そして第三に、ランスローは現状これが最大の理由だと考えているが、事が露見するのは時間の問題であり、そうなれば間違いなく派閥抗争が激化する。アポストル公もラディアント公も決して引かないだろうから、行き着く先は内戦である。しかもすぐ横にはカンタルク軍という外敵まで抱えているのだ。もし内戦が起これば、将来に禍根や悪しき前例を残す前に、ポルトールと言う国そのものがなくなってしまう可能性が高い。

「どう考えても悪手です！それがお判りにならないのですか！？」

「これしかないのだ！！マルト王子を玉座に就けるには！！」

アポストル公は片手で頭を抱えている。その指の隙間から、睨む

ようにして彼は自分の三男を見た。その目に狂気が宿っていることはもはや疑いもない。

「それに、お前、ラディアント公がカンタルク軍に申し出た交渉の中身を知っているか？」

「いえ。使者を立てた、ということは聞きましたが。父上はご存知なのですか」

ラディアント公は交渉の内容をおおっぴらにはしていない。父はどうやってそれを知り得たのか。

「カンタルク軍のウォーゲン・グリフォード大将軍から使いが来た」

曰く「ラザール摂政はこのような条件を提示してきたが、これはマルト王子もご承知のことか」

向こうから交渉の相手役としてマルト王子を指名してきた以上、こうやって確認を取るのは当然にも思えたが、ランスローとしてはどうしても「余計なことをしてくれた」とおもってしまう。こんなことをすればアポストル公がますます調子に乗るのが目に見えているではないか。

「奴らはな、国境際の十州をカンタルク側に割譲するといったのだぞ！？」

妥当な線だとランスローは思った。ブレントーダ砦を落とされた以上、もしこれからカンタルク軍と事を構えるならば野戦が主となるだろう。カンタルク軍がまず手をつけるのは国の北部、つまり文官貴族の勢力圏で、彼らだけで敵軍に抗しきれるとは到底思えない。そうなれば十州以上を切り取られてしまうのは目に見えている。

ならば今のうちに先手を打っておこう、ということなのだろう。
ラディアント公にしてみればライバル派閥の土地だし、もっと大盤振る舞いするかとも思ったがなかなかに良識的だ、とランスローは判断した。

「なにを馬鹿なことを言っている!?その中には我が公爵家の領地も一部含まれているのだぞ!?」
「父上……!!」

貴方はこの期に及んでまだそんなことを、という言葉をランスローは飲み込んだ。唐突に理解できてしまったからだ。父が狂っているその理由を。

（なんのことはない。もとから狂っていたのだ……）

事態の進展にともない、狂い始めたのではない。隠していた狂気が、事態が悪化するに連れて表に出てきた。ただそれだけのことだった。

「……安心せよ、ランスロー」

幾分落ち着いた声で、アポストル公は話し始めた。ただその口調はランスローに話し掛けているというよりは、まるで自分に言い聞かせているようである。

「カンタルク軍が交渉の相手役に指名してきたのは我々だ。条件そのものもラディアント公よりもいい。交渉はすぐにまとまる」
「……提示した条件を、教えてもらえますか？」

嫌な予感がヒシヒシとする。

「国の南部から二十州を割譲する、と提示した。飛び地にはなるが、自前で塩を生産できるようになる。奴らにとってもいい話のはずだ」

半ば以上予想通りの答えに、ランスローは頭痛を感じ始めた。南部はラディアント公の派閥の領地。これでは子どもの仕返しと同じだ。

（ラディアント公が認めるわけがない……）

秘密裏に交渉をまとめるとこができても、ラディアント公がその結果を認めなければ、結局内戦が起こる。

――――内戦。

その未来はどうしようもなく避けがたいのではないかと、ランストーは思い始めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これはどういうことだ！コステア卿！」

ランスローがアポストル公と話をしてから数日後、王宮で緊急に催された会議の席でエンドレ・フォン・ラディアント公爵の怒号が響き渡った。彼は優れた騎士としても知られており、その怒号は聞いている人々の腹に響いた。

「ラザール王子を摂政とし事態の収束に当たると決めたはず！にもかかわらず独自の交渉を行うとは、一体どういう了見なのだ！」

糾弾されたアポストル公は苦虫を数十匹まとめて噛み潰したかのような顔をした。彼が秘密裏に進めていた交渉をなぜラディアント公が知りえたかと言えば、当のカンタルク軍がわざわざ使いを立ててきたからだ。

曰く「当方はマルト王子とこのような交渉を行っているが、ラザール摂政はご承知のことか」。

これを聞いたラディアント公は激怒した。剣を手に暴れまわったと言っていい。けが人が出なかったのは彼が意図的にそうした結果ではなく、周りの人々が「君子危うきに近寄らず」の精神を発揮したからだ。手を付けられず放置されたとも言うが。おかげで彼の屋敷は、局地的暴風にさらされた様相を呈している。

ウォーゲン・グリフォードがわざわざ使いを立てて交渉の進行状況を報告し、またその確認を求めてきたのは、一見して至極当然のことである。最終的に交渉結果を承認するのは摂政の地位にいるラザール王子のはずで、ならば彼に確認を取るのは当たり前のことである。しかしウォーゲン・グリフォードの取った行動に言いようのない悪意を感じているのは、ランスロー一人ではないはずだ。

「カンタルク側がマルト王子を指名してきたのだ！我々の行っている交渉こそが正当なものだ！」

秘密の交渉を暴露してくれたウォーゲンと、立ちはだかり邪魔ばかりしてくれるラディアント公に、苦々しい思いを抱きながらアポストル公はそう主張した。

「そのような申し出突っぱねるべきであろうが！」

言い訳がましいアポストル公の弁を、ラディアント公は一刀両断に断ち切った。

「いつからポルトールはカンタルクのいいなりに成り下がった！？」

ラディアント公の言葉はどこまでも正論で正しい。しかしその根底にあるモノは道徳や正義などではなく、権力への渇望であることをアポストル公は嗅ぎとっている。それゆえにその言葉がいかに正論であろうとも、そこに説得力を感じることはない。

アポストル公もラディアント公も、お互いここで勝った方が至高の権力を手にすると知っているため決して引かない。終止怒号と暴言をもって行われた会議は、結局平行線で終わった。

ラディアント公を先頭に肩を怒らせて会議室を出ていく軍閥貴族の面々を見て、事態が最悪の結末に至ったことをランスローは知った。回りを見渡せば、同じ結論に至ったのか、表情を硬くしている者たちがちらほらと見受けられる。

ただ彼らが心配しているのは、この国の行く末ではなく、自分たちの富と権力を守れるのか、ということだ。

（それが貴族の習性か……）

同じ貴族として、またその筆頭を親に持つ身として、ランスローはわが身を自嘲するしかなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「もはや一戦避けることあたわず！！」

屋敷に集めた軍閥貴族の面々を前にしてラディアント公は声を張り上げた。使用人たちの必死の努力により局地的災害からの復興を超短期間で終え、なんとか派閥筆頭公爵邸の威厳を保ちえた屋敷には、いまピリピリと斬りつけるかのような戦場にも似た空気が漂っていた。

「これよりラザール王子をお連れして領地に下る。各々自分の領地で兵をまとめ、我が公爵家の旗の下に集え！」

王都アムネスティアに至る街道上でラディアント公爵家の旗を目印に集結しろ、という意味だ。指示が幾分抽象的に過ぎると思われるが、何も問題はない。これだけ申し伝えておけば後は各自が自分で考えて行動するだろう。それを確信できるほど、特に行軍に関して練度は高い。

「国事を私物化しようとするコステアを排除し、未曾有の危機よりこの国を救わん！」

ラディアント公の前に居並ぶ貴族の面々も「応！！」とおうじる。

「正義は我らにあり！！神々が正道をなされんことを！！」

第五話　傾国の一撃？（前書き）

イストとニーナのお話です。
この師弟は書いていて楽しいですｗｗｗｗ

第五話　傾国の一撃？

「あ、ししょー。おはようーございます」

寝起きの冴えない頭でニーナは師匠であるイストに挨拶をした。
彼もまた寝起きらしく眠そうに欠伸をかみ殺している。

「ん～、おはよ～」

窓から差し込む光は明るい。今日もいい天気になりそうだ。

「にしても、すごい寝癖だな……」

そう言われ、元気よく飛び跳ねている髪の毛をニーナは慌てて手櫛で撫で付けた。が、当然のことながらその程度では収まってくれない。

「むぅ。というか師匠だって寝癖ひどいじゃないですか」

ニーナの言うとおり、イストの頭もなかなかにひどい状態だ。

「ふ、あまいな」

イストがそういった瞬間、彼の髪の毛は一瞬にして整えられた。
いつもどおりの髪型で、そこには寝癖一つない。

「え？ええ？え～？」

目の前で起こった現象が理解できず、ニーナは目を丸くして軽く混乱した。まったくイストと旅をしていると驚くことには事足りな

い。弟子のワタワタした様子を眺めて満足したイストは、得意げに種明かしをした。

「『形状記憶ジェル』っていう魔道具を使ったんだよ」

聞くところによれば、「形状記憶ジェル」という魔道具は使い捨てタイプの魔道具で、形を整えジェルを塗り魔力を込めるとその形をジェルが記憶し、形が崩れてしまっても魔力を込めれば記憶した形を復元してくれるのだとか。整髪だけでなく、衣服に使うこともあると言う。

「おお～。便利そうですね～」

ニーナは素直に感嘆の声を上げた。毎朝寝癖と格闘しなくて済むのは確かに素晴らしい。

「ちなみに効力は三日～四日くらい」

意外と短いような。

「ずっと同じジェルを付けとくのも嫌だろ？」

そういわれればニーナも頷くしかなかった。それからイストは彼女の何かを期待するかのような目に気づいた。

「欲しいか？」

「くれるんですか！？」

「自分で作れ」

魔道具職人だろうが、と言われればニーナも頷くしかない。となれば「形状記憶ジェル」が手に入るのはもう少し先だろうか。なに

しろ課題として出された魔道具は、まだレポートをまとめている最中だ。

「今晩にでも教えてやるよ」

「え、いいんですか！？」

思いもしなかった話の展開にニーナは喜んだ。

「ああ。材料計って練金炉に入れて魔力込めながら混ぜるだけだから」

そういってイストは堪えきれない欠伸を再びかみ殺すのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ポルトールのパートームを旅立ったイストとニーナの師弟は進路を西にとっていた。ポルトールの西にはラトバニアという国がある。国土は七三州。そのさらに西にはジェノダイトという国があり、その国土は八一州である。

これらの国々のすぐ北には教会の影響力がつよい「神聖四国」と呼ばれる国々があった。地理的に見ればこれらの四ヶ国が大陸の中心部に位置しており、またこれまでの歴史上でも主役となることが多かった。ただ早期に文明が発達したせいか、今の時代は衰退期に入っている感があり、その組織は教会を含め腐臭を放っていた。これまでは聖銀（ミスリル）がもたらす莫大な売却益がいわば「芳香剤」となってその腐臭を隠していたが、その製法が暴露されお金が入ってこなくなると、教会と神聖四国は「暴走」を始めることとなる。それがシーヴァ・オズワルドとクロノワ・アルジャークという、東西の雄を戦場で引き合わせることになるのだがそれはまだ先の話だ。

ともあれイストとニーナの師弟の旅路である。彼らは今ラトバニアにいる。そしてこれからジェノダイトに向かおうとしていた。

ラトバニアからジェノダイトに向かう道はいくつかあるが、彼らが選んだのは「エプティアナの森」を通過するルートであった。理由は至極単純で「移動距離が一番短いから」である。整備された街道を通ることもできるのだが、そうすると南に大きく迂回して沿岸沿いの街道を行くか、北に向かい一度第三国を経由していくしかない。距離的にも日数的にも最も短くて済むのがエプティアの森を突っ切るルートなのだ。

エプティアの森は森であるから当然街道など整備されていない。だが、森の中は高低差が少なくほとんど平坦で、また方位磁針を狂わせるなどといった難所指定要素もない。極端な話、まっすぐ西に向かっていればそのうちジェノダイトに着く。唯一気をつける点があるとすればその広さであろうか。エプティアの森は一日で抜けることはまず不可能である。人の足で歩いて二日、ともすれば三日かかることもザラである。当然その間は野宿をすることになり、そのための準備が必要になるのだ。

「そんなローブを着て保存食を買い込んでいるところを見ると、お嬢ちゃん、エプティアの森を越えるつもりかい？」

ニーナが買い込んだ食料品を道具袋にしまっていると、露店をやっているおばちゃんにそう聞かれた。

「はい、そうですよ。森を抜けてジェノダイトに向かうつもりです」

今、ニーナは師匠であるイストと森越えに必要なものを分担して

買い込んでいる。もっとも元々旅をしている身なので、食料などの消耗品を補充すればいいだけだ。

「大丈夫かい？あの森は悪霊が出るって言う噂があるんだけど……」

露店のおばちゃんの言うところによると、五・六年前あの森を越えようとしていた旅人が悪霊を見たらしい。

曰く「それは月が隠れた晩のことだった。悪霊は二人とも黒いローブを着込んだ鉤鼻の老婆のような姿で、しわしわの手にさじをもって火にかけられた鍋をかき混ぜながら、『ケーッケッケッケッケッケ』とそれはそれは邪悪な笑い声を上げていた」らしい。驚いて逃げた後、数分後にもう一回確かめようと様子を見に行ったところ、今度はいきなり怪しげな霧が現れ、二人の老婆の姿は見えず、ただその邪悪な笑い声だけが木霊していた、という。

「ま、まさか……。た、ただの見間違いでしょう？」

顔が引きつるのを自覚しながら、ニーナはそうであって欲しいという願いを込めてそういった。お化けだの悪霊だのは大の苦手だ。

「そうだといいんだけどねぇ……」

実際、町の人々の大半はこの話を信じていない。最初の目撃証言のほかに見たと言う人がいないからだ。だが、最初の目撃者が三人組の旅人だったことが、この話しに妙な信憑性を与えている。

「み、見間違いの聞き間違いです……。そうに決まっています……！」

日が高く春麗らかな陽気のこの時間、怪談話をするには雰囲気が足りない。露店のおばちゃんも「まあ、そういう話があるってだけだから」と笑って噂話を切り上げた。

宿に戻ると、既にイストは買出しから戻ってきていた。彼のほうは虫除けの薬や、傷薬の類などを補充してきた。

「お、来たか」

弟子の姿を認めると、イストは立ち上がった。既に宿のチェックアウトは済ませているらしい。

イストは「少し食べてから行くか？」と聞いたが、まだお昼には早くお腹も空いていない。結局、町を出る前に露店で軽食を買い込み、それをお昼に食べることにして二人はエプティアの森へと向かったのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夜の森は暗い。

どれだけ空に月や星が輝いていても、生い茂る木の葉はその光を遮ってしまう。昼間であれば「薄暗い」程度で済むが、夜になると本当に真っ暗だった。早めに用意しておいた焚き火が、今は妙に頼もしい。

ちなみに、熱や光を得るだけならば魔道具を使っても良いのだが、煙を出したほうが虫が寄ってこないということでこの夜は焚き火で、ということになった。

時折物音がする木々の奥の闇を、ニーナは落ち着かない様子で警戒していた。昼間、森に入る前に露店のおばちゃんから聞いた、「悪霊うんぬん」の話を思い出してしまい、どうしても気になってしまうのだ。

それを聞いたイストは面白そうに、かつ不敵に笑った。

「面白そうじゃないか、悪霊。出てきたらとっ捕まえて研究材料にしてやる」

その物言いに、さすがにニーナも呆れた。

「どうやって捕まえる気なんですか、師匠」

そうだな、とイストは「無煙」を吹かしながら考え込んだ。その様子は実に楽しそうで、ニーナは嫌な予感を覚える。

「乗り移ってきたところを精神力でねじ伏せて捕獲、ってのはどうだ？二体いるみたいだから、一体はお前の持ち分な」

「イヤァァァアアアアアアア！！」

ノリウツラレル。のりうつられる！？乗り移られる！！

「とまあ、楽しげな話は置いといて、だ」

「全然楽しくないですよお！？」

ニーナの絶叫その他諸々を、恐らくは意図的に無視して、イストは話を強引に切り替えた。

「ほいこれ」

軽い調子でイストは二つ折りにしたメモ用紙をニーナに手渡した。

「……なんですか、コレ」

ニーナがちょっぴり涙の残る目でその紙を確認すると、なにやら素材の名前とその数量が記されている。

「朝言ったろ？『形状記憶ジェル』の作り方だよ」

そういってイストは「ロロイヤの道具袋」から材料を取り出していく。さらに木箱に納められた天秤と分銅を出した。ちなみにこの天秤はかなり高価なもので、これだけで一シクするという。

作り方の注意点を聞くと、材料を正確に計ることの他は特にないらしい。焚き火の明りだけだと暗いな、と思っていたらイストが師匠らしく「新月の月明かり」を用意してくれた。

一つ一つ丁寧に素材を計りながら作業を進めていく。こうやって作業に没頭していると、「悪霊うんぬん」の話は忘れることができた。そんなニーナの様子をイストは「無煙」を吹かしながら楽しそうに眺めている。

全ての材料を計り終え練金炉に入れたところで、ニーナの手が止まった。作り方が記されたメモ用紙を見ながら眉間にしわを寄せている。

「あの、師匠。この『一定量の魔力を込めながらかき混ぜる』ってどうやるんですか？」

魔力の制御というヤツは往々にして感覚的で、多いか少ないかぐらいしか人間にはわからない。「一定量の魔力を持続的に流す」と

言う作業は、あるいは熟練した職人ならばできるのかもしれないが、現状ニーナには無理だった。

「ああ、それにはこいつを使う」

そういってイストが取り出したのは、スープやシチューなんかをかき混ぜるのに使いそうな木製の匙だった。柄の上のほうに小さい結晶体がついており、その匙が魔道具であることを主張している。

「魔道具『魔女の匙加減』。効果は魔力の整流作用」

この魔道具は流せる魔力の上限が決まっており、それ以上は魔力を込めても霧散してしまうそうだ。上限は固定されており、別の一定量が必要になったときはそれ用にもう一つ作るしかないという。

「そしてもう一つ。コレだ」

ニヤリ、と悪戯を思いついた悪餓鬼のような笑みを浮かべてイストが差し出したのは、黒いローブだった。おとぎ話か何かで、魔女が着込んでいそうな感じである。

「……なんですか、これは……？」

ひしひしと感じる嫌な予感にニーナは頬を引きつらせた。

「こいつを着て『ケケケケケ』と邪悪な笑い声を上げながら作る」

「な、なんでそんな魔女の真似事なんてしなきゃならないんですか！？」

そんなの恥ずかしすぎる。恥ずかしすぎて死ねそうだ。しかも使う匙も「魔女の匙加減」だし。狙っているとしか思えない。

「それがこの魔道具を作るときの流儀で作法だ！」

イストは胸を張ってそう宣言した。なんでも匙で鍋をかき混ぜるならそれっぽい格好をしたほうが面白い、と言う理由らしい。

「だ、騙されませんよ？し、師匠はそんなことしなかったんでしょう？」

「いや？やったぞ」

ニーナの期待をイストはあっさりと裏切った。

「五・六年前、ああ、ちょうどこの森だったな。師匠が思い出したみたいに『この魔道具を作ってみろ』っていいだしてさ」

その時に作らされたのが『形状記憶ジェル』だったそうだ。そしてイストの師匠、オーヴァ・ベルセリウスは彼にその“流儀”を強要したと言う。

「そ、それでやったんですか……！？」

「やった。いや～もうノリノリだったね。挙句の果てに師匠と二人で『どっちがよりそれっぽくできるか？』って競っちゃてさ」

二人とも黒のローブを着込み、さらには老婆に変装し、鉤鼻の付け鼻をつけ、「ケーッケッケッケッケッケ」とそれはそれは邪悪な笑い声を競うように上げたそうだ。

「それを誰かに見られたらしくってさ、そいつら悲鳴を上げて逃げちゃったよ」

「悪霊の正体は師匠たちですか！？」

当時を思い出して愉快そうに笑うイストに、ニーナは頭痛を感じながら突っ込んだ。知りたくなかった新事実だ。

「で、戻ってきて邪魔されても迷惑だから『霧の迷宮（ミスト・ラビリンス）』をつかって勝負を続けたんだ」

イストと師匠が使ったという魔道具「霧の迷宮（ミスト・ラビリンス）」は一種の結界で、放射状に魔力を放出して、他人を中心部に近づけないようにする効果があるらしい。その時に発生する“霧”は放出された魔力がそう見えるのであって、実際の水分からなる霧ではない。

結局、勝負はオーヴァの勝ちだったらしい。イスト曰く「入れ歯を外したのが勝因」だったそうだ。

「年の功には勝てなかった」

とイストは楽しげに笑った。

聞かされたことの真相にニーナはあらゆる意味で衝撃を受けていた。怪談話の裏側にまさか自分の師匠が絡んでいるとは思わず、ニーナは安心すればいいのか怒ればいいのか、はたまた呆れればいいのか、それはそれは判断に迷う。あるいはこの先で見聞きする怪奇現象にイストが関わっているのではないかと思うと、まだ起きてもいないのに気が遠くなるニーナであった。

「さ、気を取り直してやってみよう」

そういってイストはとてもいい笑顔を浮かべ、黒のローブと「魔女の匙加減」を持って迫ってくる。その清々しい笑顔の奥に言い様のない邪気を感じるのは、決して勘違いではないはずだ。渋ってい

ると、

「他の変装道具も用意してやろうか～？」

と物凄くありがたくない提案をしてくれたので、必死に辞退した。

「う、ううう……」

かつて師匠も通った道をまさか弟子の自分が嫌だともいえない。

「誰も見ていないから。誰も見ていないから」と必死に自分に言い聞かせて、ニーナは黒のローブを羽織った。そいて「魔女の匙加減」を手に、魔力を込めながら練金炉の中身をかき混ぜていく。

「……ケ、ケケ……ケケ、ケ……」

「もっと大きな声で！もっと禍々しく！」

なにが悲しくて魔女の真似事などせにゃならんのか。羞恥心で一杯のニーナの胸のうちなどまったくお構いなしに、イストは実に楽しそうに煽る。

「ケケケ、ケッケッケケケ……」

ああ、何かが壊れていく……。

「もっと激しく！魔女になりきって！！」

自分の格好とその場の雰囲気、そしてイストの言葉とハイテンションに煽られてニーナの健全な思考力は加速度的に低下していく。

（ああ、なんか練金炉の中身が毒薬に見えてきた……）

毒薬の入った鍋を匙でかき混ぜる黒いローブを着た女。それはま

さに魔女。そう、今まさにわたしは魔女！！

「ケーッケッケッケッケ、ヒーヒッヒッヒッヒッヒッヒ！！」

何かが開放されていく。ああ、自由って素晴らしい……。

雰囲気に酔わされ、エクストリームにはまっていくニーナ。

「うわあ、やっちゃったよ……」

そんなニーナに対し、けしかけた張本人であるはずのイストは、いきなりテンションを下げて傍観者を気取るのであった。

「うわわぁぁぁあああんんん！ししょーのばかぁぁぁあああああ！！」

ちなみに「形状記憶ジェル」はきちんと完成した。しかし、そのジェルを見るたびにニーナは羞恥心に打ちのめされ、しばらくは使うことができなかったと言う。

彼女の弟子生活はまだまだ始まったばかりだ。

第五話　傾国の一撃？（前書き）

お気に入り登録件数とかＰＶとかユニークとかすごいことになってます……！
この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。
読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

新月は嬉しい反面ビビリ気味です。
一過性で終わりそうな気がヒシヒシと……。

第五話　傾国の一撃？

五月の下旬、季節は春から初夏へと移ろうとしている。肥沃なオムージュの大地には色とりどりの花が咲き乱れ、生命の奇跡を誇っていた。

大陸暦一五六四年五月、アルジャーク帝国皇太子レヴィナス・アルジャークと旧オムージュ王国王女アーデルハイト姫との婚礼の儀はつつがなく執り行われたのだった。

結婚式において重要なのは、儀式そのものよりもその後の披露宴である。オムージュ総督府のおかれた王宮は、クロノワが呆れるほど絢爛豪華に飾り付けられ、まるで別世界に迷い込んだかのような感覚を招待客たちに与えていた。

一つ意外なことがあったとすれば、それはレヴィナスの服装である。その衣服のセンスはいつもどおり神懸り的だが、華やかな披露宴の席のわりには幾分抑え気味であるように見える。とはいえその理由はクロノワにもすぐに分かった。アーデルハイト姫だ。こちらは目もくらむほど豪華に、しかし清楚さや上品さを失わないように着飾っている。こういった席では、主役は花嫁だ。花嫁が最も美しく着飾り、そして最も目立つのが作法であると言える。その辺りをレヴィナスもわきまえたのだろう。

「ご結婚おめでとうございます、兄上、アーデルハイト姫」

結婚式の後に開かれた披露宴で、クロノワは腹違いの兄であるレヴィナスとその花嫁であるアーデルハイト姫に祝いの言葉を述べた。

「クロノワか。モントルムより遠路はるばるよく来てくれた」

この麗人もこの宴を楽しんでいるらしく、浮かべる笑顔は快活で作り物には見えなかった。二言三言弟と言葉を交わしてから、レヴィナスは隣にいたもう一人の麗人をクロノワに紹介した。

「改めて紹介しておこう。こちらがこの度私の妃となったアーデルハイト姫だ」

楚々と純白のドレスを身にまとったアーデルハイト姫が進み出る。元々周辺諸国に美姫として知られていただけあって、その姿は確かに美しい。そして彼女もまた一点の曇のない笑顔をクロノワに向けた。

「アーデルハイトと申します。クロノワ閣下のお名前はかねがねお聞きしておりました。これからもどうぞレヴィナス様を、ひいてはこの国を支えて差し上げてください」

「もったいないお言葉です」

クロノワもまた笑顔を浮かべて応じる。ただ、彼の笑顔はどうしても業務用のものになってしまう。しかしそれに気づかれることはないだろう。初対面のアーデルハイトはもとより、レヴィナスとも彼は接点が薄い。

「ところで、兄上はコルグス殿の建築計画を引き継がれたそうですね」

前オムージュ国王コルグスはアーデルハイトの実の父親であり、

今となってはレヴィナスの義理の父にあたる。彼が二十年来肝いりで進めてきた建築計画を、レヴィナスが引き継ぎさらに加速させたことはクロノワも聞き及んでいた。というよりも増税の主たる目的がそれであった。

「ああ、コルグス殿に計画の監督をしていただき、完成を急がせている」

レヴィナスの口調は熱を帯びており、この計画に対する彼の思い入れの深さを思わせた。

「さらに今、私独自の計画も練っているところだ」

私はこのオムージュを大陸で最も壮麗な、それこそ天上の神々が住まう園のようにして見せるぞ、とレヴィナスは熱く語った。

建築計画の話から増税の話しに持っていく、というのがクロノワの筋書きであったが、その目論みは次のレヴィナスの言葉であっさりと費えることになる。

「そういえば、クロノワよ。お前は海上貿易に手を出し始めたそうだな」

「え、ええ。そうです。兄上のお耳にも入っておりましたか」

お恥ずかしい限りです、と恐縮してみせる一方、クロノワは内心で少し驚いていた。彼が海上貿易に手を出し始めたと言っても、その規模はまだまだ小さい。レヴィナスの耳に入るのはもう少し先だと思っていたが、なかなかどうして情報が伝わるのは速い。

「なに、そう謙遜することもあるまい。これから私の計画が進めば

色々と要りようになってくる。その時は頼むぞ」
「承りました」
クロノワとしてはそういっておくしかない。

「これはこれはモントルム総督殿。わらわよりも先にレヴィナスに挨拶するとは、殊勝なことですね」

甲高い声と共に現れたのはレヴィナスの生母であり、クロノワにとっては悪意と迫害の急先鋒であった皇后である。こちらの装いは凄まじい。花嫁よりも目立たないようにするのが礼儀のはずなのだが、彼女は主役を食わんばかりに己を飾り立てていた。その姿は確かに美しいのだが、ゴテゴテといくつもの宝石を身にまとっているせいか上品さは感じられず、ともすれば下品にさえ思われた。

皇后の言葉の裏に隠された十分すぎる量の毒には気づかない振りをして、クロノワは彼女に微笑を向ける。このあたり修行の集大成といえるだろう。

「皇后陛下におかれてはご健勝なご様子でなりよりです。この後ご挨拶に伺おうと思っていたのですが、ご足労をおかけして申し訳ありません」
「別に貴方と話をしに来たわけではありません」

こうも露骨に言われては、クロノワとしても苦笑するしかない。これ以上藪をつついて蛇ならぬ鬼女を出す前に、彼は一礼してその場を離れることにした。

「レヴィナス、まずは結婚おめでとう。わらわの手で花嫁を見つけて上げられなかったことは残念だけど、皇帝陛下をはじめ、皆良縁だと喜んでいますよ」

クロノワがその場から消えると、皇后は先程までとは打って変わった猫なで声でレヴィナスに話しかけた。

「ありがとうございます、母上」

レヴィナスは完璧な笑顔で母親に応じた。しかしその笑顔はどこか作り物じみていると、隣で見ているアーデルハイトには思われた。

（レヴィナス様はお母上が苦手なのかしら……？）

さすがに嫌いであるとは彼女も思わない。だが皇后の息子への熱の上げようを見ると、それを疎ましく思っていたとしても不思議ではないように思えた。

そんなことを考えているアーデルハイトのことは、皇后にとっては完全に意識のそとであった。花嫁には目もくれず、彼女は息子との会話に没頭していく。

「皇帝陛下から祝いの品を預かってきています。後で改めて渡しますね」

意外に思われるかもしれないが、結婚式を含めこの披露宴にもレヴィナスの父たる皇帝ベルトロワ・アルジャークは出席していない。その理由は至極単純で、座るべき席がないからだ。

結婚式や披露宴の主役は当然新郎新婦である。よって彼らが最も高い席次となる。ところが皇帝や国王と言った存在は、出席する以上は常に最も上座に座らなければならず、そのため結婚式などでは席がないのだ。

「近いうちにもう一度帝都ケーヒンスブルグに凱旋すると良いでしょう。きっと陛下が盛大な式典を開いてくださいますよ」

かん高い皇后の声は少し離れた場所にいるクロノワの耳にも届いていた。皇后の声を聞きながらも彼が考えていたのはアーデルハイト姫のことであった。

（笑っておられた、か……）

彼女にとってアルジャーク帝国は祖国を滅ぼした仇敵である。しかもレヴィナスはオムージュ遠征軍の総大将で、いうなれば直接の仇である。そのような相手に彼女は恨みの気持ちの一つも持たないのであろうか。

（とはいえ笑って見せるしかないのも事実だが……）

一切の感情を排除し政治的な利点だけを追求するならば、アーデルハイト姫にとってアルジャーク帝国の皇太子との婚姻は理想的な選択肢であるといえる。現在においては旧オムージュ王家の血統を守ることができ、将来においてはアルジャーク帝国の皇后の地位が約束されている。

こうやって考えてみれば、一時の憎悪に身を任せるよりもレヴィナスを受け入れ婚姻を結んだほうが、遥かに政治的には賢明であると言える。

（何もしない彼女に不義を感じてしまうのは、私がそういうあり方を望んでいるからかも知れませんね……）

亡国の姫君が征服者を成敗し祖国を回復する。どこぞの三流小説の題材にでもなりそうな話で、我ながら庶民嗜好だとクロノワは苦笑してしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「すごいですね……」

もう何度目かも解らない感嘆のため息をリリーゼは漏らした。

披露宴の会場として使われているこの王宮の大広間は、ため息が出るほど壮麗に飾り立てられている。リリーゼのような反応を示しているものは他にも多々見受けられた。

「これってレヴィナス皇太子が取り仕切ってやらせたんですよね？」

「ええ、そういう話でしたね」

今リリーゼの隣にいるのは、彼女の直接の上官に当たるフィリオ・マルキスである。彼らはクロノワの随行員としてこの場にいた。

本来、クロノワが連れて行くつもりだったのは主席秘書官であるフィリオだけだったのだが、

「華々しい席に野郎二人で行くなんて寂しすぎます！」

とフィリオが駄々をこねたため、急きょリリーゼにも声がかかったと言うわけだ。ちなみにグレイスに声がかからなかったのは、彼女を連れて行くとストラトス・シュメイルが仕事をサボって総督府の業務が滞るのでは、という懸念があったからである。総督たるクロノワが仕事を空ける以上、そのしわ寄せをもっとも受けるのは執務補佐官たるストラトスで、そんな彼に仕事をサボらせるわけには

いかないのだ。今頃は椅子に縛り付けられて仕事をしていることだろう。

「これはこれは、美しいお嬢さんですな」

そういいながら近づいてきた男の年の頃は、三十半ばから四十の始めと言ったところだろうか。フィリオとリリーゼはこの男性と直接の面識はない。だが、前々から名前は知っていたし、他の招待客が彼の名を呼んでいたので、名前と顔は既に一致していた。

「ゲゼル・シャフト・カンタルク陛下……！」

彼の治める国であるカンタルクが、南の位置する因縁の隣国ポルトールと現在戦争中であることは、フィリオとリリーゼも知っている。カンタルクはオムージュ領と国境を接しているから、結婚式に彼を招待するのは礼儀だが、状況を鑑みるに代理の大使が来るであろうというのが大方の予想であった。しかし、その予想を裏切って本人がこの場に来ている。

（つまり戦局はそれほどまでにカンタルク有利、ということでしょうか……？）

フィリオはゲゼル・シャフトがこの場にいることの意味を何とかして洞察しようとする。そんな彼には目もくれず、ゲゼル・シャフトはリリーゼに次々と背中がむず痒くなるような賞賛の言葉を浴びせていた。リリーゼとしてもどう対応したらいいのか分からず、曖昧に笑っているしかない。とはいえ嬉しいよりも恥ずかしい、というのが彼女の内心の感想であった。

「ところでお嬢さん。私と一緒にカンタルクに来るつもりはないか

な？」

三分ほどの間、途切れることなく賞賛の言葉をリリーゼに浴びせ続けたゲゼル・シャフトは、唐突にそう切り出した。

「それは……！」

さすがにリリーゼでもその言葉の意味するところは分る。すなわち、「自分の後宮に入るつもりはないか」と言うことである。

この時代、女性にとって王者の後宮に入ることは、一つ究極の目的であるといえる。そこに入ってしまえば贅の限りを尽くした生活が保障され、寵を受けるようになれば一国の命運すら左右する立場を得ることになる。

とはいえ、リリーゼはこの申し出になんら魅力を感じなかった。彼女が求めているのは豪勢な籠に入れられた小鳥の生き方ではない。大空を自由自在に飛び回る隼のような生き方をしたいのだ。もしかしたら彼女には鋭い爪も嘴もないのかもしれない。しかしそれでもリリーゼはすでに籠から一歩外に出てしまったのだ。果てしなく続く大空を知ってしまったら、もう籠の中へは戻れない。

だがしかし、相手は一国の王である。その申し出はどこまで本気かは分らないが、感情と願望に任せて断ってしまうには相手が悪い。答えるにも答えられず、内心で冷や汗を流していると、ありがたいことに助けが入った。

「困りますね、ゲゼル・シャフト陛下」

「クロノワ閣下……！」

にこやかな笑みを浮かべながら近づいてきたのは、クロノワ・アルジャークその人であった。クロノワはそのままリリーゼに近づくと、おもむろに彼女の腰に手を回して軽く引き寄せた。

「え……！」

突然のことにリリーゼはドギマギして顔を赤くする。そんな彼女のことを、恐らくは意図的に無視して、クロノワはゲゼル・シャフトへと視線を向けた。

「彼女は私の大切な部下です。いかに陛下といえど、お渡しするわけには参りません」

「これはこれは。なるほど……」

ゲゼル・シャフトはクロノワの言葉など聞いていなかった。クロノワもまた言葉で拒否の意思を伝えようなどとは思っていない。

「俺の女に手を出すな」

と、つまりはそういうことだ。親しげな二人の様子は明らかに“男女の仲”があることを示唆している。もちろんクロノワがそう誤解させているだけなのだが。

「私の申し出は野暮だったようですな」

もともとあまり本気ではなかったのか、ゲゼル・シャフトはあっさりと引き下がった。それではこれで、と背を向けてまた別の女性に声をかけに行く彼の姿を見ながら、クロノワはため息をついた。

「まったく、ゲゼル・シャフト陛下も困った方ですね」

好色家として知られている彼であったが、このような席で露骨に女性を口説くとはおもっても見なかった。

「なんにせよ助かりましたよ、閣下。あやうくまた総督府の男性比率が上がるところでした」

冗談めかしながらも安堵の表情を浮かべるのはフィリオだ。

「あ、あの……！」

顔を真っ赤にしたリリーゼが声を上げた。クロノワが回した腕は彼女の腰を抱いており、いまだに二人の体は密着している。薄いドレスの生地を通して感じる熱が、リリーゼの鼓動を速くする。

「ああ、これは失礼」

そう言ってクロノワはリリーゼを放した。こちらはどこまでも平然としており、焦った様子など微塵もない。顔を赤くして動揺しまくっているリリーゼとはどこまでも対照的で、それがさらに彼女を気恥ずかしくした。

「……かっかのばかぁ～……」

男二人には聞こえないように、リリーゼは小さく不満を漏らした。

「それにしても……」

そんなリリーゼの様子を、恐らくは意図的に無視して、クロノワは披露宴の招待客を見渡した。

「聖職者の姿が目立ちますね……」

確かに、大広間にはロザリオを下げた聖職者の姿が多数見受けられる。

「アレですよ、閣下。今、オムージュの貴族のところには聖職者がよく転がり込んでいるそうですよ」

一家に一人どころか二人三人という所もあるという。転がり込んだ先で何をしているかといえば、美食を貪り美酒をあおり美女と戯れていると聞く。

「うわ……」

羞恥心から回復したリリーゼが呆れた声を上げる。

「誤解のないように言っておきますが、彼らの生活スタイルは今に始まったものではありませんよ」

貴族の下に転がり込んで遊び始めたわけではない。彼らはもともとそういう生活を送っていたのだ。

聖銀（ミスリル）の売却益で教会が年間活動予算のおよそ三割を得ていた、という話は前にした。この三割、細かい事情を四捨五入し多少の独断と偏見を混ぜて断定するならば、豪遊費であった。教会という、国土と国民を持たない組織だからこそ、こういうありえないお金の使い方ができたのだ。

聖銀（ミスリル）がもたらす潤沢な収入が、聖職者たちの一般にはありえないその豪遊の生活を可能としていたのだが、その製法がどこからか流出してしまい、それどころか短期間のうちに大陸中に広まってしまった。当然聖銀（ミスリル）の値は下がり、教会は年間活動予算のおよそ三割という巨額の収入を失った。

しかし失った分は言ってしまえば遊ぶ金である。豪遊さえ止めてしまえば何の問題もない。ないはずであった。

「止められるわけがありませんよ。長い間そうやってきて、染み付いているのならなおのことです」

そして豪遊費を失った聖職者たちが遊び続けるために取った行動が、「貴族の下に転がり込む」という選択だったわけだ。

貴族の側にしてみても聖職者を庇護していると言うのは体面にいい。「司祭さまがご入用である」というのは増税をするのにもっともらしい理由に思える。

なんとも欲にまみれた結びつきであるが、それだけに強固であるともいえる。皇太子の結婚式披露宴にまでしゃしゃり出てくるのだから、相当なものだろう。

「忙しくなりそうな予感がしますね……」

ただでさえレヴィナスが建築計画の促進のために増税し、さらにはその増税分を過去にさかのぼって適用しているのだ。つまりオムージュ領の民は増税分と、過去の未納分を収めなければならない。さらにそこに聖職者の豪遊費まで負担させられては、とうてい払いきれるものではない。

「流民対策を考えておく必要がおりますね」

フィリオもクロノワの予測を肯定した。

ため息しか出ないほど壮麗に飾り付けられた大広間。しかしその

裏で支えているのが民の血税だと思うと、その神々しさはどうしても翳って見えてしまうのだった。

第五話　傾国の一撃？

アルジャーク帝国皇太子レヴィナス・アルジャークと旧オムージュ王国王女アーデルハイト姫の婚礼が終わり少し経ったころ、ポルトールでも事態は急速に動き始めていた。

ラディアント公をはじめとする軍閥貴族の面々が、王都アムネスティアからそれぞれの領地へと一斉に帰還を始めたということは、すぐにアポストル公ら文官貴族たちにも知れ渡った。

この行動が意味するものはただ一つである。

すなわち、ラディアント公が武力をもってアポストル公を排除することを決めた、ということだ。

領地へと下るラディアント公らの背後を襲うという案もあったのだが、現状まともな戦力はランスローが連れてきた騎兵二千しかない。下手に手を出せば逆襲があるかも知れず、この戦力を自分たちの護衛から外すことに、文官貴族たちは消極的だった。

ここに至り、ついに内戦は避けがたい現実のものとなったのである。

歴史書を紐解けば、この時二人の公爵が掲げた大義名分を知ることができる。

ラディアント公は、「国事を差し置いて私利私欲のために国を売らんとする逆賊コステアを討つ」といって自らの正当性を主張した。

これに対しアポストル公は、「正当なる王統を守るために忠臣としてやむなく兵を起こす」と主張した。

どちらの言い分が正しいかは内戦が終わった後に決まるだろう。正しいほうが勝つのではない。勝ったほうが正しいことになるのだ。

内戦が避けられなくなったこの事態に際し、アポストル公も自身の派閥の貴族たちに、自分の領地に戻って兵を組織するよう命じた。当然ランスローも領地から残りの兵を連れてくるように言われたのだが、彼はそれを断った。

「ティルニア領から兵を動かしたところで所詮は孤軍。王都に着く前に袋叩きにあって全滅するのがオチです」

ティルニア伯爵家はもともと軍閥貴族であるから、その領地は派閥の他の貴族とは異なり国の南部にある。当然回りは敵だらけで、領地から軍を出そうとすれば袋叩きにあうのは目に見えている。

「それよりも、領地に兵を残しておけば、ラディアント公もそれを警戒し兵を残さなければなりません」

そうなれば王都近くで決戦する際のラディアント公の兵力を減らすことができる。むざむざと兵を全滅させるよりは、よほど賢い選択と言えるだろう。

「フン！」

と不満そうに鼻をならしてアポストル公はランスローの言葉を受け入れた。

ランスローは父であるアポストル公に先のように説明したのだが、

彼個人の思惑は若干異なる。もし領地から兵を連れてきてしまえば、領地そのものが、ひいては妻のカルティエが無防備となってしまう。十分な戦力がいなければ領地の蹂躙は容易かつ迅速になされてしまい、そのときにカルティエがどのような目に遭うのかなど想像したくもない。彼女の身を守るためにも、残してきた領軍を動かしたくはなかった。

とはいえやはり賭けの部分もある。領地に軍を残しておけばラディアント公はそれを警戒するだろう。警戒して押さえに兵を残していくくらいならよい。だが、後背の憂いを絶つために全力でティルニア領を落としにかかる可能性も十分にある。

（だがラディアント公の目的は父上のはずだ……！）

だからラディアント公は余計な道草などせず、真っ直ぐに王都アムネスティアを目指してくる可能性のほうが高い。高いが十割ではない。ゆえにランスローはやきもきさせられるのだ。

さて、忘れてはならないのがカンタルク軍である。

カンタルク軍はブレントーダ砦から動いていない。ただ交渉等で使者のやり取りはしているし、斥候の報告では砦近くのポルトール領内で連日五万人以上を動かす大規模な演習を行い、こちらを威圧してくれている。

これから始まる内戦は、内戦であるからポルトールの勢力同士が戦うわけである。しかし現実問題としてカンタルク軍という第三勢力が存在している以上、これを無視することなどできない。しかも厄介なことに、この第三勢力が最も戦力を持っているのである。考えれば考えるほどこの状況で内戦を戦うことは無意味どころか有害でしかなく、ランスローの気分は加速度的に沈んでいく。

しかしアポストル公の考えは違う。彼はこの状況だからこそ内戦を戦う意味があると思っていた。

三つの勢力の戦力数を単純に比べてみると、アポストル公の派閥十万、ラディアント公の派閥十二万、カンタルク軍十八万となっている。ただアポストル公とラディアント公について言えば、これは最大限に動員できる人数であるから、今回の内戦で動くのは恐らく多くても半分程度だろう。時が最大の要であることも重々承知しているだろうし。

さて、こうして比べてみるとアポストル公が如何に不利な状態かよくわかる。軍閥貴族を束ねるラディアント公に対して、第一に兵の数で及ばず、第二に兵の質で及ばず、第三に指揮官の質で及ばない。かろうじて兵と指揮官の質で並びうるとすれば、ランスローが鍛えてきたティルニア軍だけだろう。

だからこそ、是が非でもカンタルク軍を引き込む必要があるのだ。今カンタルク軍は単純な戦力でも頭三つ分くらいはずば抜けている。さらに総司令官はかのウォーゲン・グリフォードである。指揮能力は申し分ないし、その隷下にいる兵は精鋭ぞろいだろう。

単純な話、今回の内戦はカンタルク軍を味方にしなければ勝てない。ラディアント公もカンタルク軍を味方に引き込むべく画策していると思うが、彼の場合カンタルク軍は最悪敵対しなければそれでよく、アポストル公より状況は切迫していない。

「カンタルクはマルト王子に、我々に交渉を申し込んできたのだ。大丈夫、カンタルク軍は我々の味方だ……」

アポストル公の憶測はある程度の説得力をもっている。しかし楽観が過ぎるようにランスローには思えた。

カンタルク軍がどちらの味方をするかは、結局のところウォーゲン・グリフォードの胸一つである。勝敗を左右する要素が不確定要素であるとは、一体どんな神頼みの状態なのだろう？

（結局カンタルク軍の一人勝ちではないか……！）

内戦に干渉するにせよ、傍観するにせよ、はたまた独自行動をとるにせよ、一番美味しいところを持っていくのはカンタルク軍であるに間違いない。

（ええい、ままよ……！）

こうなってはランスローとしても個人の利益を追求するしかない。彼にとって最大の利益とはすなわちティルニア領を、ひいてはカルティエを守ることであり、そのためにはこの内戦、アポストル公に勝ってもらわねばならない。

（これ以上カンタルク軍について考えても仕方がない）

カンタルク軍が最大の懸案事項であることは間違いないが、かといって打てる手も限られている。せいぜい援助をもとめる書状を出すくらいだ

（それよりも考えるべきは……）

それよりも考えるべきは、派閥に属さない中立の勢力だろう。

この場合魔導士部隊は考えなくとも良い。この部隊はブレントー

ダ砦で壊滅的被害を受け、現在再建の真最中だ。そもそもカンタルクと同じくここポルトールでも魔導士という劇薬は国家によって管理されており、アポストル公にしろラディアント公にしろ、手持ちの魔導士は少ない。精々護衛につけるのが精一杯だ。注意が必要なのは、王都近衛軍である。

王都近衛軍はポルトールにおける最精鋭部隊であり、国王の直接の指揮下にある。兵力は三万で、王都アムネスティアに通じる三つの街道に置かれた関所の管理と、戦場における国王の護衛が主な任務である。

この王都近衛軍は得がたいものを二つ持っている。

一つは単純な戦力である。最精鋭部隊三万が丸ごと味方に加わってくれれば、カンタルク軍を当てにせずとも、おそらく戦力は拮抗できる。

そしてもう一つが王都近衛軍の管理している関所である。関所と言うよりはちょっとした砦を想像してもらったほうが近い。この“砦”は王都を中心にして北、南西、東に配置されており、ラディアント公の軍が王都を目指す場合には南西の関所を通ると思われる。もしここに篭って戦うことができれば、戦力差を多少なりとも埋めることが可能だ。

自前の戦力に不安があるアポストル公はこの二つを手に入れるべく、王都近衛軍を味方に引き込もうと様々に画策したのだが、すべて徒労に終わった。

「王都近衛軍は国王陛下の直属部隊。陛下を別にしては何者からも命令を受けはしない」

王都近衛軍司令官エルトラド・フォン・ジッツェール伯爵はそう言って、アポストル公からの使者を追い返した。

「あの石頭め……！」

その時のことを思い出してアポストル公は苦々しく呻き、机を拳で叩いた。

「……エルトラド伯の説得ですが、私がやってみましょうか？」

「お前が……？」

ランスローの申し出に、アポストル公は怪訝そうに眉をひそめた。彼はこれまで事態に積極的に関わろうとしてこなかったため、不審に感じている部分もあるのだろう。

「この戦いに負けて困るのは私も同じです」

半ば投げやり気味にそういうと、アポストル公はひとまず納得した様子だった。

「ふん。このまま何もせずいるよりはいいだろう」

少しばかり毒気の含まれた言葉に、ランスローは頭を下げた。

（さて、私は私のために少しでも勝率を上げるとするか……）

他の誰でもない自分のために。そしてひいては愛する妻のために。

第五話　傾国の一撃？（後書き）

感想を下さった方々、本当にありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

第五話　傾国の一撃？

「今度は貴方ですか、ランスロー子爵」

半ばうんざりした様子で、王都近衛軍司令官エルトラド・フォン・ジッツェール伯爵はランスローを迎えた。

「何度来られようとも、私の返答は変わりませんぞ」

「まあそう言わず、話だけでも聞いていただけませんか」

そう言うと、エルトラドはランスローを執務室に迎え入れた。部屋のソファーに向かい合って座るやいなや、まず口を開いたのはエルトラド伯の方であった。

「ランスロー子爵、貴方は派閥抗争の中にあっても比較的まともであると聞いておる。ならば分っているはずだ。今この状況で内戦を戦うことの愚かしさが」

私よりも先にお父上を、アポストル公を説得するのが先のはず、とエルトラド伯は説く。その言葉が正しいことはランスローも重々承知している。そして同じくらい無意味だと言うことも。

「……残念ですが、私が言ったところで父は聞かないでしょう」

「……でしたら、これ以上お話しすることは何もありませんな……」

王都近衛軍は国王陛下の、ひいてはポルトール王国の剣。内戦などに使うべきものではないし、使うつもりもない。内戦が避けられないのであれば、むしろ積極的に温存しておかなければならない。

そういってエルトラド伯は自分の決意を語った。

王都近衛軍がそうであるように、エルトラド伯個人も派閥抗争に関しては中立を守ってきた。彼は中立貴族の中では力のある貴族で、それゆえに先王ザルゼス陛下からも頼りにされていたと聞く。そんな彼だからこそ、敬愛する主君の後継を争う内戦は見るに耐えないものなのだろう。

「お引取りを願いたい」

硬い声に拒絶の意思を乗せてエルトラド伯は言った。だが、ランスローとしてはここで引き下がるわけにはいかない。この内戦がいかに馬鹿馬鹿しいものであろうとも、彼としては勝たねばならず、そのための努力をすると決めたのだから。

「確かに内戦に王都近衛軍を使うのは馬鹿げています。それは私も同じ考えです」

ランスローがそういうと、予想していなかったのかエルトラド伯は眉をひそめた。

「ですが、相手がカンタルク軍であったらどうでしょう?」

「カンタルク軍、ですか……」

アポストル公とラディアント公は二人ともカンタルク軍に助力を願い出ている。その内容は、若干は異なるかもしれないがおおよそ同じはずだ。しかしカンタルク軍がそのどちらか一方を必ず受け入れる、という保証はない。二人の公爵が内輪もめをしている間に、ポルトール国内で無法を働く可能性だって十分にある。

「王都近衛軍司令官殿には、アシュタドの門に近衛軍全軍を集め、

カンタルク軍に対処していただきたい」

アシュタドの門とは王都近衛軍が管理している三つの関所の一つで、北の街道に置かれている。ちなみに東の街道に置かれている関所はツェボルの門といい、南西の街道に置かれている関所はゼガンの門という。

ちなみにこれは命令ではない。王都近衛軍司令官に命令できるのは国王唯一人である。しかし要請することならばできるし、国王不在の今、その要請を受け入れるかはエルトラド伯の胸一つである。

ランスローの申し出を聞いたエルトラド伯は眉間に寄せたシワをさらに深くした。

王都近衛軍は確かに精鋭ぞろいである。しかしその戦力は三万。カンタルク軍十八万に対処するにはどう考えても少なすぎる。それが解らないランスロー子爵ではあるまい。

エルトラド伯はランスローの言葉をもう一度思い出し、その裏にある意図を探った。そして彼が出した結論は、

「……ゼガンの門を明け渡せ、いや不法占拠を黙認しろ、ということですかな」

その答えに、ランスローは満面の笑みを浮かべた。無論、業務用であったが。

王都近衛軍がアシュタドの門に全軍を集めれば、当然残り二つの門は空になる。空になったその門を失敬させていただこうと、ランスローは考えたのだ。これならば欲しいものの一つは手に入る。

「この辺りが良い落とし処だと、そうは思われませんか？」
「いや、しかし……」
渋るエルトラド伯に、ランスローは言葉を続けた。
「このまま王都近衛軍がゼガンの門に残っていれば、父は攻撃を仕掛けてでも門を奪うでしょう」
「……私を脅すおつもりか……！」
だがその可能性が高いことはエルトラド伯も承知している。野戦をおこなうとなれば、アポストル公はラディアント公に及ばない。となれば篭るための拠点がどうしても必要になる。協力してもらえないのなら力ずくで、とそう考えるようになるだろう。
「それにゼガンの門に篭らないとすれば、王都に篭ることになります」
そうすると今度は街道を北上してくるラディアント公が、王都近衛軍がアポストル公に味方していると考えて、門に攻撃を仕掛けるかもしれない。そうでなくとも王都攻略の拠点として門を欲するかもしれない。
「……門を開いておけば、そのようなことにはならないでしょう……」
エルトラド伯の口調は弱い。そのことに同情を覚えながらもランスローはさらにたたみ掛ける。
「ですが、それでは王都アムネスティアが戦場になってしまいます」

そうなれば王都近衛軍の存在価値はどこにあるのか。そう言うとエルトラド伯は苦々しく顔を歪ませた。

部屋の中を、しばしの間沈黙が支配する。その沈黙は重く、エルトラド伯の心の葛藤の深さを思わせた。

ランスローもまた何も言わない。言うべきことはすでに言った。後はエルトラド伯の出方次第だ。

「……分りました。王都近衛軍は全軍をアシュタドの門に集め、カンタルク軍に対処することにしましょう」

ただし！とエルトラド伯は強い調子で続けた。

「王都近衛軍はツェボルの門とゼダンの門の管理権を放棄するわけではない。あくまでも一時的に空になるだけのことですぞ」

貸すわけではない、状況ゆえに不法占拠を見逃すだけだ、ということだ。その建前がなければ、王都近衛軍がアポストル公に味方したと思われてしまう。ランスローの見積もりどおり、この辺りが最大の妥協点だろう。

「それで十分です、エルトラド伯。ご理解に感謝いたします」

恭しくランスローは頭を下げた。これでラディアント公に対してなんとか五分々々の戦いをすることができるだろう。そんな彼にエルトラド伯は苦笑する。

「さて、何に対する感謝ですかな」

「それはもちろん、“カンタルク軍の押さえ役を買って出て下さっ

たこと”に対して、ですよ」

満面の笑みを浮かべてランスローはそういった。今度の笑顔は業務用ではなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「こうも上手くいくとは思わんかったな……」

机の上に並べられた二通の書状を前にして、ウォーゲン・グリフォードは苦笑をもらした。並べられた書状の差出人はアポストル公とラディアント公である。そしてその内容はまったくと言っていいほど同じで、つまるところが、

「自分たちに味方してくれ」

ということであった。ただ二通の手紙には温度差がある。アポストル公の手紙からは必死さが窺えるのに対し、ラディアント公からの手紙は、敵対はしないで欲しいといった程度に抑えられていた。その温度差がそのまま二人の公爵の戦力差を表しているようで、ウォーゲンとしては苦笑するしかない。

「儂らが敵で侵略者であると、忘れておるのではないかな」

国家の末期症状を示す言葉として、こんなものがある。

「派閥抗争は癌のようである。彼らは外の敵よりも内の味方を憎む」

まさに今のアポストル公とラディアント公の状況に当てはまるだろう。カンタルク軍という外敵を抱えているこの状態だ。いくらカンタルク軍がブレントーダ砦から動かずいまだ領地に実質的な被害

が出ていないとはいえ、そのような状況で内戦を戦うことを決意するなど、利害関係を超えた憎悪がなければ決断できるものではない。しかもその外敵と手を結ぼうとしているのだがから、もはや救いようがないと言っていい。

「さて、決戦（パーティー）の招待状をもらったのに出向かないのは無作法じゃろうな」

ウォーゲンはニヤリと壮絶な笑みを浮かべてそういった。それを側で聞いていた三人の副官は一様に緊張で体を硬くした。

「……出陣、なされるのですね？」

モイジュの口調は疑問ではなく確認だ。その言葉には隠しようのない熱がこもっている。彼もまた間違いなく戦士だ。

「ウィクリフ、ひよっこ共の様子はどうじゃ」

「十分実践に耐えうるかと。もちろん元々の精鋭の代わりにはなりませんが」

ウィクリフの言葉にウォーゲンは頷いた。彼自身、新兵五万の調練を何度か視察し、その動きがさまになってきていることを確認している。

「二日で準備を整えよ。それが済み次第、出陣する」

「二日、ですか……？準備は一日もあれば可能ですが……」

アズリアが怪訝そうにそう言った。もとより今は遠征中。兵士各員は大将軍の声がいつかかってもいいように常に準備をしている。余裕をもって見積もったとしても、準備に二日もかからない。

「主役は遅れて到着するものじゃ」

その言葉で副官三人はウォーゲンの真意に気づいた。どちらに味方するにせよ、彼は二人の公爵を争わせ戦力を消耗させるつもりなのだ。

「それで、どちらに味方なさるおつもりなのですか？」

ウィクリフが三人を代表する形で最大の懸案事項を尋ねた。

「そうじゃな、弱いほうに味方すれば大きな恩を売れるじゃろうが、強いほうに味方して確実に勝つというのも捨てがたい」

両方まとめて叩き潰すのもいいのぅ、とまるでレストランでメニューを選ぶかのような気楽さで、ウォーゲンは答えた。

「……つまり、まだ決めておられないと？」

「ま、道すがらゆるりと考えるとするかのぅ」

悪戯めかしてウォーゲンはそういった。彼が本当にまだ決めていないのか、三人の副官は互いに目配せしつつ考えたが、老将の言葉や表情からその心中を察するには、彼らはまだまだケツが青い。

第五話　傾国の一撃？（後書き）

第五話もそろそろ佳境。
感想お待ちしております。

第五話　傾国の一撃？

アポストル公は派閥の軍を率いてゼガンの門に陣を張った。

余談であるがここから先、アポストル公の派閥の軍を「アポストル軍」、ラディアント公の派閥の軍を「ラディアント軍」とそれぞれ呼称する。

五日前の情報によると、カンタルク軍はゆっくりと南下しているらしい。今のところ略奪などの無法を働いている様子はないという。彼らにしてみれば、そんなことをしなくとも戦利品は約束されているようなものなのだろう。

（だとすれば我々は彼らに貢物を送る僕といったところか……）

笑えない役回りだ、とランスローは苦笑した。しかも現状その役回りから逃れられそうにないのだからもっと笑えない。

アポストル軍とラディアント軍の戦端はすでに開かれてしまった。ラディアント軍が街道に現れたのは、昨日の夕方のことであった。既に斥候を放ち状況を承知していたのか、ラディアント軍は躊躇なくゼガンの門に攻撃を仕掛けた。

ランスローも連れてきた騎兵二千騎を率いて戦った。戦況は終止ラディアント軍有利であったが、街道を急いで駆け上ってきた疲れのせいか夜が来ると軍を引き、今は遠目でかろうじて見える程度の距離に陣を張っている。

城壁の上からランスローが見下ろすと、昨日の戦いで死んだ兵士

たちの遺体がそのまま捨て置かれている。完全武装の兵士や馬に踏まれたせいか、もはや人の形を保っていないもの多々見受けられた。

（いずれ必ず埋葬する）

敵味方関係なく、とランスローは心に誓った。

ラディアント軍の士気は高い。彼らにしてみればカンタルク軍が来ようが来なかろうが、ここを落とせば勝ちなのだ。いや、カンタルク軍が来て余計な横槍を入れられる前に落としてしまいたい、というのがラディアント公の胸のうちだろう。嫌でも気合が入る。

加えて、ラディアント軍の陣頭にはラザール王子が立っている。実際に戦うことはないだろうが、それでも甲冑を身にまとって戦場に立ち命をかけて見せることで、敵兵の士気が上がっている。

対照的に兵の士気がなかなか上がらないのがアポストル軍だった。このゼガンの門がなければ、とうに瓦解していてもおかしくない。アポストル公は、「カンタルク軍が必ずや援軍に来る！」と言って兵士たちを鼓舞しようとしていたが、多くのものは半信半疑、いや信じていない者のほうが多いだろう。昨日の今日、いや今この瞬間でさえ“因縁の敵国”であるカンタルクをそうそう信じられるものではない。当然だ。

ランスロー自身の士気も上がりきらない。

本来籠城とは援軍を期待して行うものだ。しかしこの場合、待ち望むべき“援軍”が本来侵略者であるはずのカンタルク軍であるというのは、どういう冗談だろう？しかも本当に援護に来てくれるか、それさえも分らないのだ。待ちに待ったカンタルク軍が敵として現れたとき、自分たちに残されているのは神々を呪う権利だけだ。

（いかんな、指揮官たるものが自分の士気に左右されていては……）

昨日、ランスローが率いたのは直属の騎兵二千騎だけであったが、今日からは門の外で戦う前線部隊全ての指揮を任されることになっている。

理由は至極単純なものが二つある。

一つは彼以外にまともに指揮をとれる者がいないこと。そしてもう一つは部隊指揮官に相当する文官貴族たちが最前線に出ることを嫌がったからだ。

「無駄飯ばかり食う役立たず共が！飯を食わぬ分死人のほうが役に立つ！！」

ランスローの腹心であるイエルガは、事情を知ると大声でそう罵った。

「無能者にウロチョロされることなく、かえってやり易い」

そう言ってランスローは彼をなだめた。ランスローとしても心中はイエルガと同じだが、かといっておおっぴら同意するわけにもいかない。だが言葉に毒が混じるのはどうしようもなかった。

（私は聖人君子ではない。かまうものか……！）

もとより聖人君子であれば派閥抗争になど関わるまい。ならば自分は俗物で、俗物であるならその辺りが限界だろうと、彼は開き直るのであった。

「ここにおられましたか、ランスロー様」

声のしたほうに視線を向けてみると、イエルガが城壁を登ってくるところであった。ランスローが前線部隊全てを預かるに際し、彼にはティルニア軍の騎兵二千とさらに歩兵四千を率いてもらうことになっていた。歩兵四千は弱兵の中でも精鋭と呼べそうなものを集めてある。その役回りは遊撃隊で、恥ずかしい話しだが劣勢に陥っている箇所をひたすら援護して回ってもらうことになっていた。

「悪いがかなり本気で期待している」

アポストル軍は弱くて脆い。一箇所崩れたのを皮切りに全軍が崩壊しないか、ランスローは危惧していた。そうならぬようにイエルガに全てを押し付けようというのだ。おそらく今日の戦い、最も負担が大きいのは彼の部隊だろう。

「大変なのはランスロー様もご一緒でしょう？練度の低い兵を率いて戦わねばならないのですから」

二人は顔を見合わせて苦笑した。まったく、敵の強さに頭を悩ませるなら本望だが、味方の弱さに苦慮するというのはどうにもやりきれない。

「……もうすぐ日が昇りますな……」

イエルガが東の空を眺めながら言った。日の出が狼煙の代わりとなるだろう。恐らく今日は一日中戦うことになる。

「さて、いくとするか」

戦場へ。まさか指揮官が遅れるわけにはいかない。

生き残れるのか、勝てるのか、それは神々のみが知っている。ランスローはそう思うことにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

分っていたことではあるが、アポストル軍は劣勢だった。後ろにゼガンの門があるから崩壊せずに戦っているような状態だ。あの門を使えるようにした自分を褒めてやりたいとランスローは思った。

イエルガの率いている部隊だけは敵と互角以上に戦って見せている。しかし、劣勢に立たされている部隊を助けるべく戦場を駆けずり回っているせいか、思うような戦果を上げられないでいる。

（とはいえ、そのおかげで戦線を維持しているような状態だが）

とはいえ劣勢であることは間違いない。このままではジリ貧である。遅かれ早かれこのゼガンの門は落ちるだろう。その前にカンタルク軍が、しかも味方としてきてくれなければ、ランスローは二度とカルティエの顔を見ることはできないであろう。

（なかなかに厳しい条件だ……！）

ラディアント軍の騎兵隊が突撃を仕掛けてくる。それを認めたランスローは、短く舌打ちをするとすぐに指示を出した。

「槍兵隊密集しろ！腰を落として盾を構えろ！槍を突き立てて騎兵の足を止めるぞ！」

アポストル軍の兵士たちは不慣れな様子ながらも、ランスローの指示にしたがって動く。ただランスローとしては命令しなければな

らないことの多さに苛立っていた。さっきの指示にしてもきちんと訓練されていれば、

「槍兵隊、騎兵の足を止めろ！」

と言うだけでいいのに、具体的な行動まで指示しなければ兵はどう動いていいのか分からないのだ。今回はランスローの指示が早かったおかげか、騎兵の突撃を許す前に隊列を整えることができた。

整然と突き出された槍の壁に、敵騎兵隊の足が一瞬止まる。そこに城壁から一斉に矢の雨が降り注ぐ。これもランスローの指示だ。

弓兵のほとんどが城壁の上に配置されている。理由は至極単純で、高いところから射たほうが遠くまで届くから。その弓兵たちにランスローは騎兵を、特に足を止めた騎兵を優先的に狙うように指示を出していた。その理由も単純で、騎兵は的がでかくて当てやすいからである。

降り注ぐ矢の雨が敵騎兵隊に出血を強いる。矢が刺さり暴れた馬から落とされ、さらには味方に踏まれる敵兵が見えた。

「前進！押し返せ！！」

ランスローが指示を飛ばすと、そのまま槍を構え密集した歩兵たちが前進し、敵騎兵を押し返していく。本来ならこのまま反転攻勢に出たいのだが、所詮これは局地戦、全体としてはいいようにやられている。まさかこの部隊だけ突出させるわけにもいかず、追い払うだけになる。

「深追いはするな！すぐに次が来るぞ！」

今しがた得た小さな勝利はすぐに忘れ去り、ランスローは指揮に没頭する。次の敵部隊が整然と隊列を組み迫ってくる様子を、彼は鋭い目で見据えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「よく粘るな」

それがラディアント公の印象だった。正直なところ文官派閥の脆弱な軍など一戦すれば軽く破れると思っていたのだが、なかなかどうしてよく粘る。アポストル軍がゼガンの門に籠もっていたことは可能性としては考えていたし、斥候を放っていたおかげで早期に知ることができたため、驚きはしなかった。しかし、敵前線部隊のあの粘りは想定外だ。敵ながら天晴れ、というべきだろう。

「ランスロー子爵が陣頭指揮をとっているとか」

「ティルニア家に婿入りしたアポストル公の三男坊か」

彼の名前は知っていた。しかし、王都で政治工作に走り回っていたのは義父のティルニア伯爵だったし、正直なところラディアント公の辞書の彼の項目にはアポストル公爵家の三男坊としか書かれていなかった。

「ふん。婿入り先で無駄飯を食っていた訳ではないということか」

どうやらランスロー子爵の項目は書き直さねばならないようだ。しかし、この先さらに書きかえる必要はあるまい。なぜなら彼はここで死ぬのだから。

「どれだけ個人の能力が高かろうとも、率いているのは所詮は弱兵。ゼガンの門が落ちるのも時間の問題よ」

それはランスローも感じていることであったし、もしこの戦いを他の用兵家が観戦していれば同じ判断を下すだろう。

「とはいえそう時間をかけてもおれぬか」

これがただの内戦であればそれでもいいかもしれない。しかし今回に限っていえば、カンタルク軍が横槍を入れてくる前に終わらせる必要がある。

「予備戦力を投入するぞ。これで終わりにする」

戦局は最終局面へと転がっていく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ラディアント軍の温存されていた予備戦力が動き出したことを、ランスローはすぐに察知した。あれの突入を許すわけにはいかない。許した時点で敗北が決まると言っていい。ラディアント公もここで決めるつもりなのだろう。

ランスローはすぐに決断を下した。こちらも残っている戦力を全てつぎ込む。

「弓隊、敵突出部隊に矢を集中しろ！！」

さらに城壁からの援護射撃を動き出した敵部隊に集中させる。今まで援護射撃の笠を被っていたところが劣勢になるだろうが、こち

らが優先だ。

「隊列を密にしろ！押し込まれるなよ！！」

猛烈な勢いで敵が迫ってくる。その突撃を援護する矢の豪雨と迎撃しようとする矢の豪雨が交錯する。

「防げ！！」

ランスローが指示するまでもなく、兵たちは盾を重ねるようにして降り注ぐ矢を防ぐ。

「迎撃、用意！！」

矢の豪雨が一段落すると、ランスローはすかさず指示を飛ばす。敵の勢いは若干弱くなっているようにも思うが、まだまだ勢いがある。

――――激突。

「持ちこたえろぉぉぉぉおおお！！！」

ランスロー自身も馬上で槍を振るい群がる雑兵を払いのけながら、檄を飛ばす。被害を出しながら、一歩二歩とじりじり押されながらも兵士たちはよく堪えてくれた。

敵の圧力がだんだんと弱くなり、力が拮抗したその瞬間、

「弓隊、援護！！押し返せ！！」

ランスローの命令とほぼ同時に城壁から矢が射掛けられる。その援護を笠に押し込まれていたアポストル軍は敵軍を押し返し、押し戻していく。さらに勢いがなくなった敵軍の側面をイエルガの率いる部隊が絶妙のタイミングで突いてくれ、なんとか一回目は防ぐことができた。

だが防いだだけだ。イエルガにしても他の援護に回らなければならず、効果的に追撃を仕掛けることができない。

（ここは防いで見せたが他がボロボロだ……！）

やはりというか、援護射撃がなくなったことで劣勢に立たされている箇所が幾つもある。さらに見れば今しがた退けたばかりの敵部隊が、既に隊列を組みなおし再び突撃を試みようとしている。

（ここまでか……！？）

諦めが、ランスローの頭をよぎる。

彼は振れば兵が出てくる魔法の壷など持っていない。よってあの突撃を防ぐには他からも兵を集めなければならない。だがそうすれば別の箇所を破られてしまう。一箇所破られれば、それで終わりだ。

（すまない、カルティエ……！）

ランスローが死を覚悟したその瞬間、

――――戦場が、ざわめいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はっはっは、弱兵を率いてアレを防ぐか」

街道から少し離れたところにある小高い岡の上に、戦況を眺めて豪快に笑う一人の老将がいた。老人の名はウォーゲン・グリフォード。言わずと知れたカンタルクの大将軍である。

実際、先程ラディアント軍が仕掛けた突撃は勢いも凄まじく、ウォーゲンもこれで決まるかと思った。しかしその予想は裏切られ、アポストル軍はなんとかしのいで見せた。遠目に認められるアポストル軍の前線指揮官はまだ若く、それがますますウォーゲンを愉快にさせる。

「ですが次はないでしょう」

同じく戦いを観戦していたウォーゲンの副官の一人、モイジュが冷静にそう判断を下した。一回目の突撃を防ぐだけで被害を出しすぎている。また援護射撃を集中したため他の場所が劣勢に陥り、下手をすれば戦線全体が崩壊しそうな状況だ。

「さよう。ここらが頃合じゃろう」
「では動きますか」
もう一人の副官、ウィクリフが尋ねる。

「そうじゃな、兵たちも暇を持て余しておる頃じゃろうし、そろそろ動くとするかの」

ウォーゲンは顔を巡らせて背後を窺う。岡の陰になり街道からは死角になっているそこには、整然と隊列を整えたカンタルク軍十五万が堂々たる軍容を誇っていた。ちなみに残りの三万はブレントーダ砦に残してある。

アポストル軍とラディアント軍に対し、カンタルク軍はそのどちらの側面をもつけるような位置にいる。街道を大きく迂回したのだ。

実を言えばカンタルク軍は夜明けの少し後には既にここに到着していた。だがすぐには手を出さず、機が熟すのを待っていたのだ。そして今まさに機は熟した。

ウォーゲンが腕を上げる。たったそれだけの動作で場が一気に緊張した。

「全軍出撃」

腕が、振り下ろされた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――――戦場が、ざわめいた。

街道から少し離れたところにある小高い岡を埋め尽くすように、甲冑を着込んだ大軍が突如として現れたのだ。どうやらその岡の裏に隠れて機を窺っていたらしい。

その一団が掲げえる旗には翼を持つ獅子が描かれている。

「……カンタルク軍……」

その呟きは、さて誰のものか。

カンタルク軍は一瞬の停滞の後、猛然と動き始めた。津波の如くに岡を下り、そして、ラディアント軍に襲い掛かったのであった。

カンタルク軍がラディアント軍を打ち払っていく様子を、ランス

ローは半ば以上放心しながら見ていた。

だんだんと頭に血が巡るにつれ、音がよみがえり、臭いがよみがえり、痛覚がよみがえる。体中の傷が、これは現実であると伝えている。ランスローの胸のうちにふつふつと湧き上がるのは、勝ったという歓喜ではなく、生き残ったという安堵だった。

ふらつきそうになる体を、馬上から槍を地面に突き立てて堪える。

「命を拾いましたな……」

こちらも死を覚悟していたらしいイエルガが馬を寄せてくる。

「お互いに、な」

ランスローがそういうと、二人はふいに笑ってしまった。無性に酒が飲みたい気分だった。

「何をしている！カンタルク軍と共に敵を駆逐しろ！！」

振り返ると城壁の上からアポストル公が声を上げていた。他の貴族たちの姿も見える。勝利を聞きつけてはい出してきたらしい。

「勝ちが決まったとたんに元気なことだ」

今まで必死に戦線を支えてきたランスローとしては苦笑するしかない。夢心地からいきなり現実に戻された気分だが、おかげで体に力が戻ってくる。

「さて、もう一仕事、だな」

「御意」

槍を引き抜く。ランスローは部隊を纏めると、カンタルク軍の後を追い戦場に駆け出して行ったのであった。

第五話　傾国の一撃　エピローグ

戦場に突如として現れたカンタルク軍はラディアント軍の側面を強襲し、最初の一突きで戦線を崩壊させ、二突き目で敗走させた。

その後は一方的な展開である。もはやただの集団に成り下がったラディアント軍をカンタルク軍は日が暮れるまで追撃し続けた。ちなみにランスローもアポストル軍を率いてその追撃に加わっていたのだが、付いて行くだけで精一杯だったと言うから、その勢いたるや凄まじいものである。

この戦いでラディアント公は派閥に属する貴族の当主三分の一と旗頭にしていたラザール王子を失った。ラディアント公自身は逃げ延びたようだが、この一戦でポルトールの趨勢は決まってしまった。

ラザール王子の戦死については、アポストル公も複雑そうだった。敵対派閥に担がれていたとは言え、彼もまた王族であることに変わりはない。生きている間はむしろ邪魔でしかなったはずだが、死んでしまうとやはり臣下としては思うところがあるらしい。後日、国葬を執り行うと発表した。

その後の動きは、呆れるくらいに速かった。

戦いの次の日には、略式ではあったがマルト王子の戴冠式が行われ、マルト・ポルトール国王陛下が誕生した。お飾りの王であることについては十人中十人の意見が一致しており、実質的にアポストル公がこの国の実権を握ったのである。

戴冠式のすぐ後、新国王の名前で勅令を出させ、宰相位についたアポストル公はすぐさまラディアント公の討伐命令を出した。もち

ろん彼の派閥の軍だけでは対処しきれないのは目に見えているため、討伐軍の中核をなすのはカンタルク軍である。身内の問題を片付けるのに因縁の敵国の力を当てにしなければならないとは、なんと情けない体たらくであろうか。

ランスローも一軍を任されてこの討伐軍に参加したのだが、なによりも彼を驚かせたのはカンタルク軍を率いるウォーゲン・グリフォードの掌握能力であった。彼の命令は末端の兵士に至るまでもれなく伝えられ、そして実行されていく。組織としての差を見せ付けられ、ランスローとしては唸るしかない。

またウォーゲンは進軍するに際し、一般住民に対する一切の暴行と略奪を禁じた。彼にしてみればここポルトールは敵国でしかなく、しかもその敵国の政治闘争に巻き込まれて戦っているような状況なのに、である。

「流血は戦場にとどめておかねばならぬ」

ウォーゲンがポツリともらしたその言葉は、ランスローに深い感銘をあたえた。

「困ったことになった」

ウォーゲン・グリフォードはポルトールを内戦に放り込んでくれた張本人である。それなのにランスローは彼を尊敬し始めている。やれやれ困ったことだと、ランスローはさして困っていない声でぼやいてみせるのだった。

ただウォーゲンにしてみれば、単純に道徳的人道的な理由で略奪や暴行を禁じたわけではない。彼の最大の目的はポルトールを属国にすることであるから、属国化して長期的に富を搾り取るためには、

ここで短気を起こして略奪や暴行を行い住民のカンタルクへの感情を悪化させるのは良くない、とそういう思惑がある。

カンタルクにしてもポルトールは因縁の敵国であり、ウォーゲン個人もこの国に何度となく煮え湯を飲まされているのだ。そういう打算がなければ、理性的に行動するのは難しいのかもしれない。

ただカンタルクと同じくここポルトールでも貴族の力が強く、一般の平民たちの扱いがよくないこともウォーゲンは知っている。平民の出から叩き上げで将になった身としては、そんな彼らにある種の仲間意識を感じてしまうこともまた確かであった。

討伐自体は、さしたる問題もなく簡単に進んだ。

ラディアント公はあのゼガンの門の戦いで戦力を失っている。よって領地に戻って再起を図ろうとしたのだが、いかんせん討伐軍の動きが速すぎた。まともに兵を集める前に攻め込まれ自決した。他の軍閥貴族にしても似たようなもので、ここにおいて軍閥貴族の派閥は名実共に消滅し、ポルトールにおける貴族の数は主観的にも客観的にも半減したのであった。

ティルニア領は無事であった。ラディアント公はティルニア領に残っていた戦力を警戒して押さえの兵を置いていたが、領地に攻め入ることはなかった。なるべく多くの戦力を王都に連れて行きたいと思ったのだろう。

ランスローは領地と妻カルティエの無事を確認すると、何も言わずただ大きく息を吐き出した。彼は領地には戻らず、そのまま軍閥貴族の討伐を続けた。このときカルティエの顔を見に戻らなかった理由を、後に彼はこう語っている。

「貴族として言えば、ポルトールの問題をカンタルク軍に任せておくわけにはいかなかった。個人として言えば、人殺しの顔を彼女に見られたくなかった」

ラディアント公の、軍閥貴族の討伐は、さしたる被害もなく終わり、ここにポルトールの内戦は終結したのである。

戦いが終わったのであれば、次は戦功表彰をしなければならない。ありがたいことに分け与えるべき土地は山ほどある。無論、もともとラディアント公の派閥に属していた貴族たちの領地である。

意外なことにカンタルク軍は土地を一欠けらも要求してこなかった。その代わりにウォーゲンが求めてきたのは以下のことであった。

十五州分の租税を毎年貢としてカンタルクに収めること。塩の関税の九割引き下げ。今回の遠征費の全額負担。さらにカンタルクから監査団を派遣し、今後ポルトールの政は彼らと協議した上で行うこと。

事実上の属国扱いであった。アポストル公もそれは重々分かっていたが、今まで散々力を借りてきた以上、嫌とも言えない。頬を引きつらせながら了承した。

カンタルク軍の次は自分の派閥の貴族たちに恩賞を与えなければならない。もっとも自分の土地を与えるわけではないし、アポストル公も大盤振る舞いするつもりでいた。ただ、何かにつけて考えてから行動しなければならないのが政の世界である。

今回の戦いで最大の功労者は間違いなくランスローである。彼が

ゼガンの門を使えるようにし、さらに前線指揮を執ったおかげでアポストル軍は劣勢ながらもカンタルク軍が来るまで持ちこたえられたのだ。もっともカンタルク軍は早めに到着し、機を窺っていたわけであるが。

最大の功労者がランスロー、というかティルニア伯爵家であるからといって、あまりに大きな恩賞を与えると、今度は身内びいきのそしりを受けかねない。アポストル公爵家の取り分はまた別にあるのだから。

そんな感情問題に配慮しつつ、アポストル公がティルニア伯爵家に与えた恩賞は、国の最南部の「沿岸地方一帯、ただし塩田を除く」であった。これを知ったときランスローは「そう来たか」と苦笑をもらしたものである。

沿岸地方一帯は複数の州にまたがっており、その面積を合計すれば二州強といったところである。面積だけを考えれば広大であるが、この恩賞で貰い過ぎだと感じる貴族はほとんどいないであろう。

ポルトールの第一の敵国は、仮想するまでもなくカンタルクであり、そのカンタルクは内陸国であるから当然陸軍しかない。そうなると自然にポルトールも陸軍に力を入れるようになり、その結果海軍、ひいては海辺の開発自体が軽視されるようになった。つまりポルトールの沿岸部は大して発展していないのだ。

塩田の管理は他の貴族たちが行うようだし、これでは本当に広い土地をもらっただけである。ただ広いことは間違いなく、言ってみればポルトールの海を手に入れたようなものである。その点ティルニア伯はともかくランスローに不満はなかった。

「軍閥貴族が溜め込んでいた財産も分配されて、ちょうど開発資金が手に入った。いっそゼロから始められてやり易いさ」

ランスローはすでに新しい領地の開発計画を考え始めている。それは反面、国政に関わりたくないという彼の願望の裏返しでもあった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

八月の暮れ、全ての仕事を終えたランスローはティルニア領に凱旋した。カルティエは屋敷の前で夫を出迎えたが、ランスローは彼女の異変にすぐに気がついた。

――――お腹が、大きくなっている。

「……カルティエ……、まさか……！」

「はい、ランスロー様。身籠りました」

数瞬の衝撃の後、ランスローはカルティエを優しく抱き寄せた。

「よくやった……。よくやってくれた……！」

父親となる喜びは深く大きく、そして真剣なものであった。内戦を止められず、あまつさえその舞台で一役買った身として、ランスローは言い様のない罪悪感にかられることがある。そんなときに聞いたこの知らせは、まるで天が慰めてくれているかのように、ランスローは感じるのであった。

大陸暦一五六四年。この年、ランスロー・フォン・ティルニアは二つの宝を手に入れる。その一つ、海岸部の新たな領地が、後にアルジャーク帝国皇帝クロノワ・アルジャークと彼を結びつけることになるのを、このとき歴史はまだ知らない。

―第五話　完―

第五話　傾国の一撃　エピローグ（後書き）

というわけで「第五話　傾国の一撃」、いかがだったでしょうか。

今回の構図は、「第二王子と第一王子の子どもの後継者争い」という、結構色々なところで使い古されたものです。
ただ多くの場合、内戦に他国の勢力が関わってくることはほとんどありません。（もっとも新月の読書不足のせいかも知れませんが）

というわけで他国の軍が関係してくるとしたらどんな場合だろう、と考え始めたのがこの話の始まりです。
新月なりに頭を捻ってみたこの話、楽しんでいただけたのであればうれしいです。

それではまた次回。
次のお話は「第六話　そして二人は岐路に立ち」
お楽しみに。

第六話　そして二人は岐路に立ち　プロローグ（前書き）

第六話のタイトルは「そして二人は岐路に立ち」です。
ただ”岐路”という言葉から連想されるような、明確な選択は出てこないかもしれません。

物語が完結して（いつになるか分りませんが……）全体を読み返したときに、全体の構成の上での”岐路”になっていればいいなぁ～と思っております。

第六話　そして二人は岐路に立ち　プロローグ

変わることが唯一の成長だとは思わない
しかし停滞し続けることで成長が望めないのもまた確か
まずは一歩を踏み出してみることだ
でなければそれが前進なのか後退なのか
それさえも判らないのだから

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第六話　そして二人は岐路に立ち

ゴクリ、とニーナは生唾を飲み込んだ。

強く握り締めた両手はじっとりと汗をかき、少々気持ちが悪い。普段であれば手を洗いたいところだ。しかし、生憎ニーナはそんなことを考える余裕がないほど、ガチガチに緊張していた。

そんなニーナの目の前で、イストが一つの魔道具を査定している。手のひらに乗るくらいの大きさの筒型の魔道具で、万華鏡を想像してもらえば一番近いかもしれない。魔道具の名は「鷹の目（ホーク・アイ）」。倍率を任意に変えることのできる望遠鏡型の魔道具で、イストがニーナに作らせていた練習用の魔道具である。

ニーナがこの試験を受けるのはこれで三回目である。「三度目の正直」となるのか、はたまた「二度あることは三度ある」の運命を辿るのか、彼女としては気が気ではない。

課題の魔道具である「鷹の目（ホーク・アイ）」の基本的な構造は、普通の望遠鏡

とほとんど同じだ。主筒の両端にガラスのレンズが着いている。ただこれだけでは像が逆さまに写ってしまうし、またピントを合わせることができない。普通の望遠鏡であれば、“正位レンズ”と呼ばれるもので像を元に戻し、筒の長さを調節してピントを合わせるのだが、これを術式で行ってしまおうというのが「鷹の目（ホーク・アイ）」である。

エプティアナの森を越えジェノダイト国内を旅している途中でニーナは課題のレポートをまとめ終わり、ついに刻印の作業を生まれて始めて行ったのである。

本来ならばレンズとして用いているガラスに刻印を行うのが最もスマートなのだろうが、生憎とガラスは魔道具素材としては劣悪で、ニーナは小さな合成石を選んで術式を刻み核として筒に取り付ける方法を選んだ。

（最初の出来はひどかった……）

何しろ像は逆さになっているどころか斜めに傾いているし、倍率はほとんど変化せず、さらに像は白黒になってしまった。核になっている合成石を取り外したほうがまだマシ、という有様である。当然査定は不合格で、師匠であるイストには爆笑されてしまった。

（いっそ笑われてよかったくらいだけど……）

あそこで優しく慰められていたら、情けなくて泣いていたかもしれない。

失敗した原因は誰に言われずとも判っている。刻印だ。

術式の刻印、特に複数の術式を合成しながら行う刻印は、職人たちが言うとことの「バランスを取りながら」行う必要があるのだが、

これがなかなか感覚的な作業で、他人に説明するのが難しい。いや、説明する意味がない。この作業をどんな感覚で行うかは個人差が大きく、例えばイストは「水が澱まないように流す感じ」というし、その師であるオーヴァ・ベルセリウスは「天秤をつりあわせる感じ」と言っている。つまり説明してみたところで、同じ感覚で作業することなど出来ないのだ。

はじめて刻印の作業を行うにあたり、ニーナは師匠であるイストに助言を求めた。求めたのだがイストには「こればっかりは一度やってみるしかない」と言われた。イストにしてみれば自分の感覚を説明してみたところで意味がないし、また妙な先入観を持ってやればかえって有害ですらあると考えたのだろう。

かくしてニーナはなんの事前知識もなしに、そして緊張に体を硬くしてはじめての刻印作業に臨んだのだが、この作業の彼女の感じ方は、

「水がいっぱいに入ったコップを、零さないようにはこぶ感じ」

だったという。もっともこの感じ方にしたって、作業が終わった後に冷静になって思い出したものである。刻印中は本当に手一杯でそこまで考える余裕がなかった。気がついたら終わっていて失敗した、そんな感じである。

ちなみに失敗した一番最初の合成石は、自戒と記念の意味をこめてペンダントにし、今は首から下げている。

今イストはニーナの作った「鷹の目（ホーク・アイ）」を接眼部から覗き込み、倍率と色彩を確かめている。倍率がどれ位あるかはもちろんだが、ものを見る魔道具である以上色彩が狂っていないかも重要になってく

る。

「ふむ」

査定が終わったのか、イストが一つ息をついた。それを聞いたニーナは両手を握り締め、なおいっそう緊張で体を硬くした。

「合格」

その一言を聞いて勢いよく上げた頭に、放って返された「鷹の目（ホーク・アイ）」がぶつかる。痛いのを我慢してなんとかその筒状の魔道具を捕まえ、ぶつけた額を擦りながらニーナはイストのほうを見た。

「……本当に？」

「じゃ不合格」

「え！？あ、いや……。ちょ、それは……！」

合格の朗報があえなく幻と消え、ニーナは焦る。そのワタワタとした慌てっぷりを、イストはニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべて楽しんでいた。

「素直に喜べばいいんだよ」

弟子が焦って慌てる様子を満足いくまで鑑賞した意地悪な師匠は、呆れたようにそういった。それでニーナも落ち着きを取り戻す。

「……師匠の場合、なにか裏があるんじゃないかって心配になるんですよ……」

まだそう長い間、一緒に旅をしているわけではない。しかしその

間にも、弟子という立場ゆえなのか、イジられたりからかわれたりすることがよくあった。この前のエプティアナの森で魔女の真似事をさせられたことなど、いい例だ。

しかし、ニーナとてやられっ放しではない。ちゃんと学習しているのだ。

「そうかそうか、お前にそんなに無駄なことを考えてる暇があるとは知らなかったな。今後は修行に集中できるように、断腸の思いで不合格にしてやろう」

……功を奏しているとは言いがたいが。役者としてはまだまだイストのほうが一枚も二枚も上手であった。

第六話　そして二人は岐路に立ち　プロローグ（後書き）

お気に入り登録件数が１４００件を突破しました！！

読んでくださる方々、本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

エプティアの森を越えジェノダイトに入国したイストとニーナの師弟は、そのまま進路を西にとった。

ジェノダイトの北には神聖四国が一国、「サンタ・ローゼン」がある。余談だが、神聖四国はそれぞれ国名に、「聖（サンタ）」の名を冠することを教会より許されている。この「聖（サンタ）」の名こそが神聖四国と教会の深い結びつきを内外に示すものであり、これによってこの四カ国は国力でも武力でもなく尊厳や敬意、簡単に言えばエルヴィヨン大陸中の信者から支持を得られると言う点で、他の国々と太い一線を画している。

「金銭や権利とかとは別の次元の話だからな。厄介だぞ、こういうのは」

煙管型禁煙用魔道具「無煙」を吹かしながらイストはそう評して見せたのだった。

ジェノダイトには、このサンタ・ローゼンの国境付近に「トロテイア山地」がある。その麓にあるトロテイアの街に、今イストとニーナの師弟はいた。

トロテイアの街は、その字面を眺めれば一目瞭然であるように、トロテイア山地からその名前を取っている。ジェノダイトにおいてこの街は国境付近のいわば「辺境の町」なのだが、トロテイア山地が教会の巡礼コースの一つとなっており、そのため多くの巡礼者が訪れにぎわいを見せていた。

イストとニーナは魔導士ギルドの斡旋所にいた。斡旋所は別名「ギルド・ホーム」とも呼ばれ、ギルドのライセンスを持つ者に対し、ギルド・ホームに依頼された仕事を斡旋するのが主な業務である。ただ今日二人が斡旋所に来た目的は仕事を請け負い旅の資金を稼ぐことではない。大仰な言い方をすれば、情報収集をするためである。

旅をする身であろうとも、いや旅をする身であればこそ情報は重要だ。例えばこれからいこうとしている国の情勢を知っておくだけでも、騒乱を避け身を守ることが出来る。もっともイストをはじめとする歴代のアバサ・ロットたちの場合、あえて混乱の渦中に飛び込むことが多々あるが。

「まあ、そう気を落とすな」

張り出されている紙を見たり居合わせた人から話を聞いたりして、斡旋所で一通り情報を集め終えると、肩を落としているニーナにイストはそう声をかけた。今ニーナが知りたいのは故郷パートームの、ひいては父であるガノスのことだ。

ポルトールとカンタルクの戦端が開かれたことは、ニーナも旅の中で聞いている。聞けばブレントーダ砦が落ち、シミオン第一王子が戦死したという。今のところ故郷であるパートームが戦火に巻き込まれたという話は聞かないが、祖国で待ってくれているただ一人の肉親の安否が、どうしても気になってしまう。比較的大きなこの街ならば、なにか情報が入っているかもしれないと期待していただけに、特に目新しい情報はなく空振りをくったニーナの落胆は大きい。

ただ師であるイストはガノスの身の安全については楽観していた。

「ガノスさんは腕のいい職人だからな。最悪カンタルク軍に捕まったとしても、扱いは丁重だと思うぞ」

腕のいい魔道具職人は一流の魔導士十人よりも価値がある。殺すなんてもってのほかだし、仕事が出来ないほどの傷を意図的に負わせるなどということも、まともな将であれば決してしない。それどころか可能な限りの好条件で味方に引き込み、魔道具を作らせようとするのが普通だ。だから工房はともかく、ガノス自身は五体満足でピンピンしているだろう、とイストは言った。

「はい……、そうだと、いいんですかど……」

ニーナの言葉は弱い。師匠の言葉は正しいと理解はしているのだが、納得して受け入れることはなかなかできない。どれだけ頭で理解してみても、グルグルとしたこの気持ち悪い不安は消えてくれない。たぶん確実な情報にめぐり合うまでは、この不安は決して消えないだろう。

それが分っているのか、イストはそれ以上何も言わなかった。孤児院の家族を皆殺しにされた経験を持つものとしては、今の彼女の不安は容易に想像できる。そして安っぽい慰めになんの意味もないことも。

「お茶をもらってくる。それを飲んで落ち着いたらいくとしますか」

それだけ言うと、イストはさっさと行ってしまった。師匠の気遣いにニーナは感謝する。まったくあの師匠は普段の言動はとんでもないくせに、どうしてこういう気遣いができるのだろうか。

しばらくしてイストはマグカップを二つ手にして戻ってきた。中

に入っている紅茶は、蜂蜜でも入れたのかほんのりと甘い。今はその優しい甘さが心地よかった。甘い紅茶は体に染み渡り、変な力が抜けていく。

紅茶を飲み終える頃になると、ニーナの不安も和らいだ。紅茶を飲んでなにか問題が解決したわけではないが、まあ、クッションが必要だった、ということだ。

「紅茶、おいしかったです」

ごちそうさまでした、と呟きマグカップを机に置く。仕事の斡旋や依頼の受付をしているカウンターのほうから、多い声がしたのはその時であった。

「お願いします！何とかして見つけてください！」

「そう言われましても……」

一人の学者風の男が、額をカウンターにこすり付けんばかりの勢いで、受付嬢に何かを懇願している。受付嬢のほうは若干引き気味だ。男の隣は腰に剣を挿した男がもう一人いる。がっちりとした体格で、もしかしたら護衛かもしれない。

「なんとか今日中に見つけないと遺跡の発掘計画に支障が出てしまう。お願いします、何とかしてください！！」

「……遺跡？」

ピクリ、と“遺跡”という単語にイストが反応した。彼の趣味は遺跡巡りだ。

「ですが、古代文字（エンシェントスペル）の読める人物なんてそうそう……」

いるわけがない、と受付嬢が言おうとしたそのとき、イストが話しに割り込んだ。

「いるよ」

学者風の男とその護衛と思われる男そして受付嬢、三者六つの目がイストに集中した。

「読めるよ、古代文字（エンシェントスペル）」

護衛風の男は感心したような驚いたような顔をしているし、受付嬢は厄介ごとから開放され喜んでいるように見える。そして学者風の男は、目を輝かせ歓喜を表現していた。

「君は……、本当に読めるのかい？古代文字（エンシェントスペル）が」

「ああ。だから詳しい話を聞かせてくれないか」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「悪い、待たせたか」

魔導士ギルドの斡旋所での一件があった次の日、トロテイアの街の北門前で考古学者とその護衛、シゼラ・ギダルティとジルド・レイドの二人組みを見つけると、イストは遅れたことを詫びた。

「いえ、我々もついさっき来たところですから」

昨日は興奮してなかなか寝付けず今日も早く来てしまった、と話すシゼラに一同は苦笑する。四十近いおっさんのくせに妙に子どもっぽいところがある。

「じゃ、行きますか。途中までは巡礼道を通っていけばいいんだよな？」

シゼラが頷くと、一行は歩き出した。考古学者で本来旅慣れしていないシゼラにペースをあわせているため、イストなどからすればのんびりと散歩をしているような感じだ。

巡礼道は街の北門からトロテイア山地を通り、サンタ・ローゼンへと至る。シゼラたちが現在発掘を行っている遺跡は「ハーシェルド遺跡」といい、この巡礼道から外れて少し山地に分け入ったところにあるという。今からおよそ三五〇年ほど昔の遺跡なのだが、つい最近この遺跡の地下に新たな遺跡が見つかった。建築様式などが異なることから、もともとこの遺跡があった上にハーシェルド遺跡を造ったのではないかと、シゼラたちは考えていると言う。

新たに見つかった遺跡（便宜上ハーシェルド地下遺跡と呼ぶ）は、建築様式などから考えると、どうやら千年近く昔の、しかも教会に関係する遺跡らしい。保存状態もほどほどに良く学者たちは喜んだのだが、すぐに一つの問題が出てきた。

「発掘された石版や、壁画なんかに使われている文字が全て古代文字（エンシェントスペル）なんですよ」

昨日、ギルドの斡旋所で仕事の説明を求めたイストに対し、シゼラはそういった。

千年前は古代文字（エンシェントスペル）が主流であったはずであるから、その文字が使われていることはなんら不自然ではない。が、古代文字（エンシェントスペル）は今現在まったくといっていいほど使われておらず、当然その解析ができる人間などそうはいない。

「それで昨日ギルド・ホームに頼みに行ったんですけど、即日中に見つけるのは難しいと言われて……。本当にイストさんたちがいてくれて助かりましたよ」

古代文字（エンシェントスペル）が読める人と言うのは探せば見つかるであろう。しかし即日中というのは個人的な伝手でもない限りは無理だ。あの受付嬢も無理難題を吹っかけられてさぞかし迷惑したであろうと、イストは苦笑した。しかもシゼラはいたって本気で、しかも必死でさえあったから尚たちが悪い。

しかし今回は幸運なことに、イストとニーナという古代文字（エンシェントスペル）が読める二人がその場に居合わせた。シゼラにとっても受付嬢にとっても、そして遺跡巡りが趣味のイストにとってもまことに幸運であったといえよう。師匠の趣味に付き合わされた弟子がどう思うっているかは分らないが。

ちなみにニーナが持っているのは魔導士ギルドの準ライセンスであるが、これを持っている者はギルドの斡旋所が達成可能と判断した仕事のみ受けることができる。

イストとニーナが請け負った仕事の内容は「遺跡の古代文字（エンシェントスペル）の解読」である。期間は一ヶ月で休みなし。報酬は一人３シク２０ミル（金貨三枚と銀貨二十枚）で、三食付き。平均的な家庭の月収が３～５シクであることを考えると、高いのか安いのかは判断に迷う。ただイストが疑問に思ったのは別のことであった。

「随分金払いがいいな。気前のいいパトロンでもいるのか？」

遺跡の発掘は学術的には価値があるが、そこから直接的に利益が出るかと言われれば多くの場合答えは「否」である。そのため国や

貴族などは予算を出し渋り、発掘作業は少ないお金を切り詰め帳面と睨めっこしながら行うというのが普通である。しかしシゼラを金の使い方を見ていると、懐には幾分の余裕があるように見受けられた。

「ええ、ハーシェルド地下遺跡に興味を持ってくれた方がいまして、その方が資金を出して下さっているんです。ただ定期的に経過報告するように言われていて、昨日も斡旋所に行くついでに、その報告書を出してきたんですよ」

「てことは、そのパトロンはトロテイアの街にいるのか？」

「いえ、アルテンシア半島の方なので、届けてもらうんですよ」

「アルテンシア半島ねぇ……。どこの領主か豪商か知らないが、そんなことやってる暇あるのかねぇ……」

アルテンシア半東は今、北西と南東で対極的な状態にある。シーヴァ・オズワルドが切り取った版図は安定を見せ始めているが、旧来の領主たちが治める領地では反乱が相次いでいると聞く。無論その混乱をシーヴァが見逃すわけもなく、当初の勢いはないものの彼は着実にその版図を増やしている。むしろ今のペースが常識的であるといったほうがいい。

「あ、ここで巡礼道を外れてこっちに行きます」

さして高くもない山の中腹付近に来たとき、シゼラはそういって木々が生い茂る森を指差した。当然そこには道らしい道などない。しかも山地だけあって足元は斜面になっており、エプティアの森などと比べると歩きにくい。

「遺跡の近くは比較的平らなんですけどねぇ……」

これぱっかりは仕方がないとシゼラは苦笑した。この山道が一番堪えるのは、他ならぬ彼であろう。

「じゃあ、ジルドさん。よろしくお願いします」

「うむ」

ジルドは短く返事をして、一行の先頭に立った。どうやらここからは彼が先導をするようだ。

「あの、一つ聞きたいんですけど……」

ニーナが一番後ろから遠慮がちに声を上げた。

「ん？なんだい？」

「ジルドさんって魔導士ですよね」

「うむ。魔導士ギルドのライセンスを持っており、魔道具を所有していると言う意味ではその通りだ」

ちなみにジルドが持っている魔道具は「不屈の魔剣」と呼ばれるものである。刻まれている術式は、魔剣の強度を上げ刃毀れなどを防ぐ「強化」と、切れ味を上げる「切断」である。「折れずに良く切れる」というのがうたい文句で、魔道具の中ではありふれた品物であり値段も安いが、それでも一般の剣と比べれば十倍以上の値段になる。

「それで、護衛の仕事を請け負ったんですよね……？」

「その通りだが……。どうかしたか？」

ニーナが何を聞きたいのかいまいち分らず、ジルドも首を傾げる。

「なんで遺跡調査に護衛が必要なのかなって……」

確かに「遺跡調査」と「護衛」と言う単語はなかなか結びつかない。あるいはハーシェルド地下遺跡には危険なトラップの類が仕掛けられているのだろうか。

「いや、警戒しているのは地竜のほうだ」

答えたのはジルドだった。

「地竜!?竜ってあのおとぎ話の中の……？」

火とか吐いたりするのだろうか？

「正式名称は『リザイアントオオトカゲ』。“地竜”は俗称だ」

どうにも話しについていけていないニーナにイストが助け舟を出した。

――――リザイアントオオトカゲ。

牛ほどの巨躯と鋭い牙そして爪を持つ、獰猛な肉食獣だ。その体は硬いうろこで三重に覆われ、普通の刃物では傷つけることさえできない。何より凶悪なのはその尾だ。体長ほどの長さのある尾の先は硬い鈍器のようになっている。リザイアントオオトカゲはこの尾を武器として使うのだが、その威力たるや凄まじく、馬の首を一撃でへし折ったという記録も残っている。

当然のことながら普通の剣や槍などでは手を出すことができず、仮に討伐するとしたら魔導士が最低でも三人必要だと言われている。

「それじゃあ、ジルドさん一人で大丈夫なんですか……？」

「そうなんだけど、予算がね……」

シゼラが決まり悪そうに頬をかいた。確かに地竜を討伐できるだ

けの戦力を雇うおうとしたら、決して安くない費用が掛かる。いくら金払いのいいパトロンがいるとはいえ、直接発掘調査に関係しない分野に予算をつぎ込むことはしたくなかったのだろう。もし雇っていれば、イストとニーナを雇う分の余裕はなかったかもしれない。

一連の話を聞くと、ジルドは苦笑した。遠まわしにとはいえ「お前一人では不安だ」と言われたのだ。地竜に遭遇したことはないが、その獰猛さは聞き及んでいる。確信をこめて反論ができない以上、ジルドとしては苦笑するしかない。

「ああ！別にジルドさんの腕を信頼してないわけじゃないですよ！？」

シゼラが慌ててフォローするが時すでに遅し、だろう。もっともジルドも大人でさして気にした様子でもなかったが。

「まあ、地竜の生息地域はトロテイア山地のもっと奥のほうだ。遺跡の近くまでやって来ることはほとんどないだろう」

当のジルドにそう言われてしまい、シゼラはバツが悪そうに頬をかいた。やっぱりこの人は子どもっぽいところがある。

ジルドは地竜対策に雇われたと言っていたが、山歩きの先導や大陸中に生息しているバロックベアなど、他の獣の対策もかねているのだろう。そういう意味では彼を雇ったのは正解であったといえるだろう。

（とはいえ……）

とはいえ、地竜の住処に近づいていっていることは確かである。

街にいたり巡礼道を歩いているよりも遭遇する確率は自然高くなる。

（どーすっかね、鉢合わせしたら……）

現状、戦力として使えるのは護衛のジルドとイスト（自分）のみである。戦闘能力ゼロの弟子と考古学者は順当に除外される。「討伐には魔導士が最低でも三人必要」と言われている獰猛な野獣を狩るにはいささか心もとない。遺跡に到着すれば戦力は増えるのかもしれないが、不確定要素をアテにはできない。どうするか。

「ま、いっか」

不確定要素をアテにしないというのであれば、そもそも確率が上がったとはいえ遭遇確率はまだ十分に低い地竜を警戒する必要はあるまい。

（鉢合わせしてから考えよう）

そういうことに、なったらしい。

第六話　そして二人は岐路に立ち？（後書き）

次はもちろん地竜がでます。お楽しみに。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

真っ先に異変に気がついたのは、先頭をいくジルド・レイドだった。

（静かすぎる……？）

遺跡の発掘作業は騒音をともなうようなものではない。それでも人間が作業をする以上、そこには物音や話し声があってしかるべきだ。それが今は聞こえてこない。これまで何度か街に使いに行ったことがあったが、この距離でそれらしい音が何も聞こえてこないなんて事は一度もなかった。さらに意識をめぐらせてみれば、周りの森もひっそりと静まり返っている。

ジルドの目が、スッと鋭くなる。

「おっさん、どうかしたか」

ジルドの様子が変わったことに真っ先に気づいたのは、さすがというかイストだった。ジルドの様子に感化されたのか、彼のほうも周りを警戒するような素振りを見せている。このあたり、さすがに旅慣れしているといえるだろう。

「いや、静かすぎると思ってな。なにかあったのかもしれん」

「まさか地竜が……！？」

シゼラが焦ったように声を上げる。仮に地竜に襲われれば、情熱はあっても腕力と戦闘能力がない発掘員たちはなす術がない。

「それは分らん。が、警戒しておいた方がいいだろう」

冷静なジルドの言葉に一同は頷く。足音を立てないようにして遺跡に近づいていく。崩れた壁に沿うようにして移動し、遺跡内部の様子を窺っていく。

そして、ソレはそこにいた。

「……！」

危うく悲鳴を上げそうになったニーナの口をイストの右手が塞いだ。さらに彼は左手の人差し指を唇に当てる。

「喋るな、静かに」

という、万国に通じるジェスチャーだ。ニーナが頷くとイストは手を放し、さらに「姿勢を低くしろ」と身振りで指示する。それに従って崩れた壁の影に身を隠す。

一息つき落ち着いてから改めて壁の影から様子を窺う。

「間違いないな。リザイアントオオトカゲ、地竜だ」

ジルドが断定した。いや、はじめて見るニーナであってもそれ以外の回答など思いつかない。

牛ほどの巨躯。鋭い爪と牙。全身を被うううろこはまるで金属のようで、太陽の光を反射し光っている。そして体長程もあるその長い尾。先っぽに着いた硬い鈍器のようなものは、その尾が立派な凶器

であることを無言のうちに主張している。

リザイアントオオトカゲ、地竜は用意しておいた食料を食らっているらしく、今はまだこちらに気づいた様子はない。

「血痕が見当たらない。発掘員はとりあえず無事なようだ」

ジルドの言うとおり、テントの類は派手に倒されているが、血痕や死体を認めることはできない。最悪の事態にはまだ至っていないようだ。

「遺跡の中に逃げ込んだのかもしれないね」

人影は見当たらないし、その可能性は高いだろう。発掘調査の仲間がともかく無事だとしり、シゼラは安堵の息をついた。

「とはいえそう楽観できる状況でもないな」

イストが苦い口調で呟く。

「地竜、リザイアントオオトカゲは鼻が利く。あそこの食料を食い尽くした後、臭いを追って遺跡に入られた終わりだ」

「そんな……！あ、いや、でも食べ終わったら、そのまま立ち去ってくれるって事も……！」

ほとんどすがる様にしてシゼラがその可能性を指摘する。

「それでもエサ場としてここを覚えられてしまえば同じこと。いや、その方がタチが悪いと言えるな」

この遺跡をエサ場として認識されれば、地竜が頻繁にこの遺跡に

来ることになる。その度に食料を食い荒らされていては、仕事にならない。いや、その前に危険すぎるということで発掘を撤収しなければならないだろう。

「殺す必要はない。だけど最低限、痛い思いをさせて追い払う必要があるな」

イストがそう宣言した。しかしその口調はどうしようもなく苦い。やり切れるか、自信を持てない様子だ。

（赤唐辛子の粉末を使うか……？）

以前、独立都市ヴェンツブルグの近くの森でバロックベアに襲われたときに使った赤唐辛子の粉末は、今もちゃんと用意してある。ただあの時は相手がバロックベアで、さらに暴れられても対処できる、倒せる自信があったから使ったのだ。

（今回の相手は地竜だぞ……？）

追い払えず、かえって逆上し暴れまわるようなことになったら、対処しきれる自信がない。使うにはいささかリスクが高い。

「イスト、おぬしはどれくらい戦える？」

イストが考えを巡らせているとジルドが声をかけて来た。彼の視線は鋭く地竜を睨みつけている。

「人並み以上だとは自負しているけどな」

それを聞くとジルドは小さく頷いた。一瞬だけ視線をイストのほ

うに移したが、すぐに地竜のほうに戻す。

「得意な距離は？」

「……中・長距離、かな。接近戦はやりたくないね」

少し考えてからイストは答えた。

「では援護を頼みたい」

その言葉を聞いて、イストは嘆息した。どうやらこのおっさんは地竜と真正面から戦って退けるつもりらしい。

「おいおい戦うつもりかよ、おっさん」

「痛い思いをさせて追い払う必要があるといったのはおぬしであろう？」

確かに言った。しかもついさっき。

「……この状況で四の五のいうつもりはないけどな。オレの本職は戦闘じゃないんだ。あんまり期待してくれるなよ」

そうはいうものの、イストの本音としては「やりたくない」だ。古代文字（エンシェントスペル）で記録が残されている遺跡の調査というのは確かに興味がそそられる。が、遺跡巡りは所詮趣味だ。趣味に命はかけたくない。

やるからには命懸け。地竜とはそういう相手だ。実際に戦ったことはないから正確には分らないが、やらずに済むならそれで済ませたい相手に違いない。

しかし、今は戦わねばならない。

（逃げてるときに後ろから襲われたら全滅しそうだしな……）

イストやジルドはあるいは無事に逃げられるかもしれない。しかしニーナとシゼラは確実に“アウト”だろう。

（“庵”から強力な魔道を見繕ってくるか……？）

そう考え、しかしすぐに否定する。そんなことをやっている時間はない。第一、“庵”に保管されている魔道具の全てを把握しているわけではないのだ。使ってみて役立たずならまだしも、逆にピンチに陥っているようでは目も当てられない。

（その可能性を否定できないのがアバサ・ロットの怖さだよな……）

脈々と続いてきた“変人”の歴史に思わず苦笑する。

「どうした？」

怪訝に思ったのか、ジルドが声をかけてくる。

「いや、なんでもない」

イストは頭を振って余計な考えを外に叩き出す。相手はリザイアントオオトカゲ。食物連鎖の頂点に君臨し、人など意にもかえさぬ野獣だ。集中を欠けばすぐにやられてしまうだろう。

「お前らは離れてろよ」

「うむ。それと風上には立たぬようにな」

イストとジルドの言葉に、非戦闘員の二人は何度も頷く。

「じゃ、やりますか……！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

幾筋かの閃光が地竜の横腹に炸裂した。その閃光の元をたどればそこには「光彩の杖」で魔法陣を描いたイストがいる。

（ち、やっぱり浅いな……）

イストの先制攻撃は地竜のうろこを数枚剥いだだけで終わった。同じところを何度も攻撃できればあるいは効果があるのかもしれないが、あいにくと地竜相手にそんなことをやってのける自信はない。

地竜がギロリとイストを、食事の邪魔をする無礼者を睨む。イストはニヤリと笑うと、まだ展開してある魔法陣に再び魔力を込め、その顔面めがけて閃光を撃った。

――――ギャャァアアウゥゥゥオオォオォオオ！！

耳を劈（つんざ）くような獣の呼砲が響く。それは決して痛みの呼砲ではない。怒りの呼砲だ。

「おっさん！」
「うむ！」

怒り狂った地竜がイストめがけて突進してくる前に、ジルドが素早く前に出て距離を縮める。まるで暴風のように振りまわれる地竜の腕と爪を滑らかな足捌きでかわしながらジルドは間合いを詰め、すれちがいざまに打ち抜きでその前足を斬りつける。

（斬った……！が、浅い。浅すぎる）

ジルドの持つ魔剣「不屈の魔剣」は地竜の三重のうろこを切り裂きその下に刃を届かせたが、如何せん浅すぎる。薄っすらと浮かぶ赤い筋をなんとか認めることができる程度だ。目指す「痛い思い」には程遠い。

地竜が捕食の目標をジルドに切り替える。喰いちぎろうとする鋭い牙のはえ揃った顎を後ろに飛びのいて逃れ、魔剣を正面に構える。と、その時……。

「！！」

ほとんど反射的に体を屈めたその頭の上を、鈍い風切り音を残し地竜の尾が通過していく。

（一度飛びのいたくらいでは地竜の間合いから逃れられんか……！）

肌が粟立ち、緊張が内臓を締め付ける。殺るか殺られるか。野獣の戦いは全てが生存競争であり、こそに善悪など介在しない。そして、それゆえに凄まじい。

爪を振り上げ追い討ちを仕掛けようとする地竜の腹部に、再び複数の閃光が炸裂し何枚かうろこが剥がれる。

（やっぱこの術式じゃほとんど効果がないな……）

ダメージらしいダメージなど入っていないが、地竜はこの小うるさい攻撃を不快に思ったのか、ジルドへの攻撃をやめイストのほうに首を向ける。その間にジルドは体勢を立て直した。

ジルドが魔剣を構えなおしているその間に、地竜はさっきから小うるさい攻撃を仕掛けてくる無礼者に向かって走り出した。

「ちっ！！」

短く舌打ちをすると、イストは「光彩の杖」を構えた。閃光を撃ち込んでも止められないのは分りきっている。だから展開するのは防御用の魔法陣だ。かつてバロックベアの爪を防いで見せた魔法陣を三枚重ねて地竜の前に展開する。

――――ピキィィィイイインンン……。

「おいおい……」

鈴の音に似た音を立てて展開した魔法陣（正確には魔法陣が展開していた不可視の盾）のうち二枚が、まるで紙切れか何かのように切り裂かれた。残った最後の一枚に、イストはありったけの魔力を込めて、地竜の鋭い爪を防いだ。

――――グルゥゥウウァァアア！！

「ちっ！！」

地竜が雄叫びを上げながら爪を再び振り上げる。それを見たイストは魔法陣を放棄し、転がるようにして突き出される地竜の爪をかわした。

（ヤバ……！）

転がりながらイストは自分の失策に気づいた。転がっている間に追い討ちをかけられたら無事で済むかどうか。しかし地竜は追い討ちを仕掛けてこなかった。距離を取って体勢を立て直して見れば、ジルドがけん制してくれている。が、圧され気味だ。

「ヤロ……！」

すかさず「光彩の杖」を構え、魔法陣を展開。閃光を地竜に叩き込む。今度はうろこが一枚も剥げなかった代わりに、地竜が体勢をくずした。その隙にジルドも一度距離を取る。

（こっちのほうがいいか……）

先程の閃光はダメージを入れることではなく、体勢をくずすことを主眼においている。微々たるダメージを入れるよりも、こちらのほうが役に立ちそうだ。

「おっさん、どんな感じ？」

注意深く地竜との間合いを取りながらイストはジルドに声をかける。

「硬い、速い、間合いが広い。厄介なことこの上ない」

その言葉を聞いてイストは頷いた。やはり彼も攻めあぐねているようだ。

（おっさんにあの魔剣を渡すか……？）

あの魔剣とは馴染みの鍛冶師であるレスカ・リーサルに刀身を作ってもらい、工房「ドワーフの穴倉」を間借りして完成させた、未だ名前のないあの魔剣である。仮に「強化」と「切断」の術式しか

使わないとしても、「不屈の魔剣」などよりもはるかに上等な魔剣である。この場では良い戦力になるだろう。

（だけど、な……）

アバサ・ロットが魔道具をタダで渡すのは、気に入った相手と認めた相手だけ。それがアバサ・ロット唯一のルールだ。破ったからといって、なにかペナルティがある訳ではない。だが、名を受け継いだものとしてこの一線を越えることは、イストのプライドが許さない。

「アバサ・ロットは、つまるところエゴイストだ。だからこそ自分のエゴの責任は自分でとらにゃならん」

師であるオーヴァの言葉が頭をよぎる。

ただジルド・レイドが優れた剣士であることは、今までの戦闘を見れば良く分る。地竜と一度ならず真正面からぶつかって無傷でいられる剣士など、そうはいない。

地竜が動く。それにあわせてジルドも動いた。イストも魔法陣を展開し、彼を援護する。イストが閃光を叩き込み、地竜が体勢をくずしたところをジルドが斬りつける。一見すればイストとジルドが地竜を攻め立てている。が……。

「むう……」

「決定打が入らねぇ……」

精神的に追い詰められているのは二人のほうである。地竜のほうは細かい傷を全身に負っているが、動きが鈍っているようには見受けられない。体力の限界は人間のほうが先に迎えるだろうか、この

ままではジリ貧である。

「くっ！！」

風をひきちぎって地竜の尾がジルドを襲う。身をかがめてそれをかわし、再び身を起こすと、

「む！！」

振り戻された尾が再びジルドを襲う。ジルドは吹き飛ばされながらも、尾の先についた鈍器を魔剣で受け止めた。

「おっさん！！」

吹き飛ばされる瞬間、ジルドは自分から後ろに飛びのいている。だからほとんどダメージはない。だが……。

「魔剣が……！」

地竜の一撃をまともに受け止めた「不屈の魔剣」は、その刀身が半ばから折れてしまっていた。折れてしまっては「不屈の魔剣」はもはや魔剣として、いやそもそも剣として用をなさない。それはこの場において、地竜に多少なりともダメージを負わせる手段がなくなったことを意味している。

まさに絶体絶命。しかし……。

「おっさん……？」

――――ジルド・レイドは笑っていた。

まるでこの戦いが楽しくて楽しくて仕方がないとでも言わんばか

りに、ジルド・レイドは壮絶な笑みを浮かべていた。

――――それを見て、イスト・ヴァーレもまた、笑った。

ああ、間違いない。こいつは“本物”だ。なにがどう“本物”なのか、そんなことは知ったこっちゃない。だがオレの、このオレの直感が告げている。このおっさんは“本物”だと！

地竜が動く。

腕を振り回し顎を開き、鋭い爪と牙でジルドを攻め立てていく。その全てをジルドは滑らかな足捌きでかわしていく。回避に意識を集中しているためか、その動きは今までよりも速い。

ジルド・レイドは後ろに下がらなかった。魔剣を失いもはや攻撃手段がないにもかかわらず、彼はむしろ前に出て地竜との間合いを詰め懐に入り込もうとする。それを嫌ったのか、地竜のほうが後ろに下がった。

飛びのいた地竜のわき腹に閃光が直撃し、その巨体を一瞬だけよろめかせる。その一瞬が全てであった。

「おっさん！！」

イストは「ロロイヤの道具袋」から一本の刀を取り出し、ジルド・レイドに向かって投げた。それを見たジルドは反射的に折れた魔剣を投げ捨て、飛んできた刀の柄をつかんだ。鞘は投げつけられた勢いそのままに飛んでいき、白銀に輝く刀身があらわになる。ジルドはごく自然な動作でその刀を正面に構えた。

――――闇より深き深遠の

そう古代文字（エンシェントスペル）が刻まれた刀身は優美なそりを持ち、その透明感のある片刃の波紋は乱れ乱刃。

「刻印した術式は三つだがとりあえず『強化』と『切断』だけ使ってくれ！！」

「うむ！」

ジルド・レイドが前に出る。それに合わせるように地竜が尾を振るう。横から迫り来る鈍器を彼は前のめりにかわし、さらに間合いを詰める。そして……。

「ハァァアアアア……ハッ！！」

ジルドが頭上から振り下ろしたその一撃は、地竜のうろこと肉と骨を切り裂いてその尾を切断した。

――――グゥゥルゥゥギャァァアアアア！！！

初めて聞く地竜の悲鳴。己の最大の武器である尾を失った地竜は、耳を劈（つんざ）く悲鳴を残して森の中へと逃げ去っていった。

地竜が逃げさった遺跡に、静寂が戻る。緊張が切れたイストは、堪えきれずその場にへたれ込んだ。呼吸が荒い。思い出したように汗が吹き出てくる。

「助かった、イスト」

「こっちの台詞だよ、おっさん」

刀を鞘に納めたジルドが側によってくる。こちらは特に呼吸を乱した様子はない。まったく牽制しかしていない自分がこの有様なの

に、地竜と真正面からやり合っていたジルドのほうが元気だとは。

「いい魔剣だな」

そういってジルドは鞘に収めた魔剣をイストに差し出した。

「いいよ、その魔剣はおっさんにやる」

しかし、イストはそういって差し出された魔剣を受け取ろうとはしなかった。このおっさん、ジルド・レイドは“本物”でクセの強いあの魔剣の力を十全に引き出してくれる。そのイストの直感は、いつの間にか確信に変わっていた。

第六話　そして二人は岐路に立ち？（後書き）

感想お待ちしております

第六話　そして二人は岐路に立ち？

時間は少し遡る。レヴィナスとアーデルハイト姫の婚礼が無事に終わり、ポルトールの内戦が武力衝突の様相を呈してきた六月の初め、アルジャーク帝国もまた動き出そうとしていた。

「一通り終わったか……」

そういってアルジャーク帝国皇帝ベルトロワは手にした書類を机の上に投げ出した。それから軽く首を左右に曲げ、固まった筋肉をほぐしていく。

アルジャーク帝国帝都ケーヒンスブルグにある宮殿の一室、そこにベルトロワはいた。そしてさらに三人、同じ室内にいる。

アルジャーク帝国宰相、エルストハージ・メイスン。
同外務大臣、ラシアート・シェルパ。
同軍務大臣、ローデリッヒ・イラニール。

皇帝を含めたこの四人が、名実ともにアルジャーク帝国を動かす首脳である。

役職的にはもう一つ「国務大臣」というポストがあるのだが、今は宰相が兼務する形となっている。

アルジャーク帝国のヒエラルキーを上から記すと、皇帝・宰相・三人の大臣、ということになる。そしてこの五人がそのままヒエラルキーの最上部を占有している。

アルジャーク帝国において宰相という役職は、皇帝の代わりに政を行うのがその仕事だ。つまり細かい事情を四捨五入するならば、皇帝があまりに無能であったり政治に関心を示さなかった場合、宰相というポストが設けられて国を取り仕切るのだ。

しかし、今の皇帝であるベルトロワは極めて有能で政治にも熱心である。ではなぜ宰相職を設けているのかといえば、一種の名誉職であった。いや、国務大臣の仕事を兼務させているのだから、まったくの名誉職というわけでもないが。

ベルトロワ、ラシアート、そしてローデリッヒの三人が同年代であるのに対し、エルストハージは世代が一つ上である。年長者に敬意を示すのと、二人の大臣のまとめ役を期待して、ベルトロワはエルストハージに宰相職を与えたのだ。

今彼ら四人は月に一度（不定期に回数は増えるが）の会議を行っていた。この会議でアルジャーク帝国の行く末の大筋が決まるといっていい。

「ああ、少し待って欲しい」

その会議も終わり各々自分の執務室に戻ろうとする三人に、ベルトロワは声をかけた。

「実は遺書を書き直した。確認したうえでサインして欲しい」

アルジャーク帝国の法は、皇帝の遺書について明確な基準を定めている。戦場で遺したなどの例外的な場合でもない限りこの基準を満たしていないと、その遺書は法的な根拠にはならず、意思確認の参考程度にしかみなされない。

その基準について簡単に説明すると、以下のようになる。

一つ、直筆であること。

一つ、日付と署名、そして印が揃っていること。

一つ、皇帝自身の署名と印のほかに、宰相と三人の大臣のうち二人の署名と印が連名で記されていること。

一つ、未開封であること。

一つ、遺書を開封するときには二通の遺書を同時に開封し、その内容に差異がない場合のみ有効とする。

これ以外にも細かい規定が色々と設けられている。全ては遺書の偽造を避けるためだ。

遺書を書き換えることは珍しいことではない。これまでにもベルトロワは何度か遺書を書き換えている。月日が流れれば状況が変わる。そうなれば遺すべき遺書の内容が変わってくるのは当然だ。

エルストハージ、ラシアート、ローデリッヒの三人は用意された遺書を手にとり、その内容を確認していく。そして一様に目を見開いた。

「陛下……！これは……！」

ローデリッヒが驚いた様子でベルトロワを見つめる。その反応を予測していたベルトロワはどこまでも冷静だ。

「あくまで現状では、だ。現状ではこれが最善だと判断した」

「……そう、ですな……。今はこれが最善でしょう……」

どこか苦い調子で最年長のエルストハージがベルトロワに同意する。それをみた二人の大臣もまた皇帝の意見に同意した。

「では署名と印を頼む」

用意された遺書は四枚で、すでにベルトロワの署名と印は記されていた。残りの三人はそれぞれ二通ずつ署名して印を押し、そして各自が一通ずつ保管することになる。当然、古いものは破棄される。

署名を終え印が押された遺書は封筒に入れられ、さらに蝋で封がされる。蝋が固まると、三人はその遺書を大事そうに懐にしまいこんだ。

「そういえば南方遠征の件ですが、すでにレヴィナス殿下にお話になられたのですか？」

軍務大臣のローデリッヒが思い出したようにそう尋ねた。

「いや、まだだ。これから『共鳴の水鏡』を使って話そうと思っている」

「法が揺らぎますゆえ、強制だけはされませんように」

エルストハージの言葉にベルトロワも頷いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お待たせしました、父上」

皇帝であるベルトロワから通信が入っていると知らされたレヴィナスは、急ぎ城の地下に設けられた「共鳴の水鏡」の下へ向かった。

「久しいな、レヴィナス。息災であったか」

「はっ、父上のおかげをもちまして」

しばらく礼儀的な親子の会話が続く。本題を切り出したのはベル

トロワのほうであった。

「実はこの度、南方遠征を行うことが決定した」

「……左様でございますか……！」

遠征というのは国家における一大イベントである。レヴィナスは一瞬緊張で体を硬くしたが、すぐに自然体に戻る。

「それで総司令官にお前を、という話が出ているのだが、どうだ？」

「私、ですか。ですが私は……」

アルジャーク帝国の法には「結婚して一年以内のものは兵役を免除される」というものがある。これは夫が子孫を残すことなく戦争で死ぬのを防ぐための法なのだが、この法は帝室にも適用される。つまりついこのあいだ結婚したばかりのレヴィナスは戦争へ行く必要がないのだ。いや、むしろ率先してこの法を遵守しなければならない。

かりにレヴィナスが遠征軍の総司令官として戦場に赴けば、「皇帝が皇太子の免除の権利を放棄させた」という前例が残ることになる。そんな前例を残しておけば、後の時代皇帝の強権により法が有名無実化してしまうかもしれない。

「そうなのだが皇后が是非に、とな……」

「なるほど、母上が、ですか……」

ベルトロワとレヴィナスの親子はそろって苦笑した。彼女としては愛すべき息子のために一つでも多くの箔を付けてやりたいのだろうが、こういう無理やりねじ込むようなやり方は迷惑でしかない。

「この件に関しては強制するつもりはない。断ってくれてもかまわん」

皇帝が一度勅命を出してしまえば、何人たりともそれに逆らうことは許されない。だからこそわざわざ「共鳴の水鏡」を使い、非公式かつ事前に意思確認を行っているのだ。

「そうでしたら、やはり私は辞退すべきでしょう。悪しき前例を残すわけにはいきません」

（悪しき前例か。今のオムージュ領の税制が悪しき前例になるとは思わぬのか、レヴィナスよ……）

レヴィナスがオムージュ領で増税を実施し、その増税分を過去にさかのぼって適用したことは、当然のことながらベルトロワの耳にも入っている。というよりもこれこそが、彼が貴書を書き換えた主な理由であった。

心のうちの考えをおくびも表情に出さず、レヴィナスの答えにベルトロワは一つ頷き了承の意を伝えた。

「それでレヴィナスよ、そなたの後釜には誰を据えるべきであろうな？」

試すような視線を、ベルトロワは自分の息子に向けた。

「……クロノワが適任かと存じます。無論、有能な前線司令官を付けて、ですが」

数瞬のうちに思考を巡らせ、レヴィナスは答えた。その答えを聞くと、ベルトロワは面白そうに顎を撫でた。

「ほう、クロノワか……」
「はい。あれも父上の子。矢面に立たせれば兵たちの士気も上がるでしょうし、分りやすい象徴ともなります」

まがりなりにも皇子の身分であるクロノワが陣頭に立てば、確かに兵士たちの士気は上がるだろう。さらに、遠征と言うのは戦場で戦うだけではない。もちろんそれが最も華々しく、また大仕事ではあるが、征服した版図を迅速に安定させることが求められる。前者は軍人の仕事で後者は文官の仕事である。つまり遠征軍の総司令官は両者を統率しなければならないのだが、この場合「皇子」という血筋は非常に分りやすい象徴つまりヒエラルキーとして作用し、軍人と文官という畑違いな両者の無用なイザコザを避けることができるのだ。

皇后がレヴィナスを推した背景には無論そういう側面もある。

またこの場でクロノワを推すことはレヴィナスにとっても実は利益がある。クロノワが遠征に成功すれば、他に推挙してくれる人間がいないであろう彼を推したレヴィナスの評価は上がるし、またクロノワに恩を売ることができる。逆に失敗したとすれば「皇子」としてのライバルが勝手につまずいてくれたことになり、レヴィナスの地位はさらに盤石なものになる。

「あい分った。ではその方向で調整を進める」

皇帝のその言葉に、レヴィナスは頭を垂れる。だからこそベルトロワは知ることがなかった。その時、レヴィナスが安堵の表情を浮かべていたことを。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

兄であるレヴィナスとアーデルハイト姫の婚礼から帰ってきたクロノワは、毎日を忙しく過ごしていた。そう、殺人的に忙しく。なにしろ帰ってきたとき、普段飄々とかまえているあの執務補佐官ストラトス・シュメイルが弱り果てていた、というのだからただ事ではない。

総督府の仕事がいきなり忙しくなった主な理由は、やはりオムージュ領に起因するものであった。クロノワとフィリオは披露宴の式場で流民対策を講じる必要があると話していたが、対策を講じる前にオムージュ領から流民があふれてきてしまった。

原因は言うまでもなく増税である。しかもただの増税ではない。増やした税率分を過去にさかのぼって適用している。

「一度に全て納めろ」

という横暴はさすがにしていないようだが、庶民の生活が苦しくなることは想像に難くない。しかも税を納められない者は、建設作業で強制労働させられていると聞く。

ただ、これだけであれば肥沃なオムージュの大地はその民を養えたかもしれない。しかしここに別の出費が重なった。貴族のもとに転がり込んだ僧職者たちの豪遊費である。彼らの遊ぶ金は貴族たちが出していたのだが、その貴族の収入はもとをたどれば庶民の血税である。豪遊費をまかなうために貴族たちは、至極当然のこととしてそのしわ寄せを庶民たちに求めたのである。

普通の増税分と、過去の増税分と、そして僧職者たちの豪遊費。明らかな容量オーバーであり、払いきれないことは容易に想像でき

る。しかも払えなければ待っているのは厳しい強制労働である。逃げ出したくもなるものだ。

またレヴィナスが建築計画へのテコ入れの資金源として、備蓄してあったオムージュの小麦を放出し始めたのも大きな一因である。放出された小麦は貿易拠点である独立都市ヴェンツブルグにも集まり、それを求めて商人たちもまた集まるようになった。また建物の装飾につかう貴金属や美術品をレヴィナスは集め、そういった商品を売ろうとする商人たちもヴェンツブルグに集まっている。

加えて、ヴェンツブルグを発展させるためにクロノワが色々と打ってきた手が、ここにきて効果を表し始めたことも大きい。

その結果、モントルム領はかつてないほどの賑わいを見せている。雇用も急増し、それを満たすための流民がいる。成長著しい代わりに仕事の増加率も著しく、書類の山ができるとはどういうことか、クロノワは身をもって思い知っていた。

「なぜ手は四本ないんだ!?」

大真面目にそんなことを叫んだとか叫ばなかったとか。

皇帝の勅命を伝える勅使が旧モントルム王都オルスクにある、総督府の置かれたボルフイスク城に来たのはそんな目の回るような忙しい日々のある日のことであった。

勅命の内容は簡単にいえば「南方遠征の総司令官にクロノワ・アルジャークを任命する」というものだ。クロノワはこの勅命を粛々と拝命した。彼は事前に「共鳴の水鏡」で皇帝であるベルトロワから直接に「総司令官に内定した」という話を聞いており、勅命の内容に驚くことはない。

今回の南方遠征のアルジャーク帝国が考えるシナリオを簡単に説明すれば、まずモントルムの南に位置しているカレナリア王国に宣戦布告しこれを征服する。次にさらにその南にあるテムサニス王国に宣戦布告し併合する、ということになる。

一度に二カ国を切り取ろうというのだから強欲のそしりは免れまい。もっとも強欲でない遠征など存在しないが。

ただ純粋に国力を比べてみれば不可能とはいえない。アルジャーク帝国の版図は去年の大併合により二二〇州となっている。これに対しカレナリア王国の版図は六三州でテムサニス王国は六六州である。二カ国合わせても一二九州であり、アルジャークには及ばない。しかもシナリオとしては二カ国同時にではなく、一国ずつ切り取るつもりなので成功率はさらに上がるだろう。もっともこれを機にカレナリアとテムサニスが同盟を結ぶことも十分に考えられるが。

カレナリアを征服した後、間を空けずにテムサニスに宣戦布告するというのが今回の遠征の筋書きである。したがって征服後のカレナリアを安定させるためには、文官の随行員が必要になる。その文官の選定も帝都ケーヒンスブルグで進んでいると聞く。さらに今回はテムサニスも随行する文官たちが征服後の執政を担うそうだ。彼らは皇帝直属という身分になり、つまり併合後のカレナリアとテムサニスには総督を置くことなく、皇帝が直接に支配することになる。

ただ両国の海軍についてはクロノワがその再編の裁量を任されていた。彼が海にいろいろと手を伸ばしているのをベルトロワが聞きつけたのだろう。

「まあ、まずは遠征を成功させることですね」

獲ってもいない毛皮を数えて妄想の幅を広げるのは確かに楽しいが、重要なのはそれを実現させることである。総督執務室に集まった面々を前にして、クロノワは頭の中を現実へと引き戻した。

執務室には総督府の主だった人物で、今回の遠征に関係する人々が集まっていた。総督であるクロノワ。その主席秘書たるフィリオ。執務補佐官のストラトス。モントルムの軍事一切を司っているアールヴェルツェ。そしてその幕僚である女騎士グレイス。おまけとしてお茶くみ係のリリーゼ。

余談であるが、アールヴェルツェはモントルム総督府の正式な武官ではない。彼の身分は皇帝ベルトロワ直属の目付け役であり、その任命及び罷免権はモントルム総督たるクロノワにはない。その直属部隊である騎馬五千騎とともに、クロノワとしてはある意味最大限警戒しなければならない相手なのだが、如何せん彼以外にモントルムの軍事を司ることの出来る人物がいない。そのためクロノワは、目付け役に自身の武力の全てを預けるという、ヤケクソとも暴挙とも取れる選択をしたのである。

ただ純粋な人間関係としては、アールヴェルツェはクロノワが冷遇されていた時代からの味方である。双方に強力な信頼関係があってこその選択だったのだろう。アールヴェルツェにしても、

「モントルムの兵をアルジャークの兵に負けない精鋭にしてみせる」

と、日々調練に力を入れている。ひとまずは一万の歩兵を選んで、直属の騎馬隊との連携を叩き込んでいるらしい。

――――閑話休題。話を執務室に戻そう。

遠征に関係してくる人材はアルジャーク帝国本国から供給されるが、モントルム総督府からも、特に今執務室に集まっている人々は遠征に関わってもらうことになる。

「今回の遠征で私は総司令官を務めることになりました。私が不在の間のモントルム領の切り盛りはストラトスにお願いします」

皇帝の勅命について簡単に触れたあと、クロノワはそう言って留守にするモントルム領の一切をストラトスに任せた。いや押し付けた。クロノワとしては一種暴力的な量の仕事から、一時的にとはいえ逃げられることに安堵さえ感じている。それに対し、仕事量が少なく見積もっても倍増すると告げられたストラトスは大仰に嘆いて見せた。

「ああ、また仕事に撲殺される日々がはじまるのですね。知ってます？紙って重いんですよ？積み上げた書類が崩れてきたら、アレはもう鈍器ですよ鈍器。全身打撲で入院したいっていったら『病室でもお仕事してくださいね』って笑顔で宣告されましたし。このままだと棺桶の中にまで書類を詰め込まれそうで、私としては逃げるのが最善策かなぁ～と思ってみたり……あ、ちょ、ま、イタ……！」

延々と続くストラトスの愚痴をグレイスが実力行使で黙らせる。そんな二人の様子を、恐らくは意図的に無視してクロノワは話を続ける。

「次にフィリオですが、他の秘書たちと一緒に補給の一切を担ってもらいます」

今回の南方遠征でカレナリアと直接に国境を接しているのはモン

トルムであるから、補給物資は自然とモントルムに集まることになる。その補給物資を過不足なく前線に送るのがフィリオの仕事である。言うなれば遠征軍の命綱を任されたようなもので、さすがのフィリオにも緊張の色が見える。

「ヴェンツブルグのオルドナス執政官と協力しつつ事に当たってください」

クロノワは海路での補給物資輸送も考えている。カレナリアだけならば陸路で補給線を伸ばしてもいいが、さらにその南に位置しているテムサニスまで陸路で運ぼうとすると、どうしても補給線は長く伸びてしまう。そこで船を使って補給物資を運ぶことを考えたのだ。直接テムサニスに輸送するか、征服したカレナリアの適当な港に集めそこからさらに陸路で運ぶのかそれはまだ分らないが、なんにせよ出発点として使える拠点はヴェンツブルグしかない。

フィリオが了承すると、クロノワは次に視線をグレイスに移した。

「指示はフィリオが出すとして、実際に補給部隊を動かすのはグレイスにお願いしたい」

クロノワがそういうと、グレイスは一瞬不満げに眉をひそめた。次の瞬間にはいつも通りの表情に戻っているが、クロノワはその一瞬を見逃さなかった。

「不満ですか？」

詰問というよりは面白がるようにしてクロノワは尋ねる。彼女が戦場での功を求めていることをクロノワは知っている。

「いえ、決してそのような……」

グレイスは少し慌てた様子で、クロノワの言葉を否定する。だが、それが彼女の本心でないことはクロノワも良く知っている。

「補給は今回の大遠征を成功させるための必要条件です」

戦争の勝敗というヤツは、実は始まる前から決まっている。一度大きな遠征を経験したクロノワはそう考えるようになった。攻める場合は特にそうだ。綿密に勝つための準備を行い、勝てる状態にしてから事を起こす。それこそが戦略家として正しい姿だとクロノワは思っている。

理想論だと分っている。けれども人の命がかかっている以上、いくらでも理想を追うべきだと思う。

補給は勝つための大前提だ。ここが揺らいでは戦力で圧倒していようとも勝利を得ることはできない。現実問題として理想をそのまま実現することは不可能だが、少しでもそこに近づけなければならない。グレイス・キーアはそのための起用だ。

「フィリオは部隊の具体的な動かし方は分りませんから、彼の意図を汲んで部隊を動かせる人物が必要になります」

それは恐らくグレイスでなくともできるだろう。しかしグレイスならば上手くやれる、とクロノワは思っている。

「期待しています」

「……了解しました」

そういって頷くグレイスの眼から不満の成分が少なくなっているのを見て、クロノワは内心で安堵の息をついた。フィリオとグレイス。この二人に任せておけば、補給は磐石だろう。

「総司令官は私ですが、実際に兵を動かすのはアールヴェルツェにお願いすることになります」

最後にクロノワはアールヴェルツェに目を向けた。

ちなみにアルジャークの至宝、アレクセイ・ガンドールはレヴィナスの目付け役として今はオムージュ領にいる。彼もまたオムージュ領の軍事一切を任されており、そのせいか今回の遠征には参加しない。

アレクセイがオムージュ領の軍事一切を任された経緯を大雑把に説明すれば、レヴィナスが建築計画に全力を傾けるために雑事を彼に押し付けた、ということになる。無論、アレクセイ自身が非常に優秀だったこともその一因なのだが、レヴィナスにしてみれば「そんなことをやっている時間はない」というのが偽る必要のない本音であった。

ともかくアレクセイ・ガンドールは今回の遠征には参加せず、よってアールヴェルツェ・ハーストレイトが遠征軍の実質的な指揮を執ることになる。彼がクロノワの下で軍を指揮するのはこれが二度目だ。

「兵の総数は二十万から三十万規模になるそうですが、編成等は全て将軍に一任します。急ぎ帝都に帰還し、準備を進めてください」

「御意」

アールヴェルツェはただ一言だけ短く答えた。彼の頭の中では、

すでに遠征軍の細かい編成や彼の手足となり軍を動かす部隊司令官の名前が連ねられているのだろう。

「ああ、それとアールヴェルツェ、直属の騎馬隊から五百騎ほど貸してもらえませんか」

思い出したようにクロノワがそういった。アールヴェルツェは一瞬不審がるような表情をしたが、クロノワの様子を見てすぐにそれは苦笑へと転じた。

「なにか、悪巧みでも思いつかれましたかな？」

「ちょっとした悪戯ですよ。成功すればよし。失敗しても遠征に影響は出ませんよ」

それを聞いてアールヴェルツェはさらに苦笑した。どうやら今回もなにやら面白いことを考えているようだ。

「分りました。幕僚の一人に五百騎を預けておきましょう。悪巧みはその者と」

悪巧みの詳しい内容をアールヴェルツェは聞かなかった。無意味なことをするとは思えないし、クロノワが「失敗しても遠征に影響はでない」というのであれば、そうなのだろう。

それに直属部隊騎馬五千騎全てを伴って帝都に帰還する必要はなく、そうなれば部下が暇を持て余すことになる。無駄飯を食わせるくらいなら働かせたほうが良かろう。そんな次元の低い思惑もあったりするのだった。

第六話　そして二人は岐路に立ち？（前書き）

なんかグダグダな感じがします……。
面白くなかったら、ゴメンナサイ（涙）。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

「なぜレヴィナスではないのですか！？」

女性の金切り声が、アルジャーク帝国皇帝の執務室に響いた。

「わらわは確かにあの子を遠征軍の総司令官に、と申し上げたはず！」

なのになぜあの下賤な女の子がその役職につくのか、と皇后は執務机に手をつき唾を撒き散らしながら夫たる皇帝ベルトロワに迫った。

「そのレヴィナスがクロノワを自分の後釜に、と推したのだ」

「そのような言い訳を聞きたいのではありません！」

ベルトロワが非公式にレヴィナスの意思確認を行い、その席でレヴィナスが遠征軍の総司令官としてクロノワを推したことは、もはや公然の秘密としてささやかれている。これはまったくの事実であるし、もとより知られて困ることでもないため、ベルトロワとしても情報統制をするつもりなどない。それどころかこの噂によってベルトロワの器の大きさとレヴィナスの見識の高さについてさらに評価が上がっており、皇帝も皇太子も大いに面目をほどこしたといっていい。

面白くないのは、レヴィナスを推した皇后だけである。

「レヴィナスを総司令官に、と勅命をお出しになればよいではありませぬか！」

アルジャーク帝国において皇帝の権威は絶対である。確かに勅命という鶴の一声が下れば、たとえ今からであってもレヴィナスを遠征軍総司令官に据えることは可能だ。可能だがベルトロワにその意思は、当然のことながら、ない。

「悪しき前例を残すわけにはいかぬ。これはレヴィナスも言ったことだぞ」

アルジャークの法は「結婚して一年以内のものは兵役を免除される」と定めている。この法は帝室にも適用され、皇太子たるレヴィナスはむしろ率先してこの法を遵守しなければならない。

にもかかわらずここで皇帝の勅命により皇太子を遠征軍総司令官にしてしまえば、「皇帝が皇太子の免除の権利を放棄させた」という前例が残ることになる。そんな前例を残しておけば、後の時代に皇帝の強権により法が有名無実と化してしまうかもしれない。

「皇帝と皇太子が法を守らずして誰が法を守るのか」

この国は法によって治められているのだ。皇帝にのみ許された“超法規的処置”という伝家の宝刀はそうたやすく抜いてよいものではない。国を預かる者は法を揺るがすようなことをしてはならないのである。

（だからこそ「法を過去にさかのぼって適用する」ことは禁じ手なのだ）

一瞬だけ、ベルトロワの思考がオムージュ領に、そしてレヴィナスに向く。だが彼はすぐに目の前の問題に意識を戻した。

さらに喚きたてる皇后をなんとかなだめすかし、執務室からお引取りを願う。台風が去った執務室で、ベルトロワは一人苦笑を漏らすのであった。

執務室を後にした皇后は、苦々しく苛立ちながら廊下を歩いていた。まったく、気に入らない。なぜあの下賤な女の子なのか。

（まさか陛下はレヴィナスではなくクロノワを……？）

皇后のうちに生まれた疑念の種は、すぐさま彼女の心のうちに根を下ろし芽を出した。そして彼女はそこに推測の水を注ぐ。

（彼奴に箔を付けるため、と考えれば確かに筋が……）

考えれば考えるほどに、彼女の苦々しさと苛立ちと腹立ちは強くなっていく。そしてそこにはいつの間にか焦燥が混じり始めていた。

「いいでしょう。ならばこちらにも考えがあります」

ポツリと呟く。その言葉からは狂気の響きがした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

苦々しさと苛立ちと腹立ちと焦燥の具合ではこちらも負けてはいない。

場所はカレナリア王国王都ベネティアナ、人物の名はエルネスタード・カレナリア。カレナリア王国の国王である。彼の精神状態が劣悪になった原因は、ひとえに一つの噂のゆえである。

曰く「アルジャーク帝国が近くカレナリアに出兵するらしい」

この噂はここ一ヶ月ほどで国全体に広がり、今巷はこの話題で持ちきりであった。無論、悪い意味で。

昨年、アルジャーク帝国はオムージュとモントルムを完全に併合し、その結果ここカレナリアはアルジャークと国境を接することになった。アルジャークの版図は二二〇州でカレナリア六三州の実に三倍以上である。しかもその兵は精強をもって大陸中にその名を知られている。

突然強大な力を持つ隣国が誕生し、カレナリア王宮中は慌てに慌てた。主だったものを集めて対応を協議してみたところで、明確な方針は出てこない。結局「帝都ケーヒンスブルグに大使館を置き情報を収集する」ということだけが決り、軍備の増強や国境警備の強化などは見送られた。

一見して温い対応だが、ある意味では仕方がない。カレナリアはアルジャーク兵の兵精強さを聞いてはいても実際に見たことがあるわけではない。それに彼らにとってアルジャークの遠征はあの大併合をもって終わったはずであったのだから。

閑話休題。例の噂である。

カレナリア政府は巷に噂が広がる前から同様の内容の報告を大使館から受けている。ただしその内容は、

「そういう話もあるらしい」

といった程度のもので、いわば憶測の混じった噂と変わらない。この時点でのカレナリア政府の警戒度は低かった。

それが最近になって大使館からの報告に現実味が出てきた。

曰く「遠征軍総司令官はモントルム総督のクロノワ・アルジャークらしい」

曰く「アールヴェルツェ・ハーストレイト将軍が補佐につくらしい」

曰く「兵の規模は二十万～三十万らしい」

加えて「これは複数の筋からの信頼できる情報である」との旨が、報告書には書き添えられていた。

巷に広がっているのがただの噂であれば、エルネタードの精神も劣悪な状態に陥ることはなかったであろう。しかしその噂はカレナリア政府がつかんでいる信頼できる情報と矛盾せず、そしてその情報が巷に普通に出回っているということは、すなわち宣戦布告が近いことを予感させた。

「どう考える？」

キリキリと痛み出した胃に顔をしかめながら、エルネタードは目の前に居並ぶカレナリア王国の主だった者たちにそう切り出した。

「恐れながら」

そういって一歩前に出たのは、カレナリア王国の将軍の一人、イグナーツ・プラダニトであった。

「アルジャークが宣戦布告をしてくるのは、もはや時間の問題であると考えます」

大使館が比較的容易に情報つかめたことや噂が巷に広がっている理由は、アルジャークが意図的に情報を流しているからと考えるべきであり、その目的は当方を混乱させ戦う前から戦意を挫くことであると思われる。

イグナート将軍はそう分析してみせ、そしてその分析は大筋において正しかった。確かにアルジャークは遠征に関する情報を意図的に流し、カレナリアの戦意を挫くことを意図していた。

ただアルジャークにはもう一つの意図がある。それは「カレナリアを攻める」と声高に宣言してみせることで、もう一つの目的であるテムサニス王国への遠征をギリギリまで悟られないようにすることであった。

イグナーツの言葉にその場がざわめいた。誰もが「まさか」とは思いつつも、否定できるだけの明確な論を持っていなかった。

「静かにせよ」

エルネタードの言葉で静寂が戻る。彼はそのまま視線をイグナートに向けた。

「してイグナーツよ。そなたはどのような対応を取るべきであると考える？」

「一戦を避けることは叶わぬでしょう。なれば早急に兵を集め準備を整えるべきです」

武人らしくイグナートは主戦論を唱えた。敵が武力をもって侵略してくるというのであれば武力をもって対抗するほかない。武官であれば誰もが理解を示すであろう思想を、イグナーツもまた持っていた。

「少々、お待ちください」

しかしこの世は武官だけで構成されているわけではない。その中には無論、イグナーツの考えに異議を唱えるものも存在するのだ。

「正式な宣戦布告もないのに、こちらが戦の準備をすればアルジャークを無用に刺激することにはなるまいか」

「その通りだ。それにこちらから動けば向こうに戦争の大義名分を与えることになる」

「そもそも戦争回避のための外交努力を行わないまま、ただ兵を整えるのは横暴というものでしょう」

いわゆる文官勢力というヤツが、口々に反論を述べていく。彼らは別に武官たちに手柄を立てさせたくない、と思っているわけではない。たった一つの輝かしい武功が国家百年の計に勝るといわんばかりの風潮は、確かに彼らにとって面白いものではない。しかし、彼らは「戦争をすればお金が掛かり労働力が減りモノが壊れる」という歴然たる事実を知っているから反対するのである。

ただイグナートからすればいかにも迂遠である。すでに剣を研ぎ矢を揃えている敵を口先八丁で丸め込めるならば、この世に戦などありはしない。

「では方々にお聞きするが、この事態に際しどのような対応を取るべきと考えられる?」

イグナーツと同じ武官の一人が、そういって文官たちの方に目を向けた。言葉は丁寧だが、音には若干の侮りが含まれている。

「当面は大使館を通じ戦争回避のための外交努力を行うべきでしょう。軍を動かすのは、実際に宣戦布告がなされてからでも遅くはないはず」

侮りの口調にムッとした表情をしながらも、若い文官は滑らかにそう答えた。この場にいる以上は優秀なのだろうが、心のうちを顔に出す辺り、イグナーツから見てもまだまだ若い。

「それでは遅いのですよ。軍というのは命令を出してすぐに動けるのはごく一部です」

例えば弓兵一万人に矢を五十本ずつ持たせれば、それだけで矢は五十万本必要になる。これを一日分として考え一週間戦うとすれば、さらに七倍の三五〇万本の矢が必要になる。装備はこれだけではないし、当然の話として食料が必要になる。常に臨戦態勢ですぐに動ける部隊などほんの一部である。

カレナリアですぐに動かせる常備軍はおおよそ十万といったところであろうか。しかしそれにしたって国中全てあわせて、である。そもそも集結させること自体に時間がかかる。なによりも二十万とも三十万とも予測されるアルジャーク軍には、これだけでは足りないのが眼に見えている。

要するに軍を動かすには、準備の段階で時間と金が必要なのだ。今回のように大軍を動かす必要がある場合は特にそうだ。

「それはアルジャーク軍とて同じであろう？」
「左様。ですからアルジャーク軍と同じく、今このときより準備を始めなければなりません」
イグナーツが穏やかにそう切り返すと、文官は言葉に詰まった。
その文官は、
「アルジャークは宣戦布告をしてから準備をするはずで、ならばこちらもそれにあわせれば問題はない」
と考えていたが、イグナーツは
「アルジャークがこちらの都合に合わせてくれる保証はなく、宣戦布告がなされた時にはすでに準備が完了していると考えるべきだ」
と主張したのである。
「加えて遠征軍の総司令官はクロノワ・アルジャークであると聞く。ならば宣戦布告と同時に国境が破られることも有り得るかと」
ここでイグナーツが言う「宣戦布告と同時に国境を破る」という行為は、「国境付近に軍を待機させておき、あらかじめ決めておいた宣戦布告の時間に行動を開始する」ということではない。この場合であれば、カレナリアは事前に敵軍の襲来を高確率で予測できる。なにしろ国境付近に大軍が集結している。それを察知するのは比較的容易であろう。無論、対処できるかは別問題であるが。
イグナーツが言っているのは「アルジャーク軍が不意をうって領内に侵入する可能性がある」ということである。
イグナーツの言葉に会場がざわめいた。エルネタード国王がそれを制し、彼に説明を求める。

「前回クロノワは騎馬隊による先行を決行し、それにより大きな功績を挙げました」

クロノワがどのようにしてモントルムを征服したかは、無論イグナーツも聞き及んでいる。騎馬隊の機動力を生かした先行作戦は、あの場合にしか使えないような奇策だが確かに上手くいった。ましてモントルム領とカレナリアの国境には、防波堤となるべき砦はないのだから。前回の成功に気を良くしたクロノワが、しかるべき改良を加え今回もその作戦を用いることは十分に考えられる。

「宣戦布告をされてから準備を整えるなどと悠長なことを言っていては、戦わずして降伏しなければならなくなるでしょう」

イグナーツはそう締めくくった。準備は早ければ早いほど良い。彼はそう主張したのだ。

「だが、将軍の論は全て憶測であろう……？」

「左様、全ては憶測。しかし憶測なくして国家の展望を描けないのもまた事実」

未来のことを語るときに大なり小なり憶測が混じるのは仕方がない。重要なのはその憶測が過去の事実に基づいているか、ということだ。基づいていればそれは“予測”となり、基づいていなければ“妄想”と呼ばれるのだ。さらにクロノワの名に付随する「策略家」としてのイメージがその“予測”の確率を上げていく。

会場が沈黙した。弁論は出尽くしたようである。あとはエルネタード・カレナリア国王の采配を仰ぐのみである。

「大使館を通じ戦争回避のための努力を続けよ。軍部はいつ宣戦布

告がなされても良いように準備を整えるように」

ただし間違っても国境侵犯などしないように、とエルネタードは厳重に注意した。それではアルジャークに宣戦布告のための正当な理由をくれてやるようなものだ。

こうして、落ち着くべき結論に落ち着いて御前会議は終わったのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

来るべきアルジャークとの決戦に備え、軍の準備を任されたイグナーツの基本姿勢は実に明快であった。

数で敵を上回ること。これこそが戦略において最も重要であると、イグナーツは考えている。

古来より曰く「大軍に兵法なし」

敵を上回るだけの戦力を整え、遊軍をつくることなく真正面からぶつかる。一見すれば地味であるが、それだけに堅実で勝算も高いといえる。ぶつかった後は戦術レベルの世界になるが、国家という組織であれば一定水準以上の指揮官をそろえていることを期待できる。実際イグナーツの同僚たちは優れた武人だ。

イグナーツの基本姿勢に則って、カレナリアの軍部は二五万の兵を集めた。いや、この時点では集めるメドを立てた。なにしろ本来畑違いである海兵を陸に上げてまで数をそろえたというのだから凄まじい。

イグナーツの本音を言えばもっと集めたかった。だがしかし理想を実現するには様々な障害が立ち塞がるものだ。資金不足とか資金不足とか資金不足とか。それでも二五万集めるメドが立ったのだ。御の字というべきであろう。

さて、兵の数についてはメドが立った。すでに指示は出してある。後は部下が上手くやるだろう。

ちょうどそんなときであった。イグナーツのもとにとある報告がもたらされたのは。

「国境付近でアルジャークの斥候と思しき目撃証言が多数、か……」

国境侵犯だの不法入国だのはこの際置いておこう。そちらは大使館にでも任せて置けばよい。問いただしてみたところでしらばっくれらるのがオチだろうが。

提出された報告書を読み進めていくと、目撃証言は国境線全体から上がっている。これだけでもかなりの数が組織的に動いていることが予測された。

「果たしてその目的は……？」

普通に考えるならば、開戦を控えての情報収集だろう。詳しい地形などの地理的な情報は多いほどいい。だがそれにしても探る範囲が広すぎる。

「行軍の基本的なルートはまだ決めていない、ということか……？」

イグナーツはそう考え、しかし自分の考えに確信を抱けないでいた。

今回アルジャークが動かすのは二十万とも三十万とも言われる大軍である。その大軍を動かすには、当然街道を、踏み固められた道を用いるのが最も良い。主要な街道はすでに地図に記載されており、それはアルジャークも持っている。なればこそ国境線全体という探査範囲は腑に落ちないものがある。

報告書によると、斥候のほとんどは馬に乗った騎兵であるという。もとより騎兵はその機動力を生かし、斥候などの情報収集にも活躍する。ゆえにこれ自体はおかしいことではない。

「騎兵、か」

イグナーツはポツリと呟き、報告書に目を走らせていく。今のところ衝突した事例や流血沙汰になったことはないようだ。アルジャーク側も恐らく気をつけているのだろう。そして報告書の最後には、次のような噂がまことしやかに囁かれている、という付記が載っていた。

曰く「クロノワ・アルジャークはモントルム遠征で騎馬隊を先行させ大きな戦功を上げた。今回もそうするに違いない」

その噂話はイグナーツの予測とピタリと一致していた。さらに報告書の内容とあわせ、彼の頭の中で思考の連鎖反応が起こった。

「国境付近に出没しているアルジャークの斥候は、先行する騎馬隊の侵入ルートを下見していたのか……！？」

そう考えれば、筋は通る。クロノワの名にちらつく策略家としての影が、イグナーツの中で肥大化していく。

思いもよらぬ場所から騎馬隊を侵入させこちらをかく乱する。あるいは適当な場所に戦線を張らせて本隊を導きいれる。領内に潜んでおいてこちらの補給線を脅かす。そんなシナリオがイグナーツの頭に浮かんでは消えていく。

「いずれにせよ……」

いずれにせよ、早い段階でクロノワ・アルジャークの思惑に気づけたのは僥倖であった。要は先行してくるであろう騎馬隊が好き勝手に動くのを防げばよいのだ。それだけでアルジャークの、いやクロノワの戦略に狂いが生じる。

「そのためには……」

そのためには、どうすればよいか。イグナーツは「対先行騎馬隊作戦」を急速に練り始めていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大陸暦一五六四年七月の半ば、ついにアルジャーク帝国はカレナリア王国に宣戦布告した。その口上は歴史書を紐解けば簡単に知ることができる。

曰く「カレナリア王国は軍備を整え我がアルジャーク帝国を侵略せんしている。我が帝国は国土と臣民の安寧を守るためカレナリア王国へ出兵するものなり」

明らかな言いがかりであるが、そもそも宣戦布告などというものはされる側にしてみれば、どのような内容であろうとも言いがかりであろう。特に今回のカレナリアのように国力で劣っている場合は。

宣戦布告の報を受け、イグナーツを始めとするカレナリア軍部はすぐさま動いた。彼らの想定としては、宣戦布告からそう間を置くことなくアルジャークの騎馬隊が先行してカレナリア領内に侵入してくることになっている。それに対処するためには時が要であり、可能な限り速やかに部隊を展開する必要がある。

イグナーツはかき集めた二五万の兵をまず三つの部隊に分けた。右翼、本陣、左翼である。次に本陣を街道上に、右翼をその右前方、左翼を左前方に配置した。両翼と本陣の間の距離は、馬を走らせて半日といったところであろうか。地図上でその配置を確認すれば国境に底辺を向けた二等辺三角形を描く。それぞれの戦力は両翼がそれぞれ六万五〇〇〇、本陣十二万である。各部隊には索敵を密にし、報告を欠かさないように厳命してある。

仮にアルジャーク騎馬隊が街道以外の場所から国境を破っても、これにより早期に発見できるだろう。街道を駆け上ってくるならば本隊に突き当たる。

（これでアルジャークの騎馬隊の動きを制限できるはずだ……）

イグナーツは頷いた。そしてできることならば早期に敵騎馬隊を補足し、本隊と合流する前に叩いてしまいたい。そうすればクロノワの戦略を多少なりとも狂わせることができるし、また敵の絶対数を減らすこともできる。なにより緒戦に大勝できれば兵の士気は大きく上がるだろう。

「いつでも来るがよい」

イグナーツは腕を組み、まだ見ぬアルジャークの騎兵隊に鋭い眼光を向けるのであった。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

イグナーツは焦っていた。

（どうなっている……！？）

すでに宣戦布告から二週間近くが経過しようとしている。にもかかわらず、いまだアルジャーク軍騎馬隊発見の報は入っていない。アルジャークの斥候らしき騎兵を遠目に見かけることはあれど、それ以上の集団を発見することはいまだどの隊も出来ていない。

（どうする……？早く次の手を考えねば……）

ただ単にアルジャーク軍騎馬隊の発見が遅れているだけであれば、イグナーツもここまで焦ることはないであろう。しかし彼はもう一つ厄介な問題を抱え始めていた。

――――兵糧が、足りなくなってきている。

決して兵站を疎かにしていたわけではない。しかし、なにしろ二五万の大軍を動員するのはカレナリア王国始まって以来初めてである。二五万人分の食料を確保し続けるには、この国は少しばかり能力が足りていない。なんとか量を減らしたりして食いつなぎ、その間に後方が必死に兵糧をかき集めてくれて今まさに輸送中というが、なんにせよこのままではジリ貧である。

早く次の手を打たなければならない。

なんにせよ動くのであれば三つに分けた部隊を集結させねばなる

まい。ただ部隊を動かした途端にアルジャーク軍の騎馬隊が動くかもしれない。そう考えるとなかなか部隊を動かせない。そもそも兵糧が補給されるまでは大掛かりな動きは取れない。

結局、何も出来ない。

イグナーツは焦る。来るのがアルジャークの騎馬隊であれば十分に対応が可能である。と言うか、それに対応するための布陣である。

（だがもし……）

だがもし来るのがアルジャーク軍の本隊であったら？もしそうであれば部隊を広く展開させているカレナリア軍は各個撃破の危険にさらされる。敵軍が街道を使い、なおかつ伝令と連動が最大限上手くいけば包囲殲滅作戦ができるかもしれないが、それは楽観が過ぎると言うものだろう。

アルジャーク軍の騎馬隊なら早く来て欲しい。しかし本隊はまだ来ないで欲しい。イグナーツの心の内はなんともチグハグであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「まさかこんなに上手くいくとは」

成功したというのにクロノワはどこか呆れた声を上げた。

何が成功したかと言えば、それはもちろんクロノワがアールヴェルツェから借りた騎馬五百騎を使ってしかけた悪戯である。

悪戯の内容は実に単純だ。騎馬五百騎を使ってカレナリア国境付近の情報を徹底的に集めさせた。加えて「クロノワは今回の遠征も

騎馬隊を先行させるに違いない」という噂を流した。

情報収集は、文字通りの情報収集である。地図には載っていない地理情報など、集めうる限りの情報をクロノワは集めさせた。集められたこれらの情報は遠征の計画を練ったり、また実際に軍を動かすときにも大いに役に立った。

さて、悪戯の大部分は噂である。上のような噂を流し、さらに国境付近で斥候を動かし噂の信憑性を高めた。つまり、「斥候は騎馬隊を先行させるために情報を集めているのだ」と勘違いさせたのだ。

「来もしない騎馬隊を気にしているのであれば、それは隙になります」

クロノワが仕掛けたのは、いわば敵指揮官に対する心理戦である。前例を基にこちらの戦略をチラつかせ、対応を誤らせるのが目的だったのだ。

この悪戯、失敗しても特に問題はない。

集めた情報はそれだけで価値がある。敵が流言に踊らされなくとも、こちらが失うものなど何もない。いずれは大きな決戦をしなければならず、その時に少々有利になっていれば御の字。クロノワとしてはそう考えていた。

しかし、イグナーツはこの噂を気にした。いや、クロノワの影を気にした、と言ったほうがいいかもしれない。そして彼はアルジャーク軍ではなく、アルジャーク軍の先行してくるであろう騎馬隊に対応するため布陣を組んでしまったのだ。

「殿下の悪戯が思いのほか上手くいったのは、こちらにしてみれば

僥倖。この幸運を最大限活用すべきでしょう」

アールヴェルツェはクロノワを「閣下」とではなく「殿下」と呼んだ。この場で遠征軍を率いているのはモントルム総督ではなくアルジャーク帝国第二皇子である、ということなのだろう。こういう生真面目なところはいかにも彼らしい。

「そうですね。敗因なくして勝因無し。敵の失策には最大限付け込みましょう」

今のクロノワは遠征軍総司令官である。彼の双肩に遠征軍二一万五〇〇〇の命が掛かっている。敵兵の命まで気にしている余裕はない。それをすべきなのは敵の司令官のほうであろう。

「レイシェルとイトラは上手くやってくれるでしょうか」

レイシェル・クルーディとイトラ・ヨクテエル。二人は共にアルジャーク軍の将軍で、今回の遠征でもそれぞれ部隊を率いている。二人ともまだ若いが現状でも十分に優秀だし将来有望であると、アールヴェルツェは二人の才をかっている。

二人は今、それぞれ一万五〇〇〇の部隊を与えられカレナリア軍左翼と思しき部隊へ接近している。その任務はカレナリア軍を本隊が待ち受けるこの場所まで誘導することである。

斥候の情報によると、補足したカレナリア軍の戦力は六万から七万。発見した位置や数から考えて街道の反対側に同程度の規模の部隊（右翼）がもう一つ展開しており、さらに街道上には本隊が陣取っているだろう、というのが遠征軍幕僚たちの一致した見解だ。正確な位置関係は分らないが、少なくとも目で見て見える範囲にはい

ないとの事だ。

今回のクロノワの戦術を簡単に要約すると、「我全力を上げて敵分隊を叩く」と言う言葉にまとめることが出来る。わざわざ敵が戦力を分散させてくれたのだ。これに付け入らない手はない。

ただ全軍で襲い掛かると、その笑い出したくなるような戦力さゆえに、戦わずに逃げられてしまう可能性もあるので、レイシェルとイトラの軍を餌にしておびき寄せようというわけだ。

（さて、少し緊張を高めておくとしますか……）

また、あの血生臭い殺し合いが始まるのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

イグナーツ・プラダニトが焦っていたころ、彼の指揮下で左翼を任されているベニアム・エルドゥナスは苛立っていた。

「アルジャーク軍はまだ見つからんのか！？」

ベニアム・エルドゥナスは猛将として知られるカレナリアの将軍である。彼が指揮を執れば軍勢の破壊力は二割増しになると言われているが、その反面感情的で気の短いところがある男だった。

彼が苛立っている理由は、イグナーツが焦っている理由とほぼ同じである。敵は見つからない。食料は足りていない。動くに動けない。イグナーツとベニアムの二人の心情の差は、そのまま二人の性格の差異であろう。

ベニアムは苛立たしげに腕を組み、貧乏ゆすりをしながら何かを睨みつけている。彼の気が短いことを知っている部下たちは、その視界に入らないようビクビクしながら動いていた。まだ被害者は出ていないが、それも時間の問題のように思われる。

ベニアムの忍耐力が限界に差し掛かっていたそんなとき、その報告はもたらされた。

「アルジャーク軍を発見しました！」

偵察に出ていた斥候が転がり込むようにしてベニアムの前に出てきた。その報告を聞くと、ベニアムは猛然と立ち上がった。

「どこだ！？」

「真っ直ぐこちらに向かってきています！その数は三万程度かと！」

そこまで聞くと、ベニアムの興奮も少し収まった。そして彼はさらに詳しい情報を聞き出していく。

「敵軍の構成は？」

もともとアルジャークの騎兵隊に対応するための布陣だが、すでに開戦から二週間近くが経過しており、騎馬隊だけを先行させている可能性は低いとベニアムは考えていた。

「歩兵も混じっています。恐らくは普通の軍の構成かと」

一つ頷いてから、ベニアムは斥候を下がらせた。それから全軍に指示を出し臨戦態勢を整えさせる。さらにアルジャーク軍襲来の報を本陣に伝えるべく伝令を出す。その伝令には、敵軍の規模、構成

などを必ず伝えるよう厳命しておく。

一通り指示を出し終えてから、ベニアムは自身の甲冑を着込んでいく。

血がわき立ち、心が躍る。

これから始まるのは、どう言いつくろっても殺し合いでしかない。それを楽しむわけでは決してないが、待ち望んでいたこともまた確かなのだ。

（あるいは人としては不謹慎なのかもしれぬが……）

ベニアムは武人でありこの国を守る剣だ。そしてその在り方に誇りを持っている。ならば自分を否定することなく、今に悲観することなく、将来に絶望することなく、己の職場である戦場に立ちたいと、ベニアムは思うのだ。

馬にまたがり陣頭に立つ。彼が見据える先には、非友好的な一団が迫ってきている。

「全軍戦闘隊形を整えろ！」

一方には遅すぎた戦端が今、開かれようとしている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アルジャーク軍の戦い方は、なんともベニアムをイライラさせるものだった。

まともに戦おうとしない。

最初の一撃こそ苛烈を極め、「さすがはアルジャーク軍」とベニアムも唸ったのだが、それ以降は消極的な攻撃と撤退を繰り返すばかりで、まともに戦おうとしない。軽くいなされているかのような感覚に、頭に血が上っていく。

「腰抜けが！精強を誇る兵が泣いておるぞっ！」

苛立ちを隠そうともせず、ベニアムは叫んだ。そしてその勢いのままに、二つに分かれているアルジャーク軍の一方に兵力を集中させる。だが絶妙のタイミングでもう一方に邪魔をされ逃してしまう。先程から万事この調子だ。

二つの部隊を率いている二人の将は、疑うことなく有能な用兵家だ。兵の動かし方やそのタイミング、さらに隷下の兵士たちの士気を見ていればすぐに分かる。優れた用兵家と雌雄を決するのはベニアムとしても望むところなのに、肝心の敵がまともに組み合おうとしない。彼のイライラは募るばかりだ。

ただベニアムは苛立つばかりではなく、焦ってもいた。戦闘が始まってからの様子を見るに、一手間違えれば敵は手の届かないところに逃れてしまうだろう。それではまずいのだ。敵に対して二倍以上の数を揃えているこの局地戦を何としてもモノにし、敵の絶対数を減らし意気を挫かねばならない。

「足を止めるな、前に出ろ！敵を逃すな！！」

猛将ベニアムに指揮されたカレナリア軍の勢いは凄まじい。「彼が指揮を執れば軍の破壊力は二割増しになる」と言われるだけのことはある。カレナリア兵は半ば狂ったようにアルジャーク軍に襲い

掛かっていく。

「まるで猪だな……」

背中に感じる冷たいものを無視しながら、レイシェル・クルーディはそう呟いた。彼は若いながらも隙のない用兵家として知られており、アレクセイやアールヴェルツェといった年長で経験豊かな将軍たちからも高い評価を得ている。

迫り来るカレナリア軍をレイシェルは猪と評したが、ただの猪ではあるまい。人を跳ね飛ばし木々をなぎ倒す、巨躯にして獰猛な猪だ。反面、ただ前に進むことしか知らぬ、という評価も含んでいる。

「凄まじい喰い付きだな」

そう言って馬を寄せてきたのはレイシェルの同僚であるイトラ・ヨクテエルだった。陽気な男で、レイシェルと比べると用兵の精密さには欠ける。だが彼が指揮する部隊は逆境でも士気が下がらず、その逆境を幾度となくはね返してきた。

「単純に逃げても追って来るんじゃないのか？」

レイシェルとイトラの任務は、現在交戦中のカレナリア軍をアルジャーク軍本隊が待ち構えている場所に誘導することである。二人は消極的な攻撃と撤退を繰り返してカレナリア軍をここまで誘き出してきたのだが、敵軍の様子を見るにこのまま全力で撤退しても追って来てくれそうである。

「いや、全力で撤退すれば敵がつけ上がる。このままいくべきだ」

戦術的撤退とはいえ、背中を見せて逃げれば敵は調子に乗るだろう。それに攻撃の仕方から敵将はかなり苛立っていると見える。出来れば完全に理性を吹き飛ばしてから本隊とご対面させてやりたい。

「……ヒドいな、お前……」

「緒戦は派手に勝つに限る」

真顔でそう言い切るレイシェルにイトラは呆れたように了解を伝えてから自分の部隊の指揮に戻った。イトラが指揮する部隊の士気は高い。将官はともかく、一般の兵士には精神的に辛い撤退戦であるにもかかわらず、だ。

（相変わらず、だな）

士気が高い部隊が味方にいるのは頼もしい。

（この作戦は上手くいく）

馬上で味方を鼓舞し指揮をとる、同僚にして友人の姿を認め、レイシェルはそう確信した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

逃げるアルジャーク軍を追うカレナリア軍、その将であるベニアム・エルドゥナスの理性はもはや完全に吹き飛んでいた。彼の指揮する軍はもはや一個の狂気と化し、そこには戦術や組織としての整然さといったものは見当たらない。兵士たちは集団の狂気に身を任せひたすら前進していく。本来それを統御すべきベニアムは、むしろ進んでその狂気を煽っていた。

敵将の理性がはじけとんだことはイトラ・ヨクテエルの目から見

ても明らかであった。なにしろ逃げるアルジャーク軍のほうが整然としているくらいである。ただその迫り来る圧力はさすがに凄まじく、下手な手を打てばすぐにでも喰いちぎられてしまう予感があった。

（そろそろ頃合か……）

二重の意味で。そして自分よりも戦術眼が優れている友人もそのことに気づいているに違いない。

敵の指揮官は感情的になりもはやその用兵に脅威を感じることはない。敵兵の勢いは確かに凄まじいが、言ってしまえばそれだけでなんら獣と変わらない。獣と言っても獰猛極まる野獣だが、怖気づくことさえなければ対処して見せる自信はある。

そしてさらに、そろそろ本隊との合流地点だ。もう少しすれば数の上でも上回る事ができる。しかも圧倒的に。

イトラがそう考えていた矢先のことであった。アルジャーク軍分隊を猛追するカレナリア軍の左側面からアルジャーク軍本隊が現れたのは。

後で知った話だが、この時突如として現れたのは本隊の全軍ではなく、歩兵ばかりが五万程度だったと言う。もっともそう遠くない位置に残りも控えていたそうだが。

その軍隊はあまりにも突然に現れた。なにしろもうすぐ合流できると知っていたイトラで、さえも思いもかけぬ場所から現れ驚いていた。あとでレイシェルに確認したところ、彼も驚いたと言う。見晴らしは良いが、何もない草原というわけでもない。よほど上手く

隠れていたのだろう。

「さすがはアールヴェルツェ将軍。年季が違う」

後に若造二人は酒を飲みながらそう唸ったそうな。才能ではなく年季のせいにしたのは、いずれは追いつきそして追い越して見せるという自負のゆえだろうか。

アルジャーク軍の二人が驚いていたというのだから、カレナリア軍の驚愕はそれ以上であった。目の前の敵を追うべきか、それとも新たに現れた敵に対処すべきか。あるいは逃げるべきか。将たるベニアムは頭に血が上っていたところで意表をつかれ、すぐさま指示を出すことができない。結果、カレナリア軍はその場に立ち尽くしてしまった。

「反転攻勢!!この機を逃すなっ!!」

その隙を逃すレイシェルとイトラではない。作戦上、最初の一撃以外まともな攻撃をしてこなかった二人の部隊は、今までの鬱憤を晴らすかのように猛然とカレナリア軍を攻め立てた。新たに現れた援軍とカレナリア軍の間には、まだ若干の距離があり接触には至っていない。敵を逃さぬためにも二人は苛烈な攻撃を仕掛けた。

カレナリア軍は今まで敵を追い逃がさないことに集中するあまり、隊列は乱れもはや組織ではなくただの集団に成り下がってしまっている。加えて足を止めてしまったことで、唯一の脅威であった勢いもなくなっている。そんな敵軍をアルジャーク軍の二人の将軍は紙でも切り裂くが如くに蹂躙して行った。

水平に放たれた矢が死者と負傷者を量産していく。馬上から振り

下ろされる斧は兜ごと敵兵の頭を叩き割り、槍は喉を貫いて血に濡れる。イトラが敵兵を切り捨てれば、レイシェルも槍を一閃させて雑兵をなぎ払っていく。

この時のベニアム将軍の対応について批判するのは酷であろう。確かに将軍は頭に血が上り細かな指示が出せる状態ではなかったが仮に冷静であったとしても、いや指揮官が誰であったとしても、アルジャーク軍が突撃してくる前に隊列を組みなおしこれを防ぐことは無理であったろう。それほどまでに二人の将軍は迅速に動き、アルジャーク軍の動きは速攻を極めた。

今まで獲物でしかなかったはずのアルジャーク軍から反撃を受け、しかも新たに現れた敵援軍が左側面に襲い掛かられ、カレナリア軍は一気に恐慌状態に陥った。さらに敵援軍の後ろにはさらに十万以上のアルジャーク軍が控え、猛然とこちらに突進してくるのである。

誰かが言った。「逃げよう」と。しかし……。

「貴様らぁぁあ！逃げるなっ！！逃げるヤツはワシが斬るっ！！」

血走った目で剣を振り上げ、ベニアム将軍がそう大音声を張り上げた。カレナリア兵たちは知っている。自分たちの指揮官であるベニアム・エルドゥナス将軍ならば、本当にやりかねないことを知っている。そして微妙な判定の結果、指揮官への恐怖がアルジャーク軍への恐怖に勝った。忠誠心などではなくベニアムへの恐れのために、兵士たちはアルジャーク軍と戦っていた。

結論から言えば、このベニアムの対応こそが致命的であった。

カレナリア軍は隊列を組みな直して組織的な反撃を試みることができず、一人また一人と倒れ損害ばかりが大きくなっていく。ベニ

アム将軍が徹底抗戦でなく戦術的撤退を選択していたら、あるいは背後を襲われカレナリア軍左翼は半数以上を失ったかもしれない。しかし三万程度であろうとも本陣と合流し、さらにそこに右翼が加われればカレナリア軍は二一万五〇〇〇となり、アルジャーク軍と数の上では拮抗できる。しかしベニアム将軍が徹底抗戦を選択したがために彼が戦死するまで抵抗は続いた。そして彼が戦死したために組織的な撤退と本陣への合流をすることができず、結果としてカレナリア軍は牙六万五〇〇〇をほぼ丸ごと失ったのである。

とはいえ全ては結果論である。なんら役に立つものではあるまい。

ベニアム将軍は数騎を率い自ら敵軍へと突撃した。敵騎士から奪った槍を振り回し敵を撃殺しながらひたすら前に進んでいく。この戦いに勝つにはもはや大将を討ち取るほかないと彼は思っていた。

悪鬼羅刹のごとくに敵兵をなぎ倒しながら進んでいくベニアムを仕留めたのは、一本の矢だった。首に矢が突き刺さった彼は落馬し絶命した。その矢を射た者の名を歴史書は伝えていない。

ベニアムが戦死したことでカレナリア軍は一挙に崩壊へと向かった。ベニアム将軍配下の幕僚たちがなんとか兵をまとめようとするが、それもかなわない。結局、生き残ったカレナリア軍のほとんどが武器を放り出し甲冑を脱ぎ捨てて逃亡し、この戦いの幕は下りたのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カレナリア軍の崩壊を見届けたクロノワは、イトラとレイシェルの案内で敵陣が張ってあるところに来た。敵将が全員連れて行ったのか、はたまた残っていた者たちはこちらの軍勢を見て逃げたのか、

陣の中は無人であった。日はすでに傾き、空は赤くなっている。今日はここで野営をすることになりそうだ。

決して多くはないが残っていた物資は戦利品としていただくとして、その中でクロノワが最も喜んだのは、陣の最奥の大きな机の上に放置された一枚の地図であった。

「これは、カレナリア軍の配置図、ですな」

地図上には三つに分かれたカレナリア軍がどこに配置されているかが記されていた。国境線に底辺を向けた二等辺三角形の、それぞれの頂点に軍が配置されていると思えば分りやすい。

本陣は街道上に配置され、街道を挟んで左右に両翼が置かれている。両翼と本陣の間の距離は馬を走らせて半日、両翼間は一日といったところであろうか。

この地図を見て、クロノワは思わず苦笑した。カレナリア軍の分隊と思しき一団がこの位置にいたことから、自分の悪戯が成功したことは分っていたが、こうして改めて見ると想像以上だ。

（文字通り、「ここまで上手くいくとは思わなかった」、ですね……）

とはいえこの状況はアールヴェルツェに言われたとおり、アルジャーク軍にとっては僥倖である。せいぜい楽に勝たせてもらうとしよう。

「敵の残りはどれほどだと思いますか？」

地図上で見るところの左翼は壊滅させた。残りは右翼と本陣である。どれほどの兵がカレナリア軍には残っているだろうか。

「そうですな、右翼の規模は左翼とほぼ同じでしょうから六～七万。本陣はその二倍を想定して十二～十四万と言ったところでしょうかな」

腕を組み顎を撫でながらアールヴェルツェは答えた。合計すれば十八～二一万になる。いささか幅が大きいように思われるが、どうやら敵に数で上回られることはなさそうだ。

「左翼と我々が接触したことを、本陣は知っていると思いますか？」

アールヴェルツェの答えに一つ頷き、次にクロノワはそう尋ねた。

「知っている、と考えて動いた方がよろしいかと」

そう答えたのはレイシェルであった。仮にレイシェルとイトラの囮部隊を発見してからすぐに本陣に伝令を出したとすれば、そろそろ着く頃だろう。

「敵はどう動くでしょうか」

候補としてはいくつかある。

一つ、左翼の援護に向かう。右翼には伝令を出して、左翼の位置で合流させる。

二つ、敵が三万程度であれば負けることはないと考えて、右翼と合流する。

三つ、動かず、その場で右翼と合流する。

「我々にとって一番嫌なのは、右翼と合流されることですな」

アールヴェルツェの言葉にその場にいた一同は頷いた。敵軍が合流してしまえば、各個撃破ができなくなる。敵の残りの全軍と真正面から戦って負けるとは思わないが、楽に確実に勝てるならばそうしたい。

「……ともかく、今日はここで野営しましょう。知らない土地で夜動き回るのはできれば避けたい。」

そして明日以降はとりあえず地図上の敵本陣の位置へ向かうとする、とクロノワは言った。敵本陣が左翼の援護に動いているとすれば、途中で鉢合うだろう。動いていなければ、恐らく右翼と合流される前に叩ける。移動していても最低限街道を抑えることができ、優位には立てるだろう。

「分りました。その方向でいきましょう」

そう言うとアールヴェルツェは微笑んだ。まるで正解を出した生徒を褒める教師のようだ。実際、クロノワと彼の関係はそんな感じだが。

「斥候を出しますか？」

そう尋ねたのはイトラだ。

「ええ、お願いします。周りに敵が潜んでいてはゆっくり休めませんから」

蹴散らしたカレナリア軍左翼の崩壊の様子からすると、近くに伏兵がいる可能性は低そうだが、警戒するに越したことはない。

（さて、戦局は動きました。貴方はどう動きます？）

空を見上げれば、太陽はすでに沈んでいる。夜と昼の曖昧な境界を見上げ、クロノワはまだ見ぬ敵の主将に思いをはせた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

左翼がアルジャーク軍の先鋒と思しき一団と接触した、という報がカレナリア軍本陣にもたらされたのは日が傾いた夕方のことであった。聞けば敵の規模は三万程度で、その編成は通常の軍と変わらぬという。

（騎馬隊の先行ではなかったか……）

一通り報告を聞いてから伝令を下がらせ、イグナーツは一人考えを巡らせる。ただ、騎馬隊ではなかったにしろ先行部隊が来たのだから予定通りともいえる。なんにせよいきなりアルジャーク軍本隊と鉢合わせしなかったのは僥倖だろう。

（さて、どう動く？）

敵の規模は三万程度と言う話だから、左翼が負けることはあるまい。後ろに控えているであろう本隊がどの辺りにいるのかは気になるが、なんにしてもあのベニアムが率いる左翼がそう簡単に負けることはないだろう。

イグナーツは知らない。この時点でベニアム・エルドゥナスがすでに戦死し、左翼が崩壊していることを、イグナーツは知らない。知らないまま、彼は思考を重ねていく。

（左翼を呼び戻すべきか……？）

そう考え、しかしすぐに否定する。先鋒は問題なく退けられるだろうが、一戦して全滅させられるわけではないだろう。ならば押さえとして左翼があの位置に必要だ。ベニアムは嫌がるだろうが、防御に徹しさせて時間を稼いでもらうとする。

（右翼はどうする……？）

敵が左翼のほうに現れたと言うことは、右翼のほうに敵が現れることはあるまい。ならば早急にどこかに合流させないと、右翼が丸ごと遊軍になってしまう。

（一番堅実なのは……）

一番堅実なのは本陣と右翼をその中間地点で合流させ、左翼の援護にむかうことだろう。別々に左翼に向かわせると、右翼がアルジャーク軍本隊に捕まる可能性がある。

（しかし、な……）

しかし、それはできない。散々せっついてようやく用意できた兵糧が、今まさに本陣のこの位置へと向かっているからだ。本陣がこの位置から動いてしまうと、補給物資を受け取ることができなくなってしまう。

仕方なく本陣は動かさず、右翼に本陣と合流するよう伝令を出す。左翼との合流にかなりの日数を要してしまうが、仕方あるまい。ベニアムには敵本隊が現れたら、無理をせず引くように命令しておこう。

（さて、戦局は動いた。貴殿はどうするのかな）

アルジャーク軍を率いるクロノワ・アルジャークにイグナーツは思いをはせた。ただ心中は苦い。自分の対応がどうして後手後手に回っているように思われてならないのだった。

第六話　そして二人は岐路に立ち？（後書き）

今回でクロノワのターンは一段落です。
少々中途半端な気もしますが、戦いの趨勢は決しましたし、後に二回やるのも冗長かと思いまして。どのみち数で押すだけですし。

次はやっと教会が出てきます。お楽しみに。

第六話　そして二人は岐路に立ち？（前書き）

おかげさまでお気に入り登録件数が１５００件を突破しました！

読んでくださっている方々に、心から感謝したいと思います。

本当にありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

千年の昔、エルヴィヨン大陸は大小さまざまな国々が入り乱れた戦国時代でした。

戦いに疲れた人々は、神々に救いを求めました。

大陸のほぼ中央にあるアナトテ山にある、とある教会の神殿にも多くの人々が救いを求めてやって来ました。

神殿の門前にはパックスの街がありました

神殿と、そして神殿に入りきれない人たちはパックスの街で、神々に乱世からの救いを求めて祈りました。

そして、ついにその祈りは聞き入れられたのです。

人々の敬虔な祈りに心を動かされた神々は、神界の門を開きパックスの街とそこにいる人々を神界に、争いのない世界へと引き上げたのです。

それから神々は神子を選んで世界樹の種はめた腕輪を与え、こう言われました。

「あまりに多くの人が肉体の器をつけたまま神界の門をくぐることは良くない。神子が敬虔な人々の魂を伴ってその門をくぐる。一度にただ一人、神子だけがその門をくぐるのである。そしてその腕輪を受け継いだものが次の神子となる」

世界樹の種が赤く光る頃、神子は御霊送りの祭壇で祈りをささげ、神界の門をくぐるのです。

神界に引き上げられたパックスの街は、今は大きな湖になっています。

その湖を望む御霊送りの祭壇は、今日も神界の門が開くのを待っているのです。

……「御霊送りの伝承」、カルバン・キャンベル記す。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「賛成四、反対二、棄権一でこの議案は可決されました」

議長役の枢機卿のその声が議場に響き渡ると、枢機卿の一人カリユージス・ヴァーカリーは深い深い嘆息のため息をついた。

ポルトールの西にラトバニアという国があり、そのさらに西にジェノダイトと言う国がある、と言う話は前にした。そのジェノダイトの北にはサンタ・ローゼンが位置し、その東つまりラトバニアの北にはサンタ・エルガー、その北にはサンタ・シチリアナ、その西にサンタ・パルタニアがそれぞれ位置している。

この「聖（サンタ）」の名を冠した四ヶ国こそ世に言う「神聖四国」である。この「聖（サンタ）」の名こそが神聖四国と教会の深い結びつきを内外に示すものであり、これによってこの四カ国は国力でも武力でもなく尊厳や敬意、簡単に言えばエルヴィヨン大陸中の信者から支持を得られると言う点で、他の国々と太い一線を画している。

神聖四国はエルヴィヨン大陸のほぼ中央部に位置している。そのためか大陸における歴史の主役となることも多く文明の成熟も、たとえばアルテンシア半島やアルジャークなどと比べると早かったが、そのためか今は腐敗し腐臭を放ち始めてさえいた。

そして、その腐敗と腐臭の源ともいうべき場所が、教会ひいてはその最高意思決定機関「枢密院」なのである。

枢密院は本来教会の象徴たる「神子」の補弼機関なのだが、神子が組織運営に口を挟むことはまずないため、事実上の最高意思決定機関となっている。歴代の神子の中には枢密院の決定に異を唱えた人物もいたらしいが、当代の神子であるマリア・クラインがそれをすることは考えられない。そもそもかの人は組織運営などから意図的に身を引いている感がある。

枢密院は七人の枢機卿から構成されている。議長役は持ち回りで、なったからと言って何か特権があるわけではない。強いて言うならば、議題を選べるとこだろうか。それにしても結局全て扱うことになるので、有って無いようなものだろう。

さて、今回の議案は「アルテンシア半島への十字軍派遣について」である。その内容について簡単に説明するならば、神聖四国および周辺諸国に号令をかけて十字軍を組織し、アルテンシア半島に派遣するというものだ。その大義名分として掲げられた文句は、

「教会の教えを受け入れないアルテンシア半島の住民を改宗させ正道をなす」

というもので、これは翻訳すると

「アルテンシア同盟が弱っているこの好機に半島を侵略し甘い汁を

吸おう」
となる。

（なんとも情けない……）
カリュージスは頭を抱えて嘆息した。

どれだけ大仰な大義名分を掲げようとも、やろうとしていることは強盗や盗賊となんら変わらない。しかもそれを宗教組織である教会が旗振りをして、率先してやろうとしているのだ。もはや救いようがないと言っていい。

（そもそもその理由からしてまともではない……！）

アルテンシア半島での計画的強盗行為が画策された理由は、ひとえに遊ぶ金欲しさである。

教会はこれまで年間の活動予算のおよそ三割を聖銀（ミスリル）の売却益でたたき出してきた。しかしあろうことかその聖銀（ミスリル）の製法がどこからともなく漏洩してしまったのだ。しかも気がついたときには大陸中の不特定多数の工房に製法がばら撒かれており、もはや手の付けられない状態であった。

しかし、この状態でもまだ教会は優位にあったといっていい。

いくら製法がばら撒かれたとはいえ、教会には今まで蓄積してきたノウハウと流通網がある。その二つを駆使すれば、たとえ聖銀（ミスリル）の価格が下がったとしても市場で大きなシェアを独占し、大きな利益を上げることは十分に可能なはずであった。

しかし、それも今となっては時すでに遅し、である。

監査という名の魔女裁判と醜い責任の押し付け合いに、教会は時間を費やしすぎた。さらに言えば一部の者は、各々の工房の利ザヤをはねて「濡れ手に粟」を企んだりもしたが、如何せん範囲が大きすぎ上手くいかなかった。

後に歴史家たちが分析するところの「過去の栄光にすがりつき現実を直視しなかった」がゆえに、教会は時間を浪費し自らその優位性を崩してしまった。しかも「教会の威光があれば高くとも売れる」と高をくくって値下げを行わなかった。もちろん他と比べて明らかに高い聖銀（ミスリル）が売れるはずもなく、教会は年間活動予算のおよそ三割を丸ごと失ったのである。

しかしこの三割、言ってしまえば遊ぶ金である。清貧を旨とする教会の教えに立ち返り、豪遊を自重すればそれで問題はなかったのである。

だが教会は、その僧職者たちはそうしようとはしなかった。

「お金がないから遊ぶのは我慢しよう」
と考えるのでなく、

「お金がないなら他から奪えばいい」
と彼らは考えたのである。

考えただけではない。その考えはまたたく間に広がった。一介の僧職者のみならず枢機卿までもが、神聖四国の重臣たちに働きかけアルテンシア半島への十字軍の派遣を形にしていった。神聖四国にしても教会が旗振りをする遠征に乗っかれば、自然と多くの兵が集まり容易に征服ができるという思惑がある。まして今アルテンシア

半島は混迷を極めており、まさに千載一遇の好機ではないか。

教会も神聖四国も、そして同調してくるであろう周辺諸国も、誰も彼もがアルテンシア半島を狩場としてしか見ておらず、そこで他人の犠牲の上にわが世の春を謳歌することを心に決めていた。

（あるいは教会はもう駄目かも知れぬ……）

個人の欲望に組織が振り回されているのである。まともな状態であるとは到底いえない。仮に十字軍の派遣が上手くいったとして、そこで得られる富は結局「一時的な収入」でしかない。いずれは尽きることが目に見えており、そうなったときに教会は再び流血を求めるのであろうか。

（話しにならぬ……）

そうなれば教会はもはや盗賊となんら変わらない。他人の戦力を当てにした遠征がそう何度も成功するとは思えないから、最後に待っているのは敗北、それも「教会が旗振りをした十字軍の敗北」である。尊厳と信頼を失った教会に、国土と国民を持たない教会に何が残るのだろう。

（あるいはその敗北、今回訪れるかも知れぬな……）

アルテンシア半島を征服していったその先に待っているのは、かの英雄シーヴァ・オズワルドその人である。そして彼が率いるのは追い詰められたアルテンシア半島の人々だ。欲望で結びついただけの烏合の衆が、さてどこまで拮抗できるか。

はぁ、とカリュージスは三度嘆息のため息をついた。

「悩み多き昨今ですな、カリュージス卿」
「これはテオヌジオ卿」

後ろからカリュージスに声を掛けてきた男の名はテオヌジオ・ベツァイ。年の頃は五十半ばだっただろうか。少々痩せすぎで頬がこけているせいか年齢よりも老けて見えた。彼もまた枢機卿の一人で、枢密院にあっては珍しい宗教家というのがカリュージスの評価だった。

「枢密院にもまともな枢機卿が残っていると分り、少し安心いたしました」

さきの議決で反対票を入れたことを言っているのだろう。反対票を入れたのはカリュージスとこのテオヌジオの二人である。

「いえ、そのようなことは。それに議案は可決されてしまいました。否決できなければ指して意味はないかと」
「そう、そこです」

テオヌジオの穏やかだった目が、若干鋭くなる。

「良し悪しは別として十字軍の派遣は大きな動き。それに便乗してよからぬ事を考える輩もいましょう。カリュージス卿におかれてはくれぐれも神子様に危害が及ぶことのなきように」

「それは無論のこと。我が職責にかけて必ず」

カリュージスがそういうとテオヌジオは満足したように微笑んだ。カリュージス、というよりもヴァーカリー家は代々神殿と御霊送

りの祭壇の警備を担当している。当然、神子の身辺警護もその職責の範疇内だ。そしてその家業が、カリュージスを若くして枢機卿の地位につけたともいえる。

「そういえば、知っておりますかな」

今思い出した、と言った感じでテオヌジオは話題を変えた。なんでもジェノダイトとサンタ・ローゼンの国境付近、トロテイア山地の巡礼道を少しそれたところにあるハーシェルド遺跡の地下に新たな遺跡が発見されたという。

「その遺跡はどうやら千年近く昔の、しかも教会に関係する遺跡らしいのですよ」

「およそ千年前、ですか。御霊送りの神話が生まれたのも、ちょうどそのころと言う話でしたな」

御霊送りの「神話」といったが、神話と言うには御霊送りの儀式はあまりにも現実味がありすぎる。なにしろ現在進行形で多くの人々から信じられており、ほんの十数年前にも行われている。そしてこの御霊送りの儀式こそが、教会の教義と信仰の基礎を成しているのである。

「カリュージス卿もご存知の通り御霊送りに関する伝承は、あるものは欠落しあるものは改ざんされ本来の形ではなくなっています」

御霊送りの伝承は大陸中に広がっており、大きく分けても数種類、細かく分類すれば数十種類が存在している。それはある意味で仕方のないことだ。千年に及ぶ伝言ゲームの中で単語が欠落したり、悪意はないにせよ改ざんを受けることはかえって自然でさえある。大元である教会に原本が存在しないことも大きい。

「それで、そのハーシェルド地下遺跡になにか御霊送りに関する情報があれば、と期待しているのですよ」

テオヌジオは嬉しそうにそういった。枢密院の中にあって敬虔な信仰というやつを持っているのは彼ぐらいなもので、そんな彼だからこそ信仰の基礎となる教義が正しくされるのはそれだけで嬉しいのだろう。

「我々としても何か援助をしたほうがいいかもしれません」

遺跡の発掘調査への援助程度であればわざわざ枢密院に諮る必要もない。枢機卿たるテオヌジオ一人の裁量でできる。

「そうですな……」

カリュージスは曖昧に返事をした。彼としてもその新たに見つかった地下遺跡とやらには興味がある。その興味はテオヌジオとはまた方向のものだが、それだけに切実で必死でさえある。

（探らせてみるか……）

御霊送りと関係ないならばそれでよし、関係あるのであれば必要な手を打たねばなるまい。事実だの真実だのというヤツは、すでに起こったことであるから動かし難くそれゆえに厄介だ。明らかになっては困るものもあるから、なお性質が悪い。

（アレは、アレだけは明らかになっては困るのだ……！）

そう、とても困るのだ。

第六話　そして二人は岐路に立ち？（後書き）

次からはイストのターン！
お楽しみに。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

朝露でしっとりと濡れたとある朝、二人の男が向かい合って立っている。一人の男はがっちりとした体つきをしており、一本の刀を正面に構えている。年の頃は三十の始めから半ばほどだろうか、手に持った刀には「闇より深き深遠の」と古代文字（エンシェントスペル）が刻まれている。

もう一人は二十代の始めごろだろうか。整った目鼻立ちをして入るが、取り立てて美形というわけではない。だが悪戯っぽい光を放つその眼は、容姿以上に彼の存在に生気を与えていた。手には一本の杖を構えている。彼の身長より少し長いくらいの杖で、先端の歪曲した部分にはところどころ金属のコーティングがなされていた。

ジルド・レイドとイスト・ヴァーレ。それが二人の男の名である。

ニヤリ、とイストの口が意地悪げな笑みを作る。次の瞬間四つの魔法陣が現れ、そこから幾筋もの閃光が放たれジルドを襲う。狙いは大雑把、手数優先の攻撃だ。

その閃光をジルドは滑らかな足捌きでかわし、あるいは手に持った刀で切り裂いていく。切り裂かれた閃光はまるで水しぶきのように散らばり、そして消えていく。

二人の間の距離が詰まっていく。

「ヤロ……！」

イストは攻撃用の魔法陣を消すと今度は防御用の、不可視の盾を

作り出す魔法陣を二つ描く。二つの魔法陣の間は、ちょうど人が通り抜けられないくらいの幅になっている。

ジルドは一瞬だけ足を止め、刀を真横に一閃してその魔法陣を、不可視の盾もろとも切り裂く。そして次の瞬間には、一歩を踏み出しさらに間合いを詰めようとし……、

「！！」

後ろに飛びのいた。放たれた閃光が彼の足元を穿ったのだ。足を止めイストの方を見ると、先ほどの攻撃用の魔法陣が八つ宙に浮かんでいる。

手数で押す。それがイストの基本方針のようだ。ニヤリ、とイストの口が再び意地悪げな笑みを作る。一斉射撃は近い。

（仕込みは十分。やってみるか……！）

魔法陣が輝きを放ち、閃光が一斉に放たれようというまさにその瞬間。

「ふっ！！」

ジルドは短く、しかし鋭く息を吐き刀を一閃し、その刃は空を切った。

「おいおい……」

イストが驚愕の、しかしそれでいて面白がるような声を漏らす。彼が用意し今まさに一斉に発動しようとしていた魔法陣は一つ残らず切り裂かれて消えかかっており、もはや用をなさなくなっている。

ジルドが間合いを詰める。

「ヤロ……！」

魔法陣を展開していては間に合わない。ジルドの動きに合わせてイストは杖を下からすくい上げるようにして振るう。ジルドはそれを軽く身を捻ってかわし、イストはさらに杖を上から振り下ろす。ジルドは振り下ろされる杖に刀を沿え、そっとその軌道をずらしてやる。そしてそのまま刀の切っ先を突き出し、イストの喉もとに突きつけた。

「……参った」

イストが負けを認めると、ジルドは切っ先を引いた。こうして今日の朝稽古もジルドの勝ち、イストの負けで終わるのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ～、くそ。負けた負けたまた負けた」

悔しそうにイストはそうぼやいた。

地竜、リザイアントオオトカゲを撃退したあの日以来、ジルドにそこそこ戦えると認識されてしまったイストは、毎朝彼の鍛錬につき合わされていた。その勝敗はジルドの全勝イストの全敗で推移しており、それは本日も覆らなかったようだ。

「これでも人並み以上には戦えると自負してたんだけどなぁ」

プライドがズタボロだぜ、とイストは肩をすくめて嘆いた。ただ、

ジルドの評価はどうも違うらしい。

「あの距離はワシに有利な距離だ。自分の土俵で負けるわけにはいかぬさ」

イストの本来の戦い方は「距離を取って手数で押し込む」というものだ。しかも照準は大雑把でしかないから、そもそも相手を叩きのめすための戦い方ではなく、自分が安全に逃げるための戦い方なのだ。本人にしても戦闘ではなく魔道具製作のほうがメインの活動だし、正面からぶつかって戦うのが苦手なのは当然だ。

「それにあの魔剣を作ったのはイストだ。当然その長所も短所も把握しているはずで、やり込めようと思えばいくらでも方法は思いつくのではないのかな」

師匠をコテンパンにやっつけてしまうジルドを、ごく素直に尊敬していたニーナに彼はそう言った。

ジルドがイストを評価しているように、イストもまたジルドのことを評価している。

「手加減してくれているのに手も足も出ないなんて、あのおっさん本当に化け物だな」

ジルドが手加減しているという師匠の言葉を、ニーナはすぐには信じられなかった。彼の動きは素人目にも滑らかで美しくさえあり、手加減をしている様子など微塵も感じられない。

「あれだけボロ負けしてるのに、オレはかすり傷ひとつ負ってない」

それは明らかにジルドが手加減してくれているからだ、とイストは言った。

「それに、おっさん、手と頭には絶対に攻撃しないようにしてるし」

イストが魔道具職人であることに配慮してくれているのだろう。そしてそういう配慮ができること自体、かなり余裕を持っていることの証拠である。

「ま、オレとしては自分の作品をふさわしい使い手に渡せて大満足だけどな」

地竜を撃退したときにジルドに渡したあの魔剣は、今は彼を主としその腰間にある。当初ジルドは「優れた魔道具をタダで受け取るなどできない」と言って固辞したのだが、イストは半ば無理やりに魔剣を彼に押し付けたのである。それでもまだ納得の行かない顔をしているジルドに、イストは一つの条件を提示した。

「それじゃあこうしよう。その魔剣を使ってオレを心の底から驚かせてくれ」

製作した本人でさえ想像できなかった力や使い方。それを見るのは魔道具職人にとってある意味最高の報酬なのだ、とイストはいった。

ジルドはその条件を受けた。そしてイストの直感が正しかったことはすぐに証明された。

あの魔剣に刻印されている術式は、「強化」・「切断」・「干渉」の三つである。強化と切断の術式はともかくとして干渉の術式は抽象的でイメージをつかみにくく、イストをして「癖が強い」と言わせている。

その魔剣を、ジルドは驚くほどの短時間でモノにしていった。
例えば今日の朝稽古でジルドはイストが放った閃光を切り裂いていた。これはもっと詳しく説明すると「閃光を構成している魔力に干渉してバラけさせた」ということになる。イストがジルドに確認したところ、イメージとしては「魔力の結合を断つような感じ」とのこと。

「すぐにそういうイメージを持てる辺り、やっぱり相性がいいな」
自分の直感に偽りがなかったことを再確認して、イストは満足そうに頷いた。

「今日の最後のアレ、アレってどうやったんですか？」
二人の朝稽古を観戦していたニーナが興味津々に眼を輝かせながら尋ねる。彼女はなかなか好奇心が強い。彼女の言う“最後のアレ”とは、イストが展開した八つの魔法陣をジルドが一振りで切り裂いて見せたアレだろう。

「ふむ、どう説明したものかな……」
自分のやった事とはいえなかなか言葉にできないでいるジルドに、イストが助け舟を出した。

「あらかじめ拡散させて辺りに漂わせていた自分の魔力に干渉して、オレの魔法陣の術式を壊したんだろう」
恐らく切り裂かれたような感じに見えたのは、「切る」っていうのがおっさんにとってイメージしやすいんだろうな、とイストは解説した。まあそんな感じだ、とジルドもイストの説明を肯定する。

「いやいや、アレには驚いたよ」

そういってイストは賞賛してみせたが、ジルドは軽く笑うだけで真に受けた様子はなかった。

「ところでイスト、あの魔剣のことなのだが」

「ん、どうした？返品は受け付けないぞ？」

まるで悪徳業者のようなイストの言葉に、ジルドも苦笑をもらす。無論、彼に魔剣を返品する意思は皆無だ。

「いや、そうではなく。そういえばまだ名前を聞いていなかった、と思ってな」

「……しまった。忘れてた」

そういえば刻印したときに「そのうち」と先送りして以来、すっかり忘れていた。間抜けな失態にイストも苦笑いを浮かべる。

「せっかくだし、おっさんが付けてみないか」

今更考えるのが面倒なのか、イストは命名権を放棄してジルドに丸投げした。自分で名付けたほうが愛着は沸くのかもしれないが、責任逃れをした感は否めない。

「そうだな、では『光崩しの魔剣』というのはどうだ」

顎を撫でながら少し考えて、ジルドはそう名づけた。

「いい名前じゃないか。それに魔道具の特徴も良くとらえている」

教会では“光”と言う語を魔力の隠語として用いている。だから

「光崩し」という言い回しは、干渉によって魔力を散したり術式を破壊したりできるあの魔剣の特徴を良くつかんでいるといえるだろう。

ちなみにこの名前を思いついたのは、今発掘作業をしているハーシェルド地下遺跡が教会に関係していることも一因だろう。

「お～い、朝食の準備ができたぞ～」

発掘メンバーの一人が三人を呼びに来た。手を振って返事をし、三人はキャンプのほうへ足を向けた。一人でさっさと行ってしまう師匠の背中を見ながら、ニーナは隣を歩くジルドに声をかける。

「そういえばジルドさん、さっき師匠が『驚いた』って言ってましたけど、それってもう条件はクリアって事ですか」

「いや、そうではないだろう」

製作者であるイストは「光崩しの魔剣」にああいう使い方があることを予測していたはずで、「驚いた」というのは予想よりも早くその使い方にたどり着いたことを驚いているに過ぎない。少なくともジルドはそう思っている。

「それに、どう見ても心の底から驚いているようには見えなかった」

あるいは「条件はクリアだ」とジルドが言い張れば、イストも承知するのかもしれない。だがそれではジルドの気がすまないのだ。必ずや驚愕させてみせると、自分でも呆れるくらい意地になっている。

「なんともハードルの高い条件を受けてしまったものだよ」

そういってジルドは肩をすくめて見せた。だがそういう彼がとても楽しそうに見えるのは、きっとニーナだけではないはずだ。

高いハードルとジルドは嘆いてみせていたが、言葉の端々からは「必ず達成してみせる」という気概が感じられる。イストにしても彼ならば驚かせてくれるという直感があったからこそ、あんな条件を提示したのだろう。

きっとこの短い時間の中で、すでにお互いを認め合っているのだろう。

（いいな……、そういうの……）

イストとジルドのような関係は、ニーナにとっては眩しくそして羨ましい。いつか自分も自分の作品を使ってくれる人と、そんな関係を築けるだろうか。

「頑張っと」

そんな未来の日を夢見ながら、ニーナは今日も魔道具職人として知識を増やし技術を磨く。

……ただし、目下彼女の仕事は発掘調査のお手伝いであるが。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

「遺跡がぁぁぁぁすううううきだぁぁぁぁぁぁ！！！！」

本日の発掘作業開始を前に、シゼラ・ギダルティは恒例の雄叫びを上げた。周りの人たちは「やれやれ今日もか」といった感じで生温かく見守っている。ニーナもその一人であった。最初これを見たときはさすがに目を点にして唖然としたが、さすがに毎日やられると慣れてしまう。

（慣れって恐ろしい……）

いつから自分はこんなにも変人に慣らされてしまったのだろう。まあ元凶はおおよそ予想が付くが。ちなみにイストは、

「アレは魂の叫びだから、気にしちゃ駄目だぞ」

と言って、当初からほとんど気にしなかった。さすが耐性が違う。

「さて、開始の合図もかかったことだし、お仕事始めますか」

そういってイストは吹かしていた煙管型魔道具「無煙」を片付け、「光彩の杖」を手にして立ち上がった。現在発掘作業を行っているハーシェルド地下遺跡は、地下にあるため当然中は暗い。イストとニーナという古代文字（エンシェントスペル）の解読要員は別々に作業をすることが多く、ランタン型の魔道具である「新月の月明かり」はニーナが使うため、イストは「光彩の杖」を松明代わりに使っていた。

純粋な照明用の魔道具である「新月の月明かり」は、一度魔力を

注げば一定時間明りが持続する。しかし“描く”ことに重点を置いている「光彩の杖」は、魔力を込め続けなければ光を維持できない。大した量ではないとはいえ、一日中魔力を込め続けなければならなかったイストは、一日の作業の終わりには流石にヘロヘロになっていた。とはいえこれは最初の頃の話で、今は要領よくやっているのかかなり余力を残している。

ただ「光彩の杖」を使うことにもメリットがある。光の強さや範囲をかなり自由に変えられるのだ。それに火を使うわけではないので、酸欠や大事な壁画やレリーフを焦がしてしまった、などという事態も避けられる。まあこれは「新月の月明かり」を使っても同じだが。

「あ、師匠。今日の昼食はバーベキューですから、忘れないでくださいね」
「ん。了解」

普通昼食は各自が空いた時間に勝手に食べている。だが発掘隊では週に一度、昼食にバーベキューを催していた。これは基本休みなしである発掘作業の合間のレクレーションであると同時に、毎日同じ作業をしているがゆえに希薄になりがちな曜日感覚を整える狙いがある。

まあ細かい狙いは別としても、みんなでワイワイガヤガヤ騒ぎながらご飯を食べるのはなかなか楽しいものだ。そしてご飯はすきっ腹に食べるのが一番おいしいと相場が決まっており、そのためにも午前中忙しく働かなければなるまい。

「んじゃ頑張って働きますかね」

イストは楽しそうだった。というかもともと彼の趣味は遺跡巡りで、バーベキューなど関係なしに毎日楽しそうに発掘作業に勤しんでいる。

（いいですけど……、別にいいですけど……！）

師匠の趣味につき合わされているニーナとしては少々納得のいかない部分もある。彼女がしたいのは魔道具職人としての修行であり、決して遺跡の発掘調査ではない。とはいえ元来真面目な性分のニーナ。不本意とはいえ受けてしまった仕事を、サボったり放り出したりなどできるはずもない。さらにいえば彼女、好奇心も強い。未知を掘り出す遺跡発掘は彼女の好奇心を刺激するらしく、なんだかんだ言いつつも結構楽しんでいるニーナであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ハーシェルド遺跡はトロテイア山地を通る巡礼道から外れて少し山地に分け入ったところにあり、今から三五〇年ほど昔に建てられた遺跡である。遺跡自体、当然のように荒れている。成長した木の根が石畳や壁を壊していたり、雨風による風化も見受けられる。人為的と見られる破壊痕は別としても、かなり痛んでいるといえるだろう。

ならばその地下にあるハーシェルド地下遺跡がさらにひどい状態であることは、想像に難くない。伸びてきた木の根が壁を崩し、また道を塞いでいるなどということは良くあるし、そもそも土に埋もれてしまっている部分もある。障害物を撤去しながら行う発掘調査は思うようには進まなかった。

「障害物が残っているのは盗掘されていない証拠です。嬉しい悲鳴

ってヤツですよ」

シゼラが言っていた「状態のいい遺跡」というのはつまりそういうことらしい。頭の悪い盗掘者たちのせいで遺跡の一部が破壊されてしまえば、そこにあったであろう過去からのメッセージを受け取ることは不可能になってしまう。考古学者にとってそれはなによりも悔しいことらいし。イストにしても真新しい破壊痕が残る遺跡は幾つも見てきたため、その気持ちは理解できた。

足元に注意しながら、地下遺跡をすすむ。石畳が崩れていたり、落下してきたであろう天井の一部が転がっていたりと、地下遺跡の足元は劣悪だ。足元に視線を落としながら進むイストは、幾つ目かの“それ”を見つけた。

「ここにもあったか、コレ」

イストのいう“コレ”とは、円の中に古代文字（エンシェントスペル）が刻まれた、ただそれだけのものだ。円の内側，その円周に沿うようにして古代文字（エンシェントスペル）が彫られている。石畳自体が損傷しているため古代文字（エンシェントスペル）には欠落が見られるが残っている文字から察するに、この単語は“炎”という意味の古代文字（エンシェントスペル）であったはずだ。

（コレ、見れば見るほど魔法陣に似てるよな……）

とはいえ、さすがにこの単純な図形が魔法陣であるとは思えない。だからイストはこれについて意見を求められたとき、「魔法陣を模したものだろう」と答えた。

（でも数が多いんだよな……）

これが本当に魔法陣を模しただけのものであれば、実用的な意味はなんら無く、純粋に装飾としてここに彫られたことになる。だがそれにしては数が多いし、なにより装飾としては華やかさに欠ける。

「彫られた場所に意味がある、とか？」

それはあるかもしれない、とイストは思った。特定の方角や家の造りのある部分に呪い的な意味を求める習慣は大陸中に存在する。地下遺跡の地図を作り、この“魔法陣モドキ”の位置を記入すれば何か分るかもしれない。

「まあいい。本職の学者さんに任せるとしよう」

それ以上の考察はさっさと放棄してイストは足を進める。見れば照明が来ないために他のメンバーが足を止めてしまっている。軽く侘びを入れてから、一同はさらに奥を目指して行く。

「ここですね……」

足を止めたのはとある部屋の前だ。どんな部屋なのかは分らない。なにしろこれから入って調べるのだ。だが、部屋の入り口は伸びてきた木の根によって塞がれ、人が入れるような隙間は無い。

「じゃ、イストさん、お願いします」

そう言われて、イストは「ロロイヤの道具袋」から一本の大振りなナイフを取り出した。飾り気の無い刀身は漆黒で、しかし鏡のように輝いていた。

魔道具「真夜中の切裂き魔（ミッドナイト・ジャック・ザ・リッパー）」。

イストが弟子時代に作ったもので、もともとは辺りが暗くなると切れ味が増すナイフを作りたかったのだが、その頃は知識と技術と発想力が足りておらず、仕方が無いので明るいと切れ味が悪くなるナイフにした。「何がしたいのか良く分らん」とは師匠であるオーヴァの談。しかも「切断」の術式も刻印してあるため、もはや「魔力をこめると切れ味が増すナイフ」、つまり魔道具としてはごく一般的なものになってしまっている。ただ魔道具としてはともかくデザイン（素体も既製品だ）は気に入っているのか、こうしてちょくちょく使っていた。

ナイフに魔力を込め木の根を切断し取り除いていく。人が通れるだけの空間を確保すると、イストはまず「光彩の杖」で部屋の中を照らし、様子を確認した。

「ふむ」

中はやはり荒れていた。しかし足元に注意していればさして問題はないだろう。部屋の中には大きな柱が四本立っており、一番奥の壁には壁画が描かれていた。

「ん？これは、壁画じゃなくてレリーフかな？」

近づいて照らしてみると、確かに壁に彫り込まれたレリーフであった。そこに色がぬられていたことで壁画にも見えたようだ。

「これは御霊送りの神話か……？」

壁に描かれているのは、どうやら御霊送りの神話をモチーフにしたものらしい。大雑把に描写すれば、下部に祈りを捧げる人々、上部にそれを見下ろす神々、その真ん中に神界の門と思しきもの、と

いったところだろうか。さらに所々に古代文字（エンシェントスペル）で説明のようなものが付いている。

「え～と、なになに、あ～擦れてて読めないな……。『種』か……？『光』……？『入れよ』……？いや、『込めよ』……か。『園』への……『道』？門じゃなくて？あ～これ以上はよくわからん」

文字の欠けた単語を推測しながら読んでいくのは大変である。それにこの内容、少しばかり気になるところがある。ほとんど思いつきだし、確証もなにも無いので口に出すことはしないが、だが……。

（もしそうだとしたら、ヤバくないですか、コレ）

解釈次第だが、教会が主張する御霊送りの神話を否定することができる。まあ、一つの文でもその解釈は多岐に及ぶ。わざわざ不都合な解釈を教会が認めるとは思えない。まして本職の考古学者でもないイストが何を言ったところで、御霊送りの神話が揺らぐことなどありえまい。

「どうですか、イストさん。読めそうですか？」

難しい顔で壁画と睨めっこしているイストに、発掘隊のメンバーの一人が声をかける。自分が感じた違和感や疑問は表に出さず、彼はただ肩をすくめた。

「いや、劣化がひどくて断片的にしか読めないな」

「そうですか……。まあ、予想の範囲内ですけどね」

どうやらこの壁画のほかに四本の柱にも古代文字（エンシェントスペル）でなにか書かれているらしい。そちらの解読も頼まれたイストは、壁画を一瞥してから四本の柱の一本に近づいていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

発掘作業は基本的に夕飯までである。つまり晩御飯を食べた後は次の朝まで各自の自由時間となる。魔道具職人（とはいってもまだ見習いであるが）であるその自由時間を利用して二つ目の課題のレポートを作成していた。

師匠であるイストから出された二番目の課題は「光彩の指輪」という魔道具である。これは名前からわかるように、イストが使っている「光彩の杖」の指輪版である。実際はイストが「光彩の指輪」を杖にして作り直した、といったほうが正しいが。なぜわざわざそんなことをしたのかと聞くニーナに対し、イストはこう答えた。

「だって指輪じゃ振り回せないし、ぶん殴れないだろう？」

いろいろと残念な回答で、聞かなきゃ良かったとニーナが思ったのも仕方がないことであろう。

ちなみにニーナは後にこの魔道具を使って魔導士ギルドのライセンスを取得する。また、師匠であるイストがしているように、刻印作業もこの「光彩の指輪」を用いて行うようになる。随分と長い付き合いになる魔道具を、今作ろうとしているのだ。

「あ～、駄目だ」

レポートをまとめているニーナと「新月の月明かり」を挟むよう

にして、座ってなにやらペンを走らせているイストがそんな声を上げる。

「どうしたんですか？」

「設計が上手くいかない」

止めた止めた酒でも飲もうっと、と言ってイストは道具袋から酒の入った「魔法瓶」と杯を取り出す。

「どんな魔道具なんですか？それ」

「なんて言うかな……、灯台と専用のコンパスをセットにした魔道具、かな？」

コンパスは北を指し示す道具だが、イストが今考えている魔道具はあらかじめ目印となる「灯台」を設置しておき、その「灯台」を指し示すコンパスをセットにしたものだ。

「つまり、目的地がどの方向にあるかが分るわけですね」

「まあ、そうだな。だけど使い方はそれだけじゃない」

そう言ってイストは地図を取り出した。そこに描かれているのはエルヴィヨン大陸と、その南方に位置する島々だ。

「例えばこの辺りに灯台、つまり目印となる魔道具を設置しておく」

イストが「光彩の杖」を使って地図上に一つ光点を置く。ちょうど今彼らがトロテイア山地の辺りだろうか。

「そしてコンパスが指し示す方角がこれ」

地図上に置かれた光点から一本の線が伸ばされる。ちょうど極東の港、独立都市ヴェンツブルグを通るような感じだ。

「つまり、コンパスを持っている人間はこの線上のどこかにいるというわけだ」

イストはそう言うものの、ニーナとしてはそれの何処が凄いのか良く分らない。ましてや今見ている地図は大陸の全体図で、そこに引かれた線上のどこかといわれても、それはなにも分からないことと同義ではないだろうか。

「じゃあ、こうしたらどうだ？」

そう言ってイストはもう一つ光点を地図上に置いた。今度はアルジャークとオムージュの旧国境線近く、リガ砦の辺りだろうか。そしてそこからもう一本線を引く。その線の伸びていく先には……。

「あ……！」

地図上に引かれた線が交点を作る。それはすなわちコンパスを持っている人間の位置が特定できたということだ。

「でもやっぱり大陸規模じゃあんまり意味がないですよ」

陸上であれば通ってきた街道や近くにある街、森や山の位置から自分が何処にいるのかは大雑把には分る。それこそこんな魔道具など使う必要などないのではないか。

「陸上だとそうかもな。だけど……」

二本の線が動き、交点を海上に持ってくる。そこでニーナは眼を見開いた。確かになにも目印となるものがない海上で、大雑把にでも現在位置が分るのはありがたいだろう。

「こいつは元々船に載せて使うことを想定してるんだ。だけど……」

そこでイストは言葉を濁した。

「設計が上手くいかない、ですか……」

その言葉をイストは苦笑いを浮かべて肯定した。

問題になっているのは魔道具のサイズだ。通信用魔道具「共鳴の水鏡」をみれば分るように、二つの魔道具の間に距離があればあるほど、そのサイズは大きくなっていく。目印として固定しておく灯台は良いとしても、その方向を指し示すコンパスは小型化しなければ使い物にならないだろう。

「ちなみに今回の設計ではどれくらいの大きさになったんですか？」

「直径３メートル。ワースト記録は更新しなかった」

最も小さいサイズでも、直径は１メートルを越える。しかもこれは設計段階のサイズだ。実際に作り始めたとき、さらに大きくなってしまうことは想像に難くない。せめて３０～５０センチくらいのサイズにしないと使い勝手が悪すぎる、とイストは言った。

「空間系の理論にも手ェ出してみないとかねぇ……」

やりたくないな望み薄だな、とそんなことをぼやきながらイストは杯を傾ける。と、そこへ……。

「晩酌をご一緒してもよろしいかな？」

つまみをのせたお皿を片手にジルドが近づいてきた。どうやらイストの酒が目当てらしい。持参したつまみは今日の午後、彼が街まで買出しに行ったときに買い込んできたものだろう。

つまみをつつきながらイストから借りた杯を傾け、しばらく他愛もない話が続く。

「そういえばイスト、お主の趣味は遺跡巡りであったな。ここで何か面白いものでも見つけたか？」

「面白いもの、か。まあ、気になるものは二・三個あったけどな」

イストがそういうと、ジルドは興味を持ったようだった。

「是非、聞きたいものだな」

「そうだな……」

さて、どれから話したものか。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

「たぶん一番面白そうなのは、あの壁画だな」

あの壁画、とは今日彼が見つけた御霊送りの神話について伝えるあの壁画のことだ。壁画に刻まれていた古代文字（エンシェントスペル）は擦れていて読めないものが多かったが、かろうじて読めたものからその内容を推測すると、恐らく次のようになる。

「世界樹の種に光を込めよ。されば園への道は開かれん」

実際に使われている単語はもしかしたら違うのかもしれないが、大意はこれであっているはずだ。

「これのどこが面白いんですか？」

多少趣は違うが、これも御霊送りの神話の一節だ。似たようなパターンは大陸中に存在しているだろうし、さして目新しいものではないはずだ。

「“光”ってのは教会用語で魔力を指す言葉だ。つまり『光を込めよ』って文は『魔力を込めよ』って意味になる」

魔道具職人の観点からすれば、「魔力を込める」という行為は「魔道具を使う」ことと同義だ。この神話の場合、魔力を込める対象は世界樹の種であるから、すなわち世界樹の種は魔道具である、ということになる。

「御霊送りの神話では、世界樹の種は神々が神子に対して与えたも

の、ということになっている」

そのキーアイテムが実は人工の魔道具であったとすれば、今までの大前提が崩れることになる。

「極論を言えば、『神々が神界の門を開いて人々を迎え入れた』って話自体、なんらかの魔道具を使って人為的に行ったのではないか、って考えることができる。できてしまう」

御霊送りは遠い過去に神々が行い、そして今なお現世に残された唯一の奇跡である、というのか教会の教えであり、そして信者たちの拠り所なのだ。それが丸っきりの大嘘であるとしたら、教会はその大義名分を失い急速に弱体化するだろう。つまりこの解釈は教会のアキレス腱であるといえる。

しかもハーシェルド地下遺跡はおよそ千年前、御霊送りの神話が誕生した時期の遺跡である。そこから得られる情報は、御霊送りの真の姿に近い。つまりその分だけ信憑性が高くなる。

「でもそれって結局は師匠の個人的な意見ですよね？」

そこはニーナの言うとおりである。これはイストの個人的な解釈、いやなんの根拠もない思いつきでしかない。それに彼の解釈が世に出たとしても、教会が自身に不利な解釈を認めるとは思えない。そもそも解釈の仕方さえ、複数あるのだ。

「神々からもたらされた世界樹の種という鍵を使うためには魔力が必要なのであり、“園”とは神界のこと、そこに通じる“道”とは神界の門のことである」

教会が公式にそう発表してしまえば、多くの信者はそれを信じるだろう。そして教会が基本姿勢を変えない限り、その解釈が御霊送りの真の姿になる。

そんなことは無論イストにも分っている。だからこの場での話しは、理屈をこねくり回して遊んでいるに過ぎない。いって見れば話していること全てが冗談だ。

「ふむ。仮に御霊送りが奇跡ではないとして、どんな魔道具があれば人為的に再現できると思う？」

魔道具職人としても意見を聞きたいな、とジルドがつまみに手を伸ばしながらイストに声をかけた。イストが流れの魔道具職人であることはすでにジルドに教えてある。アバサ・ロットの名を受け継いでいることは教えていないが。

「そうだな、可能性としては空間型、それも亜空間設置型が最有力かな」

煙管型魔道具「無煙」を燻らせ、白い煙（水蒸気らしいが）を吐き出しながらイストは答えた。その姿からして緊張感がまるで足りない。

亜空間設置型魔道具とは、その名の通り核となる部分に亜空間を創りだして固定し、その空間を利用する魔道具のことだ。例を挙げるならば、イストがクロノワに贈った「ロロイヤの腕輪」やアバサ・ロットの工房が隠されている「狭間の庵」がそれにあたる。

「ま、オレには無理だがね」

これにはニーナが驚いた。なにしろイスト・ヴァーレはアバサ・ロットの名を継ぐ、間違いなく最高レベルの魔道具職人である。さらに彼が保有する情報量は他の工房の追随を許さない。もう一ついえば初代アバサ・ロットたるロロイヤ・ロットは亜空間設置型の魔道具の大家であり、この分野における彼を超える才能は歴代のアバサ・ロットの中にさえ現れていない。つまりロロイヤが遺した資料を保管しているイストはこの分野において誰よりもアドバンテージを持っているのだ。その彼が「無理だ」と断じた。

（それって少なくとも今現在、それができる職人は一人もいないってことじゃ……）

そんなニーナの内心には気づかないまま、イストは「無煙」を吹かして話を続ける。

「神話では、神々はパックスの街ごと人々を神界に引き上げたことになっている」

それを魔道具で再現するならば、最低でもパックスの街が入るほどの亜空間が必要ということになる。イストが設置することができる亜空間の大きさは最大でも小さな部屋一つ分で、言うまでもなく全然足りない。

「しかも倉庫代わりに使うとかそういうんじゃなくて、その亜空間の中だけで生活しようってんだろ？」

それはすなわち完全な閉鎖型バイオスフィアを形成するということだ。最低でも食料生産が可能な環境を整え、空気と水の循環系を完備していなければならない。それは一個の世界を創造するということだ。どうやればいいのか見当もつかない。

「ではとりあえず空間だけ用意して、必要なものは外から補給するとしたらどうだ」
「それもだけでも難しいな。そもそも用意する空間が大きすぎる」
イストが即答する。しかしジルドは納得がいかないようだ。
「だが亜空間の設計は出来るのだろう？理論上でも無理なのか？」
「恥ずかしながら無理だ」

イストだけではなく歴代のアバサ・ロットたちにも無理であった。ロロイヤの理論は完璧すぎて、隙と無駄がなさすぎる。有体に言えば理論に発展と応用がきかない。彼らにできたのはロロイヤの遺した資料を理解し魔道具を再現するところまでで、別使用の魔道具を作ることができないのだ。任意にできる事といえば腕輪を指輪にするのが精々であろう。

（そもそも資料の残し方がおかしいんだけどな……）

亜空間設置型や空間拡張型の魔道具を支える基礎理論を、そこに至る過程をロロイヤは遺していないのだ。少なくとも「狭間の庵」にはない。これはイストが弟子の時代に探し回って確認した。

これがどのくらい異常なことかといえば、例えば足し算引き算をすっ飛ばして微積分の理論を発表するような、そんな感じである。

無論、説明しようと思えばできる。
ロロイヤがその基礎理論を確立した、あるいは知ったのは彼がアバサ・ロットを名乗る前で、その場所に資料を残してきたから「狭間の庵」にはない。そう考えることができる。というかそうでなければおかしい。

（そういえば、ロロイヤってどこで魔道具製作のイロハを学んだんだろうな……）

それを調べたことはなかった。今度調べてみよう。

「どうかしたか？」

ジルドがいきなり黙ったイストに怪訝そうに声をかけてくる。イストは自分がアバサ・ロットであることをまだジルドには教えていない。「なんでもない」と「無煙」を吹かして、心のうちの疑問を口にすることはなかった。

「あと、面白いっていうか不思議なものは、アレですよね。円の中に古代文字（エンシェントスペル）を彫り込んだ……」

ニーナの言うアレとは“魔法陣モドキ”のことだろう。円の内側、その円周に沿うように古代文字（エンシェントスペル）が彫られており、その見かけは良く魔法陣に似ている。

「アレって何の意味があるんでしょうね……？」

ニーナのその問いかけは、明確な答えを期待したものではなかった。

「本当に魔法陣だった、ということはないのかな」

それはジルドの、素人ならではの荒唐無稽な思い付きだった。それは言った本人も十分に分っている。だからこれはほんの軽いジョークだろう。

「もしそうだとした、魔道具職人は全員廃業だな」

それはそうだろう。「適当に円の内側に古代文字（エンシェントスペル）の単語並べてみたら魔法陣になってました」なんていわれたら、「今まで溜め込んだ知識は一体なんだったの!?」って話だ。まあ技術的には画期的かもしれないけど。

「まあ、謎って言えば、古代文字（エンシェントスペル）自体に一個謎があるけどな」

つまみを口に放り込み、杯を傾けながらイストは軽い調子でそういった。その言葉にジルドとニーナが揃って驚いた様子を見せる。ジルドはともかく、古代文字（エンシェントスペル）を読めるニーナまで驚くとはちょっと意外だ。

「師匠、その謎って言うのは……？」

「じゃあニーナ、古代文字（エンシェントスペル）で“太陽”って単語はどう発音する？」

その質問にニーナは固まった。「あれ？ん？あれ～？」と首を捻って考えるが、出てこない。その様子を見て、ジルドは“謎”の内容に検討が付いたようだった。

「古代文字（エンシェントスペル）には音がない。発音がまったく残っていないんだ」

普通、言語というのは音が意味を持っている。つまりまず最初に音があって、その音を表す記号として文字が存在するのだ。これは文字をもたない言語が存在していることからも明らかである。書き記された書物の場合、読み手はそこに記されている文字から音を識別し、その音から意味を理解するのだ。

これが言語というコミュニケーションシステムの基本的な構造といえるだろう。

「ところが古代文字（エンシェントスペル）という文字を使っていた言語には、その裏側にあるべき音がなにも残っていない。そう、まるで最初から存在していなかったみたいにな」

これは本当に不思議なことだといえるだろう。なにしろ古代文字（エンシェントスペル）は一時期大陸中で使われていた。それは各地の遺跡に遺されている古代文字（エンシェントスペル）を見ればすぐに分かる。それなのにその言語の音がなにも残っていないのだ。文法や単語の変化形はともかくとしても、“太陽”や“月”、あるいは特定の花の名前など、簡単な単語や人物の名前としてつかえそうな単語の発音さえも残っていない。

「でも、使われなくなったんだから発音が残っていないのも当然なんじゃ……」

「あのなバカ弟子、オレたちは使っているだろうが」

「あ……！！」

そう、これこそが最大の謎なのだ。誰も使っていないのならともかく、アバサ・ロットは千年の昔から古代文字（エンシェントスペル）を使い続けている。それは文法などもある程度は残っているということだ。それなのに単語の一つもその発音が伝わっていない。

「……なんででしょう？」

「知らん」

ニーナの疑問をイストはばっさりと切って捨てた。こればっかりは本当に分らないのだ。見当さえつかない。

「では、お主たちのいう『古代文字（エンシェントスペル）の解読』とはどうやっておるのだ？」

「そうだな……」

手順を説明すれば、「古代文字（エンシェントスペル）で書かれた字面を識別」し、「対応する常用文字（コモンスペル）の単語を思い浮かべて」、「その単語の音から意味を理解」する、となるだろうか。

「つまり声に出して読める、という訳ではないのか」

「その通りだ」

幸いなことに古代文字（エンシェントスペル）の言語と常用文字（コモンスペル）の言語は文法が似通っており、歴代のアバサ・ロットたちは記録を残す分にはそれでも不自由はしてこなかった。古代文字（エンシェントスペル）の不自然さにニーナが言われるまで気づかなかったのもそれが一因だろう。

「なにか大きな秘密でも隠されていたりしてな」

もしそうだったらとても面白そうだとイストは思う。なにしろその秘密とやらに一番近いのは、古代文字（エンシェントスペル）を使い続けている自分たちなのだから。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

アルテンシア半島はその北西部と南東部で天国と地獄ほどの差を見せている。半島の北西部を治めているのはシーヴァ・オズワルド。南東部を支配しているのはアルテンシア同盟に参加している領主のうち残っている者。

シーヴァ・オズワルドの元の肩書きはパルスブルグ要塞司令官及び要塞常備軍司令官である。いや、混乱のさなか解任動議は出ていないので今でもそうなのかもしれない。まあ、例え解任されていないとしても、もはや何の意味もない肩書きではあるが。

彼はアルテンシア半島を支える同盟軍の将軍であった。それゆえアルテンシア同盟という彼の古巣から見れば、シーヴァは反逆者であり簒奪者であり強盗でしかない。しかし彼が切り取った版図に生活する半島の住民の意見は違う。彼らにとってシーヴァは救世主であり解放者であり改革者であった。

「私はなにも特別な支配をしているわけではない」

彼の統治形態はどう言い繕っても専制君主制である。つまりこれまでの歴史の中でもなんら特異なものではなく、民主主義がもてはやされる時代においては独裁国家の批判を免れないものである。

もちろんシーヴァは客観的に見ても愚かな主君などではなかったが、それでも彼が“救世主・解放者・改革者”として受け入れられたのは、つまるところそれまでの領主の支配が酷過ぎた、というだけのことである。たどり着いた地点がゼロだとしても元がマイナスであれば、人々はそれを向上と受け取るのだ。

無論、全ての領主が腐っていたわけではない。これまでにシーヴァが切り取った半島北西部には、良心的な領地運営を行っている領主が少なくとも五人いた。彼らは腐り果てた同盟に嫌気がさしていたし、また同時に危機感を抱いてもいた。彼らと事前に連絡を取り合いまた綿密に計画を練ることで、シーヴァたち解放軍（同盟側からみれば反乱軍）は二ヶ月で九〇州余りを切り取るという偉業を成し遂げたのである。言うまでもないことだが、この行軍において住民たちの熱狂的な協力は大きな力となった。

シーヴァ率いる解放軍の戦術において特筆すべき点は、魔道具の運用法だろう。

魔道具「とく速き射手の弓（アルテミス）」。シーヴァはこの魔道具をベルセリウスに依頼して三十張作ってもらった。ちなみにベルセリウスが「つまらない仕事」といったのは、同じ魔道具を三十個も作るのがつまらない、ということで「とく速き射手の弓（アルテミス）」がつまらない魔道具だったということではない。

この魔道具は魔力を束ねて放つタイプで、放たれた閃光は途中で十発の光弾に解けて、広範囲に攻撃を仕掛けることができる。つまり三十張全てで同時に放てば、合計三〇〇発の光弾が敵陣に降り注ぐことになる。

一つ一つの光弾の威力は、人の頭ほどの石が落ちてくるのと同じくらいだろうか。魔道具としては火力が小さいほうに類するだろう。しかし当たれば致命傷になるし、なによりも三〇〇発の光弾が一度に降り注ぐその光景は、威力以上に敵軍を震え上がらせた。なによりも恐怖は伝播する。腰の引けた同盟軍など、シーヴァの敵ではなかった。

遠征の最初に協力を求めたゼゼトの民は、最も密度の濃かった最初の二ヶ月が過ぎると、族長たちが「義理は果たした」と判断し大半がロム・バオアへと帰っていった。シーヴァにしても彼らの力が欲しかったのは一定の勢力圏を確保するまでで、族長たちのその決定に異を唱えることはなかった。

事前の約定通り、シーヴァはゼゼトの民にロム・バオアと半島の間の自由な渡航を認め、さらに戦いに参加した者には十分な恩賞を与えた。長い歴史的な背景や感情の問題もあるため、すぐにゼゼトの民と友好な関係を築くのは難しいかもしれない。しかし少しずつでも関係を改善していくことを約束し、族長たちとシーヴァは握手を交わすのであった。

さて、大半のゼゼトの民がロム・バオアに帰っていったその一方で、トルドナ族の族長の息子であるガビアルやエムゾー族の族長ウルリックの娘メーヴェをはじめとする三十人ほどのゼゼトの民の若者はシーヴァのもとに残って戦うこと選択した。

「優れた戦士と共に戦えることは、我らにとって誇りだ」

ガビアルはそういって残った者たちの胸の内を代弁した。ただ唯一の女性はそこまで素直になれないらしく、

「わ、わたしが残るのはヤツがゼゼトの民の敵になったときに殺すためだっ！」

と言い張っていた。

イストとニーナがハーシェルド地下遺跡で古代文字（エンシェントスペル）の解読作業に勤しんでいるころには、版図拡大に当初の疾風迅雷の勢いはなくなっていたが、それは常識的なペースに落ち着いたという意味で、遠

征そのものはさしたる問題もなく順調に進んでいる。

この時点でシーヴァが切り取ったのは、半島北西部の一二一州。アルテンシア半島の版図が二三七州であるから、ちょうど半分程度といったところであろう。そしてこの数字はこの先さらに増えるであろうことが容易に想像された。

半島の南東部では領民たちの反乱が相次ぎ、シーヴァがその隙を突いて侵攻を仕掛けている、というのが傍目に見える構図だが事実は少々異なる。むしろシーヴァの侵攻に呼応するように、領民たちが反乱を起こしているのである。領民たちから三行半を突きつけられた領主たちは、外の敵に対応できないまま内側から崩れていき、もはや同盟そのものが風前の灯となっていた。

シーヴァの最終的な目的は、アルテンシア同盟を瓦解させ半島を一つの統一国家としてまとめ上げることである。ゆえに彼の覇道は未だ道半ばであり、手中に収めた版図の内政は五人の領主たちに任せ、シーヴァ自身は戦場に立つことが多かった。とはいえ彼にしか判断できない事案も確かにあり、そういったものを含め様々な報告がシーヴァの元にはもたらされていた。

「これは、どうしたものか……」

今シーヴァが目を通している書類も、そんな報告の一つである。

「どうかしましたか」

副将であるヴェートが怪訝に思ったのか声をかけてくる。副将という立場からも分るように彼女は武人であり、一度戦場に立てば一軍を率いて獅子奮迅の働きをする。加えて最近ではこうして書類仕事の手伝いもしてくれており、文武両道な才女であることを証明し

ていた。
そんなヴェートにシーヴァは読んでいた報告書を見せる。
「これは……！」
そこには「教会と神聖四国それにその周辺諸国が、アルテンシア半島への十字軍遠征を計画している」という報告が載せられていた。加えてかなり正確な報告が数字を交えてなされている。
教会が旗振りをしている十字軍遠征の計画は、極秘裏に進められているわけではない。神聖四国のどこかの酒場にでも行けば、黙っていても噂話を聞くことはできるだろう。しかしシーヴァの勢力圏であるアルテンシア半島北西部と教会と神聖四国がある大陸中央部の間には、幾つかの国が横たわりさらには混乱を極める半島南東部が存在している。
したがって待っているだけで大陸中央部の正確な情報が入ってくることは期待できないだろう。だからこの時点でシーヴァがこの報告を受け取っているということは、彼が大陸中央部にある程度の諜報網を持っていることを示している。
それはともかく。目下の問題は十字軍遠征についてである。
「予想していなかったわけではないが、少し早いな」
「聖銀（ミスリル）の製法漏出が原因ではないかと」
ヴェートの言葉にシーヴァは頷いた。
半島が混乱をきたしているときに大陸から侵略者がやってきたことは過去にもある。だから十字軍遠征自体に驚くことはない。しかしもう少し話がこじれて時期が遅くなるのではないかと読んでいたのだが、思いのほか遠征の話が速くまとまった。

軍というヤツは動かすだけで金が掛かる。そして言うまでもないことだが大規模になればなるほど、さらに金が掛かる。だから十分に潤っているはずの教会や神聖四国の中には、十字軍遠征に反対する者もいると踏んでいたのだが、どうやら聖銀（ミスリル）の製法漏出による被害は深刻らしい。

「遺跡の発掘は間に合いませんでしたね」

ヴェートが別の資料を手にそう呟いた。教会という宗教組織と敵対する事態を、シーヴァはかなり早くから想定していた。そのため教会を口撃するための大義名分を色々と探していたのだが、最近見つかった教会に関係するというハーシェルド地下遺跡の発掘調査に資金を援助したのもその一環であった。

「そうだな……」

ヴェートから受け取った報告書には、「古代文字（エンシェントスペル）の解読要員を見つけたので、これから本格的な発掘調査に入る」という内容が書かれている。かりに地下遺跡にシーヴァの求める大義名分が眠っているとしても、すでに十字軍遠征の計画が形になりつつあるのであれば、遠征が始まる前にそれを知るのは難しいだろう。

まして教会が旗振りをしているのである。神聖四国はもちろんのこと周辺諸国も協力的だろうし、兵士も数を揃えやすいであろう。かなり速く準備が整うと想定しておいたほうがいい。

ただ遠征が上手くいくかは別問題であろう。アルテンシア半島の入り口にはゼーデンブルグ要塞がある。この要塞は常時十万の兵を駐在させ大量の兵糧を抱え込んだ大要塞である。十字軍がいかに数

を揃えようとも、この堅牢を誇る大要塞を落とすのは容易ではあるまい。そして攻城戦が長引けば基本的に寄せ集めの連合軍である十字軍には亀裂が入ると、シーヴァは予測していた。

ただ懸念もある。集めた情報によると、ゼーデンブルグ要塞に駐在させている軍を出して、反乱軍を鎮圧しようという計画があるらしいのだ。この反乱軍というのはいうまでもなくシーヴァ率いる解放軍のことであり、このような計画を企てているということは、同盟に残っている領主たちがかなり切羽詰っていることを意味している。

つまりこれは解放軍が有利であることの証拠なのだが、駐在軍が要塞を空ければ当然その防衛力は低下する。そこを十字軍に狙われればゼーデンブルグ要塞はたやすく陥落するだろう。自分たちの存在が侵略者どもを利することになってしまうのは、なんとも面白くない。

さらにシーヴァの思考は加速する。

アルテンシア同盟と十字軍が手を結ぶ可能性、である。その場合の共通の敵は言うまでもなくシーヴァ率いる解放軍ということになる。数こそ膨大になるだろうが、所詮は欲望にまみれた結びつき。烏合の衆でしかない軍に、シーヴァが恐怖を感じることはない。一度戦って勝たずとも手ごわいところをみせれば、自然と崩壊するだろう。

そんなことを考えながら、シーヴァは報告書を斜め読みしていく。そして古代文字（エンシェントスペル）の解読要員の名前のところで、ふと目がとまった。

（イスト・ヴァーレとニーナ・ミザリ、か……）

ニーナ・ミザリのほうは聞いたことがないが、イスト・ヴァーレのほうはどこかで聞いたことがあったような気がした。

（そういえばベルセリウス老も古代文字（エンシェントスペル）が読めると言っていたな）

なにか関係があるのかもしれない。今度折に触れて尋ねてみよう。

（しかし、もしベルセリウス老の関係者であったとすれば……）

あの老人の関係者だ。きっとこのイスト・ヴァーレという人物も、アクとクセの強い、いわゆる“変人”の類なのだろうと、シーヴァは苦笑するのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「女には女の戦場がある」

それが、アルジャーク帝国皇后の持論だった。

そこでは軍馬がいななくことはないけれど。そこでは矢が飛んでくることはないけれど。そこでは血にまみれる事はないかも知れないけれど。

けれどもそれが戦いである以上、勝利の美酒に酔いしれることができるのは勝者だけなのだ。敗者に待ち受けるのは死であり、あるいは死以上に辛い恥辱や汚名に甘んじなければならない。

（そのような屈辱、わらわは決して認めぬ……！）

故に彼女は武装する。

鋼の鎧の代わりに絹のドレスを身にまとい。

兜の代わりに化粧をほどこし髪を結い。

剣の代わりに舌鋒を。

盾の代わりに微笑を。

戦術の代わりに話術を駆使し。

彼女は己の戦場を駆け抜ける。狙う首はただ一つ。アルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークの、その首である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時間は少し遡る。クロノワがカレナリア軍との緒戦に臨もうとしていたまさにその頃、アルジャーク帝国皇后もまた彼女が望んだ戦いの、その緒戦へと臨もうとしていた。

「これは皇后陛下、ご機嫌麗しく……」

客間のソファーから身を起こし、恭しく一礼した男の名はブラム・ターナー。彼の家は代々役人を輩出しており、彼自身もその例に漏れない。ただターナー家は別としてもブラム自身は小物で、以前から皇后とのコネを作るべく色々と稚拙に暗躍していたらしいが、彼のような小物が自分の役に立つとは思えず、彼女は相手にしていなかった。少なくとも今までは。

「呼びたててしまい、申し訳ありませんでしたね」

内心では「小物」と侮りつつも、それは顔にはおくびも出さず皇后は優雅に微笑んで見せた。それを見てブラムはいよいよ恐縮する。

「いえ、そのようなことは！皇后陛下からのお招き、恐悦至極に存じます！」

ブラムに席を勧めソファーに座らせ、皇后もテーブルを挟んで向かいの席に腰を下ろす。お茶を用意した侍女を客間から下がらせ、しばらく雑談に興じる。これも含めて挨拶だ。そしてブラムの緊張が解れてきたところを見計らって、皇后は本題に入っていく。

「実は、今日はターナー殿にお願いがあって、お呼び立てしたのですよ」

「わたくしに、ですか？さて、どのようなものでしょうか？」

ブラムとしてはそう応じるしかない。彼の内心では期待と不安が渦巻いている。ここで皇后の「お願い」とやらを上手くかなえることができれば、念願かなって皇后との繋がりを持つことができる。しかし自分の手には負えない無理難題を吹っかけられれば、それはもう断るしかない。そうなれば皇后の心象は確実に悪くなり、自分の出世は遥か彼方へと遠ざかっていくだろう。そんな彼の心のうちを、皇后はほぼ正確に把握していた。

「実は、わらわは最近不眠に悩まされていまして……」

「そ、それは、御労しい……」

ブラムは必死だった。皇后の言葉の端々から必死にその意図と、「お願い」の内容を推し量ろうとしている。それが表に現れてくるあたり、小物の小物たる所以だろう。多少なりとも交渉事を心得ている者ならば、余裕を持ってにこやかに微笑むくらい造作もないだ

ろうに。

「それで、ターナー殿には睡眠薬を差し入れて貰いたいのですよ」

そういうとブラムは怪訝な反応を示した。睡眠薬を手に入れることに限れば、なにも難しいことはない。皇后がそれを望んでいる以上、差し入れることにも問題はあるまい。しかし、睡眠薬が欲しいのであれば、まずは専属の医師団に相談し処方してもらうのが筋ではないのだろうか。それをわざわざブラムを呼び出して頼む、皇后の意図はどこにあるのか。

「医師団に相談などすれば、妙な噂が立ってしまいます」

彼女のようにやんごとない立場の人間が不眠に悩まされるとすれば、その原因は十中八九心労であろう。医師団そのものは口が堅く信頼できるかもしれないが、皇后のような立場ともなればどこからともなくその近況は漏れていくものである。となればその心労のもとについて根も葉もない噂が飛び交うのは目に見えている。帝都に何千羽と生息しているおしゃべり雀たちにわざわざ娯楽の種を提供してやるのも癪だし、なにより「皇后が心労を抱えている」などという話は醜聞に属する類の噂だ。わざわざ表に出したい話ではないだろう。

「ですが薬である以上、むやみやたらと飲めばいいというものでは……」

ブラムに医学や薬学の知識はないがそれぐらいのことは分る。自分が用意した睡眠薬が原因で皇后が体調を崩した、などという事態はなんとしても回避しなければならない。そなれば責任を取らされ、最悪首が飛ぶかもしれない。いろんな意味で。

「なにも文字通りの睡眠薬を用意して欲しいと言っているわけではないのですよ」

小心者のブラムの、リスクを負いたくないという胸のうちは、皇后にとって手に取るように分りやすいものだった。小心者を安心させるように皇后はさらに優しげな微笑を浮かべる。声音を努めて穏やかにし、胸のうちの思惑は決して外に出さぬ。その様子は悪魔が獲物を追い詰めていくのに似ていた。

「そう例えば……、ハーブの中にはそのような作用があるものもある、と聞いています。そういったものを用意できませんか」

それを聞いてブラムの表情は明るくなった。用意するものがハーブの類であれば話は変わってくる。背負うリスクはほとんどないだろうし、また達成も容易いだろう。

「なるほど。そういうことでしたらこのブラム・ターナー、必ずやお役に立ってみせましょう」

ブラムの声からは興奮が窺えた。最初に懸念していたような無理難題を押し付けられることはなく、「お願い」の内容も実に簡単なものだ。どうやら自分にも運が向いてきたようだと彼は内心でほくそ笑んだ。

その様子を、皇后は微笑みの裏に隠した眼光鋭い目で観察していた。どうやらこちらの本当の意図には、この話し合いが皇帝暗殺のための下準備だとは、気づかれていないようだ。

自分が皇帝暗殺を企てていることを、皇后は誰にも話していない。

そしてまた気づかれるようなヘマなどしていないと自信を持ってもいた。

（決して気づかれるわけにはいかないのです……！）

狙う首が皇帝以外のものであれば、そこまで神経質になる必要はないだろう。「陛下」という敬称が示すとおり、このアルジャーク帝国において彼女は皇帝と並び立つ唯一の人物であり、その影響力もそれ相応のものである。つまり皇帝以外の者であれば、それは彼女にとっては格下の人間であり、周りに使えている者にとってもその命は“軽い”く、暗殺を命じられれば葛藤はあれど最終的には奪えてしまうだろう。

しかし皇帝は違う。皇帝はただ一人皇后と並び立ち、またその上に君臨することを許された存在だ。それに皇后の権力は皇帝によって保障されているといっていい。そのような上位者を弑することを「畏れ多い」と感じてしまう人間は多いだろう。そうなればどこから計画が漏れるか、分ったものではない。

今の皇帝、ベルトロワ・アルジャークに反意を抱いている者はいるだろうが、そういう人物を抱き込むことも皇后には上手い考えとは思えなかった。そういう人間は大抵自分が冷遇されているから反意を抱いているのだ。

暗殺計画はハイリターンであるかわりにハイリスクである。成功すれば新たな皇帝の下で目立った地位を得られるだろうが、仮に失敗すれば一族郎党皆殺しになる。そこ参加していた当人がどれほど残酷な殺され方をするかなど、考えるだけで背筋が凍るというものだ。ならば暗殺計画の密告という功績で妥協し、保身と少々の出世を望むという選択肢は十分にありえるだろう。

ゆえに皇帝暗殺を企てていることは、何人にも気取られるわけにはいかない。暗殺計画は一人で考え、一人で準備し、一人で実行しなければならない。それが一番安全で確実であると、そう皇后は考えたのだ。

「できれば、他のハーブとブレンドした、ハーブティとして持ってきていただけると助かりますわ」

そのほうが噂が立ちにくいだろうから、と皇后はブラムに説明した。ブラムはその説明になんら疑問を感じることはないようで、なるほどなるほどその通り、としきりに頷いている。

「わかりました。必ずや皇后陛下のご希望通りに」

「お願いしましたよ、ターナー殿」

意気揚々と客間を出て行くブラムの背中を見送り、皇后は内心で一つ息をついた。無論表には出さないが。

鈴を鳴らして侍女を呼び、冷めてしまったお茶をかえさせる。今彼女は一つのハードルを越えたことに、深い充足を感じていた。

（断られることはないと、分ってはいましたが……）

それはそうだろう。皇后がブラムに頼んだのは「睡眠作用のあるハーブを、ブレンドしたハーブティとして持ってきて欲しい」ということで、なにも毒薬を持ってこいと命じたわけではない。しかも他ならぬ皇后の「お願い」だ。多少の野心を持っている人間ならば喰い付かないほうがおかしい。

とはいえ交渉が成功したのはまた別の話だ。これで緒戦を勝ったことになる。この先も戦いは続くが、それでも一つ勝てたのだ。今はそれを喜びたい。

（わらわは勝つ……！勝ち続ける……！そしてあの子を、レヴィナスを必ずや皇帝にしてみせる……！）

第六話　そして二人は岐路に立ち？（後書き）

お気に入り登録件数が１６００件を突破しました！

この作品を読んでくださる全ての方に感謝しています。

本当にありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

ベニアム・エルドゥナス率いるカレナリア軍左翼を撃破したアルジャーク軍は、次にその矛先を街道上に陣取る本陣へと向けた。カレナリア軍の主将イグナーツ・プラダニトが率いる本陣の数は十二万。それに対しクロノワ率いるアルジャーク軍は、緒戦での戦死者や負傷者を除いてもまだ二一万を越える兵力を温存している。加えてクロノワは左翼の陣からカレナリア軍の配置図を入手していた。

イグナーツは右翼との合流を急いでいたが、後方から兵糧が送られてくる関係上動くに動けない。右翼に伝令を出して、本陣の位置で合流するしかなかった。

だが結局は間に合わなかった。

右翼と合流する前にアルジャーク軍に強襲されたカレナリア軍本陣は、数で押され崩壊した。さらには本陣と合流するために近づいてきていた右翼もまた、立て続けに襲われ壊滅。こうしてアルジャーク軍は理想的な各個撃破を実現し、カレナリア軍二五万は消えてなくなったのであった。

「今回の戦いに勝因などありませんよ。ただ敗因があるだけです」

クロノワの策略を賞賛する人々に、彼はそうそっけなく答えた。

カレナリア軍の敗北で致命的だったのは、イグナーツがせっかく集めた戦力を分散させたことだ。実際アルジャーク軍は軍事的になんら突飛なことをしたわけではなく、その失策に最大限付け込んだだけである。

イグナーツが戦力を分散させたのは、先行してくるであろうアルジャーク軍の騎兵隊を気にしたからである。いや、策略家としてのクロノワの影を気にした、といったほうがいいかもしれない。

気にさせる、その種をまいたのはクロノワかもしれないが、それを己のうちで肥大化させていったのはイグナーツである。となればやはり彼の「深読みのしすぎ」こそがカレナリア軍の敗因であり、アルジャーク軍はその敗因を最大限利用したにすぎない。

まさしく、「敗因なくして勝因なし」である。

討ち取られたカレナリア軍主将イグナーツ・プラダニトは、劣勢の中でも良く戦っていた。兵を鼓舞してまとめ上げ、戦場の流れを見極めてよく戦った。局地戦とはいえ有利に立つ場面もあり、アールヴェルツェをはじめとするアルジャーク軍の将官たちを唸らせていた。

「優秀な将というのは、敵にもいるものなのだな」

戦いの後の食事時、イトラと雑談していたレイシェルは、ふとそんなことを呟いた。彼らにとって優秀な将というのは、アルジャークの至宝アレクセイ・ガンドールをはじめとする先達たちがまずそれに当たる。しかし身内に優秀なものが多くいると、それ以外が馬鹿に見えてくることがある。まるで敵には戦術も戦略も、なにも考えていないように思えてしまうのだ。

だがそれは敵を侮っているだけであり、敵には敵の戦術があり戦略があり思惑があるのだ。若い二人は致命傷を負う前にそのことに気がついたのであった。

しかしイグナーツがどれだけ頑張ろうとも全ては延命に過ぎぬ。むしろ彼が有能であったからこそ、延命に延命を繰り返すことができ、多くの兵士の命が失われることになった。結果論とはいえそう書くことができるのは、戦場の皮肉かもしれない。

戦場で倒れたイグナーツは全身傷だらけであり、どれが致命傷か分らない有様であった。胴体から切り離した彼の首はカレナリア国王の下に届けられ、体はカレナリアの国旗に包まれて丁重に葬られたのであった。

イグナーツ率いるカレナリア軍を完全に撃破したアルジャーク軍は、そこで二手に分かれた。クロノワはレイシェルに一軍を与えると、港や海軍拠点の制圧を命じたのだ。いうまでもなく、海路で補給物資を運んだ際の玄関口にするためである。もっともこちらは大した抵抗に遭うこともなく、じつに簡単に終わった。イグナーツは使える戦力をすべてかき集めて決戦に臨んでおり、逆に言えばそれ以外にまともな戦力は残っていなかったのである。

制圧した港や海軍拠点をレイシェルは大過なく収めた。無用な流血を避け、また部下には暴行と略奪を硬く禁じ、民衆の敵愾心と恐怖を鎮める。その一方で妨害行為や混乱に乗じた犯罪などには、断固とした態度で臨んだ。

彼は住民を必要以上に萎縮させることなく、また経済を停滞させることなく、補給の玄関口を整えていった。補給部隊を指揮しているグレイス・キーアやヴェンツブルグの執政官オルドナス・バスティエとの連携も見事で、この先アルジャーク軍がカレナリア国内で補給に窮することはまずないであろう。

拠点を制圧したカレナリア海軍については、ひとまず全ての乗員

を陸に挙げ武装を解除させた。仕官以上の者については拘束したが、それ以外の兵士たちは名前を登録した上で開放した。海軍はクロノワが直々に再編するということをレイシェルも知っており、これ以上は自分の分ではないと判断したのだ。

「流石はレイシェルだ。俺には真似できぬ」

後にレイシェルの処置について聞き及んだイトラはそう言って友人を賞賛した。無論、彼の手腕はクロノワにとっても満足のいくものであった。

「海岸部はレイシェルに任せるとして、私たちはゆっくりと行きましょう」

兵糧も十分にあることですし、とクロノワは笑った。イグナーツが後方部隊から受け取った補給物資は、今やすべてアルジャーク軍の手中に収まっている。カレナリアの血税を丸ごと横取りした形になるが、捨て置いて腐らせてしまうよりはよほどいい。

クロノワ率いる本隊は街道上をカレナリア王都ベネティアナに向けてゆっくりと行軍した。これは示威行動であると同時に、送られてきたイグナーツの首を見たカレナリア政府から、なんらかの接触があるのでは思ったからだ。

無論、なにも動きがなくてもかまわない。アルジャーク軍が王都ベネティアナに到着してしまえば彼らは嫌でも動かざるを得ず、その時対応がまとまらず混乱していれば、恐慌状態のまま降伏へと傾いていくだろう。

なによりも、もはやカレナリアにまともな戦力は存在しない。南

のテムサニスとの国境付近には、国境防衛のための砦である「ルトリア砦」がありそこにはある程度の兵が詰めていると思われるが、それを動かすとも思えない。動かしてしまえば南の国境ががら空きになるし、なによりも戦力の差がありすぎる。砦の戦力をおよそ一万と見積もっても彼我の戦力差はおよそ二十倍以上で、戦わせるだけ金と命の無駄である。

そんなことはカレナリア政府も重々承知しているはずで、つまり王都ベネティアナに向かうまでの間に野戦を仕掛けられることはまずないといっていい。ならば悠然と構えて歩を進めればよい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局、カレナリア国王エルネタード・カレナリアは降伏を選択した。

実際それ以外に選択肢などないだろう。カレナリア国内にアルジャーク軍に対抗できるだけの戦力はもはや存在しないのだ。ならば敵軍と事を構えるためにはよその国の軍をアテに知るしかない。

南のテムサニスか西のオルレアンか。だが今更助けを求めたところで時間的に間に合わないであろう。となれば国を捨て亡命するしかない。

しかしどちらに助けを求めたとしても、アルジャークに抗することができるとは思えない。アルジャーク帝国の版図は去年の大併合によって二二〇州となり、そしてこの度カレナリアを併合すればその版図は二八三州となる。テムサニスにしろオルレアンにしろ一国で対抗するのはまず不可能である。

さらに言えば亡命を受け入れた国は、それを理由にアルジャーク

から侵攻を受けるだろう。あまりにリスクが高く、そもそも亡命を受け入れてもらえない可能性のほうが高い。国境を越えた途端に捕縛され、そのままアルジャーク軍に引き渡されたとあってはいい笑い者である。

　であるならば他者に運命を預けることなく、王者の誇りを保持して降伏を選んだほうが体面は良い。幸いなことにアルジャーク軍の総司令官はクロノワ・アルジャークである。彼はモントルム遠征の際に、降伏した王族を処刑することはなかった。降伏しても命が残るのであれば、それは最上の選択ではないだろうか。

　降伏を伝える使者が陣に到着したのは、アルジャーク軍が王都ベネティアナにあと一日程度のところまで迫ったときのことであった。カレナリア政府内でどのような駆け引きと水掛け論がなされ、何人が胃の痛い思いをしたのかなどクロノワの知ったことではないが、とにもかくにも王都への攻撃布陣を整える前に相手が降伏してくれたことにクロノワは胸をなで下ろした。

（まあ降伏勧告はするつもりでしたが……）

　純粋な軍事拠点への攻撃ならば否やはないが、人々が生活している都市への攻撃はクロノワの気分を重くさせる。率いているのが大軍である以上、どれだけ徹底しても戦場となる都市で略奪や婦女子への暴行が行われるのは目に見えており、それでは住民との間に軋轢が生じ占領後の統治に支障が出てしまう。

　いや、そんな頭でっかちな理由はどうでも良いのだ。ごくごく単純な感情的問題として、クロノワは略奪や暴行といった戦場での行為が大嫌いで、それを収めることができないであろう自分の無能さに腹が立って仕方がないのだ。

軍規を犯した者を処刑し粛然とさせてみても、それはどこか自分の無能を棚上げした八つ当たりじみていて、さらにクロノワの気を重くさせた。

余談になるが、純軍事的な観点から考えると略奪や暴行を禁じることに大したメリットはない。そういった行為を黙認していれば兵士たちの士気は自然と上がるし、傭兵を雇う際に大金を用意する必要がない。

「戦って勝手に奪え」

と、つまりはそういうことだ。だから歴史的に見て、略奪や暴行を完全に禁じていた軍というのは少数である。

しかし今回はエルネタードが早期に降伏を決意したため、王都ベネティアナが戦場になることはなかった。双方にとって幸運な事と言えるだろう。すでにエルネタードの名で勅命が発せられているのか、王都内に混乱は見られなかった。ただ住民の多くは都市の中を往くアルジャーク軍に不安そうな眼差しを向けている。侵略者を歓迎できるわけもなく、こればかりは仕方がないだろう。

王都ベネティアナの王城に入ったクロノワの意識は、すでに次のテムサニスへの遠征に向いていた。占領したカレナリアの統治については、事前の予定通り連れてきた文官たちに任せればよい。略奪と暴行の禁止については、重ねて厳命していたが。

やっておかなければならない幾つかの大きな仕事を片付けると、クロノワは王城の地下にある「共鳴の水鏡」のある部屋へと向かった。

「お待たせいたしました、クロノワ殿下」
「いえ、お気になさらずに」

通信の相手はカレナリアの南の国境を守るルトリア砦の指揮官、ロフマニス・コルドムである。

「私がこの場にいることから分ると思いますが、エルネタード陛下は降伏を選択されました」
「承知しております。すでに話だけは聞いておりますので」

ロフマニスの態度は堂々としていた。敗戦国の将であることに引け目を感じている様子はなく、その立ち振る舞いは自然で目には力があった。

「正式な勅書が届き次第、カレナリアの国旗を降ろし、門を開けるつもりです」
その言葉からは己の職責に忠実であろうとするロフマニスの気位が窺えた。

「ロフマニス殿、カレナリアの国旗はまだ降ろさないでいただきたい」
クロノワはごく自然にそういった。しかし言われたロフマニスは明らかに動揺を見せた。

「それは……、どういう、意味でしょうか……」

カレナリアの国旗を降ろさないということは、アルジャーク軍と敵対するという意味である。それをクロノワが言い出すということは、つまりアルジャーク軍はどうあってもルトリア砦を攻撃するつもりなのか。降伏して砦を明け渡すといっているのに、アルジャー

ク軍はあえて戦って奪うというのか。
砦の兵を預かる身としては看過できないことだ。

「少しばかり悪巧みに付き合ってもらおうと思いまして」

ロフマニスの動揺にクロノワはもちろん気づいていたが、特に斟酌することもなく普通の調子で言葉を続ける。

「我が軍はこれからテムサニスへ遠征をします。詳しい日程はまだ決まっていませんが、近いうちに宣戦布告もなされるでしょう」

そのクロノワの言葉にロフマニスは今度こそ言葉を詰まらせ息を呑んだ。クロノワは、いやアルジャーク帝国は今まさにカレナリア王国を切り取ったばかりではない。にもかかわらずその矛先をすぐさまテムサニスへと向けるのか。

それを強欲というべきなのか、覇気と称するべきなのか、ロフマニスは判断を付けかねた。それに今彼が考えるべきはそのようなことではない。

「それでテムサニス遠征と我が砦がカレナリアの旗を降ろさないことに、どのような関係があるのでしょうか」

彼が今気にかけるべきは、隣国の行く末やアルジャークのあり方などではない。彼が命を預かっている砦の部下たちのことだ。

「ルトリア砦が旗を降ろしていない状態でアルジャーク軍が南に進路をとれば、多くの人は『ルトリア砦攻略のための行軍だ』と判断するでしょう」

それはそうだろう。繰り返しになるがカレナリアの国旗を降ろさないということは、それはつまりアルジャークに敵対するという意思表示である。カレナリアという国を平定し安定した統治を行うためには、そのような反乱分子を放って置くわけには行かない。

「つまりテムサニスは、アルジャーク軍が国境に迫って来ても警戒を示さない」

まったくの無警戒、ということないだろう。偵察を活発にするぐらいことは、当然してくるはずだ。しかしそれ以上の事はしないだろうと、クロノワはふんでいた。

「なるほど。確かにテムサニスは軍を召集しており、いつでも動かせる状態ですからな」

テムサニスはアルジャークがカレナリアに宣戦布告した辺りから軍を召集し始め、現在では十五万規模の軍が臨戦態勢で待機している。これはどこかを侵略するための軍ではなく、アルジャークのカレナリア遠征による火の粉が飛び火してきた場合、それに対処するための軍だ。

この軍の初動が遅れれば、アルジャーク軍はテムサニス遠征において先手を取ることができる。

「我が軍がルトリア砦に接近したところで砦は降伏。ルトリア砦討伐軍はそのままテムサニス遠征軍に早代わり、というのがこちらのシナリオです」

そこまで説明を聞くと、ロフマニスは納得したように頷いた。クロノワの言う“悪巧み”とは、降伏するタイミングを次の遠征に利

用させてくれ、とつまりはそういうことだ。アルジャーク軍に、というよりはクロノワにルトリア砦を力ずくで攻略する意思がないことを知り、ロフマニスは安堵の息を漏らした。

「承知いたしました。遠くからでも良く見えるように、大きな白旗を用意しておきます」

冗談をいう余裕も戻ってくる。クロノワも軽く微笑んで「それではよろしく」といい、通信を切った。

しかし、クロノワの思惑は外れることになる。ルトリア砦がカレナリアの国旗を降ろさないことに真っ先に反応したのは、南のテムサニスだったのである。

第六話　そして二人は岐路に立ち？

テムサニス軍が北上していく。

カレナリアの南の玄関口とも言うべきルトリア砦を通り抜けて、テムサニス軍十五万は北上していく。

その様子を城壁から苦笑と共に見下ろす人物がいる。ルトリア砦の指揮官、ロフマニス・コルドムである。

「よろしいのですか。将来に汚名を残すかもしれませぬぞ」

「私が汚名を被って砦の兵たちが助かれば安いものだ」

話しかけてきた副官に、彼は苦笑したままそう答えた。ロフマニスの眼下を往くテムサニス軍の先頭には国旗と共に王旗が翻っており、これが親征であることを無言のうちに物語っていた。つまりこの軍を率いているのは、テムサニス国王ジルモンド・テムサニスその人なのだ。

（やれやれ、妙なことになったな……）

いや、“妙なこと”というほど事態は複雑ではないのだろう。しかしそれがロフマニスの正直な感想であった。

時間は少し遡る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事の発端は、ルトリア砦がカレナリアの旗を降ろさなかったこと

だ。

カレナリアの旗を降ろさないということは、それはすなわちアルジャークと敵対する意思表示である。

無論、ロフマニスにその意思はない。彼はどこまでいってもカレナリア王国と国王に仕える武将であり、エルネタードが降伏を決意した以上、それに従い剣を置くのが筋だと思っている。

ではなぜ旗を降ろさなかったのかといえば、アルジャーク軍総司令官クロノワ・アルジャークが言うところの“悪巧み”に加担したからである。

この悪巧みは、ひどく単純なものだ。作戦などと片意地を張るのも馬鹿らしい。クロノワもそれを承知して“悪巧み”という言葉を選んだのだろう。

アルジャーク軍はテムサニスに侵攻する際、当然のことながら南に向かわなければならない。この時、ルトリア砦がカレナリアの旗を降ろしていなければ、南進する軍は砦の討伐軍だと多くの人は思うだろう。しかしアルジャーク軍が接近してきたところで砦は降伏し討伐軍は遠征軍に早代わり、というのがその内容である。

先手を取るための小細工、というのがこの悪巧みに対するロフマニスの評価であった。成功すれば御の字。失敗しても問題が起こるとは思えず、悪巧みや悪戯の域を出るものではあるまい。

（あまり好きではないが……）

ロフマニスの好みからすれば、こういった小細工は好きではない。自分が作戦指揮官であれば、このような手は使わないだろうと思う。

しかし今の彼は敗者の地位にあり、クロノワは勝者の地位にいる。ならばその命令には従う義務があろう。好きでないが拒否反応を示すほどでもない。それに目下彼の最大の目的は、自分が預かっている砦の兵士たちに無駄な血を流させないことで、それと矛盾するわけでもない。短い時間でもそこまで考え、ロフマニスはクロノワに了承を伝えたのであった。

こうしてロフマニスはクロノワの悪巧みに乗ったわけであるが、彼はその話を自身の幕僚たちのところまでで止めていた。その性質上、あまり多くの人間に知られるのは好ましくないと判断したからなのだが、砦の兵士たちは思いのほか敏感に反応した。

今ルトリア砦に詰めている兵士の数は一万と少し。アルジャーク軍との決戦に向けてイグナーツが兵士をかき集めたことを考えれば、かなり多くの兵士が残っていると言えるだろう。しかし当然のことながら、たったこれっぽっちでアルジャーク軍と戦えるわけがない。砦に籠もっていたとしても同じである。そんなことは末端の一般兵に至るまで承知しており、それゆえにカレナリアの旗を降ろさないというロフマニスの行動は、彼らの目には自殺行為に思えた。

「いざとなれば私の首を差し出せばよい」

今すぐに降伏するよう詰め寄る兵士たちに、ロフマニスはそういった。その言葉で指揮官には指揮官なりの考えがあることを知った兵士たちは引き下がったのであった。

さて、このようにして砦の内部は納まったわけであるが、次の厄介事は砦の外、しかも南の方からやってきた。テムサニス国王ジルモンド・テムサニスの親書を携えた使者がやってきたのである。その内容を簡単に要約すると、次のようになる。

曰く「ルトリア砦にいる兵士たちを、亡命者としてテムサニスに受け入れても良い」

この親書を読んだとき、ロフマニスは生まれて初めて笑うのを堪える努力をした。

（なるほどテムサニスからはそう見えるのか……）

テムサニスからすれば、カレナリアの旗を降ろさないルトリア砦は、玉砕覚悟でアルジャーク軍と戦う決意をしたように見えるのだろう。

ここで勘違いしてはならないのは、受け入れを申し出たテムサニスの思惑である。彼らを受け入れれば、当然ルトリア砦もテムサニスのものになる。国境の砦をタダで手に入れられるのだ。これは大きなメリットだろう。

加えてカレナリアは今混乱している。侵略者たちが我が物顔で闊歩するカレナリアを救世主として救い、ついでに十か二十州くらい切り取りたい。そして行軍をスムーズにするためには、ルトリア砦を味方に引き込むのが一番良い。そんな思惑もあった。

「少し考えさせてもらいたい」

ロフマニスは使者にそう伝え、とりあえずのお引取りを願った。帰っていく使者を見送ったロフマニスはその足で「共鳴の水鏡」がある部屋へと向かい、王都ベネティアナにいるクロノワへと事の次第を連絡したのである。

「そう来ましたか……」

話を聞いたクロノワは苦笑するようにそういった。彼にしてみれば意図せずして大きな獲物が食いついた、といったところだろう。

「連絡をいただけたのはありがたいですが、貴方はそれでよかったのですか？」

ロフマニスからしてみればテムサニスと手を組むという選択もあったのだ。テムサニス軍を引き込み、なにも知らずに近づいてくるアルジャーク軍を強襲すれば、緒戦はまず間違いなく勝てるであろう。

「私はカレナリアの軍人です」

その短い言葉に、ロフマニスはありったけの誇りと気位をこめた。彼のその言葉に、クロノワも満足したように頷いた。

「それで、貴方はどうするつもりですか」

「無論断ります。テムサニス軍が北上するのであれば、戦ってこれを防ぎます」

ロフマニスが戦うのはアルジャークのためではない。カレナリアのためだ。この状況下でテムサニス軍がカレナリア領内に乱入してくれば、納まりかけてきた混乱に拍車がかかり、安定が遠のくことは目に見えている。

「かりに戦うとして、我々が間に合わなければ全滅ですよ」

「覚悟の上です」

一瞬の逡巡もなくロフマニスは答えた。その答えを聞くと、クロ

ノワは何かを思案するように顎を撫でて黙り込んだ。

「……汚名を被る覚悟はありますか？」

より確実に、かつ被害を抑えてテムサニス軍を撃退する方法がある。しかしそのためにはテムサニス軍を騙す必要があるのだが、その騙し方は後の世から顰蹙（ひんしゅく）をかうかもしれない。そしてその騙す役回りはロフマニスなのだ。

「……詳しくお聞かせいただきたい」

ジルモンド・テムサニスが軍を率いてルトリア砦を通過したのは、その五日後のことであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ジルモンド・テムサニスの新征は順調に進んでいた。不気味ではあるが、順調に進んでいた。

なにしろそう表現するしかない。これまでに一度も戦端は開かれておらず、ただ歩を進めるしかない。略奪の対象になりそうな町や村はいくつかあったが、住民の大部分は避難しているらしく特に若い娘や子どもは影もない。それに伴い物資も引き上げられているらしく、略奪するのも馬鹿馬鹿しい有様であった。

結果、テムサニス軍はなにもせずただ前進するしかない。問題が起きているわけではなく順調であることは間違いないが、どこか仕組まれた策略の気配を感じそれが不気味でならない。

（どこで仕掛けてくる……？）

策略を仕掛けているのがクロノワ・アルジャークであることはまず間違いない。となればどこかでアルジャーク軍の襲撃が必ずある。

（ままならぬ……！）

これまでに見てきたカレナリア領内の様子は、ジルモンドの思惑がかなり外れたことを意味している。当初彼は混乱に乗じて事を運ぶ腹積もりあったが、整然とした避難の様子からは混乱は見受けられない。先手を取るつもりであったのに、その先手がいつまでたっても取れない。

遠征そのものは順調である。しかし思惑を外されたジルモンドは、いい様のない不気味さを感じる。

嵌められたのではないか？嵌められたのであれば、どのように？今自分はどんな状況下に置かれているのか？

そんな彼の疑問の答えは後方からもたらされた。

――――ルトリア砦が、門を閉じているという。

それはつまりテムサニス軍の補給路が寸断されたことを意味していた。

「おのれ謀ったな！！」

ジルモンドはすぐさま軍を取って返した。これはなにも謀られたことに対する、感情的な理由による行動というわけでもない。補給線が寸断されたということは、テムサニス軍にしてみれば生命線を切られたことと同じである。大半が避難しもぬけの殻となっている近くの村や町から略奪したとしても到底足りるまい。ゆえにすぐに

対処しなければ軍が干上がってしまい、戦わずに敗北することになる。

街道を南に進み、ルトリア砦の姿を認めたジルモンドはすぐさま総攻撃を命じた。砦にいる兵士の数は一万と少し。それに対しテムサニス軍は十五万である。恐らく一日とかからずに陥落するであろう。

ルトリア砦にカレナリアの兵を残しておいたのは失策であったろう。ただ反面彼らがこのような大胆な行動に出るとは考えていなかったのだ。カレナリアはすでにアルジャークに併合され、彼らに帰る場所などないのだから。

それに、そもそも兵の数が圧倒的に少なかったからこそ、カレナリアの兵を砦に残しておいたのだ。それはつまり敵に回られたとしても、簡単に叩き潰すことができる自信があったということである。失敗はしたが、まだ十分に挽回できる。

テムサニス軍に攻撃を仕掛けられたルトリア砦は必死に抵抗した。だが、如何せん数が違いすぎる。このままならばそう時間はかからずに落ちる。敵味方を含め、その戦場にいる誰もが始まる前からそう思っていた。

テムサニス軍有利の戦場の流れが一変したのは、攻撃開始からわずか約三十分後のことであった。

堂々たる陣容を誇るアルジャーク軍が、テムサニス軍の背後に現れたのである。

この時点でクロノワの策略が完成したといっていい。

ルトリア砦はテムサニス軍を通過させてから、その門を閉じ敵の

補給路を寸断する。略奪にあいそうな村や街はあらかじめ避難させておき、敵に物資を渡さないようにする。孤軍になったテムサニス軍が目指す場所はただ一つ、ルトリア砦である。この砦を攻略し補給路を再び繋げるのが、状況を打破する最善の方法であろう。幸い戦力差は歴然で、砦を落とすのにさしたる時間はかからない。

ここまで読めればアルジャーク軍の行動は簡単である。テムサニス軍との距離に気を付けながらルトリア砦を目指せばよい。敵軍が砦に攻撃を仕掛けているその背後を取れば、チェックメイトである。

ただこの策略には汚れ役が必要であった。ルトリア砦の指揮官、つまりロフマニスがこれに当たる。一度はテムサニスに味方しておきながら、後になって裏切るのだ。正々堂々とはとても言えまい。

戦場での駆け引きにおいて相手を騙すことは良くあるが、今回の策略は「約束を破る」という類の騙しだ。それさえも良くあることなのかもしれないが、“卑怯”とか“低俗”とか、そういう評価は免れないように思える。

クロノワの言う「汚名」とはそういうことであった。

ただロフマニスとしてはなんら恥じるところはない。彼はカレナリアの軍人でありルトリア砦の指揮官であり、彼が守るべきはカレナリアの国民と砦の兵士たちである。クロノワの策略に乗るならばこの二つを高確率で守ることができ、その代償として自分が汚名を被るだけならば安いものだと、本気でそう思っていた。

軍の最後尾というのは、得てして脆いものである。それは単純に背後という位置関係だけが原因なのではない。そもそも軍というのは前方に精鋭を後方には弱兵を配置する。特に一番最初に敵と接触する先鋒は、強ければ強いほど良い。後ろから襲われることに対す

る恐怖心は大きいだろうが、弱兵が精鋭に襲われるのだ、脆いのは当然だろう。

テムサニス軍は崩れた。本来であればそのまま全面壊走となるのだろうが、悪いことに逃走すべき前方はルトリア砦がその行く手を阻んでいる。逃げるに逃げられず恐慌状態に陥った。

一方ロフマニスはルトリア砦から打って出ることはせず、城壁の上からひたすら矢を射かけ続けた。なにしろ本来弓兵でない兵士にまで、弓を持たせて矢を射させていたというのだからその必死さが窺える。当然狙いなどでたらめで、敵軍の中に落ちればいい、といった程度のものだった。しかしその分矢の数は多く、テムサニス軍の恐慌状態に拍車をかけていった。

逃げることもできなかったテムサニス軍は、結局ほとんどの者が武器を捨て投降した。投降のみが命を拾うほぼ唯一の選択だったのだ。その内、一人の男がクロノワの前に引き出されてきた。身につけている甲冑の装飾は豪華で、男の身分が高いことを証明している。さらにマントに施されている刺繍は、掲げられた王旗と同じ紋様であった。

「テムサニス国王、ジルモンド・テムサニス陛下とお見受けします」

「お、お前たちはカレナリアだけでは満足できないのかっ！！」

左右の腕をアルジャーク兵に拘束されているジルモンドは、自由になる舌を必死に回転させた。

「ア、アルジャークは余の国を、テムサニスをも狙っているのであろう！？」

余の目は誤魔化せぬぞ、とジルモンドは喚いた。彼の言葉には理論的根拠はまったくなく、その場の思いつきに等しいものであったが、偶然にも真実を言い当てていた。

「これ異なことをおっしゃる」

クロノワはさも驚いたような声を上げて見せた。実際にテムサニス遠征を緻密に計画し、もう少しすれば宣戦布告していたであろうことはおくびも出さない。

「いつ我が軍が国境を破って貴国に侵入しましたか」

ここはカレナリア領であり、つい先日アルジャークに併合された土地である。そこに侵入してきたのはお前たちで、つまり侵略者はお前たちのほうである、とクロノワは明快に断じた。

その言葉を聞いてジルモンドはがっくりとうな垂れた。反論する余地がなかったからである。しかし後ほんの数日、彼らがカレナリア領に入るのが遅れていれば、侵略者と被侵略者の立場は逆転していたはずで、そのことを考えるとなんとも皮肉なものである。

それはともかくとして、ジルモンド・テムサニスは高貴な捕虜としてアルジャーク軍に遇されることとなった。クロノワにしてみれば最高の手札を手に入れたことになり、テムサニス遠征が始まる前から圧倒的な優位を獲得したのである。

ルトリア砦は引き続きロフマニスに任せることにした。ルトリア砦は国境の砦である。本来であれば彼を解任し、アルジャーク軍の中から適任者を選ぶのが筋なのだろうが、今回の一件でロフマニスは功績を挙げたし、また十分に信頼できる人物であるとクロノワは

判断したのだ。自分の都合で汚名を被らせたロフマニスに対する、クロノワなりの配慮だったのかもしれない。

投降してきたテムサニス兵は武装解除した上で、その周りをアルジャーク軍が囲っている。彼らの処遇は一度カレナリア王都ベネティアナに戻ってから決定するつもりである。解放するにしてもテムサニス政府との交渉があるし、その間はなんらかの強制労働に服させることになるだろう。ただあまりにも劣悪な環境で労働させることはしないよう、関係各所に指示を出しておかなければならないだろう、とクロノワは考えていた。

（これでテムサニス遠征の半分はすでに成りましたね……）

テムサニスは十五万の軍勢を丸々失い、そのうえ国王ジルモンド・テムサニスを人質に取られているのである。この先、交渉で主権を譲渡させるのか、あるいは改めて軍を派遣するのか分らないが、そう高い壁はもう残っていないと見ていいだろう。

（計画が狂ってしまいましたねぇ……）

クロノワは苦笑する。確かに計画は練り直さなければならないだろうが、それは「どこまで省略できるか」ということで、厄介な問題に頭を悩ませるわけではない。計画が狂ったとはいえ、事態は良い方向に転がったのであって、それは喜ぶべきことだろう。

そう、予定は狂った。クロノワにとっては良いほうに。しかしこの狂いが悪いほうに転がっていった者もいるのである。

アルジャーク帝国皇后、その人である。

第六話　そして二人は岐路に立ち？（後書き）

第六話は一応次で終わりです。
お楽しみに。

第六話　そして二人は岐路に立ち　エピローグ

涼しい風が吹いている。

北国であるアルジャーク帝国の冬は、早くまた長い。それはつまり夏が短くすぐに涼しくなるということだ。

昼間はまだまだ温かくともすれば汗ばむような陽気だが、このごろは夜になれば肌寒い風が吹くようになってきた。

「デザートはいかがいたしますか、陛下」

「そうだな、では果物だけいただこうか」

アルジャーク帝国帝都ケーヒンスブルグにある皇帝の住まう宮殿、その一角に設けられた皇后の私的な中庭で、帝国で最も高貴な夫婦が食事を楽しんでいた。言うまでもなく、皇帝と皇后の二人である。会場が皇后の私的な空間であることから分るように、皇后が皇帝を昼食に誘ったのである。

何気ない食事の誘いのように思えるが、実はそれなりに意味がある。

皇帝と皇后はこのところ不仲になっていた。原因は南方遠征軍総司令官の人選だ。皇后はレヴィナスを推したが、結局はクロノワがその役を拝命した。

もちろんレヴィナスがこの件を断りクロノワを推し、そして皇帝がそれを了承したのは理由があってのことだが、皇后にしてみれば面白くない。皇帝の執務室に怒鳴り込んで喚き散したりもした。しかし決定は覆らずクロノワは今、総司令官として遠征軍を率いカレナリアにいる。

（ここら辺りが潮時、そういうことなのだろう）

皇帝ベルトロワは妻の心情についてそう洞察する。

彼女が皇帝の執務室に怒鳴り込んだことは、その日のうちに宮殿中に知れ渡っている。皇帝と皇后の仲が不穏になっている、などという噂は醜聞に属するし、なによりも事実であるからたちが悪い。

つまりこの食事会は「もうこの件は終わりにしましょう」という、皇后からの終戦の意思表示なのだ。

その胸の内の本当のところはどうか分らない。しかし表向きはこれで終わりであり、この先なにか文句を言うことはない、ということなのだろう。少なくともベルトロワはそう解釈した。

二人は今大理石で作られた東屋にいる。柱にはつる草が巻きつき、天井は緑の葉で覆われ陽光を優しく遮っていた。

「そういえば最近、おいしいハーブティを手に入れましたの」

デザートの果物も食べ終えちょうど食後のお茶が欲しくなったころ、皇后が見計らったようにそういった。なんでも最近愛飲しているという。

「そうか。では、是非いただきたいな」

皇帝としてはそう答えるのが礼儀というものだろう。皇后は優雅に微笑むと、白磁器のティーポットに乾燥したハーブを入れお湯を注いだ。ハーブティはブレンドされたものらしく、何種類かの葉やベリーを認めることができる。

「どうぞ」

皇后が二つのティーカップにお茶を注ぎ、その一つを皇帝に差し出した。お茶の色は薄い黄緑といったところだろうか。

「ふむ。清々しい、良い香りだな」

程よく蒸されたのか、ティーカップからは鼻に抜けるような爽やかな良い香りがした。ベルトロワはまずその香りを楽しんだ。

本来ベルトロワはもっと重厚で芳醇な香りのお茶やお酒を好む。臣下も彼の好みを良くわきまえていて、お茶を要求してもこういった類のティーカップを持ってくることはない。そのせいか、皇后が用意したティーカップは新鮮に感じられた。

ティーカップに口をつける。毒見の必要はない。これは皇后が手ずから入れたお茶で、彼女が愛飲しているものだ。なによりも先に彼女が口をつけている。

ハーブティは少しクセのある味だった。だが飲みにくいわけではない。クセの強い、薬っぽい味のする紅茶などもあるが、そういったものと比べれば断然飲みやすいだろう。

「もう一杯、いかがですか」

「そうだな、いただくとしよう」

空になった皇帝のティーカップに皇后が二杯目のお茶を注ぎ、そのまま自分のティーカップにも二杯目を注ぐ。

それから他愛もない話をした。

どの時代いずれの国でも同じなのだろうが、話すのは女性で聞くのは男性だ。話題はころころと取りとめもなく変わっていく。宮中で囁かれている噂話から最近流行りのドレスまで、話の種は尽きることがない。

ベルトロワはよき聞き役に徹していた。頷き相槌をうつ。時には質問をして話しを振ってやる。

皇帝と皇后の二人ともが優れた話術を持っている。そんな二人の会話は、途切れることなくまるで流れるように続いていった。

「さて、そろそろおいとまするとしよう」

そういってベルトロワはティーカップに残ったハーブティを飲み干し、立ち上がった。それを見た皇后は残念そうな表情を見せる。

「あら、もうそんな時間ですか？名残惜しいですわ」

と言いつつも無理に引き止めるような事はしない。ベルトロワの一歩後ろについて、中庭の入り口まで彼を送っていく。

「そういえば今日の午後は何をなさいますの？」

さも今思いついた、と言った感じで皇后が尋ねた。

「時間が空いたのでな、久しぶりに馬で遠乗りをしようかと思っている」

「左様でございますか……」

それを聞いて皇后は内心でほくそ笑んだ。事前に調べたとおりで

ある。

皇帝の仕事は激務であるが、決して休みが無いわけではない。不定期にではあるが仕事の合間というものがあり、そういった時間を活用してベルトロワは馬で遠乗りをしたり、演劇や演奏会を楽しんだりしていた。

「落馬など、されませぬよう……」

皇后のその言葉は心配と言うよりは挨拶に近いものだった。第一ベルトロワは乗馬の名手で、滅多なことでは落馬などしない。それゆえ彼は微笑をもって挨拶に代え、食事を楽しんだ中庭を後にしたのであった。

そのおよそ一時間後、アルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークは遠乗りの最中に落馬し、意識不明の重体に陥る。その同じ頃、皇后はと言えば午睡のまどろみの中にあったという。

歴史の歯車の一つは壊れ、一つはずれ、そして一つは動き出した。

―第六話　完―

第六話　そして二人は岐路に立ち　エピローグ（後書き）

というわけで「第六話　そして二人は岐路に立ち」、いかがだったでしょうか。
少し、いえ、かなり不完全燃焼な終わり方ですが、この先のことを考えるとここで切るのが妥当かな、と。
第七話はもちろんこの続きですので、そちらを楽しみにしてもらえると嬉しいです。

第七話　夢を想えば　プロローグ（前書き）

第七話です。
この話は「夢」という単語がキーワードになります。
なるはずです。なるったらなるのです。なるといいなぁ～。

第七話　夢を想えば　プロローグ

別れの数だけ強くなったと思っていた
でも違った
出会いの数だけ強くなっていた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第七話　夢を想えば

「陛下のご容態はいかがですか？」

アルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークの寝室に入ってきた皇后の姿を認めると、ベルトロワの侍従医たちは皆一様に腰を折った。皇后はそれを片手を上げて制し、ベッドに横たわる皇帝の下へ近づいていく。

「未だ、目を覚まされませんか？」
「はっ……、手は、尽くしているのですが……」

およそ三日前、皇帝ベルトロワは馬で遠乗りを楽しんでいる最中に落馬し、その時に頭を強く打ったのか、以来意識不明の状態が続いている。ベッドの上に横たわるベルトロワの姿は、頭に巻いた白い包帯を除けばどこに異常はなく、すぐにでも起き上がってきそうに思える。だが彼はこの三日、一度も覚醒していない。

「あなた方は良くやってくれています。陛下がお目覚めにならないのは、あなた方のせいではないでしょう」
「恐縮にございます」

皇后としては、今のこの状況は望んだものではない。彼女としては、ベルトロワには確実に死んでもらいたかった。しかし、修正不可能でもない。いや、結果としてはこのまま意識不明でいてくれたほうがいいかもしれない。

「しばらく、二人だけにしてください」

皇后にそういわれ、侍従医たちは寝室から退室していく。パタリ、と扉を閉める音がしてから彼女はベルトロワのそばへと近寄り、彼の頬に手を添えた。

「まったく、体だけは丈夫な人ですこと」

指先で、顎を撫でる。

「いつ死んでもかまいませんが、できればもう少しこのまま粘ってくれると嬉しいですわ」

その間に自分はレヴィナスを摂政にする。全てはレヴィナスのため、そして自分の夢のためだ。

以前アルジャーク帝国のヒエラルキーは上から、皇帝、宰相、そして三人の大臣、であるという話はした。では摂政という役職がどこに入るのかといえば、皇帝と宰相の間に入る。

アルジャーク帝国において摂政という役職は、皇帝が存命中にその後継者が実権を得るための役職である。つまり摂政は、帝位を別とすればほとんど全ての権限を皇帝より与えられており、名実共に後継者のための位なのである。

皇帝暗殺には失敗したが意識不明には追い込んだ皇后が、次の手として考えたのがレヴィナスをこの摂政位につけ、次期皇帝の座を安泰にすることであった。

レヴィナスを摂政にすることは難しくあるまい。なぜなら彼は皇太子である。皇太子という称号は帝位継承位第一位を表しており、つまりこの時点でレヴィナスは後継者として将来を約束されていることになる。その彼が摂政位に付くことに、どんな異議があるというのか。

「もともとは、すぐさま皇帝にしてあげるつもりでしたけど……」

しかしその目論見はベルトロワが一命を取りとめたことで崩れてしまった。しかし彼はいつ死んでもおかしくない状態で、ひとまず摂政位につけるのも悪くはあるまい。

レヴィナスが摂政位に付けば「次の皇帝はレヴィナスである」と内外に公言したようなもので、いきなり皇帝になるよりは軋轢が少なくて済むだろう。もっともそのような軋轢など皇后の、いや皇太后の権力で握りつぶすつもりでいたが。

「クロノワなどに大きな顔をさせることなど、もうありませんわ」

クロノワには皇帝危篤と即時帰還を求める使者が出ているはずだ。ちなみにこの使者は帝都ケーヒンスブルグから出されるのではない。おそらくカレナリアの王都ベネティアナから出るはずだ。

クロノワがカレナリアを征服したことはすでにケーヒンスブルグでも知られている。だからまず宮殿の「共鳴の水鏡」を使ってモントルムの旧アルジャーク大使館まで連絡が行き、そこからモントル

ムのカレナリア大使館を経由してベネティアナまで知らせが行く。ややこしくて面倒くさい手順のように思えるが、帝都ケーヒンスブルグから早馬を飛ばすよりもよっぽど早い。

クロノワは今、恐らくカレナリアの南、テムサニスの領内にいるだろう。知らせを聞いて慌てて戻ってくるだろうが、それでもかなりの時間がかかると見ていい。彼が帰ってくるその前に、レヴィナスを摂政にするというのが皇后の考えだった。

「レヴィナスが摂政になってしまえば彼奴など、どうとでもなる」

邪魔ならば殺せばよい。目障りならば左遷すればよい。いずれにしても皇后はこれ以上クロノワに日を当ててやるつもりはなかった。日陰者は日陰者らしく隅でおとなしくしていればいい。でしゃばりさえしなければ生かしておいてやってもいいと、皇后は鷹揚に考えていた。

「ただ、誤算は……」

誤算があったとすれば、むしろレヴィナスのほうだ。皇帝ベルトロワが意識不明になってからその日のうちに、皇后はレヴィナスを呼び戻すため「共鳴の水鏡」を使ってオムージュの旧王都ベルーカにある、オムージュ総督府にいるであろうレヴィナスと連絡をとろうとしたのだが、生憎と彼女の息子はそこにはいなかった。

「殿下は今、視察に出ておられます」

総督補佐官と名乗った男はそう言った。なんでもオムージュ領各地で進められている建築計画の視察に行ったのだという。

これは誤算だった。思わずその男を怒鳴りつけそうになったが、飲み込んで平静を保つ。そして「陛下が落馬され危篤であられる」と告げ、大至急レヴィナスに知らせるようにと命令する。

総督補佐官は皇后の言葉を聞くと、青ざめて唇を振るわせた。政変の予感を感じたのだろう。

「す、すぐにお伝えいたしますっ！」

慌てて一礼すると、あわただしく「共鳴の水鏡」がおかれている地下室から出て行った。レヴィナスがケーヒンスブルグに帰ってくるまで、何日かかるか現状では予想できない。一度ベルーカに戻ってきたときに連絡はくれるだろうが、そもそも何時ベルーカに戻れるかが未知数なのだ。

（彼奴より遅れる、ということはないと思うのだけれど……）

クロノワが戻ってくる前に全てを終わらせ、口出しをする余地を残しておかない。これが皇后にとってはベストである。クロノワがいるのはテムサニスのはずだ。テムサニスのどの辺りにいるのかは分らないが、アルジャークとテムサニスは大陸の南北の端である。隣国（元だが）にいるレヴィナスが遅れることは考えにくい。

しかし、もし遅れたら？

遅れたところで皇太子であるレヴィナスの優位は揺るがない。揺るがないはずだ。

しかし、しかししかししかし。

（不測の事態とは、いつの世も起きうるもの……）

いざというときは、この手で皇帝を……。

「わらわに都合のいいときに死んでくださいまし、陛下」

そうしたら、冷たくなっていくその瞬間くらいは、愛して差し上げますわ。

魔性の笑みで、皇后は笑った。

第七話　夢を想えば？

テムサニス国王ジルモンド・テムサニスの率いる十五万の軍勢を撃破したクロノワは、ジルモンドその人と十二万以上の捕虜を得て一度カレナリアの旧王都ベネティアナに戻った。

この時点でテムサニス遠征の半分は成ったようなものだ。ジルモンド・テムサニスの身柄がこちらにある以上、交渉にしろ軍を動かすにしろ、あらゆる面での主導権はアルジャーク側にある。

さて腰をすえてテムサニスの攻略を、とクロノワは考えていたわけであるが、生憎と事態は彼が予想しえなかった方向へ転がっていく。

「皇帝陛下が落馬され、現在意識不明の重体です」

ベネティアナに戻ってきたクロノワを出迎えたのは、そんな政変を予感させる知らせだったのである。

「これは、一度戻るしかないでしょうな……」

今回の遠征の実質的な総指揮を執っているアールヴェルツェ・ハーストレイトは口惜しそうにそういった。それはそうだろう。現在アルジャーク軍は南方遠征のゴールが見える位置に来ており、これからその総仕上げをしようというところなのだ。なのにそれを放り出して帰還しなければならない。アールヴェルツェならずとも口惜しく思うのは当然だろう。

「ジルモンド陛下の身柄を押さえているのです。まったくの振り出

しに戻るわけではありませんよ」

最も口惜しい思いをしているであろうクロノワは、そういって部下たちをなだめた。それから指示を出してカレナリアに残す兵士を選ばせる。さらにテムサニスの征服後の統治を担当するはずだった文官たちを集めて、ひとまずはカレナリアで仕事をしてもらうことにした。これでカレナリアにおける文官の人員は二倍になり、混乱の起こる心配もなくなるだろう。

数は少ないが、しかし重要な問題をいくつか片付け準備が整うと、クロノワはすぐさま出立した。

「進むのは街道上です。夜も出来る限り進みましょう」

事態が事態だけに、可能な限り速く帝都ケーヒンスブルグに戻りたい。進むべき一本道がはっきりと分るならば、夜間に行軍しても迷子になるようなことはあるまい。

それにしても、とクロノワは思う。

（まさか帰りの道筋をこんなに急ぐことになるとは……）

つい先日カレナリア軍を各個撃破し王都ベネティアナに向かうときは、急ぐようなことはせずむしろ意図的にゆっくりと歩を進めたというのに。まさか遠征が終わってからの帰途で急ぐことになるとは。何が起こるかわからないものである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

皇后は苛立っていた。

レヴィナスが帝都ケーヒンスブルグに帰還しないのだ。

無論、視察に出ているというレヴィナスへの使いは、すでに総督府のほうから出されている。にもかかわらず、彼はいまだにオムージュ領旧王都ベルーカにさえ戻ってきていなかった。

これは単純にレヴィナスの居所が分らず、彼を捕まえることが出来なかったから、ではない。実際、皇帝ベルトロワが落馬し意識不明の状態であるというしらせは、皇后から連絡があった日からおよそ五日後にはレヴィナスの元に届いていた。

ではレヴィナスがなにをしていたのかといえば、彼はこの時客人と合っていたのである。

オムージュ領の西に、ラキサニアという国がある。ラキサニアのさらに西は神聖四国である。版図は五二州。事実上神聖四国の属国で、教会の威光を笠に国体を保持しているような国だ。

神聖四国が大陸の中心部にありそのため文明が早期に成熟した、という話は以前にした。そのためか神聖四国には画家や彫刻家など、優れた芸術家が多い。レヴィナスは今現在推し進めている建築計画の仕上げとして、また今後自分が立案する建築計画のために、神聖四国から優れた建築家や画家、彫刻家などを呼び寄せることを考えたのだが、そのパイプ役として目をつけたのがラキサニアであった。

オムージュ領の北部の辺境、とは言っても旧王都ベルーカよりは国境に近いという意味だが、そこにオムージュの前国王にしてレヴィナスの義父であるコルグスが造らせていた避暑用の夏の宮殿がある。計画通りの完成をみているわけではないが、十分にレヴィナスの眼鏡にかなう壮麗な宮殿である。レヴィナスはそこでラキサニア

の客人たちをもてなし、神聖四国に口を利いてくれるよう依頼していた。

彼の元に「皇帝が落馬し意識不明の重体である」という知らせが舞い込んだのは、そんなときであった。本来ならばこの知らせを受け取ったらすぐにベルーカへ、そしてケーヒンスブルグへ帰還すべきであったろう。

しかしレヴィナスは迷った。

今彼がもてなしているのはラキサニアの客人たちである。ラキサニア自体はアルジャークから見れば格下の隣国に過ぎないが、そのすぐ後ろには教会と神聖四国が控えている。こちらの影響力は無視できない。しかも今回招いた客人たちの中には、ラキサニアの王族が混じっている。粗略には扱えなかった。

さらにここを切り上げてベルーカに戻るとすれば、その理由を説明しなければならない。皇帝が意識不明であるなどという話は、今はまだアルジャーク帝国の外には漏れて欲しくない情報だろう。無論馬鹿正直に話すつもりなどないが、しかし皇太子である自分が客人を放り出してケーヒンスブルグに戻るとなれば、その理由はおおよそ予想がついてしまう。つまり皇帝か皇后になにかあった、ということだ。

恐らく大使館などから情報はいっているのだろうが、ここで自分が動けば事の重要度が一気に跳ね上がってしまう。皇太子が急いで帰還するとなれば、皇帝か皇后の命に関わることだと公言しているようなものだ。

迷った末、レヴィナスは残ることにした。なによりも格下相手に取り乱すところを見られるなど、彼の美意識が許さない。

とはいえゆっくりとしていられないのも事実である。レヴィナスは部下に命じて予定を調整させ、予定よりも早く客人たちの相手を終えてベルーカに戻ることが出来るようにした。

こうして彼は彼なりに早く戻るための努力をしていたのだが、皇后からすればあまりにも遅かった。

「まったく！あの子は何をしているのですっ！？」

皇后にしては珍しく、レヴィナスに対して怒りを表した。もっともその怒りをぶつけるべき相手はいまだ帝都ケーヒンスブルグに帰還していない。皇后に仕える侍女たちも、彼女の怒りの理不尽なしわ寄せを恐れてその視界に入ろうとしない。結局、彼女の怒りはただ空回りするばかりであった。

皇帝の容態は相変わらずである。相変わらず意識不明で、少しずつ悪くなっている。

人間はモノを食べなければ生きていけない。そして意識不明の皇帝は食物を摂取するという、命をつなぐ上で不可欠なことを満足に行えないでいた。

水分に関しては、なんとかなった。スプーンで水をすくって口元に持っていたところ、ちゃんと飲んでくれたのだ。これでひとまず脱水症状をおこす恐れはなくなった。

ただ水だけでは明らかに栄養が足りない。固形物は食べられないため、侍従医たちは暖めた牛乳に蜂蜜を溶かし、それを冷ましてから水と同じ要領で皇帝に与えた。これによって皇帝ベルトロワは餓死をまぬがれたわけであるが、それでも意識のない彼は緩慢に死へ

と向かっている。

「もはやいつ死んでもおかしくない」

それは口にすることさえ恐れ多いことだが、しかし宮殿内の人々にとっては自明の理となっていた。

ベルトロワが生にしがみ付く様を、皇后は冷めた様子で見ていた。

「さっさと死ねばいいものを」

と思う一方で、

「もう少し生きていてくれたほうが、都合がいい」

とも思っている。

本来ベルトロワは落馬したときに死ぬはずであった。少なくとも、それが皇后の書いたシナリオだった。ベルトロワが意識不明とはいえ生き残ったことは、彼女にとっては誤算であったが、心のどこかでほっとしたのも事実である。

死んでない以上落馬は事故であって、暗殺ではない。実際は暗殺未遂なのだが、それに気づいている人間はいないだろう。みな意識不明の皇帝に気を取られ、事件のことなど忘れ始めている。

（あの人が勝手に死ぬだけ……。わらわが手を下すまでもない）

ベルトロワがいつ死んだとしても、それはごく自然なことの成り行きで、それを暗殺されたと考える人間などいない。暗殺しようとした皇后のことが明らかになることなどないのだ。

（あと一手、あと一手なのです……！）

あとはレヴィナスを摂政にし、皇帝の崩御を待って晴れて帝位に就ければよい。

しかしここに来てまたしても誤算があった。レヴィナスの帝都ケーヒンスブルグへの帰還が遅れていることだ。いっそのこと本人不在のまま、ことを進めてしまおうとも思ったが、摂政位への任命は本人が帰ってくるまで待つことになるだろう。根回しは進めているが、やはり本人がいないと話が進まない。

（早く、早く帰ってくるのです、レヴィナス……！）

そしてもう一つ誤算が。クロノワである。

当初皇后は、クロノワはテムサニスでかの国の軍と交戦中であると見ていた。しかしその予測は大きく外れた。「皇帝が意識不明の重体に陥った」という知らせがカレナリアの王都ベネティアナにもたらされた時、クロノワはちょうどそのベネティアナに帰還する途中であったのだ。

これが何を意味するか。それはつまりクロノワは皇后が想定したよりも早く、この帝都ケーヒンスブルグに帰還するということである。しかもカレナリアを平定し、テムサニス国王ジルモンド・テムサニスを捕虜にするという功績を手土産にして、だ。

（レヴィナスが彼奴に遅れたら……？）

それでも問題はない。ないはずである。なぜならレヴィナスは皇太子であり、皇帝によって後継者として公認されているのだから。

しかし、しかししかししかし……。

もし皇帝が目を覚まして、その時その場にいないレヴィナスではなくクロノワを後継者に指名したら……？今回の功績を盾にクロノワを担ぎ上げる一派が現れたら……？そうでなくとも、レヴィナスが先手を取らなければこの先クロノワが大きな顔をすることになるかもしれない。

そんなことは、認められない。そんな未来像は、彼女の夢の中には描かれていないのだ。

「万難を排しておく必要がありますね……」

皇后の目は、狂気に染まっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

皇后の至上目的はレヴィナスを皇帝の座につけることである。その先、つまり自分が皇太后として権勢を振るうことなど、彼女はまったく望んでいない。言うまでもなく外戚、つまり自分の実家が政に口出しすることを許す気など、毛頭ない。

皇后の望みは自分の息子であるレヴィナスが皇帝となり、その威光をあまねく帝国全土に広げることである。あの美しい子ならば自分自身にふさわしい素晴らしい国を作り上げるに違いないと、皇后は確信していた。それを一番近い場所で目撃すること。それが皇后の「夢」であった。

そのためならば。あの子のためならば。身を挺して万難を排し、あらゆる災いから守ろう。あの子を支え、あの子の行くべき道を整えよう。たとえ最後の一人になろうとも、あの子の味方でいよう。

おくるみに包まれたレヴィナスを抱いたときに、皇后はそう誓ったのだ。

（これは愛……。わらわは誰よりも深くあの子を愛している……！）

あの子のためならば、皇帝であろうとも殺してみせよう。そうすれば遺書が開封され、そこには皇太子であるレヴィナスを喪主に、と書かれているに違いないのだから。

――――皇帝暗殺。

それは決して人に知られてはいけない。知られたが最後、皇后であろうとも大罪人として断罪され、レヴィナスはその子どもとして帝位継承の争いで大きなハンデを背負うことになるだろう。

皇帝を暗殺すること、それ自体は現状ならばそれほど難しくはない。ベルトロワの寝室に見舞いに行き、侍従医たちに席を外させてから首を絞めるなりすればいい。

問題はその後である。皇后が退室した後、侍従医たちがすぐに戻ってくれれば彼らが皇帝の異変に気づくだろう。そうなった時に真っ先に疑いを掛けられるのは、その直前までベルトロワと二人っきりでいた皇后その人である。

そうなっては、まずい。ではどうすればいいか。答えは簡単である。皇帝が死んだ直後に侍従医たちが彼の遺体に近づかなければいい。そして、少なくとも死後数時間たってから皇帝が死んでいることに気づく。その時、特に外傷などがなければ自然と息を引き取ったと判断するだろう。

そのためには、どうすればよいか。

（さて、そろそろ参りましょうか……）

ハーブティを飲み干したティーカップを受け皿に戻し、皇后は立ち上がった。窓の外を見ればすでに日は沈み月が昇っている。良い頃合だろう。

目指す行き先は皇帝の寝室。皇后は努めていつもより優雅に歩を進めていく。

皇帝の寝室に入り、看病をしている侍従医たちを下がらせる。パタリ、と扉のしまる音がして、寝室は静寂に包まれた。ベルトロワが横たわるベッドの四隅を囲うように置かれた蝋燭が燃える音だけがしばし響く。

誰も見てはいない。皇后は足音を立てぬようゆっくりと、しかし毅然と頭を上げベッドに横たわるベルトロワに近づいていく。

「貴方が悪いのですよ？」

どこの馬の骨とも知れぬ下賤な女に子どもなど産ませるから。その子どもを呼び寄せなどするから。レヴィナスの代わりにその子どもを使おうとするから。

「どうせ、愛してもいなかったのでしょう？」

ならば放っておけばよかったのだ。いかに皇室の血筋であろうとも、ベルトロワが認知しなければ意味などない。そうすればすべて丸く収まったというのに。ベルトロワがここで死ぬこともなかった

のに。

「貴方の跡目は、レヴィナスが立派に継ぎますわぁ」

ベルトロワの頬を撫でながら、皇后は彼の耳元で囁く。その手を枕の一つに伸ばす。そして羽毛の詰まったその柔らかい枕を、皇后はベルトロワの顔に押し付けた。

手に力と体重を込める。

抵抗はない。それが現実感を薄くする。まるで人形を相手にしているようだ。

今自分はどんな顔をしている？

笑っている？

泣いている？

悲しんでいる？

悦んでいる？

静かなはずの室内に、自分の鼓動の音がやたらと大きく響く。

蝋燭の火に照らされた皇后の影が、壁に映っている。炎が揺れると、影も揺れた。その姿は人を襲う悪魔にも似ていた。

時間の感覚が麻痺している。どれ位たった？一瞬のような気もするし、一時間こうしているような気もする。皇帝はもう死んだのか？それともまだ生きているのか？

意を決し、腕から力を抜く。枕をどけて、ベルトロワの息と脈を確認する。

「……！」

思わず、歓声が漏れそうになる。胸の奥から湧き上がるものは何だ？罪悪感？まさか。これはまぎれもない歓喜だ。

「ああ……！ようやく、死んでくださりましたね……」

蕩けるような笑顔を浮かべ、皇后はベルトロワの遺体に頬擦りする。生きている間はもはやなにも感じない間柄だったが、死んでしまった今はこんなにも愛おしい。

目蓋が重くなってくる。緊張が解けたことでハーブティの効果が一気に現れたのかもしれない。

枕を元の位置に戻し、遺体が横たわるベッドにうつぶす。睡魔はすぐにやってきた。

「ああ、レヴィナス……」

愛しの息子が至高の冠を頭に載せるその瞬間を思い描き、皇后は眠りに落ちた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

皇后が目を覚ますと、寝室の明りは消され、ただ月明かりのみが部屋の中を照らしていた。体を起こすと、毛布が肩から滑り落ちた。誰かが気を利かせてくれたのだろう。

今は何時だろうか。夜半過ぎか、それとも未明近くか。いづれにしても、騒ぎが起きた様子はなかった。

（上手くいったようですね……）

侍従医たちは皇帝のそばで突っ伏して眠る皇后に気を使うばかりで、ベルトロワが死んでいることには気づかなかったようだ。

手を伸ばしてベルトロワの頬に触れる。彼の遺体はもう随分と冷たくなっていた。

――――死んでいる。

死んだ。死んだ。死んだのだ！皇帝は死んだ！

皇后の唇が魔性の笑みを作る。少しでも気を抜けば歓喜の声が漏れてしまいそうだ。いや、声を出すのはいい。だが今出すべき声は……。

静まり返った宮殿に、皇后の金切り声が響き渡った。

その夜、アルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークは崩御した。歴史書によれば、その死因は落馬事故の後遺症であるとされている。

第七話　夢を想えば？

アルジャーク帝国帝都ケーヒンスブルグの宮殿、その一室に三人の男が集まっている。宰相エルストハージ・メイスン、外務大臣ラシアート・シェルパ、軍務大臣ローデリッヒ・イラニールの三人である。

「さて、お二方。すでにご存知のことと思うが、つい先ほどベルトロワ皇帝陛下が崩御された」

年長のエルストハージがまず口を開いた。ラシアートとローデリッヒの二人は頷いてそれに答える。もともと意識不明の状態が長く続いていたせいか、ここにいる三人とも皇帝の崩御についてはかなり冷静に受け止めている。敬愛する主君の死を悲しんでいないわけではないが、彼らの思考はすでに次のことに移っている。

「時間が時間であるため、陛下の遺書の開封は日が昇ってから、そうだな、朝食を食べた後くらいになる予定だ」

「あの、遺書ですか……」

ラシアートが苦い顔をした。開封される遺書は、南方遠征が始まる少し前にベルトロワが書き直した、あの遺書だ。アルジャーク帝国でただ三人、ここにいる彼らだけがその内容を知っている。

「ご存知の通り、遺書は二通以上が同時に開封されなければ有効とはならぬ」

それはアルジャークの法に規定されている皇帝の遺書に関する取

り決めだ。そこには「遺書は同時に二通以上を開封し、その内容に差異がない場合のみ法的効力を持つ」とある。そのほかにも細かな規定が幾つもあり、それを満たしていない限り遺書は法的な効力を持たない。全ては遺書の偽造を防ぐためだ。

「明日、あ、いやもう今日か、今日開封する遺書は私と陛下が保管していたものを開けるとして、お二人はそれぞれが保管しておる遺書を持って、クロノワ殿下のところへ行ってもらいたい」

エルストハージのその言葉に、ラシアートとローデリッヒの二人は困惑よりは納得の表情を浮かべた。苦渋の、という修飾語が必要になるかもしれないが。

「やはり、皇后陛下はお認めにならぬのだろうか……」

呟くローデリッヒの声は苦い。

「さて。お認め下さるならばそれでよし。しかし、お認め下さらないのであれば……」

それに備えて、打てる手を打っておかなければならない。それが皇帝ベルトロワから遺書を託された者たちの務めというものだろう。

「分りました。では、夜が明けたらすぐにでも……」

「――――何を悠長な」

ラシアートの言葉を、エルストハージは鋭く遮った。その目は静かで穏やかだが、同時に硬い覚悟も秘めている。

「今この時にあって時間は何よりも貴重。夜が開ける前に、いや、準備が出来たのなら今すぐにでも出立するのだ」

可能な限り早く、とエルストハージは二人を急かした。その様子を見て二人は、はたと気がついた。

宰相エルストハージ・メイスンは死を覚悟している。

皇后が皇帝の遺書を受け入れなかった場合、遺書を開封しその正当性を主張する彼の存在は皇后にとって目障りな存在だろう。そうなれば皇后はエルストハージを殺して排除するはずだ。いや、エルストハージだけではない。別の遺書を保管しているラシアートとローデリッヒをも殺そうとするだろう。

そうなってしまえば皇帝ベルトロワ・アルジャークの意思は握りつぶされ、なかったことにされてしまう。そのような事態を避けるために、エルストハージは二人の大臣にクロノワの元に向かえと言っているのである。ケーヒンスブルグに残る自分が、最も危険な役回りであるにも関わらず、だ。

「分りました。必ずやクロノワ殿下に陛下の遺書をお渡しいたします」

「エルストハージ殿も、御武運を」

二人の大臣の言葉にエルストハージは満足そうに頷く。それにしてもローデリッヒが使った「武運」という言葉。これほどこの場にふさわしい言葉はないだろう。エルストハージのみならず、これから三人が赴く場所はやはり戦場なのだから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「主立った方々は、すべてお集まりいただけたようですな」

場所は謁見の間。日が随分と高くなった時分に、宰相は空の玉座の前に立ってそこに居並ぶ人々を一望した。今この場には帝都ケーヒンスブルグにいる、アルジャーク帝国の主立った人々が全て集まっている。

ここにいない主立った者といえば、レヴィナスとクロノワの両皇子、そして彼らを支える将軍である、アレクセイ・ガンドールとアールヴェルツェ・ハーストレイトだろうか。

クロノワとアールヴェルツェは南方遠征から急ぎ帰還している最中だろう。またレヴィナスも帰還が遅れており、それに合わせる形でアレクセイもこの場にいない。

実はアレクセイ将軍は皇后から通信が入ったときにはオムージュの旧王都ベルーカに居り、彼だけでも帰還してはどうか、という話があった。しかし本人が「レヴィナス殿下を差し置いて自分だけケーヒンスブルグに戻るわけにはいかない」といってレヴィナスを待つことに決めたのだ。この選択が、アルジャークの至宝アレクセイ・ガンドールの命運を決めたといっていい。

さらに二人、この場にいるべき人間がいないことに、人々はすぐに気が付いた。一人がその疑問を口に出す。

「外務大臣のラシアート殿と軍務大臣のローデリッヒ殿がおられないようだが……？」

「急用がありましたので、お二人にはそちらに当たってもらっています」

国の重鎮たる大臣が二人がかりで当たらねばならない急用とは一体何なのか、疑問に思った者もいたがそれを口に出す者はいなかっ

た。

「それではこれよりベルトロワ皇帝陛下の遺書を開封したします」

侍従長がベルトロワの執務室に保管されていた遺書を銀製のトレイにのせて運んでくる。エルストハージもまた、自身が保管していた遺書を懐から取り出す。

エルストハージは二つの遺書を観衆に掲げて見せ、その二通の遺書にいまだしっかりと封がなされており未開封であることを示した。

侍従長とエルストハージは遺書の封を破り、その中身を確かめ、二通の遺書に差異がないか確かめていく。その際、遺書の内容を知らなかった侍従長は、読んだ内容に驚いていたが、しかし声は出さなかった。

遺書の内容に差異がないことが確認されると、エルストハージはその遺書を声に出して読み上げた。そこには……。

――――そこには、クロノワを喪主に、と書かれていた。

この時代、家を継ぐものが当主の葬式において喪主を担当する、ということは以前にも述べた。つまりこれはベルトロワがクロノワを後継者として指名した、ということである。

「委細不備はございませぬ。よってこれが正式な陛下のご遺言となります」

エルストハージが厳かに宣言する。だれも予想していなかったその内容に、観衆は皆呆然とし声を上げることもできない。

「これは陰謀ですっ！！」
静寂を皇后の悲鳴が切り裂いた。

余談になるが、ここでレヴィナスではなくクロノワを後継者に指名したベルトロワの胸のうちを少し考えてみたい。

ベルトロワがクロノワを後継者に指名した理由は、ひとえに「レヴィナスに落ち度があったから」である。その落ち度とは、レヴィナスが「法を過去にさかのぼって適用する」という法治国家における“禁じ手”を使ったことだ。このときベルトロワはレヴィナスに決定的な減点をつけた。

彼はきっとこう思ったことだろう。
「オムージュ総督領だけならばともかく、アルジャーク帝国全体で同じ事をされれば、国が立ち行かなくなる。それに一度禁じ手を使ってしまえば、二度三度と使いたくなる」

ではなぜ、クロノワを喪主に指名する一方で、レヴィナスを皇太子位から廃さなかったのか。それはベルトロワ自身、自分がこんなに早く死ぬとは思っていなかったからだろう。自分が生きている間に、レヴィナスが皇帝としてふさわしい見識を持つことを願っていたのだ。

今回開封された遺書は、あくまでも現状ではレヴィナスよりはクロノワのほうが皇帝にふさわしい、ということであって将来的に事態が変化すればまた書き換えるつもりだったのだろう。
しかし事態が変わる前にベルトロワは死亡し、この遺書が開封されてしまったのだ。

皇后の悲鳴を皮切りに、謁見の間が喧騒に包まれる。皆がみな自分の意見を叫び、収拾のつかない混乱が生まれていく。そのなかで意見に最も力があったのは、やはりというか皇后であった。

「宰相が陛下の遺書を書き換えたのですっ！！」

皇后のその叫び声によって、謁見の間が再び静まり返る。誰もが、まさか、と思いつつ空の玉座の間に立つ宰相エルストハージ・メイスンを見つめた。彼が言葉を発するより速く、さらに皇后が叫び声を上げる。

「殺しなさい！！その大罪人を殺してしまいなさい！！」

皇后が呼ばわると、槍を持った兵士たちが謁見の間になだれ込んでくる。その槍の切っ先が自分に向けられる様子を、エルストハージは穏やかに見つめていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その通知をクロノワが知ったのは、彼がモントルム領の南の砦、ブレンス砦に到着したときのことだった。

曰く「宰相エルストハージ・メイスン、外務大臣ラシアート・シェルパおよび軍務大臣ローデリッヒ・イラニールの三人は共謀してベルトロワ皇帝陛下の遺書を書き換えた大罪人である。ラシアート及びローデリッヒの両名を見つけた場合は、即刻これを処刑せよ」

これを知ったとき、アールヴェルツェは「ばかな……」と呻くようにして声をもらした。受けた衝撃は、クロノワよりも彼のほうが大きかった。

この通知はクロノワとアールヴェルツェにとって二つの重要な知らせを持っていた。

まず第一にこの中では「遺書」という言葉が使われている。つまりこれは皇帝ベルトロワが崩御したことを意味していた。二人は「皇帝が意識不明の重体である」という知らせしか聞いていなかったため、このとき初めてベルトロワの崩御を知ったことになる。

次に「宰相と二人の大臣が皇帝の遺書を書き換えた」という内容である。この三人と面識が薄いクロノワはともかく、アールヴェルツェにとってこれはとても信じられない話であった。

「お三方とも真に国を想う忠臣。とてもそのようなことをするとは信じられませぬ」

眉間にしわを寄せアールヴェルツェはそう呟いた。

「なんにせよ、情報が少ないですね……」

クロノワは手を口元に沿え、考え込む。

通知の内容から皇帝が崩御したことは押して知ることが出来る。しかし、正式な皇帝崩御の布告はまだ出ていないという。そのことが帝都ケーヒンスブルグにおける混乱を思わせる。

さらに通知では「三人が共謀して」遺書を書き換えたはずなのに、即時処刑が命じられているのは二人の大臣だけである。つまり宰相エルストハージはすでに死んでいるか、捕まっている可能性が高い。

ではいつ、死んだ、もしくは捕まったのか。

（恐らくは遺書を開封したとき、でしょうね……）

開封された遺書が偽造されたものだったのか、あるいは本物だったのか、それはこの際置いておくとしても、遺書が開封されたこと自体はほぼ間違いない。その内容が明らかにならなければ、それが偽装されたかどうかなど分らないのだから。そしてこの状況から察するにその内容は、その場にいた誰かにとって都合の悪いものだったのだ。

（それは一体……？）

宰相と二人の大臣、ということはないだろう。偽造したにしろそうでないにしろ、彼らは開封される遺書の内容を知っていたはずだ。偽造したのであれば、自分たちに都合の悪い内容を残しておくとは思えない。偽造していないのであれば、彼らが追われているこの状況に説明が付かない。都合が悪いと知っている遺書を開封し、その後で逃げるってどんな状況だ。

遺書が偽造であると断定しても一定の信憑性があり、なおかつ宰相と二人の大臣を敵に回して追い立てることの出来る人物。

（皇后陛下か、レヴィナス兄上か……）

二人の大臣が大罪人として追われている理由が、本当に遺書を偽造したからなのか、それとも皇后かレヴィナス、あるいはその両者の不興を買ったがゆえなのか、それは現状では分らない。

（ですがこの二人の不興を買う内容というと……）

そこまで考えてクロノワは頭を振った。なんにせよ情報が少なす

ぎる。そもそも遺書が偽造であると判断した根拠さえも分らないのだ。推測だけを先に進めても仕方がないだろう。

「真っ直ぐケーヒンスブルグに向かうつもりでしたが、一度オルスクに寄りましょう」

旧王都オルクスにはモントルム領の総督府がある。このブレンス砦よりは詳細な情報が集まっていると期待できる。

「殿下……。殿下はこの通知が本当であると思われますか」

「さて。どちらにしても乱暴な通知だとは思います」

本当に遺書が三人によって偽造されたのか、それは現状では判断しかねる。しかし「見つけた場合は即刻処刑せよ」というのはなんとも乱暴である。真偽はともかくとしてもラシアートとローデリッヒの両名が、なにか大きな証言を持っていることは確かなのだ。それを即刻処刑せよというのは、何か後ろめたいことがあるのでは、と勘ぐりたくなる。

「そうですな……。普通ならば捕らえて話を聞きだすのが筋……」

クロノワの言葉にアールヴェルツェは頷く。彼も二人から話を聞きたいと思っているのだろう。

「ストラトス執務補佐官の意見も聞きたいですね」

そういってクロノワはアールヴェルツェを伴い、ブレンス砦の地下にある「共鳴の水鏡」がある部屋へ向かった。そこからオルスクの総督府に通信をつなぎ、ストラトスを呼び出してもらう。主席秘

書官であるフィリオもいてくれればよかったのだが、生憎と今はオルスクにいないらしい。

クロノワ、アールヴェルツェそしてストラトスの三人は、「共鳴の水鏡」を使った緊急の話し合いで、モントルム総督府としての方針を決めた。その方針とは、

「モントルム領内でラシアート及びローデリッヒの両名を発見した場合には、可能な限り捕縛すること」

というものであった。ストラトスも今回の通知には不自然なものを感じていたらしく、この方針は案外簡単に決まった。北のダーヴェス砦にはストラトスのほうから連絡してもらうことになり、クロノワとアールヴェルツェの方は急ぎオルスクに向かうということで今後の予定が決まった。

軍に指示を出しておくというアールヴェルツェと分かれ、クロノワは彼の背中を見送った。それにしても、とクロノワは思う。

（アールヴェルツェはショックを受けた様子でしたね……）

忠臣と信じていた三人が大罪人として追われていること、そして主君たる皇帝ベルトロワが崩御したこと。その両方が理由なのだろうが、一方でわが身を振り返ってみれば、彼ほどショックを受けたわけではない。

（覚悟していた。それだけではないのでしょうね……）

自分は薄情なのかもしれない。まして今回崩御したのは皇帝、つまり実の父である。子どもであれば、親の死目に会えなかったこと

をもっと悔やむべきではないだろうか。それなのにそういった感情がほとんど湧かないのだ。

（結局他人だった。そういうことでしょうか……？）

その結論を受け入れたくはない。しかし心のどこかで納得してしまっている。それに母が死んだときほど悲しくないのは確実なのだ。

そこまで考えてクロノワは頭を振った。これ以上はせん無きこと、と思ったのだろう。だが、他人事ではないはずなのにどこか傍観者の視点で物事を見ている自分を、否定することは出来なかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

クロノワ率いるアルジャーク軍がモントルム領の旧王都オルスクに到着したとき、自体はすでに動き、そして彼の出番を待っていた。動きがあったのはモントルム領の北の砦、ダーヴェス砦である。なんとこの砦に大罪人として追われている、ラシアートとローデリッヒが投降してきたのである。

「つまり二人は私に会わせて欲しい、と言っているわけですね」

「はい。その通りです」

ダーヴェス砦を預かっているウォルト・ガバリエリはクロノワの言葉に頷いた。二人が投降してきたときには、既に総督府のほうから「可能な限り捕縛せよ」という命令が出ていたので、ウォルトはそれに従い二人を殺すようなことはせずともかく二人を捕らえた。そして捕らえた以上、話を聞かねばならない。その席でラシアートとローデリッヒはこう言ったのだ。

「自分たちの処刑命令が出ていることは知っている。今更命を惜しむつもりはないが、その前にどうかクロノワ殿下にあわせて欲しい」

ウォルトとしてはこの時点で自分の手には余ると判断した。なにしろ外務大臣と軍務大臣だった二人が皇子であるクロノワに会わせて欲しいというのだ。十中八九遺書がらみのことだろう。

さらに二人を殺さずに捕らえるように命令を出したのはクロノワである。つまり彼自身、二人に用があるということだ。

「オルクスまで護送いたしましょうか」

「……いえ、私がそちらに向かいます」

少し考えてからクロノワはそういった。ウォルトは一瞬怪訝そうな顔をしたが、なにも言わずに頷いた。

クロノワが二人に会う場所としてオルクスではなくダーヴェス砦を選んだのは、二人の話の内容如何では軍を動かすことになると考えたからだ。事態の中心は帝都ケーヒンスブルグだろうから、わざわざ護送してもらうよりもクロノワが動いたほうが時間的なロスが少なくてすむ。

「さて、そういうことになりました。あとの万事は貴方にお任せします」

少々意地悪な笑みを浮かべてクロノワはストラトスにそういった。やる気を見せたがらずすぐに仕事をサボるこの男だが、事態が事態だ。ブツブツと文句を言いながらも仕事はこなしてくれるだろう。普段給料分の仕事をしないこの男に大量の仕事を割り当ててやれるのは、少しばかりいい気分だ。

「残業手当その他諸々、後で請求しますので」

ストラトスはぬけぬけとそう言った。自分にそれらの手当てを払うまでは死ぬなということで、彼らしいなんとも皮肉れた激励である。

軍を率いてダーヴェス砦へ向けて街道をひた走る。おもえばこの街道はここ最近で何度も往復しているような気がする。

「モントルム遠征のときのことを思い出しますな」

「あの時は騎兵だけでしたけどね」

騎兵のみを率いてダーヴェス砦へと向かうモントルム軍を奇襲した記憶は、今も鮮明だ。だが一方で遠い昔のことのように感じる部分もある。

(色々あった。そういうことですね)

そしてこれから、そのなかでも最大級のモノが待ち受けているのだ。

ダーヴェス砦に着いたクロノワは、アールヴェルツェをはじめとする主だったものを集め、すぐにラシアートとローデリッヒの二人と面会した。二人の服は汚れていたが、やせた様子もなく健康そうであった。

「私との面会を希望したようですが、どういったご用件でしょうか」

クロノワがそう切り出すと、二人は懐からそれぞれ一通ずつ封筒を取り出した。言うまでもなく、皇帝ベルトロワの遺書である。後

で聞いた話だが、ウォルトは二人を牢に入れるときにその持ち物を没収していたのだが、この遺書だけは自分の手に余ると判断し取り上げずにおいたらしい。

「我々がお預かりしたベルトロワ陛下の遺書を、ここで開封させていただきたい」

クロノワは視線だけで先を促す。開封された遺書には、エルストハージが謁見の間で開封した遺書と同じように、クロノワを喪主に、と書かれていた。

「委細不備はございませぬ。これがベルトロワ陛下の最後の勅命となります」

場が、一気に緊張する。ただその中で、クロノワは比較的自然体であった。

「お二人は陛下の遺書を書き換えた大罪人とされています。そのあなた方が開けた遺書を信じろと？」

クロノワはラシアートとローデリッヒの二人に試すような目を向ける。だがアールヴェルツェが、二人が答える前に口を開いた。

「失礼。遺書を拝見させていただいてもよろしいですか」

クロノワが頷くと、アールヴェルツェは二通の遺書を手にとって目を走らせていく。ただ読んでいるような感じではなかった。

「これは間違いなく陛下の御筆跡です」

アールヴェルツェは確信をこめて断言する。

これで遺書が本物である可能性が一気に跳ね上がった。遺書にはサインと印が揃っていなければならない。大臣といえども二人が、ベルトロワが生きている間にその印を使えたとは思えない。そしてベルトロワが自分の意思に反する遺書にサインをして印を押すことなどありえない。だからといってベルトロワが死んでから遺書を偽造したとすると、今度は筆跡が違っているはずである。

筆跡と印。この二つが揃っているのは、本物だけである。

「殿下、いえ、陛下。これは天命ですぞ」

アールヴェルツェは早くも「陛下」という敬称を使って、いまだに煮え切らない顔をしているクロノワに詰め寄った。

「ベルトロワ陛下重体の報をカレナリアで受け取れたこと。ラシアート殿とローデリッヒ殿のお二方とここで相見えられたこと。そして今この瞬間に陛下が十五万以上の軍勢を率いておられるとこ。全ては陛下が帝位に付くべしという天命にございます！」

他の面々からも賛同の声が上がる。モントルム遠征、そして今回の南方遠征でクロノワの手腕を見てきた彼らにとって、クロノワはもはや日陰の第二皇子ではない。十分に魅力があり、そして命を懸けても惜しくないと思える主君になっているのだ。

そしてクロノワを後継者に指名する皇帝の遺書である。これまで共に戦ってきたアールヴェルツェたちが、皇帝の座にクロノワを望むのは自然な成り行きであろう。

「……皇太子は兄上です。兄上が皇帝になるべきでは……？」

「皇帝陛下の法的効力を持ったご遺言は、勅命とみなされます。よっていかにレヴィナス殿下が皇太子であろうとも、陛下のご遺言が優先されます」

ラシアートが整然と説明する。

クロノワは目を閉じる。まさか皇帝の座が転がり込んでくるとは。レヴィナスが皇帝となり放逐されれば、晴れて全てを放り出しイストと旅でも出来るかと思っていたのに。

しかし、日陰者の自分にここまで付いて来てくれた人々を裏切ることなど出来ない。彼らが自分に夢を見ているのなら、それをかなえる義務が自分にはあるのだろう。

「……分りました。成ってみましょう。……皇帝、とやらに」

その場にいた一同が、一世に膝をつき頭をたれる。その様子をクロノワは苦笑しながら見ていた。

（これは本当に「世界を小さくする」しか、イストに合わせる顔がなくなってきましたね……）

恐らくそれしか、あの約束を破った償いにはならないだろうから。

第七話　夢を想えば？

――――帝位。

クロノワがその至高の位を夢見たことが一度もない、といえばそれは嘘になるだろう。

帝都ケーヒンスブルグの宮殿に来たばかりの、まだ味方のいない迫害と陰湿なイジメに満ちた日々にあっては、その玉座を夢見ることが多々あった。

「皇帝の力があれば、こんな苦しい思いをしなくていいのに」

というわけである。

とはいえそれはお伽噺の中の理想郷を想うような感覚で、現実の、生々しい欲望からは程遠いものであった。

それにレヴィナスが皇帝となれば、クロノワは完全な邪魔者である。粛清される前に死んだことにでもして、地位と責任を放り出し子どものころに夢見たようにこの世界を旅して回ろうかと、そんなことを考えていた。出来ることならば友人であるイストと共に。あの日、海から昇る朝日を見ながらかわした約束は、クロノワにとって皇帝の座よりも魅力的なものだったのだ。

それなのに、何の因果か帝位などというものが転がり込んできた。

（まったく、悪い冗談です）

そう思わずにはいられない。まったく、望んでもいない人間のと

ころに転がり込んでこなくてもいいだろうに。おかげで起きなくていい厄介ごとが起きてしまった。きっと運命の女神というヤツは娯楽に餓えた暇人に違いない。

そんな、権力というものに執着しそれを欲してやまない連中が聞いたら呪い殺されそうな台詞は心の中にだけ留めておいて、表面上クロノワは淡々とした装いを崩さなかった。それはどうやら傍からみると「王者の風格」とやらに映るらしく、渋っていたクロノワが帝位を受け入れたと、アールヴェルツェや二人の大臣をはじめとする周りの人々は喜んでいた。

クロノワ自身は皇帝の座など望んではいない。少なくとも積極的には。しかし、事がここに至れば彼が立ち止まっていても事態は動いていく。ならば少しでも自分に有利なように事態を動かすためには、能動的に、自分から動くしかない。事はクロノワ一人の問題ではない。彼と共にいて支えてくれる、十五万人以上の命が関わっている。

クロノワの打った手は常識的なものであった。というよりそれしか打つ手がないと言える。つまり帝都ケーヒンスブルグを目指して軍を進める、ということである。

「なにも起こらずにケーヒンスブルグまで行けると思いますか？」

「……なにも起こらなかったとすれば、皇后はケーヒンスブルグにはいないでしょう。ですが……」

少し考えてからローデリッヒはそう答えた。余談になるが、クロノワと共にいる人々は、もはや皇后に「陛下」という敬称を付けることを止めていた。

皇后が帝都から動かなければ、向かってくるクロノワの軍に対してなんらかのリアクションをとるであろう。軍を差し向け進軍を阻むか、それとも使者を送りつけてくるか。

一方で皇后がケーヒンスブルグを離れているのであれば、なんの置き土産をも残していかないというのは考えにくい。最悪の場合、宮殿や帝都の町並みに火をかけるぐらいのことはするかもしれない。

つまり、なにも無い、ということはおよそ考えられない。必ず何かが起こる。その心構えでいなければならない、とローデリッヒは説いた。

さて、帝都ケーヒンスブルグへ向けて軍を動かす一方、クロノワはラシアートに人馬三千の兵を護衛として与えて、アルジャーク帝国の有力者たちの説得に回ってもらった。その内容は、味方をしてくれ、というものではなく、敵対しないでくれ、というもので、これによって多くの者が様子見にまわるだろう、というのがラシアートをはじめとする頭脳労働班の見解であった。

クロノワが馬にまたがる。目指すは帝都ケーヒンスブルグ。そして皇帝の玉座である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

皇帝ベルトロワの遺体は、火葬にされた。

この時代、エルヴィヨン大陸の一般的な埋葬方法は土葬である。かといって火葬が野蛮視されているわけでもない。この時代、なんらかの理由で土葬が行えない場合には、火葬という手段が用いられた。

遺体というものは、当然のことながら腐敗する。大貴族や王族、皇帝といった人々も、死して死体となればその運命を逃れることは出来ない。長らく放置して腐敗が進めば、死者にとっても生者にとっても面白くはあるまい。埋葬は可能な限り速やかに、というのが一般常識であった。

しかし此度埋葬される遺体は、ただの遺体ではない。アルジャーク帝国皇帝ベルトロワ・アルジャークの遺体である。略式であっても葬儀を行うとすれば喪主が必要になり、レヴィナス以外の者が喪主になるなど皇后には考えられないことであった。

皇后が望む喪主、つまり次期皇帝はいうまでもなく自分の息子、レヴィナスである。しかし彼は今、オムージュ領のベルーカにいた。これは彼の帰還が遅れたから、ではなく皇后の指示であった。

クロノワを喪主に指名するベルトロワの遺書が開封され、未開封の遺書を保管していると思われる二人の大臣の行方が分らないことが判明したとき、皇后はすぐさま戦火を予感した。しかも間の悪いことに、クロノワの下には南方遠征軍が丸々残っている。カレナリアに一兵も残さずに帰還することはないだろうが、それでも十万～十五万程度の軍勢が彼の配下にはいるだろう。

これに対抗するためには、こちらも兵を集めなければならない。おりしも都合よく、レヴィナスからベルーカに到着したという連絡が「共鳴の水鏡」を通して入った。皇后は事情を説明し（といっても自分に都合のいいように歪めてだが）、レヴィナスに兵を集めさせることにしたのである。ベルーカにはアルジャークの至宝アレクセイ・ガンドールもおり、彼に任せれば戦力はまず心配ないだろう。

ところで葬儀と喪主の件である。

レヴィナスは兵を集めているため、帝都ケーヒンスブルグに帰還するまでにはかなりの時間がかかるだろう。かといってそれまで葬儀を先送りにしては、ベルトロワの遺体はひどく腐敗し悪臭を放つようになってしまう。皇后としてもそれは遠慮したかった。

そこで火葬、である。

火葬すれば後に骨が残る。それを骨壷に収めて保管しておき、後で散骨なり納骨なりすればよい。そしてそれを行う者こそが後継者であると主張するのだ。

実際、こういった「裏技」は歴史上何度も行われてきた。

ベルトロワの遺骨が納められた骨壷を、皇后は両手で大事そうに抱える。遺書が当てにならなかった以上、もはやこれだけがレヴィナスを皇帝にする、その正当性を主張する術に思われた。

さて、レヴィナスが早く軍を率いて帝都に帰還しないかと気を揉む一方で、皇后はクロノワのこともまた気にしなければならなかった。彼の動向を知らせる「共鳴の水鏡」を用いた通信は、ここのところぱったりと止んでいる。それはつまり、クロノワが二人の大臣と合流し皇帝の遺書を見たのだと皇后に予感させた。

この時点で皇后はクロノワのことを「潜在的な敵」から「レヴィナスの帝位を狙う簒奪者」という認識に改め、その危険度を大幅に引き上げた。

（もっと早く処断しておくべきでしたね……）

一抹の後悔が皇后の胸をよぎる。とはいえ帝都ケーヒンスブルグで事態が進行している間中、クロノワは遠くカレナリアにいたのだ。

策謀を巡らしその命を狙うには、いささか距離がありすぎたし、また準備不足であった。

クロノワが今どこにいるか、その正確な位置は分らない。しかし目指す場所は、はっきりとしている。すなわち、ここ帝都ケーヒンスブルグである。

（レヴィナスは間に合うでしょうか……）

皇后は軍事に関してはまったくの素人である。十万規模の兵を集め、それを率いてベルーカからケーヒンスブルグに来るまで、どれだけの時間がかかるか皆目見当もつかない。そこで確実な安全策として、皇后が帝都を離れベルーカのレヴィナスのもとに身を寄せる、という案が出た。さらにそこで皇帝の遺骨を散骨なり納骨なりして、レヴィナスを正統な皇帝にしてしまおうというわけだ。

しかし、この案には皇后が拒否反応を示した。

ケーヒンスブルグはアルジャーク帝国の帝都、つまりはその政治的中心である。それに対しベルーカは旧王都であり総督府が置かれているとは、いえもはや帝国の一都市に過ぎない。

「それはつまり都落ちではありませんか！」

正統な皇帝であるならば、その戴冠式は帝都ケーヒンスブルグで行うべきである。クロノワを恐れるようにして帝都を離れ、辺境の一都市、しかもつい最近まで他国の王都でしかなかったベルーカでアルジャーク帝国皇帝の戴冠式をおこなうなど、レヴィナスにはふさわしくない。あの子の栄光ある統治の最初に、そのような汚点を付けるわけにはいかないのだ。

それは感情に流された言い分でしかなかったが、それゆえにその想いは頑強で、理論的な言い分では太刀打ちできなかった。

しかし事態は皇后を帝都ケーヒンスブルグから追い立てる。クロノワ率いる約十五万の軍勢が帝都に近づいて来たのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

やはり、というか帝都ケーヒンスブルグにいたる街道上で事態は進行した。

「一軍が街道上に柵を築き、行く手を阻んでおります」

偵察から戻ってきた斥候はそうクロノワに報告した。さらに聞けばその一軍の規模は五千程度らしい。

「罠がある、と思いますか」

「いえ、単純に兵の数を揃えられなかっただけだと思われます」

アールヴェルツェはそう断じた。

アルジャーク軍の精鋭のうち二十万近くは南方遠征によってクロノワの配下に組み込まれている。アルジャーク軍の全戦力（オムージュやモントルムの兵は除く）は四十万とも五十万とも言われるが、その半分近くがクロノワの隷下にいるのだ。

さらに皇后側が兵を集め始めたのは、早くとも遺書が開封された後である。兵士の数がもともと少ないことも一因だろうが、時間的な余裕もなかったと思われる。

そうした状況を総合的に判断し、アールヴェルツェは「兵を集め

切れなかった」と判断を下したのだ。

「しかしそうなると、戦力差が絶望的であることは皇后も理解しているはず」

なぜ使者をよこすなり交渉の動きを見せなかったのか、と幕僚の一人レイシェル・クルーディはいぶかしんだ。五千対十五万では勝負にならないことくらい、いくら軍事に疎い皇后でも解るだろうに。

「私相手に、下手に出たくなかったのでしょうね」

自嘲気味にクロノワはそういった。皇后が彼への迫害とイジメの急先鋒であったことは、周知の事実である。そんな馬鹿な、と思う一方で、確かにそれならば、と納得してしまう部分もあった。

「この際、皇后の心理状態を慮る必要はないでしょう」

軍務大臣ローデリッヒ・イラニールはそういって脱線した話題を元に戻した。

かりにこの先皇后の側から接触があったとしても、レヴィナスを皇帝にと望む彼女らと我々が歩み寄って妥協点を探すことは不可能である。ならば全軍を持って街道を封鎖している部隊を突破し、勢いそのままに帝都を掌握すべし、とローデリッヒは主張した。他に案が出ないところをみると、皆同じようなことを考えていたようだ。

最後に、クロノワが判断を下す。

「全軍に出撃命令を。目標は帝都ケーヒンスブルグ」

その言葉を合図に、一同は立ち上がり敬礼をしてからそれぞれの

部署に散っていく。街道を封鎖している部隊に対し、クロノワの軍が攻撃を仕掛けたのは、そのおよそ一時間後であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それは戦闘などというものではなかった。柵を築き街道を封鎖していたおよそ五千の部隊は戦う前から及び腰で、クロノワの軍と接触するとほぼ同時に壊走を開始した。

なにしろ彼我の戦力差はおよそ三十倍である。よく逃げずに決戦のその場にいたと、むしろ褒めるべきであろう。

壊走する敵部隊を、クロノワは追わなかった。今は敵味方に分かれているとはいえ、彼らも同じアルジャークの民である。無駄な血を流さずにこの内戦を終えられるのなら、それが一番だろう。

（そういえば、これは内戦でしたね……）

今更のように、クロノワはその事実を確認した。例えばオルドナスのような教師から彼は歴史を習ってきたが、内戦というのは総じて愚かしい理由が多い、というのがクロノワの感想であった。その内戦を今自分が演じることになるとは。

（これは早急に終わらせなければいけませんね……！）

クロノワは決意を新たにし、軍を率い帝都ケーヒンスブルグへと駆け上った。その彼の視界に、やがて不吉なものが見え始めた。

「煙……！！」

遠目に見えてきた帝都から、煙が上がっている。まさか、とクロノワは思いつつ馬に軽く鞭をいれ速度を上げる。彼の周りにいる騎兵がそれに続いた。

ケーヒンスブルグに近づいてみると、黒煙を巻き上げて燃え上がっているのは宮殿であった。まだ市街地への延焼は始まっていないらしく、それだけは不幸中の幸いといえるだろう。クロノワはすこしだけ胸をなで下ろした。

しかし、すぐに怒りがこみ上げてくる。

恐らく、ではなく十中八九、宮殿に火をかけたのは皇后であろう。帝都ケーヒンスブルグからレヴィナスのいるベルーカへ逃れるための時間稼ぎか、それとも戦略的意味をこめた嫌がらせなのか。

大局的に物事を見ればそれらしい理由は幾つも思いつくが、しかしクロノワはいい様のない個人的な悪意を感じていた。宮殿に来たばかりの、まだ味方がいなかったあの頃、常日頃感じていたあの悪意だ。

まるで、

「お前にはなにも渡さぬ」

と皇后に言われているようである。

（そこまで……、そこまで私と母が憎いか……！）

ギリ、とクロノワの奥歯が軋んだ。

「イトラ・ヨクテエル！」

少し間が開いてしまった軍勢が追いついてくる。それを振り返ることもせず音だけで感知したクロノワは、一人の武将を呼んだ。

「ここに」

名前を呼ばれた若い武将は、馬を下りてクロノワの前まで進み出、膝をついて頭をたれた。

「隷下の部隊を率いて皇后を追いなさい。ただしリガ砦を越えることはしないように」

クロノワはそうイトラに命じた。市街地への延焼がまだ始まっていないところをみると、火の手が上がったのはついさっきであろう。であればその下手人はまだこの近くにいるはずである。しかし、その下手人が皇后本人であるとは限らない。彼女本人は何日も前に帝都を脱出しているかも知れず、そうなれば見つけ出すには時間がかかるだろう。

ただクロノワは直感的に皇后がまだこの近くにいると感じていた。嫌いな相手の事ほど、良く分るものである。

「御意！」

イトラは短く返事をすると、すぐさま行動を開始した。その背中を見送ったクロノワは、次の武将の名前を呼ぶ。

「レイシェル・クルーディ！」

「御前におります」

すでに馬から下り控えていた彼は、一歩前に出て頭をたれた。

「貴方は住民の避難誘導を」

「御意」

レイシェルもイトラと同じく短く答えるとすぐに行動を開始する。無駄な時間を浪費している暇はないと心得ているのだ。さらにクロノワは矢継ぎ早に指示を出していく。

「アールヴェルツェは残りの兵を率いて火を消してください。市街地への延焼はなんとしても阻止するように。後方部隊は怪我人の手当てを。ローデリッヒ殿は全体の監督をお願いします」

皆、短く返事をするとすぐに散っていく。アールヴェルツェは軍を率いて帝都へ、宮殿へと急ぎ、ローデリッヒは本部とするべき陣を作らせる。周りが忙しく動き回る中で、クロノワは燃え盛る炎と巻き上がる黒煙を睨みつけていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局宮殿は全て焼け落ち、今は石で造られていた部分だけがススにまみれて残っている。ただクロノワが最も警戒していた市街地への延焼はなんとかまぬがれた。一部取り崩した建物もあるようだが、それは必要な犠牲だったのだろう。

火の手が上がる宮殿から持ち出せた物品や資料は、全体から見ればごく僅かであった。アールヴェルツェにしても優先するように言われていたのは延焼の阻止と消火活動であったし、また燃え盛る炎の中に部下を送り込んでまでなにかを回収するようなことはしたくなかったようだ。

日はすでに傾き、東の空はすでに暗くなり始めている。クロノワは今本部として用意された陣のなかで、ローデリッヒと共に上がっ

てくる様々な報告を聞いていた。とはいえ具体的な指示はほとんどローデリッヒが出しているため、クロノワは本当に聞いているだけである。

「陛下がそこに泰然と座っておられるだけで、兵士たちは安心いたします」

そういわれては仕方がない。どうやらローデリッヒの新しい皇帝への教育はすでに始まっているらしい。何もしないでいることに罪悪感を覚えながらも、クロノワはそこにいつづけた。

「だいぶ落ち着いたようですね」

報告に来る兵士が途切れた頃を見計らって、クロノワはローデリッヒに声をかけた。見ればレイシェルが非難させてきた帝都の住民たちも少しずつ帰宅を開始している。山場は過ぎたと見ていいだろう。

「しかしこれからが大変ですぞ」

焼け落ちた宮殿は皇帝の生活空間であると同時に、アルジャーク帝国における政治の中心であったのだ。そこに保管されていた多くの資料が、今回灰になってしまった。水面下の政治的混乱は、この先かなり長く続くと覚悟したほうがいいだろう。

「遷都を考えたほうがいいかもしれませんね……」

この先もケーヒンスブルグを帝都としてつかうためには、兎にも角にも宮殿を修復しなければいけないだろし、他から最低限必要な資料を取り寄せなければならない。しかしそれには膨大な費用と時

間がかかる。また近年行われた遠征によって膨れ上がった国土の中では、地理的に見てもケーヒンスブルグは条件がいいとは言いがたい。この機会に遷都を行うのは、いい考えかもしれない。

「報告します！イトラ・ヨクテエル将軍が皇后を捕縛し、帰還いたしました！」

火事とそれにともなう混乱が一段落し弛緩しはじめていたその場の空気が、その報告で一気に緊張した。ローデリッヒが視線をクロノワに向ける。その意味するところは明らかだ。クロノワは無言で頷き、了承を伝えた。

「皇后をここへ」

ローデリッヒが重々しく命じると、二人の兵士に拘束された皇后がクロノワの前に引き出されてきた。

「放しなさい、無礼者！わらわを誰だと思っているのですっ！？」

皇后は身をよじり拘束を解こうとしているが、屈強な兵士に両脇から固められては、自由を取り戻すことは出来そうにない。

喚いていた皇后の目が、クロノワを捕らえる。その瞬間、彼女は動きをピタリと止め、口の両端を吊り上げて壮絶な笑みを浮かべた。拘束された、身動きも満足に出来ない状態にもかかわらずその笑みは間違いなく捕食者のそれで、見るものの背中に冷や汗を感じさせる。

「どこの馬の骨とも知れぬ、下賤な女の子どもが、分不相応な場所にいるものですね。やはり宮殿を焼いたのは正解でした。お前のよ

うな下劣な男が座っては至高の玉座が汚れるというもの。お前が座った椅子にレヴィナスも座るなど、考えただけでもゾッとするというものです」

興奮してきたのか皇后はさらに舌を回転させる速度を上げ、侮辱と軽蔑の言葉を吐き出し続ける。その言葉はだんだんと支離滅裂になっていき、それにともない皇后の目は血走っていく。

皇后の吐く言葉がもはや意味をなさなくなると、ローデリッヒはこれ以上は時間の無駄だと判断したようだ。やはり無言のままクロノワに視線を向け許可を求める。クロノワが頷くと、ローデリッヒは皇后を連れて行くように命令を出した。

「放しなさいっ！！」

ほんの一瞬、ほんの一瞬だけ皇后を拘束している兵士の力が緩んだ。その一瞬をついて皇后はついに拘束を逃れた。そして彼女は……。

「アァアアァアアァアァ！！」

髪の毛をまとめていた簪（かんざし）を抜き右逆手に握り振り上げると、それを突き立てんとクロノワに突進した。誰もが虚をつかれて立ち尽くし、反応が遅れた。

しかしそのなかでクロノワは動いた。彼は腰に吊るした剣の柄に手をかけながら、突進してくる皇后に対しむしろ距離を詰めるように前にでた。

――――一閃。

鞘から抜き放たれた剣は、皇后の体に斜めに走る赤い線を残した。皇后は「え？」と呆けたような声をもらし、次に赤い雫を口から流した。皇后の動きが止まる。そこへ……。

「・・、・・・！」

何ごとかを小さく呟き、クロノワは剣をもう一振りして皇后に止めをさした。

ドサリ、と音を立てて皇后の体が仰向けに倒れ、その周囲に血溜りが出来始める。その様子をクロノワは肩で息をしながら見ていた。

――――はじめて、人を殺した。

高揚や達成感を覚えることはない。しかしその一方で不思議と罪悪感もなかった。人が死ぬところだけなら何度も見てきたが、それが原因かもしれない。人を一人この手で殺したというのに、頭の中は妙に白けていた。

ただ斬ったときのあの感触は気持ちが悪かった。そしてなにより、皇后を斬ったときに自分がどんな顔をしていたのか、それが怖かった。

「陛下……」

ローデリッヒが声をかけてくる。その時ようやく、クロノワは白くなるほど剣の柄を強く握り締めていた手から力を抜き、軽くふるって血を飛ばしてから鞘に戻した。

目を閉じ、息を整える。次に目を開けたときには、表面上は平静

に戻っていた。

「皇后の遺体は丁重に葬るように」

クロノワのその指示にローデリッヒは少し眉をひそめたがすぐに頷いた。あるいはクロノワの自己満足だと思ったのかも知れないが、死体の処したかなど誰が損をするわけでもない些細な問題であろう。

「少し疲れました。後は任せても大丈夫ですね？」

「はっ、お任せください」

ローデリッヒに合わせて周りの兵士たちも敬礼をする。彼らに一つ頷いてからクロノワは自分の天幕の中に入った。

天幕の中の簡易寝台を背もたれにして座り込む。掲げて見た手には、皇后を斬ったときのあの感触が残って消えない。

「……やったよ、母さん。母さんの汚名を雪いだんだ……」

そう呟いてみても、高揚も感動も、何も生まれはしなかった。

第七話　夢を想えば？（前書き）

今回は教会の、というより神子のお話です。

第七話　夢を想えば？

教会の本拠地たる神殿がアナトテ山にあるという話は以前にした。ではそのアナトテ山がどこにあるのかといえば、神聖四国の国境線のちょうど中心、つまりこの四カ国の中心にこの山は位置していた。

神聖四国は大陸のほぼ中央に位置している。つまり神聖四国の中心にあるアナトテ山は、このエルヴィヨン大陸のほぼ真ん中に位置しているのだ。このような地理的な条件が、今現在教会を蝕む傲慢で硬直した思想の一因になっているのかもしれない。

それはともかくとして。この神殿に教会の核心とも言うべき人物がいる。教会を支える信仰の根拠にして現世に残された奇跡の体現者。

――――神子、マリア・クラインその人である。

「マリア様、これよりララ・ルーは視察巡礼に赴きます」

栗色の髪の毛をした少女がマリアの前で頭をたれる。年の頃は十五、六だろうか。童顔のせいで幼く見えるので、本当はもう少し上かもしれない。彼女の名前はララ・ルー・クライン。神子マリア・クラインの養女にしてその後継者である。

余談であるが彼女の名前「ララ・ルー」の「ルー」はミドルネームではない。「ララ・ルー」でファーストネームだ。彼女は生後間もない頃、孤児院の前に捨てられていた。名前などを教えるものは何もなく、孤児院の子どもたちが名前を考えたのだが、その時に最後まで残った候補が「ララ」と「ルー」であった。双方引くに引か

ず、それなら両方くっつけちゃえ、と子どもならでは強引さで彼女の名前は決定したのである。とはいえララ・ルー本人は自分の名前を大切にしていた。

「わたしのことを本当に想って付けてくれた名前です」

閑話休題。話を戻そう。

彼女がこれから出かける「視察巡礼」とは、簡単に言ってしまえば神子の代わりとして町々を視察することである。

神子は大陸中の教会信者の信仰を一身に集める存在だ。それゆえ教会の光輝を高めるには、神子という存在を前面に押し出すのがもっとも効果的である。しかし神子は神殿から離れられない。いや、アナトテ山の麓にある、千年前神界に引き上げれらたパックスの街の代わりに造られた神殿の御前街程度ならば足を伸ばせるのだが、それ以上神殿から、いや御霊送りの祭壇から離れることは出来ないのだ。

そのため、神子の名代としてその弟子や後継者が町々を巡り、信者をつなぎとめたり増やしたりするのだ。以前は神聖四国を越えてかなり遠くまで赴いていたのだが、ここ十年ほどは血生臭い話題も多くなり、視察巡礼は神聖四国内に限定されている。

今回ララ・ルー・クラインが視察巡礼に赴くのは、神聖四国の西の端、サンタ・ローゼンとサンタ・パルタニアの辺境付近である。もっともこの辺りを巡って帰ってくるということなので、神聖四国の西部を巡ると考えたほうが正しいだろう。

「体に気をつけるのですよ」

これまで精一杯の愛情を注いできた愛娘に、マリアは優しい眼差しを向けた。このようないわば公的な場では、ララ・ルーはマリアの養女として振舞うことはなく、その後継者として弟子のような立場をとる。だがプライベートでは少々おっちょこちょいで甘えたがりな娘だ。

ララ・ルーはもう一度挨拶をしてから、神子の部屋を辞した。マリアはそれを相変わらずの優しい眼差しで見送る。しかし、そこにいい様のない罪悪感が混じっていることに、一体誰が気づいたであろうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

当代の神子マリア・クラインは先代神子ヨハネスの弟子でありまた恋人であった。教会には神子の婚姻に関する明確な基準はない。しかしこれまでの風潮ゆえか、神子の婚姻はタブー視されている。だがその反面、処女性や童貞性を求められているわけではない。そのため恋人を作ることに関してはおおらかで、そのこと自体が何か問題になることはほとんどない。人物が問題になることはあるが。

先代神子とマリアの関係は事実婚であったと考えればよい。当然のことの成り行きとして、やがてマリアは懐妊する。しかしその時期が悪かった。

この時期、神子と枢密院は対立していた。

以前説明したように、枢密院の位置づけは神子の補弼機関である。ゆえに本来の力関係から言えば、枢密院は神子に逆らえるわけがない。だがしかし教会の長い歴史の中で、枢密院はすでに最高意思決定機関としての事実上の立場を確立しており、神子はその決定に承

認を出すだけの存在と成り果てていた。

枢密院が良識的でその決定が信者たちや大陸の人々にとって益となるものであれば、神子も傀儡の立場を受け入れられたであろう。しかし枢密院が追求したのは富を集めることであり、そのため教会は腐敗しきっていたと言っていい。

その状況を良しとせず、改革を志したのがマリアの恋人である先代の神子ヨハネスだ。彼は教会の宗旨である清貧に立ち返るよう説いた。さらに枢密院の決定に承認を出さないことさえあった。その結果、枢密院と神子の関係は加速度的に悪化していった。

マリアの懐妊が発覚したのは、そんな時期であった。

もはや建前の上だけとはいえ、枢密院にとって神子は目上の存在である。加えて神子の首はそう簡単にすげ替えることは出来ない。次の神子を指名できるのは神子だけであり、しかもその継承は神界の門をくぐった先で行われるのだ。神界の門をくぐりそして戻ってきたという事実のみが、神子を神子たらしめる最大の要因なのだ。枢密院が自分たちに都合のいい神子を用意したとしても、信者たちがそれを認めることはないだろう。

つまり、神子がどれだけ目障りであろうとも、枢密院としてはこれを排除するわけにはいかないのだ。口惜しいことに監禁や軟禁もできない。建前上枢密院は神子の補弼機関でしかなく、その承認がなければ何を言ったところでそれが教会の意思となることはない。それに神子こそが信者の信仰の対象なのだ。これを表に出さなければ教会はもはや立ち行かないだろう。

枢密院は神子に手出しできない。しかし、ヨハネスの弟子であり

恋人であるマリアはそうではない。しかもその腹には神子の子どもがいるのだ。人質としてこれ以上の存在はいないだろう。

無論、そんなことはヨハネスも承知していた。ゆえに彼はマリアを秘密裏に神殿から脱出させ、サンタ・ローゼンの辺境にある、信頼できる人物が管理していた町の教会に隠したのだ。

この時、マリアは恋人から別れを告げられていた。

「権謀術策が渦巻くこの場のことは忘れ、どうか子どもと幸せになってほしい。それが私の幸せだ」

それが恋人の嘘偽りのない本心であることはマリアにも分っていた。しかしただ一人で孤軍奮闘する恋人を忘れることなど、彼女にはできなかったのだ。それにいつまでもこの町の教会に隠れ続けていられるわけではないだろう。いずれは枢密院に見つかる。そうなれば母子共々捕まって神子への人質とされてしまう。

戻ろう、とマリアは決めた。身重でさえなければできる事はそれなりにある。かりに人質になったとしても、身の処し方などいくらでもある。ならば戻ってヨハネスをそばで支えたいと、マリアはおもったのだ。

生まれた子どもは女の子であった。オリヴィア、と名づけたその子が乳離れするとすぐ、マリアはオリヴィアをサンタ・ローゼンの辺境にある孤児院に預けた。誰にも見つからぬよう、まだ朝の薄暗いうちに古い寺院を利用した孤児院の門のところに子どもを置いたのだ。娘の名前を書いた紙と、恋人であるヨハネスとお揃いの蝶をあしらった腕輪だけをおくるみの中に入れて。

正直な話、とても辛かった。胸が張り裂けるとはどういうことか、マリアはこの時身をもって実感した。手が震えて涙がこぼれた。声を上げて泣いてしまえばオリヴィアが起きてしまうし、孤児院の人が出てくるかもしれない。そう思って必死に声を抑えた。

赤ん坊を入り口のところに置くと、すぐに走ってその場を去った。そうしなければもう泣き声を抑えられなかった。息が切れるまで走って孤児院から離れ、もう大丈夫と言うところまで来てから声を上げて泣いたのを良く覚えている。

（大丈夫、これは一生の別れじゃない……！必ず迎えに来るから……！！）

マリアはそう自分に言い聞かせた。神殿に戻り事が落ち着いたら必ず迎えに来る。そうしていっぱい謝っていっぱい可愛がろう。一緒にいてあげられない時間は取り戻せないけれど、その寂しさを忘れるくらい楽しい思い出を作ろう。そう自分に言い聞かせて、彼女は鉛のような足を引きずって孤児院を後にしたのだ。

あらかじめ決めていた通り、子どもは死産だったことにした。神殿に戻ってきたマリアを見て、ヨハネスはなにも言わなかった。何かい言いたそうな顔はしていたが、結局なにも言わずただ彼女を力いっぱい抱きしめた。この時ヨハネスが何を言いたかったかマリアには全て伝わっていた。なぜ帰ってきたのだと言う非難。その一方で帰ってきてくれて嬉しいと言う感謝。痛いほどに強く抱きしめられたその腕の中で、マリアは帰ってきてよかったと涙した。

少し迷ったがオリヴィアのことはヨハネスにも伏せておき、ただ死産であったとだけ伝えた。余計な気を使わせてはいけないと思ったのだ。お揃いの蝶をあしらった腕輪は赤子の遺体と共に埋めたと

話した。

正直なところ、マリアはヨハネスが目指す改革に傾倒していたわけではない。マリアが傾倒していたのはヨハネスの志ではなく、ヨハネス本人である。改革の力になりたいと思ったのではない。ヨハネスの力になりたいと思ったのだ。多分だが、ヨハネス自身もそのことは薄々気づいていると思う。

それからしばらくの間は忙しくも幸せな時間だった。恋人の、ヨハネスの目指す改革のために奔走する毎日。愛する人と、愛する人のために働けるのは本当に幸せだった。状況は芳しくなかったが、それでも充実していたと言い切れる。

しかし、幸せな日々は唐突に終わりを告げた。神々より神子に与えられたという腕輪、その腕輪にはめ込まれた「世界樹の種」が赤い光を放ったのだ。それはすなわち、御霊送りの儀式を行う合図だった。

「時間切れ、か……」

悔しさを滲ませるようにしてヨハネスは呟いた。そして目を閉じ、一つ大きく息をはいた。

マリアのほうを振り返ったヨハネスは、笑っていた。少し困ったような顔をして笑っていた。遣り残したことへの悲壮感は感じられない。むしろ、憑き物が落ちたような顔だとマリアは思った。

（ヨハネス様に付いてきて良かった……）

マリアは泣いた。どうしてだか分らないが、涙は止まらなかった。

ヨハネスは少し呆れたように笑って抱きしめてくれた。

「神子の座を、君に継いでもらいたい」

マリアを抱きしめたまま、ヨハネスはそういった。枢密院には話を通して、もう対立はしないと言って置く。だから君も改革からは手を引いて神子として穏やかに暮らして欲しい。ヨハネスは泣き続ける恋人にそう願った。

それはヨハネスの最後の気遣いだったのだろう。彼はマリアが改革そのものにはあまり興味がないことに気づいていた。自分を支えてくれる彼女の存在は得がたいものだったが、いなくなってしまう自分を理由に枢密院と戦い続けるようなことはして欲しくはなかった。

「はい。全てはヨハネス様の御心のままに……」

マリアは涙を拭って顔を上げた。彼女を覗き込むヨハネスは一瞬だけ泣きそうに顔を歪めたが、すぐに笑顔に戻りそっと恋人に口づけをするのであった。

それから儀式が行われるまでの数日間は、本当に穏やかな日々だった。ヨハネスはすでに枢密院と話をつけており、彼らから無粋な横槍を入れられることもない。結果だけ見ればヨハネスはマリアのために改革を断念した形になるのだが、彼はそのことをなんら後悔していなかった。

「彼女が穏やかに暮らせるならば、それだけでいい」

万感の思いをこめて、ヨハネスはそう言い切った。

幸せで穏やかな日々はまたたく間に過ぎ、そして御霊送りの儀式当日。神子ヨハネスとその後継者マリアの二人は御霊送りの祭壇の上に立っていた。これから神子が神界の門を開け、神界へと引き上げられたパックスの街へと赴くのだ。

マリアは興奮していた。それも当然だろう。彼女は敬虔な教会の信者なのだ。信者として彼女は神界に対して憧憬を抱いていたし、自分が死後そこに行くことを純粋に信じていた。それがヨハネスの改革にのめり込めなかった理由の一つなのだが、それはともかくとして死後に赴くはずだった場所に生きたまま行けるとは、なんという僥倖なのだろう。顔を輝かせ頬を上気させるマリアを、ヨハネスは痛ましそうに見ていた。

大勢の信者が見守る中ヨハネスが腕を掲げると、「世界樹の種」が強い光を放つ。その光が収まると、二人の姿は祭壇の上にはなかった。信者の中から怒涛の如く歓声が沸きあがる。御霊送りが、現世に残された最後の奇跡が、ここに行われたのだ。

神界の門の先でマリアが何を見たのか、ここでは語らない。機会があればいずれ語る事もあるだろう。しかしそこで彼女は知ったのだ。

――――どうしようもない、救いようのない真実というやつを。

ヨハネスは全てを話した後、マリアに泣きながら謝った。

こんなものを、こんなどうしようもない、救いようもないものを背負わせてしまってすまない。重すぎるものを背負わせてしまってすまない。とんでもない貧乏くじを引かせてしまってすまない。と。涙を流し謝り続け、そしてそのまま息を引き取った。

マリアもまた、泣いた。

だんだんと冷たくなっていく恋人の亡骸を抱きしめながら、声が枯れるまで泣いた。こんなにも泣いたのは、オリヴィアを孤児院に置いてきたとき以来だった。泣きながら、マリアは恋人から託されたものを背負う覚悟を決めた。ヨハネスの亡骸から「世界樹の種」がはめ込まれた腕輪を外し自分の左腕につけ、お揃いの蝶をあしらった腕輪を右腕につける。男性用の腕輪はマリアには少し大きい。

涙を拭き立ち上がり、無理やり笑顔を作る。天上の楽園から帰ってきた者が悲嘆にくれていては話しにならない。この真実を背負い続けるには、笑顔を浮かべ続けなければならないのだ。そう自分に言い聞かせた。

本当は神子の座に付いたら娘を、オリヴィアを呼び寄せるつもりだった。しかし、あの救いようのない真実を知った後では、それは躊躇われた。

もしオリヴィアを呼び寄せれば、彼女は言うまでもなく神子の娘という立場になる。そうなれば次の神子になるのはほとんど彼女で決まったようなものだ。それはつまり、愛娘にあの救いようのない真実を背負わせると言うことだ。

（それは、それだけは出来ない……！私はどうなってもいいけれど、それだけは出来ない……！！）

一ヶ月近く悩んだが、結局オリヴィアを呼び寄せることは断念した。娘にアレを背負わせないということは、他の誰かに背負わせることだということはマリアも重々承知していた。いずれは弟子を取り、その中から後継者を選ばねばなるまい。

（わたしは、ひどい女ですね……）

娘を守るために、他の誰かを身代わりにしようというのだ。神々をも恐れぬ所業だ。もっとも神々などいないことを、マリアは嫌というほど思い知らされていたが。

マリアはそれから慈善活動に力を入れた。決定に異議を唱えない代わりに枢密院から資金を用意してもらい、神殿の御前街に病院を創った。家を持たない路上生活者のために炊き出しを行い、夜露をしのげる場所を用意した。

それが捨ててしまったオリヴィアへの償いになると思ったのだ。またそうやって慈善活動に打ち込むことで、愛娘への思いを多少なりとも和らげることが出来た。

しかし彼女はまたしても絶望を経験することになる。

愛娘を手元に置かない。その選択を後悔したのは、オリヴィアを生んでからおよそ十年後のことだった。ひょんなことで、風の噂を耳にしたのだ。

曰く「サンタ・ローゼンの辺境にある孤児院が盗賊の襲撃を受けて全滅したらしい」

まさか、と思った。

湧き上がる嫌な予感から必死に目を逸らしつつ、彼女は伝手を頼って情報を集めた。そうやって集めた情報は、マリアを打ちのめした。

盗賊に襲撃され全滅した孤児院とは、まさしく十年前マリアがオ

リヴィアを捨てた孤児院だったのだ。誰かにもらわれているかもしれない。そんな一縷の希望も、すぐに絶望へと変わった。

「あ、ああ、アア、う、ううう、ううアアああアアああァァァアアアアああ！！！！」

マリアは絶叫した。声が枯れ、血を吐くまで泣き続けた。三日三晩、一滴の水も喉を通らず、一睡もせずに泣き続けた。

「オリヴィア、オリヴィアァァァ……」

手元に、置いておくべきだった。いや、そもそも神殿に戻ってくるべきではなかった。ああしていれば、こうしていれば。いくつもの後悔が頭の中を巡っていく。

立ち直るまで、半年かかった。いや、“立ち直った”というのは嘘だ。マリアの心の喪失は大きすぎ、決して補うとこはできない。

「腐っていてもあの子はうかばれない」

とか、

「出来ることを精一杯やるのが償いだ」

とか、自分でも信じられないような、安っぽい激励で無理やり自分を奮い立たせただけだ。心の傷口からは、血が止まることなく流れている。その傷がふさがることは決してないだろう。

ララ・ルーと出会ったのは、ちょうどそんなことだった。

視察の名目を借りて神殿の御前街に出かけたときのこと、一人の浮浪児が彼女の前を横切った。

後から聞いた話だが、彼女がお世話になっていた孤児院がつぶれ

て、この御前街まで流れてきたということだった。

ひどい有様だった。着ているものは服というよりは布に穴をあけただけのもので、泥で汚れあちらこちらが擦り切れている。手足は細く、すりむいたのかところどころに赤いものが浮かんでいた。顔はすすで汚れ、その目には絶望しか映っていない。肩まで伸びた髪の毛が、かろうじてその子が女の子であることを主張していた。

ふと思った。

もしオリヴィアが生き延びていたら、同じような境遇で苦しんでいるのだろうか、と。

気がついたら、抱きしめていた。ごめんね、ごめんね、とその女の子のむこうにいる娘に謝り続けた。

マリアは分っていた。

この子はオリヴィアではないと、分っていた。

この子にオリヴィアを重ねていると、分っていた。

この子はオリヴィアにはなれないと、分っていた。

分っていても、もうどうしようもなかった。

惚けたように大きく目を見開いてこちらを見上げる女の子を、優しく抱き上げる。手放すことなど、考えられなかった。

この二日後、ララ・ルーは正式にクラインの姓を受け、マリアの養女となる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ララ・ルーを養女にしてから、およそ十年。ありったけの愛情を注いできた。そのことを後悔しているはずもない。笑って怒って喜んで、親子として楽しい思い出を幾つも作った。

正直な話、随分と救われた。

オリヴィアを失い、紙一重の気力だけで生きていたあの頃に比べれば、かなり精神的にも身体的にも安定した。ララ・ルーが元気良く真っ直ぐに成長していくのを見守るのは、楽しくまた嬉しくもある。

しかし、今でもオリヴィアを手放した、あの日のことを夢に見る。そんな時はどうしても考えてしまうことがある。

まず愛情を注ぐべきだったのは、オリヴィアではなかったのか。楽しい思い出を作ってあげるべきだったのは、オリヴィアではなかったのか。

成長を見守るべきなのは、オリヴィアではなかったのか。

――――ララ・ルーを、オリヴィアの身代わりにしているのではないか。

マリアは精一杯ララ・ルーを愛してきた。そしてそれに応えてくれることが、本当に幸せだった。けれども彼女を愛すれば愛すほど、応えてもらって幸せになればなるほど、本当の娘であるオリヴィアへの罪悪感が強くなる。

さらにマリアは神子である。そしてララ・ルーは神子の養女である以上、すでに事実上の後継者とみなされている。それはつまり、あの救いようのない真実をララ・ルーに背負わせるということだ。

（わたしは、そのためにあの子を育ててきたのでしょか……？）

オリヴィアの身代わりとして。そう考えると、今度はラフラ・ルーへの罪悪感がわいてくる。

オリヴィアへの罪悪感。そしてラフラ・ルーへの罪悪感。

二人の娘への罪悪感。

（わたしは本当に、罪深い女です……）

第七話　夢を想えば？（前書き）

今回からはイスト編です。

第七話　夢を想えば？

ビクリ、と身じろぎしてから、その人影は動き出した。体にかけていた外套を肩にかけなおし、イストは胡坐をかいて座った。ぼんやりと左右を見渡すと、彼に近くにさらに二人、横になって眠っている者たちがいる。彼の弟子であるニーナ・ミザリと、新たな旅の道連れジルド・レイドである。

焦点が定まらない瞳でイストがぼんやりと見つめる先には、煌々と赤い光を放つ石がある。これは「マグマ石」という魔道具で光と熱を放つ。この魔道具が放つ光と熱の強さはモノによってまちまちだが今イストが見つめているものは、だいたい焚き火と同じくらいの熱と光を発している。

焚き火と違い薪がはぜる音もせず静かに輝く「マグマ石」から少しはなれたところに、手のひらに乗るくらいの大きさの球体がおいてある。材質は水晶のようだが、その中には青い光がまるで液体のように対流している。魔道具「敵探査（エネミーサーチ）」。あらかじめ設定された条件に適合する物体が一定の範囲内に侵入すると警報が鳴り響く魔道具である。この魔道具のおかげで、三人は寝ずの番をたてることなく旅の夜を過ごせていた。

不審者を近づけないということであれば、「霧の迷宮（ミスト・ラビリンス）」という魔道具を使ってもいいのだが、こちらは持続時間が短く一晩中は使えない。

静かな夜だ。あの夜とは違って。

「また、赤い夢、か……」

彼の記憶が始まる場所、古い寺院のようなものを利用した孤児院が盗賊たちに襲われた、あのときの赤い悪夢。あのときの記憶はひどく断片的で、しかしそのせいか一コマ一コマは強烈に焼きついている。

轟々と燃え上がる炎。子どもを庇う大人の女性。年下の兄弟を庇う年上の子ども。コマが進むごとに、立っている人間に人数は減り血溜りに倒れこむ人数ばかりが増えていく。見開いたままの小さな瞳に、もはや生気はない。せめてあの目蓋を下ろしてやれば、穏やかな死顔になるのだろうか。

「埒もない……」

お酒の入った「魔法瓶」を取り出し、その中の琥珀色の液体を一口あおる。

あの事件はもう終わったのだ。盗賊団は壊滅し、復讐すべき仇などというものはもはやこの世に存在しない。

過去には涙と花束を。時間は残酷なまでに平等で優しい。あの日の少年は、いまだに夢の中を彷徨っているのに。

「なんとかしなきゃかねぇ……」

努めて他人事の調子で、イストは呟いた。

赤い悪夢との付き合いはもう十年来になる。特に生活や精神面での支障はない。悪夢を見た夜はそれ以上眠れなくて、酒を飲むくらいしか出来なくなるが、言ってしまえばそれだけで、それ以上引きずることはなくなった。

ただ、悪夢を見ることそれ自体が、精神的に問題があるといえなくもない。

師匠であるオーヴァと旅をしていた頃、一人で旅をしていた頃、そしてニーナやジルドと旅をしている今、いずれの場合も関係なく悪夢に悩まされてきた。いや、本人は悩まされるほど問題視はしていないのかもしれない。長い付き合いの中で慣れてしまったといえなくもないが……。

（それは……、ないか……）

慣れてしまったというよりは、諦めてしまったのだろう。イストはそう思った。慣れたのであれば悪夢を見て目が覚めた後、またすぐに眠ることが出来るはずだ。だがしかし、今自分はこうして酒を飲み日が昇るのを待っている。

「滑稽だな。滑稽だよ」

ククク、と弱々しい自嘲の笑い声が漏れる。

ああ、まったく滑稽だ。悪夢をさまよい続けるあの日の少年も。悪夢を乗り越えられそうにない自分も。酒に頼らなければそれを認められない自分も。全てが滑稽で無様で、笑うしかない。

「いいかげん、形だけでもケリ、付けとくかなぁ……」

それで何かが解決するとは思わないけれど。それでも十年、あれから十年だ。いいかげん一つの区切りを付けておいてもいいだろう。

「行ってみますか、焼け跡に」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

イストとニーナの師弟が引き受けた「ハーシェルド地下遺跡に遺された古代文字（エンシェントスペル）の解読」という仕事の期間は一ヶ月であったが、結局二人はもう一ヶ月ほどそこで発掘作業を手伝うことになった。

理由は二つある。

一つは、単純に古代文字（エンシェントスペル）の解読が終わらず、仕事の延長を依頼されたから。

そしてもう一つは、新たに旅に加わることになったジルド・レイドの護衛の仕事が、もう一ヶ月分残っていたからである。

ジルドが一緒に旅をしたいと申し出たとき、イストとニーナは少なからず驚いた。二人の師弟は流れとはいえ魔道具職人であり、腕っ節で渡り歩いてきたはずのジルドとは仕事が畑違いである。イストとニーナからしてみれば護衛として心強い存在ではあるが、ジルドのほうには理由が無いのではなかろうか。

「一緒にいなければ、驚かせることはできまい？」

確かにそんな約束をした。「光崩しの魔剣」をジルドに贈った際、「その魔剣を使ってオレを心の底から驚かせてくれ」とイストが条件を出したのだ。

とはいえこの条件、もとはと言えばジルドが魔剣を無料で受け取るとこを渋ったから出したのであって、イストとしては軽く考えていた。しかしジルドのほうはそうではないらしく、律儀にも条件をクリアするまでは一緒に旅をすると決めているらしい。

「おっさんも律儀というか固いというか」

もとよりイストに断る理由はない。武人らしいその考え方に少し呆れながらも、イストは彼の申し出を了解した。

「師匠もジルドさんを見習ったほうがいいと思います」

そうすればもう少しまともな人間になれるはずですから、とニーナは真顔でそういった。彼女としてもジルドの同行は歓迎すべきことだ。彼女は師匠であるイストがジルドから精神的感化を受け、真人間になることをわりと真面目に期待していた。逆にジルドがイストから影響を受ける可能性もあるのだが、どうやらそちらには気づいていないらしい。

ちなみにイストがアバサ・ロットであることは、三人で旅をするようになって少ししてからジルドに教えた。旅の中で魔道具を作るには「狭間の庵」にある設備を使わなければならない。旅の同行者を仲間はずれにしては、満足に本業が行えないのだ。

アバサ・ロットというのはもはや伝説と化している魔道具職人の名前だが、そんなビックネームを聞いてもジルドはさほど驚かなかった。

「あれだけの魔剣を作れる職人が、無名であるよりは説得力がある」

照れくさかったのか、イストは煙管型禁煙用魔道具「無煙」を吹かし、肩をすくめただけで何も言わなかった。

ハーシェルド地下遺跡はジェノダイトと神聖四国の一つサンタ・ローゼンの国境近く、トロテイア山地の巡礼道を少し外れたところにある。発掘作業の手伝いという依頼を終えた三人は、報酬をもらうとそのまま巡礼道を通ってサンタ・ローゼンに入り、国境線に沿

うようにして北西に進路をとった。

地理的にほぼ大陸の真ん中に位置し、そのためか歴史の中にあって主役となることが多い神聖四国であるが、それでも辺境部は政治的な喧騒からは程遠く、のどかな雰囲気が漂っている。しかしこのごろは物騒な単語を良く耳にする。「十字軍」とか「遠征」とかいう単語である。

神聖四国とその周辺諸国が兵を出し合って十字軍を組織しアルテンシア半島へ遠征するという話は、その始まりにおいてからさえ機密でもなんでもなく、かなり早い段階から噂という形で一般に広がっていた。それがどうやら、いよいよ本格的に動き出すらしい。集まった兵の数は三十万規模で、遠征の開始を今か今かと待ちわびているという。

遠征の開始が少しばかりまごついている理由は、十字軍に対して神子の祝福を与えるかどうかで、枢密院が意見の調整に手間取っているからだという。神子の祝福が十字軍に与えられれば、遠征に参加する兵士たちの士気は大いに上がるだろう。しかしその一方で祝福が与えられてしまうと、遠征の中で行われるであろう略奪や暴行にまで、いわば「お墨付き」が与えられてしまうことになる。また万が一にも十字軍が敗北した場合、それは「神子が祝福した軍が負けた」という汚点を教会に残すことになる。

とはいえ、「祝福は与えられるだろう」というのが大方の予想だ。勝てば官軍。勝ってしまえば略奪や暴行の事実などいくらでも揉み消せる。何も問題はない。負けるつもりで遠征を行う愚か者がどこにいるというのか。

「神子も信仰も、全ては戦争の道具というわけだ」

煙管型魔道具「無煙」を吹かし白い煙（水蒸気らしいが）を吐き出しながら、皮肉をこめてイストはそう評して見せたのだった。もっともそんなふうに気楽に批評していられるのも、彼らが傍観者だからだろう。十字軍も遠征も彼らにしてみれば他人事でしかなく、関わる予定もつもりもない。

目下、彼らの目的地は「プーリアの村」である。

プーリアはサンタ・ローゼンの辺境部に位置するのどかな村である。この村ではオリーブの栽培が盛んで、そこから得られるオリーブオイルを求め多くの商人たちがこの村を訪れる。そのためか、村の規模からは不釣合いな宿泊設備を持っていた。

季節は収穫期のはじめごろ。オリーブの実は手摘みで収穫するため村にとっては忙しくなってくる時期だが、油を求めて買い付けにやってくる商人たちの姿はまだ少ない。今はまだ個人の行商人が中心のようだ。

とはいえイストたちの、いや、イストの目的はオリーブオイルではない。プーリアの村の近くの小高い山には古い寺院を利用した孤児院があったのだが、十年ほど前に盗賊に襲撃されて以来、廃墟となっていたという。いうまでもなくイストがオーヴァと出会う前にお世話になっていた孤児院の跡であり、そこそイストがこの村を訪れた理由であった。

宿泊施設の大部屋（個室などという設備はないらしい）はまだスカスカで、なんとなく居心地の悪さを感じさせる。端っこの壁際に荷物をまとめ道具袋からクッションを取り出し、とりあえずの場所を確保するとようやく人心地ついた。

「夜には帰ると思うから」

それだけ言うとイストは「無煙」を吹かしながら、さっさと外に出て行ってしまった。クッションの上に座り込み、少し前に買い込んだクッキーをパクついていたニーナは少しばかり呆けた様子でその背中を見送った。

「……この村って、なにかめぼしいものありましたっけ？」

プーリアは本当にただの“村”だ。オリーブという特産品はあるが、それ以外で目立ったものは何もない。師匠であるイストが何を目的として外に出たのか、ニーナとしては見当がつかなかった。しかも夜までだと、時間的にも結構長い。

もちろんイストはお世話になっていた孤児院の跡へと向かったのだが、彼は詳しい事情をニーナとジルドにはまだ教えていなかった。

「さてな。ワシらにはなくともイストにはあるのかもしれん」

そういいながらジルドはティーセットを取り出し、お茶の用意をしていく。こういう時、火を使わない「マグマ石」は便利だ。

それもそうか、とニーナは納得した。もとよりイストがどこで何をしようとも彼女がやることは変わらない。ニーナは今まとめている資料を取り出し、読み漁っていく。

ハーシェルド地下遺跡の発掘作業を手伝う傍らにレポートをまとめていた「光彩の指輪」は、いまは彼女の指で輝いている。この魔道具は理論的な部分は比較的早くまとまったのだが、刻印を施した合成石をはめ込む指輪の台座（つまり魔道具の性能にはまったく関

係のない部分）を作るのに手間取ってしまった。ただ、手がかかったせいか、なかなかお気に入りである。

（でもまあ、これで満足してるわけにはいかないし……）

ニーナの夢は立派な魔道具職人になって実家の工房「ドワーフの穴倉」を継ぐことだ。その夢のためには、たった一つの魔道具で満足しているわけにはいかないのだ。

ジルドが入れてくれた紅茶を受け取り、手に持った資料に目を走らせていく。何日ここに滞在するか分らないが、まとまった時間が取れるのならそろそろレポートを書き始めたい。

「ジルドさん……」

「ん？どうした」

「クッキー、それ以上食べられるとわたしの分が……」

「む……」

勉強には糖分が必要なのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

道は随分と荒れていた。プーリアの村の近くにある小高い山、その山を少し登ったところにある廃墟がまだ寺院として利用されていた頃の名残らしい石畳は、あちらこちらにヒビが入り割れている。踏みつけるとぐらつくようなものもあり、石畳の上を行こうとすると、かえって歩きにくいくらいだった。

さっきまで吸っていた煙管型禁煙用魔道具「無煙」はカートリッジが切れてしまったため、今は道具袋の中にしまってある。そのせ

いか口元が少し寂しい。まあ、カートリッジを交換すればいいだけなのだが。

「十年……。近づく人もいなければ当然か……」

意外と冷静だ。イストは自分の状態を慮り、そう判断を下した。あの赤い悪夢を見るたびに酒に頼っているような有様だったから、現地を訪れれば涙の一つでも流すのかと思っていたが、今のところそういう感情がわきあがってくる様子はない。

「昼間だから、か……？」

この場所で最も強烈に焼きついている場面は、言うまでもなくあの晩のこと、盗賊に襲われたあの日の夜のことだ。夜の暗闇と轟々と燃え盛る炎は脳裏に焼きつき離れないが、そのせいかまだ日の高いこの時分、ここは同じ場所なのにどこか別の場所のようにさえ思えた。

歩きにくい石畳の上を歩いていく。しばらくすると、焼け落ちた廃墟が見えてきた。焼け落ちたとはいえ、まだ建物の様相は残っている。その姿を見て、そういえば石造りだったな、とイストは思った。

視線を正面に戻すと、一人の人物が視界に入った。

後姿だが女性だと分る。蜂蜜色の髪の毛を伸ばした彼女は、焼け落ちた廃墟の前で跪き祈りを捧げているようだ。

（さてどちら様だ……？）

生憎と心当たりはない。場所が場所だけに孤児院の関係者かその

辺りだろうと見当は付けたが、その関係者はあの夜の襲撃であらかた死んだはずである。

まあ誰でもいいか、とそこで思いイストはそこで詮索をやめた。跪いている女性の隣に、ひと一人取り分くらいのスペースを開けて立つ。

「墓……？」

土を盛り、その上に石を二つ乗せただけの簡単なものだが、これはお墓だろう。蜂蜜色の髪をした女性は、このお墓に祈りを捧げているらしい。見れば花も手向けてある。彼女が供えたのだろう。

「プーリアの村の人たちが作ってくれたようです。十年前、ここで盗賊に殺された子どもたちのために」

祈りを捧げていた女性が立ち上がり、そう説明してくれた。どうやら兄弟たちの屍は葬ってもらえたらしい。そのことは素直に良かったと思えた。

イストは道具袋から「魔法瓶」を取り出し、中の琥珀色の液体をそのお墓に注ぐ。辺りには芳醇な香りがたちこめた。本来であれば隣の女性のように花でも手向けるのが良いのだろうが、生憎と性に合わなかった。

しばしの間、目を閉じ黙祷を捧げる。これで悪夢を含めたその他諸々の問題が解決するなどと期待しているはではないが、それでも一つの区切りにはなるだろう。いや、区切りにするためにここに来たのだ。

閉じていた目を開ける。当然のことだが、何も変わってなどいない。馬鹿なことしているなぁ、と思ったが、そう気楽に考えていられる自分に少し安心したりもする。

「失礼ですが、ここはどういった関係でしょうか」

目を開けたことで内向きの用件は終わったと判断したらしく、隣の女性が話しかけてきた。

女性の顔立ちは整っているといえるだろう。蜂蜜色の髪の毛に青い瞳の目は良く映えている。だが容姿以上に目を引くのは、右の目を隠すように伸ばされた髪の毛だった。眼帯でもしているのか、髪の毛の下から黒い帯が伸びている。

「十年前の生き残りだ」

あの時は死体を見るのが怖くて逃げ出しちまったからようやく墓参りが出来た、とイストは少し茶化すように、しかし間違いなく自嘲気味にそういった。

「十年前の……!?あの、お名前は……？」

「イストだ」

イストは名前だけを名乗り、姓は名乗らなかった。孤児院にいた子どもたちには姓がなかったからだ。孤児院を巣立つ日に姓名を贈っていたらしい。

「イスト!?本当にイストなの!?」

女性はそれまでのポーカーフェイスを崩して満面の笑みを浮かべ

る。その変わり身の速さにイストは少し苦笑をもらす。

「わたし、オリヴィアよ」

覚えてる?とオリヴィアと名乗った女性は心配そうな表情をしてイストを覗き込んだ。イストが十年前の記憶を引っ張り出すと、その名前はすぐに出てきた。

「ああ、覚えてる。蝶々の腕輪を持っていた……」

そう言うとオリヴィアは嬉しそうに笑顔を浮かべ手を叩いた。そして右腕を掲げて、蝶があしらわれている腕輪を見せる。

「昔はデカくてはめられなかったのにな」

「十年よ。子どもが大人になるには十分な時間だと思わない?」

まったくその通りだと、イストは思った。十年経てば子どもは大人になる。少なくとも体だけは。赤い悪夢を見る度に酒で紛らわしている自分は、果たして大人になれているのだろうか。

一つの区切りをつけようとしてここに来た。この思いがけない再会は、きっとその“区切り”を思いがけない形にしてしまうのだろう。その予感は、小さな痛みを伴った。

第七話　夢を想えば？

「じゃあ、イストはそのお師匠さんに助けられて……」
「ああ、そのまま弟子入りした」

イストとオリヴィアは、盗賊に襲撃されたあの日から今日までのことを、それぞれ簡単に報告しあっていた。

「じゃあ、『ヴァーレ』の姓はお師匠さんの？」
「いや、師匠の姓は『ベルセリウス』だ。名前はオーヴァ・ベルセリウス」

とはいえ「ヴァーレ」の姓名をイストに与えたのはオーヴァである。つまりオーヴァは自分の姓名を弟子に与えなかったわけだが、後にその理由を人から尋ねられたとき、彼はこう答えたという。

「そんな気色悪い」

それでイストが深い心の傷を負ったかといえば、そんなことは全然ない。むしろ当然だと言わんばかりにこう言い返したという。

「クソジジイと同じ姓名なんてゾッとするね。それじゃあオレまで変人みたいじゃないか」

ニーナがその場にいれば「師匠は十分変人です！」力一杯宣言してくれただろうが、生憎とこの時二人はまだ出会っていなかった。

「……仲がいいのね、二人とも」

オリヴィアは呆れたように苦笑する。イストは肩をすくめ、「それはそうと」といって少々強引に話題をそらした。

「そっちはどうだったんだ?」
「わたしの方も似たようなものよ」

強引に話をそらしたことには何も触れず、オリヴィアは自分のことを話し始めた。

盗賊に襲われたあの日の晩、オリヴィアはイストと同じように逃げ延びた。そして、当時個人の行商人だったオルギン・ノームに助けられ、その後彼の養女となった。オルギンは今現在商人としてそこそこ成功したが、自分の店を持つことはまだせず行商のキャラバン隊を率いているという。

「じゃあ、プーリアにはオリーブオイルを仕入れに?」
「ええ、そうよ」

なんでも収穫期のはじめごろはそもそも油の生産量がまだ少ないので、大きな商会は仕入れを始めておらず比較的簡単に仕入れが出来る穴場の時期なのだという。

「まあ、仕入れる量が違うせいもあるんだけどね」

キャラバン隊を組んでいるとはいえ、行商人と商会では商いの規模に雲泥の差がある。行商人の軽いフットワークが今回は幸いしたといえるだろう。

「じゃあ、オリヴィアも村の宿泊施設を使っているのか」
「いいえ、わたしたちのキャラバンは村の外れにいるわ」

オリーブオイルを仕入れるかたわら、露店も開いているらしい。村の中では露店を開くスペースが取れなかったため、村の外れにキャンプを張ったようだ。

「良かったら見に来て」

そういって露店の宣伝をするオリヴィアの顔は間違いなく商人のそれで、彼女のこの十年を少しだけだが垣間見せていた。

「それで、右目はどうかしたのか」

そういった瞬間、オリヴィアは目を見開いて言葉を詰まらせた。数瞬の沈黙の後、苦い笑みを浮かべて頭を振った。

「ひどい人ね。聞かれたくない、触れられたくないと分っているのに、見てみぬ振りをしない」

「いつ聞かれるのかと、怯えつづけるよりはいいだろう？」

イストがそう言うと、オリヴィアは諦めたようにため息をついた。そして右目を隠している髪の毛を手でどけて、その下の肌をさらした。

「あの夜、逃げるときに、ちょっとね」

オリヴィアの顔の、右目とその周りには火傷のあとが残っていた。黒い大きい眼帯をして隠してはいるが、隠し切れない火傷のあとが眼帯の下からのぞいている。恐らくだが、右目の眼球も失っているだろう。

「まあ、火傷をするような所にいたから逃げ切れた、て部分もあるんだけどね」

髪の毛をどけていた手をおろし、火傷のあとを隠す。それからオリヴィアは、視線をそらすように俯いた。

「……醜い、と思う……？」

しぼり出すような、聞きたくないけれど聞かずにはいられないような、そんな声だった。視線を合わせたくないのか、あるいは顔を見られたくないのか、オリヴィアは俯いたままだ。

「外面の美醜にそれほど興味はないさ」

考え込む一瞬の間を惜しんで、イストはそういった。

「……少しは、あるんだ？」
「そこは否定しない」
「否定してよ。ひどい人ね」

呆れたように苦笑しながら、オリヴィアは顔を上げた。左目の端に溜まっている涙は、見てみぬ振りをすべきなのだろう。

「でもまあ、疲れないかとは思う」
「……疲れる？」

意味が良く分らなかったのか、オリヴィアは小首をかしげる。その様子キョトンとしたがやけに幼くて、イストは笑いを堪えるのに少しばかりの努力を要した。

「隠したら隠し続けなきゃだろ？疲れないか？」
「……疲れるわ……」
オリヴィアは顔をそむけて目を伏せた。しかし俯きはしなかった。
「でもそれ以上に怖いのよ」
この火傷を見た人の反応が怖い。向けられる視線が怖い。そしてなにより自分の顔を見るときが一番怖い。視線を逸らし何かにおびえるように、オリヴィアはそう言った。
イストはただ「そっか」とだけ呟き、それ以上は何も言わなかった。それ以上言うべき言葉は持ち合わせていなかったし、また言うべきではないと思ったのだ。これはオリヴィアの問題であり、ついさっき再会したばかりの人間が軽々しく何か言うべきではないだろう。まして薄っぺらな慰めの言葉で解決できるような問題とも思えない。
「……イストは、なにかある？」
「今でもあの夜の悪夢を見る。見たあとは二度寝もできないから、朝が来るまで酒を飲んで誤魔化してる」
オリヴィアもまた「そう」とだけ呟き、それ以上は何も言わなかった。会話が途切れ、風が木の葉を揺らす音だけが耳に届く。
ふと、思う。
心の傷と体の傷は、どちらが重いのだろうか。
イストが見る悪夢は、心の傷に分類されるだろう。オリヴィアの火傷は言うまでもなく体の傷だ。同じ夜に負ったこの二つに傷は、

さてどちらが重いのだろう。

（体の傷に決まってる……）

オリヴィアは女性で、しかもその傷があるのは顔だ。あの火傷が原因で、心にまで傷を負っているのは想像に難くない。

なら、より重症なのは間違いなくオリヴィアのほうだ。

ここまで考えて、ふと自分の思考に疑問がわく。

（なんでこんなこと考えるのかねぇ……）

傷の程度など、比べてもしょうがないというのに。自分のほうが軽傷なんだから頑張らなくちゃ、とか自分より重傷でかわいそう、とかそんなふうに考えたいのだろうか。そんなふうにして自分を慰めたいのだろうか。

（ゾッとするね）

本当にゾッとする。虫唾が走る、というやつだ。人が苦しんでいる傷の大小を比べて喜ぶだの不幸自慢をするだの、それは本当に下種な考え方だ。そんな思考はさっさと放棄するに限る。

「ところで、イストがプーリアに来たのはお墓参りだけが目的？」

イストの脳内葛藤が一段落着いた頃、見計らったわけではないだろうがオリヴィアが話しかけてきた。見た限りの様子は、平静に戻っている。

「ああ、オレは別に行商をしているわけじゃないからな」

今年の生産が始まったオリーブオイルを求めてプーリアの村に来たわけではない。孤児院の跡、つまりここに足を運んでいろいろと区切りをつけることだけが目的だった。油を買うにしても、個人で使う分量だけだろう。

「じゃあ今後の予定は？どこに行くとか、もう決めてあるの？」

「いや、特に何も」

強いて言えばさらに西に行こうかと思っているが、明日になれば気分が変わっているかもしれない。また頭の別の部分では、大きな商会の仕入れが始まって騒がしくなるまで、この村にいるのもいいかもしれないなどとも思っている。

つまりまったくの白紙状態、無計画な有様である。

「だったら、ウチのキャラバン隊の護衛をしない？」

魔導士ライセンスはもってるんでしょ？とオリヴィアはイストの顔を覗き込んだ。

聞くところによると、彼女らのキャラバン隊はこれから北西に進路をとるらしいのだが、北西の方角に進めばその先にあるのはアルテンシア半島である。これから十字軍遠征によって戦場になる半島に首を突っ込む気はさらさらないが、それにしても遠征の思わぬ影響でキャラバン隊に物騒な来客があるかもしれない。そこでできれば護衛を雇いたいと、オリヴィアの養父オルギンは考えているらしい。

「進路を東に修正すればいいだけじゃないのか？」

「混乱の中にこそ商機はあるものよ」

大切なのはどこまで大丈夫なのかを見極めることよ、とオリヴィアは商人の顔で力説した。アバサ・ロットとして似たようなことを考えることもあるイストは、特に反論もできず肩をすくめるしかない。

「……それに、せっかく十年ぶりに再会したのにここでお別れなんて、寂しいわ」

オリヴィアの目が少し潤む。

「……考えとくよ」

肩をすくめたイストがそういうと、オリヴィアは「そう、ありがとう」言って、と断られる可能性をまったく考えていない笑顔を向けた。

「わたしはそろそろ行くけど、イストはどうするの？」

「もう少し黄昏ていく」

「……似合わないわよ？」

「知ってるよ」

後でキャラバン隊に顔を出してね、と言ってからオリヴィアは孤児院の焼け跡をあとにした。それを見送ってから、イストは「無煙」を取り出し、雁首を取り外してカートリッジを交換してから口にくわえた。

フウ、と白い煙（水蒸気らしいが）を吐き出す。

「それで？何のようだ？」

誰にともなく、独り言のようにイストは呟いた。しかし反応があった。ガサガサと茂みゆれ、そこから出てきたのは……。

「我に気づいていたとは流石だにゃ。なんで分ったのかにゃ？」
「……お、おお、おおお」
「どうかしたかにゃ？」
「その渋い声と猫語尾のギャップが……」
「……猫が喋ったことに関しては驚いていないんだにゃ……」

茂みを揺らして、その奥から現れたのは一匹の黒猫であった。全身の毛は黒だが、瞳の色は青だった。

「どうせ魔道具か何かだろう？その程度のことでいちいち驚いていられるか」

イストが「無煙」を吹かしながらそういうと、黒猫は「フム」と頷いてからチョコンと座り込んだ。前足で顔を洗うその仕草は、どこからどう見ても本物の猫だ。

「で、話を戻すがなんで我に気づいたにゃ？」
「そりゃ、あれだけ魔力を放出してればイヤでも気づくさ」

オリヴィアに名前を名乗った辺りから濃い魔力を感じてはいた。ただ、何もする気がなさそうだったので放って置いたのだが、まさかこんな珍客がいたとは。

「フム。当代のアバサ・ロットもなかなかやるようだにゃ」
「へえ、オレがアバサ・ロットだって知ってるのか」

イストの目がスッと細くなり、警戒を示した。だが相変わらず「

無煙」を吹かしているその口元には、面白がるような笑みが浮かんでいる。

「簡単な話しだにゃ。その腕輪『狭間の庵』を持っていれば、だいたいの想像は付くにゃ」

「コイツのことまで知ってるのか。とすると黒猫さんを作ったのは、歴代の誰かってことか？」

イストが右腕につけた腕輪、「狭間の庵」を擦る。顔を洗い終わったのか、黒猫は前足をそろえてきちんと座った。その背中の後ろで、黒いシッポがゆらゆらと揺れている。

「改めて自己紹介をしておくにゃ。我の名はヴァイス。アバサ・ロットの名を継いだ魔道具職人、セシリアナ・ロックウェルの作り上げし魔道人形だにゃ」

セシリアナ・ロックウェル。その名前は「狭間の庵」の二階に保管されている資料の中で見たことがある。たしか二〇〇年ほど昔の人物だったはずだ。しかし黒猫に「白（ヴァイス）」と名付け、あの渋い声と可愛らしい猫語尾のギャップである。どうやら彼女もアバサ・ロットの名にふさわしく性格のねじくれた変人だったようだ。

「ご丁寧にどーも。で、オレに何の用だ？」

「……オリヴィアを、なんとかして欲しいんだにゃ」

ヴァイスと名乗った黒猫、もとい魔道人形は単刀直入にそういった。物事を婉曲的に伝える頭脳が無いのかもしれないが。

「なんでオリヴィアが出てくるんだ？」

「あの子が今のマスターだにゃ。マスターのために何か出来ること

があれば、したいと思うのが魔道人形の性にゃ」

魔道人形に嘘をつかせることができるのかという技術的な問題はさておくとしても、イストはヴァイスの言葉から嘘は感じなかった。しかしイストが聞きたいのはそういうことではないのだ。

「じゃあ、なんでオリヴィアをマスターに選んだんだ？」

「……あの子は、セシリーに似ているにゃ」

セシリー、というのはセシリアナ・ロックウェルの愛称だろう。

「似ている」と呟いた黒猫の目は今この時間ではない、別のどこかを見ている。

（寂しかった……とか？）

ヴァイスの製作者であるセシリアナ・ロックウェルがアバサ・ロットとして活動していたのは、保管されている資料の記された年号から計算して、およそ二〇〇年前である。この黒猫がいつ彼女の手から離れて行動をするようになったかは分らないが、それでも一五〇年以上は確実に経っているはずである。

その間にヴァイスが何人のマスターを持ったのか、イストにそれを知る術はない。しかしその時間の中で、あるいは製作者でありまた最初のマスターであったはずのセシリアナを懐かしく思ったのではないか。

目の前の黒猫さんは否定するかもしれない。だがイストは魔道具職人としてそう思いたがっている自分がいることを自覚した。

「『なんとかして欲しい』っていうのは顔の火傷のことか？」

心のうちの想像はひとまず脇においておくとして、イストは話を進めることにした。オリヴィアのことで「なんとかして欲しい」というのであれば、顔の傷以外には見当がつかない。

「隠すことはできても、治すことはできないぞ」

イストは魔道具職人である。火傷の傷跡を隠して気づかせないようにする、綺麗な素肌のように見せかける魔道具なら作れるだろう。しかし火傷を治療し、隠す必要そのものをなくすことはできない。それは医者の領分だ。

「で、隠すだけなら今と同じだ。意味が無いとは言わないが、『なんとかした』ってことにはならないんじゃないのか？」

どれだけ精巧に隠してみても、それは決して治ったわけではない。隠したからには隠し続けなければならず、そしてオリヴィアは怯え続けるだろう。「醜い素顔が露になりはしないだろうか」と。

「ヒトの心の機微は我には分らないにゃ……。でもあの子は時々とても辛そうな顔をするんだにゃ」

そんな顔は見たくないにゃ、とヴァイスは言った。

（それはとてもヒトらしい心の機微だと思うがね……）

堪え切れなかった微笑を、イストは「無煙」を吸う事で誤魔化した。

「まあいい。やるだけやってみるさ」

「恩に着るにゃ」

そういって黒猫の魔道人形は頭を下げた。そういう仕草はどうにも人間臭い。

「しっかし、良くできてるな」

それはイストにとって魔道具職人としての最大級の賛辞だった。今の時代、イストは間違いなく最高レベルの魔道具職人である。そのイストの目から見ても、セシリアナの技術はすさまじいものがある。

「『持てる全ての技術を詰め込んだ』。セシリーはそう言っていたにゃ」

「じゃあ彼女の最高傑作だったわけだ」

「我もそう言ったことがあるにゃ。そうしたら……」

そうしたら、セシリアナはこう言ったという。

『勝手自由に動き回って、あまつさえ口ごたえまでする。そんなのが最高傑作のわけがないでしょ。失敗作もいいところだわ』

その、あまりにも“アバサ・ロット的”な物言いにイストは思わず噴き出した。脈々と続く変人の系譜、その一端を見た気がする。

「失敗作が勝手気ままに出歩いているのはいいのか？」

「それも聞いたことがあるにゃ」

黒猫さんによればその時セシリアナは片目をつぶり、実に楽しそうにこう言ったという。

『厳重に猫被せといたから大丈夫よ』

第七話　夢を想えば？（後書き）

なんと！
この話で通算１００話目だったりします！

ここまでこれたのは読んでくださる皆様のおかげです。
本当にありがとうございます。

通算１００話到達記念、ということで何か考えたのですが、もう一話上げるぐらいしか思いつきませんでした。
今日中、は無理なので、明日もう一話上げたいと思います。

第七話　夢を想えば？（前書き）

ま、まにあった……。

第七話　夢を想えば？

イストとの話が終わると、黒猫型の魔道人形ヴァイスは再び茂みの中に消えていった。マスターであるオリヴィアの元に戻るのだろうが、人間用の道を通るよりも獣道を用いたほうが、彼にとっては便利なのかもしれない。

「そういうところは流石猫だな」

どうにも人間臭い話をする黒猫の背中を見送ったイストは、「無煙」を吹かしながらそう呟いた。

一人になったイストは、焼け落ちた孤児院跡の廃墟をもう一度見上げる。反射的に脳裏に浮かび上がってくる記憶は、どうしてもあの夜のこと、悪夢のことだ。たが探せば確かに楽しい記憶もある。

視線を下におろすと、プーリアの人々が作ってくれたというお墓が目に入る。そのお墓の前に供えられた花束とそれを持ってきた一人の女性。死んだはずだと思っていたもう一人の生き残り、オリヴィア。

幼馴染と呼ぶには一緒にいた時間があまりにも短く感じるが、それでも同じ孤児院で一緒に暮らした家族だ。力になれる範囲なら、力になりたいとは思う。

「ま、やるだけやってみるさ」

墓の下で眠る、十年前からもはや年をとることもない兄弟たちに

そう告げる。生き残った、生き残ってしまった理由、「自分ならできる事」とやらがあるのなら、それをやってみるのもいいだろう。

目をつぶる。意識の中に浮かぶのは、小さな兄弟の亡骸だ。その亡骸の脇にそっと膝をつき、開けっ放しになっている目蓋を閉じてやる。心なしか、穏やかな顔になった気がする。

目を開けて、イストは苦笑した。全ては妄想だ。何も変わらない。何も起こらない。誰も救われもしない。

「まあいいさ。それでも一つの区切りだ」

孤児院跡に背を向け、イストは歩き出す。一度立ち止まって振り返り、「また来るかな」と小さく呟いてから再び歩き出す。もう立ち止まることも振り返ることもしなかった。

プーリアの村に戻ったイストは、そのままキャラバン隊のところへ行くことはせず、一度村の宿泊施設によってニーナとジルドの二人に今後の進路について相談した。

「ワシはそれでかまわぬ」
「わたしも大丈夫です」

キャラバン隊の護衛の件を話すと、二人とも二つ返事で了承してくれた。そもそもニーナは弟子だしジルドは一緒に来ること自体が目的だから、イストの独断で決めてしまってもいいのだ。だが事前に一言相談しておくのが、一緒に旅をする仲間への礼儀というものだろう。

「でも師匠、わたし、戦えないんですけど……」

「大丈夫。もともと戦力には入れてないから。よかったな？無駄飯食い」

心配そうにおずおずと手を上げたニーナを、イストはバッサリと切り捨てた。「無駄飯食い」と言われ頬を引きつらせるニーナの肩にジルドが手を置く。

「キャラバン隊なら雑用の仕事が多いだろう。そちらを手伝えば良いさ」

「そういうこと。ちゃんと仕事しろよ？じゃないと本当に無駄飯食いになるからな」

最初からそういってくださいよぉ、と恨めしげに睨んでくる弟子を、恐らくは意図的に無視してイストは立ち上がった。キャラバン隊の隊長のところへ行って話を付けてくるという。

「うむ、承知した。ところで、夕食はどうする？」

そういえばもうそんな時間である。

「あ～、適当に食べてくるわ。おっさん達も各自で食べてくれ」

そう言ってからイストは宿泊施設を後にして、村はずれにいくつか露店を開いているキャラバン隊を目指した。キャラバン隊の規模は決して小さくない。日も暮れかかっているこの時間、露店はすべて閉じている。食事で村へ繰り出しているのか、人影も閑散としている。

「隊長さんいる？」

煙管（こちらは本物だ）を吹かしていたキャラバン隊の隊員にそう聞くと、煙管で一台の馬車のほうを示し、「あっちにいる」と教えてくれた。軽く礼を言ってから、教えてもらった方向に歩いていく。馬車の裏側をのぞくと、一人の男が煌々と輝く「マグマ石」の前に座っていた。どうやらお茶を入れているらしい。

「あんたが隊長のオルギンさん？」

「そうだが、あんたは？」

「イスト・ヴァーレという。オリヴィアから護衛を探してるって聞いてな」

そう言うとオルギンの顔に笑みが浮かんだ。厳しい面構えのわりにそうやって笑うと妙に愛嬌のある男だった。

「おお、オリヴィアが言っておった男か」

どうやらオリヴィアが先に話をしておいてくれたらしい。オルギンは紅茶をもう一人分用意すると、イストに座るよう進めた。

「ふむ。では人数は三人だが戦えるのは二人、ということか」

「ああ、オレの本職は魔道具職人だからな」

荒事にも人並み以上に対処してみせる自信はあるがそれはあくまでも“オマケ”だ、とイストは言った。

「その二人で、どのくらい戦える？」

顎を左手で撫でながら、オルギンはそう尋ねた。やはり戦力を期待して雇う側としては、どれだけ実力があるか知りたいのだろう。

「一緒に旅をするようになってからまだ日が浅いからな……。ああ、でも二人で地竜の相手をしたことはあるぞ」
「地竜をか！？」

地竜。正式名称リザイアントオオトカゲ。牛ほどの巨躯と鋭い牙そして爪を持つ、獰猛な肉食獣だ。その体は硬いうろこで三重に覆われ、普通の刃物では傷つけることさえできない。食物連鎖の頂点に君臨する、人間など意にもかえさぬ野獣である。

仮に討伐するとしたら魔導士が最低でも三人、可能ならば五人以上で、と言われている凶暴な野獣をたった二人で相手にしたと聞いてオルギンは驚いた。その驚き方から察するに、彼は地竜について知っているだけでなく、もしかしたら実際に遭遇したことがあるのかもしれない。

「倒したのか！？」
「いや、尻尾ぶった切って追い払っただけ。しかもオレは牽制してただけで、ほとんどはジルドのおっさん、連れがやってくれたんだけどな」

そういってイストは謙遜して見せたが、実際これは凄いことである。討伐には魔導士が最低でも三人必要といわれている地竜を二人で撃退したこと。そして地竜相手に牽制をし続けられたこと。これならば十分に必要な戦力を満たしてくれると、オルギンは判断した。

「ではあなた方に護衛の仕事を依頼したい。あとの一人は雑用を手伝ってもらうことになるが、それでいいか？」

もとよりこちらが頼もうと思っていたことだ。尋ねるオルギンにイストは二つ返事で了承をかえした。

護衛は二人だけでいいのか、と聞いたら、オルギン曰く「俺たちだって戦えないわけじゃない。ただ先頭を切ってくれる精鋭が欲しいだけだ」とのこと。

次に二人は報酬の話に移る。

「まず聞きたいんだけど、三食はちゃんと付くよな？」

イストの言葉にオルギンは頷いて肯定を示した。こういった商隊の護衛など、数日にわたってまるまる拘束されるような仕事の場合、食事は雇い主の側が用意するのが普通だ。その分が報酬からきっちり引かれている場合も少なくないが。

「じゃあ、オレと弟子は食事だけでいいや」

あっさりとそういわれ、オルギンのほうが目を丸くした。これは「タダ働きでもいい」と言っているのと同じで、商人であるオルギンからすれば非常識紀極まりない申し出であろう。

「いや、しかしな……」

「いいって。どうせ本職じゃないんだから」

イストは軽くそういった。オルギンは喜ぶかと思えば渋い顔をしている。きっと「労働には報酬を」という商人たちの大原則に反するのが嫌なのだろう。儲け優先かと思えば、なかなか誠実な商人である。

もっともイストの側にもちゃんと理由はある。ニーナはもともと戦力外で雑用しかできないのだから、彼女の報酬は食費でトントン

であろう。そしてイストは「護衛の仕事」よりも、ヴァイスに頼まれた「オリヴィアをなんとかする」のほうがメインだ。有事に手を抜くつもりはないが、彼からしてみれば「護衛の仕事」はキャラバン隊について行くための方便の感が否めない。

「ただジルドのおっさんはコッチが本職だからな。正規の報酬を払ってやってくれ」

「……分った。少し色を付けさせてもらおう」

固いねぇ、とイストは茶化した。しかし商人は少し固いくらいが信用できるというのがイストの持論である。はじめて魔道具を店（もちろん非合法だが）に売りにいったときには、業突く張りな店主に安く買い叩かれたものである。もっともその店は後でオーヴァに潰されたらしいが。

（この人は信頼できるかな）

少なくとも商人としては。イストは内心でそう評価を下した。

「ところで、夕飯はもう食べたか？」

仕事の話が一段落着いた頃、オルギンはそう切り出した。イストが「まだだ」と答えると、どこに用意してあったのかサンドイッチや簡単なつまみが盛り付けられた大皿もって来た。

「随分と用意がいいな」

「需要を見越して品を仕入れるのが、いい商人の条件だからな」

大皿にはどう見ても一人分には多すぎる量の料理が盛り付けられている。恐らくオルギンはオリヴィアからイストのことを聞いた後、

夕方に彼が来ることを見越して買っておいたのだろう。
オルギンはさらに酒瓶取り出し、杯を二つ用意した。

「一杯、付き合ってくれないか」
「喜んで」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大皿に盛られたサンドイッチとおつまみが半分ほどなくなった頃、オルギンは唐突にその話を切り出した。

「イスト、オリヴィアを嫁にもらってくれないか」
「ん？いいよ」

至極あっさりと返され、オルギンのほうが焦った。焦りすぎて言葉が上手く出てこないのか、口をパクパクさせている。その様子をイストは“してやったり”の意地の悪い笑顔を浮かべて眺めていた。

「……な、ならぁん！！」
「どっちだよ」

とても焦った様子で思わず立ち上がってしまったオルギンに、イストはニヤニヤと意地の悪い笑みを向ける。からかおうとして逆にからかわれてしまった事にようやく気がついたオルギンは、額の冷や汗を拭いながら腰を下ろした。

「花嫁衣裳は、やっぱ白かな」
「まだ言うか」

自らまいた種とはいえ、その場面を想像してしまったオルギンは

慌ててそれを頭の外にたたき出す。まったく心臓に悪い絵面だ。酔いが醒めてしまったではないか。

「まあ、冗談はさておき、だ」

一つ咳払いをして話をそらす。イストが「おや、冗談だったのか」などと茶化してくるが断固無視する。

「俺はな、オリヴィアには幸せになってほしいんだ」

「まあ、その意見に反対する理由はないわな」

嫁ネタでそれ以上オルギンをからかうことはせず、イストは杯を傾けながらそう言った。

「けどまあ、だったらオレとはくっつけない方がいいと思うよ。オレと一緒にいたら忘れられないだろうし、色々と思い出してしまうだろうからな」

何を、についてイストははっきりとは言わなかったが、それでもオルギンには十分伝わったようだ。苦い顔をして、杯を両手で握り締めている。

「……少し、昔話に付き合ってくれないか」

イストが「いいよ」と答えると、オルギンはぽつぽつと思い出すように話し始めた。

「個人で行商なんてやっているヤツは、ほとんどが将来自分の店を持つことを夢見ている」

かく言うオルギンもそんな大多数の一人であったという。だが現実問題として自分の店を持つには先立つものがいる。言うまでもなく“資金”だ。

土地や建物を買うにしろ借りるにしろ、まとまった額のお金が必要になることは想像に難くない。その上、商品を仕入れるための元手や、商売を始めるあたり必要になる税金等々など。商売に関してはまったくの素人であるイストは具体的な金額など思い浮かばないが、それでも個人で用意するにはなかなか大変な額であろう。

「あの頃の俺は、文字通り金稼ぎに必死になっていた」

仕入れはなるべく安く。そして売るときはできるだけ高く。詐欺まがいのことをやったこともあるし、魔道具の抜け荷や密貿易、禁制品に手を出したこともあるという。

「頭の中は金勘定のことばかりでなぁ。どうやったら上手く稼げるか、そんなことばかり考えていた」

そんな時、まだ新しい戦場跡に出くわしたという。当然のことながら、そこには死体と一緒に剣や槍、甲冑などが転がっていた。

「正直な話、金が転がっているようにしか見えなかった」

夢中になって、拾ったという。なるべく質のいいものを選ぼうとして戦場をさまよった。兵士の死体が握り締めている武器を奪ったり、鎧を脱がしたりするようになるまでそう時間はかからなかった。

「あの時、俺はどんな顔をしていたんだろうな」

そうやって集めた武器や甲冑は少し離れた街で売りさばき、結構な額の利益を出せたという。なにしろ元手はタダだ。売却益はまるまる収入となる。

「そりゃ嬉しかったさ。もう一回戦場跡に戻って集めてこようと思ったくらいだ」

その矢先、葬儀の行列に出合った。聞く話によると、その若者は戦場での傷が元で亡くなったのだという。

「そうしたら、途端に怖くなってなぁ」

自分が鎧を脱がせ武器を奪った兵士の中には、もしかしたらまだ生きていて助かった人がいるかもしれない。自分が夢中になって武器を拾っているその横で、呻き声を上げ助けてくれと叫んでいる人がいたかもしれない。

あの戦場跡で自分は金を拾う代わりに何を捨ててきたのだろうか、と。そう考えたら、途端に怖くなったという。手に入れたお金がまるで呪われているかのように感じて、一晩で散財しつくした。

「やめようと思った」

商人を。

そんな頃だったという。オリヴィアと出会ったのは。

「最初は適当な人か施設に預けるつもりだったんだけど、妙に懐かれてな」

結局、二人で旅をすることになった。当然、生活費も二人分必要

になる。オルギンはその二人分の生活費を稼ぐために行商を続けた。

二人が生活できて赤字にならなければいい。そう考えるようになったオルギンは、利ザヤが少なくてもリスクの低い商品を主に扱うようになった。仕入れのときも無理な値切りはせず、売るときも相手の足元を見るようなまねは止めた。金にならないと分っていても、何か頼まれれば出来る範囲で手を貸したりもした。

「そうしたら不思議と縁ができてな……」

人との縁が。そしてせっかくできた縁を壊さないように、つまり信頼には信頼で返すようにしていたら、色々な人たちが少しずつ割のいい儲け話を持ってきてくれるようになったり、便宜を図ってくれるようになったりした。

「一度夢を捨てようと思った男が、今じゃキャラバン隊の隊長だ」

穏やかに、しかし確固とした自負と自信をこめてオルギンは言った。それから長話で乾いた喉を潤すように杯に口をつけて煽った。

「大仰な言い方だが、ここまでこられたのはオリヴィアのおかげだと思っている」

だからって言うのも変だがあの子には幸せになって欲しいし、してやりたいと思っている。そう言ってから、照れくさかったのかオルギンはもう一度杯を煽った。

「一つ聞いて良いか？」

「なんだ？」

「あんた、本当はもう自分の店を持つくらいのことは出来るんじゃ

ないのか」

イストがそういうと、杯を傾けていたオルギンの手がピタリと止まった。

自分の店を持つのが夢だ、と先ほどオルギンは言っていた。商売関係のことはイストにはよく分らないが、これだけのキャラバン隊を率いているのだ。小さな店の一つぐらい、簡単に始められそうな気がした。

「……そうだな。伝手を頼れば店の一つくらい任せてもらえるだろう」

実際過去にそういう話は何度かあったと言う。しかしオルギンはその話を断り、今も“行商人”を続けている。

「……なあイスト、お前さんはなんで旅を続けている？」

唐突に、オルギンはそんなことを聞いてきた。

「そうだな……。改めて聞かれると難しいが、あえて言うなら『面白いものを見たいから』かな」

アバサ・ロットだから、とか、一所に留まると自分の作る魔道具関連で厄介事が起きそうだから、とか色々とそれらしい理由はあるが、それが一番“イスト・ヴァーレらしい”理由だと思った。

「そうか。これは俺の勘でしかないが、恐らくオリヴィアはどこかに定住することを怖がっている」

「……それは、顔の火傷が原因？」

「……」

オルギンは何も言わなかったが、その沈黙がなによりの肯定だった。そしてオルギンが自分の店を持たない理由、それは「オリヴィアが旅を望んでいるから」なのだろう。

「いい人だなぁ、あんた」

なかば呆れ気味にイストはそういった。娘とはいえ血のつながっていないオリヴィアのために自分の夢を後回しにするとは。

「まあ俺のことはどうでもいい」

問題はオリヴィアが旅を望んでいる理由だ、とオルギンは言った。

「お前さんみたいに少なくとも前向きな理由であれば俺も心配なんてしない。だけどあの子の理由は後ろ向きだ。いわば『逃げるため』に旅をしている」

いつか追いつかれて潰されやしないかと心配なんだよ、とオルギンは杯を両手で包むようにして持ち眉間にシワを寄せながら言った。

「何とかしてやってくれないか」

「……十年間一緒にいたあんたに出来なかったことを、オレにやれと？」

オルギンは何も言わなかった。無理なことを頼んでいるという自覚はあったのだろう。

「あの火傷のあとはもう治らない。だったら受け入れるしかない」

「その意見にはオレも賛成」

それは正論で唯一の正解だろう。そうだ、正解など、たどり着くべき地点などもうすでに分っている。しかしそのことを気楽に指摘できるのは、結局のところイストやオルギンが他人だからだ。

「簡単に受け入れられるなら、そもそもあんなに苦しみはしない、か……」

夜空を見上げ、呟くようにしてオルギンはそう言った。彼とて分かっている。オリヴィアがどんな答えを出すにしろ、その答えは彼女の中にしかない。ここで野郎二人が酒を飲みながら相談したところで、何にもなりはしないのだ。

ふう、とオルギンは息を吐いた。それで気分を入れ替える。

「ところでイスト。お前さん、魔道具職人なんだよな？」

「流れの、だけどな」

「なにか売ってくれないか」

魔道具を、ということだろう。すっかり商人の目になったオルギンに苦笑しながら、一つの魔道具を取り出した。手のひらサイズの筒型の魔道具「鷹の目（ホーク・アイ）」だ。イストはそれをオルギンに向かって放り投げる。

「望遠鏡の魔道具だな。懐かしくて久しぶりに作ってみたんだ」

受け取った「鷹の目（ホーク・アイ）」を覗き込むオルギンが「ほう」ともらしているところを見ると、なかなかの好印象のようだ。

「それなら規制にも引っかからないだろう？」

魔道具の商取引には様々な規制が付きまとう。特に武器などの魔道具はその規制が著しく厳しいが、その一方で危険性のないものは一般の商品と指して変わらない扱いだ。

「幾らだ？」
「タダ」

気に入った相手にはタダで、って言うのがオレの流儀なんだ。そうイストが言うと、オルギンは商人の顔を崩して苦笑した。

「まるでアバサ・ロットみたいなことを言うんだな」
「本人だったらどうする？」

意地悪な笑みを浮かべるイストに対して、オルギンは大真面目な顔でこう言った。

「専売契約を結ぶ」
「……あんたやっぱり骨の髄まで商人だよ」

イストは呆れ気味にそう言って、杯を煽るのだった。

第七話　夢を想えば？（前書き）

今回からクロノワサイドです。

第七話　夢を想えば？

クロノワは帝都ケーヒンスブルグを掌握した。掌握、と言ってもクロノワ本人の言葉を借りるならば、

「主のいない家に上がりこんだようなもの」

であって、そこに至るまでの過程において混乱はほとんどなかった、と言っていい。宮殿が焼け落ちたあの火事は大きな混乱ではなかったのか、と言われればまさにその通りなのだが、つまり皇后に与する派の政治的な抵抗がなかった、と言う意味である。

「まあ、あるはずがないですけどね」

そう、そのような抵抗などあるはずがない。なぜなら皇后はクロノワ自身の手によって切り捨てられているのだから。正式な葬儀は行われなかったが、彼女の死にざまとその遺体が埋葬されたことは帝都においては周知の事実であった。皇后が派閥のようなものを作っていたのか、それは分らないが盟主が死んだのだ、もしあったとしても瓦解するのにそう時間はかからないだろう。抵抗がなかったところを見ると、すでに瓦解しているのかもしれないが。

火事に関連して重要な書類も灰となりそれに伴う混乱は収束しておらず、また収束にはかなりの時間がかかると予測されているが、それはこの際別勘定だろう。

「ひとまずは安泰、と言ったところでしょうか」

この“ひとまず”が取れるか取れないか、それが目下最大の問題

であろう。現在のアルジャーク帝国における権力争いの構造は極めて単純である。つまりクロノワ対レヴィナスの構図である。

これは「第一皇子対第二皇子」、あるいは「正室の子ども対妾の子ども」などと言い換えることができる。なんともありきたりで安っぽい構図だとクロノワとしては苦笑するしかない。

「まったく、どこの三流小説でしょうね」

対立の構図が単純である以上、やることも単純である。つまりレヴィナスを討つべく軍を進める、ただこの一点に尽きる。だがクロノワとその隷下にある十五万の軍勢は帝都ケーヒンスブルグで足止めをくっていた。理由は兵糧が足りなくなってきたからだ。

カレナリアのベネティアナ、モントルム南端のブレンス砦、総督府のあるオルクス、モントルム北端のダーヴェス砦、そしてアルジャーク帝国帝都ケーヒンスブルグ。これがクロノワたちの通ってきた道筋である。

南方遠征のために集められた物資のほとんどは輸送に船を使おうと考えていたため、そのための拠点である独立都市ヴェンツブルグに集まっている。少しずつ補給は受けてきたのだが、ヴェンツブルグに寄ることをしなかったため、ここに来て兵糧が底を突きはじめたのだ。

「兵糧が足りないまま動くのは下策もいいところです。ここは待ちの一手ですな」

アールヴェルツェに言われるまでもなく、そんなことはクロノワも重々承知している。それにベネティアナからケーヒンスブルグま

で、かなり急いで行軍してきたのだ。激しい戦闘はなかったとはいえ、兵士たちも疲れが溜まっている。補給物資が届くまでの時間は、良い休息になるだろう。

しかし、下が休んでも上は休めないのは、巨大組織の宿命なのだろうか。焼け落ちた宮殿の変わりに大本営を置くべく丸ごと借り切った高級ホテルの一室に用意されたクロノワの執務室、その机の上に書類が次々と積み上げられていくのを見てクロノワは頬を引きつらせた。

（ストラトスが仕事をサボりたがる理由が分る気がしますね……）

軍が動いていようが帝位継承争いの真っ只中だろうが、人々は変わらず日々の暮らしを営んでいるのだ。そしてそのためには国家と言う組織を回転させねばならない。問題が起こらずとも、日々仕事は発生する。加えて今は非常事態だ。仕事の量が増えていることは想像に難くなく、その仕事が決済できる人間すなわちクロノワのところに集まるのは至極当然のことだろう。

こうしてクロノワが仕事に忙殺されている間、兵士たちのほとんどは休息していたわけであるが、それでも全員が、と言うわけではなかった。クロノワは配下の将軍であるイトラ・ヨクテエルに騎兵ばかり千ほど預けると、オムージュ領との境にあるリガ砦の様子を見に行かせた。もちろんリガ砦の旗色がまだ決まっていなければ、味方に引き込みたいという思惑がある。ちなみに彼の同僚であるレイシェル・クルーディはクロノワから書類仕事を押し付けられ、今は執務室にこもっている。

「駄目でした。リガ砦はレヴィナス殿下の側です」

戻ってきたイトラは簡潔にそう報告した。それを聞いてクロノワの執務室に集まった幕僚たちの表情が固くなる。

「さすがはアレクセイ・ガントール、手回しが早い」

軍務大臣ローデリッヒはレヴィナスではなくアルジャークの至宝と呼ばれる将軍の名前を挙げて、その素早い動きを褒めた。クロノワも彼の意見に賛成だ。レヴィナスの元で軍勢を集め、そして実際に動かしているのはアレクセイ・ガントールその人であろう。

「どう動くと思いますか」

「恐らくは短期決戦。数が揃い次第、リガ砦を越えて真っ直ぐここ帝都ケーヒンスブルグを目指してくるかと」

クロノワは視線だけでアールヴェルツェに続きを促した。つまりそう考える根拠を言え、ということだ。

「オムージュには、十万単位の軍勢を長期間養うだけの兵糧がありません」

オムージュ領の土地は肥沃な穀倉地帯である。それゆえアルジャーク帝国に併合されてからは、当然のことながら食料庫としての役割を期待されている。そのオムージュに兵糧がないとはどういうことなのか。

「今回の南方遠征のために用意した兵糧のほとんどは、オムージュ領から調達したものです」

つまりオムージュ領に備蓄されていた食糧はモントルム領に移動してきていることになる。しかし、それだけで備蓄が尽きるものだ

ろうか。

「それだけではないでしょう」

口を開いたのはクロノワだ。

「遠征が始まる前から、オムージュ領からは大量の穀物が流出していました」

レヴィナスが建築計画を加速させるための資金源として放出したのだ。資金源としての売却と遠征、この二つが重なった結果、オムージュ領には大軍を長期間維持するだけの兵糧はない、とアールヴェルツェは判断したのだ。

「アレクセイ将軍がリガ砦を味方に引き込んだのは、我々がそこに籠もることを恐れてです」

リガ砦にクロノワの軍勢が入って籠城の構えを見せれば、その攻略には時間がかかるだろう。そしてレヴィナスはその時間をもたせるだけの兵糧を確保できない。

「兄上がリガ砦に籠城する可能性は？」

「下策です。ありえません」

兵糧が足りないのに籠城を選ぶ馬鹿はいないだろう。それにレヴィナスが足を止めるのならば、その間にクロノワは実効支配を開始して皇帝としての既成事実を作ることができる。少なくともアレクセイ将軍がそんな下策を打つとは考えられない。

「兵糧を求めてモントルム領を襲う、というのは？」

「……それはあり得ます。しかしその場合はすぐさま軍を南に差し向ければいいだけです」

アールヴェルツェの言葉にクロノワは頷いた。どのみちレヴィナスが最終的に目指すのはここ帝都ケーヒンスブルグである。ならばクロノワには相手の動きを見てから判断するだけの余裕がある。相手が動いたときにそれをすぐに感知できるよう、偵察と関係各所の連絡を密にするようにとクロノワは指示を出した。

（それにしても……）

ここまでの話の流れに、クロノワとしてはやはり違和感を覚える。それはこの場で初めて感じたものではなく、ここ最近ずっと感じているものだ。

「……陛下、どうかなさいましたか？」

クロノワの顔色の変化に気づき、水を向けたのはローデリッヒだ。クロノワは話そうか数瞬迷ったが、この機会に話してみることにした。

「なんというか、『現状兄上を討つ必要があるのか？』と思いまして」

これまでの出来事は、レヴィナスを皇帝にするためとはいえ全て皇后が行ったことである。皇后が帝都で謀略を張り巡らせている間、レヴィナスはと言えば遠くオムージュ領にいた。

つまり、これまでの皇后の行動にレヴィナスは一切関係していない。であればレヴィナスを討つべき理由とは一体何なのであろうか。

もちろんレヴィナスがクロノワを皇帝として認めるとは考えられず、であるならば一戦交えなければならないことは明白である。しかしそのことがあまりにも明白であるために、その前にすべき何かを忘れているような気がするのである。

「いずれ近いうちにこちらからお話しようとは思っておりましたが、ご自分でお気づきになられましたか。流石ですな」

出来の良い生徒を褒める教師のような表情でローデリッヒは頷いた。

「確かに現状レヴィナス殿下を討伐すべき大義名分はございませぬ」

皇后が皇帝の遺書、つまり最後の勅命を無視しようとしたことに関連して、レヴィナスが共謀していたという証拠（実際共謀などしていなかったのだが）はどこにもない。また血縁関係における連帯責任、という手は使えない。アルジャーク帝国の法は連座の罪を規定していないのだ。

リガ砦はオムージュ総督領の管轄ではないから、そのリガ砦を味方に引き込んだことが反逆の証だと言えなくもないが、今回は難しいだろう。レヴィナス側の主張としては、

「帝都ケーヒンスブルグにおける混乱の物理的影響がオムージュ領に及ぶのを防ぐため、リガ砦を一時的にアレクセイ・ガンドールの指揮下に置く」

というものである。彼らの主張する「混乱の物理的影響」というやつが具体的にどういったものなのか定かではないが、アレクセイ

将軍に与えられている権限ならば、リガ砦を一時的に指揮下に置くことは十分に可能であろう。しかも彼の後ろには皇太子たるレヴィナスがいるのだ。

「一度使者を立てるべきでしょうな」

クロノワを皇帝として認めるよう促す使者である。そしてローデリッヒはその使者として自分が赴くつもりだと言った。確かに使者として彼は適任であろう。クロノワが帝位につくその根拠はベルトロワの遺書であり、彼は実際にその遺書に署名をし、その内の一通を保管していたのだから。また軍務大臣という重職にある者がクロノワを皇帝として認めている、そのことを示すことにもなる。

「兄上が兵を挙げるまで待ちませんか？」

しかしその案にクロノワは乗り気ではなかった。レヴィナスがクロノワの帝位継承を認めるとは思えない。ならばそれを促すための使者の末路はただ一つ、死あるのみ、である。ローデリッヒの首が送り返されてくるその時の様子を想像して、クロノワは小さく身震いをした。

ならばレヴィナスの挙兵を待てばよいのではないか。一ヶ月もしないうちにレヴィナスは帝位奪還のための兵を挙げるだろう。そうなれば反逆というこの上ない大義名分を手にすることが出来る。それまで待てばよいのではないか。わざわざ死ぬと分っている使者を立てる必要はない。

「それでは陛下が帝位に関し、何かやましいところがある、と公言しているようなものです」

そうなればレヴィナスの軍の士気は上がり、クロノワの軍の士気は下がるだろう。そうでなくとも事の最初に汚点をつければ、その後の治世に禍根を残すことになる。つまり「彼は正統な皇帝ではない」と口撃する余地を敵に与えてしまうのだ。

「臣下を思いやり大切にするのは良いことです。しかし国という怪物はときに血を求めます。しかも一人の血を渋れば千人の血もって贖うことになる場合さえあります。命の計算をしなければならない、それが皇帝の責にございます」

穏やかに、教師が生徒を教えるようにしてローデリッヒは説いた。あるいはこれが最後の「講義」になると思っているのかもしれない。

「……戴冠式の際には、ローデリッヒ殿に冠を載せていただきたい」

クロノワの申し出にローデリッヒは目を見開いたが、すぐに穏やかな表情に戻った。新たな皇帝の頭に冠を載せる。その名誉は一介の臣下には分不相応なものだ。しかし己の命を捨ててまでクロノワの帝位の正当性を確立しようとしてくれるローデリッヒに対し、クロノワとしてはこれくらいしか出来ることが思い浮かばないのだ。

「それはそれは。是非とも生きて帰って来なければなりませんな」

厳しい教師であるはずのローデリッヒがこの申し出を受け入れたのは、生きて帰ってくることはできないと分っていたからだろう。

ローデリッヒ・イラニールはこの二日後、オムージュ領のベルーカへ、レヴィナスのもとへ使者として旅立った。

結局、彼がケーヒンスブルグへ戻ってくることはなかった。その首が送り返されてくることさえなかったのだ。クロノワを皇帝として認めるようローデリッヒから進言され激怒したレヴィナスは、彼をその場で切り捨て、その遺体を犬に食わせたという。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ローデリッヒがベルーカへ旅立ってからおよそ二週間後、補給部隊がケーヒンスブルグに到着した。その中には補給部隊を率いていた女騎士グレイス・キーアや、補給に関して全体の計画を立てていたフィリオ・マルキスもいた。

「リリーゼ嬢はご実家においてきました」

リリーゼはフィリオの部下として独立都市ヴェンツブルグで仕事をしていたが、フィリオやグレイスがケーヒンスブルグに向けて出立する際、同行することはさせず実家であるラクラシア家に残してきたという。

総督府のストラトスから現在の状況について一通りの説明を受け、「ケーヒンスブルグに補給物資を運んで欲しい」と言われたとき、フィリオはすぐさまクロノワとレヴィナスが帝位を賭けて戦う未来を予感した。

クロノワの側が勝つのであれば、なにも問題はない。しかし、もし負けたらどうなるだろうか。少なくとも、クロノワに味方した者たちに明るい未来はあるまい。

フィリオやグレイスにはその未来を受け入れる覚悟があり、また立場的にももはや引き返せないところにいる。フィリオはクロノワ

の側近だし、グレイスは彼がまだ日陰者であった時分から彼の味方であった。この帝位継承の争いに加わらなくとも、レヴィナスは彼らのことを「クロノワの味方」と判断し、その判断に基づいて扱うだろう。

しかしリリーゼは違う。彼女に覚悟がないと言わない。しかし立場的に見れば、彼女はまだ引き返せる場所にいる。総督府で働いていたとはいえ、その身分は「秘書見習い」であり雑用係とほとんど変わらない。レヴィナスにしてみれば完全に意識の外の存在であろう。

ならばこの帝位争いから離れ「ラクラシア家令嬢」という立場でいれば、万が一のときにも彼女に火の粉が降りかかることはないだろう。

リリーゼはかなり渋ったが、フィリオの決意は固かった。ラクラシア家の当主でありリリーゼの父親に当たるディグス・ラクラシアに協力してもらい、屋敷になかば軟禁する形でおいてきたという。

「過保護ですねぇ」

そういってクロノワは側近であり友人でもあるフィリオのことをからかった。この友人が部下であるリリーゼを可愛がっていたことは知っていたが、今回の対応を見るにもしかしたらそれ以上の感情を持っているのかもしれない。

「ええ、大切な部下ですから」

そういってフィリオはにっこりと笑い、クロノワによるそれ以上の追及を封じた。まったく、政治的腹芸をこんなところで使わなく

てもいいだろうに。

こうして友人をからかいストレスを発散するというクロノワのかなり自分勝手な計画は頓挫したわけであるが、そんなことはさておいてもこの時期にフィリオが帝都ケーヒンスブルグに来てくれたことはクロノワにとってかなり大きな助けになった。

彼らが持ってきてくれた補給物資のおかげで、兵糧不足は解消された。もちろん一年二年と戦い続けることはできないが、少なくとも十五万の軍勢を維持したまま冬を越すことは可能だ。

またフィリオ・マルキスという優秀な人材そのものもクロノワにとって助けとなった。彼がいるだけで仕事の能率が段違いである。

忌々しき白き塔をあらかた駆逐し終えた頃、見計らったわけではないだろうがレヴィナスが動いた。レヴィナス率いる軍勢がリガ砦を越えたという報告がもたらされたのは、フィリオたちがケーヒンスブルグに到着したおよそ十日後のことである。その軍勢の規模は、目算ではあるがおよそ二十万規模であるという。

第七話　夢を想えば？（前書き）

軍務大臣ローデリッヒ、最後の見せ場です！

第七話　夢を想えば？

「自分が何を言っているか、本当に分っているのか？」

レヴィナスの冷たい声が、謁見の間に響いた。

アルジャーク帝国オムージュ領旧王都ベルーカ。総督府が置かれた城の謁見の間にある玉座にはかつてはコルグスがオムージュ王として座っていたが、今は総督であるレヴィナスがそこに座っている。今、謁見の間には主だった面々が揃っているが、軍部を取り仕切っているはずのアレクセイの姿がない。大方、軍の組織が忙しく、そちらを優先するようレヴィナスから命令されているのだろう。

この場には主役が二人いる。

その一人は、皇太子レヴィナス・アルジャーク。

もう一人は、軍務大臣ローデリッヒ・イラニール。帝都ケーヒンスブルグにいるクロノワからの使者である。

「もう一度聞くぞ、軍務大臣。お前は自分が何を言っているか、本当に分っているのか？」

「もちろんでございます。殿下」

ローデリッヒがそう答えると、レヴィナスの視線がスッと鋭くなった。しかし彼はそれを臆することなく受け止める。

「寝言は寝て言え。なぜ皇太子たるこの私が、クロノワごときが父の後を継いで皇帝になることを認めねばならん」

レヴィナスの声は不満と苛立ちで構成されていた。ローデリッヒが使者として来た時点で話の内容には予想がついていたはずだ。彼

の不満と苛立ちが素のものなのか、それとも演技なのか、ローデリッヒとしては判断がしかねた。だがどちらにしても、面白く思っているはずはあるまい。

「それがベルトロワ陛下のご遺言にございます」

「遺書はお前たちによって捏造されたものであると母上が主張された。そのようなものを信じられるか」

「アールヴェルツェ将軍が、ベルトロワ陛下の御筆跡であると確認してくださいました」

それを聞くとレヴィナスは「ふん」と馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「アールヴェルツェはもともと愚弟の配下だ。ヤツのためなら黒をも白というだろうよ」

レヴィナスにしてみれば自分を後継者として認めない遺書になど用はない。彼にしてみればそんなものは存在していないのと同じだ。それに事がここに至れば、もはや遺書にも皇太子という称号にも価値はない。

「ようは私とクロノワ、どちらがより皇帝にふさわしいか、だ」

大仰に両手を広げ、芝居がかった口調でレヴィナスはそういった。その台詞の裏には、「自分以上に皇帝にふさわしい人間などいない」という自負がありありと感じ取れる。しかしローデリッヒに言わせれば、それは根拠のない自己過信だ。

レヴィナスが絶対の自信を持っているのは自分の美しい容姿であり、彼はそれをもって自分を皇帝に最もふさわしい人間だと思って

いるようだが、あいにくと皇帝の職責に容姿はほとんど関係ない。無論、人前に立つ仕事である以上見目麗しい容姿であることにこしたことはないが、不細工で醜悪な顔つきであってもいっこうに構わない。つまり“容姿”というパラメータの重要度はその程度のものでしかない。

「皇帝にふさわしいのはクロノワ様のほうです」

ローデリッヒがそういうとレヴィナスの芝居がかった雰囲気が一気に消滅し、代わりに険悪な空気がその場を支配した。

「……お前の滑舌が悪いのか、それとも私が聞き間違えたのか。聞こえるはずのない名前が聞こえたのだが？」

「ならばもう一度はっきりと申し上げます。皇帝の座にふさわしいのはクロノワ様です。例えベルトロワ陛下の遺書がなくとも」

重くのしかかるような空気の中、ローデリッヒは雰囲気に飲まれることなく己の意見をはっきりと言った。

「……聞き捨てならないな」

もはや不機嫌さを隠すこともせず、レヴィナスはローデリッヒを睨みつけた。彼は石の玉座からゆっくりと立ち上がると、ローデリッヒのほうへ向けて歩を進めた。その左手には装飾過多な鞘に収められた剣が握られている。

二人はおよそ二歩分の距離を開けて向かい合った。謁見の間に集まった者たちの視線がそこに集まる。誰かが息を呑む音がした。

「私が、この私があの愚弟に劣ると、お前はそう言いたいのか？」

「……個人の優劣は大きな問題ではありません」

実際、レヴィナス個人は優秀な人間であろう。しかし賢帝になるか愚帝になるか、それを決めるのは個人の才能や能力ではない。それがベルトロワと言う皇帝に仕え、宰相エルストハージや外務大臣ラシアートという有能な同僚と共に国を支えたローデリッヒの結論であった。

もちろん優秀であればそれが一番良い。しかし歴史書を紐解けば、愚帝や愚王さらには生きた災厄と評価されているような人物の中にも知性に満ち才能に溢れた者はいる。いやむしろ“道を踏み外す”のは優秀な人間のほうが多いと歴史書は証明している。

では何が重要なのか。

人を見る目とものを聞く耳。それがローデリッヒの出した結論だった。

皇帝には色々な人間が近づいてくる。真に国のことを考えている者もいれば、擦り寄って甘い汁を吸うことしか考えていない者もいるだろう。そのような人間を見極めるために、まずは「人を見る目」が必要である。

また国という組織には様々な面がある。そして皇帝はその全ての面に通じていなければならない。しかし、現実問題として一人の人間にそれは不可能である。ならばそれぞれの面に通じた人間に意見を聞くしかない。最終的な判断は皇帝自身が下さなければならないが、それでもまずは「聞くこと」が重要なのだ。

この“目”と“耳”さえ持っていれば、皇帝の役職は凡人であっても務まる。逆にこの二つを持っていなければ、どれほど優秀であ

ってもいずれ必ず国に害悪をもたらす。それがローデリッヒの出した結論であった。

「クロノワ様の周りには国を想う者たちが集まり、またクロノワ様は彼らの意見に真摯に耳を傾けられる」

もっともクロノワの周りに俗物が少ないのは、これまで彼が日陰者で取り入ってもうまみがなかったから、という理由もある。皇帝となれば今までとは比べ物にならない数の俗物たちが腹に一物を抱えて擦り寄ってくる。その時、クロノワの「人を見る目」の真価が問われるだろう。

いまだ未知数の部分もあるが、ローデリッヒの目から見てクロノワは十分に及第点を越えている。ではレヴィナスはどうか。

「レヴィナス様、貴方は人の意見を聞き入れられますかな」

ここで言う「意見を聞き入れる」とは、意見が対立し相手のほうが正しいと思えるときに自分が折れて相手の意見を採用する、ということだ。

「なぜそんなことをしなければならない」

レヴィナスは、それを真っ向から拒否した。そして拒否することにいささかの疑問も抱いていないことが見て取れる。

ローデリッヒが見るところ、レヴィナスは自分という存在に固執しすぎている。自分に自信がありすぎるために、自身の限界に無頓着なのだ。

「自分の考えはいつも正しい。自分のやることは全て上手くいく」となっているのは自分の美貌なのだ。

彼にはそんな幻想を抱いている節がある。しかもその自信の根拠

繰り返すが、レヴィナス個人は間違いなく優秀な人間である。しかし、ローデリッヒは個人の能力に重きを置いていなかった。

「人は必ず間違いを犯すのです」

ローデリッヒが重きを置いているのは、組織の能力である。そして彼がその中で特に重要だと思っているのは、組織内部の個人が犯す間違いを訂正あるいは修正する能力である。組織の自浄作用、とでも言えばいいかもしれない。レヴィナスが作り上げた組織には、この能力がない。

レヴィナスは総督となったときに「法を過去にさかのぼって適用する」という、法治国家における禁じ手を用いた。この責任を大きな括りの中で追及するとすれば、その所在は総督府にあると言える。つまり発案者が犯した間違いを組織の内部で修正できなかった、自浄作用が働かなかった、ということだ。

次に組織、つまり総督府の内部について少し考えてみたい。

まず、発案者がレヴィナスであった場合、彼を補佐すべき周りの人間はどうしたのか。上司であるレヴィナスに対し諫言をおこない、考えを改めるよう促しただろうか。

促したのであれば、レヴィナスは彼らの言葉に耳を貸さなかったことになる。つまり彼は「ものを聞く耳」を持っていない。

促さなかったのであればさらに深刻だ。レヴィナスの周りには国を想い諫言をおこなう人物がいないことになる。それはつまり彼に「人を見る目」がないことを意味している。

また発案者が周りの人間であった場合、その人物は「レヴィナスが気に入りそうな案」を持ってきたことになる。それはつまり「取り入ろう」という意図があってのことだ。しかもそのためにタブーを犯しているのだ。その者は国に害悪をもたらす獅子身中の虫、何の役にも立たない無能者よりもタチが悪い。その案を採用した時点で、レヴィナスには「人を見る目」がないことになる。

無論、組織とて間違いを犯す。それを構成している人間が間違いを犯すからだ。しかし今回オムージュ総督府が犯した間違いは、その許容範囲を超えている。そしてその最終的な責任は、総督たるレヴィナスに帰されるべきなのだ。

「……人は皆、間違いを犯すのです。そのことを認めようとせず、自分だけは例外だと勘違いしている子どもに、皇帝の座はふさわしくありません」

「黙れ……！」

怨念さえこめてレヴィナスは低く唸った。彼の声には、もはや芝居がかった余裕は感じられない。しかしローデリッヒはかまわずに続ける。

「もう一度申し上げる。皇帝にふさわしいのはクロノワ様です」

「黙れっ！！」

「新たな皇帝の下でお働きになりなさい。それが貴方にとっても国

にとっても最善の道です」
「黙れと言った！！」

レヴィナスが叫ぶと同時に剣を鞘から抜き放った。謁見の間に鮮血が舞う。血溜りに倒れこみ呻き声をもらすローデリッヒに、レヴィナスは鞘を投げ捨て両逆手に持ち直した剣を突き刺す。

「うぅぁあああぁあああぁあああああああ！！！！」

何度も、何度も何度も何度も、レヴィナスは剣をローデリッヒの体に突き刺す。髪の毛を乱し一心不乱に剣を突き立てるその姿には、いつもの悠然とした態度は微塵も残っていない。返り血を浴びたその美貌は狂気を増し、見る者の足をすくませた。

「ハアハアハアハァハァ……」

背中にいくつもの刺し傷を負いついには絶命したローデリッヒを、レヴィナスは肩で荒い息をしながら見下ろす。

「……ふ、ふふふ……ふは、ははははぁあああはっはっはっはっはぁ！！」

突然、レヴィナスが哄笑を上げた。左手で乱れた髪の毛をかきあげ、狂気に目を血走らせてレヴィナスは嗤う。

カラン、と乾いた音が響いた。レヴィナスが持っていた剣を床に投げ捨てたのだ。笑いを収めたレヴィナスは、ゾッとするほど冷たい目でローデリッヒの死体を見下ろした。

「そいつの死体は犬にでも喰わせてしまえ」

冷たくそう言い放つと、レヴィナスは身を翻し謁見の間から出て行った。後に残された人々はその場に漂うレヴィナスの狂気の残滓にあてられ、すぐには動くことができない。血の臭いが漂う謁見の間で、人々はまるで石像と化したかのように立ち尽くしていた。

第七話　夢を想えば？（前書き）

お気に入り登録件数が１７００件を突破しました！

読んでくださる皆様、本当にありがとうございます。

これからもどうかよろしくお願いします。

第七話　夢を想えば？

――レヴィナス、動く。

余談になるが、この先クロノワの軍勢のことを「クロノワ軍」、レヴィナスの軍勢のことを「レヴィナス軍」とそれぞれ呼称する。

この報がもたらされたのは、フィリオたち補給部隊がケーヒンスブルグに到着してからおよそと十日後、ローデリッヒがベルーカに向けて旅立ってから三週間強経ってからのことだった。

その報告に、クロノワは人知れず嘆息した。

レヴィナスが軍を率いて動いているということは、ローデリッヒの説得は失敗したのであろう。そのことについて、どうこう思うことはない。もともと成功の見込みなど無いに等しく、対外的な正当性を証明するための使者だったのだから。

しかしその首すら送り返されてこないとは。

（ローデリッヒには、よほど無残な死に方をさせてしまったようです……）

生きている可能性は考えない。辛くなるだけだから。短い間ではあったが皇帝としての心構えを教えてくれた男に、クロノワは目をつぶり短く黙祷を捧げた。

目を開けると、クロノワは無理やりに意識を斥候からの報告に向けた。目の前の問題から目をそらしていては、ローデリッヒに顔向

けができない。

「規模は二十万強、ですか……」

その数は呆れるやら感心するやら、だ。十万規模だとは思っていたが、まさかこれだけの時間で二十万もの数を集めてくるとは。兵の数において敵を上回ることは兵法の基本だが、随分と無茶をしたのではないだろうか。

「どうやって兵を集めたのでしょうか？」

「恐らく、半分近くは傭兵だと思います」

オムージュの全戦力は三〇～三五万と言われている。だがこの全てを動員できるわけではないし、なによりも領土全体から集めなければならないのだからもっと時間がかかるはずである。おそらく大盤振る舞いしてお金をばら撒き傭兵をかき集めたのだろう、というのがアールヴェルツェの予測だった。

「短期決戦、ですな」

十万規模と予測していた時でさえ、レヴィナスは軍勢を長期間養うだけの兵糧を確保できないとふんでいたのだ。二十万となれば軍を維持したまま新年を迎えることも難しいのではないだろうか。となればレヴィナスの、というよりアレクセイの思惑としては、数に物言わせて一戦し、そこで全ての決着を付けるつもりだろう。

「籠城したくなりますね」

レイシェルがそういった。

籠城して長期戦に持ち込めば、やがてレヴィナス軍は兵糧が尽き

る。そうなれば軍勢の半分近くを占める庸兵の多くは愛想を尽かして逃走するだろう。そうでなくとも、軍勢を維持することはできなくなる。

それにこれから冬本番である。レヴィナス軍を構成する兵士たちのほとんどは、オムージュかその周辺諸国の出身であると思われる。北国であるアルジャークの厳しい冬は、彼らには辛いだろう。

「籠城はしません」

しかしクロノワはその案を却下した。籠城するとなれば籠もるのは帝都ケーヒンスブルグである。無論、ケーヒンスブルグは高い城壁によって囲まれているが、しかしここは戦いを目的として作られた要塞や城郭ではない。人々が生活する都市なのだ。

それにレヴィナス軍の兵士たちはケーヒンスブルグの住民に、同国民としての愛情など持っていない。万が一、城壁が破られレヴィナス軍の侵入を許した場合、ほぼ確実に略奪や暴行が起こる。それはクロノワにとって最も望まないことだ。

またこの戦いは内戦なのだ。勝つにしろ負けるにしろ、決着は迅速に、被害は最小限にしたい。ならば野戦で雌雄を決するのが一番いいだろう。

「今、敵軍はどの辺りにいると思いますか？」

机の上に地図を広げる。

リガ砦を見張っていた斥候がレヴィナスの軍勢を認めてから帝都ケーヒンスブルグに帰還するまで、昼夜を問わず馬を飛ばして三日かかったという。その三日間、レヴィナス軍は帝都に向けて進攻を

進めているから……。

「恐らくは、この辺りかと」

アールヴェルツェが地図に描かれた街道上に、チェスの駒を置いた。ちなみに黒の騎士（ナイト）だ。同じく地図上のリガ砦（ルーク）の位置には黒の砦が、ケーヒンスブルグには白の砦（ルーク）と騎士（ナイト）が置かれている。

「こちらが出陣するのにかかる時間は？」

「一日あれば」

休息中とはいえ戦いが迫っていることを忘れている者などいない。本当はもっと早く全軍に臨戦態勢を整えさられるのだが、今回はまだ時間的に余裕がありそこまで急いでも仕方がない。

「ですから決戦の場はここになるかと」

そういってアールヴェルツェが白と黒の騎士（ナイト）を動かし、地図上街道脇のある一点で向かい合わせた。そこは……。

「ギルマード平原……」

イトラが呟いた。

この予想はレヴィナス軍の方でもしているだろう。古来より戦場の選定というのは、敵味方の両軍において不思議と一致する。

「できれば、陛下はケーヒンスブルグに残っていてもらいたいのですが……」

そういってアールヴェルツェは白の砦（ルーク）の隣に白の王（キング）をそっと置いた。

「いえ、私も一緒に行きます。兄上もご自分で軍を率いているのでしょう？」

そういってクロノワは白の王（キング）と黒の王（キング）を、それぞれ同じ色の騎士（ナイト）のそばに置いた。

確かに斥候の報告では、遠目にではあるがレヴィナス本人とアーデルハイト姫の姿が確認されている。自分の細君を戦場に同伴すると言うレヴィナスの行動が、彼の自信の大きさを表しているようだ。もっともクロノワの知るレヴィナスは、いつも自信にあふれていたが。

「一戦して破れても、陛下がご存命なら再起を図ることも……」

「いえ、この一戦で決着をつけます」

それはつまり、負ければ死を選ぶ、ということだ。

繰り返すがこの戦いは内戦だ。内戦を長く続けても得るものなど何も無く、ただ国力が磨り減っていくだけである。またアルジャーク帝国はここ最近で急速に国土を増した。泡のように膨れ上がった、といってもいい。それら新しい領地の足場固めさえ中途半端なこの状況で内戦が長引けば、泡は破裂し手痛いしっぺ返しをくらうだろう。

それを避けるためにはただ一戦のみで雌雄を決するしかない。負けるつもりなど毛頭無いが、内戦の早期終結を志している以上、目の前に迫った戦いで負けた場合クロノワは自決する覚悟でいた。

（イストには……、怒られてしまいそうですね……）

右手にはめている彼から貰った聖銀（ミスリル）製の指輪、魔道具「雷神の槌（トールハンマー）」

を撫でながら、クロノワは友人の顔を思い浮かべ苦笑した。そういえばこの魔道具、いまだ実戦で使ったことがない。

「それに再起を図ることなど、不可能でしょう」

仮にクロノワが帝都ケーヒンスブルグに残っていたとしても、主力が野戦で負けてしまえばそれで趨勢は決する。敗残兵をまとめてケーヒンスブルグに籠もってみても、敵軍を防ぎきるのは難しいだろう。

ならば逃げ延びるしかないが、逃げ延びる先はモントルム領しかない。モントルム領の版図は三〇州で、アルジャーク本土とオムージュ領の合計一九〇州を手中に収めたレヴィナスには抗しきれまい。

だがさらに南、併合したばかりのカレナリアに行けば、捕虜にしたテムサニス軍およそ十万がある。故国に戻すことを約束すれば、この戦力は使えるかもしれない。さらに同じく捕虜にしてあるテムサニス国王ジルモンドの命を盾に取れば、さらなる援軍を引き出すこともできるかもしれない。

ここだけ考えれば、一戦して負けたとしても再起を図ることは十分可能なように思える。しかしこれは最大限上手くいったときの話だ。これまで日陰者であったクロノワに、しかも一戦して負けているクロノワに、最後まで力を貸してくれる奇特な人間が一体何人いるだろうか。身内に裏切られた者の末路は悲惨だ。もちろんアールヴェルツェたちは信頼しているし裏切られることなど考えてもいないが、しかし味方の全員が彼らのようであると楽観できるほどクロノワは世間知らずではなかった。

さらに、より簡単で単純な理由として、クロノワにはそこまで泥

仕合を演じるつもりは無かった。早期決着。勝つにしろ負けるにしろ、それが彼の最大の望みである。

「……分りました。では、勝ちましょう」

クロノワの覚悟を感じ取ったのか、アールヴェルツェは折れた。

「ええ、勝ちましょう」

窓の外を見れば、雪が舞い始めている。

敵はレヴィナス・アルジャークと、アルジャークの至宝アレクセイ・ガンドール。これまでで最大の難敵が、クロノワの前に立ちはだかろうとしていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日、ギルマード平原には雪が積もっていた。とは言っても薄く、である。もとよりこの国で生まれ育ち、そして訓練を積んできたクロノワ配下のアルジャーク兵がこの程度の雪を障害に感じることはない。

「もう少し降ってくれると、こちらに有利だったのですがね……」

本陣でクロノワは一人でそうもらした。ここにはアールヴェルツェやイトラ、レイシェルといった主立った将軍たちはいない。彼らは自分の部隊を率いて、すでに隊列を整えている。

レヴィナス軍の兵士たちにアルジャーク出身の者はほとんどいない。つまり彼らはクロノワ軍の精鋭たちと違い、雪原での戦闘訓練など受けていない。慣れない戦場に放り込まれればその力を十全発

揮することはできないだろうが、今日のように薄く積もっているだけならばその影響は少ないと見るべきだろう。

ただこの予測さえもアルジャーク人の視点から見たものだ。オムージュ人がこの雪をどう感じているか、それはクロノワにとっては埒外のことであった。

「天候は予測できても思い通りにはなりませんからね。こればかりはどうしようもありません」

そうクロノワの独り言に反応したのは、本陣で彼を補佐している女騎士グレイス・キーアだった。彼女は先の南方遠征の際には、後方で後方部隊を実際に動かす仕事をしていた。その仕事は重要であり、グレイスも職責を全うしてくれていたが、彼女が本来望んでいたのは戦場での功績であった。久しぶりに感じる戦場の空気に、彼女の顔はまるで鋭利な剣のように引き締まっていた。

クロノワとしてはグレイスのように意気込みを外に表現できずにいた。胃の辺りに違和感を覚える。痛いわけではない。締め付けられているわけでもない。しかし、無視できない違和感があるのだ。

それはすなわち、緊張だろう。だがクロノワはその緊張を糧として意気込みを燃やし、それを外側に表現することが出来ずにいた。あるいは、もともとそういう性分なのかもしれない。彼にできることといえば、努めて普段どおりに振舞うことだけだ。

そんな、決して自信にはつながらないような思考から逃れるようにして、クロノワは敵味方の布陣に視線を向けた。

クロノワ軍の布陣は今までと同じである。つまり、主翼、両翼、

そして本陣の四つに部隊を分けている。上空から俯瞰することができれば、横に広いひし形のそれぞれの頂点に部隊が配置されているように見えるだろう。数の配分としては、本陣一万五千、主翼五万五千、両翼それぞれ四万となっている。

本陣はクロノワ、主翼はアールヴェルツェが率い、右翼はイトラとレイシェルが率いている。左翼は他に信頼の置ける将軍に任せていた。

それに対しレヴィナス軍は軍を本陣と両翼の三つに分けている。部隊の配置としては、本陣を奥に引っ込め、両翼が突出している。凹字、あるいはU字といった感じ陣形だ。数の配分としては、本陣三万、両翼が八万五千ずつ、といったところか。

敵軍は両翼だけでクロノワ軍を数の上では凌駕している。改めて数の不利を思い知らされた。

「普通ならば、同じか逆の布陣の仕方になると思うのですが……。どう思われますか」

グレイスはそうクロノワに疑問を投げかけた。彼女の言いたいことはなんとなくだが分る。数の上では劣っているクロノワ軍のほうが、部隊を一つ多くしている、つまり兵力を分散しているのだ。悪くすれば確固撃破の危険がある。

ただクロノワ軍の布陣は奇抜なものではなく、よくある王道的なものといえる。レヴィナス軍の布陣も奇抜なものでは決して無いのだが、数的に有利な状態でわざわざ部隊数を少なくするのは不思議に思えた。

「こちらの数を見誤ったのでしょうか？」
「いえ、それはないでしょう」
あのアレクセイ・ガンドール将軍のことだ。事前に斥候を放ち、こちらの数を調べるくらいの事はしているはずである。
「むしろあの布陣は、あちらの内部事情によるところが大きいと思いますよ」
レヴィナス軍の半分近くは傭兵である、とアールヴェルツェは予測したし、クロノワもその考えに賛成だ。つまり、部隊数を多くしても綿密な連携は取れない、とアレクセイは考えたのではないか。ならば数の上では勝っているのだから、分散させずに正面から数をぶつければよい。そうアルジャークの至宝は考えたのではないだろうか。
「『戦術は単純なほうが良い』。アレクセイ将軍はよくそうおっしゃっていました……」
『戦略は複雑でも良い。しかし戦術は単純なほうが良い。なぜなら戦術は万人が理解し、そして動かなければならないからだ。そして単純な戦術というのは、隙が少ない』
これが、アルジャークの至宝と呼ばれる男の哲学であった。現在のアルジャーク軍のあり方はこの考えが基本になっているといってもいい。イトラやレイシェルといった若手の将軍はもちろん、アールヴェルツェのように比較的歳が近い将軍も影響を受けているのだから。
そのアレクセイ・ガンドールと今こうして戦場で相対していると

は。

「なんで、こんなことになったんでしょうね……」

そのグレイスの思いは、きっとこの場にいる全てのアルジャーク兵が共有していることだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（なぜ、このようなことになった……？）

アレクセイ・ガンドールもまたその疑問を胸に抱いていた。レヴィナス軍を率いている彼の眼前に相対しているのはアルジャークの精鋭たち、つまりつい最近まで頼もしい味方であり部下であった者たちだ。

アレクセイがレヴィナスの軍勢を組織し、そして指揮しているのは、ただひとえに彼がその時ベルーカにいたからに他ならない。アルジャークの至宝たる彼以上の適任者など、一体誰がいるというのか。無論、アレクセイも自分以上の適任者がいないことを自覚していた。

だから、その仕事を引き受けた。

しかし言ってみれば彼がその仕事を引き受けたのは、状況に流された結果であり、レヴィナスこそ次の皇帝としてふさわしいと考えていたわけではなかった。

もちろんレヴィナスは皇太子である。皇太子という称号は帝位継承権第一位を表しており、その意味では彼が最も次の皇帝としてふさわしい。

しかし軍務大臣ローデリッヒ・イラニールは第二皇子であるクロノワを次の皇帝として認めるよう、使者としてベルーカを訪れたらしい。あいにくとアレクセイ自身はその場にいなかったが、軍務大臣たる彼がクロノワを推すということは、ベルトロワが遺書の中でクロノワを後継者として指名した可能性が高い。

もっともその遺書は宰相らによって偽造されたものであると皇后が宣言した。だがエルストハージたちがベルトロワの遺書を偽造したなどということは、アレクセイに信じられないことであった。さらに偽造であると判断した根拠が不明なのだ。そのことがアレクセイに一つの考えを抱かせ続けている。

「遺書の内容は皇后陛下にとって都合が悪く、それを認めたくないがために偽造であると言い張っているのではないか」

全ては憶測である。しかしどうにも真実が見え隠れしているような気がしてならない。もしこの憶測の通りであれば、正当性はクロノワのほうにある。皇帝が残す遺書は勅命とみなされるからだ。

しかし全ては憶測でしかない。確固たる事実のみを残そうとすれば、「皇太子はレヴィナスである」という事実だけが残る。

だが、自分は全てのことを知っている、などという幻想をアレクセイは抱いていない。つまり彼が知らない事実がどこかにあるかもしれないのだ。

アレクセイは、迷った。軍を組織し戦略戦術を練る一方で、レヴィナスとクロノワの一体どちらが正統な後継者なのか、悩み続けた。

悩み続け、しかし答えは出なかった。答えが出ないまま、彼は今敵軍と相対している。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最初に動いたのは、クロノワ軍のほうであった。銅鑼の音が鳴り響き、主翼と両翼が静かに前進を開始する。それに合わせるように、レヴィナス軍の両翼も動いた。両軍とも本陣はまだ動いていない。

（さて、どう動きますかね……）

両翼同士がぶつかる展開になるのはほぼ間違いない。ならば鍵になるのはアールヴェルツェが率いるクロノワ軍の主翼五万五千の動きだ。

敵軍両翼の動きから察するに、アレクセイはまずこの主翼に狙いを定めたようだ。レヴィナス軍の両翼は真っ直ぐ進むクロノワ軍主翼に対して、斜め左右から襲い掛かるように進路をとる。

それを見たアールヴェルツェは、進路を斜め右、つまり敵軍左翼に向けた。さらにクロノワ軍の両翼は、敵軍の両翼の側面をつくように進路を少しずつ調整していく。

両軍の距離が少しずつ狭まっていき、銀色の矢の雨が双方から放たれ、また双方に落ちていく。

――――激突。

まずぶつかったのはクロノワ軍の主翼とレヴィナス軍の左翼であった。さらにレ軍左翼に対してその側面にク軍右翼が突き刺さる。

さらにレ軍右翼がク軍主翼に襲い掛かり、そのレ軍右翼をク軍左翼が押し戻そうとする。

その様子をクロノワは冷静に観察していた。遠目にもかかわらず血しぶきが舞っているように見えるのは、薄く積もった雪のせいかもしれない。きっとあの戦場の雪は鮮血に染まっていることだろう。

最初は押しつ押されつ、一進一退の攻防が続いた。だが徐々に戦況はレヴィナス軍優位へと傾いていった。その要因は……。

「魔導士部隊、ですか……」

戦場のあちらこちらで爆発が起こり、閃光が光っている。魔導士が投入されると、戦闘の激しさはそれまでの比ではない。普通魔導士部隊というのは虎の子の切り札なのだが、遠目でも分る魔導士の数の多さがこの決戦が双方にとって後に引けない戦いであることを物語っている。

クロノワはこの戦いにあるだけの魔導士戦力を投入している。それはレヴィナスも同じだろう。だが、レヴィナス軍にはオムージュの魔導士部隊以上の魔導士がいるように思われた。

「傭兵、ですか……」

魔導士と言うのは欠員が出た場合それを埋めることが難しく、それが虎の子扱いされる一因となってきた。しかし庸兵の中には魔導士ライセンスを取得し、自前の魔道具を持っている者もいる。彼らのような戦力は雇う側から見れば使い捨てができる、実に使い勝手のいい魔導士戦力であった。

今回、レヴィナス軍の半分近くは傭兵であるというのが、クロノワ軍上層部の見解である。それはつまり正規の魔導士部隊と同数かあるいはそれ以上の“在野の魔導士”がレ軍に参加していることを意味していた。

ただ魔導士と言う存在は一般に我が強くて扱いにくい。在野の魔導士で傭兵などやっている者ともなればその傾向は一層顕著だと聞いたことがある。そんな荒くれ者どもをまとめ上げているアレクセイは流石であると言えるだろう。

「押されていますね……」

クロノワの横でグレイスがそうもらした。平静を保ってはいるが、不安の色を隠しきれてはいない。

現在の陣形はレヴィナス軍が凸字で、クロノワ軍が受け止める形になっている。しかしもともとの数が劣っているせいかク軍の陣形は半包囲のU字にはならず、不完全な半包囲（J字とでも言えばいいかもしれない）となっていた。

クロノワ軍はじわりじわりと後退させられている。それは同じだけレヴィナス軍が前進してきていることを意味している。

レヴィナス軍の攻撃はやはりクロノワ軍主翼に集中していた。最も戦力の多いここを喰いちぎって突破し、そのままク軍本陣を襲いクロノワの首を取る。それがアレクセイの思惑であろう。

アールヴェルツェはアレクセイの猛攻に良く耐え、よく凌いでいるといえた。彼が主翼を率いていたからこそ、クロノワ軍はいまだ全面崩壊には至らず、押され気味とはいえ戦線を維持することがで

きていた。

しかし何ごとにも限界があり、そして終わりが訪れる。このまま戦況が進展すれば、いずれクロノワ軍は崩壊しレヴィナス軍の勝利で終わる。そうレヴィナスやアレクセイは思っていたし、クロノワやアールヴェルツェもそれを承知していた。

そう、このまま何もしなければ。

「風が、出てきましたね……」

確かに風が出てきた。そして雪が降り始める。風と雪。この二つが重なる現象を、人は吹雪と呼ぶ。風が強まり降雪が多くなるにつれて、吹雪は激しさを増していく。戦場の視界は一気に悪化し、クロノワのいるところからレヴィナスの本陣を視認することはできなくなってしまった。それはつまり、逆もまた同じ、ということである。

「そろそろ、動くとしましょう……！」

クロノワがそう声をかけると、グレイスは一瞬緊張で体を硬くし、しかしすぐに全軍出撃準備の号令をかけた。

一瞬にして、クロノワ軍本陣の臨戦態勢が整う。そんな兵士たちを心強く感じながら、クロノワは馬上から声をかける。

「これより我々は戦場を駆け抜け敵本陣を強襲する」

その声は決して大きくなかった。しかも吹雪の風が耳元でうるさく鳴っている。しかし不思議とクロノワの声を聞き逃した者はいな

かった。

「各自が日ごろの訓練の成果を発揮し、自分の務めを全うすることを期待する」

そこまで言ってから、クロノワはふと表情を緩めた。

「誰が国を治めるのかなどということは、そこで暮らしている人々の生活に比べれば些細な問題です」

このクロノワの発言は暴言に類するだろう。少なくともこれからその「国を治める誰か」を決める戦いに臨もうとする、兵士をその戦いに臨ませようとする者の言う台詞でない。グレイスが慌て、兵士たちがざわめく。クロノワは片手を上げてそれを制した。

「それでも私に賭けてみたいと思ってくれるなら！それでも私に夢を見てみたいと思ってくれるなら！」

半瞬の、空白。

「どうか、私に力を貸してほしい」

その声は、やはり大きなものではなかった。しかし本陣にいる全ての兵士たちの耳に、その言葉は届いた。

一瞬の沈黙。その沈黙が見えざる斧となって空気を割る前に、大歓声が起こった。全ての兵士たちが手に持った武器を掲げ、歓声を上げてクロノワの言葉に答えた。

クロノワは馬首をひるがえして戦場に向けた。彼の後ろからはい

まだ歓声が響き鳴り止むことがない。

「全軍出撃！」

一際大きな歓声が、それに答えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レヴィナスは本陣から戦況を眺めていた。始めこそ互角であったが、今は味方が押している。それを認めると、レヴィナスは満足そうに頷いた。

風が、出てきた。加えて雪も降り始めている。この分では吹雪になりそうである。

「寒くはないか？」

レヴィナスは自分の右に控えているアーデルハイトにそう声をかけた。彼女は厚手の防寒具を着込んでいたが、それでも慣れない吹雪は辛かろう。

「戦況は我がほう有利だが、終わるまでには今しばらく時間がかかるだろう。後ろに下がって休んでいてはどうだ」

レヴィナスの声は穏やかで優しい。心からアーデルハイトを大切に思い、彼女の身を案じていることが分る、そんな声であった。

「いいえ、殿下。大丈夫ですわ」

アーデルハイトもまた、そうやって気にかけてもらえるのが嬉し

いのか、幸せそうな笑みを浮かべてそう応じた。

レヴィナスとアーデルハイト。この二人の結婚は完全な政略結婚でしかなかったはずだが、これまでの夫婦仲はきわめて良好である。

風と雪が強くなっている。吹雪は激しさを増し、さっきまではっきりと見えていた戦場は、今は白くかすんでいる。まるでこの本陣だけが戦場から切り離されてしまったかのようにレヴィナスは感じた。

吹雪は肌を切りつけるかのように冷たい。しかしレヴィナスは内心に安心感を覚えていた。耳元でうるさく鳴り響いている風の音も、戦場から響く悲鳴と喧騒を遠ざけてくれる。目を閉じれば、そこはもはや戦場ではない。

つまるところ、レヴィナスは戦場と言う場所が嫌いだった。決して怖いわけではない。そう自分に言い聞かせている。

（もう少しで終わる……）

そうすれば、皇帝の椅子は正しくレヴィナスのものとなる。そう、レヴィナスが求めているのは皇帝の座のみである。それをあの愚弟が宰相や大臣たちと共謀し、不遜にも己がものにしようとしている。兄のものを弟が掠め取ろうなど、万死に値する。

そして極めつけは、あのローデリッヒとの会見だ。あの愚か者はよりにもよって自分よりも愚弟のほうが皇帝にふさわしいとぬかしたのだ。今思えば、犬に食わせるにしても、生きながらにそうするべきであった。

「クロノワを捕らえ私の前に引きずり出せ」

戦いが始まる前、レヴィナスはアレクセイにそう命じた。人が考え出した処刑法のなかで、最も残酷な仕方であの不届き者を始末するためだ。そして先ほどまでの戦況を見るに、その時は近いように思われた。

（早く……！早く早く早く！）

そうやって何かをせき立てる自分の心を、レヴィナスは少し持て余している。自分はこんなにも性急で器の小さな男だっただろうか。否、断じて否である。

「どうかなされましたか……？」

目を閉じたままのレヴィナスを怪訝に思ったのか、アーデルハイトが声をかけてくる。レヴィナスは目を開けると、彼女を安心させるように微笑んだ。

「案ずるな。大事無い」

なんにせよ戦いはもうすぐ終わる。そして皇帝となれば戦場に出ることもなくなるだろう。

（美しき私に、戦場は似合わぬのだ……）

その思いは、心の底からスッと出てきた。

吹雪はいよいよ激しさを増している。視界は極端に悪くなっている。先ほどまでかろうじて見えていた戦況も、今は白いベールの先に隠れてしまっている。

ふと、風の音のほかに、別の音が混じり始めた。それが何であるか確認する前に、レヴィナス軍本陣に一筋の閃光が突き刺さり、そして爆ぜた。

――――敵。

その単語がすぐに頭に浮かんだ。

誰が？どこから？どうして？

まとまらない思考は単語で走り、混乱に拍車をかけていく。

それらの疑問に一つも答えが出ないまま、再び閃光が突き刺さり爆ぜる。続けて千数百はあろうかという矢が雪に混じって飛来し降り注ぐ。

この攻撃で、逆にレヴィナスの頭は冷えた。一瞬の混乱から立ち直ると、ともかく防ぐように指示を出す。それから一度陣の奥まで戻り、そこでアーデルハイトと別れ彼女をさらに後方に遅らせる。

レヴィナスが白馬にまたがると、三度閃光が輝き爆音が響く。吹き飛ばされたのか、人が宙をまっている。レヴィナスの足が、震え始める。

吹雪の中、白く濁った視界の向こうから、クロノワ軍が現れた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レヴィナスは知りようもないことだが、彼の本陣に突き刺さった閃光は、イストがアズリアに贈った魔弓「夜空（ミーティア）を切り裂く箒星」が放つそれとまったく同じものであった。それもそのはずである。少

し前にイストがクロノワに贈った魔道具は、この魔弓の簡易版なのだから。

――――「雷神の槌（トールハンマー）」。

それが、イストがクロノワに贈った指輪型の魔道具の名前である。

この魔道具の最大の特徴は、その使い勝手の良さにある。

まず使用者は指輪に魔力を込める。するとまずは魔法陣が展開される。ちなみにこの魔法陣は、一度展開すれば魔力の供給を断ってもしばらく出っ放しである。魔法陣が展開したところでさらに指輪に魔力をこめると、展開された魔法陣に魔力が充填され閃光が放たれるのだ。

技術的な話をするならば、指輪に刻印されている術式は「魔法陣を展開するための術式」である。つまり、刻印されている術式自体に攻撃能力はない。言ってみれば余計なステップを一つ踏んでいるのだ。しかしそのおかげで、指輪という小さくて装備が容易な形状で、人を吹き飛ばすような馬鹿げた威力を実現しているのである。

アズリアが使っている魔弓「夜空を切り裂く箒星（ミーティア）」とは異なり、「雷神の槌（トールハンマー）」の射程と威力は固定である。その点、自由度は下がっていると言わざるを得ない。しかし逆を言えば射程と威力について考える必要がない。使用者はただ指輪に魔力を込めればよい。そうすれば、後は自動的に閃光の一撃が指輪を向ける先に放たれる。

レヴィナス軍本陣の隊列には、「雷神の槌（トールハンマー）」の二度の攻撃により穴が開き、そしてその穴は続けて降り注いだ矢の雨によって広がっている。クロノワはすかさずそこに突撃をかける。準備が出来ていないのか、敵の抵抗は少なく脆い。浮き足立った敵兵を蹴散ら、敵

陣をまるで紙切れか何かのように切り裂きながらクロノワ軍は進む。

奇襲は成功した。

行動を開始したクロノワ軍本陣は、まず味方の主翼と右翼の陰に隠れるようにして戦場を迂回し、敵本陣を目指した。

この時、吹雪いていたことがクロノワにとって幸いした。彼の配下にいるアルジャーク兵はみは冬季行軍訓練を受けており、吹雪の中でも問題なく進軍し目的に至ることができる。しかしレヴィナス軍の兵士たちは違う。彼らにとって吹雪とは慣れない劣悪な環境であり、このような見通しの利かない中進軍してくる敵など、彼らにとっては完全に埒外であった。

アレクセイは、この動きに気がつかなかった。本陣で全体の戦況を見守っていたのであれば、予測し対応策をとることができたかもしれないが、今彼は最前線で戦っているのである。吹雪の中、敵軍の影を別の部隊が移動していることに気づけなくとも、仕方がないであろう。

さらにレヴィナス軍は両翼が前進したにもかかわらず本陣が動かずにいたため、双方の間に距離が出来てしまった。それはつまり、レ軍本陣が孤立したということを示していた。しかもこの吹雪である。優位な戦況に油断した部分もあるのだろうが、レ軍本陣は敵の襲来に直前まで気づかず、態勢を整える前に先制攻撃を許し戦いの主導権を握られてしまったのだった。

クロノワは右手にはめた指輪「雷神の槌（トールハンマー）」に魔力を込め、閃光を放つ。至近で直撃を受けた敵兵が胴体に大穴をあけ、内臓を飛び散らして絶命する。貫通した閃光は、さらに何人かの敵兵を吹き飛ば

した。

（すまない、イスト……！君がくれた魔道具で人を殺した……！）

きっとあの友人は、そんなことを気にはしないだろう。しかし、クロノワは無性に謝りたかった。

奥歯をかみ締めながら、クロノワは「雷神の槌（トールハンマー）」に魔力を込め続け、立て続けに閃光を放ち続ける。この連射性能こそが、「雷神の槌（トールハンマー）」の真髄であるといえた。

「雷神の槌（トールハンマー）」の射程はそれほど広くはない。しかし槍を振るえば敵に当たるような状況ならば、そもそも射程に意味はない。加えて一撃で人を殺してなお余りある威力の閃光を連射できるのだ。そんなものを集団の中で使えばどうなるか。敵軍はもはやただ逃げ惑うことしかできずにいた。

しかも一撃放つごとに轟音が響くのだ。その射程外にいるはずの兵士たちも、幾つもの轟音が鳴り響くのを聞き、さらに四肢をあらぬ方向に曲げた人間が宙をまうのを見て、戦わずして戦意を喪失させていった。

この轟音とその光景にもっとも肝を冷やしたのが、レヴィナスであった。

轟音が響くたびに腹に鈍い衝撃が走る。顔から血の気が引いて体温が下がり、歯が震えた。足が震えているのが分る。いや、足だけではない。全身が震えている。

恐怖。そう、それは恐怖であった。
閃光が一つ輝くたびに、自分の死が近づいて来る気がする。轟音が一つ響くたびに、心臓を鷲づかみされるような悪寒を覚える。

ドサリ、とレヴィナスの前に死体が降ってきた。閃光の直撃を受けたのか四肢をあらぬ方向に曲げ、顔面がつぶれて眼孔から目玉が飛び出している。

その死体に、レヴィナスは自分の未来を重ねてしまった。
自分もこんな死にざまをさらすのか。こんな美しくない死に方をするのか。その様子を想像し、レヴィナスは激しい吐き気に口元を押さえた。

そこにさらに轟音が響く。着弾地点は、かなり近い。
限界だった。恐怖の、限界だった。

レヴィナスは、逃げた。

馬首をひるがえし、部下を見捨て、さらには妻であるアーデルハイトを置き去りにして、レヴィナスは戦場から逃げ出した。恥も外聞もかなぐり捨てて、迫りくる恐怖から彼は逃げた。

レヴィナス軍を実質的に動かしていたのは、アレクセイ・ガンドールである。しかし総大将であり次の皇帝になろうという者が戦場から逃げ出し、兵の士気に影響を与えないはずがない。

戦場に置き去りにされた兵士たちは、次々に武器を手放し降伏していった。

趨勢は、いや勝敗は、決した。

第七話　夢を想えば？

大陸暦１５６４年１１月７日、ついに十字軍はアルテンシア半島に向けて進軍を開始した。本来であるならばもう少し早く進軍を開始できたのだが、枢密院内で「神子の祝福」をどうするかという問題について意見がまとまらず、この時期にまでずれ込んでしまった。ただ、十字軍は複数の国が兵を出し合っている連合軍である。その内部をまとめ上げるのに多少の時間が必要であったことも事実である。

七人の枢機卿の中で、十字軍に対し神子の祝福を与えることに最後まで反対したのは、テオヌジオ・ベツァイただ一人であった。

「血生臭い戦争に神聖な神子の祝福を与えるなど、言語道断である！」

そういってテオヌジオは最後まで抵抗した。ちなみに彼と同じく十字軍遠征に反対であったカリュージス・ヴァーカリーは決を棄権した。本心では反対していたのかもしれないが、教会が旗振りをしている遠征に神子の祝福が与えられないとなると、教会として格好がつかない部分があるのも事実なのだ。

ただ、彼ら以外の五人の枢機卿の思惑はもっと生々しい。

まず神子から祝福が与えられれば、十字軍兵士の士気は大きく上がるだろう。兵の士気というのは戦力に直結するから、遠征を成功させる上で神子の祝福はどうしてもほしいお墨付きであると言えた。

また祝福が与えられれば、アルテンシア半島に至る道中、住民たちからの協力を得ることが容易になるだろう。“神子の祝福”を受けた軍であるというただその一点をもって、彼らは十字軍に最大限協力してくれるであろう。祝福を受けた十字軍に協力しないということは、そのまま教会への敵対を意味しているのだから。

以上のように、神子の祝福は遠征を成功させ、また教会の威光を広めるためには、必須事項であるように思えた。そして十字軍遠征が成功すれば、教会だけでなく彼らの懐にも巨額の金が舞い込むのだ。

（そこまで上手くいけばよいが……）

決議が強行され、枢密院の堕落を嘆くテオヌジオの隣で、カリュージスはそう嘆息した。ただ彼の嘆息の理由は、テオヌジオのように宗教的なものではなく、純粋に政治的な懸念によるものであった。

神子の祝福が十字軍に与えられるということは、アルテンシア半島で行われるであろう十字軍による略奪や暴行にもお墨付きが与えられることになる。勝てばそれらの行為が問題になることはない。

しかしもし負ければ？

仮に十字軍が負けたとすれば、敵は彼らが行ったそれらの残虐な行為の責任と代償を求めるであろう。

誰に対してか。

教会に対し、そして究極的には神子に対してである。しかも十字軍をアルテンシア半島からたたき出した戦力を背後に控えさせて迫ってくるのだ。

もしそんなことになれば、事態がどう転がろうとも教会の発言力は大きく低下する。そして自前の国土と臣民を持たない教会にとって、発言力の低下は組織の存亡そのものに関わる問題なのだ。

十字軍遠征の失敗と共に、教会の組織事態が弱体化、あるいは崩壊さえする。そんな最悪のシナリオが、カリュージスの頭の中に居座っていた。

無論、負けることを前提に遠征を計画する愚か者はいない。今回の十字軍遠征だってそれなりの勝算があってのことだ。

今、アルテンシア半島は混乱の渦中にある。アルテンシア同盟とそれに反旗を翻したシーヴァ・オズワルドが、半島の覇権をかけて争っているのだ。これは同盟ができて以降初めての内輪もめであり、千載一遇のチャンスに思えた。

これが純軍事的にみてどれほどの好機なのか、それはカリュージスには分らない。分らないが、各国が軍を出した、という事実はある。教会が旗振りをした以上、兵を出さないわけにはいかなかったという事情はあるだろうが、それにしても三二万の大軍である。専門家の目からみても大きな好機なのだろう、と慮ることはできる。

（両者まとめて叩き潰せるならば、だが）

カリュージスがアルテンシア同盟に脅威を感じることはない。所詮は腐りきった組織。むしろ、よくぞ革新の種を残しておいた、と褒めるべきであろう。それはつまり組織の自浄作用がかろうじて働いていたということなのだから。もっとも今はその“自浄作用”が組織を殺そうとしているわけだが。

問題はその革新の種、シーヴァ・オズワルドのほうである。

彼と彼の軍は強い。決起から一年も経たないうちに半島の半分近くを切り取ってしまった。とくに最初の二、三ヶ月は異常な速度であった。その速度を軍隊という組織だけで実現することはほぼ不可能であるということは、軍事に疎いカリュージスでも容易に想像がつく。

つまりは、住民たちの協力があったのだ。そう、熱狂的な協力が。住民たちは同盟や領主たちに三行半を突きつけただけではない。彼らはシーヴァ・オズワルドという革新の可能性を、ずっと待っていたのである。そして彼が物事を素早く行えるよう、積極的に協力していったのだ。

今、シーヴァの周りには変革と新たな秩序を求める人々が集まっている。古く腐り果てた旧体制を淘汰し、新しい国を作ろうと邁進しているのである。彼らを支える想いは強く、彼らを突き動かすエネルギーは凄まじい。思い描いた夢を実現するために、彼らは己が命をかけている。

大仰な言い方をすれば、アルテンシア半島では今まさに新たな歴史が生まれようとしている。古き時代の幕引きと新たな時代の幕開けを、人々は人力で行おうともがいているのである。

（こういう相手が、一番厄介だな）

夢や理想を追いかける人間は強い。そしてそういった人々が集まって作る集団はもっと強い。いくつもの苦難を乗り越えてきたから自信があるし、新たな問題が立ち塞がっても気後れすることなくぶつかっていける。

一言でいってしまえば、勢いがある。今シーヴァ・オズワルドが率いているのは、そういう集団であり組織であり国なのだ。

（翻って我が身を鑑みれば……）

一方我が身、教会はどうか。腐りもはや腐臭さえ放っているではないか。失った聖銀（ミスリル）による収入、つまり遊ぶ金をまかなうために十字軍を派遣しようと言うのだ。無用な装飾を蹴り飛ばし要点だけを抽出して皮肉のスパイスを利かせれば、教会が強盗行為を主導している、ということになる。

どう考えても、全うで健全な組織のすることではない。いや、歴史書を紐解いても、これほどの末期症状を見せた組織は他にないのではないだろうか。

先ほど、アルテンシア同盟はかろうじて最後の自浄作用が働いた、とカリュージスは評した。それでは自浄作用さえ働かない教会は一体何なのであろう。

（負ける、か……）

若く理想に燃え力にあふれたシーヴァの軍と欲望だけで結びつく十字軍。その勝敗は、やはり明らかなように思えてならないカリュージスであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

話を十字軍の動きに戻そう。

大陸暦１５６４年１１月７日、七人の枢機卿の一人グラシアス・

ボルカは興奮していた。彼の目の前には、総勢およそ三二万の十字軍兵士たちが整然と隊列を揃え居並んでいる。グラシアスは懐から七つの封がされた巻物を取り出してそれを開き、そこに記されている「神子の祝福」を高らかに読み上げ始めた。

神子の祝福、といってもその内容は神子が考えたものではない。内容そのものは担当の者がそれらしい言葉を並べて作り上げた、当たり障りのない文章だ。文章そのものに意味はない。なければ体裁が整わないから用意した、といってしまえばその程度のものだ。

内容としては、以下のようになる。

曰く「アルテンシア半島の異教徒たちを、神々の祝福のもとに改宗させるべし」

まさか本音をそのまま書き記し、「略奪と暴行に励むべし」などと書くわけにも行かないから、内容としては常識的なものであろう。

ただ、繰り返すがその内容に意味はない。本当に意味があるのは巻物の最後に記された、神子マリア・クラインのサインと印、ただそれだけである。

巻物を読み上げている最中も、グラシアスの興奮は冷めることがない。いや、むしろ気分は高揚していき、快感にも似た延髄の痺れを感じている。言い知れぬ万能感が、今彼を満たしていた。

本来この役は神子であるマリア・クライン本人が行うのが一番良い。しかし彼女は神殿から、御霊送りの祭壇から離れることができない。ならばその代理としては、後継者と目されている養女のララ・ルー・クラインが最もふさわしい。しかし彼女は今、視察巡礼のたびの真っ最中である。

今思えば、これはこうなる事を見越したマリアがララ・ルーを十字軍遠征に関わらせないために打った策であろう。神子マリアは枢密院の決定に決して異議を唱えないが、だからといって恭順しているわけでもないのだ。

（もっとも、私としては好都合であったわけだが……）

巻物で隠され兵士たちからは見えない口元を、グラシアスはニヤリと歪ませた。

教会の呼びかけに応じて集まった兵士の数は総勢およそ三二万。これだけの戦力があれば、アルテンシア半島の制圧など簡単なようにグラシアスには思われた。完全制圧までともすれば半年、いやさらに半分の三ヶ月もかからないかもしれない。

（ヴァーカリーの若造はシーヴァなどという野良犬を警戒しているらしいが、恐れるに足らぬわ……！）

十字軍遠征は成功する。ここに集った兵士たちを見てグラシアスは確信を新たにした。そして十字軍に神子の代理として祝福を与えた者として、彼の名は歴史に刻まれるであろう。さらにここで目立っておけば、遠征終了後に懐に舞い込む金額は跳ね上がり、さらに枢密院での発言力も増す。

祝福を読み終えたグラシアスは、その巻物を兵士たちに向かって掲げる。その瞬間、三二万の兵士たちが一斉に歓声を上げた。

十字軍遠征の始まりである。

余談であるが、後の数多くの歴史家たちが、この遠征に関し決定

的な不備であると指摘する点がある。それは兵糧の不足である。十字軍には短期間のうちに三十万を越える兵が集まったが、逆に言えば短期間であったがために三二万の兵を養うだけの兵糧が確保できなかったのである。

その点は、十字軍上層部も把握していた。そこで彼らが取り決めた、兵糧に関する方針を記した資料が後の世にも残っている。そこには、

「兵糧の不足分は、原則として現地調達を基本とする」

とある。「現地調達」と言葉を選べば確かに聞こえは悪くない。しかし総勢三十万を越える侵略者に、住民たちが協力的な態度で食料を供給してくれるはずはない。すなわちここで言う「現地調達」とは「略奪」と同義である。

ここから分ることは、十字軍にとって略奪を行うことは織り込み済みで確定事項だった、ということである。無論、略奪には暴行がつきものだ。つまり十字軍遠征とは計画の最初からアルテンシア半島の非戦闘員を、無辜の民を食いものにすることを目的としていたのである。

十字軍が行く。目的地はアルテンシア半島。表向きには異教徒を改宗させるために。

第七話　夢を想えば？（後書き）

あれ！？十字軍がアルテンシア半島に着かなかった！

つ、つぎこそは……！

第七話　夢を想えば？

大陸暦１５６４年１２月９日、十字軍はついにゼーデンブルグ要塞に迫った。

――――ゼーデンブルグ要塞。

その要塞はアルテンシア半島の付け根に建設され、いわば不埒な侵入者を防ぐための関所である。ただ“関所”というには、あまりに規模が大きい。ゼーデンブルグ要塞は常時十万の兵を駐在させ、大量の兵糧を抱え込んだ大要塞であった。

だが十字軍がゼーデンブルグ要塞に迫った時、そこにいるはずの十万の駐在軍の姿はどこにもなかった。十字軍遠征が始まる少し前、アルテンシア同盟はシーヴァ・オズワルド討伐のためにゼーデンブルグ要塞の戦力を使うことを決め、十万の兵を要塞から動かしていたのである。

十字軍遠征の話は、当然アルテンシア同盟の領主たちにも伝わっていた。にもかかわらずゼーデンブルグ要塞の兵を動かしたのは、ひとえにシーヴァに対する憎悪がはなはだ深刻であったからであろう。目の前の敵を憎みすぎたがために、背後の敵への対応を怠ったのである。

その結果、十字軍が迫った時そこには五百ほどの兵士しかおらず、ゼーデンブルグ要塞はたった半日で陥落したのである。ちなみに要塞にいた兵士のほとんどは戦わずに逃げたため、流血をともなう戦闘はほとんどなかった。

こうしてゼーデンブルグ要塞は初めての戦闘で、その役目を果たすことかなわず陥落したのであった。

ちなみにシーヴァ・オズワルド討伐のために動いた同盟軍十万は、要塞が陥落する三日ほど前に反乱軍と野戦を行い破れている。この時点でアルテンシア同盟の軍事力が消滅したといっていい。

さて、ゼーデンブルグ要塞を陥落させた十字軍は、そこから三つに軍を分けそれぞれ進軍した。これは軍事的な思惑にもと基づく行動ではない。三十万の大軍のまま行動していては、略奪する物品と戯れる女の数が減ってしまうではないか。これはなるべく多くのものを奪い多くの女を犯したいという、極めて下劣な欲望に基づく判断であった。

ちなみにゼーデンブルグ要塞にはただの一兵も残さなかった。これまた理由は単純で、要塞に残っていてはいい思いをすることができないからである。

暦は新年。一方にとっては喜ばしい、一方にとっては災厄としかいい様のない年明けとなった。

彼らは己の欲望に忠実に行動し、アルテンシア半島の南東部半分で己が春を謳歌した。無論違う視点から見れば、そこを地獄に叩き落した、としか言いようがない。

同盟軍といういわばアルテンシア半島の正規軍に当たる軍事力を失った領主たちは、自分たちの私兵だけで十字軍に対処しなければならなくなった。彼らが足並みを揃える時間があればよかったのだが、あいにくと十字軍はその時間を与えてはくれなかった。欲望に目を血走らせて襲い掛かってくる十字軍の前に、各地の領主たちは

各個撃破されていったのである。

なんとか連合軍を組むことができた三人の領主たちが十字軍に敗北したとき、アルテンシア同盟は事実上瓦解した。腐敗に憤り同盟打倒のために兵を挙げそして弱らせたのはシーヴァだが、同盟に止めをさしたのは十字軍であった。アルテンシア同盟結成の主たる目的が、大陸からの侵略に対抗するためだったことを考えると、皮肉な歴史の巡り会わせと言えるかもしれない。

この遠征は十字軍の、というより教会の主張によれば“聖戦”であった。神々を敬わぬ異教徒たちを改宗させるための“聖戦”である。事実十字軍には百名ほどの聖職者と枢機卿の一人であるグラシアス・ボルカが同行している。

しかし、アルテンシア半島に残された資料と教会や神聖四国に残された資料の双方を精査してみても、彼らが半島で布教活動を行い住民の改宗を促したという記録が残っていないのは一体どういうことであろう。

ある歴史家は、こう述べている。

「“聖戦”という建前は、アルテンシア半島で行われる破壊活動や略奪、暴行などに対するいわば免罪符であった。仮にこの第一次十字軍遠征が成功していたら、“聖戦”という建前を用意できたことは、外交上の輝かしい勝利になったであろう」

さて十字軍は快進撃を続け、半島の南東部で蹂躙の限りを尽くした。しかし、そこからさらに北西部へ進軍しようとした十字軍の前に立ちはだかったのが、シーヴァ・オズワルドその者であった。いや「立ちはだかった」という表現には少し語弊がある。なぜならシーヴァは守勢に回ったのではなく、攻勢に打って出たのだから。

ある街が三つに分かれた十字軍の一つに蹂躙されている。絢爛豪華な城を中心とした城下町だ。この城を中心として地方一帯を治めていた領主一家は街の広場に引きずり出され、「神々の裁き」の名のもとに処刑された。

それから始まったのは、住民たちの犠牲の上に成り立つ十字軍の酒池肉林の宴であった。兵士たちは家々に押し入っては略奪を繰り返し、女子どもを攫った。男の体に藁を巻きつけて火をつけ、絶叫しながら焼け死んでいくのを肴に酒を飲み肉を貪った。それを諫める立場のはずの聖職者たちは、むしろ兵士たちをあおり宴の中心となっているというのが常であった。

そんな狂乱の宴を強制的に終わらせたのがシーヴァ・オズワルドであった。彼は歩兵四万騎兵二万、合計六万からなる非常に機動性の高い軍を組織すると、連戦連勝で驕っている十字軍を強襲したのである。

ろくに見張りを立てることもせず狂乱の宴に興じていた十字軍はシーヴァ・オズワルドの襲来により、奪う者から奪われる者へと一瞬にして立場が逆転したのであった。

「殺せ！殺しつくせ！一兵として逃がすな！！」

この時点ではまだこの街はシーヴァの勢力範囲外であったが、ここで殺され辱められ虐げられているのは彼と同じアルテンシア半島の同胞たちである。シーヴァの命令は苛烈で容赦がなく、また忠実に実行された。

この時のシーヴァの作戦は周到であった。まず彼は直属の部隊と

して歩兵一万騎兵五千を選び、残りの四万五千の兵に街の四方の門のうち三方を固めさせた。そして四つ目の門から直属部隊を率いて中に攻め入ったのである。

突然の強襲に震え上がった十字軍はろくな抵抗もせずに逃げていく。どこへ隠れてようとも、つい先ほどまで狩りの獲物か愛玩動物くらいにしか思っていなかった街の住民たちによって、兵士たちは発見され追い立てられていく。街から逃げ出した十字軍兵士たちは、そこに待ち構えていたシーヴァの軍によって次々に殺されていく。こうしてこの日だけで十字軍およそ十万の内七万近くが屍をさらす結果となったのである。

逃げ遅れたらしい聖職者たちがシーヴァの前に引き出されてくる。卑しい笑みを浮かべた彼らは口々に助命を願った。その中で教会の権威をちらつかせ、「ここで助けてくれればお前の得になる」と臭わせることを忘れない。あまつさえ異教徒になにをしても大したことはないとまで言い出した。今彼らの目の前にいるシーヴァも、その“異教徒”であることを彼らは忘れていたのだろうか。

醜い。

シーヴァはそう思った。顔立ちの話ではない。その選民意識に凝り固まった思想が醜いのである。

ガビアルやメーヴェといったゼゼトの民も同様に感じたらしく、壮絶に顔をしかめている。生理的な嫌悪すら感じている様子だ。

「黙れ……！」

絶対零度の声音で、シーヴァは目の前の醜い豚どもの話を遮った。

これ以上聞いていては耳が腐ると思ったのだ。

最終宣告の如くに響いたシーヴァの言葉に顔を青くした聖職者たちは、今度は責任逃れの言葉をまくし立てた。全ては十字軍がやったことだ。自分たちは悪くない。婉曲の限りを尽くしてそう主張する聖職者の一人を、シーヴァが蹴り飛ばした。それを見た他の聖職者たちは舌を凍りつかせる。

「誰が喋っていいといった」

聖職者たちが静かになるとシーヴァは部下に命令を出す。

「教会の教義には、『汝、殺すべからず』というものがあり、反した者は石打にされるという。この者たちは教会の聖職者だ。信じる教えに殉じさせてやれ！」

もはや意味をなさない喚き声を上げながら連れて行かれる彼らを一瞥し、シーヴァはようやく溜飲を下げる思いだった。

この小さな勝利一つでシーヴァは満足することはなかった。十字軍が三つの部隊に別れていることはシーヴァも把握している。あと二つ、叩き潰さねばならない敵が残っているのだ。十字軍全てをアルテンシア半島からたたき出さなければ、同胞たちに安寧は訪れない。

シーヴァはすぐに行動を再開した。

次の十字軍を見つけたのは夜半過ぎ、とある村でのことだった。今回も駆けつけるのが少し遅かったらしく、すでに略奪と狂乱の宴が始まっていた。城壁もない村だ。あちこちに焚かれたかがり火と

大勢の人影は離れていても見て取れた。響く笑い声に悲鳴が混じっているのは、決して聞き間違いではないだろう。

この村で十字軍が行ったことが歴史書に記録されている。周辺の村々をあらかた略奪し尽くし、この村で“祝勝会”を開いていたという。その中身は「蛮行」の一言に尽きるだろう。親と子どもを殺し合わせ、生き残ったほうは家族殺しの罪で処刑された。兵士たちは女に餓えており、女と見れば老婆であっても犯した。

シーヴァの手の中で、馬の手綱がギシリと音を立てた。この強盗どもを見逃してやる理由を、彼は持ち合わせていない。

「なるべく音を立てるな」

漆黒の甲冑で統一されたシーヴァ軍は、夜闇にまぎれて村に近づいていく。音を立てないようにしていたとはいえ、隠密行動と言うほどのものではない。にもかかわらず十字軍がシーヴァ軍の襲来に直前まで気がつかなかったのは、彼らが狂乱の宴に没頭しここが戦地であることを忘れていたからであろう。もっとも遠征の始めから十字軍はアルテンシア半島を都合の良い狩場程度にしか見ていなかったが。

「敵襲！」

一番最初にシーヴァ軍の襲来を察知した男は、それだけ叫ぶと首を刎ね飛ばされ首から二種類の赤い液体を噴出させて絶命した。倒れた彼の体を踏み潰しながら、シーヴァ軍の人馬は村の中に突入していく。またたく間に、歓声をあげる側と悲鳴をあげる側が逆転する。それでもまだ村の娘に襲い掛かろうとする十字軍の兵士がいたこと考えると、人の欲望の深さを思わずにはいられない。

シーヴァはその男を蹴り飛ばし少女の上からどけると、槍を突き刺し地面に縫い止めた。少女のほうを見ると、服は破り捨てられていてもはや用をなさず、何人の男の相手をさせられたのか分らないような有様であった。

シーヴァはマントを取るとその少女にかけてやった。少女は怯えながらもマントで肌を隠し、シーヴァの顔を見上げた。

「家の中に隠れて毛布を被っていろ。日が昇るころには、全てが夢だったと思える」

少女が頷くのを見て、シーヴァは身を翻した。ついさっきの自分に言葉。その言葉がただの慰めでしかないことを、シーヴァは良く知っている。しかし同時に、その言葉の通りになって欲しいと、そう思わずにはいられないのであった。

男に突き刺したままになっていた槍を引き抜く。そしてシーヴァは声を張り上げた。

「斬れ。斬りまくれ。遠慮も容赦も要らぬぞ！」

シーヴァの命令はここでも忠実に実行された。いや、彼の命令がなくともシーヴァ軍の兵士たちは十字軍を許しはしなかっただろう。彼らの目の前で殺され犯され虐げられているのは、同じアルテンシア半島の同胞たちなのだ。運命などというものを彼らが信じていたのかは分らないが、その歯車が一つ狂えば自分たちと家族が目の前の災厄を被っていたかもしれない。怒りと憎しみは敵を殺すことでしか晴らせはしない。

この夜十字軍およそ十一万のうち、約六万がその屍をさらした。さらに二万人が捕虜となり、逃げおおせたのは三万人程度だけだったのである。

捕まって捕虜となった二万人には、戦場で死んだ者たちよりもさらに過酷な運命がまっていた。シーヴァは彼らを略奪された村々の住民たちに引き渡したのである。

「そなた達の家と畑を焼いて父兄弟を殺し、母姉妹を辱めた者たちだ。そなた達には復讐する権利がある」

この二万人が受けた復讐の中で最も残酷なものは「車裂き」であったという。それでも四割程度の者たちはそれぞれの村に農奴として連れて行かれ、命だけは助かった。さらにその内の半分程度は後に自由になってこの地に定住し、嫁を貰うなどして人並みの幸せを手に入れた。また千人ほどは後に祖国の土を踏むことができたという。

兵士たちに休息を取らせる間に簡単な後始末をしていたシーヴァは、それが終わるとすぐに最後の十字軍を求め行動を再開した。一秒遅れればその分だけ略奪と暴行の被害は拡大し、半島の同胞たちの苦しみは増していく。のんびりしているわけにはいかないのである。

（私が休むのは全てが終わった後だ）

シーヴァの最終的な目的はアルテンシア半島の統一である。統一を成し遂げ王として君臨しようと志すものが、己の臣民の苦境に何もせずただ座しているだけなど、どうして許されようか。

とはいえ彼は闇雲に動き回ることはしない。情報を集め敵の位置を絞り込みそして特定していく。幸いなことに半島の住民は全てシーヴァの味方である。ただ彼らを安心させる要素となったのが「パルスブルグ要塞司令官及び要塞常備軍司令官」という、捨てたはずの役職名であったことはシーヴァとしても苦笑するしかない。

住民たちの協力もあり、最後の十字軍は草原で発見することができた。ただ彼らがこれまでの道中で略奪と暴行の限りを尽くし、半島の住民たちを虐殺し辱めてきたことは間違いない。新たな犠牲を出す前に発見できたことは僥倖であるが、許してしまった犠牲を想うと、シーヴァの胸のうちにはやりきれない怒りが湧き上がってくる。

シーヴァは後から後から湧き上がってくる怒りを抑えはしなかったが、かといって身を任せて理性を失うこともなかった。怒りを制御し糧とできるあたり、王者の器といえるだろう。

十字軍がろくに斥候も放たずに進軍しており、彼らの行く先にとりあえず村や町がないことを確認したシーヴァは、少しの間軍を潜めさせ、通り過ぎようとした十字軍の背後を襲った。

シーヴァは単騎で敵陣に乗り込み、これまでの戦いは市街地であったため被害を考えて使わなかった愛剣「災いの一枝（レヴァンテイン）」を手に、その威を存分に発揮させた。

――――「天より高き極光の」

そう黄金色の古代文字（エンシェントスペル）で印字された漆黒の大剣は、一振りされるごとに黒き風によって雑兵たちを吹き飛ばしていく。敵陣の真っ只中で「災いの一枝（レヴァンテイン）」を振るい続けるシーヴァはいわば黒き暴風の中

心であり、彼の周りでは黒き風が敵を切り裂き吹き飛ばし叩き潰していく。

主将のこの活躍に友軍が活気つかないわけがない。シーヴァ軍は歓声をあげて敵軍になだれ込み、死を量産していった。

シーヴァの次に激しく戦ったのはガビアルを筆頭とするゼゼトの民であろう。彼らはその巨躯と怪力をいかんなく発揮し、敵をその甲冑ごと叩き割っていく。彼らの巨躯は返り血で紅に染まっていった。

日の高い頃から始まった戦闘は暗くなるまで続き、シーヴァは十字軍のなんとおよそ八割を屍に変えたのであった。

流された血の量は凄まじく、その草原では一年経っても血の臭いが漂っていたという。無論、誇張だが。

さて、こうしてシーヴァは三つに分かれた十字軍全てを叩き潰したわけだが、決して全滅させたわけではない。散り散りになったとはいえ、いまだ万単位の十字軍兵士たちが生き残っている。ただ悲しいかな、彼らを統御する人物がいなかった。

全体としては万単位の残存勢力であっても、個々を見れば一人から数人の集団でしかない。もともと十分な兵糧を用意していなかった彼らは空腹を耐えながら、住民たちの自発的落ち武者狩りという復讐を逃れるべく、ゼーデンブルグ要塞を目指した。

生きて振り出しに戻ってこられた十字軍兵士たちは、総勢で十万人に満たなかった。三分の二以上の戦死者を出すという屈辱的な結果をもって、十字軍遠征の失敗は動かぬものとなったのである。

ゼーデンブルグ要塞の一室で、十字軍に同行していた枢機卿の一人、グラシアス・ボルカは恐怖に震えていた。はじめてこの要塞に入ったときには綺麗だった職服も、今は泥にまみれあちらこちらが擦り切れている。

ほんの二十日ほど前までは美酒をあおり美女をはべらせて、見世物に興じていたのがまるで夢のようである。

（なぜだ……？なぜこうなった……？）

十字軍が負けるなど、グラシアスにとってはありえないことであった。十字軍は教会が旗振りをして始めたのだ。負けることなどあってはならない。その戦力は三二万。戦場は混乱をきたしているアルテンシア半島。軍事的にみても負ける要素は見当たらない。

しかしその総勢三二万を誇った十字軍は、今や無残に喰いちぎられその威光は見る影もない。ゼーデンブルグ要塞に逃げ帰ってこられた敗残兵たちも、残された少ない食料を巡って争っている。あまりに速い転落にグラシアスは焦燥し、またシーヴァの影に怯えていた。

（帰ろう……。そう、帰るのだ！）

神聖四国の勢力圏まで引き返せれば、教会の威光のもと巻き返しを図ることができるはずだ。なによりもシーヴァ・オズワルドの手から逃れ、命を安全に守るにはそれしかないように思われた。

しかしシーヴァ・オズワルドのほうには、彼らを逃がしてやる意思はなかった。ゼーデンブルグ要塞に十字軍の残党が集まっている

ことを察知した彼は、すぐさまその要塞を奪還すべく動き始めたのである。

「敵軍襲来！！」

その声が要塞内に響き渡ると、ついにグラシアスの精神は限界を迎えた。白目をむいて気絶した彼は、シーヴァ軍によって拘束されるまで意識を取り戻すことはなかった。

さて、シーヴァの動きである。兵糧の絶対量が足りておらずまた援軍のアテがない十字軍は、遅かれ早かれ撤退するしかなかった。シーヴァが十字軍の内部事情を知っていたかどうかは定かではないが、戦わずとも十字軍はそのうち撤退するであろう事は分っていたはずである。

しかし、シーヴァはそれで良しとはしなかった。

その理由が感情的なものだったのか、それとも理性的なものだったのか、はたまた世論的なものだったのか、歴史書は黙して語らぬ。シーヴァは十字軍が立てこもるゼーデンブルグ要塞に攻撃を仕掛けた。これが歴史上の事実である。

ゼーデンブルグ要塞の本来の目的は、大陸側からの侵略者に対する防波堤である。よって半島の外側、つまり大陸側の城壁は高く堅固であるが、半島の内側の城壁はそれほどでもない。目算で二メートルといったところだろうか。城門も鉄製だが、表門ほどの威圧感はない。

シーヴァは愛馬にまたがり愛剣「災いの一枝（レヴァンテイン）」を水平に構えると、単騎で要塞に向かって突撃した。数瞬遅れて、副将のヴェート・エフニートが全軍に突撃を命じる。ただ彼女の顔に焦りは見えない。

それはこれがミスではなく、折込済みの行動であることを示唆していた。

要塞の城壁の上には弓兵たちがいて弓を構えているのだが、当然彼らは突出しているシーヴァに対して矢を集中させた。

矢が放たれる様子を視認してから、シーヴァは「災いの一枝（レヴァンテイン）」に魔力を食わせる。主の魔力を糧として「災いの一枝（レヴァンテイン）」は黒き風を発生させ、シーヴァはそれを自分と愛馬の周りに防壁として展開した。その黒き防壁は降り注ぐ矢を全てはじき返す。その様子に弓兵たちは愕然としたのか、放たれる矢の量が減る。しかしそんなことはシーヴァにはとって埒外であった。

シーヴァは黒き風を纏ったまま、鉄の城門めがけて疾走する。そして速度を緩めることなく城門めがけて突撃し、あろうことかその鉄の城門を吹き飛ばしそのまま要塞内に飛び込んだのである。

これは戦術的な効果よりも、パフォーマンスとしての効果のほうが大きかった。シーヴァのありえない特攻を見せ付けられた十字軍の兵士たちは、それだけでなけなしの戦意を喪失させ逃げることしか考えられなくなったのである。

シーヴァに続き六万の軍勢もまた要塞内になだれ込んでいく。十字軍に抵抗するだけの気力は残っていなかった。彼らは我先にと要塞の外、アルテンシア半島の外へと逃げ出していく。シーヴァは彼らを追わなかった。

こうして十字軍はシーヴァによって、ことごとくアルテンシア半島の外へとたたき出されたのである。大陸暦１５６５年２月２１日、この日は第一次十字軍遠征の失敗が確定した日として歴史に刻まれ

ている。

ちなみにこのゼーデンブルグ要塞での戦いで、ただ一人捕虜になった者がいる。それは枢機卿グラシアス・ボルカその人であった。

第七話　夢を想えば？

時間は少し遡る。

季節は冬の真っ盛り。あと二週間もすれば新年を迎える。

「新年は商機よ！」

力強く拳を握り、オリヴィアはそう力説した。なんでもお祝い気分で人々の財布の紐はゆるくなっており、さらに少々高くとも珍しいものが好まれるから、各地の特産品を売買している行商人にとって新年は絶好の商機なのだとか。

「仕入れたオリーブオイルって珍しいものじゃないよな？」

「そうだけど、一年を通して使うものだし、いつでもどこでも需要はあるわ」

それに新年のご馳走には欠かせないものよ、とオリヴィアは解説した。またキャラバン隊の商品はなにもオリーブオイルだけではない。

キャラバン隊を率いているオルギンは、儲け最優先の人物ではなかったが、それでも商人の性として売り上げは多いほうが嬉しい。そこで新年めがけて少し大きめの都市を目指し、キャラバン隊の進路をサンタ・ローゼンの西に位置する国、フーリギアに向けた。

フーリギアの版図は四三州。小国であり、神聖四国と教会の威光を笠に、というよりほとんど属国の立場を受け入れることによって、国を維持していた。そのせいか、教会の信者が多い国でもある。

オルギン率いるキャラバン隊が目指しているのは、フーリギアの中でもサンタ・ローゼンとの国境に近い、つまり国土の中では東側に位置しているベルラーシという都市だ。この都市は幾つかの巡礼道が交差する場所になっており、都市の中心には大きな教会が建てられている。

この時期ならば、教会の本拠地であるアナトテ山には距離的に行けない人々が新年の御参りに来ているはずで、年初めの商売にはちょうどいいといえる。

「ここからなら、新年の一週間くらい前にはつけるんじゃないかしら」

広げた地図を前にして、オリヴィアがそういった。その概算にイストも頷く。このキャラバン隊と一緒に行動してすでに一ヶ月以上。一日にどの程度の距離進めるのかは、もう感覚として分っている。

キャラバン隊とのこれまでの旅路は、とりあえずは順調であった。“とりあえず”と付くのは、小さな問題は幾つも起こっているが、そのつどきちんと解決され大問題には至らなかったからである。

イストとジルドの仕事、つまり護衛の領分に限定してみれば、これまで野盗崩れや狼の群れ、バロックベアなどに襲われた。ただオルギンも言っていた通りキャラバン隊のメンバーだって戦えないわけではない。魔道具を持っていた野盗崩れは荷が重かったかもしれないが、獣程度なら彼らだけでも問題はなかっただろう。

無論、魔導士二人の、というより主にジルドの敵ではない。バロックベアの時などは、三百キロはあろうかという大物だったのだが、オルギンに言わせると「随分余裕があるように見えた」らしく、「

なるべく傷を付けずに仕留めてくれ」と注文を受けた。

「毛皮が欲しい」

ということらしい。もちろん商品として、だ。ついでに言えばバロックベアの爪もなかなかいい値段で売れる。襲われているのになんとも緊張感のないオルギンの注文に、イストは肩をすくめジルドは苦笑を浮かべたが、二人はその要望にこたえた。

バロックベアは大きな爪を振り回すが、ジルドは一定の間合いを保ちながら全てそれをかわしていく。そして相手が噛み付こうとしてきたところで一気に間合いを詰め、大きく開いた口に「光崩しの魔剣」を突き刺し、そして貫通させた。バロックベアはそれでもすぐには絶命に至らず、その爪でジルドの体をかき裂こうとしたが、その爪が彼の体に届くことはなかった。イストが展開した防御用の魔法陣が、バロックベアの爪を防いでいたのだ。

ジルドが刀を抜いて下がると、バロックベアは仰向けに倒れこみ、そして立ち上がることはなかった。ちなみにその日は熊鍋をおいしく頂いた。貴重なお肉を捨てていくなんてもったいないことはできないのだ。

こうしてイストとジルドは護衛としての仕事をこなしていたのだが、もちろん毎日毎日何かに襲撃されることなどありはしない。何もない日はキャラバン隊とメンバーや弟子であるニーナなどと一緒に雑用をこなしたりしているのだが、それも終わってしまうと本格的に仕事がない。そんなときはこうしてオリヴィアとお茶を飲みながら話をするか、新しい魔道具のアイディアをまとめたりして、イストはこのごろの毎日を過ごしていた。

「十字軍遠征の情報は何かないか？」

少し温くなってしまったお茶を啜りながら、イストはオリヴィアに尋ねる。これまで旅をしてきたからか（今も旅の真っ最中だが）、この手の情報はどうしても気になる。

「確かなことは分らないけれど、小耳に挟んだ情報をつなぎ合わせると、どうもゼーデンブルグ要塞が落ちたみたいね」

オリヴィアのその言葉にイストは、へぇ、と呟いて小さな驚きを示した。

ゼーデンブルグ要塞はアルテンシア半島の入り口を守る大要塞で、常時十万の兵を駐在させ、大量の兵糧を抱え込んでいる。

余談になるが、何もない平時に十万の兵を常時駐在させておくのは、財政的にもかなりきついものがある。アルテンシア同盟にはさらにもう一つ、パルスブルグ要塞もあったから兵の数は倍の二十万である。

同盟にしてみればこれらの戦力は正規軍に当たるわけで、半島の規模からすればむしろ少ないともいえる。だが、それぞれの領主たちが警備隊（ほとんど私兵だが）を抱えている状態で、さらに二十万の兵を常備しておくことに無駄を感じる者もいただろう。

当然、同盟内部には軍縮をとなえる領主もいたはずで、にもかかわらず発足以来ずっと要塞駐在軍の数を減らさなかったという事実は、アルテンシア半島の民に植え付けられた恐怖がいかに深刻であったかを物語っている。

閑話休題。話を元に戻そう。そのゼーデンブルグ要塞が落ちたと

いう。

「十字軍側の被害は？」

ゼーデンブルグ要塞は噂に聞こえた大要塞である。それを落としたとなれば、十字軍側にも相当な被害が出ているとイストは思ったのだが、オリヴィアの答えは意外なものだった。

「それが、十字軍に被害はほとんど出ていないらしいのよ」

そんな馬鹿な、と言おうとしてイストはその言葉を飲み込んだ。別の可能性が頭をよぎったからである。

「シーヴァ・オズワルド、か……」

シーヴァ・オズワルド率いる反乱軍討伐のために要塞の軍を動かした、と考えれば一応筋は通る。要塞駐在軍がまとめて神隠しにあっただとか、戦いもせずに逃げたなどと考えるよりはよほど説得力があるだろう。

「そうね……。詳しい情報は分らないからなんとも言えないけど、それが一番可能性が高いと思うわ」

オリヴィアと推測が一致してイストは満足そうに頷いた。腕利きの商人とは情報の分析にも優れているもので、オリヴィアのそれもなかなかのものなのだ。

オリヴィアも嬉しそうに微笑みながら膝の上にのせた黒猫、ヴァイスの背を撫でる。あれ以来、この黒猫が喋るところをイストは見ていない。もしかしたら、マスターと決めたオリヴィアにも内緒に

しているのかもしれない。ちなみにヴァイスが「ニャー」と泣くときはあの渋い声ではなく、普通の可愛らしい猫の鳴き声だった。

ピクリと耳を動かし目を開けたヴァイスが、オリヴィアの膝の上から飛び降り背伸びをする。それからそのままどこかへ向かって歩いていってしまった。

「相変わらず気まぐれね」

ご自慢のシッポをゆらゆらと揺らしながら歩く黒猫の後姿を見ながら、オリヴィアは苦笑をもらした。ただ、置いていってしまうかも、といった心配はしていない様子だ。

「気まぐれは、猫にしてみれば美徳じゃないのか」
「それもそうね」

そして、二人は少し笑った。

それにしても、とイストは思う。猫の姿をしてはいるがヴァイスは本来猫ではなく、猫型の魔道人形、突き詰めて言えば魔道具である。にもかかわらず、イストでさえそれと言われなければ、本物の猫と勘違いしてしまいそうな精巧さである。

（アレか？厳重に被せられた猫のおかげか？）

セシリアナ・ロックウェルの、歴代のアバサ・ロットの技術力の高さに、改めて脱帽するイストであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

男女の笑い声にニーナが顔を上げてみると、そこには師匠である

イストとオリヴィア（本人から呼び捨てでいいといわれている）の姿があった。

イストとオリヴィアの関係、そして過去に何があったのか、ニーナは簡単にだが話を聞いている。淡々と語る師匠の話を聞いて、なぜか泣いてしまったのを覚えている。今でも悪夢を見ると言われ、今まで気が付かなかった自分が情けなくなった。

「優しい子ね」

そういって頭を撫でてくれたオリヴィアは、強い人だとニーナは思う。彼女の顔に残る火傷のあとのことは、話の流れの中で出てきた。自分のほうが辛いはずなのに、こうして慰めてくれる彼女はとても強いと思う。

二人はまだ話しをしている。仲のいい様子だし、また楽しそうでもある。

ニーナが思うに、二人はなかなかお似合いだと思う。

かつて同じ孤児院にいて、盗賊の襲撃を生き残り、互いに死んだと思っていた二人が十年の月日を経て再会する。なかなかに運命を感じる物語ではないか。

くっついちゃえばいいのに、とそこまで安直に考えているわけではない。が、変人の師匠はともかくとしても、オリヴィアはそろそろ幸せになっていい頃ではないだろうか。いや、なって欲しいとニーナは思っている。イストと一緒になることで彼女が幸せになれるならば、ニーナとしては暗躍することもやぶさかではない。

（ただ師匠にバレたらどんな目にあうか……）

呆れられて怒られるくらいならまだいい。きっとあの師匠のことだから、こちらの暗躍を逆手にとってろくでもない仕返しをしてくれるに違いない。

「うん。修行に専念しよう」

二人を恋人にすべく暗躍する計画は半瞬の迷いもなく切り捨て、ニーナは手元の資料に視線を落とした。もとよりこちらが“本業”だ。暗躍計画には心惹かれるが、本業をなおざりにしてはいけないだろう。

（別に師匠の報復が怖いわけではなく……）

そんな言い訳がましいことを頭の隅で考えてから、ニーナは資料に目を通していく。プーリアの村で読んでいたものとは別の資料だ。あれはキャラバン隊が村を出発する前に、レポートをまとめ作品を完成させることができた。最後の査定も今回は一発合格で、ニーナは出発とほぼ同時に新しい課題を始めたのだった。

ただ、少し問題があった。キャラバン隊と行動するようになって、移動の際には馬車に乗っているのだが、当然馬車は揺れる。そんな馬車に乗りながら資料を読んでいると、酔うのだ。

（アレは気持ち悪かった……）

そんなニーナを見かねて、ではなくニーナがイストに泣きついて用意してもらった魔道具が「バランスクッション」である。この魔道具は中に空気が入っているような感じで、馬車がどれだけ揺れても、このクッションがすべてそれを吸収してくれ、座っている人間

には振動が伝わらないのである。

（おかげで随分読めましたねぇ～）

徒歩での旅ならば歩きながら読むことはできない。が、馬車に揺られている間中読めるならば、随分と時間が有効活用できる。三十センチはあった資料の山は、今の時点で半分くらい読破している。

至って順調。ニーナは進み具合にそう自己評価をつけた。これは師匠であるイストからの悪戯が減ったおかげだ、とニーナは思っている。

プーリアの村に居たとき、ニーナは「形状記憶ジェル」を入れておいたビンの中身が、イストによってオリーブオイルにすり替えられていることに気づかずにそのまま髪の毛につけてしまったことがある。そのせいで髪の毛がベタベタのツヤツヤになってしまった。まったく、あのバカ師匠は女の子の髪の毛を一体なんだと思っているのだ。

師匠は「使う前に気づけよ」と言っていたが、それではまるで中身をよく見ず頭にかけたわたしが悪いみたいではないか。

厳重に抗議した次の日、今度は良く確かめてから使ったのだが、今度は何の効果もないただのジェルにすり替えられていた。それを知らずに使ったのもだから、次の日寝癖を直そうと魔力をこめても全然直らない。そのうえ、意地になって魔力を込めているところを師匠に見られて爆笑された。

それが、キャラバン隊と一緒に旅をするようになってから、一度も悪戯を仕掛けられていない！

「ああ、平穏って素晴らしい……！」

この平穏がオリヴィアといるおかげなのだとしたら、やっぱりくっ付いちゃえばいいのに、と思ってしまうニーナであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ニーナの他にもう一人、イストとオリヴィアが楽しそうに談笑する様子を見ている人物がいた。

彼の名はコンクリフト・クルクマス。キャラバン隊のメンバーからはクリフの愛称で呼ばれている。彼は楽しそうに笑うオリヴィアの表情を見ると、悔しそうに視線をそらしうつむいた。

クリフはもともと農家の生まれだ。決して、楽な生活ではなかった。そしてそれ以上に、先の見えすぎる生活だった。土にまみれ、日照りと雨を心配する。土と空ばかりに気にして、そのうち自分が人間であることさえ忘れてしまいそうだった。いずれ嫁を貰い、そしてこのまま土にまみれて生き、そして死んでいく。そんな未来が、いやそんな未来しか思い描けなかった。

絶望した。先の知れた自分の人生に。

三年前、オルギンに頼み込んでキャラバン隊に加えてもらったのは、商人になって自分の店を持ちたいという夢があったから、ではない。実家を継いで農業を続け、先の知れた人生を歩くのが嫌だっただけだ。家は弟が継ぐだろう。

そして出会ったのが、オリヴィアだった。

一目惚れ、だった。

蜂蜜色の髪の毛も、青い瞳も、別に珍しいものではない。けれども彼女のそれはやっぱり特別で、今でもその考えは変わらない。笑いかけてくれたその笑顔に見とれて、それを気取られるのが恥ずかしくて、邪険にしてしまったのを後悔している。右目を髪の毛で隠していたが、その頃は深くは考えておらず、気が付けばその下にあるであろう素顔を想像していた。

最初に邪険にしてしまったせいか、オリヴィアとはなかなか会話ができなかった。いや、オリヴィアは話しかけてきてくれるのだが、どうしてもつっけんどんな対応になってしまう。そんな時、彼女は決まって苦笑を浮かべて離れていくのだ。その背中を見送りながら、話しかけてもらえて嬉しいのに邪険にしてしまったことに後悔する。そんなことの繰り返しだった。

（あそこで話しているのが、なんでオレじゃないんだよ……！）

つい先ほどの光景、イストとかいう護衛とオリヴィアが楽しそうに話していた光景を思い出して、嫉妬する。

イストは、ヤツはオリヴィアの右目のことを知っている。にもかかわらずああやって話ができる。自分は、そのことを知ってますます気まずくなってしまったというのに。

オリヴィアの右目のこと、そこに広がる火傷のあとのことを知ってしまったのは、ほとんど偶然だった。彼女が顔を洗っているところに出くわしたのである。正直な話、オリヴィアしか見ていなかったから、タオルの上におかれた眼帯には気づかなかった。

そしてオリヴィアが顔を上げ髪の毛をはらったその瞬間、クリフは右目とその周りに広がる醜い火傷のあとを見てしまったのである。

それは衝撃的な光景だった。オリヴィアは綺麗な人である。そんな彼女の顔に残る火傷のあとは、その凄惨さがいっそう際立っているように見えた。

オリヴィアに声をかけることもできず、かといってそれを見続ける勇気もなく、クリフはその場から逃げ出した。

初めて見てしまったその素顔は、当然のことながら想像していたものとは違う。自分が何も知らず、勝手な幻想を抱いていただけだと思い知らされ愕然とした。

ただ、それで恋が冷めてしまったのかといえば、そんなことはない。傷ついているはずだと思うと、支えてあげたいと思うようになった。

もっと彼女のことを知らなければならないと思い、キャラバン隊のわりと初期からいるメンバーにそれとなく話を聞いてみた。そしたら、物凄い形相で睨まれた。

「興味本位で首突っ込んでいい話じゃねぇんだぞ！」

それでも食い下がったら、今度は殴られた。

「聞きたいんなら嬢ちゃん本人から聞け。聞く覚悟もねぇ奴が首突っ込むんじゃねぇ！」

まったくその通りだろう。しかし、かといって本人に聞くことな

どできなかった。それができる勇気があるなら、あの時逃げ出しはしなかった。

殴られた頬を擦りながら、すごすごと退散する。そして、そこで出会ってしまったのだ。オリヴィアと。

「どうしたの？」

「あ、いや、その……」

クリフ本人はいつも通りに対応しているつもりだった。しかしいぶかしむオリヴィアの様子を見て、それが失敗していたことに気づく。

そして、オリヴィアが何かに思い至ったのか目を見開く。そして、彼女の表情は強張っていった。

バレた、と直感した。オリヴィアの右目の火傷痕を見てしまったことに気づかれた、と彼女の表情で分ってしまった。

血の気が引く。何か言おうとするが、上手く言葉が出てこない。そのせいでさらに焦り、挙動不審になっていく。それを見たオリヴィアが確信を深めたのが分った。

悪循環。

「ごめん。わたし、ちょっと用事思い出したから……！」

そういって顔を俯かせ、オリヴィアは逃げるようにして足早に去っていく。それがいっそありがたかった。だけど、一瞬後には“ありがたい”なんて思ってしまった自分に嫌気がさす。

なぜ何も言えなかったのか。なぜ手を伸ばさなかったのか。なぜ追いかけていかないのか。

なぜ、なぜ、なぜ？

それから、オリヴィアとはさらにぎこちなくなってしまった。簡単な事務連絡程度にしか、言葉も交わさない。

それでもオリヴィアの夢をみる。だけど夢の中の彼女の顔は、想像していた、火傷痕のない顔だ。その夢を見るたび、自分はありのままのオリヴィアを受け入れられていないのだと、激しい自己嫌悪に陥る。

嫌われてしまったかもしれない。

そう思うと、自分から話しかけることもできない。謝ることもできず、オリヴィアのとの関係はいっこうに改善されないまま、初めて出会ってからもう三年が経ってしまった。

オリーブオイルを仕入れるためプーリアの村に来たとき、キャラバン隊の隊長オルギンはそこで護衛二人と雑用を一人雇った。護衛の名前はイスト・ヴァーレとジルド・レイド。雑用の名前はニーナ・ミザリだという。

二人の護衛の腕は確かだと思う。クリフも男手として武器を持って戦うことが何度かあったが、二人が前に出て戦ってくれると随分楽だし危険も減った。

三人とも気のいい連中で、すぐにキャラバン隊とも馴染んだ。ただ三人、特にイストがオリヴィアと仲良くなったのは、クリフにとって大問題であった。しかもイストはクリフがつまずいた障害を、

いとも簡単に乗り越えてしまったのだ。

その時オリヴィアは、やはりあの時と同じ様に顔を洗っていた。イストはそこに近づいていき、彼女にタオルを手渡したのだ。そしてそのタオルを受け取ったとき、オリヴィアは笑顔だった。

衝撃的だった。火傷痕のことをクリフに知られたときにはあんなにも動揺したというのに、イストには火傷痕そのものを見られても何も気にしていないのだ。そしてイストのほうも、彼女の顔に広がる火傷の痕を気にしている様子はない。まるでそんなものは何の問題でもないかのように、二人はごく普通にしていた。

（なんでアイツにはできて、俺にはできないんだよ……）

差を思い知らされた気がした。自分の器の矮小さを思い知らされた気がした。

イストはオリヴィアの幼馴染だという。つまり彼女の過去を知っている。自分だってソレさえ知っていれば、と思う一方で面と向かって聞く勇気はない。

自分の臨む位置にいるイストの事が、憎らしくて羨ましくて妬ましい。そして遠くから眺めていることしかできない自分が、嫌いだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

先ほどからこちらを見ていた男が、誰かに呼ばれたのかその場を去っていく。イストの視線に気づいてオリヴィアも同じほうを見た。

「クリフ、ね……」

オリヴィアが少し悲しそうにその名前を呟く。聞けば火傷のあとをどこかで見られたらしい。

「見られたとしてもそれは私の不注意だろうし、何かあるわけじゃないわ。ただ、お互いぎごちなくなっちゃってね……」

以来、距離が開いたままだという。

「嫌われちゃったかな……」

その言葉は、クリフには届かなかった。

第七話　夢を想えば？

「あの、師匠、ちょっといいですか？」

意を決したように、ニーナがイストに話しかけた。

二人がいるのはガタガタと揺れる馬車の中である。この馬車の中には二人しかおらず、御者はジルドがやってくれているため、キャラバン隊のメンバーに話を聞かれることはない。

「ん？どした？」

煙管型禁煙用魔道具「無煙」を吹かしながら、心ここにあらずといった感じでぼんやりとしていたイストは、弟子に呼ばれると視線を水平に戻した。

「ヴァイスのことなんですけど……」

「あの黒猫がどうかしたか」

「魔道人形、なんですよね……？」

聞けば一人で資料を読んでいるときに話しかけられたという。「すっごい渋い声」と驚いたら、「……やっぱりアバサ・ロットの弟子だにゃ」と呆れられたとか。

「よかったな、変人認定だ」

「全然よくないですよぉ！？」

わたしは一般人で常識人ですっ、と力一杯主張する弟子を、イストは「無煙」を吹かしながら、恐らくは意図的に無視し話を進める。

「それで？興味が湧いたってか？」
「あ、いや、その……、魔道人形じゃなくて、義足とか義手のほうに……」
それで魔道人形「白（ヴァイス）」を参考にしたいらしい。しかしニーナは言いにくそうだった。現状彼女には課題が与えられており、それを放り出して新しい魔道具に現をぬかすのは、やはり良くないと自覚しているのかもしれない。が、新しいことに興味を持つのが悪いことだと、イストは思わない。
「製作者の名前はセシリアナ・ロックウェル。『白（ヴァイス）』だけじゃなくて別の魔道具の資料も残ってるだろから、今度資料室をあさってみろ」
「いいんですか！？」
ニーナが目を輝かせる。今なら「三回まわってワン！」とか言われてもやりそうだ。
「いいよ。ただし作るのは課題が優先」
課題は適当に出しているわけではない。弟子となった者が着実に知識と技術そして着眼点を増していけるように、その順番は歴代のアバサ・ロットたちによって少しずつ修正されながら今日まで受け継がれているのである。
師匠のお墨付きが出て喜ぶニーナに苦笑してから、イストは再び「無煙」を吹かし、宙を眺める。
「あの……」
「ん？まだなんかあるのか？」

「いえ、さっきからずっとそうしてますけど……、悩み事ですか？」

そう言われイストは悩んでいたのだろうかと考え、そして悩んでいたかもしれない、と結論を下した。とはいえ大きな問題ではない、と自分では思っている。だが言葉にして出せば考えもまとまるかもしれない。

「なんていうか、オリヴィアにやる魔道具のことでな……」
「思いつかないって事ですか？」
「いや、義眼にしようとは思ってる。けどな～」

イストは魔道具職人である。よって火傷の痕を治すことはできない。だが火傷の痕を隠すような魔道具ならば作ることができる。それこそ綺麗な素肌と眼球があるように見せかける、そんな魔道具だって作れる。

しかし、そんなものになんの価値がある？

隠すだけなら今と同じである。隠したならば隠し続けなければならない。いくら精巧に隠し火傷などしなかったかのように見せかけても、それは隠しているだけ、見せかけているだけだ。出合う全ての人を騙せたとしても、自分は決して騙せない。オリヴィアはいつか醜い素顔がバレてしまうではないだろうかと、怯え続けるだろう。精巧に隠していた分、バレた時の周囲の反応は大きく、それだけ大きく彼女の心をえぐるだろう。

そんな魔道具を贈ったところで意味はない。少なくともイスト・ヴァーレという魔道具職人はそう考えている。

そうなると、作るべき魔道具は義眼くらいしか残っていない。つまり義眼という選択は、消去法の末に残ったものでしかないのだ。

「でもな～、普通に義眼作っても多分使ってくれないんだよ」

義眼を使うということは、火傷の痕をさらすということである。火傷の痕を人に見られる。それはオリヴィアが最も恐れていることだ。どれだけ便利な魔道具であっても、そんな精神的苦痛を背負い込んでまで義眼を使うことはないだろう。

だが贈った魔道具をまったく使ってもらえないのは、魔道具職人としては悲しいものがある。

義眼を作っても使ってもらえない公算が大きく、だから言って他にいいアイディアが浮かぶわけでもない。さてどうしたものか、というのがイストの悩みであった。

「相手が必要としている物を作ってやれないのは、やっぱ魔道具職人としては悔しいよな……」

誰にともなくイストは呟く。

キャラバン隊がフーリギアのベルラーシに着いたのは、その二日後のことであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ベルラーシは予想通り大変な賑わいを見せていた。通りにごった返している旅行者のほとんどは、この都市の中心部にある教会で新年のお参りのために来た参拝客であり、その参拝客を目当てにした商人たちもこの都市を訪れている。かく言うオルギン率いるキャラ

バン隊も、そんな商人の一団のひとつだ。

オルギンはまず街の広場で露店を開く許可を貰い、そこを街の中での商売の拠点にした。また街の外にはキャラバン隊の馬車をまとめておき、そこにも露店を開く。街の中はスペースが限られており、思うように商品を並べられないのだ。同じ事を考えているのか、幾つのも露店が待ちの外に出されており、お祭り騒ぎの様相を呈していた。もっとも新年の祝いはまごうことなくお祭りであるが。

ただ馬車を都市の外に置くのは、露店を開くためではない。むしろ馬車を都市の外に置かねばならないからついでに露店も開く、というのが正しいかもしれない。

今、ベルラーシには多くの参拝客が訪れている。当然、宿屋はどこもかしこも一杯で空きなどない。仮にあったとしても、街の中に馬車を何台もつないでおくのは、その分場所代も多く取られるしはっきり言って邪魔だ。ならば街の外においておくのが一番簡単でいい。何人か留守番役を決めなければならないが、それも持ち回りにすれば不公平にはならない。

イストたち三人は、今回この留守番役を買って出た。今はまだ護衛として雇われている身分。この留守番役も仕事の範疇であろう。無論、留守番役は三人だけではないが、それでも街の宿屋に泊まれる人数が三人増えるわけで、柔らかいベッドが恋しいメンバーには福音だったようだ。

ただイストには別の思惑もある。人目が少なくなれば、それだけアバサ・ロットの工房である「狭間の庵」にこもって魔道具を作りやすくなる。さすがに籠もりっぱなしというわけにはいかないだろうが、イストとニーナが交互に使う分には、それほど怪しまれずに

すむだろう。

新年が近づくにつれ、ベルラーシも熱気を帯びていく。お祭り気分にあてられた人々の財布の紐は予想通り緩くなっている様子で、帳簿を付けるオリヴィアもホクホク顔だ。彼女は今回留守番組なのだが、留守番役が必要なのは主に夜で、昼間は街の中に開いた露店の商品の補充や御用伺いに奔走していると言う。

「イスト今暇？暇よね？ちょっと手伝って」

御用伺いから戻ってきたらしいオリヴィアは、馬車の陰で「無煙」を吹かしていた（決してサボっていたわけではない）イストをひっ捕まえ、強引に自分の仕事を手伝わせた。なんでも何軒かの食堂や宿屋からオリーブオイルの注文を受けてきたので、これから量り売りに行くのだという。

小さめの馬車の荷台を空にし、量り升を用意する。あとはオリーブオイルの入った大樽を乗せればよいのだが、これは男の大人でさえも一人で持ち運びできるような代物ではない。当然、女性のオリヴィアでは動かすこともままならない。

「イスト、お願い」
「おいおい、一人でやれっていうのかよ」
「出来るでしょ？」

あっさりとそう言われイストは肩をすくめた。確かにやってやれないことはない。それを見越してオリヴィアはイストを引きずってきたのだろう。その人選たるや見事である。

（人を使うのが上手いねぇ……）

使われる側のイストとしては苦笑するしかない。
苦笑しながらもイストは「光彩の杖」に魔力を込める。するとオリーブオイルの入った大樽の上に魔法陣が描かれ、大樽が宙に浮く。イストはさらに宙に浮いた大樽の下にも魔法陣を描き、大樽を安定させてから動かし、オリヴィアが用意した馬車の荷台に移動させた。

物体を宙に浮かす術式は魔力の消費が激しく、長時間は使えない。しかし今回のように短時間ならば大きな問題はない。もっとも疲れるからやりたくないというのがイストの言い分である。

「男が泣き言いわない」

そういってオリヴィアはイストの背中を叩き、馬車の御者席に座り手綱を取った。仕事は終わったとばかりに再び「無煙」を吹かそうとするイストに、オリヴィアは無情にも（イストの主観）宣言する。

「何やってるの？早く乗って」
「オレも行くのかよ……」
「護衛でしょ？可憐な乙女が暴徒に襲われないよう、しっかり肉体労働してね」
「……建前と本音が混じってるぞ」

あら失礼、とオリヴィアは屈託なく笑った。こうやって笑ったり「可憐な乙女」と自己申告したりするあたり、なかなかいい性格をしている。

イストは再び肩をすくめ、オリヴィアの隣に座った。最後の抵抗のつもりか、「無煙」は吹かしっぱなしだ。

そんなイストの様子に、オリヴィアは本人に気づかれないよう小さく笑ってから、馬車を出した。

そんな二人の様子を、クリフが悔しそうに見送っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これで全部か」

「そうね。お疲れさま」

全ての食堂や宿屋を回りオリーブオイルの量り売りを終えると、時刻はすでにお昼を大きく過ぎていた。参拝客が多いこの時期、料理に欠かせないオリーブオイルの需要は多いらしく、あらかじめ御用伺いで注文をとってきたところ以外からも声がかかる盛況ぶりであった。

可憐な乙女が暴徒に襲われる、などということはもちろんなく商売は順調に進んだ。満タンだった大樽も、油はほとんどなくなり随分と軽くなっている。皮袋の中には銀貨がジャラジャラと詰まっており、オリヴィアも満足そうだ。

そして一仕事終われば腹が減る。仕事を優先したため二人とも昼食は食べておらず、一度意識してしまうと空腹は声高に自己主張を繰り返す。

「どこかの店にでも入るか？」

「……馬車があるとお店には入りにくいわね。露店で買って済ませましょう」

食堂に入るならば、一度街を出て馬車を置いてくる必要がある。だが今は二人ともそんな手間をかける気にはなれなかった。幸い露天の中には参拝客目当てに食べ物を売る店もある。軽く食べて空腹を満たそう、という話になった。

「じゃあ、オレが買ってくるから、教会前の広場で待っていてくれ」

店に入るわけではないのだから、別に馬車で移動しながら食べてもいいのだが、一仕事終えた後だしできることなら落ち着いて食べたい。道路の真ん中に馬車を止めておくわけにもいかないから、二人は教会前の広場で食べることにした。

オリヴィアは頷いて了承を伝えてから、銀貨を何枚か取り出しイストに渡した。どうやらこれは経費になるようだ。

人ごみの中にまぎれていくイストを見送ってから、オリヴィアは広場を目指して馬車を出した。御者席に座っているオリヴィアは、いつもよりも視線が高い。普通に歩けばごった返す人々の頭か背中くらいしか見えないだろうが、今は道が広場にまで続いていることをしっかりと確認できた。

広場に着くと、そこでも数多くの露店が開かれている。オリヴィアは他の商人たちの邪魔にならないよう、馬車を広場の隅っこに止めた。御者席からおりて、馬車を引いてくれていた馬の首を撫でながら、「ご苦労様」と声をかけてやる。すると馬のほうも嬉しそうにして、顔をオリヴィアのほうに摺り寄せてくるのだった。

そうやって馬の首筋を撫でてやっていると、人々のざわめきがオリヴィアの耳に入った。視線を巡らせて原因を探ると、教会の門が開き中から一団が出てくるところであった。その集団の中心には一

人の女性がおり、彼女がその集団の主要人物であることをうかがわせた。

「ララ・ルー・クライン様だ」

そんな声が、オリヴィアの耳にも届く。

ララ・ルー・クライン。確か、今の神子であるマリア・クラインの養女であり、後継者と目されている人物であったはずだ。視察巡礼の旅に出ているとは聞いていたが、ベルラーシで見かけるとは思っても見なかった。

いや、良く考えればそれほど珍しいことでもないかもしれない。新年が近づくと、ここベルラーシに多くの参拝客が訪れることは彼女も知っているはずで、ならば視察巡礼の途中、新年めがけてこの都市を訪れても不思議はない。

ララ・ルーを視線で追っていけば、参拝客らしい人々に笑顔で話しかけている。彼女の年齢は十七、八のはずだが、童顔のせいかもっと幼く見える。

（教会……。神子様、かぁ……）

オリヴィアは教会に対してあまりいい印象を持っていない。それは、

「神様がいるならもっとマシな世界を作ってくれよ」

という漠然とした不満ではなく、自身の体験に基づく不快感が原因であった。

右手をまくると、そこには蝶をあしらった腕輪がある。孤児院に

いた頃は、これを持っていればそのうちにお母さんが迎えに来てくれる、とそう思っていた。今はもう、そんな夢はみていない。

（これは過去。わたしの、過去）

今はそう考えている。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

声をかけられ我に返ると、目の前にいたのはララ・ルー・クラインその人であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本来、ララ・ルー・クラインの視察巡礼の旅において、フーリギアのベルラーシを訪れる予定はなかった。計画では神聖四国の西部を巡る予定で、国境を越えるつもりはなかったのだ。

だがララ・ルーが近くに来ていることを知った、ベルラーシで教会を管理している聖職者に「是非おいでください」と招待を受けたのだ。時期的に見て、新年のお参りをする参拝客に顔を見せてやって欲しい、ということなのだろう。

予定してはいないことだったが、ベルラーシは神聖四国の境にも近く、また新年になると多くの参拝客がそこの教会にお参りをすることを知っていたララ・ルーは、予定を変更してこの都市に来たのである。

教会を管理している聖職者の話によると、毎年この時期になるとベルラーシの人口はいつもの二倍以上に膨れ上がるという。実際街の多くの人で賑わっており、露店もたくさん開かれている。あとで

こっそり出歩いてみよう、とララ・ルーが画策していた。

だがその前にお仕事である。お仕事と言っても特別なことをするわけではない。精々参拝客と話をするくらいだ。とはいえ神子の後継者であるララ・ルーは、ただそこにいることに意味がある。神子の代理という彼女の立場は、それだけで教会の神秘性を体現しており、多くの参拝者は「ご尊顔を拝する」ことができれば満足なのである。

この扱いに、ララ・ルーとしてはこそばゆいものを感じざるを得ない。彼らがありがたがっているのは神子であるマリア・クラインであり、自分はいわばその“影”にすぎないとわきまえているからだ。それでも敬愛する義母が、こうして人々に慕われているのを見るのは嬉しい。また同時に義母の評判を落とさぬよう、いっそう精進しようと思うのである。

この日は午前中に一度教会前の広場に出て信者の方々とふれあい、遅めの昼食を食べて少し休憩してから、もう一度広場に顔を出した。ララ・ルーの周りは護衛の人たちが固めている。最初の頃は仰々しくて嫌だったけど、「大切な御身ですので」と色々な人に説得され、彼女は今では半分諦めていた。ただそのうち隙を見つけて出し抜き、一人歩きを楽しむつもりでいる。

ララ・ルーが広場に顔を出すと、すぐに信者たちが寄ってくる。ララ・ルーは手を握ったりしながら、彼ら一人ひとりに声をかけていく。

だからソレが目に入ったのは、本当に偶然だった。

広場の隅に一台の馬車が止まっており、その馬車に一人の女性が

寄りかかっていた。髪の毛は蜂蜜色で、あいにくと瞳の色は見えない。ただ髪の毛で右目の部分を隠しているのが特徴的だった。

その女性が、右腕にはめた腕輪を眺めている。遠目に見ただけだが、それでもララ・ルーはその腕輪に見覚えがあった。

（あれは、お義母さまの……？）

その女性がつけている腕輪は、マリアが持っている蝶をあしらった腕輪に良く似ていた。いや、似ているように見えた。

マリアの腕輪について、そのいわれはララ・ルーも知っている。先代の神子でありマリアの恋人であったヨハネスとお揃いの腕輪であり、今彼女が持っているのはそのヨハネスの腕輪であるという。

ではもともとマリアが持っていた腕輪は今どこにあるのか。それはごく自然に抱く疑問だろう。しかしララ・ルーは、その疑問を直接マリアに聞くことができずにいた。

断片的な情報なら、噂話として彼女の耳にも入ってきている。マリアが実子を死産したときに一緒に墓に入れたとも聞くし、あるいは孤児院に預けたときに持たせた、とも聞いている。しかしどちらが正しいのか、あるいは両方とも間違っているのか、ララ・ルーは確かめることができなかった。

実子。実の、子供。

その言葉はララ・ルーの胸を締め付ける。もちろんララ・ルーは義母であるマリアのことが大好きだ。恩義を感じているし、いつか恩返しをしたいとも思っている。そして義母も自分のことを愛して

くれていると、確信している。

だけど、それでも。ララ・ルーが養女であるという、実の子ではないという事実は、消えはしない。

その子はどうなったのか。生きているのか、それとも死んでしまったのか。生きているならどうしてマリアと一緒にいないのか。もしかして自分は……。

自分は、その子の身代わりなのだろうか。

養女であるという負い目。幸せであるという、マリアの実の子を差し置いて幸せになってしまったという、負い目。それはララ・ルーの心の中に小さな、しかし暗い影を落としている。

だからララ・ルーは今まで「マリアの実の子供」に関する話題は避けてきた。しかしここベルラーシで、そこにつながるかもしれない腕輪を見つけてしまったのだ。

勘違いで済ませることもできた。しかしララ・ルーは済ませなかった。マリアの持っている腕輪は彼女も見慣れている。遠くからでもそれと見分ける自信はあった。

その、蝶をあしらった腕輪に良く似た腕輪を見つけたのだ。しかもはじめて。

心臓の鼓動が早くなる。

ララ・ルーはマリアの実子に対して負い目を感じている。つまり名前も知らないその子に負い目を感じるほど、気にしているのだ。

足がその腕輪を持っている女性のほうに向く。なぜわざわざ近づいていくのだろう。今まで触れたくないと避けていたのに。

考え事でもしているのか、随分近づいてもその女性は気づく様子がない。

今なら引き返せる。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

声をかける。声をかけて、しまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

感傷に浸っているところに突然ララ・ルー・クラインに声をかけられ、オリヴィアは一瞬だけだが放心した。だがその一瞬あとには万人受けする営業用の笑顔を作る。教会のことは好きになれないし、積極的に関わるつもりもない。しかしその感情をこの場で表に出すほど、オリヴィアは子供ではなかった。

「はい、何でしょうか」

オリヴィアがそう応じると、ララ・ルーは一瞬戸惑うような素振りを見せてから言葉を続けた。

「わたしはララ・ルー・クラインといいます」

「存じております。オリヴィア・ノームといいます」

「素敵な腕輪ですね。少し見せていただいてもよろしいでしょうか？」

「え、ええ、かまいません」

そういってオリヴィアは腕輪を外し、ララ・ルーに手渡した。ララ・ルーは受け取った
腕輪を一通り眺めると、一瞬気難しげな表情を浮かべたが、すぐにもとの笑顔に戻った。しかし彼女の胸のうちは表情ほど穏やかではない。

（これは確かにお義母さまと同じ……。でもだからと言って……）

その腕輪には蝶をあしらった絵柄が掘り込まれていた。見慣れた、マリアの腕輪と同じ絵柄である。だからといってこのオリヴィアという女性と義母マリアになにかしらの関係があると決め付けるのは早計であろう。

「これは、どこでお求めになったのですか？」
「さて、それは……。物心付いたときから持っていましたが、自分で買ったものではないので……」

嘘はついていない。しかし全ての事情を説明する気にはなれなかった。全てを説明しようと思えば自分が孤児で、その上生活していた孤児院が盗賊に襲われてほぼ全滅した、などということも言わなければいけないだろう。それを説明したときの人々の反応に、オリヴィアは大概飽きていた。

そうですか、とララ・ルーは呟き腕輪をオリヴィアに返した。さらに何か言おうとしたとき、横から男の声が割り込んだ。

「悪い。待たせたか」
「イスト……」

どこかほっとしたように、オリヴィアがその男の名を呼んだ。
イスト、と呼ばれた男は整った目鼻立ちをしていたが、かといって取り立てて美形というわけでもなかった。だが、その目は強い力を秘めているようにララ・ルーには感じられ、それが容姿以上に彼の存在に生気を与えていた。食べ物でも買ってきたのか、いい匂いのする袋を抱えている。

「貴様、無礼であろう！」

話しに割り込んできたそのイストという男に対し、護衛の一人が怒りの声を上げた。ただ彼にひるんだ様子はなく、オリヴィアに何ごとかと視線で問いかける。

「ララ・ルー・クライン様よ」
「ああ、なるほど……」

イストは納得した様子を見せたが、かといって慌てることはなかった。それどころかこんなことを言い出した。

「一つ聞いてみたいことがあったんだけど、いいか？」

言葉遣いを改めない彼に対し憤りの声を上げる護衛を制し、ララ・ルーは「いいですよ」と答えて先を促した。話を遮られたことに憤りは感じたが、それ以上にほっとする気持ちのほうが強かった。これ以上藪をつついては、蛇よりやっかいな何かが出てきそうな気がしていた。

（触れたいけど、触れたくない。矛盾していますね……）

イストというこの男のおかげで、今回は触れなくてもいいほうに話が流れてしまった。そして一度流れてしまった話を蒸し返す気力は、ララ・ルーにはなかった。

腕輪のことはとりあえず頭の片隅に追いやり、ララ・ルーはイストの問いかけのほうに意識を集中した。

「何の罪もない子供たちが盗賊に襲われ、そして殺された。なぜそんなことが起こる？」

その問いかけにオリヴィアは息を呑んだ。必要最低限の、いやもしかしたら必要最低限未満の言葉だが、彼女はイストが何をいわんとしているのか分ったのだ。つまりあの夜の、孤児院が盗賊に襲われた夜の説明を求めているのだ。そしてその答えは、かつてオリヴィアが求めたものでもある。そして恐らくはイストも。

「それは神々が小さな天使たちをお求めになったのです。その子供たちは、今は神々の御許で幸せに暮らしていますよ」

慣れた調子でララ・ルーはそう答え、目を閉じて冥福を祈った。この手の問いかけは過去に何度もされてきた。そしてそのたびにこう答え、相手はそれで満足してくれた。教会ではそう教えられていたし、実際彼女自身その教えを疑ったことはなかった。

「そうかい。それはよかった」

イストのその言葉で、ララ・ルーは目を開けた。しかし、イストの目を見てララ・ルーは凍りつく。

「じゃ、そろそろ行くか」

イストはそういって顔色を悪くしているオリヴィアを促し、馬車の御者席に乗せた。それから彼はララ・ルーに軽く一礼し、馬を引いてその場を後にした。

二人が去ったあとも、ララ・ルーは凍り付いてしばらく動けなかった。

（なんで……？どうして……！？）

つい先ほどのララ・ルーを見るイストの目。あの目は冷たい軽蔑の目だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

オリーブオイルの量り売りに行ったオリヴィアとイストの二人が、キャラバン隊の本隊に戻ってきたのはお昼を大きく過ぎた頃のことだった。昼食は露店で買って済ませたらしく、馬車の荷台には空の袋がまとめられていた。

帰ってきた二人の、というよりオリヴィアの異変に、クリフはすぐに気が付いた。いつも明るい彼女が、今は意気消沈したように肩を落としている。

イストと喧嘩でもしたのかと思ったが、どうも様子が違う。むしろイストは気落ちしたオリヴィアを気遣う様子を見せ、今はお茶の用意をしていた。

お茶を差し出したイストに、オリヴィアが微笑みかける。その光景を見て、クリフの胸は痛んだ。自分にはできないことをいとも自

然にやってしまうイストのことが、憎らしくて羨ましくて、そして妬ましい。

クリフの視線の先で、二人がお茶を飲んでいる。特に会話をしている様子はないが、二人の間には独特で穏やかな空気が流れていて、クリフはそんな二人の間に入ることはできなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

オリヴィアがララ・ルーと出会い、そしてイストが過去を問いかけたその日の晩、彼はキャラバン隊の馬車から少し離れたところに座り込み酒を飲んでいた。季節は冬の盛り。空に雲はなく、星は剣のように冷たい光を放ち、地上に残ったなけなしの熱を奪っていく。イストのそばには「マグマ石」が煌々と熱と光を放ち、極寒の世界に対抗していた。

「わたしにも一杯もらえるかしら」

近づいてきた足音に目をやると、オリヴィアが立っていた。そして彼女は返事をもらう前にイストの隣に座り込んだ。

「寒くないのか？」

イストは魔道具である「旅人の外套（エルロンマント）」を羽織っている。この外套は温度調節と雨・風除けをする魔道具だから、これを一枚羽織っていれば中は薄着でも随分と温かい。が、オリヴィアのほうはそうはいかないはずだ。

「大丈夫。一杯着込んできたから」

そう答えるオリヴィアに、イストは杯をわたし「魔法瓶」に入れられたお酒をついでやる。

「あら、温かいお酒なんだ」

杯に注がれたお酒が湯気を立てているのを見て、オリヴィアが少し驚く。このエルヴィヨン大陸にはお酒を暖めて飲む習慣はあまりないから、当然といえば当然だ。

「コッチで仕入れたスモモのお酒だ。買ったときに、この季節なら暖めて飲むといいって店員さんが教えてくれたんだ」

「……忙しくてもお酒の補給は欠かさないのね」

たいして飲めないくせに、とオリヴィアが少し呆れたように言う。イストがお酒好きであることは、この二ヶ月近く一緒に旅をして彼女も知っている。同時に彼が“うわばみ”とか“ザル”などと称されるような、酒豪でないことも知っている。下戸というほど弱くはないのだが、飲んだら飲んだだけ酔うタチだ。一度酒好きの隊員の飲み比べに付き合って潰され、もどしたのも知っている。ちなみにオリヴィアは大体止める側だ。放っておくと商品にまで手を出すのだ、奴らは。

オリヴィアは、それほどお酒は好きではない。甘い食中酒を嗜む程度だ。それが、この日の夜はアルコールを求めた。

原因は分っている。昼間の、ララ・ルーのあの言葉だ。

「……悪かったな」

「なんでイストが謝るのよ」

「なんとなく、な……」

会話はそこで途切れた。二人とも言葉は交わさず、ただ冬の星空を眺めながらスモモのお酒で体を温める。

「ねぇ」

沈黙が気まずくなったわけではないだろうが、先に口を開いたのはオリヴィアのほうだった。視線は夜空のほうに向いている。

「あの質問、前にもしたことがあるの？」

それは疑問というよりも確認だった。確証はないが確信はある。矛盾してはいるが、オリヴィアは疑っていない。

「ん？まあね。ていうか、そっちも？」

「……前に一度、ね」

そして同じ答えを頂戴したのだという。きっと、教会の方でも良くされる質問で、答えがマニュアル化されているのだろう。

「アレはないよな……」

「そうね……」

あれは何も知らない人間の慰め方だ。いや、慰めにすらなっていない。生き残ってしまった当事者にしてみれば、傷口に塩をすり込まれるのと同じだ。ああやってしたり顔の聖職者に慰められたあと、イストは、そして恐らくはオリヴィアも、神々とやらを呪ったものである。

そうやって二人が話していると、新たな足音が近づいてきた。そ

して足音の主は、躊躇いがちに二人に声をかけた。

「あの……！」

「……こんなところに一人できていいのか？」

イストが呆れたように足音の主にそう声をかけた。足音の主は、ララ・ルー・クラインその人であった。昼間のような護衛はつけておらず、ただ一人でここまで、つまり街の外まで来たようである。

「抜け出してきました」

そう答えるララ・ルーに、イストは「お転婆だねぇ」と呆れる。ただその言葉には若干の棘が含まれていた。

「それで、何のようだ？」

イストにそう問われると、ララ・ルーは一瞬言いにくそうに目を伏せたが、すぐに意を決したように目を上げイストの視線を真っ直ぐ受け止めた。

「昼間、気分を害してしまったようでしたので……」

「わざわざ謝りに来たの？」

オリヴィアも呆れ気味だ。しかしララ・ルーはそれを否定した。

「いえ、その理由を伺いに」

その言葉を聞くと、イストは「へぇ」と小さく呟き目を鋭く細めた。酔っ払っているわけではないが、アルコールのせいか目が据わっている。

「同じような質問は、これまでも何度かされたことがあります。そして同じような答えを返してきました」

今回と同じように。しかしその答えを聞いたイストは、目に蔑みを宿した。それを見て、傷つけてしまったと直感したという。もしかしたら、これまで質問に来た人たちも傷つけてしまっていたのではないかと思うと、いてもたってもいられなくなった。

「教えて頂けませんか。何が、悪かったのでしょうか？」

「……あの時、自分がなんて答えたか覚えてるか？」

杯を傾けながらイストはララ・ルーに問うた。ただ視線は彼女から外し、夜の寒空を見上げている。

あの時、イストは次のように問い、そしてララ・ルーはこう答えた。

『何の罪もない子供たちが盗賊に襲われ、そして殺された。なぜそんなことが起こる？』

『それは神々が小さな天使たちをお求めになったのです。その子供たちは、今は神々の御許で幸せに暮らしていますよ』

「はい。覚えています。ですが……」

その答えにまずいところがあったとは、どうしても思えないのだ。実際教会ではこう教えられてきたし、幸せになっているのだから慰めにもなると思うのだが。

しかし、ララ・ルーのそんな主張は、イストの次の言葉で木っ端微塵に砕かれることになる。

「それじゃまるで神々が子供たちを殺したみたいじゃないか」

イストの言葉はむしろ淡々としている。しかしララ・ルーは殴られたかのような衝撃を受けた。

神々が小さな天使たちを求めた。それはつまり神々が子供たちの死を望んだ、子供たちを殺した、と解釈することができる。自分たちの都合で子供を殺して召し上げる。その行為に慈悲深さを感じる人はいないだろう。

「それは……！」

ララ・ルーは反論しようとするが、言葉は出てこない。言葉をさがす彼女を無視して、イストは続ける。

「しかも盗賊に襲わせて、だ」

恐怖、絶望、激痛。そんなものをありったけかき集めたかのような殺し方だ。神様ならもっとマシで楽な死に方をさせてやれよ、とイストは努めて独り言の調子で呟いた。そうしないと、罵声を浴びせてしまいそうなのだ。

「……っ」

ララ・ルーはもはや何もいえなくなり、下唇を噛んで俯いた。オリヴィアは何も言わない。杯を両手で持ち、何かを考えているのか黙り込んでいる。イストはもう一度杯を傾けお酒を喉に流し込むと、視線をララ・ルーのほうに戻した。

「なあ、なんでなんだ？なんで、あいつらは死ななきゃいけなかったんだ？」

ララ・ルーを見つめるイストの瞳は、真っ直ぐで、また澄んでいた。この夜の星空のように。真っ直ぐではあるがその光は鋭く、澄んではいるが寒々としていて温かみはない。問うだけで、何も期待はしていない目だった。

ララ・ルーは答えることができなかった。イストが再び夜空に視線を上げると、彼女は一つ頭を下げ、逃げるようにしてその場を去っていった。

第七話　夢を想えば？

結局、あの晩以降オリヴィアとイストがララ・ルーと顔を合わせることはなかった。年明けから一週間ほど経つと、「ララ・ルー・クラインの一団がベルラーシを離れて視察巡礼に戻った」という話が耳に入ったが、二人とも何も言わなかった。

年が明けると、十字軍遠征に関する噂も良く耳にするようになった。その内容は十字軍の連戦戦勝を伝えるもので、お祭り気分の抜け切らない人々は天に杯を掲げその勝利を祝った。

ただイストやオルギン、ジルドといった旅慣れた面々は、その噂の背後にある血生臭さを敏感に嗅ぎ取っていた。戦場における流血ではない。その外で起こる流血による、血生臭さである。

十字軍の兵糧が最初から不足しており、その不足分は現地調達でまかなうのが基本方針であるということは、少し情報に詳しい者なら誰でも知っている。そんな十字軍がアルテンシア半島の各地で連戦連勝しているとなれば、行く先々で略奪を働いているということは容易に想像がつく。そして血の猛った男たちがただの略奪だけで済むわけがないことも、また同様である。

「これ以上西に向かうのは、止めたほうがいいかもしれんな」

オルギンは混乱の中にこそ大きな商機が転がっている場合もあることは知っている。同時にリスクが大きいことも。彼は商人だが儲け最優先ではない。キャラバン隊のメンバーの安全を考えると、ここら辺りが潮時かもしれない。

「月が明けたら、進路を東にとる」

オルギンはそう決断した。すでにここベルラーシで結構な儲けを出している。リスクを犯して利益を出さねばならないほど、状況はひっ迫してはいない。

「じゃあ、護衛も月明けで終わりだな」

オルギンの決定を聞いたイストはそういった。ベルラーシはいくつかの巡礼道が交差する地点にある。当然ここからさらに東、つまり神聖四国へと巡礼道が伸びており、これを使えば比較的安全に東へと進路を取れる。もう護衛は必要ないであろう。

「結局、雑用の仕事のほうが多かったわね」

月が明けたら護衛の仕事を解約する、つまりイストたちと別れると聞いたオリヴィアは嘆息するようにそういった。イストは同じ孤児院の仲間で、顔の火傷痕を気にしなくていい相手だ。変に気を張らなくていい相手が身近からいなくなってしまうのは、やはり寂しいのだろう。素直に寂しいといわない辺りは、彼女らしいが。

「それも含めて護衛の仕事さ」

オリヴィアの表面だけの言葉に、イストもやはり表面だけの言葉で応じる。実際の別れまでにはもう少し時間があるし、なにより二人とも湿っぽい別れを演じるようなタチではなかった。

（義眼、早目に完成させておかないとだな……）

「妖精の瞳」と名付けたオリヴィア用の義眼は、すでに八割がた

完成しており、あとは術式の最終調整と刻印を施すだけである。今はニーナが「狭間の庵」を使っているが、術式の見直しは工房にこもらずともできる。明後日か、その次の日の夜くらいには完成させられそうだと、イストは頭の中で計画を立てるのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アバサ・ロットの工房である「狭間の庵」は、腕輪に付けられた結晶体によって固定された亜空間の中にある。亜空間とは言っても、実空間の影響をまったく受けないわけではない。例えば、「狭間の庵」の中の明るさは、実空間の明るさ、つまり昼か夜かで随分と左右される。また、中の気温も同じであった。

静まり返った工房の中で、イストはただ一人目を閉じて集中力を高めていた。時刻はすでに夜半過ぎ。工房の中も真っ暗で、足元に置いた「新月の月明かり」がなければ、自分の手さえも闇に熔けて判別することはできないだろう。この時間を選んだのは意図的に、だ。刻印は最も集中力を要する作業で、可能な限り静かな環境で行いたかった。

そう、これから刻印を施し、魔道具「妖精の瞳」を完成させるのだ。

「さて、やるか」

目を開けたイストは、机の上におかれた小さな木箱をあけ、そして小さく苦笑をもらした。そこに収められているのは一個の義眼、つまり「妖精の瞳」の素体だ。箱の中に義眼、というより目玉が一つ収められている様子は見方によっては猟奇的で、分っていても苦笑をもらしてしまうのがこのごろの常であった。

義眼は複数の合成石を組み合わせて作ったもので、材質の差に由来する硬度の差に目をつぶれば、かなり正確に人間の眼球を模している。磨き上げられた合成石の表面は滑らかで、これらならば眼孔に入れても不快感はないはずだ。

（ガラスを使えればもっと楽だったんだけどな……）

生憎とガラスは魔道具素材としては劣悪だ。「鷹の目（ホーク・アイ）」のように直接魔力を流さないような部分であれば使ってもよいのだが、義眼ではそうもいかない。

「さて」

そう呟いてから、イストは左手に指輪をつける。「見えざる手（インビジブル・ハンド）」という魔道具で、手を使わずに物を浮かせ動かすことができる。イストがオリーブオイルの入った大樽を浮かせて移動させたときに使った術式は、この魔道具のものだ。

「ほいっと」

イストが「見えざる手（インビジブル・ハンド）」に魔力を込める。すると義眼が宙に浮かび上がり、ちょうど彼の胸の位置の高さで静止した。この手の魔道具は消費魔力が大きいのだが、小さな義眼程度ならば負担は大きくはない。

奇しくも、義眼の瞳がイストを見つめている。いや、ただの義眼に見つめることなどできないのだが、どうにもそんな気がした。

義眼の瞳の色は深紅。この色と魔道具としての効果に、イストは

自分なりのメッセージと皮肉、そしてほんの少しの優しさを込めたつもりだ。わざわざ口で説明する気はない。どう受け取るかはオリヴィア次第であろう。

「……」

イストは無言でもう一度目をつぶり、最後の集中を行う。それからゆっくりと目を開き宙に浮かぶ深紅の義眼を見据えると、右手に持った「光彩の杖」に魔力を込めた。すると義眼を中心にして、半径一メートル程度の魔法陣が展開された。

魔法陣に魔力を込め、刻印を開始する。さらにイストは「光彩の杖」を操作し、魔法陣を回転させる。軌跡が球を描くような回転の仕方だ。これによって刻印される術式の粗密がなくなり、魔力をスムーズに流すことができる。

その場からまったく動いていないにもかかわらず、イストの額には汗が浮かび始める。背中が引きつるように感じ、全身の感覚が過敏になっているにもかかわらず、世界から切り離されたかのように余計な情報が遮断される。

緊張はしている。しかし足は震えていない。ただ立っている感覚が曖昧だ。時間の流れもあやふやで、ほんの少ししか経っていないような気がするが、長時間こうしているような気もする。

魔法陣はゆっくりと回転している。

呼吸がうるさい。心臓の鼓動がうるさい。血液の流れる音がうるさい。

気を散すな。没頭しろ。

魔法陣の回転がさらにゆっくりになり、残光が尾を引いていく。

時間があやふやになった世界の中で、魔法陣がついに一回転する。イストはそれを確認してから魔法陣を消した。

大きく息をつく。あやふやだった時間の感覚が正常に戻り、心地よい達成感が体を包む。緊張が解けたことで体から熱が一気に噴き出し、汗が背中に流れた。

椅子に座ってから「見えざる手（インビジブル・ハンド）」を操作し、宙に浮いたままになっている義眼「妖精の瞳」を左手に収める。ほんの数瞬、イストはその深紅の義眼を眺め、そしてなぜか自嘲するような苦笑を浮かべた。

（随分と偉そうなことをする……）

この魔道具を作ったのは、オリヴィアに「あの夜のことを乗り越えて欲しい」とか「顔の火傷痕を受け入れて楽になって欲しい」とか、言い方は様々にあるだろうが、そういう気持ちがあったからだ。

それに対し自分はどうなのだろうか。あの夜のことを乗り越え、あの赤い悪夢を克服できるのだろうか。そういう未来を思い描けずにいるヤツが、それがどれだけ難しいことか誰よりも良く知っているはずのヤツが、随分と偉そうなことを願っているものだ。

「まあいいさ。人の願いはいつだってエゴの塊だ」

そんな皮肉げな文句を口走り、イストは自分の思考から逃れた。左手に持ったままになっていた「妖精の瞳」を木箱に戻し蓋をする。

（渡すときは、それっぽく包装しないとだな……）

そんなことを考えながら、イストは「狭間の庵」を出て実空間に戻る。風が冷たい。工房の中の気温は実空間の気温に影響されるが、風を起こすような機能ない。風と一緒に運ばれてくる夜の臭いが、イストに現実を色濃く印象づける。

「狭間の庵」の扉が消えると、イストはキャラバン隊の馬車のほうに向かって歩き出した。

「一杯飲むか」

無性に酒が飲みたかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大陸暦１５６５年の一月も、あと残すところ一週間をきっている。月が開ければオルギン率いるキャラバン隊は、巡礼道を使って東へ向かう。つまりこれ以上の護衛は必要なく、イストたち三人はキャラバン隊と分かれることになる。

当初はオルギンとイスト、そしてオリヴィアの間だけの話でしかなかったのだが、別れが近くなるとこの話はキャラバン隊の他のメンバーにも伝わり、少し早い別れの言葉をかけてくれる者もいた。特にジルドは若い連中に簡単な剣の手ほどきをしていた為か、その関係で別れを惜しむ人数は多かったし、女性が少ないキャラバン隊の中で“潤い”になっていたニーナなども同様であった。

「一番人気がないのはイストみたいよ？」

オリヴィアは少し意地悪な笑みを浮かべながらそう言い、幼馴染

との別れを惜しんだ。互いに旅から旅への根無し草。一度別れれば次に会えるのは、さていつになるのか見当もつかない。

「金ばっかり追いかけていきおくれるなよ」

あるいはもう一生会えないかもしれない。イストもオリヴィアもそれは十分に分っていた。分ってはいるが、湿っぽくなるのはどうにもガラではない。軽口をたたいて笑いあっているのが、どうやら二人にとっては最適の距離感らしい。

さて、こうしてオリヴィアとイストの二人は別れを受け入れたわけであるが、二人が別れてしまうことに単純ならざる思いを持つ者もいた。コンクリフト・クルクマスである。

クリフの一方的な認識によれば、イスト・ヴァーレという男は彼にとって恋敵であった。つまり本来ならば、いなくなれば嬉しいはずの相手なのだが、ここで素直に喜べないのがクリフという人間であった。

クリフはオリヴィアのことが好きだ。三年前、一目見たその瞬間からその気持ちに変化はなく、また嘘偽りもないと断言できる。だがしかし自身の性格のせいか話しかけることもままならず、あまつさえ顔の火傷痕を盗み見てしまったがために、彼女との距離はさらに遠のいてしまった。

そんな望まずして停滞してしまった関係の中現れたのがイスト・ヴァーレであった。オリヴィアの幼馴染で流れの魔道具職人であるという彼は、いとも簡単に彼女の隣に居場所をつくってしまった。それはクリフがこの三年間望み続け、そしてかなえることができなかったことだ。

楽しそうに会話する二人を見ると、クリフはいつも胸が締め付けられるように感じる。オリヴィアの笑顔が、自分には向けられることがないという絶望。自分にはできないことを簡単にやってしまうイストへの、憎悪と羨望と嫉妬。そして見ていることしかできない自分への憤りと惨めさ。

（……だけど！だけどさ！）

けれども、あんな風に屈託なく笑うオリヴィアを見たのは、初めてだった。

イストたちが来る前、オリヴィアはいつもどこか陰のある笑い方をしていた。ふとした拍子に寂しげな表情を見せたり、独りになったときに疲れたようにため息をついたりすることがよくあった。

それが、イストが来てからはそれが少なくなった。決して完全になくなったわけではないが、劇的に少なくなったのだ。見ようによっては、“はしゃいでいる”ようにも見えなくもない。

雰囲気自体も随分と変わった気がする。以前はどこか余裕のない張り詰めた表情をすることがあったが、今は表情にも余裕がある。

クリフの贔屓目かもしれないが、素敵になった、と思う。

けれどもその変化を促したのは自分ではなくイストなわけで。それを思うとなんとも言えない惨めな、有り体に言ってしまえば負けたような気分になるのだ。

負けた。そうつまりクリフはイストに「負けた」と感じているの

だ。オリヴィアにふさわしいのは自分ではなくイストのほうだと、そう思っているのだ。

そのイストがキャラバン隊を、オリヴィアのもとを去るという。

「なんでだよ!?なんで彼女を見捨てるんだ!?」

気づいたら、クリフはイストの胸ぐらをつかんで叫んでいた。一瞬自分の行動に疑問を感じはしたが、後から後から湧いてくる言葉にその疑問は押し流されていった。

「あんたが来てからオリヴィアは随分変わったんだ。楽しそうだし幸せそうだし、良く笑うようにもなった。全部あんたが来てからだ。……悔しいけど、俺じゃあ何もできなかった。オリヴィアが好きなのはあんたなんだ。俺じゃあ無理なんだよ……。頼むから一緒にいてやってくれよ……」

言っているうちに情けなくなってきたのか、クリフの声はだんだんと萎んでき、胸ぐらをつかみあげる力も弱くなっていく。

「オレが来る前は、楽しそうでなければ幸せそうでもないし笑いもしなかった、ってことか?」

「……そうじゃないけどさ。ときどき凄く辛そうにするんだ……。ひとりになったときとかに」

このストーカーめ、と茶化したくなるのをグッと堪えてイストは問いを重ねる。

「なんで辛いのか分るか?」

「火傷の痕を見られたくないんだろ！？」

それぐらい分っているさ！とクリフは少し苛立った調子で答えた。だがイストはその答えにイラっときた。

「お前は何も分ってない」

その声は、思っていたよりもずっと冷たい声音だった。「ああ今オレはキレてるんだな」と頭の端っこで他人事のように考えながら、しかし口は勝手に言葉をつむいでいく。

「顔の火傷痕を見られたくない？んなこたガキでもわかる。なんで火傷痕を見られたくないのか、そこまで考えないのか？」

「それは……」

クリフが言葉を詰まらせる。その様子に、イストは自分が苛立つのをはっきりと自覚した。自分の衝動を押さえることをせず、クリフの胸ぐらをつかみ上げる。

「醜いって思われるのが嫌だから、目を背けられるのが嫌だから、必死になって隠してるんだろうがっ！」

隠して、隠し続けて疲れ果てて、それでも素顔をさらすことはできなくて。人の視線が怖い。醜いと思われるのが怖い。囁かれる言葉がすべて陰口に聞こえてしまう。街の中もそうだが、仲間であるはずのキャラバン隊のメンバーに対してさえも、そんなふうに感じてしまう。それがとても申し訳ない。

「オリヴィアがそういったのか……？」

クリフが呆然とした様子で尋ねてくる。

「見ていて気づかなかったのか？今まで何を見てきたんだ？」

イストの言葉は刺々しく、また冷たい。胸ぐらを放すと、クリフはその場に膝をついてうなだれた。悔しそうに奥歯を噛締め拳を握る。

「ああ、分らなかったよ……。だから、俺じゃあダメなんだ。頼むから一緒にいてやってくれよ。お願いだからさ……」

話が元に戻ってしまい、イストは苦笑した。苦笑したら、少し苛立ちが消えた。

「オレとアイツの仲がいいように見えるとしたら、それはきっとオレ達が同じ傷を持っているからだ。傷の舐めあいをしているようなもんさ」

その「同じ傷」というのは、イストとオリヴィアに共通する過去に由来するものなのだろう。オリヴィアの過去を知らないクリフは、そうとしか判断できなかった。

「今はまだいい。互いに気を使わない相手でいられる。だけどもう少し時間が経つと、今度は互いが疎ましくなってくる」

「同じ傷」を持っているから。相手の「傷」が見えるということは、自分の「傷」も見えているということなのだ。向き合うだけの気力と勇気、そして解決するアテがないから今まで放置してきたというのに、そんなものを毎日まざまざと見せ付けられるのだ。そのうちお互いに顔を合わせるのも嫌になってしまうのではないだろう

か。

その上、どちらかがその傷を克服でもしたら、克服できないでいる方はなおさらいたたまれない。惨めな自分を嘆き、激しい自己嫌悪に陥るだろう。

「だからここらで別れるのがちょうどいいんだよ」

「だけど……っ！」

クリフは納得できない様子だ。しかしイストは「無煙」を吹かしながらそんな彼を、恐らくは意図的に無視して、小さな包装された包みを渡した。大きさは手のひらに収まるくらいだ。

「それ、オレたちと別れたらオリヴィアに渡しといてくれ」

「……自分で渡せばいいじゃないか」

そもそもイストがオリヴィアと別れること自体に賛成していないクリフは、苦々しい心のうちを隠そうともしない。が、その程度で怯むイストではなかった。

「お前さん、オリヴィアとまともに会話もできないんだろ？きっかけをくれてやるから、せいぜい有効利用しろよ？」

あそこで顔を真っ赤にしてしまったのは一生の不覚だ、と後にクリフは語ったという。

第七話　夢を想えば　エピローグ

あの戦い、ギルマード平原でのクロノワ軍とレヴィナス軍の戦いは、レヴィナスの戦場からの逃走をもってその勝敗が決した。

本陣の崩壊に敗戦を悟ったアレクセイは一度軍を引き、戦闘行為を完全に停止させてから降伏を申し出た。

本来ならば降伏を申し出てから順次戦闘行為を停止させていくのが普通なのだろうが、このときアレクセイはそうはしなかった。その際の見事な引き際から、彼が動転して冷静な判断が下せなかったということは考えにくい。

アレクセイはその理由を語らずに自決したから本当のところは分らないが、あるいは降伏しても完全に戦闘が停止するまでの間に多量の血が流れることを憂慮したのではないだろうか、と言われている。特に命令系統がもはや機能しなくなっていたレヴィナス軍本陣は個人による無益な抵抗が続いており、仮に白旗を揚げたとしても距離が開いてしまっている本陣では無駄な血が多量に流れただろう。それをアレクセイは嫌ったのではないか。

ことの真偽について、歴史書は黙して語らぬ。アレクセイ・ガンドールは白旗をあげる前に兵を引いた。それが史実である。

さらにそれまで優勢であったにも関わらず兵を引いていくアレクセイの後を、アールヴェルツェは追わなかった。その理由について、彼は後にこう語っている。

「あの状況でアレクセイ将軍が引くということは、戦う理由がなく

なったのだと、直感的に思った。無論、白旗をまだあげていなかった以上、追撃をかけるべきだったのかもしれないが、なんというか将軍が信頼してくれている気がしたのだ。その信頼を裏切りたくなかった」

味方であったときには誰よりも頼りにされ、敵になっても尊敬された男。それがアレクセイ・ガンドールであった。

本陣と合流したアレクセイは白旗を掲げさせ、降伏の意思を示した。それから単騎で進み出、後ろで座り込んでしまっている兵士たちを示して声を張り上げた。

「クロノワ殿下！戦場で相対したとはいえ、彼らもまたアルジャークの民！どうか寛大な処置をお願いしたい！」

「委細承知！武装解除が終わり次第、故郷に帰すことをお約束する！」

この戦いは内戦である。つまり敵は同国民である。併合から日が浅く、アルジャーク人もオムージュ人も同じ国の民であるという意識はまだあまりないかもしれないが、これから国を安定させていく上で、この認識は非常に重要なものだ。

あるいはこれがアレクセイのクロノワに対する、最初で最後の教えだったのかもしれない。クロノワの答えに彼は満足したように穏やかな笑みを浮かべた。

「将軍！貴方もです！戻ってきて力を貸していただけませんか！」

あの時もう少しマシな言葉はなかったものか、と後にクロノワは悔やんだという。彼の言葉を聞いたアレクセイはもう一度穏やかに

微笑み、それから愛剣を自分の首筋に当て自らの首を刎ねて自決した。

それが彼なりの責任の取り方であったのだろう。偉大な将を惜しみすすり泣いたのは、勝ったはずのクロノワ軍の方であった。

「あの、陛下。将軍の遺体は……」

言いにくそうにしているのはアールヴェルツェである。彼にとって、いやクロノワに従った全てのアルジャーク兵にとって、アレクセイはいまだに「アルジャークの至宝」であり、その遺体を捨て置くことなど考えられないことである。

しかしその一方で、アレクセイは最後に敵となった。しかもベルトロワの遺言、つまり最後の勅命を無視してクロノワに相対した反逆者である。彼がどれほど事情を把握していたか、それを確認する手立てはもうないが、だからと言って軍を統率する者が「知りませんでした」で責任を逃れられるわけがない。その遺体は無残にさらし、見せしめにすることだって考えられる。

「アルジャークの至宝」として尊敬する一方で、正統な皇帝に刃向かった反逆者。それが今のアレクセイ・ガンドールである。この辺りが、アールヴェルツェが言いよどまねばならない理由であろう。

「丁重に埋葬してください。特に葬儀を行うつもりはありませんが、最後の見送りをしたい者にはさせてやってください」

クロノワのその言葉に、アールヴェルツェは深々と頭を下げた。

この日の夕刻前、アレクセイ・ガンドールの“葬儀”が行われた。喪主はおらず、別れの言葉をかける者もいない。場所も荘厳な式場

などではなく冷たい風が吹き荒ぶ雪原で、立派な墓や棺が用意されることもない。

しかし、クロノワに従って彼と戦った全てのアルジャーク兵が、アレクセイ・ガンドールの最後を見送った。ある者は槍を掲げ、ある者は剣を捧げ、偉大な将を見送ったのである。

この時の様子について、後の歴史書はこう描写している。

「勝者であるはずの兵士たちが泣いている。彼らは整然と隊列を組み、死者を見送った。見送られる死者は、先ほどまで敵であったはずの男だ。その男を見送るために、兵士たちは誰に命じられるでもなく最上位の敬礼を行った。槍を掲げ道を作り、剣を捧げて冥福を祈る。敵にこれほどの敬意を持って見送られた男は、アレクセイ・ガンドールの他にはいないだろう」

さて、降伏したレヴィナス軍の兵士たちについてである。レヴィナスが逃走しアレクセイが自刎した今、金で雇われた傭兵を含め全ての兵士たちにもはや戦う気力は残っていなかった。また彼らはクロノワの「武装解除が終わり次第、故郷に帰すことを約束する」という宣言を聞いており、生きて故郷に帰れるならばここで戦う理由はもはやなく、消極的ではあるが従順な態度で武装解除に応じた。

クロノワにとって意外であったのは、降伏した者たちの中にレヴィナスの妻であるアーデルハイト姫がいたことである。

クロノワがアーデルハイト姫に会うのは結婚式以来これで二度目だが、彼女がここにいるということはレヴィナスに置いていかれたということである。両者にとって思いがけずまた不幸な形での再会であったわけだが、二人ともそれを表情に出すことはしなかった。クロノワの前に現れたアーデルハイトは落ち着いているというより

は淡々としていた。ただ以前に同じ状況になった皇后のように喚きたてることはせず、それがクロノワの好感を上げた。クロノワは貴婦人としての待遇を約束すると、彼女は何も言わずただ一礼のみを返すのだった。

ギルマード平原における再編と戦後処理を終わらせると、クロノワはそのまま進路を西に取った。戦場から逃走したレヴィナスを追うためである。オムージュとの境にあるリガ砦にいるのではないかと思われたが、いざ砦についてみると門は開いており事を構える意図がないことを主張していた。

「どうやらレヴィナス殿下はいないようですな」

アールヴェルツェはレヴィナスに対して「殿下」という敬称をつけたが、それ以外には敬語を用いなかった。レヴィナスは今や皇帝に反抗する反逆者であるから、本来ならば敬称や敬語を用いる必要はない。が、それでも彼はさきの皇帝ベルトロワの長子であり、アールヴェルツェなどにしてみれば呼び捨てにするのは心苦しい、ということなのだろう。クロノワはそう思っていた。

もっともクロノワにしても、レヴィナスのことをまだ「兄上」と呼んでおり、人のことは言えないが。

リガ砦にいた兵士たちについてだが、クロノワは彼らを断罪しようとは思わなかった。彼らにしてみれば、アレクセイ将軍に命じられれば従わざるを得ない部分が確かにあるからだ。ならばわざわざ内戦の傷を大きくする必要はない。

さて、リガ砦に入ったクロノワはそのままオムージュ領の総督府がおかれているベルーカに行き、行政機能を掌握するつもりでいた。

が、彼がリガ砦にいる間に、思いもしなかった知らせが舞い込んできた。

レヴィナスが死んだという。討ち取ったのは、なんと数人の農民であるという。その知らせを聞いたとき、クロノワが感じたのは喜びではなくなぜか脱力であった。

クロノワがベルーカを目指そうと思ったのは、オムージュ領の行政機能を掌握するためであったが、同時にそこを拠点としてレヴィナスを探すためでもあった。探し出し捕らえたならば、つぎは処刑しなければならない。そこまでしてはじめてクロノワの治世はスタートラインに立てるのである。極端なことをいえば、レヴィナスの首が落ちるのと同時に、クロノワの治世が始まる。

つまりクロノワにとってレヴィナスは、いずれは死んでもらわねばならない相手であり、そのことについて覚悟はとっくの昔にできているはずであった。

（甘かった、ということでしょうか……）

達成感も何もない、ただの倦怠感に全身を蝕まれながらクロノワはぼんやりとそう考えた。

とはいえクロノワはそうやって脱力していられる立場ではない。レヴィナスを討ち取ったという農民たちとも会わねばなるまい。

「貴方たちですか？兄上を討ち取ったというのは」

「へ、へぇ！そうでございます」

クロノワの前で地面に額をこすりつけて平伏している農民たちの

数は五人。あるいはもっと大勢いるのかもしれないが、ともかくこの五人が代表なのだろう。

「兄上の遺体は？」

クロノワが尋ねるとそばに控えていた兵士が「こちらに」と言って、白い布が被せられた担架を示した。その布をのけると、血にまみれたレヴィナスの遺体があらわれた。

遺体の状態は悲惨だった。腐敗が進んでいるわけではない。全身が傷だらけなのだ。恐らくだが、なぶり殺しにされたのだろう。

ただ、それもある意味では仕方がない。農民たちは槍や剣のような武器は持っていないだろう。武器代わりになる、例えば鉈や手斧を持っていたとしても、訓練を受けていない素人がそれで人間を、しかも抵抗する人間を殺すのは手間だろう。結果として一つでは致命傷とならない傷ばかりが増え、遺体は傷だらけの悲惨な状態になる。

クロノワは開きっぱなしになっているレヴィナスの目を閉じてやる。死顔が少し穏やかになったと思うのは、彼の自己満足だろうか。

クロノワはレヴィナスを殺さなければならなかったし、また遠からず殺すことになったであろう。つまり農民たちがレヴィナスを殺してくれたことは、彼にとって本来は喜ばしいことであるはずだった。が、そういった感情は一切湧いてこない。変わりに胸にあるモノは怒りにも似ていた。

兄レヴィナスはクロノワの目から見ても美しい麗人である。クロノワの知っているレヴィナスは、いつも自信にあふれて堂々としそ

して輝いていた。

それにレヴィナスはクロノワを積極的に迫害したことはない。彼の母親である皇后はクロノワに対するイジメと悪意の急先鋒であったが、レヴィナス自身はそれに加わったことがない。レヴィナスにしてみればクロノワなど眼中になく、ごく自然に無視していただけなのだろうが、当時まだ日陰者であったクロノワにとってはそれだけでも十分にありがたいことであった。

（もう少しふさわしい死に様はなかったのでしょうか……？）

殺そうとしていた相手にそんなことを思うのは自己満足に過ぎないと、クロノワは知っている。知っているが、感情や思考というものはなんとも御しがたい。自然とその矛先はレヴィナスを討ち取ったという農民たちに向いていく。

「あ、あの！！」

クロノワの胸のうちに黒いのもが生まれ始めたとき、それまで平伏していた農民の一人が頭を上げた。「無礼者！」と怒鳴る兵士を制し、クロノワはその農民に声をかけた。

「どうかしましたか？」

クロノワの声は少しばかり冷たい。その声に農民は怯えたように身をすくませたが、意を決し顔を上げた。その目が思いがけず強い光は放っていることに、クロノワは内心で驚く。

「オムージュを、お願いしますっ！！」

その短いが強い言葉で、クロノワはなんとなくだが理解してしまった。

レヴィナスがオムージュ領の総督になってから、領内の生活は一気に苦しくなった。増税したことや、それを過去にさかのぼって適用したこと、また貴族たちのもとに転がり込んだ聖職者たちの豪遊費を負担させられたことなどが主な原因だが、他にも色々と要因はあるだろう。

モントルム領の総督であったクロノワは、自分の領内になだれ込んでくるオムージュからの流民が激増したことで、その生活がいかに苦しいのか想像できる。また十五になる年まで一般市民として暮らしていた彼は、その厳しさについて実感もできるのだ。

（兄上は、恨まれていたのですね……）

そしてその責任は、最終的に全て総督であったレヴィナスのものなのだ。民草にとって為政者の容姿が麗しいかなど、どうでもいい問題だろう。それにふさわしい死に様など、さらにどうでもいい問題である。もちろん恨んでいたからなぶり殺しにしたわけではないだろうが、

「こいつが生きていたら、自分たちに未来はない」

と、それくらいのことは考えていたかもしれない。それほどまでに彼らも追い詰められていたのだ。

「はい。任されました」

努めて穏やかな声音で、クロノワはそう応じた。胸の中にある黒いものはなくなってはいないが、それは表に出すべきではないと考

えられるようになっていた。目の端に涙を浮かべた農民が再び頭を垂れると、クロノワはそばにいた兵士に命令を出した。

「彼らには金貨で一万枚を与えてください」

それから平伏している農民たちに視線を移し、

「分配は貴方たちに任せます。いいですね？」

と聞いた。彼らの返事を聞いてから、クロノワはその場を後にした。

次にクロノワが向かったのはリガ砦内の一室、アーデルハイトが軟禁されている部屋であった。彼女の部屋の前には、護衛と監視をかねた兵士が二人控えている。

クロノワは部屋の扉をノックし、返事を待ってから中に入る。アーデルハイトは窓辺に座り、ぼんやりと外を眺めていた。クロノワが部屋に入っても視線を動かそうとはしない。クロノワはその無礼を咎めはしない。ただ、単刀直入に用件を切り出した。

「兄上のご遺体が届けられました」

その話を聞いたとき、アーデルハイトの表情には一切の変化がなかった。首を軽く回して顔をクロノワから隠した。

「お会いになられますか？」

「……結構です。光を失ったあの方に、会いたくはありません」

アーデルハイトは、声だけを聞けば平静だった。そしてクロノワには回り込んでその表情を確認するだけの勇気はなかった。見えて

いないことを承知で一礼してから、彼女の部屋を出た。

アーデルハイトが自決したという報告がクロノワのもとにもたらされたのは、それからおよそ三十分後のことであった。髪を止めていた簪（かんざし）で喉を突いたのだという。

（まさか後を追うとは……）

このタイミングでの自決は、それ以外には考えられない。人払いをして一人になったクロノワは、虚脱感にさいなまれながら天上を見上げた。

（愛していた、愛し合っていた、のでしょうか……？）

レヴィナスとアーデルハイトの結婚は第三者的に見れば政略結婚であったし、クロノワもそう思っていた。だが当人たちの関係は、あるいはアーデルハイトの見方はそうではなかったのかもしれない。

「それにしても……、みんな死んでしまいましたね……」

母もベルトロワも皇后のレヴィナスもアーデルハイトも、家族と呼べそうな人はみんな死んでしまった。無論、母を除けば彼らとの間に家族らしい情があったわけではないが、それでも縁者が皆死んだという事実はここにある。

「『玉座は孤独なり』か……」

さして独創的でもない歴史書の一節を思い出す。さて、玉座に座ると孤独になるのか、玉座に座るために孤独になるのか。

「無性に、君に会いたいよ。イスト」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

コンクリフト・クルクマスがイストから託された品物をオリヴィアに手渡せたのは、彼らがベルラーシを発ってから三日後のことであった。できればイストたちと別れたあとすぐにでも手渡したかったのだが、タイミングと気力の折り合いが付かず、ずるずると時間だけが過ぎてしまった。

さすがにこれ以上間を空けるのはまずい、と危機感を感じたクリフは、なけなしの気力を振り絞ってオリヴィアに話しかけたのである。

「あの、これイストから『オリヴィアに渡してくれ』って預かったんだけど……」

「イストから？なんで自分で渡さないのよ、あいつは」

「さ、さあ。そこは聞かなかったから……」

まさか会話を始めるきっかけにしろ、といわれたなどと言えるわけもなくクリフは言葉を濁した。

クリフから綺麗に包装された手のひら大の包みを受け取ると、オリヴィアはすぐに中身を確認した。その中に入っていたのは……。

「義眼……？いや、でも……」

このとき、クリフは初めて中身を知った。木箱の中に収められていたのは、深紅の瞳を持った義眼であった。だがオリヴィアの瞳の色は青だ。瞳の色が違っていては、義眼として役に立たないのでは

ないだろうか。

「まったく、意地悪な人ね」

クリフが疑問に頭を捻っている隣で、オリヴィアは手を口元に沿えて苦笑していた。

「でも、優しい人」

一緒に入っていた紙に、その義眼の詳細について書かれていた。義眼の名は「妖精の瞳」。なんでも人の感情の揺らぎを可視化する魔道具らしい。つまり人が隠す内心の嘘や動揺を見抜けるということだ。普段の生活では使い道はあまりなさそうだが、商談の場では重宝しそうな魔道具である。

だが義眼である以上、使うためには顔の火傷痕をさらさなければならない。眼帯を外すだけではない。恐らくは前髪もどかさなければいけない。つまりこの魔道具はオリヴィアが火傷痕をさらすことを前提にしているのだ。

「疲れるくらいなら、もう隠さなくたっていいじゃないか」

そう言われた気分である。なんとも意地悪なメッセージの伝え方だ。今までは顔を見られる恐怖のほうが勝っていた。しかし同時に早く楽になりたいという気持ちも確かにあったのだ。この魔道具はそのきっかけを与えてくれる。

ただその与え方が優しい言葉などではなく、商人にとって重要な実利を全面に押し出したやり方なのだ。乱暴で意地悪。それがオリヴィアの評価だ。あの幼馴染はもう少し女の子の扱い方を学んだほ

うがいい。

そしてあの瞳の色である。義眼の瞳の色は深紅。繰り返すがオリヴィアの眼の色は青である。左右の瞳の色が違っていれば、それは珍妙な光景だろう。いらぬトラブルの原因になることも考えられるから、普段は隠しておくのが得策だろう。

義眼を隠すのなら眼帯がよい。そうやって眼帯で義眼を隠せば、なぜか火傷痕も隠れてしまう。そう、あくまでも結果論的に。眼帯の大きさは好みのものを選べばよい。大きいのを選んだっていいではないか。

「火傷を隠すのではない、義眼を隠すのだ」

なんとも言い訳じみていて遠まわしで皮肉れた優しさだ。隠すなといいたいのか、それとも隠せといいたいのか。しかしその両方を両立できるようになっている。

「そうね……。これも一つの区切りなのかしら」

まさかこの義眼一つで全ての問題が解決するとは、イストだって思ってはいまい。だからこの義眼は彼が与えてくれた一つの区切りでありきっかけだ。

立ち直るだの歩き始めるだの傷を癒すだの、それらしい言葉は数多い。しかしその主体は全てオリヴィアだ。厳しいかもしれないが、自分から動かなければ状況は何も変わらない。あるいはイストは、そう言いたかったのかもしれない。

（そしてきっと、自分にもそう言い聞かせているんでしょうね……

…）

きっとイストは義眼を作りながら自分のことも考えていたに違いない。オリヴィアにトラウマから抜け出して欲しいと願う彼は、自分自身だってトラウマから、あの赤い悪夢から抜け出したいともがいているはずなのだから。

（わたしは先にいくわ。早くしないと、置いていっちゃうわよ？）

解放への道のりはまだ遠い。恐怖が勝る時だってあるだろう。けれども一歩を踏み出した先にある景色は、今とは違うものだと信じたい。

オリヴィア・ノームは次の日、火傷痕を隠していた前髪を切った。動揺したのはむしろキャラバン隊のメンバーで、彼女自身は慌てる彼らを眺め苦笑していたという。ちなみに髪の毛を切った後のオリヴィアの第一声は、

「軽くなった」

だったそうな。

―第七話　完―

第七話　夢を想えば　エピローグ（後書き）

というわけで第七話「夢を想えば」いかがだったでしょうか。

さて、今回書いていて気づいたことがあります。それは「恋愛ネタって難しい……！」ということです。

いえ単に新月の力不足なのですよ。この先も恋愛ネタが出てくるので予防線張っておこうなんて考えてないですよ？ホントウデスヨ？

……。

これ以上やると、いえもう十分に墓穴は掘った気がしますが、さらに掘るとまずいのでこの辺りで終わりにします。

つぎの話は、「第八話　王者の器」。

お楽しみに。

第八話　王者の器　プロローグ（前書き）

というわけで第八話です。

話のおもな舞台は、南方遠征でやり残したテムサニス、になるはず……。

第八話　王者の器　プロローグ

器を作るときには
形よりも大きさに注意すべきだ
大きくしすぎて穴が開いては
目も当てられない

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第八話　王者の器

大陸暦１５６４年の暮れから大陸暦１５６５年の年明けにかけて、エルヴィヨン大陸は激動したと言っていい。

この頃版図を急速に拡大させたアルジャーク帝国においては、皇帝ベルトロワの死とそれに伴う後継者問題が内戦にまで発達し、ついにクロノワ・アルジャークただ一人が残った。

またアルテンシア半島においては、年の暮れ以前から続いていたシーヴァ・オズワルド率いる反乱軍の勢力拡大と、十字軍による遠征が重なり多大な流血がなされた。そして第一次十字軍遠征の失敗によってアルテンシア半島がシーヴァによって統一されたのもこの頃である。

クロノワとシーヴァ。アルジャークとアルテンシア。この先、大陸の中央部で出会うこの二つの勢力が地盤を磐石なものにし、勢いが付き始めたのがこの頃であるわけだがそのせいかこの時期、他の国のことは忘れられがちである。

特にこの先クロノワにとって非常に重要な貿易港となるカルフィスクを有しているテムサニスにおいても、この時期には政変があった。この政変はアルジャークの勢力拡大にも関わってくるから、その意味で非常に重要である。

時は大陸暦１５６４年。テムサニス国王ジルモンド・テムサニスがアルジャーク領となったカレナリアに親征しそこで捕虜となってしまい、そして事態が膠着したところから物語を始めるとしよう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

テムサニス国王ジルモンドが隣国（であった）カレナリアにおいてアルジャーク軍の捕虜となった、という報はすぐにテムサニス王宮にも届いた。当然、王宮内は騒然としたが、その一方で混乱することはなかった。状況は確かに危機的だが、やることは決まっているからだ。

捕虜になったということは、ジルモンドが今すぐに殺される可能性は低いということだ。となればこの先は彼の身柄（と一緒に捕虜になっている十万以上の兵士たち）をかけての交渉が待っているはずで、騒然とした空気が一応収まると王宮内はそちらに向けて意識を集中し始めた。

が、それなのに、アルジャーク側にまったく動きがない。

ジルモンドを捕虜としその身柄を押さえたのはアルジャークである。ならば、そのアルジャーク側から、

「返して欲しければこれこれを差し出せ」

と通達が来るはずである。それなのにその通達が待てども来ない。その不気味な沈黙に、テムサニスの王宮内には言い様のない不安が渦巻き始めていた。

とはいえ、判明してしまえばその理由はひどく単純なものであった。つまりアルジャーク国内における政変と、そこから発展した内戦である。

たしかにカレナリアには優秀な文官たちが残り政治をまわしており、そのおかげで大きな混乱は起きていない。しかしそんな彼らからしてもジルモンド・テムサニスという一国の王は、扱いに困る、手に余る存在なのだ。

加えて彼らは「テムサニス全てを併合する」という当初の計画を知っている。まさかそんな大それた交渉を自分たちだけで行うわけには行かないし、さりとて中途半端な対価で返してやるわけにもいかない。

そもそもジルモンドの身柄は、遠征軍の総司令官であったクロノワの直接の管轄であろう。その時点で彼らの好き勝手にはできない。彼らにできることは、テムサニスからの探りをいなしながらカレナリアを大過なく収めることだけである。

が、それでは収まりが付かないのがテムサニスである。テムサニスは現在、国王不在という異常事態だ。今はまだ大きな問題は起こっていないが、この状況が長く続けばそれこそ政変から内戦へと発展していくかもしれない。

そもそも現状はこの異常事態を解消すべく人々が協力しているからこそ、大きな混乱が起きていないのだ。異常事態を異常と感じな

くなったら、一時の緊張が解けてしまったら、事態は最悪の方向に転がっていくに違いない。

いや、あるいはその綻びは、もうすでにできてしまったのかもしれない。

「今一度カレナリアに出兵すべきです！」

会議の席でそう声を張り上げたのは、テムサニス王国第二王子ゼノス・テムサニスであった。彼の瞳には野心の色がちらついている。

「アルジャーク帝国は政変の混乱の中にあります。遠征軍の大部分は北へと引き返し、今カレナリアは手薄。この千載一遇の好機を逃すことが、はたしてテムサニスの国益に繋がりましょうか！？」

ゼノスの論は一定の説得力を持っている。隙を見つければそこに食らい付くのが乱世の習い。政変や内戦など、そのような隙を見せるほうが悪いのだ。

「ゼノス、カレナリアには父上が捕らえられているのだよ？」

やんちゃな弟を宥めるように穏やかに発言したのは、ゼノスの腹違いの兄にしてこの国の第一王子フェレンス・テムサニスであった。弟に比べれば線が細く、内向的といわれそうな人である。

「今カレナリアに出兵すれば、アルジャークは間違いなく父上の首に刃を当ててこちらを脅迫してくるだろう。そうなれば軍は撤退せざるを得ない。最悪の場合、まとめて捕虜にされる事だって考えられる」

「カレナリア領内に進攻し、戦略的優位を築いてから交渉を行えばよいのです。受身の待ちの姿勢では払わなくてもよい代償まで払うことになってしまいます！」

「それは楽観が過ぎるよ。僕たちに計画と見通しがあるように、彼らにだってそれがあるのだから」

兄弟の視線が空中でこすれ不可視の火花が散る。一方の視線は挑戦的で、他方の視線はそれをかわすことなく受け止めている。

「……いずれにせよ、アルジャークの内紛はいまだに泥沼というほどの混乱は見せていません。今我々が介入すれば、共通の敵を与えてしまうことになる。ここはしばらく様子見に徹するのが得策かと」

会議を見守っていた有力貴族の一人であるルーウェン公爵がそう発言する。出兵は時期尚早だと思っていた一部の貴族たちは、その発言に口々に賛同した。

「父上が行っていた政務は僕が代行する。それでしばらく混乱は起きないはずだ。アルジャークの政変については、情報収集を密にして注視していくとしよう」

結局、フェレンスのその発言がそのまま会議の結論になった。つまりは現状維持ということだ。

第一王子にして次の国王と目されているフェレンスがジルモンドの政務を代行するというのは、ある意味では当たり前のことだ。また隣国の政変について神経を尖らせ情報を集めるもの、これまた当たり前のことである。

「無難なところに落ち着いた」

それが会議出席者の大半の意見だろう。

（リスクを負いたくないだけではないか……！）

ゼノスは心の中でそう吐き捨てた。下手に動けば、ともすれば国王ジルモンドの死の責任を取らされるかもしれない。ここにいた連中のほとんどはそれを嫌っており、その最たる例が兄のフェレンスだ。少なくともゼノスはそう思っている。

「捕らわれの王など、見捨てればよいのだ」

口に出したことはない。しかしそれがゼノスの考えだった。ジルモンドを助けようとする限りあらゆる主導権は敵側にあり、こちらはいいように動きを制限される。

ならばいっそ見捨ててしまえばよい。

慢心し隙を見せたその喉仏に喰らいつけばよいのだ。ジルモンドは殺され、その首が送られてくるかもしれない。が、それがどうしたというのだ。その死を兵の戦意向上ために利用するまでだ。

（なんだ、いっそ死んでくれたほうが役に立つじゃないか）

一人残った会議室で、ゼノスは暗い笑い声をもらした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お疲れですか……？」

心配そうなその声で、宙を見つめていたフェレンスは視線を正面に戻した。手ずから紅茶をいれ、こちらを心配そうに見つめている女性と目が合う。

イセリア・テムサニス。

フェレンスの妻だ。ルーウェン公爵の娘で、客観的立場から見れば政略結婚なのだが、二人の間にある実情はもっと暖かで心休まるものだ。幼い頃から婚約が決まっており、お互いに顔を見知っていたというのも大きな要因だろう。

フェレンスの贔屓目かもしれないが、イセリアは美人だ。国を挙げての盛大な結婚式が行われたのは互いに十代の時で、その頃の彼女は「可憐」という言葉がなによりも良く似合う少女だったが、二十歳を過ぎた今は女性としての成熟も備え、そばにいれば心地よい安心感に包まれる。

どう考えても、凡庸な自分にはもったいない女性だ。フェレンスとしてはそう思う。

「どうかされましたか？」

「いや、政務の代行がなかなかの激務で、ね……」

まさか考えていたことをそのまま口にできるはずもなく、フェレンスは罪のない嘘をついた。いや、まったくの嘘ではない。政務の代行は本当に激務なのだから。

「お疲れの原因は本当にそれだけですか？」

「どういうことだい？」
「……今日の会議で、激しくやり合われた、と聞いておりますが……」

眉間に可愛らしくシワを寄せ、言葉を濁しながらイセリアは紅茶に口をつけた。誰と、とは彼女は言わなかったが、言いたいことは大体分る。

「ゼノスだって、ちゃんとこの国のことを考えているよ」
「……あの方は、……苦手です……」

まさか「嫌いです」というわけにもいかず、イセリアは言葉を選んだ。拗ねたように紅茶を啜るイセリアに、フェレンスは苦笑するしかない。

フェレンスとイセリアが幼馴染（世間一般のそれとは大分事情が異なるけれど）だが、それと同じようにゼノスとイセリアも幼い頃から互いを見知っている。ただフェレンスの母である王妃エルセベートがゼノスのことを快く思っていなかったから、二人の接点は薄い。その辺りが、イセリアがゼノスに苦手意識を持つ原因だろう。

（仲良くして欲しいものだけど）

フェレンスの妻であるイセリアは、ゼノスにとっては義理の姉にあたる。この先、王室の家族として関わる機会も増えるはずで、色々と仲良くして欲しいというのがフェレンスの望みだった。

「ところでフェレンス様」
「ん？どうしたんだい？」

考え事をしているうちに、さっきまで正面にいたはずのイセリアはなぜかフェレンスの隣に移動してきて、ストンと腰を下ろした。

「陛下の政務を代行なさることも大切なお仕事ですが、王太子としてはお世継ぎを作ることも大切ではありませんか？」

突然の言葉にフェレンスは目を丸くしてイセリアを見つめてしまった。彼女のほうもやはり恥ずかしいのか頬に朱がさしている。そのことに気づくと、フェレンスは声を上げて笑ってしまった。さらに顔を赤くしてむくれるイセリアは妙に子供っぽい。

ひとしきり笑い終えると、フェレンスは妻を腕の中で抱きすくめた。

「お手柔らかに」

側室を持つことなど、フェレンスには考えられない。あるいは彼が王座についていれば、テムサニス史上で一番の愛妻家として名前を遺していたかも知れぬ。

そう、王座についていれば。

第八話　王者の器？（前書き）

お気に入り登録件数が１８００件を突破しました！
読んでくださる方々、感想を下さる方、本当にありがとうございます。

これからも更新頑張るので、よろしくお願いします。

第八話　王者の器？

蝋燭に照らされた薄暗い部屋の中に、三人分の人影が揺れている。三人は大理石で作られたテーブルを囲むようにして座っており、手にはそれぞれ赤ワインが注がれたグラスを握っている。そしてテーブルの上には飲みかけのボトルと、何種類かのつまみを載せた大皿が用意されていた。

「カベルネス侯爵、首尾はどうなっている？」

上座に座ったゼノスが口を開いた。赤ワインで少々酔っている感はあるが、言葉使いはしっかりとしており頭も明晰なままだ。

「は、すでに城の兵士たちのほとんどはこちらの手の者に代えてあります。いつでも決行できます」

ただ、と言いよどんでカベルネス侯はさらに言葉を続ける。

「フェレンス殿下の警備はルーウェン公が直々にやっているらしく、さすがに厳重です。公爵は近く領地に戻るという話もあるので、それを待てばフェレンス殿下の警備にこちらの手の者を食い込ませることも可能かと思います」

カベルネス候の言葉に一つ頷くと、ゼノスはもう一人の男のほうに視線を向けた。

「ウスベヌ伯爵、貴族たちへの根回しは？」

「ルーウェン公爵の派閥には手をつけておりませんが、それ以外の者たちには。ただ確実に協力してくれる者となると……」

ウスベヌ伯は少し言いよどんだ。ルーウェン公はフェレンスの妻であるイセリアの父であるから、彼を含めその派閥の貴族たちは最初から敵という認識だ。味方に引き込むなら彼ら以外の貴族たちになるのだが、色のいい返事はなかなかもらえないらしい。

「第一段階が成功すればこちらに傾く者たちも出てくる。それでも様子見を決め込むなら……」

「殿下……」

「わかっている。様子見を決め込む連中は放っておけというのだろう？」

カベルネス候の低い叱責の声に、ゼノスは少し不機嫌な声を返した。

これからこの国には激震が走る。もっと生々しい言い方をすれば、内戦が起こる。いや、起こすのだ。ゼノスたちが。

急速に進展していく事態の中で自分の立ち位置を決められず、「とりあえず趨勢が決するまで様子見」などと安易なほうに流される無能者どもなど、いるだけ有害としかゼノスには思えない。

「その無能者が富みと力を持っていることも事実。今は敵にならないだけで御の字としなければなりません」

「ふん。親から継いだだけものを誇って我がもの顔か」

ゼノスは吐き捨てた。彼は何もかもが不満だった。自分の現状も、国の現状も、時代の流れに鈍感な貴族たちも、自分の上に兄がいることも、そして兄のそばにあの人が立っていることも、全てが不満で彼を苛立たせる。普段は理性で抑えているが、赤ワインのせいで今宵は少し箍が外れてしまったようだ。

「ならば殿下はご自分の力で王座を手に入れられればよいのです」
「言われるまでもない」
「左様、王座についてしまえば後は殿下の胸一つ……」

ウスベヌ伯の追従も今は気にならない。赤ワインの入ったグラスを蝋燭の火にかざす。赤いその液体はまるで血のようにも見える。グラスに残ったそれを、ゼノスは一息で飲み干した。

「クロノワ・アルジャークにできて、この俺にできぬ道理はない」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ゼノスの母の名はマルシェナという。血筋だけは貴族の血統だが、いわゆる下級貴族とか田舎貴族とかいわれる家柄で、貧しくはないが決して裕福ともいえない生活をしていたと聞いている。

マルシェナの人生が一変したのは、彼女が侍女として王宮に上がったときのことだった。ひょんなことから彼女はジルモンドの御手つきとなり、そして懐妊が発覚するとそのまま後宮に入った。

一般的な話になるが、一国の後宮というのは一見すれば華やかな場所だが、その実情は権力闘争の中心地である。後ろ盾、つまり実家に大した力がないマルシェナはそこでは弱者の地位に甘んじなければならなかった。もっとも彼女のほかに後宮にいたのは王妃であるエルセベートだけだったのだが、それだけに強者による弱者の虐げは一方的で集中的なものだった。

結局、マルシェナはゼノスが七歳のときに病死した。「心労により免疫力が低下していた」という言葉の意味をゼノスが理解できた

のは随分後になってのことだったが、しかし彼の考えは変わらなかった。

「母は後宮という環境に、ひいては王妃エルセベートに殺されたのだ」

七歳のとき、子共ながらにゼノスはそう考え、そして今に至るまで修正の必要を感じていない。

ゼノス自身も悪意にさらされる幼少期をすごした、といっていい。細かい話は省略すれば、つい最近まで日陰者だったのだ。

そう、クロノワ・アルジャークのように。

クロノワの名前を聞くようになったのはつい最近だ。アルジャークがオムージュとモントルムの二カ国を同時に併合したとき、皇太子でありオムージュ領の総督に任命されたレヴィナスのおまけのようにその名前が語られていた。

詳しく調べれば、クロノワは首尾よくモントルムを征服し、そしてモントルム領の総督になったという。そしてさらに最近では、カレナリアを征服した遠征軍の総司令官も彼であった。

日陰者が、一躍国を支える柱となったのだ。彼は今、帝位をかけてレヴィナスと争っているらしいが、ゼノスはクロノワの勝利を疑っていない。いや、願っている、と言ったほうが正確かもしれない。

「這いつくばって辛酸をなめ、どん底から這い上がってきたものは強い。血筋だけで与えられた地位に甘んじているようなものに負けるものか」

そう、ゼノス自身を含めて。頭角を現すのはクロノワのほうが早かったが、才能そのものが彼に劣っているとは思わない。クロノワにできた、できるならば、ゼノスにだってできるはずだ。

「殿下」

「カベルネス候か。首尾は？」

「万事整っております」

「そうか。では、始めるとしよう」

そう言ってゼノスは立ち上がった。それから腰間に下げた剣を確認する。武術の心得などない貴族どもが好んで持つような装飾過多のナマクラではなく、実戦で使うことを、人を殺すことを主眼に作られた一級品だ。国内でも有数の剣の使い手であるカベルネス候も同じように実戦向きの剣を持っている。

「そういえばウスベヌ伯はどうした？」

城の廊下をフェレンスの執務室目指して歩きながら、ゼノスはもう一人の協力者のことを聞いた。

「屋敷で次の用意をしているかと」

「そうか。ではカベルネス候は城が片付き次第、ウスベヌ伯と合流してそちらの指揮をとってくれ」

ウスベヌ伯には兵を動かす心得などない。城のほうは以前から手回しをしてあり、掌握にそれほどの手間はかからないだろうから、城の外で起こすゴタゴタはカベルネス候に指揮を執ってもらったほうがいい。

カベルネス候が了解の返事を返すと、ちょうどフェレンスの執務室の扉が見えてきた。扉の前に立っている二人の警備兵は、ゼノスとカベルネス候の二人を認めると表情を固くした。この二人はカベルネス候の手の者で、これから何が起こるか知っているのだ。

「兄上にお話がある。取次ぎを」

ゼノスが形式通りに取次ぎを求めると、警備兵の一人がフェレンスにソレを伝えに行き、そしてすぐに入室の許可がなされた。扉を開けて中に入ると、大きな執務机に向かってフェレンスが書類と格闘していた。

「ゼノスにカベルネス候。今日はどうしたんだい？」

フェレンスは書類仕事を中断してペンを置き、穏やかな眼差しを弟に向けた。その微笑からは心身の充足が感じられ、それがゼノスの神経を逆なでする。

「兄上、今日は折り入ってお話しがあってまいりました。この国の行く末に関する話です」

「それは興味深いね。是非、聞かせて欲しい」

ゼノスはすぐには話し始めず、まずは室内を進みフェレンスのもとへと近づいていった。しかし近づきすぎはしない。執務机から二歩ほど離れた場所で立ち止まる。その気になれば一息で机の上に飛び乗ることができる距離だ。

「私が思うに、この国は眠っているのです。そう、惰眠を貪っている」

「面白いことを言うね。どういうことかな」

弟の少々過激な発言に苦笑しながらも、フェレンスは話の続きを促した。そしてゼノスは促されるままに言葉を続ける。

「アルジャーク帝国の急速な版図拡大。カンタルクのポルトールへの進攻とその事実上の属国化。アルテンシア半島の混乱と教会による十字軍遠征。ほかにもあちらこちらで軍が動き、国同士が雌雄を決している。今は激動の時代なのです、兄上。それなのにこの国はそのことをいっこうに認識しようとしない」

「ふむ。それで君はどうしたいのかな」

机の上に肘を立てて指を組みながら、フェレンスが問いかける。その問いに、ゼノスの目が妖しく光った。

「私はこの国を目覚めさせたいのです。そしてそのために……」

その瞬間、ゼノスは腰間の剣を抜きながら執務室の床を蹴り、フェレンスの前の執務机の上に飛び乗った。机の上に積まれていた書類が散乱し、その向こうに驚愕を貼り付けたフェレンスの顔が見え隠れする。

「兄上、貴方には死んでいただきたい」

抜き放った剣を、ゼノスはフェレンスのみぞおちの辺りに突き刺した。フェレンスが血を吐き、衣服に赤いシミが浮かび始める。

「ゼ、ノ……ス？」

ゼノスは剣を抜くと、そのまま今度は真横に一閃した。斬られた椅子の背もたれと共に、フェレンスの首が宙を飛ぶ。その首が床に落ちるのと、頭を失った首から血が噴出するのとは、さてどちらが

早かったのか。

力と首を失ったフェレンスの体が崩れ落ちると、ゼノスは執務机の上で立ち上がり血を払い飛ばしてから剣を鞘に収めた。

机から下り顔に付いた返り血を拭うと、ゼノスは床に転がったフェレンスの首のもとへ向かった。冷たい目でその首を見下ろし、おもむろに髪の毛をつかんで持ち上げる。

「行くぞ。次は王妃エルセベートだ」

「御意」

少し離れたところで全てを見守っていたカベルネス候は顔色を変えることなく頷いた。賽は投げられた。この場に留まっていても事態は優位には進まない。

ゼノスとカベルネス候が廊下を進むと、少しずつ兵士が合流していき、ついには五十人近い集団になった。そんな完全武装の集団が城内を闊歩しているだけでも異常事態だというのに、その先頭を行くゼノスは衣服を返り血で汚し手にはフェレンスの生首をぶら下げているのである。悲鳴と混乱が城内を満たした。

腹違いの兄であるフェレンスを手にかけたゼノスが次に向かったのは、宣言どおり王妃エルセベートが住まう一画だった。

侍女たちが悲鳴をあげて逃げ惑う中をゼノスたちは突き進む。そして行き着いた最も豪勢な部屋の中に、王妃エルセベートはいた。周りには殺気立った数人の護衛がいるが、明らかに戦力不足である。彼女自身は悠然とソファーに腰掛けているように見えるが、その顔は青白く唇には血の気がない。

「恐ろしいことを考えつかれましたな、王妃陛下」

エルセベートの姿を認めると、ゼノスは芝居がかった口調でまずそういった。彼女は何が起きたのか大体はすでに把握していたが、それでも思いもよらぬ言葉を投げつけられ一瞬絶句した。が、すぐに猛然と言い返す。

「なっ……！恐ろしいことを考えているのは貴方のほうでしょう！わたくしが一体何をしたというのです！？」

「兄上を玉座につけんと画策された」

その言葉にエルセベートは再び絶句した。フェレンスを王座につけようと画策する？そんなことになんの意味があるというのか。彼は第一王子だ。つまり彼が王座に付くことはすでに確定している。この上どんな陰謀を巡らせる必要があるというのか。

「恐ろしいことですな。今この時期に兄上を玉座につければ、人質としての価値がなくなった国王陛下はアルジャークによって見せしめとして処刑されてしまう。まあ、貴女にとってはそれさえも折込済みだったのでしょうが」

「そ、それは貴方が考えていることでしょう！？」

確かに名詞、つまりフェレンスの部分をゼノスに入れ替えれば、大まかとはいえ今回のクーデターの核心をつけるだろう。喚きたてるエルセベートの言葉をゼノスは無視し、自分の描くストーリーを進めた。

「おかげで私は兄上を殺さなければならなかった」

大仰に嘆いてみせ、ゼノスはフェレンスの生首をエルセベートに向けて放った。息子の生首を抱きかかえた彼女は、それが何であるかを認識するとかん高い悲鳴をあげてその生首を投げ捨てた。

恐怖と焦燥を隠しきれなくなったエルセベートは、ソファーから立ち上がりゼノスに背中を見せて逃げようとした。だがゼノスはそれを見逃しはしない。鞘から剣を走らせ、逃げるエルセベートの背中を斜めに斬り裂いた。

床に倒れ、しかし這ってでも逃げようとする彼女の背中に、ゼノスはさらに剣を突き刺す。エルセベートは一瞬体を硬直させ、そして絶命した。

ゼノスはエルセベートが死んだことを確認してから剣を鞘に戻した。周りを見渡せば、彼女の護衛はいつの間にか片付けられている。カベルネス候の仕事だろう。

「さて、これで後はイセリアだけか」
「すでに別部隊を向かわせております」

フェレンスの妻であるイセリアは殺さずに生かして捕らえる予定だ。フェレンスとの間に子供がいるならば母子共に殺さねばならなかっただろうが、ゼノスにとって幸いなことまだ子供は生まれていない。

「ルーウェン公爵が王都にいれば、このような手間をかけずに済んだのですが……」

この後、カベルネス候はウスベヌ伯と合流して部隊を率い、ルーウェン公の派閥の貴族たちを粛清することになっている。この時に

ルーウェン公本人も一緒に殺してしまえれば一番良かったのだが、彼は今自分の領地に戻っている。もっとも彼が王都を離れたおかげでフェレンスの護衛が緩くなり、計画の決行が容易になったという側面もある。

ルーウェン公がフェレンスとエルセベートを殺したゼノスを認めるわけがないから、彼とは互いに軍をもって雌雄を決しなければならない。イセリアはその時に人質として使うのだ。

「どのみち内戦は起こる。ならばルーウェン公という分りやすい親玉がいるほうが、やりやすいのではないか」

当たり障りのないことを言っておく。この場で何を言ったところで状況は変わらないのだから。

「では私はウスベヌ伯のところへ……」

「ああ、宜しく頼む」

「殿下はこれからどうされますか」

殺すべき人物は殺し、捕らえるべき人物は捕らえた。敵対派閥の貴族たちの掃討に参加しないのであれば、することはもうない。

「そうだな。挨拶でもしてくるか、イセリアに」

そして手に入れるのだ。国も、権力も、女も。

ゼノスの顔が欲望に歪んだ。

第八話　王者の器？

イセリアと初めて出会ったのがいつのことだったのか、ゼノスははっきりとは覚えていない。ただ記憶の海を探れば、全てが曖昧な景色の中にまだ幼いイセリアの姿をはっきりと思い出すことができる。

一目惚れ、ではなかったと思う。一目惚れをするには、出会ったときゼノス自身まだ幼すぎた。愛だの恋だの、単語と知るのはもう少し先で、実感として知るのはさらに先のことだった。

気が付いたら好きになっていた、としか言いようがない。男心をくすぐるあの可憐な容姿。白く細い手足。鳥のさえずりのように美しい声。その全てに惹かれた。イセリアが視界に入れば、背景の全てが色あせただ彼女だけが輝いて見えた。

しかしゼノスが自分の気持ちに気づいた時、同時にその恋が決して実ることはないと分ってしまった。なぜならイセリアは兄であるフェレンスの婚約者だったのだから。また王妃であるエルセベートがなにかに感づいたのか、ゼノスがイセリアに近づくことを露骨に嫌うようになり、彼がイセリアと話をする機会は急速に減っていった。

兄のフェレンスは軟弱な男である。少なくともゼノスはそう思っている。身体的な精強さに関してもそうだが、なによりもその思考が軟弱なのだ。

ゼノスの独断と偏見だが、フェレンスの基本的な思考はいわゆる

「事なかれ主義」で、今の激動の時代にはそぐわない。いや、そぐわないどころか有害ですらある、とゼノスは考えていた。

心身ともに王者としてもイセリアの夫としてもふさわしくない男。それがゼノスのフェレンスに対する評価だった。

しかし現実はどうか。フェレンスは第一王子として第一位の王位継承権を持っており、イセリアとはすでに夫婦の関係になっている。

ゼノスは自分がフェレンスに劣っているとは思わぬ。むしろ優れていると自負している。にもかかわらずフェレンスは王座とイセリアと、この二つを苦労することもなく手に入れたのだ。その生まれながらの血筋によって！

あるいはフェレンスとイセリアが不仲であれば、ゼノスも溜飲を下げることができたのかもしれない。しかし噂に聞こえてくる二人の仲は極めて良好で、それがゼノスの心をかきむしった。

花街に女を買いに行くたび、気づけばイセリアに似た女ばかりを指名していた。だがそんな偽者を抱いても満足はできない。虚しさが募るだけだ。フェレンスは温かい閨房の中で本物のイセリアと睦みあっているというのに。

「なぜだ！？」

とゼノスは叫びたかった。なぜ俺ではない。王座を受け継ぐのも、イセリアを手に入れるのも、なぜ俺ではなくあの軟弱な兄なのだ。生まれが全てを決める。フェレンスが世襲で全てを手に入れるならば、それならば俺は……。

奪って、手に入れるしかないではないか。

それは野心という名の怪物のささやきだ。その怪物の身動きを封じているのは理性の鎖だが、その鎖はいつ千切れるかも分らぬ脆いものだ。

ゼノスは機会を窺い続けた。そんな最中、クロノワ・アルジャークの名前を聞いたのだ。

彼の名前と置かれていた境遇を聞き、ゼノスは一つの感想を抱いた。

「自分と似ている」

先に生まれた兄が全てを手に入れ、その母に虐げられ、自分の才能とは別のところに起因する理由によって日陰者にあまんじなければならない。クロノワ・アルジャークがおかれていた環境はゼノスのそれと良く似ていた。

そんな彼がついに大きな手柄を立てた。いや、世間一般では彼の兄であるレヴィナスの影に隠れてあまり評価されていないが、それでも日陰者には考えられない功績を立て、それに見合う地位を手に入れたのだ。

先を越されてしまった、と思わないでもない。しかし福音でもある。

「クロノワ・アルジャークにできて、この俺にできぬ道理はない」

才でクロノワに劣るとは思わぬ。同じ日陰者であったクロノワにできたならば、ゼノスにだってできるはずである。

何の因果か、ゼノスがのし上がる絶好のチャンスはクロノワ・アルジャークによってもたらされた。カレナリアに親征したジルモンドを彼が捕らえてしまったのだ。時を同じくしてアルジャーク帝国国内では政変が起こり、クロノワは遠征軍の大部分を率いて北へと戻った。

テムサニスに残ったのは、国王不在という非常事態だけである。しかしこの非常事態こそが、ゼノスには千載一遇の機会に思えた。

国王ジルモンドはカレナリアで囚われの身だ。後は兄であり第一王子のフェレンスと王妃エルセベートさえ消してしまえば、ゼノスと王座を隔てるものは何もない。

さらに都合のいいことにカベルネス候とウスベヌ伯という味方も見つけた。ただゼノスはこの二人を心の底から信頼しているわけではない。カベルネス候はルーウェン公のライバルで、この機会にフェレンスを担ぐ彼に対抗すべくゼノスに味方しているのだろうし、ウスベヌ伯はもっと生々しい利益の計算に基づいてゼノスに味方しているはずだ。極端な言い方をすれば二人とも当座の目的が一致しているから味方してくれているだけで、この先どうなるかは分らない。

彼らには彼らの思惑があり、そのためにゼノスが持つ唯一の価値あるもの、つまり王家の血を利用しようとしているのだろうが、ゼノスにはゼノスの思惑がありそのために彼らを利用しているのだからお互いさまであろう。

奪え。奪ってしまえ。早く早く早く……。

野心という名の怪物は囁き続ける。水面下での駆け引きと準備はすでに終わっている。後は王手（チェック）をかけるだけ。

「玉座と、イセリアをこの手に」

理性の鎖が、はじけた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

腹違いの兄を殺し、義理の母を殺した。彼らの返り血を浴び、しかし後悔の念は一切ない。むしろここ十年来感じたことのない充足をゼノスは覚えていた。

（思いのほか上手くいったな……）

あるいはフェレンスとエルセベートのどちらか一方は取り逃がしてしまうかもしれぬと覚悟もしていたのだが、結果は知ってのとおりである。

（ここから先は私事、かも知れぬな）

だからといってそれが重要ではない、ということはゼノスにとってありえない。公人も私人もただ等しく彼自身である。

今回のクーデターの表の目的、つまりゼノスがカベルネス候やウスベヌ伯と共有している目的は王座の、ひいてはこの国の実権の奪取である。が、ゼノスにはもう一つ裏の目的とも言うべきものがあった。それは、

「イセリアも手に入れること」

である。

イセリアを手に入れることは、ゼノスにとっては必須事項であった。玉座に座りその傍らに彼女をはべらせることができて初めて、ゼノスは己の野心を満足させることが出来るのである。

公にあっては一国の王としてこの激動の時代を制し、私にあっては恋し焦がれた女と閨房を暖める。それは男子にとって一つの理想形だ。そしてゼノスはその理想を妥協する気はなかった。

だからこそルーウェン公が領地に帰るまで計画の決行を待ったのだ。カベルネス候が言ったとおり、フェレンスの警護はルーウェン公が直々に担当しており、その警備は厳重であった。そこで公爵が領地に帰るまで決行を送らせ、フェレンスの警備に隙を作ってからクーデターを実行した。

確実にフェレンスとエルセベートの両者を亡き者にしておきたいカベルネス候とウスベヌ伯もそれを支持した。この後内戦が起こることはほぼ確実で、ならばゼノスのほかに正当性を主張しうるこの二人は確実に殺しておきたかったのだ。しかしゼノスにはもう一つ別の思惑もあった。

仮にルーウェン公が王都にいる状態で、つまりフェレンスの警備が厳重な状態でクーデターを決行しても、彼を殺すことはできたであろう。エルセベートは取り逃がしたかも知れぬ。しかしフェレンスを殺すことは十分に可能であった。

が、ゼノスはそうはしなかった。ルーウェン公が王都にいれば、当然彼の命も狙うことになる。彼が死んでしまえば、彼の娘であるイセリアは人質としての価値を失うことになる。もちろんルーウェ

ン公には他にも子供や血縁者がいるから、彼らに対する人質として使うこともできる。しかしフェレンスの妻というイセリアの立場は、ただそれだけでカベルネス候やウスベヌ伯に警戒を抱かせるに足るものなのだ。

ルーウェン公という巨魁がいるからこそ、イセリアの人質としての価値は大きくそして重くなるのである。国内を掌握していない現状でルーウェン公が死んでしまえば、イセリアも殺しておくべきだという意見は強くなるだろう。

だからゼノスはルーウェン公が領地に帰るまで計画の決行を待った。イセリアに人質という価値を持たせるために。イセリアを手に入れるために。

ゼノスはイセリアとフェレンスが暮らしている一画に足を踏み入れた。彼がここに足を運ぶのはこれが始めてである。

その一画はすでに制圧が完了しているのか、静まり返っていた。ところどころに立っている兵士たちも、返り血で汚れた衣服をまとうゼノスがここにいることには何も言わず、かえって敬礼をよこしてくる。

歩を進めていくと、他よりも大きな扉を持つ部屋が見えてきた。その前には二人の兵士が立っている。どうやらあの部屋にイセリアがいるようだ。ゼノスが無言でその部屋に近づくと、兵士たちが扉を開けた。

「ゼノス……！貴方は……！」

ゼノスが部屋に入ってくると、イセリアは憎悪に満ちた目で彼を

睨み付けた。その突き刺すかのような視線に、ゼノスは勝者にのみ許される余裕に満ちた冷笑で応じた。

部屋の中にいた兵たちを下がらせる。部屋の扉が閉まると、その閉ざされた空間の中にゼノスとイセリアの二人だけが残された。

「兄上なら死にましたよ。私が殺しました」

「……！」

その言葉を聞いた瞬間、イセリアの目は大きく見開かれた。そして徐々に顔から血の気が引いていき、口元に添えられて手が震え始めた。返り血で汚れたゼノスの衣服を見たときからその結末は頭の片隅にあったのだろうが、面と向かって、しかも殺した張本人から聞かされればその衝撃はいかほどであろうか。イセリアの目から大粒の涙が零れ落ちた。しかしそれでもイセリアは俯かなかった。

「なぜ……こんなことを……！」

涙を流しながらも、イセリアの目に宿る憎悪の光に衰えはない。いや、むしろより強くなったといえる。彼女は射殺さんばかりに睨みつけるが、しかしゼノスが怯むことはなく、むしろ彼は喉の奥を鳴らして笑った。

「なぜ？俺が望むものを手に入れるには、こうするしかなかったからだ」

イセリアの顎を右手でつかみ、その反抗的な目をむしろ挑むようにして覗き込みゼノスは獰猛な笑みを浮かべた。慇懃な言葉遣いはもはや止め、日陰者の第二王子という望まぬ仮面を自分の手で叩き割る。

イセリアとゼノスは互いに息がかかりそうな距離で睨み合った。先に視線をそらしたのはイセリアのほうだった。

「放しなさい！汚らわしい！」

ゼノスの手を払いのけ、部屋の奥、隣室に通じる扉のほうへ逃れる。しかし隣室へ逃げ込むことはせず、胸の前で手を組んでゼノスを睨みつけた。

「思っていた以上に気が強いな。ますます気に入った」

その言葉に、イセリアは今までとは別の種類の身の危険を感じた。憎い仇でしかなかったゼノスが男であること、そして自分が女であることを思い出したのだ。

イセリアの憎悪に、恐怖が混じる。そして自覚してしまった恐怖は、あっという間に広がり彼女の体温を下げた。

手が震え、膝が笑う。イセリアの目から憎悪が駆逐され、変わりに恐怖が彼女を縛るのを見て、ゼノスは獰猛に笑った。

「わ、わたしはフェレンス様の妻ですっ！あ、貴方の思い通りになんてなりません！」

「ではその強情をいつまで張り続けられるか、体に聞いてみるとしよう」

今度こそ背中に冷たいものを感じ、イセリアは扉を開けて隣室に逃げ込んだ。逃げ込んだのは普段彼女がフェレンスと夜を共にしていた寝室である。窓には分厚い遮光のカーテンが付けられており、

昼間だというのに室内は薄暗い。

イセリアは必死に逃げたが、しかし突然腕をつかまれて寝台の上に投げ飛ばされた。投げ飛ばした張本人、ゼノスが嫌な笑みを顔に貼り付けて近づいてくるのを見て、イセリアは寝台の上で後ずさる。手じかにあった枕を、思わず抱きしめる。

（フェレンス様……！）

抱きしめた枕から、フェレンスの香りがした。その香りが恐怖に支配されたイセリアの思考を、一部とはいえ解放する。

（そうよ、ここは……！）

この寝台は、イセリアとフェレンスが愛を育んできた場所だ。その大切な場所を、ゼノスに汚されるというのか。

（それくらいな、いっそ……！）

ゼノスの手がイセリアを寝台の上に押し倒す。倒れた彼女の上にゼノスはまたがり、乱暴にその衣服を破きその白い肌をむき出しにした。

（貴方なんかの思い通りにはならない！）

イセリアは心の中で叫び、そして……。

そして、舌を噛み切った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

破いた服の下から、イセリアの控えめな双丘がこぼれ出る。この双丘にはじめて触れたのが自分ではなくフェレンスであるということに殺意に近い憎悪を覚えるが、その本人はすでに自分が殺したことを思い出すとすぐに沈静化した。

イセリアは相変わらずこちらを睨みつけてくる。その反抗的な目に、ゼノスは嗜虐心をくすぐられる。

ふと、イセリアが目をつぶった。観念したのかと思ったが、その一瞬後に様子がおかしいことに気づく。

イセリアの口から、赤いものが一筋流れ落ち、枕に赤いしみを作った。

「なっ!?」

驚いたゼノスは後ろに飛びのいた。自由になったはずのイセリアは、しかし肌を隠すことも起き上がって彼を睨み付けることもしない。否、できない、といったほうが正しいだろう。

「なぜだ!?」

ゼノスは叫ぶ。勝者となれば全てを手に入れられるのではなかったのか。なぜそこまでして自分を拒むのか。自分よりも兄のほうがいいというのか。

「なぜだ!?」

手に入れたかったもの、手に入れるはずだったものは、彼の手から零れ落ちそして砕けてしまった。もう手に入れることはできない。

永遠に。

なぜならばイセリアは舌を噛み切って死んでしまったのだから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日、テムサニスの王都ヴァンナークでクーデターが決行された。クーデターの首謀者は第二王子ゼノス・テムサニスで、国内の有力貴族であるカベルネス候やウスベヌ伯といった者たちが協力していた。

ゼノスはまず兄であるフェレンスとその妻イセリア、そして義理の母である王妃エルセベートを殺害し、血筋の上での政敵を排除した。

城内を制圧したゼノスは、次に王都ヴァンナークにいるルーウェン公の派閥の貴族たちを襲撃し、当主に限れば全て殺害した。こうしてクーデターの第一段階はほぼ完全に成功し、ゼノスを担ぐ一派は王都ヴァンナークを掌握したのであった。

クーデターの次の日、ゼノスは略式ではあるが戴冠式を行い、テムサニスの国王を名乗った。ただカレナリアの地で捕まっているとはいえジルモンドはいまだ健在で、彼はいまだ退位を表明してはいない。この時のテムサニスの状況を、後の歴史書の言葉を借りて言い表せば、

「一つの国に王二人」

となる。ただ先ほども述べたとおり、その内の一人は異国の地で捕囚の身分であり、一つしかない玉座に座るのは、やはりただ一人

の王であった。

さて、ゼノスは玉座に座ったわけであるが、それは国内を掌握した、という意味ではなかった。王都ヴァンナークで起こったことを知ると、ルーウェン公はすぐさま自身の派閥を率いてゼノスに反旗を翻した。

彼にしてみれば娘であるイセリアと、彼女が嫁いだフェレンスを殺されたのだ。黙っていることなどできはしない。それにルーウェン公が何もしなくても、ゼノスは彼を討伐しようとするだろう。ならば兵を挙げ迎え撃つしか、ルーウェン公が生き残る術はない。

とはいえ相手は王族である。王族に向かって兵を挙げるというのは、貴族にとっては体裁が悪い。そして体裁が悪いということは、兵の士気が上がりにくいということを意味していた。敵が王族を旗頭として掲げるならば、こちらも王族の一人を旗頭とするのが最もよい。だが、それはもはや叶わぬ。

苦肉の策として掲げた口上は次のようなものであった。

「ジルモンド陛下が崩御も退位もしておられない以上、第二王子ゼノスの戴冠は不当であり簒奪にあたる。正統な国王陛下がお戻りになられるまで国を守るのが、臣下たる者の努めである」

主張していることの中身は正当なのだろうが、捕囚の身に甘んじている国王を引っ張り出さねばならないとは、情けない体たらくである。ルーウェン公としても本来であれば、フェレンスを旗頭にして戦い勝った後は第一王子の義父として国政に影響力を強める、というのが最善のシナリオであったろうに。

さて、ゼノスの方はルーウェン公が兵を挙げるのを悠長に待ってはいなかった。ルーウェン公が兵を挙げることなど最初から織り込み済みで、彼の出方を伺う必要などない。王都ヴァンナークを掌握したのであれば、次にやるべきは最大の敵であるルーウェン公の討伐である。

クーデターを起こす前、ゼノスはカレナリアへの再度の出兵を主張していた。そして彼に同調するカベルネス候やウスベヌ伯といった貴族たちは、その名目で兵をすでに用意していた。

こうしてカレナリア出兵のための軍はルーウェン公爵討伐のための軍に早変わりし、その矛先を国内へと向けたのである。その数、およそ五五〇〇〇。

ルーウェン公の領地へ向かうにあたり、ゼノスは城に保管されていた王旗を持ち出した。かつてカレナリアに進攻したジルモンドが掲げていた王旗まったく同じそれであり、予備として保管されていたものである。

「王のいる所に王旗あり」

というのが原則であるから、王旗を掲げることにより、ゼノスは自分が正統な王であることを国内に宣伝しようとしたのである。

ルーウェン公もまた同じ派閥の貴族たちと協力して兵を集めた。その数およそ三万。別の名目でとはいえ早い段階で兵を集めてあり、後は動かすだけだったゼノスの側と同じ数をそれえるのはやはり難しい。むしろこの短期間によくぞ三万も集めたと評価すべきであろう。

余談であるが、この先ゼノスの軍を新王軍。ルーウェン公爵の軍を公爵軍とそれぞれ呼称する。

新王軍と公爵軍の戦端が開かれたのは、ルーウェン公の領地内にあるカートルム平原でのことだった。

結果から言えば新王軍の勝利だった。数の差以上に、指揮官の士気が勝敗を分けた戦いになった。

新王軍の総司令官は当然のことながらゼノスである。彼は国内を平定し、名実共にテムサニスの王になろうというのだから、彼自身の士気は高い。

カベルネス候やウスベヌ伯といった貴族たちも同様である。これまで国内で最有力の貴族といえば、やはり第一王子に娘を嫁がせていたルーウェン公であった。だがこの戦いに勝てばその構図を一変させることができる。権力と富を追い求めるのが貴族の習性なのだろうが、その本能に身を任せた彼らの士気も高かった。

対して士気が上がりきらないのがルーウェン公である。彼はこの戦いに勝った後の国のあり方と、その中での自分の立ち位置を想像できなかったのである。フェレンスとイセリアが生きていた時は、王の外戚として権力を振るうという目標があった。それは目新しい手法ではまったくないがそれだけに確実で、彼に確固たる権力を約束していた。しかしその両者を失ってしまったルーウェン公は、同時に未来に対する想像力までも失ってしまったようであった。

「自分がこの国を盗る」

この状況下でそう意気込むことができない辺り、彼の器の限界だ

ったのかもしれない。なんにせよ確かなことは、ルーウェン公はこの戦いの後の権力構造を描ききれていなかったということである。

公爵軍に参加しているほかの貴族たちも同じような状況であった。確かにルーウェン公は彼らの派閥の盟主であり、最有力者である。しかし彼は王族ではない。彼は貴族でしかなく、その意味では自分たちと同じ立場なのだ。

「この戦いに勝った後、ルーウェン公は王として振舞うつもりではなかろうか」

そんな疑念が彼らの心の中に渦巻いていた。それはルーウェン公が戦いの後の権力構造を描ききれていなかったことも関係していたのだろう。

もし彼らが生粋の武官であったなら、戦いの後のことは取り敢えず置いておき、勝つことに意識を集中できたかもしれない。しかし彼らの多くは文官肌であった。彼らにとって戦いは道具でしかなく、重要なのはその後のことなのだ。戦場が命のやり取りをする場所だということさえ、忘れてしまっていた者もいたのかもしれない。

ともかく一方の指揮官の士気は高く他方は低い、という構図になった。そして指揮官の士気というのは兵士たちの士気に直結する。誰だって迷いを見せる指揮官の下では戦いたくないのだから。

新王軍はさんざんに公爵軍を喰いちぎり敗走させた。ルーウェン公もこの戦いで戦死している。

そして戦いの後に始まったのは、地味だが重要な戦後処理、ではなく勝者により粛清と略奪であった。

ゼノスは敵になったルーウェン公の派閥の貴族たちを許しはしなかった。最初の一戦で趨勢を決すると、そのまま軍を進め敵対した貴族たちの領地に乗りこみ、そして潰していった。ご丁寧に一家ずつ、である。

潰した家に妙齢の令嬢がいると、ゼノスはその令嬢を閨房に放り込んだ。いや、令嬢の寝室に乗り込んだ、と言ったほうが正しいだろう。イセリアを失った喪失を埋めようとしていたのかもしれない。

相手をさんざんに辱めて犯した後、ゼノスの胸に湧き上がってくるのは、しかし憎しみであった。なまじイセリアを重ねて抱いているから、どうしても彼女の死に様を思い出してしまうのである。

自分のものにならずに死を選んだイセリア。そして偽者を抱かねばならない自分。憎悪と嫌悪が入り混じり、ゼノスは寝台の上で肌を上気させ気を失っている令嬢の首に手をかけた。

そんなことが何度も続いた。新王軍は王の精神状態がいまだ不安定で、その不安定さは軍規の緩みに直結し、各地で略奪が行われた。

新王軍が今いる場所はルーウェン公の派閥の貴族たちの領地である。つまり他人の土地であり、敵の土地である。貴族という生き物は元来、自分の土地以外はどうでもいいようで彼らはそこにあった富を根こそぎ奪っていった。

内戦は終わった。しかし新秩序はいまだ築かれず、むしろ混迷が深まっている。なにしろ勝者が自らの手で混乱を助長しているのである。それは言い繕うことのできない、大きな隙であった。

第八話　王者の器？（前書き）

今回からクロノワパートです。

第八話　王者の器？

リガ砦で新年を迎えたクロノワは、帝都ケーヒンスブルグには戻らずにそのまま西に進み、オムージュ領の総督府が置かれているベルーカを目指した。

かつてレヴィナスが治めていたオムージュ領の行政機能を掌握するため、そしてアレクセイに約束した通り捕虜にしたレヴィナス軍の兵士たちを故郷に帰すためであった。

捕虜たちを順次解放しながらオムージュ領を進むクロノワは、それと同時に土地の荒れ具合も観察していたのだが、それは想像以上であった。季節は冬であるから大地に緑が少ないのは仕方がない。しかし耕作を放棄したと思しき農地がかなりの面積ある。暮らしている人々も痩せており、顔には生気がない。

「オムージュを、お願いしますっ！！」

リガ砦でレヴィナスを討ち取った農民たちに懇願された言葉がよみがえる。その言葉は誇張でもなんでもなく、彼らは、オムージュはギリギリのところまで追い詰められていたのだ。これらから成さねばならない仕事の重さを思い、クロノワは身を引き締めた。

それにしても、とクロノワは思う。

それにしても悪政の代償はなんと大きいのだろう。レヴィナスがオムージュ領の総督として治めた時間は一年程度である。レヴィナスが打った手が悪すぎたという理由もある。彼に起因する以外の理由もあったろう。しかしその一年でオムージュはここまで追い詰められてしまったのだ。

為政者が打つ手を間違えてしまったときの影響と代償の大きさに、クロノワは一種の恐怖さえ感じた。ただそれはその責任を背負っていく覚悟の裏返しでもある。

ベルーカの総督府に入ったクロノワは、すぐさま改革に取り掛かった。税制を帝国のそれにあわせ、レヴィナスが行っていた「増税分を過去にさかのぼって適用する」という禁じ手を停止する。さらに土地を捨てて難民とならざるを得なかったオムージュの民が戻ってこられるように、「半年以内に土地に戻れば、未納分の税金は免除する」という布告を出した。これによって国外に逃れていた人々が帰ってくることができ、穀物の生産量も元に戻るはずである。

さらにクロノワは、オムージュがアルジャークに併合された際、レヴィナスが土地を安堵した貴族たちを処断した。住民たちに対する略奪じみた租税の取立てが、その理由であった。盗賊を探すという名目で、実際に私兵を率いて自分の領地内の村を襲い略奪を行った貴族がいたというのだから救いようがない。

聖銀（ミスリル）の製法が流出したことで豪遊費を失った聖職者たちが、オムージュの貴族たちのところに数多く転がり込んでいることをクロノワは知っていた。そしてその聖職者たちがそこで何をしていたのかも。彼らはそれまでの生活を改めようとはせず、転がり込んだ貴族たちのもとで美食を貪り美酒をあおり美女をはべらせて楽しんでいたのである。

そのための費用は転がり込んださきの貴族が負担していたわけであるが、ではその貴族の収入源はといえば領地に住んでいる住民たちの血税である。しかも貴族たちは、聖職者たちの豪遊費分だけを追加で徴収していたわけではない。「司祭さまがご入用である」と

いう、教会の信者であれば逆らい難い大義名分を掲げて必要分以上の取立てを行い、私腹を肥やしていたのである。

増税とその過去への適用を行いオムージュの民の生活を圧迫したのはレヴィナスであるが、そこにさらに取立てを行い止めをさしたのはこのような貴族たちであった。

そのような連中にクロノワは容赦しなかった。断罪すべきものを断罪し、家を取り潰し財産と領地を没収した。遺された者には一応路頭に迷わぬように、慎ましく暮らせば一世代くらいは働かなくても生きていけるくらいの金銭は残してやったが、浪費に慣れた彼らがそれを使い切った以降のことは知らぬ。

（恨まれるでしょうね……）

執行書類にサインをしながら、クロノワは苦く笑った。が、恨まれてもやらねばならない。今この時期に行動しなければ、オムージュの民の信任は得られない。レヴィナスによって痛めつけられた彼らを可能な限り速やかに回復しなければ、これから始まるクロノワの治世に影を落とすことになるだろう。

ただアルジャーク皇帝クロノワとしては、別の思惑もある。元来、アルジャーク帝国に貴族という階級は存在しない。そのような体制の中で統治を行う皇帝にとって、皇帝と臣民の間に割り込んで権利ばかりを主張する旧オムージュ貴族の生き残りは邪魔なのである。だからこの件にかこつけて、一気に排除してしまいたいという思惑があった。

さて、そうやってアルジャーク併合後にも残っていた旧オムージュ貴族のほとんど全てが取り潰されたわけであるが、そこに転がり

込んでいた聖職者たちにはクロノワは手を出さなかった。ただ庇護してくれていた貴族がいなくなったわけであるから、彼らにしてみれば突然外に放り出されたような感覚であったろう。

そのような聖職者たちの多くは、貴族の代わりとして今度はクロノワに援助を求めた。しかしクロノワは手を出さなかった。そう、いい意味でも悪い意味でも。有り体に言ってしまえば、その申し出を突っぱねたわけである。当然、聖職者たちのクロノワの心象は悪くなった。

これは憶測の話しになるが、仮に十字軍によるアルテンシア半島への遠征が成功し教会の低下しなければ、教会とアルジャークの関係はこの件がきっかけで冷え込んだかもしれない。下手を打てば敵視さえされていただろう。

しかし第一次十字軍遠征は失敗した。それにより教会の力はそがれ、この程度の些事に力を割けなくなったのである。しかもその力と発言力を大きく低下させた教会は、シーヴァに対抗するためアルジャークに助力を求めねばならなくなる。

将来的として戦場で出会うクロノワを、この時期に間接的にとはいえシーヴァが助けていたことは歴史の数奇さを感じさせる。

レヴィナスが推し進めていた建築計画については、大幅にその規模を小さくした。計画段階でまだ着工していないものについては全て凍結したのだが、ほとんどの建物はコルグスがオムージュ王であったときから計画が進められており、すでに八割以上完成しているものが多い。

見栄えが悪くなるくらいなら途中で放り出してもいいのだが、そ

の事業に関わりそこから収入を得ている人々も確かにおり、計画を全面凍結してしまえばそれらの人々の生活に影響を及ぼすだろう。計画とそこに関わる人の数が多すぎたのだ。そこでクロノワは、縮小はするが計画自体は存続させ、それらの人々の雇用と生活を守ったのだ。

ただレヴィナスから任されて計画全体の監督を行っていたコルグスは流石に罷免した。クロノワとしては彼自身に思うところはない。しかし、アーデルハイトの父でありレヴィナスの義父にあたる彼に、このまま計画を委ねておくわけにはいかないのである。ちなみにもともとはコルグスが打ち立てたこの一連の建築計画は、この先八年後に一通りの完成をみる。自分の手を離れたとはいえ計画の完遂を見ることができた彼は、あるいは幸せだったのかもしれない。

それにしても、とクロノワは思う。

（兄上は、皇室に生まれるべきではなかったのかもしれませんね……）

恐らくコルグスもそうなのだろうが、レヴィナスは美の追求者であり、その本質は芸術家、しかも天才肌のそれであろう。こういった人種は目標に対して一途であり、悪く言えばそれしか目に入らない。目標達成のためには骨身を惜しまず努力を払う。

レヴィナスの場合、オムージュ領総督となったことで努力できる幅が広がりすぎたのだ。それが彼にとってもオムージュの民にとっても不幸な結果となった。

もしレヴィナスが皇太子でもなんでもなければ、彼は限られた環境ながらも心いくまで自分の望む美しさを探求し、そしてそれに見

合う評価と満足を得られただろう。クロノワはそう思わずにはいられなかった。

さて、オムージュでいわばレヴィナスの後始末を終えたクロノワは、次にモントルム領オルクスに向かい、そこで遷都を宣言した。

「ケーヒンスブルグの宮殿は焼け落ち、もはや政には耐えない。また最近拡大した版図の中では、ケーヒンスブルグは北より過ぎる。そこで、国土の中で比較的中心に位置し、治安状態のよいオルクスを新たに帝都とすることが妥当であると考える」

大まかに要点を抜き出せばこれが遷都の理由である。さらに良港を有する独立都市ヴェンツブルグが近くにあったのも、オルクスを帝都に選んだ理由であろう。これからクロノワが「世界を小さくする」ために、海は決して外すことのできない重要なファクターなのだから。

遷都を宣言したクロノワは、次に略式ではあったが戴冠式を行い正式にアルジャーク帝国の皇帝に即位した。略式などではなく各国の要人なども招いて盛大に式典を催すべきだという意見もあったが、やるべき仕事が山済みの中、時間と金のかかる“盛大な式典”とやらを開く気にクロノワはなれなかったのだ。

戴冠式において、クロノワは自分の手で冠を頭に載せた。

「戴冠式の際には、ローデリッヒ殿に冠を載せていただきたい」

そうお願いしていた軍務大臣ローデリッヒの死に様は、すでにクロノワも聞き及んでいる。新しい皇帝の頭に冠を載せるという栄誉を、クロノワが他の誰にも与えなかったことでローデリッヒの名前

は長く歴史に残ることになった。いわば最後の餞をやった形になるのだが、そんな小難しい解釈を抜きにしても、クロノワにしてみればもっと感情的な部分でローデリッヒ以外にその役をやらせる気にはなれなかったのだ。

皇帝の座についた後は、次に国政を行うための布陣を決めればならない。宰相で国務大臣を兼務していたエルストハージ・メイスンと軍務大臣であったローデリッヒ・イラニールはクロノワが皇帝になるまでの政変によって命を落としており、現在はそのポストが空いている。早急に、少なくとも三大臣の顔ぶれを決定しなければ、国を回すことはできない。

ローデリッヒにはアーバルクという名の息子がいた。クロノワはローデリッヒの働きに報いるために、その息子に父と同じ軍務大臣の地位を提示したのだが、アーバルクはこれを固辞した。

「軍務大臣の職責は実績のない者には重過ぎるもので、まして恩賞として誰かに与えるものではありません。大変光栄ではありますが、今私がその地位に就けば陛下の治世に悪しき前例を与えることになりましょう。それに、父も今の私では役者不足だと言うことでしょう」

どうかふさわしい方をお就けくださいとアーバルクはいい、そしてクロノワもそれを受け入れた。

「しかしそうなると……、困りましたね……」

クロノワは一人愚痴る。

モントルム総督時代にその補佐官を務めてくれたストラトス・シュメイルや首席秘書官であったフィリオ・マーキスをはじめとして、

クロノワの周りには若く優秀な人材が多い。彼らは信頼に足る人物ではあるが、若いということは反面経験が浅いことを意味しており、彼らを三大臣のような国家の要職に抜擢するには一抹の不安が残る。

悩んだ末、クロノワは問題を丸投げした。だれに丸投げしたかと言えば、外務大臣であったラシアート・シェルパである。

クロノワはラシアートを宰相に任じると、彼に三大臣の職責を全て兼務させた。しかしながら、いかにラシアートが有能であろうとも一人で三大臣の職責を全うすることなどできるわけがない。そこでクロノワは彼の下にストラトスやフィリオ、アーバルクといった有能な若手を数多く配置しラシアートが彼らに仕事を割り振れるようにした。

ラシアートに将来国を背負う若手の育成と監督をお願いしたのである。一面、かつてエルストハージが宰相として二人の大臣をまとめていたのと似ている。この体制は後に「ラシアート塾」と呼ばれ、彼が宰相職を退いた後も続き優秀な官僚を数多く輩出した。

人事の大枠も決まり、オルクスが帝都として機能し始めたころ、リリーゼ・ラクラシアが独立都市ヴェンツブルグから戻ってきた。

リリーゼはクロノワが帝位に付くまでの一連の政変の間、ずっとヴェンツブルグにいた。それは彼女が自発的に望んだことではなく、フィリオとラクラシア家当主で父でもあるディグスが共謀して彼女を半ば家に軟禁する形で止めたからであった。

当然、リリーゼとしては不満である。せっかく仕事にもなれ充実した生活を送っていたのに、大事なときに置いてきぼりをくらったのだから。

そんな不満と悔しさで一杯のリリーゼに声をかけて仕事を手伝わせたのが、アルジャーク帝国から派遣された九人目の執政官、オルドナス・バスティエであった。

聖銀（ミスリル）の売却益におけるモントルム総督府の取り分は一割であった。クロノワは総督であった頃にそのお金で五隻の帆船を買い、そして実際に運用させていた。実際に何をさせていたかというと、実験的な交易と種々の情報収集である。

ただクロノワは多忙であった。南方遠征軍の総司令官としてカレナリアに赴き、そしてそのまま政変に巻き込まれていった。この間、五隻の帆船の運用とそこからもたらされる情報の整理を行っていたのが、オルドナス・バスティエその人なのである。

厳密に言えば、これはヴェンツブルグの執政院の仕事ではない。クロノワがやり始めたことなのだから、モントルム総督府の仕事であろう。そこでオルドナスは総督府職員の身分を持つリリーゼに仕事を手伝ってもらったのである。

クロノワが皇帝となり、モントルム総督府という組織がなくなったこの節目に、オルドナスはまとめておいた情報を報告するため、仕事を手伝ってもらっていたリリーゼに使いをお願いしたのである。

帝都となったオルクスへ向かうリリーゼの心境は複雑であった。大事なときに遠ざけられてしまったことへの不満や怒り、またあそこで仕事ができるという期待と喜び、そして忘れられていたらどうしようという不安。様々な感情を抱きながら、彼女は皇帝の居城となったボルフィスク城へ向かったのである。

リリーゼは皇帝となったクロノワに直接謁見を申し込む、という無謀は流石にしなかった。彼女はまず以前に直接の上司であったフィリオに取り次いでもらい、オルドナスから預かった報告書を見せたのである。

「お久しぶりです、リリーゼ」

そういってフィリオは前と少しも変わらない笑顔をリリーゼに向けた。また一緒に仕事を頑張りましょうといわれ、忘れられてはいなかったとリリーゼは安堵した。

安堵すると、次は不満が顔を出してくる。父であるディグスと共謀してリリーゼを屋敷に軟禁してくれたのは、他でもないこの男なのだ。意思の力を総動員して表情筋を制御し、緩みそうになる頬を引き締めて精一杯“ツン”とした表情をして彼女は顔をそらした。フィリオが笑っていたところをみると、上手くはいっていなかったようだが。

「それじゃあ、報告書を見せてもらいますね」

そういうとフィリオは顔を引き締め、分厚い報告書を手に取り読み始めた。そのスピードは恐ろしく速い。たぶん全てを読んでいるわけではなく、重要と思える点を抜き出して読んでいるのだろう。

「こういうのを『渡りに船』と言うんでしょうかね……」

報告書を読み終えたフィリオは驚いたような、それでいて呆れたような声でそう呟いた。それからリリーゼのほうに真剣な目を向けてくる。

「これからこの報告書を陛下にお見せしようと思うのですが、リリーゼも一緒に来てくれますか」
「……わたしがお会いしても大丈夫でしょうか……？」

二つ返事で承諾することができず、リリーゼは少し俯いた。クロノワに最後に会ったとき、彼はまだモントルム領の総督であった。それが今や大国アルジャークの皇帝である。もはやはるか彼方の存在と言っていい。少し面識が有るだけの自分が、フィリオと一緒とはいえいきなり押しかけていいものだろうか。

「あの方はお変わりありませんよ。変わったのは肩書きだけです」

フィリオのその言葉に背中を押されて、リリーゼは持ってきた報告書を持ってクロノワの執務室へと向かった。

「お久しぶりです、リリーゼ」

部屋に入ってきた客人に懐かしい顔を認めたクロノワは、そう言って変わらない笑顔をリリーゼに向けた。その笑顔を見てリリーゼの緊張もようやく解ける。皇帝になってもクロノワは本当に変わっていなかった。

フィリオがかい摘んで用件を説明し、リリーゼに報告書を渡すように促す。彼女から書類を受け取ったクロノワは、さっそくそれに目を通し始めた。

読み進めるにつれて、クロノワの顔がだんだんと真剣な表情になっていく。所々質問を受けたが、オルドナスと一緒に報告書をまとめたリリーゼはそれに十分答えることができた。

「フィリオ、どう思いますか？」
「例の計画を一段階進めるのに足るかと」
フィリオの答えにクロノワは一つ頷く。それから彼はリリーゼのほうに視線を向けた。
「念のために聞いておきますが、リリーゼは再びこちらで働く、ということでいいのですよね？」
「はい、お願いします」
正直なところ、クロノワとフィリオの話には付いていけていない。しかし、それでもリリーゼはクロノワの問いに一瞬の迷いもなく答えた。
「分りました。では、以前と同じようにフィリオの下についてください」
期待しています、とクロノワはリリーゼに柔らかい眼差しを向けた。
こうしてリリーゼ・ラクラシアは彼女の望む舞台に再び戻ってきたのである。

第八話　王者の器？

「それでフィリオさん、『例の計画』って何なんですか？」

クロノワの執務室から退室し、少し歩いたところでリリーゼは前を行く男に問いかけた。話の流れから自分がその「例の計画」とやらに携わることになるのは分ったのだが、肝心の中身をまだ聞いていない。

振り返ったフィリオは、そういえばまだ話していませんでしたね、とバツが悪そうに頬をかいて苦笑した。

「まあ、立ち話もなんですし、話は部屋に着いてからにしましょう」

フィリオの執務室に戻ると、かつて総督府でやっていたようにお茶を入れるために部屋の隅に用意されていたティーセットのほうに向かった。その様子を見て、フィリオはなぜか苦笑している。

礼を言ってからリリーゼの淹れてくれたお茶を啜って喉を潤し、さて、と前置きしてからフィリオは話し始めた。

「リリーゼは“シラクサ”という名前に聞き覚えはありませんか」

「あります。確か大陸の南にある島の名前ですよね」

リリーゼがその名前を知っているのは当然のことだ。なぜならオルドナスと共にまとめた報告書の中にその名前が出てきたのだから。

「正確には港の名前です。もっとも最近では地域名としても使われていますけど」

エルヴィヨン大陸の南、というよりも大陸の南東に位置するテムサニスの南、といったほうが正確だろう。そこにローシャン島とヘイロン島という二つの島がある。ちなみにローシャン島の方が大きい。“シラクサ”は厳密に言えばそのローシャン島の北側に位置する港街の名前だ。この島から大陸に来る船はこのシラクサ港から来るためか、“シラクサ”という名前はこの二つの島をまとめた地域の名前としても知られている。

「今私がやっている仕事は、このシラクサをアルジャーク側に引き込むための準備です」

クロノワの野望、それは「世界を縮める」こと。では具体的にどう「縮める」のかといえば海運事業、つまり海上貿易によってである。

世界を自由に旅することはもはやできない。ならば世界中に船を走らせて人とモノと情報の流れを加速させる。それが、クロノワがイストに約束した「世界を縮める」ということであった。

シラクサはそのための海上拠点である。シラクサと大陸間の交易は、現在のところ決して盛んではなく、いわば海上に新規参入するクロノワにとって都合が良かったのだ。

「ただ、どういう形にするのか、それはまだ決まっていません」

併合してアルジャーク帝国に組み込むのか、はたまた独立都市ヴェンツブルグのように宗主権を認めさせた上で自治に任せるのか、あるいは通商条約的なものを結ぶのか、それはまだ決まっていない。しかしリリーゼが持ってきてくれた報告書のおかげで、必要として

いた情報が随分と揃った。

「近いうちに現地視察もできるかも知れませんね」

その時には恐らくリリーゼも同行することになるだろう。

「これから忙しくなります。お茶くみをしている暇はなくなりますよ？」

茶化すようなフィリオの言葉に、リリーゼは期待を膨らませるのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「さて、シラクサのほうはフィリオに任せておけばいいとして……」

来客が去り再びひとりになった室内でクロノワは独り言をもらした。そのまま立ち上がり、壁にかけてある地図のところへ向かう。その地図にはエルヴィヨン大陸とその南に位置する島々が記されている。かなり精巧なもので、もともとモントルムの国宝であったものの模造品（レプリカ）だ。地図において重要なのは現物の真贋ではなく、そこに記されている情報なので模造品（レプリカ）でも何も問題はない。むしろ変な気を使わなくていいので、使い勝手はこちらのほうがいいだろう。ちなみに本物は宝物庫に厳重に保管してある。

とん、と地図上のシラクサの位置にクロノワは指を置いた。そこから曲線を描きながら指を独立都市ヴェンツブルグまで動かす。

「やはりヴェンツブルグは遠い」

地図から離した手を、今度は顎のところへ持っていく。クロノワが考えごとをするときのクセだ。

「やはりカルフィスクが欲しいですね」

クロノワの視線が、地図上テムサニスの南端にそそがれる。

カルフィスクは大陸東部においては最大の貿易港だ。大陸の中心部、つまりこれまで文明の中心であった神聖四国から距離があるため規模としては十指にはもれるだろうが、その地形だけを見れば大陸でも五指に入るほど理想的な地理条件を満たしている。

ヴェンツブルグはヴェンツブルグで得がたい条件を満たしている。第一に不凍港の北限であり、また新帝都オルクスに最も近い港がヴェンツブルグだ。しかしここシラクサを直接結ぶのは机上の空論であろう。

「そういえばカレナリアはどうなっているのでしょう?」

遷都や戴冠などでゴタゴタしていたとはいえ、宰相のラシアートに任せっきりにして報告を聞いていない。

「少し話を聞いておきますか」

そういってクロノワは足取りも軽く執務室を後にする。どうやらこの新皇帝には臣下を呼びつけるという発想がないらしい。

「お呼びたていただければこちらから伺いましたものを」

突然執務室に現れた若い主君を、ラシアートは苦笑気味に迎えた。

「よいですか？皇帝たる者……」とお小言が始まりそうなのを察したクロノワは、彼にしては珍しく人の言葉を遮って用件を切り出した。

「今、カレナリアはどうなっていますか？」

「……カルフィスク、ですか。確かにシラクサから直接ヴェンツブルグでは距離が有りますからな。船乗りの心理としても、陸地が見えれば港に入りたいでしょうし」

流石はラシアートである。たった一言でクロノワの考えていることをほとんど全て洞察して見せた。もともとシラクサに関する計画はクロノワの肝いりとはいえ形式上は宰相ラシアートの管轄であり、彼がフィリオに割り振って仕事を任せるという形になっている。フィリオのほうから順次報告を受けていたのだろう。

「カレナリアのほうは残してきた文官たちが上手くやっているようです。大過なしとのことでしたので、宰相権限で当面の現状維持を命じておいたのですが……」

どうやら近頃の激務のせいで報告を忘れていたらしい。とはいえついさっきまで忘れていたクロノワも人のことは言えない。

「いえ、ラシアートがそれで問題なしと判断したのであれば、それでいいのです」

ラシアートは優れた政治家であり、くぐり抜けてきた修羅場と積み上げてきた実績の数と質において、クロノワのような若造は及びもつかない。ストラトスやアーバルクにとってそうであるように、ラシアートはクロノワにとっても教師のような存在なのだ。

「また頭の上がらない人が増えてしまいました」

冗談めかしながらクロノワはそうボヤいたことがある。とはいえそれは若造の宿命であろう。

「とはいえ問題はカレナリアではなくテムサニスのほうですな」

「ええ、カレナリアで特に問題が起こっていないというのなら、テムサニスの情報を集めてもらいたいのですが」

テムサニス国王ジルモンドが捕囚の身となってから、意図しなかったこととは言え随分と時間がたってしまっている。国王不在のテムサニスでなんらかの政変が起こっている可能性は低くない。少なくともジルモンドの身柄に関して、テムサニス側から何らかのアプローチが行われているはずだ。

「後で私のほうから情報収集を命じておきましょう」

「お願いします」

「報告はどうしましょうか。私のほうで一度情報を集約してからお伝えすることもできますが……」

「いえ、私も直接聞くことにします」

報告は「共鳴の水鏡」を使って行われることになるだろう。あの魔道具は双方向通信が可能だから、不明な点があれば質問をすることもできる。

「その時はラシアートも同席してください」

百戦錬磨の政治家である彼の意見は貴重だ。特に今回は、事と次第によっては軍を動かすこともありえる。判断を下す責任から逃れるつもりは毛頭ないが、助言者は多いほうがいい。

「承知しました」

ラシアートもすぐに承諾した。宰相と三大臣を兼務している身としては、隣国の近況は是非とも知っておきたい重要な情報であろう。

「アールヴェルツェ将軍にも話をしておいたほうがいいかもしれませんな」

アールヴェルツェは今、戦死したアレクセイ将軍の変わりにアルジャーク軍全軍の再編を行っている。

「そうですね。海軍の再編状況も聞いておきたい」

陸軍に限って言えば、アールヴェルツェに任せておけば何も問題はない。しかし海軍は完全に畑違いで、流石の彼も苦労しているという話を聞いていた。

それも仕方がない。もともとアルジャークには海軍という組織はなかったのだから。これまで海戦（と呼べそうな戦い）も国史上数えるほどしかなく、その際には陸軍の兵士を船に乗せて戦っていたという。そもそも地理的にみても大規模な港を造ることができる地形はアルジャークには存在しておらず、造ったとしても冬の間は凍りついてしまう。海に目が行かなくとも仕方がないであろう。

しかしこれからは違う。アルジャーク帝国はすでにヴェンツブルグと以南にあるカレナリアの港を全て手に入れている。これらの港は不凍港であり、つまり一年と通して使うことができる。アルジャーク帝国はこれまでとは比べ物にならない海上権益を手に入れたのであり、それを守るために海軍はどうしても必要なのだ。

ましてクロノワはこれから海上に進出しようというのである。海軍力の整備は必須であるといえた。

（まあアールヴェルツェには頑張ってもらいましょう）

仮にテムサニスを併合するという話になれば、当然かの国の海軍も再編しなければならない。そうなれば彼の仕事はさらに増えるであろう。そのことを承知しつつ、クロノワは無責任なエールを送るのであった。

「それと別の件なのですが……」

カレナリアとテムサニスの話が一段落すると、ラシアートは別の案件を持ち出した。どれもこれも重要な案件だ。いやこの時期、重要な案件しかないといってもいい。

版図拡大にともなう「共鳴の水鏡」の通信網の再整備。法制度の統一と必要箇所の改正。各地でばらばらになっている税率を一本化し、全ての国民が公正な裁判を受けられるようにしなければならない。

特に役人と軍の仕官の登用制度の改革は今すぐにでも着手しなければならない。

アルジャーク帝国の気風は実力主義である。名家名門と呼ばれるものは確かに存在するが、かといって国の中枢がすべてそこの出身者で独占されているわけではない。実際歴代の三大臣の中では、貧しいながらも苦学しその地位に上りつめた人のほうが多い。現在の宰相であるラシアートもそんな苦労人の一人である。

アルジャーク帝国において役人や軍の仕官になるには、そのための試験に合格しなければならない。試験は目指すべき位に応じていろいろと種類があるわけだが、全てに共通している点として、受験資格に一切の縛りがない。性別・年齢・出身地などが原因で、試験が受けられないということはがまずないのだ。

その結果アルジャークにおいては学問が盛んになった。あちらこちらで私塾や学校が開かれ、国としてもそれをバックアップするための制度が整えられている。またこうして根付いた「学ぶこと」への意識は、政治や軍事だけに留まらずさまざまな分野において結実しているのである。

国としても有能な人材を数多く確保できるし、加えて他の分野の発展はそのまま国の発展にも直結している。アルジャークを強国たらしめている一つの要因であろう。

だがオムージュやモントルム、カレナリアといった新しく併合された国においては、多くの場合そうではない。それらの国では政治や軍事に関わり、また動かすことができるのは貴族と呼ばれる一部の特権階級だけであり、教育を受ける特権は彼らに限定されるのが普通であった。一般の庶民は親から簡単な読み書きと計算を教わるだけで、学校に通うことはほとんどない。そもそも庶民が教育を受けるための制度がまったくないのが現状である。

無論、アルジャークとて全ての国民が十分な教育を受けられているわけではない。しかし国民の教育に対する認識の高さはこの時代大陸でもトップクラスで、立身出世を目指す志の高さがこの国の根底を支えていた。そしてその意識を支えているのは、間違いなく国の教育と仕官登用のための制度であった。

クロノワはこの制度を広大になった版図全体に広げるつもりでいる。成果が現れるのは五年先か十年先か、それは分らない。しかしやらねばならないとクロノワは決意していた。

「征服者が被征服民に対して無責任であっていいはずがない」

それは民に対する責任でもあるし、歴史に対する責任でもある。簡単に言ってしまえば、クロノワはそこで暮らしている人々に対して何かを残したいのだ。アルジャーク帝国が崩壊し、治める国の名前が変わってもそこに根付いて残るような何かを。

「少なくともこの時期に併合したのがアルジャーク帝国であってよかった」

そう言ってもらえるような何かを。そして教育とそれに対する意識は、その「何か」足りえるのではないだろうかと思ったのだ。人の生まれは不平等だ。しかしせめてつかむことのできるチャンスは平等であると一人一人が考えられるような、そんな気風と理念を残してみたいのだ。

もちろん実施すべき政策はこれだけではない。他にも重要な案件が山のようにある。そのなかで優先順位を定め、そして人材と予算を割り振っていかなければならない。しかしこれはやる価値のある仕事だろう。国としても広く有能な人材を集めることができるし、学問が盛んになればこの国はさらに発展していける。

（これも一つ、私の野望かもしれませんね……）

クロノワとしての野望が「世界を縮める」ことだとすれば、教育

と仕官登用制度の改革は皇帝としての野望になるかもしれない。そんなことを頭の片隅で考えながら、クロノワはラシアートと案件を詰めていくのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カレナリアからの連絡が入ったのは、ラシアートと話をしてから三日後のことであった。報告すべき事柄をこの短時間で調べ上げることはできないであろうから、あらかじめカレナリア側で情報を収集していたことが窺える。どうやら仕事をサボっていたわけではなさそうだと、クロノワは満足した。

「端的に申し上げると、テムサニスは今混乱の最中にあります」
「それは内戦状態、ということでしょうか」
「いえ、そうではないのですが……」

「共鳴の水鏡」の向こう側で、文官が言いよどむ。その様子は言いづらいことがあるというよりは、適切な言葉を探している風だった。

「では、ことの最初から説明してくれ」

一緒に話を聞いていたラシアートがそう助け舟を出すと、その文官はほっとした様子を見せ「分りました」と答えてから説明を始めた。

「クロノワ陛下が本国にお戻りになってから、捕虜にしたジルモンド陛下の身柄のことでテムサニス側からたびたび接触がありました」

とはいえ自分たちだけでそんな大それた交渉を行うわけにもいか

ないから、のらりくらりと返事をはぐらかしておいたという。

「それがあるとき、接触が止みました。不審に思い調べてみたところ、第二王子のゼノス殿下が第一王子のフェレンス殿下と王妃エルセベート陛下を殺害し、クーデターを起こしていました」

そしてゼノスは即位を宣言し、そのままルーウェン公爵との内戦に突入した。ちなみにアルジャーク帝国はジルモンドこそがテムサニス王だという立場なので、ゼノスの即位は認めないという方針でいくことになる。

「では、今はその内戦が継続中、ということか」

「いえ、ルーウェン公爵は最初の戦いで戦死しており、公爵の派閥の貴族たちも多数戦死しております」

つまり、ゼノスに反抗する勢力は現在テムサニスには存在しない。では混乱の原因は何か。

「ゼノス殿下が、敵対した貴族の領地を襲っているのです」

「なんと愚かな……！」

ラシアートが非難の声を漏らした。わざわざ「領地を襲っている」というふうに言葉を選んだのだから、敵対貴族の粛清以上の事がそこで行われていると考えていいだろう。

クーデターを起こして肉親を排除し内戦に勝利したゼノスは、今やテムサニス国内における最有力者である。アルジャーク帝国はまだ認めてはいないが、名実共に王になったといっていい。それなのに王となったはずの彼は、治めるべき土地と民を自らの手で虐げ、新たな秩序を作り上げるという責任を果たそうとしない。そんなゼ

ノスに対して、クロノワも個人としては憤りを感じる。

「好機、でしょうね……」

だが今は皇帝として判断を下す。混乱が広がり、新秩序がいまだ築かれていない今の状態は、派兵を行いテムサニスを完全に併合してしまう好機といえる。

「ご苦労様でした。引き続きテムサニスの情報を集めてください」

報告を行っていた文官が「共鳴の水鏡」の向こう側で頭を下げるのを認めてから、クロノワはラシアートをともないその部屋を出た。

「軍を動かすおつもりですか」

廊下を歩いていると、ラシアートがそう尋ねた。

「ええ、そのつもりです。あなたはどう思いますか？」

「……テムサニスは隣国です。こちらがどう動くとしても、かの国の動向と無関係ではいられません」

ラシアートは少し言葉を濁した。アルジャークにおいても新体制はいまだ本格的には動き出していない。今は国内を固めるのに徹する時期だと彼は思っている。ましてや前皇帝ベルトロワの時代から遠征が相次ぎ、ラシアートなどからすれば少しやりすぎに感じていた。しかしだからといって対岸の火事を放っておけば、いつこちらに飛び火してくるかも分らない。現に土地を捨てたテムサニスの民の一部は難民となって国境を越え、カレナリアに逃れてきている。これは放置しては置けない問題である。

軍を動かすことに積極的に反対する気はないが、かといって諸手を挙げて賛成もできない。それが、宰相ラシアートが言葉を濁さねばならない理由であろう。

ただ皇帝であるクロノワがやる気である以上、軍は動かすことになるのだろう。ラシアートも積極的に反対する理由がない以上、この方針を支持することになる。

「なんにせよ、もう一度アールヴェルツェ将軍に話をしておいたほうがよろしいでしょう」

ラシアートの言葉にクロノワも頷く。アールヴェルツェには「軍を動かす事態になるかもしれない」という話をすでにしてある。しかし今日の報告を聞いて、ほぼ確実に軍を動かすことになった。ならばアールヴェルツェにはそのための準備をしておいてもらわねばならない。

クロノワはそのままアールヴェルツェのところへ足を伸ばすことにした。またお小言をもらいそうな気もするが、最近は執務室にこもりっぱなしでどうにも運動不足なのだ。

「少し意外ですな」

近々軍を動かすことになる、という話を伝えるとアールヴェルツェはそうもらした。

「陛下は内政を重視されると思っておりましたので」

即位早々遠征を行うことになるとは、思っていなかったという。

「欲しいものがありますから」

クロノワがそう答えると、アールヴェルツェは「ほう」と呟き軽く目を見張った。以前は軽々しくそのようなことを言うことはなかった。いや、できなかった、といったほうが正しいだろう。よくよく観察してみれば、クロノワの表情は以前よりも柔らかい。仕事は激務のはずだが、どこか余裕が感じられる。

（解放された、ということか）

日陰者の第二皇子という立場、そして降りかかる悪意と中傷と迫害から。精神的な余裕が表情にも表れているのだろう。追い詰められていた頃のクロノワを知っているアールヴェルツェとしては、感慨深いものがある。

「ところで陛下、もしやと思いますが、今回も親征されるおつもりですか」

「ええ、そのつもりですが」

クロノワは当然といわんばかりに答えたが、それを聞いたアールヴェルツェは途端に眉間にシワを寄せ、これみよがしに盛大なため息をついた。その否定的な反応に、クロノワは思わずたじろぐ。

「な、なんですか……」

「陛下、それだけはお止めください。今陛下の御身にもしもの事があればこの国はどうなります？今は国にとっても御身にとっても大切な時期。親征はご自重ください。よろしいですね？」

「そんな、大げさですよ……」

「よろしいですね！？」

アールヴェルツェの剣幕に、クロノワは思わず頷いてしまう。言質を取って満足したらしいアールヴェルツェは晴れやかな表情だが、それとは対照的にクロノワは疲れたような、それでいて恨めしいような、そんな顔をしている。

どうにも頭の上がらない人間が多い新皇帝であった。

第八話　王者の器？

「お久しぶりです。ジルモンド陛下」
「そうですな、クロノワ殿下。……いえ、もはや“陛下”とお呼びすべきでしょうか」

通信用魔道具「共鳴の水鏡」の向こう側に映るその男は、以前に会ったときよりも幾分やつれたようにも見えた。クロノワとジルモンドがこうして言葉を交わすのは、カレナリアで顔を合わせて以来のことである。二人の関係に大きな変化はないが、その二人を取り巻く世界においては、変化は常に起こっている。

「お国の様子はすでにお聞きになられましたか」
「……昨日、窺いました」

ジルモンドの声は苦い。それも当たり前だろう。自分が異国の地で捕囚の身となっている間に、祖国では妻と長男夫婦が殺害され次男が王位を簒奪したのだから。しかもその新王は各地で自国を略奪している。これまで積み上げてきたものが、一気に崩れたようなものである。

ジルモンドは、少なくとも暴君ではなかった。それどころか内政における彼の評判は高い。自らの国を痛めつけそこから搾取を繰り返したとしても、長期的に見れば得るものはなにもないとわきまえていたのである。国民を愛し労わる、というほどに力を注いでいたわけではないが、土地が荒れることのないよう治水を行い、穀物の生産量が増えるように開墾を奨励した。

民が安定した生活を送れるということは、国にしてみれば安定し

た税収が入るということである。為政者の思惑は生々しいが、民にしてみれば平穏な生活を送れさえすればそれでよいのだ。

が、それをゼノスが全て無駄にしてしまった、と言っていい。各地を襲い略奪を繰り返しているゼノスは、ジルモンドが築き上げてきた国の基盤を破壊してしまったのだ。まったく、積み上げるのには長い年月がかかるが、壊すのは一瞬である。

ジルモンド個人としても、状況は最悪と言っていい。ゼノスが名実共にテムサニス国王であったがゆえに、一応の身の安全は保障されていた。無論、人質として使うためである。だが今の彼に人質としての価値は存在していない。

これまではテムサニス国王であったがゆえに、一応の身の安全は保障されていた。無論、人質として使うためである。だが今の彼に人質としての価値は存在していない。

帰る国を失い、さらに生かされておくための理由も失いもはやいつ殺されてもおかしくはない。それが今のジルモンドの状況である。

さらに彼と一緒に捕虜になった、十万以上のテムサニス兵にとっても状況は良くない。国王であったジルモンドでさえ見捨てられたのである。ゼノスが彼らを気にかけてくれる保障など、どこにもない。もちろん見捨てられたと決まったわけではないだろうが、それは希望よりは願望に近い気がする。

「このままにしておくおつもりですか?」

「捕らわれのこの身に、一体何ができましょう?」

ジルモンドとて、できることならば今すぐに国に戻りたい。「馬鹿なことは止めろ」とゼノスを一喝してやりたいのだ。だが捕らわ

れのこの身には気をもむ以外、なにも許されてはいない。

「近く、アルジャーク帝国はテムサニスに軍を差し向けることになります」

「それは……！」

クロノワの言葉にジルモンドは焦ったような声を漏らした。ほとんど実態を失っているとはいえ、彼はテムサニスの王である。面と向かって自分の国を侵略するといわれては、動揺を隠し切ることはできなかったようだ。様々な事態や可能性が彼の脳裏に浮かんでは消えていく。だがしかし、ジルモンドの思考はクロノワの次の言葉で一瞬にして停止することになる。

「協力していただけませんか」

「……は？」

今、この若い皇帝はなんといった？

「これから行うテムサニス遠征に、陛下のご協力を賜りたい」

そういってクロノワは満面の笑みを浮かべた。しかしジルモンドはその笑顔が業務用であることをすぐに直感する。そしてその直感が、彼の思考を再起動させた。

「……どういう、ことでしょうか」

「言葉通りの意味です。カレナリアで捕虜になっているテムサニス軍を率いて、遠征に参加していただきたい。ご協力いただければ、王都ヴァンナークを中心に五州を差し上げるつもりです」

クロノワの言葉にジルモンドは、動揺はしなかった。代わりに彼

の内側に沸きあがるのは怒気であった。

「一国の王を傭兵扱いし、あまつさえ我が子を討てと申されるか！」

「その通りです」

クロノワは業務用の笑みを消し、ジルモンドの怒りの眼差しを真正面から受け止めた。はっきりと肯定の返事を返され、むしろジルモンドのほうがたじろぐ。その光景は、そのまま二人の力関係を表しているようであった。

客観的にみれば、この申し出はジルモンドにとって利のある話である。

この状況でゼノスがテムサニス王の称号を名乗るということは、彼がジルモンドを見捨てたとみてまず間違いない。新テムサニス王が旧テムサニス王のためにアルジャークと交渉を行うことはまずありえず、そうなればジルモンドは祖国に戻ることもかなわず、このまま死ぬまで捕囚の身分である。しかもその捕囚の身分すら危ういもので、この先状況が変化すればいつ殺されてもおかしくはない。ほとんど身から出た錆とはいえ、辛い状況であろう。

しかし遠征に協力すれば祖国に戻ることができ、しかもわずか五州とはいえ自分の手元に残る。今状況下で考えれば、むしろ僥倖であるとさえ言える。

無論、クロノワにはクロノワの思惑があろう。国を荒らしている新王ゼノスをテムサニスの民が快く思っているはずがなく、そこに内政では評価が高かったジルモンドが現れれば民は遠征軍を歓迎するだろう。侵略者ではなく解放者として受け入れてもらえるのだ。その上ジルモンドが王旗を掲げて先頭に立てば、新王軍の兵士たち

は戸惑いその士気は下がるだろう。

しかしジルモンドが協力しなければしないで、アルジャークには単独でも遠征を成し遂げるだけの力がある。アルジャークの版図は今や二八三州。テムサニスの版図は六六州であるから、その国力差は四倍以上である。ましてテムサニスは今混乱の最中にあり、大きな隙を見せていると言っていい。

「もし協力はしない、と言ったらどうなさいますか……？」

「その時はアルジャークだけで遠征を行うことになります」

クロノワの返答は予想通りのものであった。アルジャーク単独でも遠征を決行できるのだから、遠征協力の打診はむしろクロノワの譲歩であるともいえる。そのことを承知しているジルモンドは苦慮の色を浮かべた。

先ほど彼は「我が子を討てと言うのか」と吼えた。しかしその我が子であるところのゼノスは簒奪者である。そう考えれば、ゼノスを討つことに否やはない。王位や帝位に関して肉親が争うという事例は歴史書の中に数多く記録されており、そのことを知っているジルモンドは息子を討つことにそれほどの忌諱は感じない。

「誰かがやらねばならぬのなら、私がやる」

ジルモンドの心情を言葉にして表現すれば、これが一番近いであろう。実態を失ったとはいえ彼はテムサニスの王である。王としては国と民に対して責任があり、父親としては子供に対して責任がある。その責任を果たした上で手元に五州が残るのであれば、それはやはり僥倖というべきだろう。

では何が彼の決断を妨げているのかといえば、それは“矜持”であった。

繰り返しになるが、今の彼は捕囚の身である。戦いに敗れ最大限の屈辱を味わっているといっていい。より具体的に言えば軟禁されている身の上で、軍を指揮して国を取り戻すどころか自身の自由さえままならない。

そんな彼にクロノワは協力を要請し、あまつさえ報酬さえ出すという。

そもそも捕虜にしたテムサニス軍の力を使いたいなら、ジルモンドを人質にして言うことを聞かせればいいのだ。そうすれば五州を支払うまでもなくテムサニスは丸ごとアルジャークのものになる。いや、それ以前にテムサニス軍を使う必要性さえ希薄だ。アルジャークには単独でも遠征を成功させるだけの力があるのだから。

だから、今回の申し出はクロノワの一方的な譲歩、いやもはや善意とさえ言っていい。情けをかけられた、と言い換えることもできるだろう。そしてそれを受けるということは、ジルモンドにしてみればクロノワに縋ることを意味している。

一国の王が、隣国の皇帝に縋るのである。それはもはや膝を屈することと同義だ。受けたが最後、ジルモンドはもはやクロノワと対等の関係にはなれないであろう。

国を追われた王が隣国の皇帝に助けを求めるのであれば、まだ面子は保てる。その協力に対して対価を支払う側であるからだ。しかし今回は報酬を支払うのもクロノワの方である。

もはや面子も何もあったものではない。

ジルモンドの王としての矜持はクロノワの提案を必死になって拒否している。膝を屈し誇りを捨てたったの五州だ。それでいいのかと問いかけてくる。

一方で頭の別の部分にある打算はこう囁く。こままでは全てを失い無念のうちに死ぬことになる。ここで協力して五州を得ることと矜持を貫き身ひとつで果てること。後の歴史家たちは、どちらの選択を愚かとするだろうか。

ジルモンドの中で天秤が揺れている。その天秤が徐々に傾いていくのを、クロノワは何も言わずに見ていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これで良かったのでしょうか……」

ジルモンドは結局、クロノワの申し出を受け入れることになった。その結果を聞いたラシアートは、少し不安げな表情を見せた。

「確かにジルモンド陛下が陣頭に立たれれば、単独でやるよりも遠征は早期に終結できるでしょうが……」

代わりに帝国内に自治領という一種の治外法権が存在することになる。自治によって治めているといえば独立都市ヴェンツブルグもそうだが、五州分の領地と一都市では規模と影響力が段違いである。

ここ最近で急激に版図を拡大させたアルジャーク帝国は、今脱皮の時期にあるといえる。脱皮を終え、国家としての成熟を深めてか

ら自治領が生まれるのであれば、ラシアートも不安に思うことはない。

しかし今は国の体制を急ぎ整えている最中である。混乱の五歩ほど手前にいるこの状況で国史史上初めての自治領ができれば、事態は自分の能力を超えるのではないかとラシアートは懸念していた。

時間はかかるかもしれないが、遠征自体はアルジャーク軍単独でもやり遂げることができる。ならばわざわざジルモンドを担ぎ出す必要はなかったのではないだろうか。

「領土拡大が最大の目的ではありませんから」

クロノワの最大の目的は、大陸東部で最大の貿易港カルフィスクを手に入れることである。カルフィスクは港であるから当然海、しかも南側の海に面している。つまりアルジャークがカルフィスクを手に入れるためには、テムサニスの国を南北に横断しなければならず、それは完全な併合を意味していた。

極端なことを言えば、クロノワはカルフィスクを手に入れるついでにテムサニスも併合するつもりなのである。いや、テムサニスを併合しなければカルフィスクが手に入らないから遠征をする、といったほうが正確かもしれない。

しかし、そうやって手に入れたカルフィスクが灰燼に帰した瓦礫の山では、なんの意味もない。クロノワが欲しいのはカルフィスクという港であって、カルフィスクという名前を持った土地ではないのだ。

戦いが長引けば、それだけテムサニスの国土は荒廃する。町々は

焼かれ、農地は荒れるだろう。最南部にあるカルフィスクは主戦場からは遠いが、影響をまぬがれるという保証はない。クロノワにはその港を焼く気など毛頭ないが、ゼノスはどうか判断が付かない。まともな為政者ならば自国の町を焼くなどという愚行は決してしないと信頼できるが、少なくとも今現在ゼノスがやっていることはまともではない。

短期決着が望ましい。クロノワの頭がそう結論をはじき出すまで、そう時間はかからなかった。

ではどうやって短期決着を実現させるのか。そこでクロノワが目をつけたのが、テムサニス国王ジルモンドであったのだ。

ジルモンドが王旗を掲げてテムサニスに帰還すれば、ゼノスとしては捨て置けまい。ゼノスにとって彼は自分の王位を脅かす最大の敵だ。必ず排除しようと動く。

またゼノスが前線に出てくる可能性も高くなる。

テムサニスの王旗を掲げる手にと相対せば、新王軍の兵士たちが戸惑うのは目に見えている。その混乱と士気の低下を防ぐためには、ゼノス自身が王旗を掲げて前線に出てくるしかない。

「我の掲げる王旗こそ正当なり」

と主張するしかないのだ。

そしてゼノスが前線に出てきさえすれば、彼を討ち取ることも容易になるだろう。そしてゼノスさえ討ち取ればこの戦いは終わる。クロノワの望む短期決着である。

簡単に言えば、クロノワはゼノスを誘き出すためにジルモンドと

いう“餌”を用意したのである。

「まあ、短期決着は私としても望むものですが……」

どの道、クロノワとジルモンドの間で話がついた以上、この件は確定事項である。泥沼化による戦費拡大を避けられるならば、それでよしとしてもいいだろう。

「どうかしましたか」

「いえ、何でもありません」

そう言いつつもラシアートは苦笑を浮かべている。それは教師が生徒に向けるような苦笑であった。

（変わられたな……）

以前のクロノワは自分の欲望を表に出すことなど決してなかった。悪く言えば、ここまで能動的に動くことはなかった。

（とりあえずは良い変化だな……）

無私無欲の世捨て人に、国は動かせぬ。欲をもつ身だからこそ理想を目指すのだ、とラシアートは思っている。

しかしやっかいなのはその欲望の制御が利かなくなったときだ。制御できない欲望は、それを抱く者と彼に連なる全てのものを破滅に叩き込むだろう。

（そうさせないために、私たちがいる）

自分の仕える若き主君は、諫言を受け入れるだけの器を持っている。ラシアートはその評価に、訂正の必要を感じていない。

第八話　王者の器？

テムサニス遠征のためにクロノワが動かしたアルジャーク軍は九万であった。この中には補給を担う後方部隊などは含まれていない。

この九万の軍勢を大雑把に分けると、三人の将軍が三万ずつ率いている。その三人の将軍とは、レイシェル・クルーディ、イトラ・ヨクテエル、カルヴァン・クグニスの三人である。この三人は皆同年代で、将来のアルジャーク軍を率いていくであろう俊英たちである。

最近の遠征の際には必ず軍を率いていたアールヴェルツェは、今回帝都オルクスに残っている。今頃は紙の束を相手に奮戦していることであろう。

今回動かしたこの九万の内、ジルモンド王率いるテムサニス軍と共にテムサニスに赴くのはレイシェルとイトラが率いる六万で、カルヴァン率いる残りの三万はカレナリアのベネティアナで留守居役となり、援軍が必要になった場合真っ先に駆けつけることになる。

またカルヴァンはある重要な書類をベネティアナまで運ぶ任務を任されていた。その書類はクロノワとジルモンドが今回の遠征に関して合意した、いわば「契約書」とも言うべき書類である。

書類は同じものが二通用意されており、どちらにもすでにクロノワのサインと印が入っており、後はジルモンドのそれを入れれば契約書は効力をもつ。

書類の一通はジルモンドが保管するが、もう一通はクロノワが持

つことになる。

ベネティアナにはベルトロワ危篤のほうを受けたクロノワが北に戻る際に残していった南方遠征軍五万が駐留しているが、この部隊は長らく異国に駐留していたことを考慮し、カルヴァンの部隊が到着し次第故郷に帰還することになっている。そのため、この部隊は今回の遠征には参加しない。

そこで、この帰還部隊の指揮官がその一通をクロノワのところまで持ってくる手筈になっていた。

さて、アルジャーク軍はとりあえず六万の兵を出したわけであるが、ジルモンド率いるテムサニス軍は総勢でおよそ十二万となった。彼らはカレナリアで捕虜になっていたわけだが、クロノワの命令もあってかその扱いは人間味のあるもので、栄養不良や暴力によって衰弱している者はほとんどいなかった。さらにクロノワがジルモンドとの間で合意に至った時点で彼らは捕虜ではなく同盟軍という扱いになり、アルジャーク軍が到着するまでの間、十分に英気を養うことができた。

長らく離れていた祖国に帰れるとあってか、彼らの士気は高い。またクロノワはテムサニス軍の兵士たちにも報酬を与えることを約束し、また特別に手柄を立てた者にはそれに応じた恩賞を与えることも確約した。

二つの国の兵たちを対等に扱う、とクロノワは表明したのである。将来のことを見越していたのかは定かではないが、これによって少なくともテムサニス軍の一般の兵士たちのうけは良くなった。

遠征軍の総数は十八万であり、その内訳はアルジャーク軍六万、

テムサニス軍十二万である。余談になるが、この先この軍のことは遠征軍とは呼ばず、連合軍と称することにする。

内訳から分るとおり、連合軍の三分の二はテムサニス軍が占めている。テムサニス軍を率いるのは国王のジルモンドでありクロノワは今回新征しないから、アルジャーク軍のほうが少し遠慮したともいえる。

ただ、連合軍内部における発言力は、この内訳に比例しない。

こういった場合、普通であればより多くの兵を出した国が連合軍の主導権を持つことになる。しかし今回の遠征に関して言えば、その主導権はジルモンド側ではなくクロノワの方にあった。

考えてみれば当然のことである。確かにテムサニス軍は十二万の戦力を持っているが、兵士の数が揃えば戦争ができるわけではない。その十二万人の兵士たちを支える後方支援部隊が、より広く言えば軍隊を支えるための国力が必要なのである。

つい最近まで捕虜になっていたテムサニス軍には、それがまったく存在しない。戦力はあるがそれを持続させるための地力がない、といってもいい。そしてその地力の部分を、彼らはアルジャークにまったく依存しているのである。

さらにジルモンドには、自軍の兵士たちに報酬を約束することができない。彼が今もっているのは国王の称号だけで、それに付随するはずの富と権力の全てをゼノスに奪われているのだから。

誰だって、無報酬で命を賭けたくはない。

したがって報酬と恩賞を約束するのもアルジャーク側、ということになる。加えてジルモンド自身、クロノワに報酬を約束してもらっている身である。

後方支援と兵士の報酬、その二つをアルジャークに依存しているテムサニス軍は、国軍というよりは傭兵と言ったほうが、その実情を正しく表現できるかもしれない。そして傭兵の立場が雇い主よりも低くなるのは、当然のことである。

今まさに行われている軍議は、その力関係を如実に表しているようであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アルジャーク帝国皇帝クロノワの名でテムサニスに対して宣戦布告が行われた後、カレナリア領とテムサニスの境を越えた連合軍は、街道上を王都ヴァンナークに向かって進んだ。

この連合軍は三つの旗を掲げている。一つはアルジャークの国旗、もう一つはテムサニスの国旗、そして軍の先頭を行くジルモンドの傍には王旗が掲げられている。

連合軍は街道上を特に急ぐこともなく進んでいる。その目的は宣伝である。つまりテムサニスの国民に対して、

「ジルモンド国王は健在である」

とアピールしているのである。

そのおかげか、これまでの住民たちの反応は協力的で、連合軍は順調に歩を進めることができていた。時には住民たちが食料を差し入れてくれることもあり、それを見たイトラなどは、

「ジルモンド王は国民に慕われておられるのだな」
と感心したのだが、彼の同僚であるレイシェルに言わせれば、
「ゼノス殿下のやりようがひどいだけだ」
ということになる。

どちらの意見が正しいにせよこれまでの行程を見れば、「ジルモンドを先頭に立てることでテムサニス国民の協力を得る」というクロノワの狙いは当たったといえるだろう。

さて、ジルモンドの傍に翻る王旗を見たのは、なにもその周辺の住民たちだけではなった。国境付近を監視していた新王軍の斥候たちもその旗を確認し、ゼノスに報告を持ち帰っていた。

父であり先王のジルモンドが帰還したことを知ったゼノスはすぐさま行動を開始した。一つの玉座に二人の王はいらぬ。ジルモンドを排し一つしかない玉座に座るただ一人の王となるため、ゼノスは軍を率いて街道を北上した。

この新王軍の動きを、連合軍もすぐに察知した。各地に放っていた斥候が新王軍の動向を伝えると、すぐさま軍議が催された。

軍議の出席者は十八名である。しかし机の上におかれた地図を囲むようにして席についているのは、その内の七人だけであった。

イトラ・ヨクテエルとレイシェル・クルーディというアルジャークの両将軍。テムサニス国王ジルモンド。そしてテムサニス軍の将軍が四名である。他の十一人はそれぞれの上官の後ろに立って控えている。

数の上ではテムサニス側のほうが多い。しかし主導権を握ってい

るのはアルジャーク側の二人であった。

「それでは本作戦について説明させていただきます」

そう言ってから立ち上がったのはレイシェルであった。彼は地図の上に白と黒の駒を置き、白の駒についてはそれを三つに分けた。

白の駒は味方を表しており、三つの集団はそれぞれ主翼、右翼、左翼を表している。主翼を構成しているのはテムサニス軍十二万で、両翼はアルジャーク軍が三万ずつである。

一方、黒の駒は敵である新王軍を表している。斥候の報告によれば、その数はおよそ十二、三万。詳しい陣形は把握していないので、黒の駒については一纏めにしてある。

余談になるが、こうして地図上で駒を動かし各部隊の動きをシミュレートするやり方を最初に始めたのは、かのアレクセイ・ガンドールであった。それまでは地図上に書き込んで動きを再現していたのだが、駒を使うとその理解度が格段に上がったという。また、万が一地図を奪われても、そこには何も書き込まれていないので、作戦が露見することも避けられる。

レイシェルの作戦を一言で要約すれば、

「街道の左右にあらかじめ兵を伏せておき、そこに敵を誘い込んで挟撃する」

というものであった。

言うのは簡単だが、この作戦はなかなか難しい。敵の進路を予測して部隊を伏せておくわけだが、敵がこちらの思うように動いてくれる保証はなく、ともすれば左右に分けた軍を各個撃破される危険

が付きまとう。

そこでレイシェルはゼノスが確実に食いつく餌を用意した。その餌の名前は、ジルモンド・テムサニスという。彼とその王旗を見れば、ゼノスは必ずや喰いついてくる。

「主翼はこのまま街道上を南下。敵軍と接触した後、来た道を引き返して両翼が伏せている地点まで敵を誘導してください」

そういいながらレイシェルは地図上の駒を動かしていく。

これならば敵の進路の予測は容易である。敵軍は撤退する主翼を追ってくるから、相手の進路をこちらで決めてやることができる。さらに、実際には街道上を撤退するわけだから、両翼も待ち伏せがしやすく、後ろを取られるなどという間抜けな事態も避けられるだろう。

「敵を十分にひきつけた所で両翼が左右から挟撃。この時点で主翼も攻勢に転じてください」

地図上では白の駒が黒の駒を半包囲している。両側面を強襲されれば敵軍は混乱する。ここまでくれば、後は煮るなり焼くなり好きにできるといっていい。ここでは半包囲にとどめておいたが、上手くいけば完全に包囲してしまうことも、あるいは可能かもしれないとレイシェルは考えていた。

「いかがでしょうか」

説明を終えたレイシェルは一同を見渡した。すぐに発言をもとめる者はおらず、議場は沈黙した。そしてその沈黙は一秒ごとに重さを増していく。

「……主翼の……」

その沈黙を破り、重い口を開いたのはテムサニス軍の将軍の中で最年長である、ギルニア・フォン・フーキスだった。彼は一度言葉を切り、視線をレイシェルのほうに向けてからさらに続けた。

「……主翼の負担が大きすぎるのではないか」

「ですがこれが最善の配役であることは、ご理解いただけるかと」

レイシェルは何も、負担の大きな役回りを恣意的にテムサニス軍に押し付けたわけではない。敵の数が十二、三万であるというならば、単独で拮抗できるのは主翼だけである。主翼が競って牽制していればこそ、比較的数の少ない両翼が自由に動けるのである。それにジルモンドのいない部隊が動いたとしても、囮としては役者不足であろう。

「しかし、な……」

発言したギルニアは納得のいかない様子で腕を組み、そして再び沈黙した。論理的な反論が出ないところを見ると、彼もこれが最善の配役であると理解はしているのだろう。しかし納得し切れていない。その証拠に、彼の目には疑心暗鬼の色がある。いや、彼だけではない。ジルモンドをはじめ、テムサニス側の人間全てがその色を浮かべていた。

アルジャークの人間で、それに真っ先に気づいたのはイトラであった。そして彼はすぐにその理由にも思い至る。

「レイシェル、その囮役は俺たちでやろう」

議場の思い雰囲気を吹き飛ばすように、イトラはそう言った。ジルモンドやテムサニス軍の将軍たちは虚をつかれたように顔を上げ、レイシェルは怪訝な表情を浮かべる。

「イトラ……」

「俺たちなら撤退戦の経験もある。上手くやれるさ」

言うまでもなく、カレナリア遠征の際にベニアム・エルドゥナス率いる部隊を相手にしたときのことである。あの時は倍近い敵を相手に撤退戦を演じたが、今回も両翼合わせて六万に対し敵軍は十二、三万であるから、同じような状況といえる。

確かに経験と実績があることは無視できない。レイシェルは一瞬考え込んだが、しかしすぐに否定の言葉を口にする。

「駄目だ。王旗がなければゼノス殿下は喰いついてこない」

王旗、とレイシェルは言葉を選んだが、要はジルモンドのことである。彼がいればこそゼノスは全力で囮を追ってくると予測できるのだ。

それにアルジャーク軍六万のみが単独で街道を南下していれば、敵にすればそれは分隊に見えるだろう。そうなれば本隊つまり主翼の動向を気にして、撤退する両翼を追ってこないことも考えられる。

「ですから、ジルモンド陛下には我々と一緒に来ていただきます」

イトラは視線をレイシェルからジルモンドに移しこともなさげにそう言った。その言葉に反応したのはレイシェルでもジルモンドで

もなく、ギルニアを始めとするテムサニス軍の将軍たちであった。

「馬鹿な！」

「駄目だ！そんな策は認められない！」

ジルモンドがテムサニス軍を離れアルジャーク軍と行動する。それは彼らにとって主君を人質に取られるようなものである。過剰な反応もするというものだ。しかしそのことを十分に承知しているはずのジルモンドの反応は違った。

「……よかろう」

「陛下！？」

まさか本人が了承を示すとは思ってもみなかったテムサニス軍の将軍たちは、皆焦ったような声を漏らし一様に主君を仰ぎ見た。彼らはそれだけはやめるよう促したが、ジルモンドの決意は固い。

「レイシェル殿もそれでよろしいな？」

「……分りました」

話の流れ上、了解するしかない。その後、各部隊の配置や動きを再確認して軍議はお開きとなった。

「イトラ、さっきのアレは何だ」

自陣に向かって歩き、周りに人がいなくなったところでレイシェルはイトラに先ほどの真意を問いただした。囮役を買って出た彼の真意を、である。

自分の主張した通りの配役にならなかったことに、レイシェルは

怒りを抱いてはいない。ただイトラのあの発言の意図を図りかねているだけである。レイシェルはこの同僚が優秀であることを知っており、そんな彼が意味もなくあんな発言をするとは考えられない。

「あちらさんは俺たちを疑っていたのさ」

「疑う……？ああ、そういうことか」

アルジャーク軍は新王軍とテムサニス軍を戦わせてお互いを消耗させ、両軍が疲弊したところをまとめて叩き潰し、漁夫の利を得るつもりではないのか。ジルモンドやテムサニス軍の将軍たちはそう考えたのである。

レイシェルが一言でそこにたどり着けたのには訳がある。彼自身、その策についても考えていたからだ。

実際、それが一番アルジャークにとって利のある勝ち方なのだ。ゼノスとジルモンドが戦場で互いに倒れてくれれば、テムサニスの国は丸ごとアルジャークのものとなる。ジルモンドにわざわざ五州をくれてやる必要もない。

が、レイシェルはその策を放棄した。いかにアルジャーク軍が精強を誇るとはいえ、六万だけでは数が足りない。それに皇帝であるクロノワはそのような勝ち方は好まないであろう。

「よく気づいたな」

作戦を練るに当たってレイシェルはイトラにも相談している。だがその策については話していない。話す前に放棄したからだ。策について知らなかったイトラが、あの重い空気の理由に真っ先に気づいたことにレイシェルは素直に感心した。

「たまたまだよ」

そういってイトラは謙遜するが、レイシェルはそうは思わなかった。自分の見落としていたものをこの同僚は見ていた、そういうことなのだろう。

（理論にばかり気を取られ人を見ていなかった。そういうことか）

まだまだアレクセイ将軍やアールヴェルツェ将軍の高みには届かぬ。そう思い身を引き締めるレイシェルであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これはノルワント子爵、ようこそ我が陣へ」

そういってウスベヌ伯は夜分に訪れた客人を歓迎した。

ゼノス率いる新王軍は北の国境を破って現れた連合軍を撃退するため、街道上を北上している。敵軍との接触にはまだ二日以上かかると予測されており、それぞれの陣はまだ緊張した空気に包まれてはいない。

もともとウスベヌ伯やノルワント子は武家貴族ではなく、つまり軍事には疎く普通ならば戦場には出てこない。しかし王であるゼノスが自ら戦場に赴くとあっては、臣下としては軍を率いて供をせざるを得なかったのだ。

ノルワント子が持参した土産である白ワインを飲みながら、二人の貴族はしばらくの間当たり障りのない談笑を続けた。だがそのよ

うな中身のない話しをするために、ノルワント子はウスベヌ伯を訪ねてきたわけではなかった。頃合を見計らって、低く潜めた声でこう尋ねた。

「最近のゼノス陛下のご様子について、どう思われますかな」

アルジャークから宣戦布告が行われると、ゼノスはすぐさま自分に味方した貴族たちに命じて軍を整えさせた。敵対した貴族たちについては、すでに存分に痛めつけて粛清してあり後顧の憂いはない。さながら新たな獲物を求める貪欲な狼のように、ゼノスは牙を研いでいたのである。

しかし、実際に侵略軍が国境を侵してテムサニスに侵入してきたとき、そこに翻っていたのはなんとテムサニスの国旗とその王旗であった。

無論、アルジャークの国旗もたなびいている。しかし全軍のおよそ三分の二はテムサニス軍であろうというのが、国境を監視させていた斥候からの情報であった。

現れたテムサニス軍は、年が変わる前にカレナリアに進攻しそのまま捕虜になってしまった軍であろうと推察された。が、新王軍にとって最大の問題はそこではない。

「王旗は王と共にあり」

侵略軍の先頭には王旗が確認されている。それはつまり、ゼノスが見捨てたはずの先王ジルモンドが祖国に帰還したことを意味していた。

「やることは変わらぬ。いや、むしろ簡単になった。ジルモンドを討ち取る。ただそれだけだ」

報告を聞いたゼノスはそう言い放った。確かにジルモンドを討ち取れば旗頭を失った反乱軍（ジルモンド率いるテムサニス軍のことをゼノスはそう呼んだ）は瓦解するであろう。仮に組織を保てたとしても、一度国境を越えて撤退し、態勢と兵の士気を整えねばなるまい。アルジャーク軍単独では遠征の完遂は難しく、やはり撤退することになるだろう。

ジルモンドを討ち取れば、少なくとも一度は敵軍を国外に退けることができる。それが分っていながら軍議に出席した貴族や将たちの顔色は優れなかった。

彼らにしてみれば、後ろめたさがある。

敵は、つい最近まで主君として仰いでいた方なのである。仕えていた時間はゼノスに対するそれよりも圧倒的に長い。ゼノスに付くことを選択した時点でジルモンドのことは見捨てたも同じなのだが、それでも見捨てた相手が目の前に立っていると、どうしても後ろめたさが先にたつ。

「何を今更」

そんな臣下たちに、ゼノスは冷笑を向けた。本当に「何を今更」、である。ゼノスは彼らが自分に味方した理由を、権力闘争のパワーバランスを計算した結果であることを理解している。有り体に言ってしまえば、忠義や忠誠などではなく、利を計算した結果なのである。ジルモンドに対する忠義や忠誠などといったものは、むしろルーウェン公たちのほうが持っていたのではないだろうか。

ジルモンドの帰還を待つよりもここでゼノスに付いたほうが自分たちにとって利がある。そう判断したからこそ、彼らはゼノスに味方したのだ。そしてその選択はジルモンドを切り捨て裏切るものであると、十分に理解していたはずである。

無論、誤算はあった。国から見捨てられたジルモンドが、まさか軍を率いて帰還してくるなどゼノス自身思っていなかったはずである。

「降伏してみたところでジルモンドが貴様らを許すはずもない。万が一許したとしても、クロノワがそれを認めるわけがない。皇帝である彼にとって貴族という存在は邪魔でしかないからな」

命と財産を守りたければ戦って勝つしかない。軍議で冷ややかにそう宣言したゼノスの姿を、ウスベヌ伯は思い出した。

「おっしゃることは正しいのだろうが……」

その時、ゼノスの目には鋭い光が宿っていた。鋭すぎるその光は、紙一重の狂気を宿している。

またゼノス自身の雰囲気は、なんと言うか不安定であった。有無を言わさぬほどの圧力と存在感を見せ付けることもあれば、そこにいることも忘れてしまうほどに存在が希薄になることもあった。

ゼノスの言動に、今のところ問題はないように見える。指示は的確だし理にかなっている。だから貴族たちも彼に従っているのである。しかしこの頃のゼノス本人を見ていると、それでも不安を感じ

ずにはいられなかった。

ただその不安は、かなり利己的な不安であるといわざるを得ない。ウスベヌ伯やノルワント子が最も心配しているのは、この戦にゼノスが負けたときに自分たちの命と地位と財産が脅かされることだ。敵対した貴族たちの領地を略奪したことで、彼らの懐はかなり暖かくなっているし、新たな領地を得ることもほぼ確実だ。一戦して負け、それらが全てふいになるのは、やはり惜しい。

その不安に拍車をかけているのは、新王軍と連合軍の戦力差だ。単純に数を比べた場合、連合軍のほうが多い。しかも精強を誇るアルジャーク軍がいるのである。これまでアルジャークとテムサニスは大陸東部の北と南の端であったため、両軍の戦端が開かれたことはここ百年ほどない。しかしその勇猛果敢な戦いぶりはテムサニスまで届いている。

「同数の戦力で戦えば恐らく負ける」

テムサニスの王宮内では、そう言われてきた。その評価は、無論ウスベヌ伯やノルワント子も知っている。そのアルジャーク軍が、今敵として目の前に迫っているのである。

（負ける、か……）

少なくとも、確実に勝てるとは思えない。ゼノスが負けたとき、さて自分たちはどうすべきであろうか。共に敗北を甘んじて受け入れ、何もかもを失わなければならないのだろうか。それが嫌だというのであれば……。

「頃合を見て降伏するか、いやあるいは……」

その先は言葉を濁す。軽々しく口にする言葉ではない。風はどこにでもふいており、その風が言葉を人の耳まで運ぶのだから。

それに、音にしなかったはずのその言葉は、しっかりとノルワント子には伝わっていた。彼は固い表情をしたまま、一つ頷いた。

ゼノスの言うとおり、ただ降伏するだけではジルモンドやクロノワは自分たちを許さないだろう。しかし、もし手土産があれば？

暗い笑みを浮かべた二人の貴族がともに杯を傾ける。杯からは、陰謀の匂いがした。

第八話　王者の器？

「その日、二本の王旗は相対し……」

アルジャーク・テムサニス連合軍とゼノス率いる新王軍の戦いについて記録したある歴史書は、冒頭部分をそんな言葉で始めている。ただそこにいる当事者にしてみれば、「相対し」という言葉から連想されるより発見時のお互いの距離はもっと開いていた。

「確かに王旗、だな」

魔道具ではない、ただの望遠鏡を目から離す。自分が掲げているのとまったく同じ（いや、少しくたびれているだろうか）王旗をこちらに向かってくる敵軍にも認め、ゼノスは呆れたような苦笑をもらした。ジルモンドに対してではない。この状況に対してだ。同じ国の王旗が敵味方に分かれて覇権を争うなど、一体誰が想像しえたであろうか。

（人の想像力など、当てにならん）

苦い思いと共に、ゼノスは心の中で呟いた。自分にもう少し想像力があれば、イセリアに死なれることなく彼女を手に入れることができたのだろうか。

「しかし共に掲げられているあの旗はテムサニスの国旗ではありませんな。恐らくは……」

隣で同じように望遠鏡を覗いていたカベルネス侯爵の言葉にゼノスも無言で頷く。あの旗は恐らくアルジャークの国旗であろう。深

紅の下地に漆黒の一角獣（ユニコーン）が描かれている。

「先行部隊、でしょうか……」

言葉は疑問系であったが、カベルネス侯は内心でそれを確信していた。今目の前に迫ってきている部隊の数はおよそ六万。つまりアルジャーク軍全てである。ならばその後ろに反乱軍が本隊として控えている、と考えるべきであろう。

「しかし、なぜアルジャーク軍と共に……？」

ジルモンドの王旗の隣にたなびくアルジャークの旗。しかし、本来であればそこにあるべきはテムサニスの旗である。なぜジルモンドは反乱軍ではなくアルジャーク軍と共にいるのか。

「まともに考えるなら“宣伝”だろうな」

つまり「ジルモンド・テムサニスは健在である」ということと「アルジャーク軍は味方である」という、二つのことを宣伝しているのではないだろうか。

「まあ、相手の目的がなんであれやることは変わらん」

「御意。あそこに王旗が翻っているのであれば、我々にとってはむしろ僥倖。二倍近い戦力差がある内に敵の大将を討ち取ってしまいましょう」

敵の大将とは、言うまでもなくジルモンドのことである。余談になるが、このごろの新王軍ではジルモンドを名前で呼ぶのを避ける風潮があった。呼び捨てにするにはどうにも後ろめたい。しかしまさか「陛下」という敬称をつけるわけにもいかない。結果、「敵の

大将」という表現に落ち着いたのだ。

ゼノスはその辺りの事情を察していたが特に何も言わず、酷薄な笑みと冷たい一瞥をくれるだけだった。

「全軍前進。本隊と合流される前に決着をつけるぞ」

その時、二人の王は相対し。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ウスベヌ伯爵やノルワント子爵は、元来カベルネス侯爵のように武術や軍の指揮には秀でていない。というよりまったくの素人であるといったほうが正しい。それゆえ彼らの部隊は最後尾に置かれていた。

本来、最後尾には後ろからの襲撃を警戒して精鋭の部隊を置くだが、今回は後方からの襲撃はないだろうということで、精鋭部隊は全て前方に配置されている。

別に彼らが望んでその布陣を言い出したわけではない。普通、最後尾というのは手柄を立てることが難しいため敬遠される。しかしこの布陣は彼らにとっては都合のいいものであった。

（しかしまだ動くべきときではないな……）

ウスベヌ伯は心の中でそう判断した。恐らくノルワント子も同じように判断しているだろう。

現れた敵軍はアルジャーク軍のみがおよそ六万。数の上ではこち

らのおよそ半分で、しかもなぜか王旗が混じっているという。

（ともすれば勝てるかも知れぬ）

ウスベヌ伯は軍事に疎い。だがそれでも敵に対して二倍の戦力を持つ新王軍が、現状圧倒的に有利であることは分る。

（何もせずに勝てるのであれば、それが最も良いが……）

勝ち戦で戦功を立てられないのは、少し悔しい。しかしもともと武家貴族ではないウスベヌ伯にとって、最も重要なのは戦場での功績ではなく勝ち組に入ることであった。

（見極めることだ……）

戦場の趨勢を。その決断は一度しかできないのだから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（これほどとは……！）

ジルモンドは瞠目した。

彼は今アルジャーク軍六万の中に、ただ護衛を百騎ほど連れて加わっている。その役目はいわゆる“餌”あるいは“囮”である。

新王軍の猛攻を見る限り、彼の“餌”としての役割は十分に成功したといえる。ただ彼が今驚いているのは、新王軍の猛攻の激しさについてではない。その猛攻を防ぎ整然と後退を続けるアルジャーク軍、ひいてはそれを指揮する二人の若い将軍の手腕に、ジルモンドは瞠目しているのである。

突出と後退を繰り返す。言ってしまえばそれだけのことだ。しかし時々刻々と変化していく戦況を見極め、最善のタイミングと選択で指揮し続けることがどれだけ困難か。しかも敵は二倍近いのである。一手間違えば状況は危機的な方向に転がっていくだろう。その重圧を撥ね退けあれだけの指揮をするとは、もはや脱帽である。

また二人の将の指揮と同じぐらいジルモンドを驚かせていたのは、アルジャーク軍の兵士一人ひとりの士気の高さである。

指揮官はともかくとしても、一般の兵士たちにとって撤退戦は辛い。どれだけ上手くやっても「有利だ、勝っている」という実感が得られないからだ。攻めるのは相手で退くのは自分。戦況とは別のところで、やはり精神的には辛い。

しかし、今ジルモンドが見ているアルジャーク兵には、その“辛さ”が見られない。これがもしテムサニス軍であったなら同じ結果は望むべくもない、というのが正当な見立てであろう。

「アルジャークの兵は精強を誇る」

そう言われていた言葉の本当の意味を、ジルモンドは今まさに理解していた。将の質と兵の質。その双方において、テムサニス軍はアルジャーク軍に及ばない。

後退していたはずのアルジャーク軍が突出し新王軍を押し戻していく。凄まじい圧力で攻勢に打って出たアルジャーク軍は、しかしレイシェルの号令一つで素早くまた整然と撤退を再開する。その際に数千の矢を射掛けて敵の隊列を乱し足止めするのを忘れない。両軍の間には、またたくまに空白地帯が出来上がった。

馬上にいるジルモンドはその分視点が高く、つまり周りの状況が良く分る。そして空白地帯が出来上がったことで、新王軍の前線の様子を見て取ることができた。

首筋を矢が貫通し絶命して倒れている兵士がいる。いや、あるいは彼は幸運だったのかもしれない。そのすぐ横には顔面に矢が突き刺さり、しかし致命傷にはなりえず痛みに苦しむ別の兵士がいた。

それを見るジルモンドの心中は穏やかではない。実態を失ったとはいえ、ジルモンドはテムサニスの国王であり本人もそのつもりでいる。つまりあそこで絶命しまた苦しんでいる兵士は、彼の臣民なのである。

新王軍が一瞬足を止めた隙に、アルジャーク軍は一気に距離を開ける。慌てたように追いかけてくる敵軍に、そのつど手痛いカウンターを食らわせて寄せ付けない。

思うように進まぬ戦況に焦れてきたのか、新王軍の指揮が荒くなってきた。ジルモンドを討ち取るという目的にのみ固執し、周りの状況が見えなくなってきたのだ。

（頃合か……）

レイシェルは周りの地形を確認する。この辺りに二つに分けたテムサニス軍が街道を挟む形で待機しているはずである。

レイシェルはこれまでと同じように前線部隊を突出させ、敵の足を止めて押し込む。そして敵の隊列が乱れたところですかさず後退させる。ただし、多少陣形が崩れてもいいので全力で後退させた。

これまでは見せなかった本気の後退に、新王軍はやり込められながらも勢いづきその背中を追おとした。しかし彼らがその一歩を踏み出す前に、万を超えようかという数の矢が両側面に向かって飛来した。さらにその矢を傘に、左右からテムサニス軍が新王軍の側面を目掛けて突撃する。

餌に釣られた獲物が罠にかかるのを今か今かと待っていたテムサニス軍十二万が、一挙に戦場に流れ込んだのである。

まったく予想していなかった方向からの攻撃に、新王軍は浮き足立ち混乱した。そこへさきほどまでは撤退を続けていたアルジャーク軍が突撃し、その混乱に拍車をかけていく。

二倍の戦力で敵を追っていた新王軍は、今やその数的優位を失い半包囲されるという危機的な状況に追い込まれたのであった。

（祖国に攻め込むとは、こういうことか……）

一人また一人と倒れていく新王軍の兵士たちを見ながら、表情にも出さずジルモンドは心の中で自分をあざ笑った。戦争をすれば人が死ぬ。それは避けようのない、あまりにも当然過ぎることだ。ジルモンドとてこれまで大小あわせれば両手両足の指の数では足りぬほどの戦を経験してきている。そこでは味方が倒れ、敵が死んでいった。しかしこの戦場は違う。味方が倒れ、そして味方が死んでいく。

（見ておるか、ゼノスよ。これが我らのしでかしたことの結末よ……）

ジルモンドがカレナリアで捕囚の身になどならなければ、ゼノス

がその機に乗じて簒奪など企てなければ、この戦場でテムサニス人同士が殺しあうことなどなかった。

王位を簒奪したゼノスを許すつもりはない。しかしこの戦の責任をゼノス一人に背負わせる気にもなれはしなかった。

連合軍の半包囲陣形が確たるものとなり戦いの趨勢が決した頃、両軍にとって予測しえぬことが起こった。新王軍の最後尾に位置していたウスベヌ伯爵とノルワント子爵が、突然味方に矢を射かけ始めたのである。

間をおかず、王旗を掲げるジルモンドのもとに二人の貴族から「内通する」旨を伝える密使が到着した。だが、それを聞いてもジルモンドは不快げに眉をひそめるだけであった。

「無視せよ！」

ジルモンドは二人の貴族についてそう命令を下した。その判断は彼の独断であったが、そばにいたイトラとレイシェルの両将軍は何も言わずにその判断を支持した。戦場での裏切りはこの二人にはなんら感銘を与えない。まして趨勢が決してから裏切り勝ち馬に乗ろうとするその性根は、まさに唾棄すべきものであった。

ジルモンドの命令もあり連合軍は内通した二人の貴族をまったく無視して戦闘を続けたが、彼らの裏切りはやはり戦況に変化をもたらしていた。ウスベヌ伯爵とノルワント子爵が裏切ったことでそれまで半包囲であったものが完全な包囲陣形に変わり、新王軍は文字通り逃げ道を失ったのである。

上手くいけば可能かもしれないと考えていた完全な包囲陣形が思

わぬ形で実現し、レイシェルとしては苦笑する思いである。だからといって内通を申し出た二人のテムサニス貴族に対して感謝することなどありえなかったが。

誰の目にも、もはや勝敗は明らかであった。ならば早期にこの戦いを終結させ、両軍の損害をこれ以上拡大させないことが勝者の責任であるようにイトラには思われた。

「行くのか？」

同僚が覚悟を決めたのを雰囲気だけで察し、レイシェルはそう声をかけた。

「ああ、終わらせてくる」

レイシェルのほうには顔を向けず、ただ新王軍の只中に翻る王旗のみを見据えてイトラは答えた。彼がまとう気配は、触れれば切れそうなほどに鋭い。

「これよりっ！イトラ・ヨクテエルは戦場を駆け抜け敵大将の首を狙う！我が旗に続け！！」

高らかにそう宣言すると、イトラ率いる三万のアルジャーク軍は敵軍の中にある王旗をめがけ、鋭いキリのように敵陣に突き刺さっていった。レイシェルもそれを絶妙に援護し、イトラの部隊は易々と敵陣を切り裂いていく。

猛進を続けるイトラの前に一人の男が立ち塞がった。ゼノスの傍らで新王軍の指揮をとっていたカベルネス侯爵である。

「我が名はレイグイット・フォン・カベルネス！ゼノス陛下の傍にあって軍を統率する者なり！そこにおられるはアルジャーク軍の将軍とお見受けする。一騎討ちを所望！」
「イトラ・ヨクテエル、その一騎討ちお受けする！」

イトラがそう答えると、カベルネス候は笑った。その決断のあまりの清々しさに、感謝を込めて笑った。

イトラにしてみればここで一騎討ちを演じるメリットはほとんどない。本来一騎討ちというのは味方の士気を上げるためのデモンストレーションであって（勝てばの話だが）、戦いの趨勢がすでに決している今連合軍の士気をさらに上げる必要はないのだ。

しかし、イトラは一騎討ちを受けた。それはひとえにレイグイット・フォン・カベルネスという武人に敬意を表したが故であった。

イトラは敵兵を貫きしかしそのせいで抜けなくなった槍を捨て、代わりに腰の剣を抜いた。カベルネス候もまた剣を抜きそれに答える。

一瞬のにらみ合いの後、二人の騎士は互いに向かって馬を走らせる。左手で手綱を操り、右手に剣を振るう。

――――ギィィイィィンンン！

二人の騎士が交差した位置で剣が鳴りあい火花が散る。速度の乗った強力なその一撃は、しかし互いに傷を負わせることもなく、ただ二人の実力が拮抗していることだけを証明して終わった。

すれ違った二人はすぐさま馬首を巡らし好敵手を求めて肉薄する。

今度はすれ違いざまの一撃ではなく、互いに馬を寄せて鞍をぶつけ合い、激しく剣を鳴り合わせて戦う。二匹の馬もまた、背に乗せた主に呼応するかのように激しく嘶いている。

二人の騎士は円を描くように馬を操りながら剣を振るい続ける。イトラが突き出した剣はレイグイットのそれによって軌道を逸らされただ空を突く。レイグイットが横なぎに剣を振るえば、イトラはそれをはじき返す刃で敵の首筋を狙う。互いに一歩も退かず、一進一退の攻防が続いた。

何十合か討ち合った後、弾かれたカベルネス侯の剣がイトラの馬の首筋にめり込んだ。激しい斬りあいで刃毀れしていた剣は、すぐに抜くことができない。致命傷を受けた馬は激しく身を震わせ、背中に乗っていたイトラをふるい落とし、そしてカベルネス侯の手から剣を奪った。

馬から落ちたイトラは、しかしただでは落ちなかった。落ちる瞬間手に持っていた剣をカベルネス侯めがけて投げつけたのである。思いがけないイトラの反撃を、彼は身をよじってかわしたが勢いあまって彼自身もまた落馬してしまう。

結果的に二人とも馬と武器を失ったが、その後の行動もまた同じであった。二人はすぐさま手近にあった武器に手を伸ばし、そして再びお互いに相対したのである。手にした獲物はカベルネス侯が剣、イトラは槍であった。

「推して参る！」

剣を構えたカベルネス侯が前に出る。イトラは槍を突き出すがカベルネス侯はそれをかわし、しかも槍を引くのにあわせてスルスル

と前に出てイトラの懐に入ろうとする。

（上手い……！）

敵ながらその動きにイトラは瞠目する。これまでは国が離れていたせいで名前を聞くことはなかったが、このレイグイット・フォン・カベルネスという男はかなりの使い手である。

イトラとてただ懐に入られるのを見ているつもりはない。槍をクルリと回転させ、石突でわき腹を狙う。それをかわすために相手の足が止まったところで、一旦後ろに飛びのいて距離を取る。

槍の真ん中辺りを持ち、今度はイトラから距離をつめる。

槍の真髄とは“突き”ではない。その長さを生かした縦横無尽にして連続性の高い攻撃こそ槍の真髄であるとイトラは思っている。そのモットーのもと磨き上げた技で、イトラはカベルネス侯を追い詰める。

上から刃が襲い掛かってきたかと思えば、今度は下から石突が跳ね上がる。ときに払いときに突き、イトラは休むことなく攻め続ける。対するカベルネス侯は防戦一方である。しかしいまだに有効な一撃をもらっていないことが、彼の力量を証明していた。

（肉を切らせねば骨は断てぬか！）

カベルネス侯は覚悟を決める。左から襲い掛かってくる一撃を選んで、前に出る。

「グゥ……！」

槍の一撃はカベルネス侯の右のわき腹に直撃する。しかし鎧を着込んでいるため、致命傷にはならないし、恐らく骨も折れてはいない。左足を踏ん張って体勢を崩すことなく持ちこたえ、剣を振るう。

イトラは下がらなかった。いや、むしろ彼は前に出た。槍の間合いから剣の間合いに詰めてきたカベルネス侯のさらに懐へ、剣の間合いから無手の間合いへと距離を詰める。

左手でカベルネス侯の剣を持つ右手を払いのけ、槍を手放した右手を顔面めがけて振り抜く。

体重を十分に乗せた一撃が、カベルネス侯を吹き飛ばす。仰向けに倒れた彼はすぐに立ち上がろうとするがそれはかなわなかった。手放した槍を素早く拾い上げたイトラが、彼の右腕を踏みつけ動きを封じていたからだ。

「覚悟っ！！」

イトラは槍を逆さにし刃を好敵手に向ける。それを見たカベルネス候はただ穏やかに一笑し、その刃を受け入れた。

そばを離れたカベルネス候とアルジャークの将軍が一騎打ちを演じる様子を、ゼノスは馬上から眺めていた。そしてその結末に、一つ嘆息を漏らす。

「ここまで、か……」

カベルネス侯は死んだ。敵軍に包囲され、その上指揮の要であったカベルネス侯を失っては、もはや起死回生の策はない。かくなる

上は、自刎するのみ。

「クロノワ・アルジャーク。貴方に直接引導を渡して欲しかったと思うのは、我儘なのだろうな……」

剣を抜き、首筋に添える。そして何のためらいもなく、ゼノスは自分の首を刎ねた。新王軍が王旗を降ろし代わりに白旗を掲げたのは、そのすぐ後のことだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

掲げられた白旗を見た新王軍の兵士たちは、次々と武器を捨て降伏の意思を示した。完全に包囲されている状況でなければ逃走を図るなりしたのだろうが、今はそれも難しい。結局、武器を捨て降参することが、命を長らえる唯一の選択であった。

「大手柄だな」

戻ってきたイトラをレイシェルはそういって迎えた。彼がレイグイット・フォン・カベルネスという貴族を討ち取ったという話は、すでにレイシェルのもとまで届いている。その名前をジルモンドに確認したところ、テムサニスの有力な貴族で、軍事と武芸に秀でた家柄だという。新王軍の主要人物だったことは間違いなく、彼を討ち取ったイトラは大手柄を立てたことになる。

「大したことじゃない。むしろ、お前のほうが功績は大きいだろう？」

イトラは別に嫌味を言っているわけではない。倍近い敵を相手に撤退戦を演じきることができたのは、やはりレイシェルの冷静な指

揮によるところが大きい。それは、華々しさはなくむしろ地味ですらあるが、今回の作戦において最も重要な部分である。それを完遂して見せたレイシェルの功績は大きい。

イトラのような手柄の立て方は確かに華々しくて目立つ。しかし将であるならば、その功績の立て方はレイシェルのようであるべきだと、イトラは思っていた。

そしてクロノワやアールヴェルツェも、その辺りのことはきちんと評価してくれるだろう。それが分っているから、レイシェルにイトラを妬むような雰囲気はない。

アルジャークの若い将軍二人が互いの功績を称えあっていると、先ほどの戦いで内通を申し出たウスベヌ伯爵とノルワント子爵がジルモンドに謁見を申し込んでいる旨が報告された。

二人の将軍の笑みが消え、目は鋭く光った。

「どう思う？」

「いい気はしないな。俺個人としては、だが」

ゼノスを裏切った二人の貴族に対して、である。何はともあれ、その二人がジルモンドに謁見するのであれば、イトラとレイシェルもその場にいたほうがいいであろう。イトラとレイシェルは、この連合軍にあってアルジャークの利益を主張する役目もあるのだから。ジルモンドが勝手に大きな恩賞を与えるとも思えないが、どういう対応をするかは二人とも興味があった。

二人がジルモンドのところに着くと、すでにギルニア・フォン・フーキスをはじめとするテムサニス軍の将軍も何人か控えていた。

アルジャークの二人の将軍が揃ったところで、ジルモンドがウスベヌ伯爵とノルワント子爵を連れてこさせた。

二人の表情は明るい。なにか大きな恩賞がもらえるものと思い込んでいる様子だ。しかしそんな二人にジルモンドが投げつけた言葉は冷ややかで剣の鋭さを持っていた。

「うれしそうだな。主君を、それも二度も裏切ったことがそんなにも自慢か」

二人の貴族の笑顔が凍りつく。自分の尺度でしか人をはかれない彼らは、ジルモンドの思わぬ反応に意味もなく口を開閉させた。勝ち組になれて上気していた顔色が、だんだんと青ざめていく。

一度はゼノスの戴冠を認めてジルモンドを裏切り、そして先ほどは劣勢と見るやゼノスを裏切った。こうも軽々しく、しかも戦場で主君を裏切るような臣下を信頼することなどできるはずがない。そういう輩は、旗色が悪くなればまた裏切ると容易に想像できる。そういう意味では、劣勢ながらも最後までゼノスに味方した他の貴族たちのほうが、よほど信頼できる。

「報奨が欲しいか、貴様ら」

吐き捨てるようにそう言うと、ジルモンドは右に控えているテムサニスの将軍たちのほうを見てギルニア将軍の名前を呼んだ。

「この裏切り者たちの首を刎ね、営門に晒せ！」

御意、と短く答えると彼はすぐに動いた。腰間の剣を抜き、歳に似合わずすばやく一閃させてウスベヌ伯の首を刎ねた。

ウスベヌ伯が首を失いそこから血が吹き上がるのを見て、ノルワント子は「わ、わっわわ」と意味をなさない言葉を漏らす。凶刃を下げて近づいてくるギルニアから少しでも離れようと尻餅をつきながらあとずさるが、ほんの十数秒命を長らえることしかできなかった。ギルニアに命じられたテムサニスの兵士たちが槍で彼を滅多刺しにしたのである。

「ぐ……は……」

口から血を吐きながらノルワント子爵が呻く。そしてそのまま絶命した。

二人が絶命したのを見て取ったジルモンドは、アルジャークの二人の将軍に向き直った。

「見苦しいところをお見せした」

「いえ、適切なご判断かと」

独断と偏見が混じっていることは否定できないが、イトラとレイシェルもこの手の裏切り者には嫌悪感を覚える。ジルモンドの判断に異を唱えるつもりはなかった。

この二人、ウスベヌ伯爵とノルワント子爵を最後に死者の列に加えることで、新王軍と連合軍の戦いは終わった。ついにジルモンドはテムサニスへの帰還を果たしたのである。クロノワは約定通り彼に王都ヴァンナークを中心にして五州を与え、また連合軍の兵士たち全てに報奨を与えた。

そしてついに、クロノワはカルフィスクを手に入れたのである。

第八話　王者の器？（後書き）

次の話は、舞台がシラクサに移ります。お楽しみに。

第八話　王者の器？

「暑いですねぇ～。まさに南の島って感じです」
「本当ですね……。日差しも強いし」

北国のアルジャークなどと比べれば遥かに強いその日差しは、ただそれだけでここが異国であることを印象付ける。ここはシラクサ。より広く言えば、シラクサという港があるローシャン島である。

アルジャークがテムサニスに宣戦布告した頃、フィリオもまた動いていた。リリーゼが戻ってきた頃から予定していたシラクサの現地視察の計画を、ついに実行したのである。ただフィリオには視察だけして戻るつもりはなかった。ヴェンツブルグからここまで、船旅で二十日以上かかっている。気楽に行ったり来たりできる場所ではない以上、今回の視察でこの地域の代表を務めているロン一族に、ある程度話を通してしまいたいと考えていた。話とは、無論シラクサをアルジャークの勢力圏に引き込むための話である。

余談になるが、「シラクサ」という言葉の定義をこの際だから広げておきたいと思う。シラクサとは本来、ローシャン島の北部に位置する港町の名前である。しかしこの先の時代、シラクサと大陸の間で船の行き来が盛んになると、「シラクサ」という名前はローシャン島とヘイロン島の二つの島をまとめた、この地方の名称としても使われるようになる。よってこの先「シラクサ」という名前は、こちらの意味でも使うことになる。どちらの意味で使っているかは、申し訳ないが文脈から判断していただきたい。

さて、今回の視察であるが、フィリオとリリーゼの二人だけというわけではない。彼らの他に後六人、総勢で八名の視察団となって

いる。

フィリオはまず、視察団を引き連れてシラクサの高台に居を構えているロン一族のもとへ、挨拶へ行くことにした。

一族、といっても「ロン」の姓名を名乗っているのは、ただ一家族のみである。というより、そもそもシラクサには姓名を名乗る習慣がない。ここに住んでいるシラクサ人とも言うべき人々は、ただ名前だけを名乗るのである。

ではなぜ、ロン一族がその姓名を名乗っているのかといえば、大陸の習慣に合わせたが故であった。

大陸とシラクサの間で交易が始まった頃、シラクサの人間は姓名をもっていないという理由で野蛮だの未開だの、そんなレッテルを貼られることがあった。それが特に顕著であったのが、いわゆる「上に立つ人間」の間で、だった。

政治的に下に見られた、といえば分りやすいだろうか。

そこで少なくとも対等な立場と認識してもらえるように、当時シラクサの代表格であった人物が「ロン」の姓名を名乗るようになったのだ。ちなみに「ロン」という言葉は「王」や「長」を意味するシラクサの古い言葉だ。だからシラクサの人間にとってそれは、姓名というよりは代表を示す称号としての意味合いのほうが強い。

何はともあれ、これからその“ロン”のところに挨拶に行くのである。

（いきなり出向くのは無礼と思われるかもしれませんね……）

本来であれば、事前に使者を送り挨拶に伺う日時を決めておくのが筋であろう。しかしシラクサはアルジャークから遠すぎる。まして船旅である。風や波の状態で日程などいくらでも変わってくる。

結局、いきなりお訪ねするほかない。

（ま、そのあたりは諦めてもらいましょう）

嫌な見方をすれば、アルジャークにとってシラクサは格下の相手である。多少の無礼は許容してもらうとする。交渉の席で礼を失するつもりは毛頭無いが。

シラクサの街を一望できる高台に造られたロン家の家は、これまで街中で見かけた家に比べれば確かに大きい。三階建てで、周りは兵と垣根で囲まれている。しかし、大陸で見る貴族の屋敷などと比べると、どうしても見劣りがする。

当然といえば当然である。ロン一家はシラクサの住民から取り立てた税で生活しているわけではないのだから。

シラクサにも税金は存在する。人が街や国という集団を形成して生活するために、それはどうしても必要だからだ。

集められた税金は、ロン（当主のこと）が最終的にその再分配について決定する。つまりロン家はいくらでも税金を懐にねじ込める立場な訳だが、この質素な家のたたずまいを見る限りでは、そのような不正は行っていないように見受けられた。実際、ロンは税金の再分配についてその詳細な明細書を毎年公表しており、街の商人と職人でつくる商工会などがそれをチェックしている。

ロンに選ばれた家系は、その当時代表格であっただけである。その家系が今もロンの名を名乗っているのは、いわば当時からの流れであって正当な根拠には欠ける。にもかかわらずこの一家が今もロンの名前を名乗っていられるのは、ひとえにこの清廉潔白さがシラクサの人々から評価されているからである。

ちなみにロン一家の収入源であるが、この家はローシャン島の大地主であり、それを小作人に貸すことで収入を得ている。そういう意味では名家に違いない。

「止まれ！何者だ！？」

家の前の門には二人の門番が立っている。見慣れない異国人の集団に彼らは警戒をあらわにし、手に持った昆をフィリオたちに向けた。

フィリオが彼らの警戒を煽らない位置で立ち止まると、他の視察団のメンバーもそれに習う。それからフィリオは優雅に一礼し、簡潔に用件を述べた。

「私はフィリオ・マーキス。アルジャーク帝国より使者としてまいりました。どうかガマラヤ・ロンにお取次ぎを願いたい」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フィリオたちが通されたのは一階にある応接室であった。今室内には八人いるが、狭苦しさは感じない。壁際に飾られた調度品の数々はもちろんシラクサのもので、はじめて見るフィリオにはその良し悪しは判別できない。ただ素人目にも品のいい品物が飾られてい

るように思えた。

「おや、これは……」

フィリオの目が、飾られていた調度品の一つにとまる。

「ガラス細工ですね……。綺麗……」

側に来たリリーゼも簡単の声を漏らす。実際見事な作品だ。南国らしく鮮やかな色彩の鳥で、色の違う薄くて細かいパーツを幾つも組み合わせて作られている。見るからに繊細そうで、下手に触れば壊れてしまいそうである。

シラクサはガラスの生産で有名である。その歴史は古く、大陸でガラスの製法が発見されるよりも前から、ガラス製品を作り大陸と交易を行い莫大な利益を上げてきたという。現在では大陸でもガラスの生産は行われており、輸送に費用が掛かる分シラクサのガラスはどうしても割高になってしまい、結果として大陸との交易はかなり廃れてしまった。

「見事でしょう。それは街の工房で造られたものなのですよ」

ガラス細工を観賞していると、部屋の入り口の方から声がした。振り返ってみると、一人の壮年の男が立っている。ロン家の当主、ガマラヤ・ロンである。恰幅が良く顔は角ばっているが、優しい目元のおかげで威圧感は感じない。

「ガラスは宝石などとは違ってそれ自体を生産できますからな。枯渇する心配のない、息の長い産業になります」

「反面、どこででも生産できるため競争が激しい」

フィリオの切り返しにガマラヤは「これは手厳しい」と苦笑した。しかし気分を害した様子はなかった。

「改めまして。ロン家当主、ガマラヤ・ロンです」

「ご丁寧に。フィリオ・マーキスと申します」

ガマラヤに促されてフィリオたち視察団のメンバーはそれぞれ手近な席に着いた。雑談を交えつつ簡単な挨拶を交わした後、フィリオは持参した贈り物をガマラヤに渡した。

バロックベアの毛皮、鮮やかな染料で染められたシルクの反物、中でも紫の布は最高級品だ。その他にも緻密な装飾の施された宝剣、大粒の宝石がはめ込まれた金細工や銀細工などがある。どれもこれも一級品である。

「さて……」

持参した贈り物を一通り説明し終えると、フィリオは表情を改めた。今日は贈り物を渡すためだけに来たわけではないのだ。フィリオの雰囲気から何かを察したのか、ガマラヤも真剣な表情を見せる。

「今日お伺いしたのは、アルジャーク帝国とシラクサの未来についてお話したいと思ったからです」

「なるほど……。アルジャーク帝国とシラクサの望む未来が同じであれば、そのお話は歓迎すべきでしょうな」

両者の視線が一瞬擦れる。しかし擦れて火花が散る前にフィリオの方が視線を外した。彼は外した視線をそのまま視察団の一人に向けて目配せする。目配せされたメンバーは一通の書類を取り出し、

ガマラヤに差し出した。

「そこに大まかではありますが、我々の望む未来について記してあります。一度目を通してご検討いただけませんか」

「……分りました。拝見させていただきます」

ガマラヤのその返事を聞くと、フィリオは満足したように微笑んだ。「今日はこれで失礼します」と言って立ち上がった彼を、ガマラヤは呼び止めた。

「宿はすでにお決まりですかな」

「いえ、これから探すつもりですが」

「でしたら我々がご用意しましょう」

よい宿があるので是非そちらに、とガマラヤは勧めた。連絡を付けやすくしたい、という意図だろうとフィリオは察した。面子の部分もあるのだろうが、ガマラヤの表情を見ると好意の成分のほうが多いように思える。それならば、とフィリオはその好意をありがたく頂戴しておくことにした。

案内を命じた部下たちに連れられて出て行く視察団を見送ってから、ガマラヤはさっそくフィリオが置いていった書類に目を通し始めた。

一度読み、二度読み、そしてもう一度目を通す。

バサリ、と書類を机の上に投げ出し、ガマラヤは難しい顔をして考え込んだ。

書類に記されていたアルジャークの望む未来は、総括して考えればシラクサの望むそれとほぼ一致する。受け入れがたい点やより詳

細な説明を必要とする箇所は多々あるが、それは今後の交渉の中ですり合わせていけばよい。

とはいえ、一人で考えて結論を出すのは危険だ。シラクサに住む全ての人々に関係する件なのだから、様々な立場の人から意見を聞いておく必要があるだろう。まずさしあたっては……。

「ハルバナを呼んでくれ」

古くからロン家に仕えてくれている大陸で言うところの“執事”に、ガマラヤはそう命じた。

シラクサには商人や職人の意見をまとめて調整する、「商工会」という組織がある。シラクサの商人や職人のほとんどがこの組織に属しており、そのため商工会はシラクサの経済に大きな影響力を持っていた。

その商工会の長老が、ハルバナという老人なのだ。

部屋から出て行く執事を見送ると、ガマラヤは大きく息をついた。シラクサの歴史、その中で変革の時期が来たことを、ガマラヤは悟ったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

案内された宿はいわゆる“宿屋”ではなく、迎賓館であった。整えられた中庭は大陸のそれとは違った風情があり、異国情緒を楽しませてくれる。迎賓館には十分な部屋数があり、視察団のメンバーにはそれぞれ一人部屋があてがわれた。

荷物の整理が終わったところで、メンバーは大広間に集まった。
これからの予定を話し合うためだ。

「とは言っても、シラクサ側から連絡がない限りは、我々としてはやることがありませんね」

メンバーの一人が苦笑するように言う。実際、視察団内部での交渉のための準備はすでに終わっている。現状ではやることがない。

「では情報収集をしましょう」
「情報収集、ですか？」

フィリオの提案に、怪訝な反応が返ってくる。

「本格的な交渉の前に、シラクサの経済の実態を把握しておくのもいいでしょう」

そのために商店や港、工房などをめぐり情報を集めるのだという。当然、そんなやり方で機密に類する情報が手に入るはずもなく、ようは観光半分に聞き込みをするということだろう。そのことを理解したメンバーたちは揃って苦笑を漏らした。

「あ、お土産代を経費で落としちゃ駄目ですよ？」
「そんなことをするのはフィリオさんだけです！」

リリーゼのそのツッコミに、本人以外のメンバーは深く頷くのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なるほどの、これは……」

ガマラヤから手渡された書類をハルバナは机の上に戻した。そこに書かれていたのは、フィリオが言うところの「アルジャーク帝国が望む未来」であった。

「ロンのおっしゃるとおり、大筋としてはシラクサに益のある話でしょうな。商工会としても、まず損をすることはないと思いますぞ」

アルジャーク帝国が望む未来。それはシラクサを拠点として、海上交易を拡大させることだ。これはシラクサと大陸の間だけの話ではない。シラクサのさらに南にはリーオンネ諸島があり、さらに西にはサルミネア諸島がある。こういった島々と交易を行う拠点として、アルジャーク帝国はシラクサを使いたいと思っているのだ。

もっともサルミネア諸島に関しては、シラクサよりもそこから北にある大陸有数の貿易港ルミティアスのほうが近い。シラクサ―サルミネア諸島間で交易が発達するかは未知数だ。

「では、商工会は今回の話、大筋賛成ということでいいのだな？」

「そうなりますな。この先、税率などを交渉する際には、相談していただければありがたく思いますがの」

ハルバナが、というよりも商工会が今回の話に乗り気なのは当然であろう。シラクサが海上交易の拠点となれば、真っ先にその恩恵にあずかるのは商人たちだ。莫大な利益を期待できるだろう。

「とはいえ、ロンとしてはここに書かれていることを全て飲むわけにはいかないですじゃろ？」

「当然だ。アルジャークの影響力を、少なくとも政治的には排除し

たい」

アルジャーク帝国がシラクサの政にまで口を出してきては、甘い果実、つまり交易で手にした莫大な利益は全てアルジャークに持っていかれてしまう。それでは意味がない。

「しかし、依存したほうがいい部分もあると思いますぞ」

「……どういうことだ？」

「甘い蜜に誘われてくるのは美しい蝶だけではない、ということですかの」

シラクサが海上交易の拠点として発達し、多くの船が富を抱えてやってくるようになれば、必ずや招かれざる客も現れる。

すなわち、海賊である。

「海賊対策には、海軍力が必要じゃ。シラクサだけで対処するには、ちと荷が重いかと思いますがのぅ」

現在シラクサには軍隊と呼べそうな組織は存在しない。アルジャーク帝国の影響力を排除したいというのであれば、海賊対策も自前でやらねばならず、それには膨大な資金と時間と手間がかかることが容易に想像される。またそうやって作り上げた海軍を維持していくのは、シラクサにとって負担が大きいだろう。

そこでアルジャーク帝国の力を使え、とハルバナは言う。

「しかしな、力を貸してもらっておいて口を出すな、というのは無理だろう」

「そこはほれ、ロンの手腕の見せ所、というやつじゃろう？」

さりげなく無茶な注文をする老人にガマラヤは苦笑する。

「さて、どうしたものかな……」

鋭い目で窓の外を眺めるガマラヤの目に、しかし風景は映っていなかった。

第八話　王者の器？

次の日、視察団のメンバーは起きた順に朝食を食べ、おもいおもいにシラクサの街へと繰り出していった。久しぶりに地面の上の揺れないベッドで眠ったせいか、いつもよりも寝坊してしまったリリーゼも、朝食を食べ終え身支度を整えてから街へと足を向けた。今日は楽しい観光、もとい情報収集である。

リリーゼが歩いている通りは、それなりに活気に溢れていた。しかしその一方で、そこにいる人々の特徴は皆一緒である。すなわち、黒い髪の毛の黒い瞳、そしてシラクサ独特の衣装。つまり今彼女の目に映っているのは、すべてシラクサの住民である。

（少し、異様だな……）

独立都市ヴェンツブルグという交易の街で育ったリリーゼはそう感じた。シラクサの街はこの地域で唯一の貿易港のはずである。それなのになぜこうも外の人間がすくないのだろうか。ここは目抜き通りではないが、それなりの数の店がある。大きな商談を行うような店ではないのかもしれないが、貿易港にもかかわらず商店に異国人が見当たらないというのは異様な光景に思われた。少なくともヴェンツブルグではありえない。

（大陸との交易が廃れてきているというのは本当のようだな……）

確かにそれなりの活気はある。しかしそれは貿易港としての、あの一種混沌とした人種の坩堝のような活気ではない。

（港の、船着場のほうに行けばもっと活気があるかもしれないが……）

船着場は、いわばシラクサの玄関口だ。この通りよりも活気を期待できるだろう。後で足を伸ばしてみようと思いつつ通りを歩くリリーゼの目に、一見の小さな店が映った。

「ガラス工房『紫雲』直売店」

看板にはそう書かれている。窓辺の陳列棚には、色とりどりのガラス製品が置かれている。アクセサリーなどの細工品に加えて、カップやランプのかさなど実用的なものも置かれている。

興味を引かれて店内に入る。中に入ると、不思議な音色の音楽が流れていた。まるで悠々と流れる大河を連想させる、そんな演奏だ。

店の奥に目をやると、一人の女性がカウンターの奥で楽器を弾いている。弓を左右に動かしているから、恐らく弦楽器の類だろう。

「あら、いらっしゃい」

来客に気づいた女性が演奏の手を止めて微笑む。立ち上がろうとする彼女を、リリーゼは制した。かわりに一つ質問をしてみる。

「その楽器は……？」

「ああ、これ？『胡弓』っていうシラクサの楽器よ。聞くのは初めてかしら？」

「うむ。不思議な、だけど落ち着く音色だ」

「そう？気に入ってくれたのなら、嬉しいわ」

胡弓を弾いていた女性は翡翠（ヒスイ）と名乗った。リリーゼも自分の名前を名乗る。

ヒスイは典型的なシラクサの女性だ。瞳の色は黒で、長く伸ばした黒い髪の毛を背中に流している。肌は白く、磨かれた漆のように輝く髪の毛とのコントラストが印象的だ。顔にかかる髪の毛を払う仕草が、くやしいほど様になっている。

「商品を見せてもらってもいいだろうか？」

「ええ、ごゆっくりどうぞ」

リリーゼが店内を見始めると、ヒスイは胡弓を演奏し始め、店内は再び胡弓の音色に包まれた。ゆっくりと流れる川のようなその演奏は、異国情緒にあふれながらもどこか懐かしさを感じる。

リリーゼは店内の商品を眺めながら、内心で胸をなで下ろしていた。今店内にいる客は彼女一人だ。もしかしたらヒスイはぴったりと張り付いて熱心なセールストークを聞かせてくれるのではないかと思ったのだが、胡弓を弾く彼女からはそんな意思は感じられない。落ち着いて買い物ができそうだった。

商品を眺めるリリーゼの目が、ある棚のところでとまった。そこに置いてあったのはカップの一種である。ただ随分と小さくて可愛らしい。

「ヒスイ殿、これはいったい……？」

リリーゼの声がいぶかしげに途切れる。声をかけられたヒスイが胡弓の演奏をとめて笑っていたからだ。何か変なことを言っただろうか？

「ご、ごめんなさい。『ヒスイ殿』なんて言われたの、初めてだから可笑しくって……」

笑いを堪えながら（上手くいってはいなかったが）ヒスイは自分のことは呼び捨てでいいと告げ、再び胡弓を弾き始めた。

「ああ……、それではヒスイ、これは一体何に使うのだ？」

「それは『お猪口』ね」

シラクサ酒、というお米の地酒を飲むときに使うのだという。どうやらお酒を飲まないリリーゼには縁のない品物のようだ。

「むう……。綺麗だし可愛いと思ったのだが……」

「お土産にするなら、アクセサリーのほうがいいと思うわよ」

残念そうにお猪口を棚に戻すリリーゼに、ヒスイが胡弓を弾きながらアドバイスした。が、アクセサリーといわれたリリーゼはなんともいえない顔をした。

「どうしたの？」

「いや、どういうアクセサリーが自分に似合うのか、良く分らなくてな……」

お洒落に興味がなかったわけではない。ただそういう方面の話は、母であるアリアのほうが熱心で、リリーゼは母親に任せてしまうことが多かった。

「もしよければ、一緒に選んでもらえないだろうか？」

いいわよ、と気さくに答えたヒスイは、胡弓を座っていた椅子の

背もたれに立てかけて立ち上がった。顔に浮かべた微笑は、やんちゃな妹を見守る姉の微笑みに似ている。

「どんな種類のが欲しいとか、希望はある？例えば腕輪とかブローチとか……」

「……すぐには思いつかないな……」

そう広くはない店内のちょうど真ん中辺りに、アクセサリーを置いた棚がある。そこには様々な種類の色鮮やかなアクセサリーが飾られていて、どれも綺麗だとはリリーゼも思う。しかし、その中から何が欲しいかといわれると、すぐに答えることはできなかった。

「う～ん、そう言われてしまうと、選ぶのも大変ね……」

そう言いつつも商品を選ぶヒスイの目は真剣だ。ともすると、いや確実に当事者であるはずのリリーゼよりも真剣だ。

「あ！それじゃ、これなんてどうかしら？」

ヒスイが選んだのは髪飾りだった。髪の毛に止める部分は金属製だが、そこに青い花のガラス細工があしらわれている。

「これなら、リリーゼの綺麗な髪の毛に良く似合うと思うわ」

そう言ってヒスイはその髪飾りをリリーゼの髪に挿し、鏡を見せた。彼女の見立てどおり、青い花のガラス細工はリリーゼの金髪に良く映える。

「うん、思った通り！良く似合うわ」

満足したようにヒスイは頷く。リリーゼとしても似合うと言われ、まんざらでもない様子だ。値段も手ごろだったので、この髪飾りを買うことにした。

「それにしても……」

商品を包むヒスイに、リリーゼは店に入ってから疑問に思っていたことを聞いてみた。

「随分と客が少ないようだが、いつもこうなのか？」

実際、今店内に客はリリーゼ一人しかいない。彼女が店内を見ている間に新たな客が来ることはなかったし、彼女が来る前に客がいた様子もない。

「ええ、大体いつもこんな感じよ」

特に気にした風でもなく、ヒスイは答える。その言葉と表情からは、悲壮な様子は感じられない。

「……大丈夫なのか？」

客が来なければ物は売れず、物が売れなければ収入には結びつかない。生活していけるのだろうか。

「大丈夫よ。うちは直売店だから」

なんでもヒスイの家はガラス工房を営んでいるらしく、この店はその直売店だという。そういえば店の看板にも「ガラス工房『紫雲』直売店」とあった。

「工房で作った製品はそれぞれのお店に卸していて、収入はそっちがメインよ。このお店も、奥と二階は倉庫になっているの」

はいどうぞ、といってヒスイは包装の終わった髪飾りをリリーゼに渡す。リリーゼも財布から代金を取り出してヒスイに渡した。つり銭を計算しながら、ヒスイは「でもまあ」と思い出したように呟いた。

「工房の仕事は、減っているかもしれないわね……」

ガラス工房「紫雲」で働いている職人の数は、建物の大きさに比べれば少ないという。それはつまり昔はもっと大勢の職人がいて、仕事もその分多かったということだ。

「もっとも、それはわたしが生まれる前の話だけどね」

少し暗くなった空気を吹き飛ばすように、ヒスイは片目をつぶって笑った。そんな彼女の様子を見ていると、リリーゼの表情も自然に綻んだ。

「リリーゼ、シラクサはいいところよ。ぜひ、楽しんでね」

南の島の、空は高い。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ガマラヤからアルジャークの視察団に会談の申し入れがあったのは、フィリオたちがシラクサについてから三日後の夜のことであった。次の日の午前から、本格的な交渉に入りたいという話が伝えら

れ視察団もそれを了承した。

「どうなると、思いますか？」

久しぶりに視察団のメンバー全員がそろった夕食の席で、リリーゼはそう問いかけた。あまりにも漠然とした問いであったが、その分答えるほうも大まかに答えることができた。

「多分、真っ向から反対することはないと思うよ」

そう答えたのは、視察団でも最年長のメンバーだ。ちなみにフィリオの年齢は視察団の平均よりも下である。

「海上交易の拠点になるという話は、シラクサにとっては願ってもない話だ。そこから拒否するということは絶対にありえない」

その意見にはリリーゼも、というより視察団全員が賛成だ。

髪飾りを買った後、リリーゼは港まで足を伸ばした。シラクサの港は、設備の面だけを見ればヴェンツブルグなどと比べても遜色がない。しかしそこに停泊している船は少なく、設備が立派な分閑散とした雰囲気が強かった。

落ち目である、といえば分りやすいかもしれない。

しかしアルジャーク帝国が主導する海上交易の拠点となれれば、状況は一変する。シラクサを訪れる船の数は段違いに増加し、ともすれば今の設備でも手狭に感じるくらいになるだろう。そして莫大な富が生まれるだろう。

「基本的には賛成。これはもう間違いない。ではどこが交渉の一番の論点になるか、といえば……」
「シラクサの主権のあり方、でしょうね」

アルジャークとシラクサの力関係は歴然だ。しかしだからといってその力に物言わせて利益を横から掠め取られては、シラクサとしては面白くないだろう。その一方で拠点となっているシラクサにばかり富が集まっていては、今度はアルジャークの方が面白くない。どこまでアルジャークの関与、つまり影響力を認めるか、それが一番の論点になるだろう、というのがフィリオの予測だった。

「なんにせよ相手の出方次第ですよ」

そう言ってフィリオは紅茶を啜った。その言葉に視察団のメンバーは頷き、あらゆるケースを想定して明日の交渉に向けて準備をするのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の日、交渉のためにロン家の屋敷を訪れた視察団一行が通されたのは、最初と同じ応接室であった。ただ、あの時と違い室内にはすでに複数人の人影があった。フィリオの姿を認めたガマラヤは立ち上がり、簡単な挨拶をしてから彼らを紹介していく。商工会の長老を始めとする、シラクサの有力者たちであった。

一通りの紹介が終わると、お互い向かい合うようにして全員が席に着く。まず最初に口火を切ったのは、ガマラヤであった。

「まずこの度のアルジャーク帝国からの申し入れですが、シラクサ側としても歓迎すべきものと考えております」

基本的には賛成するというガマラヤの発言。昨日の夜の予測と同じだ。

「それはこちらとしても何よりです。では、お渡しした書類の内容は大筋合意、ということでよろしいでしょうか？」

「いえ、それは少し待っていただきたい」

ガマラヤは苦笑気味にそう言ってフィリオをとどめた。それはそうだろう。彼に手渡した書類に書いてある内容は、アルジャーク帝国の利益を最大限に追求した内容になっている。シラクサ側がそのまま飲むなどありえない。

「ふむ、ではどうしましょうか」

「まず、シラクサの主権についてだが、これは完全な形で保障していただきたい」

シラクサの主権。やはりそれが最大の焦点になるようだ。フィリオが浮かべる微笑に表面上変化はない。しかし視線と雰囲気が鋭くなった。

「書類の中にも『シラクサには自治を認める』と明記しておいたはずですが」

「いかにも。そして『アルジャーク帝国の宗主権を認めるならば』という但し書きもありましたな」

アルジャーク帝国の宗主権を認める。それはすなわち、合法的な「天の声」を認めるということだ。

「ヴェンツブルグも帝国の宗主権の下にあります。シラクサだけ例

外的な扱いにしているわけではありません」

「失礼ながら、ヴェンツブルグとシラクサでは条件が異なりますでな」

口を挟んだのは、商工会の長老ハルバナだった。彼の言う通りヴェンツブルグとシラクサでは、特に地理的な条件が異なる。ヴェンツブルグが陸続きなのになのに対して、シラクサは海を隔てた彼方にある。

「シラクサにはシラクサの文化があり歴史があり価値観がある。現地のことは現地の住民に任せてもらうのが一番じゃと思いますがのう」

陸続きであるということは、文化や歴史や価値観といったものを共有しているということだ。簡単に言えば、ヴェンツブルグの場合、帝国の一部であるという認識が双方にある。

しかし、シラクサにはその共有項がない。シラクサはあくまでも海の向こうの“異国”でしかなく、その結果宗主権を盾に体のいい植民地扱いをされるのではないか、とガマラヤたちは危惧しているのだ。

そうなれば待っているのは搾取だ。どれだけ海上交易が盛んになろうとも、その恩恵がシラクサにもたらされることはない。それどころか、今もっているささやかな富さえも搾り取られてしまうだろう。

そのような未来を、黙って受け入れるわけには行かない。主権の確保は、そのためにどうしても必要なのだ。

「クロノワ陛下はそのようなことはされません」
「クロノワ陛下はそうでしょう。しかし後の方々はどうでしょうか？」

未来のことを持ち出され、フィリオは苦笑した。未来はいつだって不確かで見通すことなど出来はしない。まして次の皇帝はまだ生まれてすらいないのだ。

無論、主権を確保したからといって、アルジャーク帝国とシラクサが対等な関係になれるはずがない。地力、つまり国力の部分で差がありすぎるからだ。しかし建前の上だけでも平等な条約を結び、理不尽な“要請”を拒否する根拠を持ちたい。それがシラクサ側の切実な言い分だろう。

そのことはフィリオも理解している。しかし宗主権はアルジャーク帝国にとっても簡単には譲れない一線だ。

アルジャーク帝国がシラクサの内政に関与する正当な理由をもたなければ、シラクサには「帝国以外の国と組む」という選択肢が存在することになる。もしそんなことになれば、アルジャーク帝国は成果だけを横取りされた大間抜けになってしまう。そうでなくとも、よその国がシラクサにちょっかいかけてくることは大いにありえる。他の国の影響力を可能な限り排除するためにも、宗主権の確保は外せない条件であった。

そもそも、この「宗主権」からして譲歩した結果なのだ。

アルジャーク帝国にとって最も後腐れのない選択は、シラクサを完全に併合してしまうことである。しかしラシアートと相談し諸々の事情を考慮した結果、「宗主権を認めさせる」というのが最も現

実的な線だと判断したのだ。

「ただ、一方で助力をお願いしたい分野もあります」

海賊対策です、とガマラヤはいう。

「アルジャーク帝国には、一個艦隊をシラクサに駐屯させて海賊対策を行うことをお願いしたい」

それはフィリオにとっても、いや視察団のメンバー誰もが予想していなかった提案だった。

アルジャークが宗主権に拘るのは、ひとえにシラクサにおける権益を確保し、他国に手を出させないためだ。逆を言えば、それさえ達成できれば宗主権に拘る理由はない。

ガマラヤは「海賊対策」と言葉を選んだが、今重要なのは「シラクサにアルジャークの一個艦隊を駐屯させる」という点だ。シラクサにアルジャークの戦力が駐在していれば、他国に対してよい牽制となるだろう。つまり権益を確保し、他国の政治的な影響力を排除できる。

シラクサにしても身を守るための戦力を確保できるし、何よりも軍事的な分野で依存する代わりに政治的な分野では自立を保てる。

「艦隊の費用の一部は、シラクサにも負担をお願いすることになりますが……」

「承知しています」

結構です、とフィリオは頷いた。細かい数字については、これか

らさらに詰めることになるだろう。

「では、艦隊の拠点となる母港ですが……」

話し合いは夜遅くまで続き、その日だけでは終わらなかった。タフな、しかしやりがいのある交渉になりそうだ。

第八話　王者の器？（後書き）

次はイストパート。

ついにアルテンシア半島を目指します。お楽しみに。

第八話　王者の器？（前書き）

お気に入り登録件数が１９００件に到達しました！

この作品を読んでくださる全ての方に感謝しています。

本当にありがとうございます。今後もよろしくお願いします。

第八話　王者の器？

時間は少し遡る。

十字軍討伐にむけて本格的に軍を動かす前、シーヴァは新たに作られたベルセリウスの工房を訪れた。

今更になるが、この二人は主従の関係ではない。

シーヴァにとってベルセリウスは、
「優れた魔道具を供給してくれる、得がたい協力者」
であり、逆にベルセリウスにとってのシーヴァは、
「儂の魔道具を使いこなすための道具」
である。別に片方の評価が悪いわけではない。片方の性格が悪いだけだ。

繰り返すがこの二人の関係は主従ではない。いうなればもっと個人的な協力関係、二人だけの同盟とでも言えばいいかもしれない。ゆえにベルセリウスがシーヴァにへりくだることはないし、シーヴァがそれを咎めることもなかった。

「ベルセリウス老、少しよろしいか」
「ん？シーヴァか。面倒ごとならよそに行け」

ベルセリウスはシーヴァを一瞥すると、それで興味を失ったようですぐに作業に戻った。シーヴァもそれで気を悪くした様子はなく、手ごろな椅子を見つけると勝手に座った。

「老公に一つ頼みたいことがある」

「断る」
「イスト・ヴァーレという流れの魔道具職人を探し出して連れてきてもらいたい」
「断るといっておろう」
「供に騎士を何人か付けるので、諜報員との連絡は彼らに任せておけばいい」
「……お主も大概強引じゃな……」

呆れたように嘆息しながらもベルセリウスは作業の手を止めないし、シーヴァの顔を見ようともしない。無礼極まりない対応ではあるが、シーヴァのほうも慣れたもので、勝手に茶を入れて啜っている。

「しかし、イスト・ヴァーレか……」

懐かしい名じゃ、とベルセリウスは笑った。ただその笑い方は、弱者をなぶる強者を連想させる。

「お知り合いか？」
「まあ、の。それで奴は何をやらかしたのじゃ？」
「老公はハーシェルド地下遺跡をご存知か」
「知らん」

でしょうな、とシーヴァは笑った。ベルセリウスが自分の興味分野以外に無関心なのは周知だから、これは予想どおりだ。

ポルトールの西にはラトバニアという国があり、そのさらに西にジェノダイトという国がある。そしてこのジェノダイトの北にあるのが、神聖四国が一国サンタ・ローゼンである。

ハーシェルド地下遺跡は、このジェノダイトとサンタ・ローゼンの国境近くにある。その様式などから推察するに千年近く昔の、しかも教会に関係する遺跡のようだ、ということが今までに報告されている。

この遺跡をシゼラ・ギダルティという考古学者が発掘調査していたのだが、その調査をパトロンとして支援していたのが実はシーヴァであった。彼は教会勢力との武力衝突を早い段階から想定しており、その際に口撃する、つまり教会の正統性に疑問を起こさせるための材料を探していたのである。

実際にはその材料を手にする前に十字軍遠征が始まってしまったのだが、遠征がこの一回で終わるという保障はなく、むしろ第二次十字軍遠征が行われるであろうことをシーヴァは直感していた。

そこでハーシェルド地下遺跡である。

「シゼラには資金を援助する代わりに、定期的に報告書を送らせていた」

それがある日突然、その報告書が来なくなったという。不審に思ったシーヴァは各地に潜ませておいた諜報員に命じて、ハーシェルド地下遺跡とその発掘調査隊について調べさせた。

「結果はすぐに来た。『調査隊は全滅。遺跡は全壊』だったそうだ」

「そりゃ、不自然じゃな」

興味を持ったのか、ベルセリウスが視線をよこす。

夜盗にでも襲われたのだろう、というのが近くの町の住民の意見

だったが、諜報員もシーヴァもすぐに違和感を覚えた。

夜盗に襲われたということは、その目的は物取りのはずである。そうであるならば、遺跡を破壊する必要はない。ではなぜ遺跡は破壊されたのか。

「そこに見られては、知られてはまずいものがあった。ということじゃろうな」

誰にとってか。間違いなく教会にとってである。つまりシーヴァが探していた“教会の正統性を揺るがす何か”がそこにあった可能性がある。

「それで例のイスト・ヴァーレだが、一時期古代文字（エンシェントスペル）の解読要員として、弟子と一緒に発掘調査に参加していたらしい」

イストと弟子のニーナの二人は、調査隊が何者かに襲撃されて全滅する前に仕事を終えて旅立っている。つまりハーシェルド地下遺跡の、シーヴァが欲する情報を持っている可能性があるのは、現状ではその二人だけなのだ。

「イストに興味を持つ理由は分かった。が、なぜ儂にやらせる？」

「お知り合いなのだろう？」

ベルセリウスも元は流れの魔道具職人で、古代文字（エンシェントスペル）を読むことができる。あるいは何かの接点を持っているのではないかと思ったのが、今回その予想が的中した形である。

「……まあよい」

少しばかり意地悪く笑うシーヴァを無視して、ベルセリウスは立ち上がった。そして作業台の上を片付けて黒の外套を羽織る。手に持つのは、杖ではなく金属製の槌だ。

「久しぶりに、バカ弟子の顔を見てくるとするか」

そういって先代アバサ・ロット、オーヴァ・ベルセリウスは笑った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

二月に入ってオルギン率いるキャラバン隊がフーリギアのベルラーシを離れ、幼馴染であるオリヴィアと別れた後もイストたち三人はまだベルラーシにいた。

理由はひどく単純だ。曰く「柔らかいベッドで眠りたい」。

キャラバン隊がベルラーシにいた一ヶ月と少しの間、イスト、ニーナ、ジルドの三人は都市の外に停めた馬車の留守番役として居残り、結果としてその間は街を近くにして野宿も同然であった。

「このまま宿屋に泊まらず旅を再開するのか」

そう考えると三人ともテンションが上がらず、とりあえず宿屋でゆっくりしよう、という結論に達したのだった。

ベルラーシの街は新年のお祭り騒ぎから脱し、かなり落ち着きを取り戻していた。外からやって来た参拝客もそれぞれ帰路につき、街の人口密度は随分と下がっている。通りに溢れていた露店も姿を消し、街は日常の装いに戻り始めていた。一時期はどこも満室だっ

た宿屋も開き部屋が増えており、三人はそれぞれ個室を取ることができた。

「それじゃあ、とりあえず一週間ってことで」

一時期に比べれば随分と閑散とした宿屋の食堂で昼食を食べながら話し合った結果、三人は一週間程度ベルラーシの街で休息を取ることになった。イストはこの先アルテンシア半島を目指すつもりでいたのだが、十字軍遠征がこの先どう推移していくのか、それを見極めたいと思ったのだ。

もっともベルラーシの街と半島は随分と距離が離れている。伝わってくる情報は最新のものではないだろうし、また改ざんや誇張、伝え間違いなどもあるだろうから正確とは言い難い。大まかな概略しか分らないと割り切っておく必要があり、つまるところ情報収集の重要度はさほど高くない。

「シーヴァが有利か、それとも十字軍が有利か。その程度のことが分かればいいよ」

イストはそう言って呑気に禁煙用魔道具「無煙」を吹かした。結局のところのんびりしたいだけ、というのが弟子であるニーナの見立てだ。

ちなみにイストはアルテンシア同盟が生き残る未来を想定していない。十字軍に潰されるか、シーヴァと十字軍の戦いに巻き込まれて潰れるか、そのどちらかだろうと予想していた。実際にアルテンシア同盟は十字軍によって崩壊させられたわけだが、この時期少々の情報通ならば皆同じ未来を予想しえたであろう。

それはともかくとして。三人はとりあえず一週間ベルラーシの街に留まることにしたわけだが、それぞれの行動は個人主義で協調性に欠けていた。

最も規則正しい生活を送っていたのは、ジルドだろう。毎朝、まだ暗いうちに起きては街の外に出て朝稽古をしていた。宿で朝食を取ってからは街に繰り出すことが多く、日雇いの仕事などを見つけては精力的に動いているらしい。

「もっとゆっくりしていればいいのに」

イストなどはそう言って呆れたが、本人曰く「やることがないなら動いていたい性分」らしい。目的もなくダラダラと時間を過ごすのが苦痛なのだろう。

ニーナは部屋にこもっていることが多い。この前の試験で駄目出しを喰らった魔道具の作り直しをしているのだ。資料や魔法陣と睨めっこしながらどうすればより効率化できるか、頭を悩ませていることだろう。

その合間を縫いながら、「狭間の庵」の資料室からあさってきたセシリアナ・ロックウェルのレポートも読んでいる。

セシリアナは歴代アバサ・ロットの一人で、オリヴィアが連れていた黒猫の魔道人形「白（ヴァイス）」の製作者である。「白（ヴァイス）」からも分るように彼女は魔道人形の製作において優れた才を発揮し、その技術は二〇〇年たった今の時代でも他の追随を許さない

ニーナが興味を持っているのは魔道人形ではなく、義手や義足といった分野である。こういったものは機械的な仕掛けを含む魔道具

であり、特に関節部の機構などについてニーナはセシリアナのレポートを参照していた。

もっとも「作るのは課題が優先」と師匠であるイストに釘を刺されており、今はまだ参考になると思った部分をまとめているだけだ。そもそも難しすぎて作るところまで理解が及ばない。

こうしてニーナは早く一人前の魔道具職人になるべく日々修行に励んでいるのだが、時に頭の中が湯立つというか、許容範囲を越えるというか、そういう事態が起こる。

「……もう、無理、です……」

なかばゾンビと化しつつ息抜きのために街へと繰り出していく彼女の後姿を、その場に居合わせた者たちは驚愕と戦慄と呆れの眼差しで見送るのだった。

「まだまだ甘い」

師匠は偉そうにそうのたまう。イストの見るところ、ニーナはやる気はあるがそれが空回りしているところがある。気負いすぎれば思考は硬直しやすく、いいアイディアは生まれない。弟子の思考を柔軟にするためにも何かイタズラを仕掛けてやろうか、とイストは楽しそうに笑う。

「師匠が楽しみたいだけじゃないですか！？」

弟子の心の叫びは順当に無視された。

柔軟な思考の持ち主である当のイストは、弟子をからかって遊ん

でいるだけではなかった。また新たな魔道具を開発すべくアイディアを探していたのである。「無煙」を吹かしながら。

彼の場合、机に向かって頭を悩ませていればアイディアを閃く、ということはほとんどない。彼が机に向かうのは、アイディアを閃いた後である。机の上でアイディアに肉付けを行ない一つの理論に仕立てていくのである。

「閃きは直感だよ。もっとも、直感は知識と経験の上に成り立つものだけど」

それが、イスト・ヴァーレという魔道具職人のモットーであった。

それはともかくとして。魔道具のアイディアすらない段階で、イストが部屋にこもっていることはほとんどない。大抵の場合、彼は街中をぶらつきながらアイディアを考える。じっとしているよりは動いていた方が閃きやすいのだ。

「おや、キャラバン隊に置いて行かれたのかい？」

特に目的地もなく通りを歩いていると、食堂の女将さんにそう声をかけられた。そこは少し前にオリヴィアとオリーブ油を売りに行った食堂で、どうやら顔を覚えていてくれたらしい。

「違うよ。あの時は雇われていただけ」

「あらまあ、それじゃあクビになっちゃったの？」

これにはイストも苦笑するしかない。護衛の必要がなくなっただけなのだが、確かにクビになったという見方もできる。

「そんなとこ」
「大変だねぇ……。今度ウチにおいでよ。安くするから」
機会があったら、とだけ答えイストはその食堂の前を通り過ぎた。通り過ぎようとした。
「まあそう言うな。ちょうど昼時じゃし、少し付き合え、バカ弟子が」
その声はイストの良く知る、（悪い意味で）忘れようとしても忘れられない声だった。

第八話　王者の器？

二人の男が食堂のカウンターに並んで座っている。二人は傍目にも歳が離れていることが明らかで、年齢だけならば祖父と孫の関係が一番近いだろう。もっとも、実際の関係は師弟だ。二人とも色違いだが同じデザインの外套を羽織っており、老人の傍らには金属製の槌が立てかけられている。

店の中から響いた声が師匠（オーヴァ）のものであると気づいた瞬間、イストは全速力で逃走を試みたが、師匠（オーヴァ）の展開した魔法陣によってあえなく捕獲。首根っこつかまれ、引きずられるようにして店の中につれてこられたのである。

「それで？ここで何してんだよ」
「飯を食っておる」

見て分らんか、とオーヴァ・ベルセリウスは目の前に置かれた料理を示した。白い湯気を立てるビーフシチュー、ドレッシングをかけた温野菜のサラダ、そしてバターを塗ったパンが二つ。なかなかに見事な料理である。

「いや、そうじゃなくて……」
「はい、お待ちどう様」

ぬけぬけと答えをはぐらかす師匠に頭を抱えるイストの前に、カウンターの向こう側から食堂の女将さんが料理を渡す。三種類のホットサンドとコーンポタージュ。こちらも美味しそうである。

目の前に置かれた料理とコッチを無視して食事を続けるオーヴァ

を見比べ、どちらを優先すべきかをイストは考える。一秒にも満たない時間で天秤は料理に傾き、イストも隣に座る師匠を無視して食事を開始した。呼び止めたのはオーヴァの方だし、用があるならあっちから話しかけてくるだろう。

しばらくの間、師弟は何も言わずに食べ続ける。

「……弟子を取ったらしいの」

「ん？ああ、まあね」

ちぎったパンをビーフシチューに浸して口に放り込みながら呟くオーヴァに、イストの方もホットサンドにかぶりつきながら答える。まったく、どこで知ったのやら。

「腕輪を渡すつもりか？」

オーヴァの言う“腕輪”とは、アバサ・ロットの工房「狭間の庵」のことだ。これを渡すということは、つまりアバサ・ロットの名を継がせることを意味している。

「さあ？知らね」

現状では本当に何も考えていない。弟子であるニーナがアバサ・ロットの名に相応しい腕を持つようになり、なおかつ本人が望むのならば継がせてもいいとは思っている。しかし、ニーナの目標は父親の工房である「ドワーフの穴倉」を継ぐことのはずで、彼女が自分のほうからアバサ・ロットを継ぎたいと言うことはないだろう。

「ま、腕輪の持ち主はお前じゃ。好きにすればよい」

それはイストがオーヴァからアバサ・ロットの名を継いだ日にも言われたことだ。ほこりを被っている魔道具を売り払うも良し。保管してある資料を世に出しても良し。受け継いだ一切については好きにすればいいと言われたのだ。ただし、アバサ・ロットの名を名乗る場合には決して魔道具を金で売るな、と釘を刺されてもいる。

それっきり二人は食事に専念して何も喋らない。何も喋らないが、お互いにそれを気まずく思っている雰囲気はなく、二人は黙々と料理を胃袋に収めていった。

「……おぬしに会いたがっている者がいる」

料理を全て平らげお茶を啜りながら余韻に浸っているとき、ようやくオーヴァが本題を切り出した。

「オレが弟子を取ったっていう情報はソイツから？」

「まあ、そんなところじゃ」

それを聞いてイストは顔をしかめた。ということはその人物はイストについて情報を集めたことになる。つまりはそれだけの組織力を持っているということだ。何が目的か知らないが、組織を率いる人間が自分に用があるとなると、あまりいい予感はしなかった。

「物騒な話じゃないよな？」

イストは軽く首を捻って、食堂の隅の席に座っている四人組に視線をやった。四人はそれぞれ腰に剣を下げている。武器を持っていること自体は珍しいことではないが、彼らは玄人、しかもどこかで正規の訓練を受けた騎士であろうとイストは直感した。そしてそんな連中がこの場にいるということは、オーヴァとなんらかの関係が

あるのだろう。

（護衛兼連絡員、ってところか？）

断るならば力ずく、などという話にならなければいいがと思いつつも、師匠（オーヴァ）が出張ってきている以上結局自分の意思は無視されるんだろうな、とイストは諦めの境地に達しうなだれた。

そんなイストの様子を、オーヴァは（恐らくは意図的に）無視する。

「ハーシェルド地下遺跡は知っておるじゃろう？」

「ん？ああ、一時期発掘を手伝った」

「会いたがっておるのは、その発掘に資金を出しておったパトロンじゃ」

それを聞き、イストの目に興味の色が出てくる。発掘を行なっていた考古学者のシゼラ・ギダルティは、「パトロンはアルテンシア半島の方」と言っていた。その時はどこかの領主の一人かと思っていたが、この時期に旅をしている自分を探し出せるほどの広範な情報網を持っているアルテンシア半島の有力者といえば、一人しか思いつかない。

「なんでまた？」

わざわざハーシェルド地下遺跡の名前を出したのだから、今回の用件は遺跡がらみであろう。それならば一時的に古代文字（エンシェントスペル）の解読をしていたイストではなく、発掘を取り仕切っていたシゼラのところに話をもって行く方がよいのではないだろうか。

「『調査隊は全滅。遺跡は全壊』、だそうじゃ」
「そりゃまた物騒なことで」
軽い調子で話しながらも、イストの視線は鋭い。
「……犯人は？」
「さて、巷は夜盗の仕業だと思っているらしいがのう……」
オーヴァが言葉を濁す。ここでこれ以上は話したくないということだ。この都市ベルラーシは、そしてフーリギアの国そのものが教会の勢力内。滅多な話はしたくないのだろう。しかしそのオーヴァの態度が、イストの確信を深めた。
「行きたくないって言ったら？」
「そうか行く気になったか」
「……だよな。そうなるよな……」
予想通りの展開にイストはうな垂れる。こうして次の目的地はアルテンシア半島に決定したのであった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
イスト・ヴァーレ、ニーナ・ミザリそしてジルド・レイドの三人は、オーヴァ・ベルセリウスと四人の騎士と共にアルテンシア半島を目指してベルラーシを旅立った。合計人数は八人で、しかもオーヴァたちは馬車一台に馬四頭を連れており、随分な大所帯になったといえる。
イストたち三人は、だいたいは馬車に乗って移動した。が、馬車の中は荷物で溢れており、乗り心地がいいとは言い難い。だが、そ

れもある意味では仕方がない。旅をするとなれば食料や調理道具をはじめ様々なものが必要になる。また今の冬の時期には野宿のための装備が必要であろう。誰もが空間拡張型や亜空間設置型の魔道具を持っているわけではないのである。

もっともオーヴァは持っているはずなのだが、今回は使わなかった様子だ。あるいは別行動をすることもあったのかもしれない。

ベルラーシを旅立って四日。一行は街道沿いの見晴らしのよい平原で野宿をしていた。用意してあったテントを張り、すでにそれぞれ休んでいる。

幾つか張られたテントの中心に、煌々と光を放つマグマ石が置かれている。そしてその傍らに一つの人影があった。寝ずの番をしているイストである。

三人だけで旅をしていたときは、寝ずの番をする必要などなかった。「敵探査（エネミーサーチ）」という魔道具を使い、害獣や不審者が近づいてくれば警報が鳴るようにしてあったからだ。しかし、今回「敵探査（エネミーサーチ）」は使えない。連れている馬に反応してしまうのだ。

（要改良、と……）

今までイストは馬を連れて旅をしたことがない。空間拡張型魔道具「ロロイヤの道具袋」のおかげで、馬を必要とするほど荷物に苦慮するということがないのだ。だから「敵探査（エネミーサーチ）」もそれにあわせて作ったのだが、今回のようなことがあるならば改良したほうがいいかもしれない。

欠伸をしながら、イストはそんなことを考える。まったく、「必

要は発明の母」とはよい言ったものである。

「師匠……」

「ん？まだ寝てなかったのか？」

「なんか、寝付けなくって……」

そう言いつつ馬車から顔を出したのは、イストの弟子であるニーナだった。彼女とジルドには、オーヴァたちと一緒にアルテンシア半島に向かう理由についてすでに説明してある。

その際、ハーシェルド地下遺跡の発掘調査隊が全滅したことも伝えてある。ニーナにしてみれば、シゼラ・ギダルティをはじめ二ヶ月近く一緒に働いた人たちが死んだ、と言われたのである。昼間はいつもどおりに振舞っているように見えたが、やはりまだショックが抜け切っていないようだ。

「さ湯でよければ飲むか？」

「……もらいます」

イストはマグマ石の上に掛けてあったやかんから、マグカップにお湯を注いでにーなに渡した。彼女は受け取ったカップを両手で暖めるように持ち、マグマ石のそばに腰を下ろした。

一口、お湯を飲む。

「あったかい……」

どこかホッとしたように、ニーナの表情が少し緩んだ。しかし、すぐに俯きつらそうに声を絞り出す。

「……みんな、いい人たちでした……」
「……そうだな」
「……みんな、優しくて好くしてくれて……」
「……そうだったな」
「なのに、なんで……！」

とうとう、ニーナは喉を詰まらせながら泣き出した。握り締めたローブにはシワができ、そこに涙の粒が幾つも落ちる。

イストは何も言わない。抱きしめることもしなければ、慰めの言葉を掛けることもしない。かといってどうすべきか迷っているわけでもない。ただ何もせず、そこにいることを選んだのだ。

「……すみません、なんか、泣いちゃって……」

少し落ち着いたニーナが、鼻を啜りながら顔を上げる。なんとかして涙を堪えようとしているが、頬にできた筋には月の光が反射し続けている。

「いいさ、泣いてやれ。『聖歌の代わりに慟哭を。かくて死者は眠りけり』だ」

イストがニーナも知っている教会の箴言を口にする。仰々しく聖歌を歌うよりも、本当に悲しいのなら声を上げて泣き悲しめばいい。それが何よりの弔いになる。そんな意味だったはずだ。

ニーナの目の端に溜まる涙の量が多くなる。ついにニーナは声を上げて泣き出した。湧き上がる悲しみの全てを、泣き声と涙にして夜空と大地に帰していく。彼らの死を悲しんでいる人間が一人、確かにここにいるのだと残ることのない、しかしなくなることのない

時間に刻む。

一日にも半日にも、一時間にも半時間にも満たないほんのわずかな時間、その時間の間彼女は確かに彼らの死を悼み嘆き惜しみ、泣き声を上げて涙を流したのだ。

「……ほらよ」

ようやく落ち着いてきた頃、イストはタオルをニーナに投げて渡してやる。彼女はもう声を上げて泣くことはなかったが、いまだ止めどなく涙を流す目をタオルに押し付けて隠した。

「……師匠は悲しくないんですか……？」

二ヶ月近く一緒にいた人たちが夜盗に殺されたっていうのに、とニーナは涙声で聞いた。彼女には一通りの説明はしたがまだ今回の裏の事情、つまり教会が関与している可能性が高いということはまだ教えていなかった。

とはいえそれは、今は些末なことであろう。

「……残念だとは思うが、悲しくはないな」

イストは正直に答えた。魔道具を売り歩いたり気に入った相手に渡したりしていれば、なんらかのトラブルに巻き込まれるなんてことはよくある。その中で知り合いが怪我をしたり死んだりということは少なからずある。イスト自身、人を殺したことだってあるのだ。長年旅をして、そういう感情が麻痺している部分もあるのだろう。

「きっとどこか壊れてるのさ」

おどけるように、しかし自嘲気味にイストは笑った。

「……わたしも、そうなった方がいいんでしょうか……？」

「まさか」

心配そうに問う弟子に、イストは即答した。当たり前のことを当たり前に感じる。それは魔道具職人以前に人間としての問題だ。そんな根っこの部分を無理やりゆがめる必要などない。もっとも勝手に歪んでいくのを止める気はないが。

「それとも、そんなふうになりたいのか？」

「……なりたく、ありません……」

「なら、これから先も泣き続けろ」

これから先、同じようなことがあるたびに涙を流せばいい。そうやって泣くことができるならば、きっと大丈夫だろう。

「……はい」

ようやくニーナの表情が少し明るくなる。それを見たイストは、ホッとしつつも頭の冷たい部分では別のことを考えていた。

（やっぱりこいつはアバサ・ロットには向かないな……）

アバサ・ロットとして大陸中を巡れば、人の醜い部分をいやでも目にすることになる。いや、それどころか自ら好んでそんな部分に首を突っ込むようなまねをするのだ。だからアバサ・ロットになるには、黒くて醜い人間の負の面を見たときに「快なり」と笑い飛ばせるような歪んだ精神構造をしていなければならない。少なくとも

イストはそう思っている。目の前の状況を冷たく客観的に、まるで舞台でも見ているかのように眺められないのであれば、アバサ・ロットになどならないほうがいい。

歴代のアバサ・ロットが変人ばかりなのは恐らくそのせいだろう。アバサ・ロットとしての活動は誰かに強制されたものではない。変人のように図太くて歪んだ精神でなければ、続けようなどと思えないのだ。

（ま、別にどうでもいいけど）

ニーナを弟子にしたのは、彼女がアバサ・ロットに向いていると思ったからではなく、魔道具職人に向いていると思ったからだ。それにイスト自身、まだ後継者を心配しなければいけないような年齢でもない。のんびりやればよかろう。

「ところで師匠、オーヴァさんのことなんですけど」

「……師匠がどうかしたか？」

泣きはらした真っ赤な目を好奇心の色に染めながら、ニーナはイストの方に視線を向けた。逆にイストは逃げるように目をそらす。

「いえ、たいしたことはないんですけど」

師匠（イスト）のこういう反応は新鮮だ。ニーナはここぞとばかりにいつもやられている分をやり返そうとする。が、しかし……。

「なんだ、師匠にも教えを請いたいってのか？」

「い！？」

「まあ確かにオレでは力不足かもしれないなぁ。お前のそのやる気

に免じて、どれ今からでも師匠に……」
「ごめんなさいなんでもないです師匠はいい師匠です！？」

腰を浮かせるイストを、ニーナは外套の端っこを掴んで必死に止める。イストでさえやり込めてしまう変人（オーヴァ）にモノを教わるなど、考えただけでも気絶ものだ。一人前の魔道具職人になる前に廃人になる自信がある。

先ほどとは別の理由で涙目になる弟子を見て満足したらしいイストは、禁煙用煙管型魔道具「無煙」を取り出して吸い白い煙（水蒸気らしいが）を吐き出した。

「ま、師匠がシーヴァのところにいるって聞いたときは驚いたけどな」

オーヴァの護衛に付いた四人の騎士がシーヴァの直属部隊所属だったこともあり、その辺の事情はすでに説明してニーナやジルドも知っている。

「そうですか？」

イストの言い分にニーナは首を傾げる。先代のアバサ・ロットであれば魔道具職人としての腕は超一級のはずで、そのような職人であれば権力者たちはこぞって囲い込みたがるはずである。

例えるならば、腕のいい魔道具職人というのは、金の卵を産む魔獣のようなものである。好き勝手をされて強力な魔道具が一般に出回れば、あちらこちらで被害が出ることは容易に想像できる。魔道具という金の卵は欲しいが、無理に取り上げようとすれば手痛いしっぺ返しを食うだろう。

ではどうすればよいのか。檻に閉じ込め、しかし可能な限り宥めすかして機嫌を取るのだ。

権力を持てば持つほど、人は優秀な魔道具職人を囲い込みそして管理しようとする。それは欲望に起因することもあれば、治安維持の一環であったりもする。いずれにせよ権力者たちは腕のいい魔道具職人を法律や規制という檻の中に閉じ込めようとするのだ。

しかしその一方でその檻の中は豪勢に飾り付けられている。何不自由ない生活、大きな工房をはじめとする働きやすい環境、そして職人としての名誉。腕が良ければよいほど、その待遇は破格のものになっていく。権力者たちはそうやって、魔道具職人たちを押さえつけるのではなく宥めすかすのだ。

アバサ・ロットという特殊な例はともかくとして、それが世の中の常識である。ならばアバサ・ロットの名をイストに譲ったオーヴァが、シーヴァという覇王のもとにいるのはむしろ当然ではないだろうか。ましてや名を譲った直後の彼は工房を持っていなかったはずなのだから。

「甘い。あの無礼厚顔を地で行く師匠だぞ？王だの貴族だの、そんな連中とそりが合うと思うか？」

「大変そうですね……」

衝突している場面がたやすく想像できる。しまもやり込められているのは王侯貴族のほうだ。そのうち嫌気が差して雲隠れするオーヴァの様子まで克明に想像できてしまう。苦労してるんだろうなぁ、とニーナはまだ見ぬシーヴァ・オズワルドに思わず親近感を抱いてしまった。

「それにしても、なんでシーヴァ・オズワルドだったんでしょうか？」

シーヴァに不足があるとは思わない。しかし話を聞く分には、オーヴァがシーヴァのもとに腰を落ち着けたのは、彼がまだアルテンシア半島のさらに北西にあるロム・バオアにいた頃だ。その頃であれば、彼以上の有力者など沢山いたであろうに。

「多分、師匠は自分が造った魔道具で世界とか歴史とか、そういうものが変わるところを見たくなったんだ。シーヴァはそのための、言葉は悪いが『道具』なんだろな」

なぜシーヴァを選んだのか。それはあの食堂でイストもオーヴァに聞いていた。

『シーヴァの、アレを使いこなして見せたぞ』

アレ、と言われてイストが思いつくのは一つしかなかった。

――――「災いの一枝（レヴァンテイン）」

オーヴァが作り上げた漆黒の魔剣で、シーヴァの愛剣でもある。イストが知っているのはまだ術式を練り上げている段階だったが、その術式と使う予定の素材を聞いて、果たして使いこなせる人間がいるのかどうかと疑問に思ったことを覚えている。

その魔剣を、シーヴァは使いこなしたという。

「その時確信したんだろうな。『コイツならば』って」

信頼にたる確証はなにもない。しいて言うならば直感である。ただし、アバサ・ロットとして三〇年以上大陸を渡り歩いてきた者の直感である。そしてその直感が正しかったことは、今のアルテンシア半島を見れば良く分るというものだ。

「そういえば、お前にアバサ・ロットの名前の由来って話したっけ？」

「いいえ聞いてないです」

ニーナはブンブンと音がしそうなくらい勢い良く首を振った。何かあるだろうとは思っていたが、なかなか機会がなくて聞けなかったのだ。

「初代のアバサ・ロットの名前がロロイヤ・ロットだってことは前に話したよな？」

だからアバサ・ロットの「ロット」はロロイヤの姓名そのものである。では「アバサ」のほうはどうなのか。

「『愛すべき馬鹿どもに捧ぐ』」

「……はい？」

「いやだから『愛すべき馬鹿どもに捧ぐ』だって。そこから音節ごとに一文字ずつ取って『アバサ』」

「……え？え？えええぇぇぇえええ！？」

イタズラを成功させた悪餓鬼のように、イストはニヤニヤと意地悪く笑う。もっとそれらしいエピソードでもあるのかと思っていたニーナは顔を引きつらせている。

「ほんと、ネーミングセンスの欠片もないテキトーな付け方だよな」

イストも苦笑し嘆息する。

「だけど、これはロロイヤの意地の表れでもある」

ロロイヤは天才的な腕を持つ魔道具職人で、特に空間拡張型や亜空間設置型の魔道具製造に秀でていた。イストやニーナも使っているが、この種の魔道具は恐ろしく便利だ。それはロロイヤの時代も同じで、それゆえ彼は彼の魔道具を手に入れようとする人々にしつこく付きまとわれたという。

「それで『愛すべき馬鹿(アバ)どもに捧(サ)ぐ』、ですか……」

ニーナの声音は微妙だ。呆れが半分以上だが、職人の端くれとして共感できる部分も確かにある。

「そ。そしてその系譜たるアバサ・ロットは、名前からして『気に入った相手にしか魔道具を譲らない』と宣言しているわけだ」

そしてそれが歴代のアバサ・ロットたちが旅を続けた理由でもある。一所に留まり続ければ問題が起きやすいという事情もあるが、それよりも旅をして各地を回ったほうが気に入った人間を見つけやすいという理由のほうが大きい。

「オレはそういうあり方が気に入っている。『コイツにはこんな魔道具が合う』って考えながら作るのは楽しいしな」

例えば、イストはクロノワに「雷神の槌(トールハンマー)」という魔道具を渡した。しかし、この時点ではその魔道具のもとになった魔弓「夜空(ミー)を切り(ティア)

裂く箒星」もまだイストの手元にあった。

魔道具としての性能を比べれば、威力や射程を制御できる「夜空を切り裂く箒星（ミーティア）」のほうが高性能であるといえる。しかしクロノワは魔導士ではないし、戦場においては軍を統率する立場である。

そのような彼が「夜空を切り裂く箒星（ミーティア）」を持っていても役には立たない、とは言わない。しかしより扱いが簡単な「雷神の槌（トールハンマー）」の方が役に立つ、とイストは考えたのだ。

しかし、イストが考えるのはここまでである。もちろん魔道具の性能を十全に引き出して、思っても見なかった力を引き出して驚かせてくれれば嬉しく思う。しかし彼の場合はそこまでなのだ。魔道具を渡した人間がそれを使ってなにを成し遂げたのか、その部分にイストは大概無頓着であった。

「オレはそれでいいと思ってる。オレは魔道具職人だ。その範疇から出ようとは思わない」

イストは「無煙」を吸い白い煙（水蒸気と主張している）を吐き出す。それから、「だけど」と続けた。

「だけど、師匠はその先を見たくなったんだろうな……」

それが良いとか悪いとか、イストは何も言わなかった。

第八話　王者の器？

イストを捕獲した（被捕縛者の主観）オーヴァ一行がアルテンシア半島の入り口であるゼーデンブルグ要塞を視界に捉えたのは、大陸暦１５６５年２月１８日のことであった。本来であればもう少し早くここまで来られたのだが、半島の各地で十字軍が敗退しているせいか各地が少なからず混乱しており、また意識的に情報を集めながら来たため時間がかかってしまったのだ。

アルテンシア半島から十字軍を駆逐せんと奮戦しているのは、間違いなくシーヴァ・オズワルドである。しかしその彼もまだ最後の仕上げであるゼーデンブルグ要塞の奪還はなしていないようで、遠目で確認したその要塞には十字をあしらった教会の旗がたなびいていた。

「要塞はいまだ十字軍が占拠、か……」

一行はゼーデンブルグ要塞を一望できる小高い丘の上に馬車を止めテントを張った。少人数のこの一行だけならば、夜闇にでもまぎれて要塞の脇をすり抜けて半島内に入ることも出来るのだろうが、騎士たちが次のように主張したのだ。

「陛下は必ずや近いうちにゼーデンブルグ要塞奪還のために動かれる」

だから下手に動かず要塞の近くで待っていれば、シーヴァのほうからこちらに向かってくる、というのだ。

余談になるが、シーヴァはこの時点ではまだ「アルテンシア統一

王国」の設立を宣言しておらず、よって彼はまだ国王ではなかった。しかし騎士たちが「陛下」の尊称を使ったということは、すでに王者としての実態を備えていたということであろう。

実際、シーヴァに味方した五人の領主たちは彼の臣下であり、領主を臣下とするシーヴァは正しく王であると言える。

閑話休題。話を元に戻そう。

四人の騎士たちは要塞の近くでシーヴァを待つことを主張したが、その意見にイストは懐疑的であった。

ゼーデンブルグ要塞にいる十字軍は目算で十万程度であろうか。元々の総勢が三二万であったことを考えると、実に三分の一以下である。シーヴァに相当手ひどくやられたことが、容易に想像できた。

その想像を肯定するかのように、要塞内は遠目でもはっきり分るほどに活気がなく、全体的に焦燥しきっている。ひるがえる旗も、汚れや破れが目立ちどこか弱々しくて頼りない。

「放っておいても撤退するんじゃないのか？」

十字軍が撤退し要塞が空になれば、奪還のためにわざわざシーヴァが動くことはあるまい。

しかし騎士たちはイストの意見を否定した。オーヴァまでもが苦笑を浮かべている。

「陛下ならば必ず動かれる」

「ま、ヤツなら自分の手で決着をつけるじゃろうな」

オーヴァにまでそういわれては、イストとしてはもう黙るしかない。それにイストはシーヴァの人となりを知らない。それを知っている五人が口を揃えて「来る」というのであれば、来るのであろう。来る前に十字軍が撤退したのなら、その時に動けばいいだけの話だし。

そして2月21日、ゼーデンブルグ要塞に一団の軍勢が迫った。言うまでもなく、シーヴァ・オズワルド率いるアルテンシア軍である。

「ホントに来たよ……。働き者だねぇ」

呆れたように笑いながら、イストは「光彩の杖」に魔力を込める。するとアルテンシア軍の様子が拡大された。展開した魔法陣によって空気の密度を操作し、擬似的なレンズを作り出したのだ。

アルテンシア軍は要塞から弓を射ても矢が届かないだけの距離を保ち一旦停止した。シーヴァが率いているこの軍勢は、要塞に立てこもっている十字軍とはまったく正反対の様相を示している。つまり、士気が高く自信に溢れていることが遠目にも良く分り、翻る旗は力強くて頼もしい。

「む、動くぞ」

オーヴァの言葉が早いか、アルテンシア軍から騎士が一騎駆け出していく。少し遅れて軍全体も動き出す。

「師匠」
「うむ」

オーヴァもまた「光彩の槌」に魔力を込め、イストと同じ魔法陣を展開する。そうやって作った空気のレンズが追うのは、一騎駆けをする騎士である。

その騎士は漆黒の鎧に身を包み、しかし兜は被っていなかった。無造作に伸ばした黒い髪の毛が、風に煽られて暴れている。眼光鋭く前を見据え、口元には獰猛な笑みを浮かべていた。

そして何よりも目を引くのは、その騎士が水平に構えた漆黒の大剣である。イストたちが見守る中、その大剣は主である騎士の魔力を糧として黒き風を発生させた。

「あれが『災いの一枝（レヴァンテイン）』か……」

イストが実物を見るのは、これがはじめてである。しかしその術式や使用された素材については知っており、あの騎士のように使いこなしてみせるには膨大な魔力が必要であることも容易に想像できた。

つまり、「災いの一枝（レヴァンテイン）」を使いこなすあの騎士こそ、シーヴァ・オズワルドその人なのだろう。

シーヴァは発生させた黒き風を、まるで障壁のように自分と馬の周りに展開する。要塞の城壁の上にいる十字軍の弓兵たちは彼に矢を集中させるが、黒き障壁は雨粒を弾き飛ばすかの如くにそれらの矢を寄せ付けない。

黒き風を纏ったシーヴァは、降り注ぐ矢の雨を意にかえすこともなく戦場を駆け抜ける。

「まるで黒き稲妻のようだな……」

感嘆したようにジルドが呟く。そしてその“稲妻”という評価に恥じることなく、シーヴァは城門めがけて疾駆し、そして速度を緩めることなくそのまま突撃し鋼の城門を突き破って要塞内に踊りこんだ。

「おいおい……」

呆れとも驚愕ともとれない呟きをイストが漏らす。しかしその横顔を見たニーナは顔を強張らせた。

イストの両目は大きく見開かれており、その口元は喜悦に歪んでいる。喜んでいる表情のはずなのに、見る者の背中にうすら寒いものを感じさせずにはおかない。

「取るなよ。アレは儂のモノじゃ」
「分ってるよ」

オーヴァに釘を刺され、イストは口を尖らせながらその歪んだ笑みを引っ込めた。それから横目でジルドのほうを見ると、固い表情と剣のように鋭い眼差しで戦場を、いやシーヴァを睨みつけている。

（おっさんも思うところ有り、か……）

楽しくなりそうじゃないか、とイストは内心でほくそ笑んだ。そうこうしているうちにアルテンシア軍の兵士たちは次々とゼーデンブルグ要塞の中に侵入していく。ある者はシーヴァがこじ開けた城門をくぐり、ある者は城壁を乗り越えて要塞の内側に乗り込んでいく。

それに対し十字軍はもはや逃げの一手だ。彼らの中にあったはずの戦いを求める意思は霧散し、恐怖に塗りつぶされた思考はただ要塞の外に、つまりはアルテンシア半島の外に逃れることを希求する。まるで猟犬に追いたてられる兎のように、十字軍は半島からたたき出されたのであった。

「さて、では行くか」

一方的な戦いが一段落したのを見計らって、オーヴァが腰を上げた。戦場を見下ろしていた小高い丘から降りて、一行はゼーデンブルグ要塞へと向かう。

要塞には表門ではなく裏門、つまりシーヴァたちが攻めた側から入った。要塞の外の大地には大量の矢が突き刺さっており、また城壁の上では戦死した十字軍兵士の死体がいまだとめどなく血を流している。

そんな、戦いのあとの生々しい様相を見たニーナは顔を青くし目には涙を溜め、何かを堪えるように口元を手で覆った。殺されたばかりの死体が転がる戦場跡に来たことなど、彼女はこれが初めてであろう。

「ニーナ、馬車の中に入っていてはどうだ?」

ニーナの様子に気がついたジルドはそう勧める。彼女は迷うような素振りを見せたが、師匠であるイストから「いいから入ってろ」と言われ、青白い顔で一つ頷いてから馬車の中に身を隠した。

「やはりニーナには辛いようだな、ここは」

「本来、魔道具職人は戦場とは縁がないからな」

要塞の外で穴を掘り遺体の埋葬を行っている兵士たちを横目で窺いながら、イストとジルドは言葉を交わす。魔道具職人のクセに真新しい戦場跡で整然としていられるイストやオーヴァの方こそ異常なのである。

シーヴァが壊した城門の前には、二人の兵士が見張りとして立っていた。最初は明らかに警戒の目を向けてきた彼らも、四人の騎士の一人が懐から取り出した証書を見せると態度を一転させ一行を要塞の中に通した。

「報告して指示を仰いでくるので、しばらくお待ちを」

邪魔にならないところに馬車と馬を停めると、騎士のうちの二人がそう言って建物の中に入っていった。

手持ち無沙汰になったイストは、馬車の車輪に背中を預けて「無煙」を取り出し吹かす。白い煙（水蒸気だ）を吐き出しながら周りを見渡せば、アルテンシア軍の兵士たちが忙しく動き回っている。

イストの見るところ、そうやって働いている兵士たちの表情は皆明るい。勝ち戦の後なのだから表情が明るいのは当たり前なのだろうが、その奥には充実した誇りが見え隠れしている。

（「自分たちは今国を造っている」。そういう自負があるんだろうな）

しかし「歴史を造っている」という自負を持っているのはこの要塞内においてただ一人、シーヴァ・オズワルドだけであろう。その

意識の差が、そのまま器の差であるともいえる。彼は正しく「王の器」を持っているのだ。

「『儂のモノだから取るな』か……」

変人に気に入られて大変だな、とイストは自分のことを棚上げしてシーヴァに同情した。表面上、だが。

「師匠……」

イストが「無煙」を吹かしていると、さっき引っ込んだばかりのニーナが馬車から出てきた。顔はまだ青白いが、幾分落ち着いたようである。

「もういいのか？」

「はい……。馬車の中で膝を抱えていても、仕方がないですから」

イストが寄りかかっている馬車の前を、死体を載せた荷台が通り過ぎていく。シーヴァは敵味方関係なく全ての戦死者を埋葬するようにと命じたらしいが、敵兵の死体の扱いはやはりぞんざいになる。イストが横目で弟子を窺うと、眉間にシワを寄せて目をそらしていた。

そこへ、報告へ向かった騎士たちが戻ってきた。

「陛下は、今はまだお忙しい。すまないが謁見は明日の昼以降になりそうだ」

「ん、了解」

イストは特に文句は言わなかった。要塞を奪還した後に地味で煩

雑だが重要な事後処理が待ち受けていることは、軍事に関してはまったくのド素人であるイストでも容易に想像がつく。

「ただ、相部屋しか用意できなかったんだが……」

言いにくそうにして騎士がニーナとジルドのほうに視線を向ける。ゼーデンブルグ要塞は常時十万の軍勢を駐在させていた大要塞である。当然、それだけの兵が生活するための部屋も揃っていたはずだ。加えて今回シーヴァが率いている軍勢の数は十万以下で、にもかかわらず相部屋しか確保できなかったということは、勝ち戦の興奮の裏側にある少しばかりの混乱を思わせた。

「ワシはそれでもかまわぬ」
「わたしも大丈夫です」

二人の言葉に騎士はほっとした様子を見せる。もう少し落ち着いたら個室を用意していると思います、と告げてから彼はオーヴァのほうに視線を向けた。

「ベルセリウス老には個室を用意してありますので」
「ん？儂も相部屋でよいぞ」
「来んな。こっちからお断りだ」

まるでハエでも追い払うかのようにしてイストが「しっし」と手を振るう。ずいぶんとひどい言い様だが、オーヴァのほうもこの程度の暴言で傷つくようなまともな精神はしていない。

「そうか。では心置きなく一人部屋を満喫させてもらうとしよう」

そんな師弟の仲のいい会話に苦笑しながら、一行は建物の中に入

って行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の日、昼食を食べてから部屋に戻り、特にすることもないので「無煙」を吹かしながらゴロゴロしていたイストの所に、一緒に旅をした騎士の一人がやってきた。旅の間は身に着けていなかった鎧を纏っており、その姿は立派に騎士である。

「本当に騎士だったんだな……」

そんなイストのわりと失礼な呟きも苦笑するだけで済ませてしまう。だてにオーヴァの随行員として選ばれたわけではないらしい。

「謁見の手筈が整ったから、呼びに来た」
「ん、了解。師匠は？」
「すでに陛下のところに」

服装について尋ねると「そのままでいい」と言われたので特に着替えることはせず、三人は連れ立って騎士の後についていく。

「師匠、『無煙』を吸っちゃダメですからね」
「え～」

弟子の忠告に嫌そうな声を漏らす師匠。それでも弟子は健気に「ぜっっったいにダメですからね！」といい続け、目的の部屋につくまでに師匠から言質を取るという偉業を成し遂げた。

「む、来たおったか」

案内されたのは、少し大き目の会議室のような部屋であった。家具は大きなテーブルと椅子が数脚あるだけで、まさに必要最低限のものしかおいていない。南向きに窓が付いているおかげか、室内は明るい。

「師匠だけか？」

部屋の中で椅子に腰掛けていたのはイストの師匠であるオーヴァだけである。シーヴァの方はまだ来ていないようだ。

「まあ、そのうち来るじゃろう」

そう言われてイストは肩をすくめた。相手は忙しい身の上。暇人が待つのは道理であろう。

オーヴァと騎士を含めて室内には五人いたが、特に誰も喋らなかった。オーヴァは椅子に座ったままなにやら本を読んでいる。ジルドは椅子に座らずに立ったまま壁に寄りかかり、腕を組んで目を閉じていた。騎士は入り口の近くに手を後ろで組んで立っている。イストもまた椅子には座らず、窓の近くの壁に寄りかかり外を眺めていた。

「あの、師匠……」

少し心配そうな顔をしたニーナが、小声で話しかけてくる。

「ん？どうした」

「シーヴァ……陛下が聞きたいことって、ハーシェルド地下遺跡のことなんですよね？」

今までは呼び捨てにしてきたのだが、さすがにここでそれはまずいと思ったのかニーナは“陛下”の敬称をつける。

「そういう話だったな」

オーヴァや騎士たちから受けた説明では、ハーシェルド地下遺跡の発掘中に見つけたものについて話を聞きたい、ということであった。

「今更ですけど、そんな重要なことありましたっけ？」

その遺跡の壁画に描かれていたのは、大部分が「御霊送りの神話」に関するものであった。現在伝わっている神話と比べると所々異なっている部分があったが、それにしても結局は解釈の問題でしかないように思える。

無論、ハーシェルド地下遺跡は学術的に見れば貴重な遺跡であった。それは一緒に発掘調査を行った、シゼラ・ギダルティをはじめとする学者たちの様子を見ていたから分る。しかしだからといってそこに、シーヴァ・オズワルドが求めるような情報があったようには思えないのだ。

「ま、それこそ“解釈の問題”ってやつだな」

重要なのはイストやニーナがその情報に対してどのような解釈を行うかではない。シーヴァがそれを聞いてどのように解釈し、そして判断を下すか、だ。さらに言うならば、シーヴァにとってどのような解釈が可能か、ということが重要なのだ。彼は政治家であって、間違っても学術的な事実を探求しているわけではないのだ。

「……タチの悪い言いがかりみたいですね……」
ニーナが表情を引きつらせる。
「神話を政治や戦争に利用しようと思えば大体そうなるさ」
むしろ捏造や改ざんに手を出していない以上、シーヴァはまだましな部類といえるだろう。あくまでも“現在は”だが。
「手厳しい意見だな」
聞きなれない声が部屋の中に響き、新たな人物が部屋の中に入ってくる。入り口の近くに立っていた騎士が、胸に拳を当てて敬礼する。
室内に入ってきた人影は四つ。そのうちの二人は明らかに雰囲気が違い、ゼゼトの民であろうと推測された。
その四人の中でイストが知っている顔は唯一つ。長身痩躯で、黒い髪の毛を無造作に伸ばした男。その眼光は昨日見たのよりは幾分穏やかだがしかし十分に鋭く、獰猛な笑みを浮かべていた口元に今は呆れたような苦笑を浮かべていた。
漆黒の魔剣「災いの一枝（レヴァンテイン）」を手に一騎駆けを敢行した、シーヴァ・オズワルドその人である。
「我がシーヴァ・オズワルドだ。お前がイスト・ヴァーレ、ということでいいのだな？」
シーヴァの鋭い視線がイストを捕らえる。余談になるが、十字軍を駆逐しアルテンシア半島全体を勢力圏にしたこの頃から、彼は「

我」という一人称を使い始めた。「王者に相応しい威厳を、演出でもいいから持て」と誰かに言われたらしい。

「そうなるな。ま、よろしく」

ニーナであればすくみ上がってしまいそうな眼光に睨まれても、イストはその飄々とした空気を変えない。あらかじめ釘を刺していなかったら、「無煙」でも吹かしていそうな雰囲気である。

そんなイストの無礼な態度に、シーヴァの横に控えていた女性仕官が眉をひそめるが、結局何も言わなかった。きっとオーヴァの弟子ということで諦めたのだろう。

一通りの自己紹介が終わると、それぞれが席に着く。真っ先に口火を切ったのはシーヴァであった。

「迂遠な物言いは好きではないのでな、単刀直入にこちらの用件を言おう。すでにベルセリウス老から聞いていると思うが、ハーシェルド地下遺跡でお前が見たものについて話を聞きたい」

「タダでか？」

「貴様！」

さすがにこの物言いには我慢できなかったようで、ヴェートと紹介された女性が腰を浮かせる。しかしすぐにシーヴァがそれを制した。

「何が望みだ？」

しぶしぶ席に戻るヴェートを視界の端に捕らえながら、イストもまたシーヴァを真正面から見返す。

「そうだな、このおっさんと戦ってみてもらおうか」

そう言ってイストが指を向けたのは、ジルド・レイドである。

「イスト……」

しかし、水を向けられたジルドは困惑した様子を見せた。事前にそんな話は一切しなかったのだから当然だろう。

「仕合ってみたいんだろ？かのシーヴァ・オズワルドと」

昨日、シーヴァの奮戦を見物する彼の横顔から、イストはそのことを確信していた。そしてジルドとシーヴァがぶつかれば、面白いことになるという直感がある。

「ふむ……」

ジルドが腕を組む。「やりたい」とは言わなかったが、その姿からイストは肯定の意思を感じた。そしてそれはシーヴァも同じだったらしい。

「それで？勝てばよいのか？」

「いや？勝敗には拘らないよ。面白いものを見せてくれればそれでいい」

ジルドはともかく、シーヴァ側の三人、ヴェートとガビアルとメーヴェも特に何も言わない。それだけシーヴァの実力を信じているのだろう。

「魔道具の使用は？」
「もちろんアリで」
「……死ぬかも知れぬぞ」

シーヴァの使う魔道具とは、すなわち「災いの一枝（レヴァンテイン）」のことだ。昨日の戦いを見る限り、彼の言葉は決して誇張や自己陶酔の類ではない。

「かまわぬ」

答えたのはイストではなくジルドだった。愛刀「光崩しの魔剣」を握る彼の手には力が込められている。

「たとえどのような結果に終わろうとも双方遺恨なし。それでよい」

堂々とジルドは言ってのけた。その言葉に絶句したのはシーヴァの後ろにいる三人である。

「ともすれば自分のほうこそシーヴァを斬ることになるかも知れない」

ジルドは言外にそういったのである。
その言葉を聞いてシーヴァが笑う。それは昨日見せた、あの獰猛な笑みだった。

第八話　王者の器？

「その魔剣を使ってオレを心の底から驚かせてくれ」

かつてイストはジルドに「光崩しの魔剣」を渡す際に、そういう条件をつけた。もっともこれはジルドを納得させるための方便のようなもで、仮にジルドがこれを達成できなかったとしても、イストとしては魔剣の代金を求めるようなまねはしないと決めている。

もともと、無理のある話なのだ。

製作した本人でさえ想像できなかった力や使い方。それを見ることは魔道具職人にとってある意味最高の報酬なのだ、とその時イストはいった。

しかし、それはどれだけ困難なことだろうか。

イストは魔剣を製作した職人である。その心臓部にしてブラックボックスたる術式理論をゼロから設計したのである。言い換えれば、その魔道具に何が出来て何は出来ないのか、その全てを把握しているのである。

そんな彼を「心の底から驚かせろ」という。

それはつまり、「思ってもみなかったことをやってみせる」ということだ。しかし、少しばかり意表をついて見せても、「心の底から驚かせた」ことにはなるまい。それはすぐに解析されて、ただの現象になる。まったく理解不能で不可思議なことをして見せなければいけないのだ。

イスト自身、ジルドがこの条件を達成できるとは思っていない。けれどもその一方で彼ならば、とも期待してもいるのだ。

今、そのジルドがイストの作った「光崩しの魔剣」を構えている。彼に相対しているのはシーヴァで、その手にはオーヴァが作った「災いの一枝（レヴァンテイン）」がある。

ジルドとシーヴァ。「光崩しの魔剣」と「災いの一枝（レヴァンテイン）」。この二人と二つの魔道具がぶつかり合えばきっと面白いことになる。その直感はもはや確信に近かった。

（さあ、見せてくれ。オレの想像を超えるものを……）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シーヴァ・オズワルドとジルド・レイド。この二人の仕合の場所として選ばれたのは、ゼーデンブルグ要塞の第二練兵場だった。ここは百人規模の部隊がその連携を訓練する場所で、足元には石畳が敷かれている。二人の仕合の場所としては申し分ない。

今、シーヴァとジルドは練兵場のほぼ中央で、向かい合いにして立っている。他のメンバーはといえば、見物するには少し離れすぎた位置に立っている。無論、シーヴァが使う「災いの一枝（レヴァンテイン）」を警戒してのことだ。

シーヴァの「災いの一枝（レヴァンテイン）」とジルドの「光崩しの魔剣」。なんら似た所の無いその二振りの魔剣には、しかし大きな類似点が一つだけある。

――――天より高き極光の。
――――闇より深き深遠の。

いずれの魔剣も刀身に似たような古代文字（エンシェントスペル）が刻み込まれている。その文言はロロイヤ・ロットが遺したものであり、そしてそれが刻印されているということは、その魔道具の作り手がアバサ・ロットの系譜に名を連ねる者であることの何よりの証拠であった。

「ベルセリウス老、合図を頼む」
「うむ。ではコインが地面に落ちたら開始じゃ」

そう言ってオーヴァは懐から銀貨を取り出し、それを親指ではじいた。「ピィィィンンン」という澄んだ金属音が練兵場に響き、その数瞬後に今度は「キィィィィンンン」というかん高い金属音が響いた。仕合開始の合図だ。

仕合開始の合図が響いても、向かい合う二人は微動だにしなかった。しかし二人を取り巻く空気は確実に変わっている。のしかかるように重苦しく、そして切付けるように鋭い、極度の緊張感をはらんだ空気だ。

お互いに頭の中で無数の斬撃を仮想し、攻め立てあるいは防ぎ、動かないままに仕合を進めていく。傍から見れば向かい合っているようにしか見えないが、本人たちはまるでチェスでもさすかのように頭の中で戦いを繰り広げる。奇妙なことに、二人はお互いが同じものを仮想していることを直感していた。

「来ないのか？」

構えをゆっくりと変化させながら、シーヴァが問う「災いの一枝（レヴァンテイン）」

の動きに合わせるようにして「光崩しの魔剣」を動かし決して隙は見せていないが、その言葉はジルドに確かに変化をもたらした。

彼は、笑ったのだ。

「……推して参る！」

地面を蹴ってジルドが前に出る。その踏み込みは速く、離れたところで見物しているギャラリーも目で追いきれない。

三段突き。

刀の切っ先が三つ見える。それはジルドが繰り出した突きが神速であるからにほかならない。その突きを、シーヴァは頭を小さく振って全てかわす。そして若干体勢を崩しながらも「災いの一枝（レヴァンテイン）」を一振りした。ジルドはそれを左に軽くステップしてかわす。

「……完全にはかわしきれなかったか」

刀の切っ先に触れたシーヴァの髪の毛が数本、風に飛ばされて宙を舞う。そのシーヴァの呟きを聞いたジルドの口元に、獰猛な笑みが浮かぶ。

一閃。

狙い済ましてシーヴァの首を襲う「光崩しの魔剣」は、しかし「災いの一枝（レヴァンテイン）」によって防がれた。しかしジルドはそれだけでは止まらない。

突き、薙ぎ、切り上げ、払い、振り下ろす。

緩急をつけながらもその動きは一般人にはあまりにも速く、目で追うことなど出来はしない。「光崩しの魔剣」が描く銀色の軌跡は、一瞬送れて観客の網膜を焼いた。

そのジルドの猛攻をシーヴァはその場から動かずに防いでいた。ジルドの動きはシーヴァから見ても速く、その点に関しては相手が自分を上回っていることを認めざるを得ない。同じように動いていては後手に回るだろう。そこで動きは最小限にし、動き回る相手を見失わないように常に視界に納めながらその攻撃を凌いでいく。

いや、凌ぐだけではない。攻撃に移れるときは躊躇なく大剣を振るっている。それも苦し紛れの攻撃などではない。並みの兵士ならば防いだ剣とその先の鎧までまとめて叩き切れそうな一撃である。

ジルドは雷のように鋭く、シーヴァは嵐のように激しく。二人は一瞬ごとに攻守を入れ替え、激しい剣舞を踊る。それにともない、練兵場には金属同士がぶつかりそして擦れる音が絶え間なく響いた。

しばらくして、その剣戟の音が止んだ。二人は一旦距離を取って足を止める。二人の吐く息は白く、そして荒い。

「……終わった、んでしょうか？」

息を呑んで二人の仕合に魅入っていたニーナが、恐る恐るといったふうに声を出す。

「まさか。これからが本番だよ」

向かい合う二人を凝視したまま、イストが答える。二人ともまだ

愛剣を魔道具として使っていない。つまり今までの剣舞は全て準備運動だ。

「……体は温まったか？」

「十分に」

イストの答えを裏付けるかのように、シーヴァとジルドが短い言葉を交わす。そしてほぼ同時に獰猛な笑みを浮かべると、それぞれ愛剣に魔力を込め始めた。

「では……」

シーヴァが漆黒の大剣「災いの一枝（レヴァンテイン）」を振りかぶる。

「本気で行かせてもらおう」

刀身が霞むほどの勢いで、シーヴァが「災いの一枝（レヴァンテイン）」を振り下ろす。それと同時に大量の魔力を喰わせて漆黒の風を生み出しジルドを襲わせる。

これでまで無敵の威力を誇り、相手が魔導士だろうが軍隊だろうが吹き飛ばしてきたその一撃は、しかしジルドに届くことはなかった。ジルドが一閃した「光崩しの魔剣」がその漆黒の一撃を切り裂き霧散させたのだ。

「は……？」

目の前で起きたことが理解できないのか、いつもは冷静沈着なヴェートが呆けたような声を漏らす。ガビアルとメーヴェもまた目を大きく見開き、驚愕を全身で表現していた。

彼らは今まで「災いの一枝（レヴァンテイン）」の一撃をたびたび目にしてきた。そしてその度に黒き風は敵を吹き飛ばしシーヴァに勝利をもたらしてきた。彼らはその一撃に、ある種信仰にも似た確信を抱いていたのである。

それが目の前でやすやすと無効化されてしまった。

「なかなか、面白い魔道具を作ったようじゃのう？」

オーヴァがからかうような視線を弟子に向ける。自分の作った魔道具の一撃が弟子の作った魔道具には通用しなかったというのに、ショックを受けた様子はない。その自信の根拠は、シーヴァの表情だろう。

シーヴァは笑っていた。獰猛な、もはやそれだけで殺気を感じるほど獰猛な笑みを浮かべている。それを見て、ジルドもまた応じるように獰猛な笑みを浮かべた。

彼らの内に湧き上がる感情、それは恐怖と歓喜だ。

「……猛獣が二匹、檻の中に入っているようなもんだな……」

暴力的に荒れ狂う二人の殺気に、イストが頬を引きつらせる。ニーナなどは目の端に涙を浮かべ、イストの外套をつかんでその背中に隠れるようにしている。

もはや猛獣などという表現でも生ぬるい。鬼と修羅、二匹の化け物が戦っているかのようである。

シーヴァが動く。再び「災いの一枝（レヴァンテイン）」に大量の魔力を喰わせ黒き風を呼ぶ。薄く、しかし広範囲に。薄く、とは言っても当たれば無事ではすまない。しかも広範囲に展開された黒き風はジルドに逃げ道を与えない。

その状況下で、ジルドは前に出た。そして「光崩しの魔剣」で展開された黒き風の一部を切り裂き、その包囲網を突破する。

「ぬうっ！」

それを予測していたかのように、シーヴァが渾身の一撃を振るう。それを何とか受け止めたジルドは、しかし体を浮かせた。

「黒き風よ！」

横に振り払った「災いの一枝（レヴァンテイン）」を、運動に逆らわないように円を描きながら振り回し、切っ先を宙に浮くジルドに向けて黒き風の一撃を放つ。ジルドは刀を正面に構えてその黒き一撃を防ぐが、さらに後方へと押し飛ばされてしまう。

ようやく地に足をつけたジルドに、さらに漆黒の風が襲い掛かる。とっさに「光崩しの魔剣」で切り払うが、ジルドの体勢が崩れた。そこへシーヴァが仕掛ける。

シーヴァの一撃は重く、そして激しい。体勢が崩れたままシーヴァの猛攻にさらされたジルドは思うように回避できず、刀で大剣を防ぐことでしのいでいた。しかし重いその一撃を受けるごとに、彼の体勢はさらに少しずつ崩されていく。

たまらず、後ろに下がって間合いを取る。しかしジルドが間合い

を取ろうとすれば、シーヴァはそこに漆黒の風を撃ち込み攻撃の手を緩めない。

「おっさんの足が止まったな……」

速度ならばジルドのほうに分がある。それは最初の“準備運動”を見ていれば分る。しかし今ジルドは足を止めてほとんど動いていない。否、動けないのだ。

ジルドがやっている「『光崩しの魔剣』で漆黒の風を切り裂き無効化する」という行為は、より技術的に説明すれば「『干渉』の術式で漆黒の風を構成している魔力に干渉し霧散させる」ということになる。

言葉で言うのは簡単だが、これには相当な集中力が求められる。「干渉」の術式自体が扱いにくいものであるのに加え、漆黒の風を構成する魔力の量は桁外れに多いからだ。むしろ相性が良いジルドだからこそ出来る、といったほうがいいだろう。

だからジルドが黒き風を切り裂くときには、どうしても一瞬足が止まってしまう。シーヴァはその一瞬を見逃さない。攻めて攻めて攻め続け、ジルドを防戦一方に押し込めて彼に足という利点を使う隙を与えない。

つまりシーヴァは「災いの一枝（レヴァンテイン）」の一撃がジルドにはとどかないことを知るや、その一撃をいわば「足止め」に使い始めたのである。

今まで必殺の一撃だったものを足止めに使う。その発想の柔軟さは、驚異的ですらある。彼はつまらぬ矜持で自分の選択肢を縛るようなまねはしないのであろう。

暴風の如き激しさをもって、漆黒の大剣がジルドに襲い掛かる。
それを一つ受けるごとに彼の体勢は崩され、腕には強い衝撃が残る。
しかしジルドとて押し込められているままではない。

一撃の一つを選んで、受けると見せて「光崩しの魔剣」の刀身の上を滑らせて流す。シーヴァの攻撃がわずかに乱れ、そして生まれたほんの小さな間隙を縫い、ジルドは強引に攻めに転じる。

ほとんど苦し紛れのその攻撃は、シーヴァにたやすく回避される。
しかしその攻撃を起点にしてジルドは一気に速度を上げた。

ジルドの姿が霞む。速い、しかし緩急をつけたその動きは見る者の目に残像を生み惑わす。暴風から逃れたジルドを、シーヴァは再び捉えることが出来ない。

「くっ」

たちまちシーヴァが守勢に回った。しかも全ての攻撃を凌ぎ切れているわけではない。彼の顔には一つ二つ赤い筋が浮かび始め、鎧には無数の傷が残されていく。

（埒が明かぬ！）

シーヴァが「災いの一枝（レヴァンテイン）」を石畳に突き刺し、その威を発する。
放たれた黒き風は石畳を粉砕し幾つもの礫を飛ばす。爆心地に近いシーヴァはそれをまともに受けた。ほとんど自爆である。それに対しジルドは飛んでくる礫をかわしほとんど無傷である。しかしそれはシーヴァにとっては織り込み済みのこと。

「そこぉおお！！」

予想通りの方向からジルドの攻撃が来る。先ほどの黒き風はワザとむらを作り、ジルドの次の攻撃を誘導したのである。

礫があたった額から血を流しながらシーヴァは「災いの一枝（レヴァンテイン）」に魔力を喰わせる。しかしその威を解き放ちはしない。溜め込み、漆黒の大剣に黒き風を纏わせた。それを突っ込でくるジルドに向けて振るう。

黒き風を纏わせたその一撃は、とうてい受け止められるものではない。ジルドは咄嗟に身をかがめてやり過ごす。しかし……。

「はぁぁぁ！！」

シーヴァが咆哮を吐く。その瞬間、漆黒の刀身に溜め込まれていた黒き風が解き放たれた。至近で放たれる黒き風は身をかがめるジルドの頭上から襲い掛かり、そして彼を弾き飛ばした。

「これを防ぐか。流石だな」

弾き飛ばされ、しかしすぐに起き上がったジルドを見てシーヴァが感嘆の声を漏らす。

黒き風が解き放たれたあの瞬間、ジルドはとっさに「光崩しの魔剣」を構えて黒き風を防いでいた。しかし完全に防ぎきることは出来なかったらしく、弾き飛ばされてしまった。長旅にも耐えうるよう丈夫に作られていた衣服はおよそ右半分が千切れ飛び、皮膚は裂けてあちらこちらから血が流れている。しかしその一方で致命傷は見受けられない。今の攻防、優勢はシーヴァだが、褒めるべきはジ

ルドであろう。

ジルドが刀を構える。むき出しになった肌からは白い湯気が立ち上り、彼の発する覇気が増す。そしてシーヴァもそれに答える。

（とんでもないことをやらせてしまったか……？）

イストの脳裏にそんな言葉が浮かぶ。足が震えているのは錯覚ではあるまい。しかし後悔は感じない。湧き上がってくるものは歓喜だ。足は震え背中には冷や汗が流れている。しかし彼の口元に浮かぶのは喜悦の笑みだ。

シーヴァが再び「災いの一枝（レヴァンテイン）」に黒き風を纏わせる。これは攻防一体だ。相手の攻撃を防ぐその時にさえ、同時に攻めることが出来る。

それを確認したジルドは、しかし地を蹴って前に出る。

「馬鹿だなぁ……、おっさん。逃げ回っていれば勝てるのに」

イストの言葉に嘲笑の色はなく、むしろ温かい。彼はこういう馬鹿がたまらなく好きなのだ。

黒き風を刀身に纏わせる。それはつまり、黒き風を放ち続けるということだ。当然のことながら、一撃放つのとは比べ物にならない量の魔力を消耗する。いかにシーヴァの魔力量が膨大であろうとも、そう長くもつものではない。

だからこそ、ジルド・レイドは前に出た。

逃げ回ってシーヴァの魔力が尽きるのを待てば、確かに確実に勝てるだろう。しかしそんな勝利を得て何を誇るというのか。

いや、「シーヴァ・オズワルドに勝った」という事実は、ただそれだけで栄誉あるものだ。シーヴァも自分の敗北を否定するような醜いまねはしないだろう。

（しかしっ！この身はそれでなんの満足を得る！？）

満足など、到底得られはしない。残るのは虚しさと後悔と、恥にしかならぬ栄誉だけである。

ジルドはシーヴァに向かって猛然と突き進む。シーヴァはゆっくりと「災いの一枝（レヴァンテイン）」を振り上げ、ジルドの動きに合わせてそれを振り下ろした。ジルドも「光崩しの魔剣」に魔力を込めて迎え撃つ。

本来ならば漆黒の風によって折れてしまうはずの銀色の刀身は、しかし漆黒の刀身と凌ぎを削っている。「災いの一枝（レヴァンテイン）」が纏う黒き風を、「光崩しの魔剣」が無効化しているのである。

「ううううぅぅうぉぉぉおおおおおお！！！！！」

「ははははぁぁはぁぁぁぁあああああ！！！！！」

シーヴァが「災いの一枝（レヴァンテイン）」にさらなる魔力を喰わせ、それを迎え撃つようにジルドも「光崩しの魔剣」に魔力を練りこむ。

無効化はまぬがれたが前に進むことの出来ない黒き風は後ろに流れてシーヴァの周りに漆黒の翼を形作り、「光崩しの魔剣」からはあふれ出した魔力が白い光となってあたりに満ちる。

「くっ！洒落なんねぇな！！」

その余波だけで、イストを始めとする見物客は吹き飛ばされそうである。イストとオーヴァの二人が防御用の魔法陣を展開した。

鍔迫り合いを続ける二人の周りに暴風が吹荒れている。石畳が砕かれ、あるいはめくれて宙を舞った。

変化は、突然起こった。

――――天より高き極光の。

――――闇より深き深遠の。

凌ぎを削りあう「災いの一枝（レヴァンテイン）」と「光崩しの魔剣」。その二振りの魔剣の刀身に刻印されたその古代文字（エンシェントスペル）が輝きを放ち始めたのである。

黒き暴風を放っていた「災いの一枝（レヴァンテイン）」は一転して白き極光を放ち始め、代わりに白い光を溢れさせていた「光崩しの魔剣」が深遠なる闇を発生させる。

「なんだっ！？」

イストが叫ぶ。その顔は、やはり喜悦で歪んでいる。

その叫び声に呼応したわけではないだろうが、鍔迫りを続ける二振りの魔剣のその接点を中心に、今度は空間が歪み始めた。今までは全てを排斥し吹き飛ばしていた暴風は一転してその風向きを変え、今度は全てを中心へと引き寄せ始める。

シーヴァとジルドの二人は、自分たちの周りで起こっている現象に無論気づいていた。しかしそれでも二人は、自分の愛剣に魔力を込め続けた。周りの異常事態がどうでもいいと思えるほどに、目の前の好敵手との戦いに没頭していたのである。

二人が込める魔力の量に比例して、空間の歪みが大きくなっていく。そして……。

「くう！？」
「ぬう！？」

空間の歪みがはじけた。「ギィィィイインンン！」という耳障りな金属音を残してジルドとシーヴァも吹き飛ばされる。二人が鍔迫り合いをしていた場所は、地面がえぐられすり鉢状のクレーターが出来上がっていた。

「剣が……」

ニーナが呆けたように呟く。「災いの一枝（レヴァンテイン）」も「光崩しの魔剣」も、柄だけを残して刀身は砕け散っている。折れたわけではない。粉々に砕け散ったのだ。

いつも間にやら集まっていた見物客の間にも、ざわめきが起きはじめる。しかしそのざわめきはイストの耳には入らなかった。

（何が……、起きた？）

なぜ？原因は？どうして？

分らない。分らない分らない分らない。理解不能だ。あまりのこ

とに思考が止まる。こんなことは一体何時ぶりだ？

「は、はは、はははは……」

しかし湧き上がってくるものがある。

それは驚愕だ。
それは歓喜だ。
それは渇望だ。

衝動のままにイストは叫ぶ。

「確かにコイツは思っても見なかったぜ！！」

第八話　王者の器？

結局、シーヴァとジルドの仕合は引き分けで終わった。両者とも武器を失ってしまったのだ。仕方がない。

それに二人ともこの仕合には大いに満足していた。

「久方ぶりに魂が吼えた」

「まことに、心躍る戦いであった」

そんなふうにして、二人は仕合の感想を述べた。決着がつかず、引き分けで終わったことを残念に思っている様子もなく、二人とも純粋な充足のみを浮かべていた。

仕合を終えた後、一同が向かった先は医務室であった。ジルドもシーヴァも、致命傷ではまったく無いのだが傷を負っており、その手当てに向かったのだ。

医務室に入ればそこの主は医者である。さすがのシーヴァ・オズワルドも患者の立場になってしまうと医師に逆らうのは難しい。要塞の医務室の主である初老の女医は、「簡単でいい」という彼の主張を「はいはい」と軽く流し、礫がぶつかって切れた額に厳重に包帯を巻きつけるのであった。

傷の手当が終わると、一同は最初の会議室に戻った。ちなみに衣服が駄目になってしまったジルドは、新しいものを用意してもらえることになったのでそれを受け取りに行っており、今は席を外している。

「さて、聞かせてもらおうか、イスト・ヴァーレ。ハーシェルド地下遺跡に何があったのかを」

そういえばそういう話であった。忘れていたわけではないが、ジルドとシーヴァの仕合の結末があまりにも衝撃的過ぎたせいでなかなか意識がそちらに戻らなかった。

「ハーシェルド地下遺跡に残されていた壁画、そこに描かれていたのはほとんどが『御霊送りの神話』に関するものだった」

イストは、未だ仕合の興奮冷めやまぬ様子ではあったが、表面上は落ち着いてそう話し始めた。

「んで、そのなかにこんなものがあった」

曰く「世界樹の種に光を込めよ。されば園への道は開かれん」

実際には擦れていて読めない古代文字（エンシェントスペル）もあったため細かい単語などは異なるかもしれないが、大意はこれであっているはずである。

一見すればこれも今の時代に伝わっている「御霊送りの神話」と大差は無い。使用されている単語は少し異なるかもしれないが、それでも教会の解釈の範疇に収めようと思えば十分に収まる。

「……『光を込めよ』か」

「ご名答」

すぐさまそこに気がつくシーヴァは流石であるといえよう。

ここで言う「光」とは教会の隠語で、魔力を意味している。つま

り「光を込めよ」という部分は「魔力を込めよ」と解釈できる。

魔道具職人の観点からすれば、「魔力を込める」という行為は「魔道具を使う」ことと同義だ。この神話の場合、魔力を込める対象は「世界樹の種」であるから、すなわち「世界樹の種」は魔道具である、と考えることが出来る。

「『御霊送りの神話』において、『世界樹の種』は神々が神子に対して与えたもの、ということになっていたな……」

そう呟いてシーヴァは顎を手で撫でた。それを見ながらイストは言葉を続ける。

「『世界樹の種』というキーアイテムが実は人工の魔道具であったとすれば、今までの大前提が崩れることになる」

極論を言えば、「神々が神界の門を開いて人々を迎え入れた」って話自体、なんらかの魔道具を使って人為的に行ったのではないか、と考えることさえ出来てしまう。

御霊送りは遠い過去に神々が行い、そして今なお現世に残された唯一の奇跡である、というのか教会の教えであり、そして信者たちの拠り所なのだ。それが丸っきりの大嘘であるとしたら、教会はその大義名分を失い急速に弱体化するだろう。つまりこの解釈は教会のアキレス腱であるといえる。

しかもハーシェルド地下遺跡はおよそ千年前、御霊送りの神話が誕生した時期の遺跡である。そこから得られる情報は、神話の真の姿に近いといえる。つまりその分だけ信憑性が高くなる。

「これは、言ってしまえば解釈の問題だ」

例えば、これを根拠にイストが「『御霊送りの神話』は嘘っぱちだ」と主張してみても、教会はそれを認めることは決して無いだろう。それに、先ほども述べたとおり、ハーシェルド地下遺跡で見つけた壁画の内容は、今の時代に教会が主張している解釈の範疇に収めえるものなのだ。

「神々からもたらされた『世界樹の種』という鍵を使うためには魔力が必要なのであり、“園”とは神界のこと、そこに通じる“道”とは神界の門のことである」

教会が公式にそう発表してしまえば、多くの信者はそれを支持するだろう。そして教会が基本姿勢を変えない限り、その解釈が御霊送りの真の姿になる。

しかし、それはなんの影響力も無い個人がそう主張した場合だ。シーヴァ・オズワルドという一国の王が（この時点ではまだ王ではないが）そう主張したらどうなるか。その主張は、世の中に対して一定の説得力を持つであろう。

無論、教会は認めまい。しかしこの場合、教会を教義の上で屈服させる必要などない。ようは「教会の教えには嘘がある」と口撃するだけの口実になればいいのだ。

その口実さえあれば、血縁でもなく土地でもなく利害関係でもなく、信仰という一種特別な結びつきによってつながっている教会の信者たちを、そこから引き離すことが出来るかもしれない。

そこまで上手くいかずとも、教会に対して兵を上げ、また敵では

なく味方を納得させるための大義名分にはなるだろう。

「ま、どう解釈しどう使うかはあんたの好きにすればいいさ」

オレには関係ないし、と一通り説明し終わったイストは最後にそう言い放った。無責任なように聞こえるが、実際彼にはどうしようもない。シーヴァ・オズワルドという世界に対して一定の発言力と影響力がある人間だからこそ、その主張するところを人々は聞くのである。

「……仮に、御霊送りが人の手によって行われたものだとして、どうすればそれを証明できる？」

「さあ？祭壇か、それこそ『世界樹の種』をはめ込んだ腕輪あたりがキーアイテムだろうから、そのへんを破壊すれば何か起こるんじゃないのか」

完全な当てずっぽうでイストが答える。この話に関しては推測に推測を重ねているわけで、確かに言えることなど何もない。だがその推測に基づいて行動することは出来る。

話を聞き終わったシーヴァは、何かを思案するかのように顎を撫でた。今回の件に関し、彼が持っている情報が今イストから聞いたものだけということはありえない。情報網を駆使して事前に様々な情報を集めているはずで、それらと今回の話をあわせて今後の方針を決めて行くことになるのだろう。

「なるほど。助かった」

簡単に例を述べるとシーヴァは「話は変わるが」と言って眼の輝きを変えた。それは良からぬ事（イスト主観）を企む者の目で、ろ

くでもないことを思いついたときのオーヴァのそれに良く似ていた。

「お前は流れの魔道具職人であったな。なにか面白い魔道具はないか？」

オーヴァの弟子であったこと、またジルドが先ほどの仕合で使っていた「光崩しの魔剣」を見たことでイストが優秀な魔道具職人であると確信したらしい。

厚かましい奴だな、と苦笑しながらもイストは「ロロイヤの道具袋」から一本の矢を取り出した。本来鏃があるはずの部分には、鹿の角を加工して作った幾つもの穴が開いている笛のようなものが突いている。

「魔道具『風笛（トウル・ノヴォ）』」

本来の風笛（トウル・ノヴォ）それ自体は魔道具ではない。鏃の変わりに笛をつけたその矢は弓で放たれると、けたたましくも不気味な、笑い声に似た音を立てて飛んでいく。暗い森の中のような雰囲気のある場所で使えば、まるで魔女に呪われたかのように感じ、ともすれば気を失う者もいるだろう。

今回イストが取り出したのは、その風笛（トウル・ノヴォ）に刻印を施し魔道具化したものだ。魔力を込めて放つと、風笛（トウル・ノヴォ）本来の音に混じって人間の耳には聞こえない超音波を発し、動物の平衡感覚を麻痺させるのだ。

よって魔道具「風笛（トウル・ノヴォ）」の音を聞いた者は、ほとんど全て目が回るような感覚を覚えて地面に倒れ、そしてすぐには起き上がることが出来ない。

「個人相手に使ってもいいけど、軍隊相手に使ったらもっと面白いと思うぞ」

「風笛（トウル・ノヴォ）」を打ち込まれた一帯の人馬全てが倒れていくだろう。その光景は想像しただけでも壮観だ。

ふむ、と頷きシーヴァは渡された「風笛（トウル・ノヴォ）」を手の中で回して玩ぶ。それからおもむろに顔を上げ、思いのほか強い視線をイストに向けた。

「ではこれを五百本頼む」

「ごひゃ……！？」

あまりに予想外の注文にイストが絶句する。シーヴァはそんなイストに意地悪な笑みを向け、「最低でもそれぐらいないと軍事的な運用にはたえられない」とのたまう。

「そっちの都合なんて知るかよ！？」

「材料はこちらで用意しよう」

「おい、人の話を……！」

「カッカッカ！諦めい、バカ弟子！」

弟子（イスト）の苦境に爆笑する師匠（オーヴァ）。しかし彼の馬鹿笑いはすぐに凍りつくことになる。

「なに、ベルセリウス老も手伝ってくださる」

「は……？ちょ、待てシーヴァ！なんで儂が……！」

「では宜しく頼む」

楽しそうに笑いながらシーヴァが部屋を出て行く。共の三人はな

んともいえない表情をしているイストとオーヴァの師弟に、呆れとも同情とも似つかない視線を向けながら主の後を追うのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ジルドとシーヴァの仕合が行われた三日後、シーヴァ・オズワルドはゼーデンブルグ要塞を出立した。目指すのは半島のほぼ中央に位置し、あらかじめ王都として決めていた「ガルネシア」という街である。

要塞には一万の兵を残してある。十字軍の脅威が去ったにもかかわらず一万の兵を残したことに「過剰だ」という評価をする者もいるが、アルテンシア同盟の時代もともとゼーデンブルグ要塞には常時十万の兵を駐留させていたのだ。それに比べればずっと少ないといえるだろう。

シーヴァとて、恐らくはこの要塞に十万規模の兵を駐留させたかったであろう。この時点ですでに彼が第二次十字軍遠征を予感していたのであればなおのことだ。

しかし、彼は要塞に一万のみを残した。いや、一万しか残せなかった、というべきだろう。それはつまりシーヴァの実情、より大きく言えばアルテンシア半島の実情がそれを許さなかった、ということだ。

アルテンシア半島は荒廃しきっているといっていい。長らく続いた同盟体制の中で領主たちによって血税を搾り取られ、そしてつい最近の十字軍遠征によって止めをさされた。

本当に、今急ぐべきは復興であり、それ以外のところにさく余力

など無いのである。そのことをシーヴァは良くわきまえていた。

「我、シーヴァ・オズワルドはここにアルテンシア統一王国の設立を宣言する。アルテンシア同盟を廃し、そこに参加していた全ての領地をアルテンシア統一王国の名の下に再編する。また我はその初代国王となり、愛すべき我が祖国に復興と繁栄を約束する」

大陸暦１５６５年3月１４日、大理石でもなければ優美な彫刻が施されているわけでもない、ただの木で作られた即席の演台の上、シーヴァは高らかに宣言した。

繰り返しになるが、彼がアルテンシア統一王国の設立を宣言し、その王都に定めたのはガルネシアという街であった。しかしこの時のガルネシアは先の戦乱に巻き込まれて焼き払われ、水の確保にも苦労するような場所であった。近くにある「ガルネシア城」という城は無事であったが、こちらも戦乱に巻き込まれて補修が必要であるし、なによりもこの城はアルテンシア同盟成立以前に戦のために作られた城で、王者の居城としての優雅さや壮麗さにはまるで縁が無かった。

反乱の際に彼に協力してくれた五人の領主の一人であり、公爵位を与えられたアベリアヌ公から「王都はガルネシアに」と勧められたとき、当初はシーヴァもこれに難色を示した。

「王都としての機能を求めるならば相応しい都市は他にもある。なぜ、ガルネシアなのだ？」

「今、するべきは早急に力を整えることでしょうか。それとも先を見据えた復興でしょうか」

逆にそう問いかけられるや、シーヴァはすぐにガルネシアを王都

に定めたのである。後に彼はこう語っている。

「実情に合わぬ富や力を持とうとすれば、それは搾取になる。逆に復興を優先し国が豊かになれば、富や力といったものは自然と集まってくるものだ」

アルテンシア統一王国の設立を宣言したシーヴァは、同じ演説の中でその国の体制について定めた。それをこの場で発表することができたということは、かなり前もって新たな国の体制について練っていたということを示している。シーヴァが全てを考えたわけではないだろうが、彼が主導したことは間違いなくそれが出来るあたり、やはり彼はただの武人ではあるまい。それは彼が単純に不満を原動力に反乱を起こしたわけではなく、その先に築くべき国家の姿をかなり早い段階から思い描いていたことの証拠なのだから。

まずは反乱の際に彼に協力してくれた五人の領主についてである。シーヴァは彼らに統一王国の公爵位を授け、彼らの領地を安堵し、さらに新たな領地を授けた。この五人の公爵について名前を挙げておこう。

アベリアヌ公、ガーベラント公、ウェンディス公、リオネス公、イルシスク公の五人である。ちなみにこの中ではアベリアヌ公が最年長になり、シーヴァより年下なのはリオネス公だけであった。

この時、シーヴァは抜け目の無い用心を発揮している。それら五人の公爵たちの領地が、決して隣り合わせにならないようにしたのである。そのために飛び地となる領地も出てきたのだが、シーヴァは譲らなかった。

とはいえ飛び地であっても平時であれば何も困ることは無い。名

代、あるいは代官を派遣して治めさせ、税を取り立てればいいのである。本当に困るのは領地をまたいで軍を動かすとき、それも国王の認可を得ないでそうするときである。つまりこれは公爵たちが反乱を志したときにたやすく連携させないための予防線なのだ。

アルテンシア半島の版図は全部で二三七州。その内、シーヴァが五人の公爵に与えたのは、全部で四七州である。では残りの一九〇州はというと、シーヴァはこれを全て王の直轄領とした。

アルテンシア半島はこれまで伝統的に大勢の領主たちが乱立する状態であった。多様性がある、と言葉を選べば聞こえは良いが、その反面いわば数多くの“小国”が入り乱れている状態であり、同盟成立以前にはそれが原因となって半島全体が戦火に焼かれていた。

同盟成立以後も、この形態による弊害はあった。互いの領地には不可侵というのが同盟の大前提であったから、複数の領地を貫く大街道というものは存在していない。これまで計画は何度も持ち上がったが、その都度領主たちの利害の折り合いがつかず先送りにされてきたのだ。

また領地境にあったために、開発どころか調査さえも進んでいない山や山地が多くある。これらには各種鉱山も含まれていると期待されており、同盟はこれらの財源をいわば眠らせたままにしていたのである。

シーヴァは統一王国の初代国王としてこの国を復興し、そしてその先の繁栄へと導かねばならない。少なくともシーヴァはその責を己に課していた。

彼が思うに今この国に必要なのは強い王である。強い王が強力な

リーダーシップを発揮して、この国を区切ることなく一つの塊として発展させていかなければならない。そのためには民と王の間に入り込み、世襲の領地と権利を主張する貴族というものは彼にとって邪魔でしかない。この点、アルジャーク帝国皇帝クロノワに似ているといえる。

協力してくれた五人の公爵たちが世襲の領地を持つことに否やはない。彼らにしてみればそれは当然の権利であろう。よってシーヴァは公爵のみ領地を持つことを認め、その世襲を許した。

しかし、彼ら以外の貴族が世襲の領地を持つことをシーヴァは認めなかった。このことについて彼は一切の例外を認めず、これまで自分に従ってきてくれた配下の将たちにも領地は与えなかったというのだから徹底している。

ただこの方針はおおよそ歓迎された。多数の領主たちが乱立することによってもたらされた弊害を半島の人々は良く知っており、シーヴァの方針は改革の象徴として受け入れられたのである。

しかし、一九〇州を王の直轄地としたからといっても、シーヴァ一人でその全ての面倒を見ることはまず不可能である。そこでシーヴァは爵位を与えた者をそれぞれの州に派遣してそこを治めさせた。爵位を持っている以上彼らの身分は貴族なのだろうが、領地は持たずその任命及び罷免の権利は王にある。しかもその爵位さえ一代のもので、子供に受け継がせることは出来ない。だから「貴族」というよりも、「中央から派遣された役人」といったほうがその中身を良く表しているといえるだろう。

アルテンシア統一王国には貴族がいるために封建制に思われがちだが、実際のところは強力な中央集権型の国家だったのである。

ガルネシアの朽ち果てた街の中、即席で作られた演台の上からアルテンシア統一王国の設立と国家の体制の大枠について説明し終えたシーヴァはガルネシア城に入り、今はその廊下を歩いていた。先ほど宣言した内容は早馬によって各地に伝えられる。最初から全てが上手くいくとは思わないが、それでも今日この日に統一王国は生まれ、そして歩き出すのである。

「ベルセリウス老……」

廊下を歩いていたシーヴァは、一人の老人が窓から外を眺めているのを見つけた。あそこからはたしか王都に定めたガルネシアの街が見えたはずである。

「何もない。王都と呼ぶにはあまりにも寂しい光景じゃな」

「……ガルネシアはアルテンシア半島の縮図。今は半島全体が荒廃している」

もっとも、その中でも特にひどい場所を選んで王都にした、というところは否定できないが。

「しかし、それでも私はこの国を復興させる。そしてその先に導いてみせる」

未だ使い慣れない“我”という一人称の代わりに、“私”という単語を使っていることに気づいたのは、その場にいたベルセリウス老だけであった。

第八話　王者の器？

さて、シーヴァ・オズワルドはガルネシアに移ったが、イスト・ヴァーレと彼の弟子であるニーナ・ミザリ、そして彼と壮絶な仕合を演じたジルド・レイドもまた一緒にガルネシアに来ていた。

「『風笛（トウル・ノヴォ）』を五百本作らないとだろうが」

そうイストは不機嫌そうに説明した。「あ～嫌だ嫌だ」とぼやいて見せたが、これが本心であるかは怪しい。本当にやりたくないのであれば彼の性格上、夜逃げしてでもその仕事はやろうとしない。つまり「嫌だけどやってもいい」と思わせるだけの魅力が、シーヴァ・オズワルドにはあったということだろう。

「おっさんはどうする？」

シーヴァと一緒にガルネシアに行くと伝えた後、イストはジルドにそう尋ねた。

「その魔剣を使ってオレを心の底から驚かせてくれ」

イストとジルドの間で交わされたこの契約は、先の仕合で十分に果たされている。その結果ジルドは「光崩しの魔剣」を失ってしまったが、これ以上彼がイストに付き合う理由も無かった。

「もう一本おぬしの作った魔剣が欲しい、というのは我儘なのだろうな……」

言いにくそうにジルドは言葉を濁した。彼はイストがアバサ・ロットの名を継ぐ魔道具職人であることを知っている。である以上、イストがジルドに金で魔道具を売ることは決してない。イストに「魔剣が一本欲しい」ということは、「タダで一本よこせ」と言っているようなもので、流石にそれは躊躇われた。

しかしその一方で、ジルドはあの「光崩しの魔剣」ほど自分に合う魔道具はこの先見つからない、と直感している。どんな魔剣を持ったとしても、必ずや「光崩しの魔剣」と比べてしまい不満に感じるだろう。それはある意味、禁断症状にさえ似ている。一度最上級のものに慣れてしまえば、それ以下のもので満足できるはずが無いのだ。

もし「光崩しの魔剣」以上にジルドと相性のよい魔道具を作れるとしたらそれはこの世でただ一人、イスト・ヴァーレだけであろう。そう、シーヴァ・オズワルドに「災いの一枝（レヴァンティン）」以上の魔道具を作ってやれるのがオーヴァ・ベルセリウスだけであるように。

しかし、そんなジルドの葛藤を、イストはあっさりと飛び越えた。

「ん？別にいいぞ。おっさんになら何本でも作ってやる」

アバサ・ロットは気に入った相手にしか魔道具を渡さない。しかし気に入った相手のためならば驚くほど簡単に魔道具を作ってしまうし、渡してしまうのだ。

「ただ、同じ魔道具を作る気はないからな。新たに術式を考えて素体も相応のものを揃えるとなると、時間がかかる」

下手をしたら一年以上、とイストは自分の見立てを語った。しか

しジルドはそれでもいいと即答した。「光崩しの魔剣」以上の魔剣が手に入るのであれば、どれだけ待とうとも苦にはならない。一期一会の出会いと思えば、一年など短い。まだ見ぬ愛剣を想い、ジルドはまるで子供のような興奮を覚えるのだった。

そのようなわけでジルドはもうしばらくイストと行動を共にすることになったのだが、ガルネシアに着いた彼はシーヴァに乞われる形で兵士たちの剣術指南役になった。シーヴァにしても彼ほどの剣士を遊ばせておくのは甚だしい損失だと思ったのだろう。

ジルドに教えを乞う立場になった兵士たちも彼を歓迎した。彼らの中にはジルドとシーヴァの仕合を見ていた者もおり、ジルドが優れた剣士であることを十分に理解していたのである。ガルネシア城の練兵場からは、今日も威勢のいい声が聞こえてくる。

ジルドが今使っているのは、ただの鋼の剣である。業物には違いないが、これは魔剣でもなんでもない。

「下手に魔剣を使うよりも、この方がわりきりがつく」

しかし何もないというのもつまらないだろうと言ってイストが彼に渡したのが、以前彼が工房「ドワーフの穴倉」を間借りしていたときに作った魔道具「風渡りの靴」である。これは風の上を滑るようにして移動できる魔道具で、ジルドの持ち味である速度と移動術の幅を大いに広げてくれるであろう。

ニーナがやることはどこに行っても変わらない。すなわち、課題のレポートをまとめ魔道具を作る。そして、その合間を縫って自分の研究を進める。すべては早く一人前の魔道具職人になるためである。ある意味、三人の中で最も行動の指針がぶれないといえるだろ

う。

だが、心境の変化は少しあったと思う。きっかけは、やはりジルドとシーヴァの仕合である。

あの仕合、ぶつかり合った人間も尋常ではなかったが、それと同じくらい魔道具も尋常ではなかった。

「あれくらい凄い魔道具を作れるようになりたい」

目標というにはあまりにも大雑把で果てしない気もするが、その思いは彼女をまた一歩前に進ませるだろう。

さて、イストである。彼がシーヴァとともにガルネシアに来た理由は「『風笛（トウル・ノヴォ）』を五百本作ること」である。少なくとも表向きは。しかしガルネシアに着いた彼は、その仕事にすぐに取り掛かることはしなかった。

材料が無いのだ。そしてその材料をシーヴァが用意するといった以上、イストは意地でも働かないつもりでいた。

材料がそろうまでの間、イストは「無煙」を吹かしながらゴロゴロするばかりで何もしていなかった。しかし、それは表向きそう見えるだけで、彼の目は鋭く天上を見据えている。いや、見ているという感覚さえ、今の彼には無いだろう。彼の体の中で忙しく動き回っている部分はただ一つ、頭脳であった。

今、イストの頭の中ではジルドとシーヴァの仕合、それも最後に二つの魔剣に刻まれた古代文字（エンシェントスペル）が光を放ち空間が歪んだあの場面が、何度も何度も繰り返し再生されている。

一体何が起こったのか？
なぜ、起こったのか？
どのようにして、起こったのか？

まったく未知の現象を目の前にして、疑問は尽きることが無い。そして疑問を疑問のままにしておけないのが、イスト・ヴァーレという人間の性であった。答えが出る出ないは別として、考えずにはいられないのだ。

そして今、彼は考え続けている。彼の頭の中では幾つもの事実が検証され、それに基づいて仮説が立てられ、その根拠と反論証拠が戦っている。数々の仮説が立てられては倒れていき、そしてその残骸の上に立てばまた新たな可能性に手が届くようになる。

ベッドでゴロゴロしていたかと思えば突然起き上がって紙にペンを走らせ、猛然とペンを走らせていたかと思えばいきなり手が止まってまたベッドに戻る。そんなことの繰り返しである。

「あ～、分らん……」

乱暴に書きなぐったメモを見比べながら、イストが唸る。「風笛（トゥル・ノヴォ）」の材料が揃ったと連絡があるまで、イストはそうやって考え続けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ガルネシア城の一画に設けられた簡易工房で、オーヴァとイストの師弟が“下準備”の作業に勤しんでいる。「風笛（トゥル・ノヴォ）」の本体にあたる鹿の角から作られた幾つもの穴の開いた笛の部分、そこの魔力の流れ方を一つずつ整えているのである。

以前イストが「光崩しの魔剣」を作ったときには一切のムラがなくなるまで下準備を行ったが、今回はそこまで丁寧には行わない。オーヴァもイストも大雑把にしか下準備を行わなかった。

これは別に、手を抜いているわけではない。回収が不可能ではないとはいえ、「風笛（トウル・ノヴォ）」は使い捨てにすることを前提にして作られた魔道具である。そのような場合にはそもそも下準備そのものを行わないのが普通で、大雑把にとはいえ下準備を行うこの師弟は、譲れない一線を他の職人よりも高い位置に持っていると言えた。

師弟は黙々と作業を続ける。ただ、二人の頭の中は目の前の作業にではなく、別のことに向いていた。言うまでもなく、ジルドとシーヴァの仕合で見た、あの空間の歪みについてである。

「……師匠はどう思う？」

「……はっきりしているのは原因だけじゃな」

「古代文字（エンシェントスペル）、か……」

「うむ」

というよりも、それ以外の原因は考えられない。あの時、二つの魔剣に刻まれた古代文字（エンシェントスペル）が光を放ち、それから空間が歪んだ。ならば空間が歪んだ原因は刻まれた古代文字（エンシェントスペル）にある、と考えるのは自然なことだろう。

もっとも、疑問は何も解決していない。一定の意味を持っているとはいえ、二つの魔剣の刀身に刻まれていたのは文字の羅列である。魔法陣ですらないそれが、なぜあのような現象を引き起こしえたのか。

「……魔法陣がなぜ円形か、覚えておるか？」
「それがもっとも効率のいい形状だからだろう？」
「そうだ。それがあまりにも当然で、当たり前すぎて儂らは時として根本を見失う。そこに至るまでの積み重ねとセオリーを無視してしまう」
「……つまり、効率を無視すれば魔法陣の形状は円形でなくともかまわない、と？」

うむ、とオーヴァは頷いた。ただ、その視線は鹿の角から作った笛に向いており、作業する手を止めることもない。

「つまり師匠は、あの古代文字（エンシェントスペル）で書かれた言葉は魔法陣を形成している、とこう考えているわけか？」
「それ以外説明がつかん」
「あの言葉はロロイヤが遺したものだから、何かあると勘ぐりたくなるのは分るけど……」

――――天より高き極光の。
――――闇より深き深遠の。

そしてさらにもう二つ。

――――果てより遠き空漠の
――――環より廻りし悠久の

これらの四つの言葉は全て初代アバサ・ロットであるロロイヤ・ロットが遺したものである。遺された背景やそこに至る過程の一切が不明で、ただ言葉だけを歴代のアバサ・ロットたちは受け継ぎ、そして敬意を込めて時に装飾として使ってきた。

天才的な魔道具職人であったロロイヤが残した言葉。ただそれだけで何か特別なものではないか、と思いたくなるオーヴァの気持ちはイストも良く分る。実際彼も、いや歴代のアバサ・ロットならば誰でも、これらの言葉には秘密があるのでは、と一度は考える。

「それで、その秘密に心当たりは？」

「まったくない」

堂々とオーヴァは言い放った。その言葉を聞いてイストは大げさに肩を落として見せるが、半分以上は演技だ。

「発想の転換が必要じゃな」

「発想の転換ねぇ……」

「うむ。例えばこれらの四つの言葉、とりあえず“四つの法（フォース・ロウ）”とでも呼ぶか、この“四つの法（フォース・ロウ）”が特別なわけではない、と考えてみる」

四つの言葉“四つの法（フォース・ロウ）”は特別ではない。では、何が特別なのか。

――――材質。

魔剣は二本ともありふれた素材を使っている。何も特別なところはない。

――――術式。

刻印した「干渉」の術式は会心の出来だとは思うが、常識の範疇内だ。何よりも空間に作用するような効果は無い。以前に見せてもらった「災いの一枝（レヴァンティン）」の術式（オーヴァは「暴風」と呼んでいた）も同様だ。

――――使い手。

人間が原因であんな現象起きてたまるか。

――製作者。
特別だ。だが、今回はハズレだろう。
他に特別になりうるものといえば……。
「……古代文字（エンシェントスペル）」
「ふむ。言葉が特別なわけではなく、それを構成している文字が特別、というわけか」
面白い発想じゃな、とオーヴァは笛の具合を確かめながら言った。さらに彼は「その発想をもとに仮説を立ててみろ」と弟子をせっつく。
「『古代文字（エンシェントスペル）は古代の術式研究の果てに生まれた文字である』、とか？」
「お前、その仮説を以前にも立てたことがあるな」
考える間もなく仮説を立てた弟子を見て、オーヴァがそう指摘する。イストもすぐにそれを肯定した。
彼がこの仮説を思いついたのは、ハーシェルド地下遺跡にあったあの“魔法陣もどき”について考えていたときである。
あの“魔法陣もどき”は、「古代文字（エンシェントスペル）を使った単語を描かれた円の内側に沿うようにして書く」というものであった。つまり円と古代文字（エンシェントスペル）だけで構成された、本当に簡単な作りの“魔法陣もどき”な訳である。
「なるほどの。で、そう考えることの根拠は？」

イストから背景を聞き出したオーヴァは話を進める。その間も作業する手は止めない。

「謎が一個解決する」

イストの言う「謎」とは、「なぜ古代文字（エンシェントスペル）を使っていたであろう言語の音が、現在一つも残っていないのか」という謎である。

「古代文字（エンシェントスペル）はもともと文字ではなくそれ自体が術式だった、と考えてみる」

ある術式を試してみたところ、炎が現れた。だからその術式を描いていた文様に「炎」という意味が与えられた。そうやって発現した効果をもとに、術式に意味を与えていったのが古代文字（エンシェントスペル）のもとなのではないだろうか。

「つまり、意味に対して文字を当てはめたのが古代文字（エンシェントスペル）だった、というわけだ」

普通、言語は音が意味を持っている。そして文字とはその音を表すための記号だ。しかし古代文字（エンシェントスペル）の場合は、音ではなく意味を表す文字だった、とイストは仮定したのである。

音が残っていないのも当然である。いや、厳密に言えば残っている。今、この時代に使われている言語、その別の表記の仕方が古代文字（エンシェントスペル）だったのである。もっとも、時間の経過とともに言語形態そのものが変化していることは否めないが。

「で、古代文字（エンシェントスペル）が文字としての体系を備えるようになってくると、

今度は術式研究以外の部分でも使われるようになった」

それが各地の遺跡などに古代文字（エンシェントスペル）が残されている理由であろう。

「だけどやっぱり使いにくい」

それはそうだろう。音と記号がかみ合っていないのだから。そこで人々は言語の音を表す記号を作った。それが今現在使われている常用文字（コモンスペル）、あるいはその基になった文字であろう。

「少し待て。仮に古代文字（エンシェントスペル）がそうやって生まれたとして、どうやって術式の研究を行ったのじゃ？」

記録の積み重ねなしに研究は行えない。そのためにはどうしても文字が必要になる。

「古代文字（エンシェントスペル）以前にも文字はあった」

イストの言うとおり、古代文字（エンシェントスペル）よりも古い文字は存在する。象形文字や甲骨文字などといったものである。そういった文字を使えば記録の蓄積は可能である。そのことを指摘すると、オーヴァも「うむ」と唸って一応納得した。

イストは仮説を続ける。

古代文字（エンシェントスペル）が文字として完成した後も、当然のことながら術式研究は続く。開発される術式はより高性能かつ効率的なっていき、それにともない複雑化していく。そして古代文字（エンシェントスペル）で意味を書くだけではもはや役に立たなくなった。

「そして、術式はだんだんと今の形に近づいていき、それにともない古代文字（エンシェントスペル）は廃れていった」

言語を記述する文字としても、古代文字（エンシェントスペル）より使い勝手の良い常用（コモン）文字（スペル）が使われるようになり、古代文字（エンシェントスペル）は歴史の中に埋もれていった。

これが、イストの考えた仮説である。

「で、お前それを確かめたのか？」

「確かめた。でも何も起きなかった」

実はこの仮説、簡単に確かめる方法がある。あの“魔法陣もどき”を再現して、そこに魔力を流せばいいのだ。最初にこの仮説を思いついたとき、イストは当然これを行って検証したのだが、何も起こりはしなかった。

「流した魔力の量は？」

「普通だと思うけど？」

「術式として効率が悪いのかもしれん」

今の形に近づくことで効率が良くなったというのであれば、逆に言えば古代文字（エンシェントスペル）を使うタイプは効率で劣る、ということになる。ならば発動させるためにより多くの魔力が必要になるのは必然である。

「なるほど……。じゃあ早速」

言うが速いか、イストはそばに立てかけてあった「光彩の杖」に手を伸ばす。彼はその愛用の魔道具を使ってもう一度“魔法陣もどき”を再現し、そして少しずつ魔力を込めていった。

「今、多分普通の量」

宙に浮かぶ“魔法陣もどき”に変化は無い。ここまでは予想通りだ。イストはさらに込める魔力の量を増やしていく。

普通の量のおよそ二倍に達しても変化は無く、イストはさらに魔力を込めていく。そして込める魔力の量がおよそ三倍に達したとき……。

「おいおい……、マジかよ……」

「ふむ、まさか本当に術式であったとはな……」

驚愕と呆れが入り混じった声を漏らすイストとオーヴァの視線の先で、空中に浮かぶ“魔法陣もどき”の中心に小さな炎がともっている。イストがさらに魔力の量を多くすると、それに比例するように炎も大きくなっていく。そのことを確認してから、イストは“魔法陣もどき”を消した。

「……古代文字（エンシェントスペル）は本当に特別なものだったんだな」

「お前の仮説が全てあっているという保障はないが、少なくとも術式を構成する力はある、ということになるのう」

イストとオーヴァの言葉は、平静を装っていたが興奮を隠しきれてはいない。二人とも子供のように目を輝かせている。ただその口元には獲物を狙う肉食獣のような笑みが浮かんでおり、結果として純粋さや純朴さといった子供らしさとはかけ離れた雰囲気になっている。

「つまり、刀身に刻んでおいたあの古代文字（エンシェントスペル）は、やっぱり魔法陣を形成していたってわけか」

「そうなるの」
「でもなんで今まで発動しなかったんだ？」

魔法陣は大きく二種類に分けられる。意識的に発動させるものと、魔力を込めれば発動するものだ。

例えば硬度を上げる「強化」の術式は、魔力を込めれば勝手に発動する。それに対し「干渉」の術式は意識して使わなければ発動しない。

あの仕合の時点で、製作者はもちろん使い手であるジルドとシーヴァも、刀身の古代文字（エンシェントスペル）が魔法陣を構成しているなど、考えてもいない。つまりあの術式は意識して使ったわけではなく、であるならば魔力さえ込めれば発動するタイプのはずだ。しかし、刀身に魔力を込めること自体は今まで何度もやってきたはずで、その時に発動しなかったのはなぜなのか。

「単純に魔力量が足りなかったからじゃろうな」

古代文字（エンシェントスペル）で構成した魔法陣の効率が悪いということは、今さっき確認したばかりである。しかも刀身に刻んであったのは円形ではなく直線の魔法陣で、さらに効率が悪くなっていることが容易に想像できた。

「それを発動させるなんて、二人ともどんな魔力量してるんだよ……」
「さあの。これはただの勘じゃが、お前の二十～三十、下手をしたら五十倍くらいはあるのではないか」
「化け物だな……」

イストが呆れたような声を漏らす。しかしその声には、そんな化け物を見つけ出した自分の目を誇るような色がある。そしてそれはオーヴァも同じなのだろう。

「で、話を戻すけど“四つの法（フォース・ロウ）”が術式を構成している。これはもうほとんど間違いない。で、問題はそれがどんな効果なのかってことだけど、師匠はなんか予測立つ？」

「なにも。もとより調べれば分ることじゃ。余計な先入観は持たぬほうがいい」

それもそうか、とイストは頷いた。術式だと分っていれば、解析のしようはいくらでもある。

「そういや話は変わるんだけどさ……」

「なんじゃ？」

「ロロイヤが魔道具製作のイロハを学んだのってどこか分る？」

この機会に前々から疑問に思っていた、しかし今の今まで放置していたことを聞いてみる。

「確か……、パックスの街だったはずじゃ」

当時そこには大規模な総合学術研究院があり、術式の研究も行っていたという。

「それじゃあ“四つの法（フォース・ロウ）”もそこで？」

「恐らくな」

それならば「狭間の庵」に“四つの法（フォース・ロウ）”に至るまでの過程や空間系魔道具の理論が残っていないことも説明がつく。

「……て、ちょっと待て。パックスの街というのは確か……」

「『御霊送りの神話』の中で、神界に引き上げられた街じゃな」

そしてそこは現在巨大な湖になっており、そのすぐそばに教会の総本山である神殿がある。

「なにやら、因縁めいたものを感じるの……」

第八話　王者の器？

ゲゼル・シャフト・カンタルクは乱世の王である。少なくとも、本人はそのつもりでいる。

今のところ、彼の業績は輝かしい。

これまでカンタルク軍に何度も煮え湯を飲ませてきたブレントーダ砦を攻略し、そこに住まう二匹の守護竜を粉砕した。さらにポルトールの内乱に乗じて、いや積極的に内乱を煽ってかの国を事実上の属国とした。

因縁の敵国であるポルトールを完全に屈服させた王はカンタルク史上ゲゼル・シャフト以外にはおらず、ただこの一点をもってしても彼の名は歴史に残るであろう。

この際、「守護竜の門」を破壊してブレントーダ砦を攻略したのも、ポルトールの内乱を煽り結果としてかの国の国力を半減させ屈辱的な条件を飲ませたのも、全ては大将軍たるウォーゲン・グリフォードの手腕である、と指摘するのはナンセンスである。

彼がカンタルクという国に属している以上、その業績はすべてこの時代その国の王であるゲゼル・シャフトのものなのだから。

ここまでは、いい。が、ここ最近のエルヴィヨン大陸には、ゲゼル・シャフト・カンタルクにとって無視しえぬ大きな動きがある。

クロノワ・アルジャークとシーヴァ・オズワルド。東のアルジャーク帝国と西のアルテンシア。

二人の英雄に率いられたこの二つの国は、ここ最近で急速に勢力を拡大させている。特にアルジャーク帝国はカンタルクと近く、いやオムージュを併合したアルジャークはすでにカンタルクと国境を接しており、あらゆる意味で無視することの出来ない存在になっていた。

当然、カンタルクの王たるゲゼル・シャフトもアルジャークとその皇帝クロノワを意識するようになっていた。

現在、アルジャーク帝国はカンタルクに対して、少なくとも表面上は友好的な態度を保っている。しかしカンタルクの王宮内では帝国を危険視する声も多い。つまり、

「将来的には矛をこちらに向けるのではないか」

と心配しているのである。この危機感を共有しない者は、今のカンタルクの王宮内にはいないだろう。

しかし、同じ危機感を共有しているとはいえ、その対応は大きく二つに分かれている。

「こちらも国力と戦力を増強し、アルジャーク帝国に対抗すべきだ」

と唱える派と、

「アルジャーク帝国と敵対してもなんら国益にはならぬ。それよりも友好的な態度を取っている今のうちに積極的に協力体制を築き、争わないですむ道を模索すべきである」

と主張する派である。

主戦論と非戦論、と言ってしまえばあまりにもありきたりでつまらない表現になってしまうが、まあよくある意見の対立と思えばよい。どちらかが一方的に正しく、どちらかが一方的に間違っている、ということはない。両論どちらも聞くべき部分がある。そう考えるべきだろう。

しかしこの意見の対立は王宮を二分するには至らなかった。なぜなら国王たるゲゼル・シャフト・カンタルクが主戦論に傾いていたからである。

だが、彼の心のうちは他の者とは微妙に異なる。

彼らが共有した危機感、言い換えるならば恐怖をもとに主戦論を唱えるのに対し、ゲゼル・シャフトがそれを唱えるのは野心に起因していた。

「クロノワ・アルジャークが、シーヴァ・オズワルドがどれほどのものか。この余とて、いや余こそが乱世の覇者である」

そんな自負が、彼のうちにはある。

余談になるが、シーヴァ・オズワルドは王になるに際して「我」という一人称を選んだが、ゲゼル・シャフトは「余」という一人称を選んでいた。この辺り、二人の感性の違いであろうか。

それはともかくとして。動機の差はあれど、王が主戦論に傾いているのだ。自然、話はそちらの方向でまとまり動いて行くことになる。そしてその末の結果が、今一つの形になろうとしている。

それが、オルレアン遠征である。

オルレアンは西の国境をカンタルクやポルトールと接し、北の国境は旧オムージュ（現在はアルジャーク）、東の国境はカレナリアとテムサニスに接している。国土は五二州で、縦に細長い国であった。

現在カンタルクでは軍部が総力を挙げてオルレアン遠征に向けて準備を行っている。それは大将軍たるウォーゲン・グリフォードも同じで、ということは彼の副官であるアズリア・クリークも遠征に向けた準備に追われていた。

「大将軍は今回の遠征、どのように思われますか？」

書類の束を胸元に抱えながら、アズリアはウォーゲンに尋ねた。彼は部下が質問してきても決して嫌な顔をしない。

「遠征を行うことを前提に考えれば、正しい選択じゃろうな」

オムージュ領に出兵してアルジャーク帝国に喧嘩を売るには早すぎる。北のラキサニスやポルトールの西に位置するラトバニアといった国はほとんど神聖四国の属国のような立場で、遠征の対象とすれば神聖四国と教会が黙ってはいるまい。カンタルクは神聖四国の一国であるサンタ・シチリアナとも国境を接しているが、ここに遠征を仕掛けるのは愚の骨頂であろう。

となれば、消去法のすえに最後に残るのは東のオルレアンしかない。

カンタルクの版図は六三州。ただしポルトールを属国としているので、かの国の版図六七州も計算に含めることが出来るだろう。合

計すれば一三〇州になる。単純に考えれば、オルレアンと比べて三倍近い国力を持っていることになる。

「政治的に考えても軍事的に考えても手ごろな相手。その評価は間違ってはおらぬと思うぞ」

そう言いつつも、ウォーゲンの言葉にはどこか棘があるようにアズリアは感じた。

「大将軍は、今回の遠征には反対ですか……？」

「……今回の遠征は陛下が決定されたことじゃ。である以上、軍人である儂はそのために己の職責を全うするのみじゃ」

ウォーゲンは言葉を濁して直接の答えを避けた。言葉を濁したこと自体、彼が今回の遠征に心のうちでは賛成し切れていないことの証拠だ。しかしウォーゲンの言うとおり国王たるゲゼル・シャフトが決定を下した以上、大将軍たる彼にはそれに従う義務がある。この時点で一人だけ反対するわけにもいくまい。

今、カンタルクは国を挙げて遠征に向かって突き進んでいる。軍はまだ動かしてはいないし宣戦布告もまだしていないが、外交交渉の席などではかなり高圧的な要求をしているとも聞く。

オルレアン遠征はまだ始まってはいない。しかし、もはや確定した未来として歴史に予定されている。ウォーゲンはそう感じていた。そして恐らくはオルレアンの人間たちも同じことを感じているのだろう。

（ならば、祖国にとって輝かしい未来にしたいものじゃな）

ウォーゲンはそう願う。そして恐らくはオルレアンの人間たちも同じことを願っているのだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カンタルクで遠征の準備が着々と進められていたとき、その対象であるオルレアンにおいてもその気配は感じ取ることが出来ていた。そしてその気配に気づいた以上は何なしらの決定を下さねばならないものだ。

「まず決めるべきはカンタルクの提案を受けるか否か、か……」

オルレアン国王、エラウド・オルレアンは会議室に居並ぶ国の重臣たちを前に、まずそうきり出した。

カンタルクの提案というものを簡単に要約すれば、

「カンタルク・ポルトール・オルレアンの三国で同盟を結び、近年急速に勢力を拡大させているアルジャーク帝国に対抗する」

というものである。

「素案だけ見れば、その内容は共感できる部分も多いのですが……」

そういって言葉を濁し、眉をひそめたのはこの国の宰相であるカストール・フォン・オルデン侯爵である。彼の言うとおり、カンタルクの使者がおいていった素案だけを見れば、この話はそう悪いものではない。

アルジャーク帝国はオムージュ・カレナリア・テムサニスというオルレアンに国境を接していた三カ国をすでに併合してしまってい

る。つまりオルレアンは国境線の半分以上をアルジャークと接しているわけで、いつどこから攻め込まれるのかと戦々恐々とした空気が王宮内に漂っていた。

現在アルジャーク帝国の版図は三四九州という広大なものである。仮に戦端が開かれた場合、到底オルレアン一国で対抗することなど出来ない。

そこで、三国同盟である。

カンタルク・ポルトール・オルレアンの三国の版図を合わせれば一八二州となり、勝てないまでも負けない戦いをすることは可能だろう。

加えて西方、つまり神聖四国を中心とした教会勢力の混乱がある。十字軍遠征がどうやら失敗したらしいという情報はすでにオルレアンにも届いている。この先教会勢力がどうなっていくかは分らないが、仮に混乱をきたした場合、その影響は確実にカンタルクやポルトール、さらにその東のオルレアンにも波及してくるだろう。

そうなった時、一国で対処することは難しい。だが三国同盟という一つの勢力圏が確立していれば、その影響も最小限に抑えることが出来るのではないだろうか。少なくとも一国で事に当たるよりもマシな結果が得られるであろう。

「そう、悪い話ではない。三カ国の発言力が同じならば、だが」

アルテンシア同盟においてもそうであったがこういった同盟の場合、その内部での発言力はそれぞれが保有する力に比例する。簡単に言えば国の版図に比例する、ということだ。

三カ国の版図は、カンタルクが六三州、ポルトールが六七州、そしてオルレアンが五二州である。おおよそ力は拮抗しているといえ、普通ならば同盟内での発言力も等しくなるはずである。

そう、普通ならば。

残念なことに三カ国の内の二つ、つまりカンタルクとポルトールの関係は普通ではない。ポルトールは今や事実上カンタルクの属国であり、それはカンタルクが一三〇州分の発言力を持っていることに等しい。

つまり三国同盟が成立した場合、カンタルクは事実上の盟主になる。そうなれば、オルレアンは対アルジャーク帝国の防波堤として無理難題を押し付けられ、使い捨てにされるのが目に見えている。

「カンタルクの交渉のやり方を見ていますと、是が非でも三国同盟を成立させたい、という意思は感じられません」

カンタルクとの交渉の責任者がそう発言する。相手方の交渉役の態度は横柄で誠意というものが欠けている。同盟の成立よりはこちらを怒らせることを目的にしているようだ。

カンタルクにとってこの同盟の提案は遠征の準備のための時間稼ぎと、宣戦布告のための材料集めに過ぎないのだろう。よしんばオルレアン側が屈し、屈辱的な条件を飲ませることが出来れば御の字、程度にしか思っていない。

「……仮にカンタルクと事を構えることになったとして、我が軍は勝てるのかね？」

老年の文官がテーブルの向こう側に座る武官たちに問いかける。その問いに答えたのは、オルレアンでも屈指の名将と名高いブッシェル・フォン・ギーレス伯爵だった。

「カンタルクだけならばやりようはありますが……」

仮に戦端が開かれたとして、実際に動くのはカンタルク軍だけであろうとブッシェルは考えていた。先の内乱の影響でポルトールの力、特に軍事力に限って言えば半分以下に減退しており、そのポルトールが遠征にしゃしゃり出てくることはないだろう。しかしその予測があるにもかかわらず、彼の言葉は苦い。

「アルジャークか……」

「御意」

エラウドの言葉をブッシェルは肯定した。

仮にカンタルク軍を退けられたとして、しかしそのためにオルレアン軍が疲弊しきっていれば、その隙をアルジャークが見逃すとは思えない。いや、それ以前に西でカンタルクと戦っている間に東からアルジャークに攻め込まれれば、その時点で終わりである。つまりオルレアンが主権国家としてこれまでどおり存続していくためには、カンタルクを退けなおかつアルジャークに手出しさせないという、神がかり的な綱渡りを成功させる必要があるのである。

「……カンタルク主導を承知で同盟に参加する、という手もありますが……」

文官の一人が思わずそういってしまうほど、この条件は厳しい。

第一隙を見せなくてもアルジャークとの国力差は歴然なのだ。この綱渡りが成功する確率はほぼゼロと言っていいだろう。

同盟に参加することでアルジャーク帝国に対する防波堤扱いされたとしても、それはある面しかたがないとも言える。なにしろそういう位置関係なのだ。国の位置に文句をつけても始まらない。

また神聖四国で混乱が生じたときには、今度はカンタルクがその混乱に対する防波堤になる。そういう意味では対等であるとも言えるだろう。

「有事の際に協力を惜しまないでくれるならば、か……」

しかし、交渉に臨む今のカンタルクの態度を見るにそれは難しいように思えた。結局のところカンタルクが欲しいのは対等な同盟国ではなく、自由にこき使える属国か新たに併合した領土なのだ。

対等な関係でカンタルクと手を結ぶことは出来ない。そのことが再確認されると、会議室には重苦しい沈黙が広がった。

「宰相に聞きたいのだが……」

その沈黙に押しつぶされることなく声を出したのは、国王のエラウドだった。

「現状、我が国にとって最も良い結果とは、なんであろうか」

エラウドに問われ、カストールは考え込む。ひとまず現実不可能でもよい。オルレアンにとって最善の結果、それは……。

「……アルジャークと対等の同盟を結べるならば、それが最善です」

言いはしたものの、会議室の空気は軽くならない。「そんなことは無理だ」とこの場にいる全ての人間が理解しているからである。

現在、アルジャーク側からはなんの接触もない。かの国がオルレアンに対してどのような思惑を持っているかは定かではないが、少なくとも格下相手にわざわざ平等な同盟を結ぶ必要などない。

カンタルクがオルレアンを狙うこの状況下では、もはやこれまでどおりの独立を保つことは難しい。さりとて対等な同盟を結んでくれそうな隣国もない。

なかなかに絶望的な状況だといえるだろう。

「……仮に手を結ぶとして、カンタルクとアルジャーク、どちらがましかな」

「それはアルジャークでしょう」

思いがけず宰相のカストールが即答したことに、エラウドは驚いた。

確かにアルジャークの方が国力はある。しかしオルレアンから見れば、それは自国を安く見積もられるということだ。商売ではないが、売り込むのであればより必要としてくれるところ、より高く買ってくれるところへ売り込むのが筋ではないだろうか。この場合、オルレアンの力をより必要としているのは、カンタルクのほうのはずだ。

「さきのアルジャークによるテムサニス遠征は、皆様ご存知のことと思います」

カストールの言葉に、一同は頷く。隣国が侵略を受けて無関心でいられる国などない。当然オルレアンもこの時にはいつもより情報収集を密にして状況の推移を見守っていた。そのため事の始めから終わりまで、かなり詳細な情報を持っていた。

「あの遠征の際、アルジャークは連合軍を組織しました。恐らく、いえ確実に単独でも遠征を成し遂げるだけの力があるにもかかわらず、です」

捕虜にしていたテムサニス軍と連合しジルモンドを担ぎ出すことによって、確かに遠征は普通では考えられないくらい早期に決着し、しかもその後の混乱も小さい。しかしその代償としてクロノワはジルモンドに五州を与えることになり、領土内に一種特別な自治領が出来てしまった。

今、その良し悪しを論じる必要はない。ここで重要なのは、

「クロノワは五州を与えてでも早期決着にこだわった」

ということである。

「つまりアルジャークには、いえ皇帝クロノワ・アルジャークには単純な領土拡大とは別の目的がある、と考えるべきです」

その目的が何なのか、今はまだ分らない。しかし、クロノワが領土拡大にこだわらないというのであれば、同盟を締結した際に何州か割譲させられる、という事態は避けられるのではないだろうか。

「しかし、不利な条件を飲まされることに変わりはないのでは……

…？」

領土拡大以外の目的があるというのであれば、その分野でアルジャークは自分に有利な条件を押し付けてくるだろう。ならばオルレアンの立場が不利であることに、結局変わりはない。

「何とかして共犯者になりたいところだな」

エラウドが呟く。弱者と強者という関係ではなく、一緒になんらかの目的を達成する共犯者の関係。

「……出来るかもしれません」

「まことか？カストールよ」

「はい。カンタルクが上手く踊ってくれれば、ですが」

この時代、攻守の関係などたやすく入れ替わる。カンタルクは肉食獣を自認しているだろう。しかしオルレアンは食われるだけの草食動物ではない。オルレアンにとて、牙はあるのだ。

第八話　王者の器？（前書き）

本日１２月２３日で本作「乱世を往く！」は連載一周年となりました！

これも読んでくださる皆様のおかげです。

本当にありがとうございます。

第八話　王者の器？

テムサニス遠征が成功しその後の事後処理も滞りなく行われている、という報告を帝都オルクスにあるボルフイスク城の執務室で聞いたクロノワは一つ安堵の息を吐いた。

捕らわれのジルモンドを見捨てテムサニス王位を簒奪したゼノスは、報告によれば自刎して果て旗頭を失った新王軍は降伏したという。ジルモンドが王旗を掲げているおかげか大きな混乱もなく各地の平定は進み、ゼノスが各地を略奪していた頃に比べれば随分と安定したといえる。

ゼノスに味方した貴族たちの処分は最初からジルモンドに任せるつもりで、そのことはクロノワが彼とかわした“契約書”にも明記されている。恐らくはこれがジルモンドにとってテムサニス国王としての最後の仕事になるであろう。彼の決定に口出しをする気は毛頭無いが、どんなに軽くても「お家取り潰し」の処分が下るはずで、先の内乱も合わせればテムサニスの貴族はこれでほとんど絶滅することになる。アルジャーク帝国としては申し分ない結果といえるだろう。

これらの報告を聞き、さらに宰相であるラシアートや腹心の将軍であるアールヴェルツェなどとも相談した結果、クロノワはテムサニスを視察することにした。これにはテムサニスの主権がもはやアルジャークにあることを内外に示す狙いがある。

「この機会にカルフィスクも見ておきたいですね」

クロノワにはそんな思惑もある。テムサニスの南端にあるその貿易港は、これからクロノワが拡大させる海上貿易の重要な拠点になるはずで、そこを視察することには十分に意味があるだろう。

そのような訳で、テムサニスに赴くにあたりクロノワは海路を選んだ。ヴェンツブルグから出航してカルフィスクに入り、そこから陸路でテムサニスの王都ヴァンナークに向かう予定である。

「カレナリアの様子も見ておきたかったのですが……」

カレナリアでなにか問題が起こっているという報告は無い。しかし、ベルトロワの時代に遠征軍を率いて併合し、その後ケーヒンスブルグに急きょ戻り、レヴィナスとの内戦を経て皇帝となり、その間まったくのノータッチでさすがに無責任な気がしていたのだ。が、海路で直接カルフィスクに向かうというのであれば、カレナリアは素通りどころかその地を踏むことも無い。

「カレナリアは帰りによることにしましょう」

行きがあれば当然帰りもある。帰りはレイシェルやイトラの軍勢と共に陸路を行き、その際にカレナリアの視察を行えばよかろう。

この時代、皇帝や国王といった身分のものが地方を視察しようと思えば、その一団はたいへんな大所帯となる。彼らは視察の間も執務をおこなわなければならず、いわば国家の中枢が丸ごと移動するような形になるからだ。

しかし、クロノワの視察団はそのようなものではなかった。総勢はわずか二百名。彼の皇帝という身分を考えれば、呆れるほど小規模である。

理由はいくつかある。

最大の理由はクロノワが視察を行っている間、彼の代わりに執務を取り仕切ることの出来る人物が帝都にいる、ということであろう。言うまでもなくその人物とは宰相ラシアートのことである。彼のおかげで「国の中枢が丸ごと移動する」という事態を避け、クロノワは随分と身軽に動き回ることが出来るのである。

加えて、クロノワは陸路ではなく海路を行く。当然船に乗っての旅となり、船の大きさや数によって人数は制限される。今回はクロノワが乗る大型船と中型の護衛船が三隻の予定である。ちなみに船の乗員は二百名の中には含まれていない。

また、通信用魔道具「共鳴の水鏡」を用いて連絡を送っておくことにより、クロノワが到着するカルフィスクにあらかじめ迎えと護衛の軍を配備しておくことが可能で、このため海上の護衛は最小限でいいであろうと判断されたのだ。

クロノワ自身が「大仰なのは嫌だ」と言ってごねた、ということは歴史書には残されていない。

慣れない、というよりもまったく初めての船旅で、クロノワはものの見事に撃沈した。有り体に言えば船酔いに苦しんだのである。海に目を向け、この先海上貿易によって国を大きく発展させる彼だが、「初めて船に乗ったときは散々だった」と晩年笑いながら語ったという。

テムサニスのカルフィスクでクロノワを出迎えたのはイトラ・ヨクテエルであった。今テムサニスにいるアルジャーク軍の将は彼と

レイシェルだけだからどちらかが出迎えに来るとは思っていたが、どうやら外に出て動き回るのはイトラの仕事らしい。

「思っていたよりも活気がありますね」

つい最近大きな戦があり、しかも併合されたばかりだ。経済活動も下火になっているのではないかと思っていたが、カルフィスクには人と物が集まり活気に溢れていた。

「戦場になったのは国の北部ですし、この辺りは影響が少なかったのではないかと……」

イトラの言葉にクロノワも頷く。なにはともあれ、カルフィスクが貿易港として十分に機能していることは彼にとっては嬉しい誤算であった。これならばシラクサとの貿易も早い段階で始められるだろう。

（まあ、それはフィリオの結果待ちですがね……）

カルフィスクの街を一通り見て回ると、クロノワはイトラと共にヴァンナークを目指した。ヴァンナークを中心とした五州はジルモンドに与えられた“自治領”であり、皇帝であれど強権を盾においそれと手出しをするわけにはいかない。テムサニスの併合からさほど時間がたっていないこの時期に、皇帝であるクロノワがそこに足を踏み入れるのは色々と誤解や緊張を招きそうであるが、これまでこの国の政の中心はヴァンナークだったのだ。当然、重要な書類類はすべてそこに集約されており、また行政機能もここを中心にしている。テムサニスの領内が安定するまでは、アルジャーク軍はここに留まることになるだろう。

「ヴァンナークの機能をどこか別の都市に移したほうがいいかもしれませんね」

ヴァンナークはこの先、ジルモンドが治める自治領の中心都市となるだろう。ならばテムサニ領を治めるために必要な機能をどこかに移す必要がある。

「後でラシアートと相談することにしましょう」

ヴァンナークの城でジルモンドと会見をした後、クロノワは正式にテムサニスのアルジャークへの併合を宣言した。征服地で堂々と併合を宣言するというは、歴史上でもなかなか例が無い。

クロノワの宣言に歓声をあげて答えたのは、ほとんどがアルジャークの兵士たちだった。それはそうだろう。その他はついこの間までテムサニスの国民だった人たちだ。ただの平民たちにしてみれば「税金を納める相手が変わった」くらいにしか変化はないはずだが、今まで自分たちが住んでいた国がなくなるというのは、いい気はしないだろう。

（頑張らなければいけませんね……）

クロノワは心の中で決意を新たにする。

「少なくともこの時期、この国を併合したのがアルジャークでよかった」

そう言ってもらえるように。国を発展させ、そして豊かにしていこう。生まれの不平等はなくせないだろうが、それでも立身出世のチャンスは平等になるような、そんな国にしよう。きっとそれが征

服者の責任だろうから。

テムサニスには視察に来たはずであったが、ヴァンナークで併合を宣言してからというもの、クロノワの仕事はもっぱらその併合の事後処理であった。

近年、アルジャーク帝国は急速にその版図を拡大させた。それ自体は（帝国にとっては）喜ばしいことで偉業として誇るべきなのだろうが、反面大量の書類仕事を発生させている。より分りやすく言えば、人手が足りないのだ。

「書類の山を見ているとこう……、燃やしたくなりますよね？」

クロノワがうつろな目でそんなことを口走るくらいには激務だ。

「せっかく視察にかこつけて仕事をラシアートに押し付けてきたというのに……」

ぶつぶつとそんな裏事情をつぶやくクロノワ。そんな彼のもとに一つの報告がもたらされる。それは、テムサニスの隣国オルレアンの国王、エラウド・オルレアンから「共鳴の水鏡」を用いた秘密裏の通信が入った、というものであった。

「失礼、お待たせしました」

「いえ、突然のお呼び立て、こちらこそ失礼いたしました」

通信用の魔道具である「共鳴の水鏡」は、通常地下に安置されることが多い。現在クロノワが用いているそれもその例に漏れず、蝋燭が設置されてはいるが室内は薄暗い。そのせいか宙に浮かぶエラウドの像もどこかぼやけているように見えた。

「それで、今日はどういったご用件でしょうか。秘密裏の通信とは、あまり穏やかな様子ではありませんが……」
「実は、陛下に一つお願いがありまして、今日の場を設けさせていただきました」
「願い、ですか……」

クロノワの声に乱れは無い。が、彼の頭のうちでは幾つもの可能性が浮かんでは消えていく。体は適度に緊張し、彼の目つきは若干鋭くなった。

この場の話し合いは非公式のものである。ここで話し合われたことが表に出ることは恐らく無い。しかし一国の王が一国の皇帝に願いがあるという。非公式である以上、それは突っぱねてもかまわないし、相手もそれは覚悟しているだろう。しかし、だからといって事の重大さが薄れるわけではない。

「実は、オルレアンに対して宣戦布告をして欲しいのです」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

併合したばかりのテムサニスを視察していた時期、クロノワはさらに隣国のオルレアンに対して圧力を掛け始めた。

いきなり宣戦布告をするような真似はしなかったが貿易や関税、港の優先的使用権などかなり一方的で不平等な内容の条約を締結するよう迫ったのである。

アルジャークがオルレアンと貿易などに関する条約を結ぶこと自体は突飛なことではない。

アルジャークはこれまでオルレアンとは国境を接していなかった。接していたのはオムージュやカレナリア、テムサニスといった国々でこれらの国は独自に、というよりもバラバラにオルレアンと通商条約を結んでいた。

これら三カ国は最近まとめてアルジャークに併合されてしまったが、アルジャークとオルレアンの間に通商条約が無かったため、それらの地域とオルレアンの間の貿易はこれまで古い通商条約に基づいて行われていた。

それを一本化しようというのである。しかしそのためにアルジャーク側が提示した条件は、先ほども述べたとおりあからさまに不平等なものであった。

これに対しオルレアンは態度を鮮明にせず、返答を先延ばしして時間を稼ぎ状況が変化するのを待とうとした。

しかし、クロノワ・アルジャークはそれを許さなかった。腹心中の腹心であるアールヴェルツェ・ハーストレイト将軍に命じて、軍を整えさせ南下を命じたのである。将軍がやってくる前に返答しなければ、そして提示した条件を飲まなければ、そのまま宣戦布告するという構えであった。

この時、アールヴェルツェ将軍が動かしたのは総勢で六万の軍であった。ただし、このうち半分の三万はいわゆる補給部隊であり、実際に戦力として想定しているのは三万だけであった。

これに加えて、クロノワは虎の子の魔導士部隊を連れてくるよう、彼に命令している。このことを、クロノワが本気であった証拠と見

ている歴史家は多い。

これだけでは少ないような気もするが、しかしアルジャーク軍の戦力はこれだけではない。カレナリアのベネティアナにはテムサニス遠征の際に動かしたカルヴァン・クグニス将軍率いる三万の部隊が無傷でいる。またテムサニスのヴァンナークにはイトラ・ヨクテエル将軍とレイシェル・クルーディ将軍の両部隊も控えている。先の遠征による死傷者を除いたとしても、合計で十一万以上の軍勢を誇っている。加えて、動かそうと思えばジルモンドが率いていた旧テムサニス軍を動員することも可能で、そうなれば二十万を超える大軍も用意することが可能だった。

オルレアンのほうも慌てふためいているだけではない。宣戦布告回避と条約の内容で譲歩を引き出すべく外交手段を駆使しながら、その一方で兵を集め戦端が開かれてしまうその事態に備えた。

その様子を、獰猛な笑みを浮かべながら眺めていたのがカンタルクである。アルジャークがオルレアンに圧力を掛け始めたこの頃、逆にカンタルクはオルレアンと距離を取り始めた。その代わり国境付近ではカンタルク軍の斥候の動きが活発化した。それはカンタルク軍がもうすぐで動き出すことを予感させる。そのタイミングは、はたしていつになるのであろうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カレナリアのベネティアナに着いたアールヴェルツェはその晩、カルヴァンを晩酌に誘った。談笑しながら赤ワインを一本空けて酔いが回ってきた頃、アールヴェルツェは唐突にこう言った。

「アレクセイ将軍を殺した、私やクロノワ陛下を恨んでいるか？」

「将軍、それは……」

カルヴァンが困ったように笑う。ただ、その目は笑っていなかった。

「酒の席だ。表沙汰にしようとは思わぬし、本気にもせぬ」

だから腹のうちに溜め込んだものを吐き出してしまえ、とアールヴェルツェは言外にそう言った。途端、カルヴァンのまとう空気が変わった。

「……師父は！」

吐き出すようにして、カルヴァンは叫んだ。「師父」というその言葉のとおり、彼にとってアレクセイ・ガンドールは正しく師であり父であった。

しかし、カルヴァンは最初からアレクセイのことを敬愛していたわけではない。むしろかなり長い間、彼はアレクセイのことを恨み憎んでいたし、少し成長して語彙が増えてからは「無能者」と罵っていた。

理由は、彼の父であるバルト・クグニスがアレクセイの指揮する部隊で戦い、戦死したからである。

誤解の無いよう記しておくが、バルトが戦死した戦いにおけるアレクセイの部隊指揮には、なんらまずいところは無かった。味方の損害は最小限にし、逆に敵には最大限の損害を与えた。

しかし、戦死者の家族にそのような頭でっかちな理論が受け入れ

られるわけも無い。むしろ家族の流した血の上に戦功を積み上げているようにすら見えるだろう。

少なくとも幼い頃に父親を失ったカルヴァン少年はそうだった。アレクセイが世間でどれだけ賞賛されようとも彼はその評価を頑として受け入れず、父を戦死させたというただその一点をもってアレクセイを無能者と罵った。

そうやっていつしか軍人そのものを嫌うようになっていたカルヴァンだが、しかし彼が入ったのは士官学校であった。理由は単純だ。「金が無かった」からである。

アルジャーク帝国においては、戦死者の家族に対し相当額の見舞金が国から支給される。クグニス家もその見舞金を受け取っており、金銭的に困窮していたわけではないが、間違っても裕福とはいえない。

アルジャーク帝国では国民の学習意欲が高い、という話は前にした。しかしだからといって国民の全てが望む教育を受けられるわけではない。情熱の前にはいつだって経済が立ちはだかる。高い教育を受けようと思えば、それだけ金がかかるのだ。

そこでカルヴァンが目をつけたのが士官学校であった。この学校は国が助成金を出しており、卒業後一定年数軍役に着くことを条件に、安い学費で高度な教育を受けることが出来のである。

士官学校に入ったカルヴァンは精力的に勉強した。しかし彼に軍人として身を立てる気は毛頭無い。ではなぜかというと、成績上位者には奨学金が出るのだ。学費が安いとはいえ、必要な金は学費だけではない。貧乏学生であるカルヴァンにこの奨学金はありがたか

った。

動機がいささか不純であるとはいえ、カルヴァンは学業に打ち込んだ。彼の頭も、どうやらその情熱に応えうるだけの作りをしていたらしく、カルヴァンは卒業まで成績上位者（奨学金給付者）名簿の中に名前を連ね続けた。

カルヴァンが初めてアレクセイと言葉を交わしたのも士官学校だった。

カルヴァンが入学してから二年目の初夏のある休日、彼は士官学校の図書館で本を読んでいた。周りには同じように本を読んでいる学生が大勢いたが、カルヴァンは彼らとは異なっていた。大多数の学生たちが軍人の卵らしく戦略や戦術の本を読んでいるのに対し、彼は歴史書を読んでいたのである。

「なぜ君は歴史書を読んでいるんだい？」

そうカルヴァンに話しかけたのが、実はアレクセイ・ガンドールであった。彼はずっと国境の近くで部隊を率いていたのだが、その働きが評価されて一軍を任されることになり、帝都ケーヒンスブルグに呼び戻されていたのだ。

少し空いた時間を利用して、アレクセイにとっても母校である士官学校を見学していたところ、一人だけ歴史書を読んでいる学生を発見し興味半分に声を掛けたのだ。

カルヴァンは話しかけてきた声の主を一瞥し、それが大人であることを確認すると、この学校の教師だろうと当たりをつけそれ以上の詮索はしなかった。視線を本に戻し、つまらなそうにこう答えた。

「軍人になるつもりが無いからです」
「軍人になるつもりが無いのなら、なぜ士官学校に？」
男が面白そうに問いを重ねる。カルヴァンは一瞬目つきを鋭くし、それから口元に嘲笑の笑みを浮かべた。まるで、自分の身を切るような笑い方だった。
「父が無能な指揮官の下で戦い戦死したので、金が無いんですよ」
「その無能な指揮官の名前は？」
「アレクセイ・ガンドール」
むしろ淡々と、当時すでに名将と言われていた男の名をカルヴァンは口にした。
「なぜ、無能だと？」
「自分の策で死んだ部下のことを忘れてる奴は、みんな無能だ」
吐き捨てるようにしてそういったカルヴァンはそのまま席を立ち、そばに立っていた男に顔も見ないまま一礼してその場を去った。
こうして二人は互いに名前も名乗らないまま別れた。これが、カルヴァンとアレクセイの最初の邂逅であった。
二度目の邂逅は、カルヴァンが士官学校を卒業してから一年後のことであった。卒業後、部隊に配属された彼は、やる気がない割にはそこそこの功績を挙げ、それが評価されて配置換えとなった。
そして新たな転属先がアレクセイ・ガンドール将軍の副官だったのである。

（まさか、あの男がアレクセイだったとはな……）

初めて上官としてのアレクセイに会ったとき、カルヴァンは内心の動揺を顔に出さないよう多大な努力をしなければいけなかった。かつて「アレクセイ・ガンドールは無能だ」と吐き捨てたその相手こそ、まさか本人だったとは。

（では、なぜ俺を副官に……？）

人事を担当する部署が勝手に割り振った結果の偶然なのか、それともアレクセイ本人がカルヴァンを副官にと望んだのか。だとすればなぜ自分に暴言を吐いた相手を副官にしたのか。

（部下にして嫌がらせでもするつもりか……？）

そうだとしてもカルヴァンは一向にかまわない。それこそアレクセイが無能者であるという何よりの証拠になるからだ。

しかし、カルヴァンの偏見に満ちた憶測は外れた。一ヶ月たっても二ヶ月たっても、アレクセイは上司の権力を傘に着てカルヴァンに迫害を加えるような真似は一切しなかったのだ。それどころか彼は考えうる限り最高の上司であったといっていい。

（いっそ自己申告してやろうか……？）

自分が暴言を吐いたことをアレクセイは忘れているのではないか。そう思ったカルヴァンはあの時「無能者と罵ったのは目の前のこの自分である」と自己申告することも考えた。憎い相手が目の前にいれば報復したくなるのが人間というものであろうから。

（しかしだからといって……）

しかしだからといって、アレクセイの能力を否定できるわけではない。こうしてそばで仕事をしていれば自分の憶測か外れたこと、そして彼が有能な上司であることをカルヴァンは認めざるを得ない。いくら「アレクセイは無能者である」という偏見を持っていても、いや、そういう偏見を持っていて評価が辛くなっているからこそ、アレクセイが際立って優秀であることを認めざるを得ないのだ。

（なんなのだ……！）

無能であって欲しい者は、実は極めて優秀。粗暴で横暴であって欲しい上司は、実際には温厚で人の出来たよい上司。カルヴァンが独断と偏見によって作り上げていたアレクセイ像は、実物を前にすると音を立てて崩れてしまった。

客観的にみれば誰もが羨むはずの職場で、カルヴァンは悶々とした日々を送っていた。そんな彼に変化が訪れたのは、あの日と同じ初夏のある日のことであった。

アレクセイの執務室の片隅には、表題の書かれていない本が何冊かまとめて置いてある。すっかり紙が黄ばんでしまって年代を感じさせるものからまだ新しいものまで、結構な分量がある。

ちょうど執務室に一人しかいなかったカルヴァンは、前々から気になっていたその本を手にとって開いてみた。

「これは……？」

その本の内容は不思議なものだった。いや、内容というほど中身のある物ではない。戦役の名前と、その下に人の名前がずらりと列記されているだけなのだ。筆跡はアレクセイの物で、彼が自分でこれを書いたということは推測できたが、その目的はカルヴァンにはさっぱり分らなかった。

首をかしげながらも、カルヴァンは幾つかの本をパラパラとめくっていく。そしてある所で目がとまった。そこには、彼の父が戦死した戦役の名前が記されていた。

（まさか……！）

カルヴァンの心臓が激しく脈打つ。「そんなわけはない」と内心で激しく否定しながらも、「そうであって欲しい」と心のどこかが囁いている。思考が停止した頭の中に鼓動の音だけがうるさく響くのを聞きながら、カルヴァンはそこに記されている名前を一つずつ目で追っていった。そして……、

――――バルト・クグニス。

「あ……」

声が漏れた拍子に、涙も一緒に零れ落ちカルヴァンの頬を伝った。そこに記されていたのは、確かに戦死した彼の父の名前であった。

「つまり、これは……」

つまりアレクセイはこの本に戦役とそこで戦死した部下の名前を記録していたのである。しかも時間を割き、自分の手でそれを行っていたのだ。

黄ばんでしまった紙や本から香る古書独特のにおいは、十年単位の時間の流れを感じさせる。「自分の策で死んだ部下のことを忘れてる奴は、みんな無能だ」とカルヴァンに罵られてからやり始めたわけではあるまい。ずっと昔から、恐らくは初めて部下を死なせてしまった日から、アレクセイはこの作業を続けて来たのだ。

「――――いつか謝らなければいけないと、そう思っていた」

その声に驚き入り口のほうに振り返れば、そこにはアレクセイ・ガンドールその人が立っていた。そしてあろうことか彼は部下に対して深々と頭を下げたのである。

「君のお父さんを生かして帰すことが出来ず、本当に申し訳なかった」

カルヴァン・クグニスがアレクセイ・ガンドールのことを「師父」と呼んで慕うようになるまで、そう時間はかからなかった。

「……アレクセイ・ガンドールは、ベルトロワ陛下のご遺言を無視した大罪人です」

赤ワインを飲み干したグラスを両手に包みながら、カルヴァンは声を絞り出した。

「にもかかわらず、師父の最後の誇りを守っていただけたこと、どれだけ感謝してもしきれません」

その言葉と裏腹に、カルヴァンの表情は辛そうだ。彼は身を切るようにして言葉をつむいでいた。

「しかし！それでも！それでも私は……！」

カルヴァンの頬を涙がつたう。それを隠すように、彼は俯いた。

「それでも私は……、二人目の父を、失ったのです……！」

喉を詰まらせ声を押し殺すようにして、カルヴァンは泣き続けた。

（今宵は雨、か……）

アールヴェルツェが窓の外を眺める。その視線の先には、月が煌々と光を放っていた。

第八話　王者の器？

アールヴェルツェ・ハーストレイト将軍がカレナリアのベネティアナにいたカルヴァン・クグニス将軍を引き連れてヴァンナークに到着し、その時点で通商条約案に対する返答が無かったことを確認したクロノワ・アルジャークは、ついにオルレアンに対して宣戦布告をした。

この時の遠征は親征であり、クロノワが動かした軍は総勢で十四万であった。この十四万を大雑把に分類すると、十万がアルジャーク軍で四万が旧テムサニス軍である。

アルジャーク軍十万は、四人の将によって率いられている。アールヴェルツェの直属部隊が三万で、さらに彼が全軍の実質的な指揮をとっていた。さらにカルヴァンが三万を率い、テムサニス遠征で功績を挙げたイトラとレイシェルの二人はそれぞれ二万を率いて戦列に加わった。

テムサニス領のヴァンナークには後方部隊や予備部隊が六万以上控えており、まさに万全の体制といえた。

この力の入れ具合だけをみれば、クロノワ・アルジャークが本気で遠征を行い武力によってオルレアンを征服しようとしていた、と考えることもできる。しかしこの遠征の顛末を知っている後世の者からしてみれば、それは怪しいと言わざるを得ない。なんというか、この遠征には詐術の臭いがするのだ。

この、後世の歴史家たちが感じる違和感について、順を追って説明していきたいと思う。

アルジャーク帝国から宣戦布告を受けたオルレアンは、すぐさま命令を出して軍を催した。総勢およそ十二万。このうち十万が敵遠征軍と雌雄を決するべく、東の国境線に向かった。

事態が思わぬ方向に動いたのは、この後である。カンタルクが突如としてオルレアンに宣戦布告。カンタルク軍が西の国境を越えてオルレアン領内に侵入し、国境の砦であるルードレン砦を占拠したのである。このルードレン砦を攻略したカンタルク軍先遣部隊はおよそ五万であり、この部隊を率いていたのはマルヴェス・フォン・ソルロバという若い将軍であった。

余談になるが、ルードレン砦は国境の砦だが、国境を守る砦ではない。この砦は小規模なもので、三百名程度しかそこにはいない。よってこの砦のおもな役目は国境線の監視であり、マルヴェス率いるカンタルク軍が迫ったときには、そこにいた兵士たちはさっさと逃げたので両軍ともまったく損害は無かった。

ルードレン砦を占領したマルヴェスはそこで本隊の到着を待った。このカンタルク軍の本隊の先頭を行くのは、ゲゼル・シャフト・カンタルクその人であり、つまりこちらも親征であった。東から侵入したアルジャーク軍にはクロノワ・アルジャークがいるから、もしかしたらゲゼル・シャフトは彼のことを意識していたのかもしれない。

カンタルクの、というよりもゲゼル・シャフトの腹のうちは極めて分りやすい。つまりオルレアンがアルジャークと戦っている隙に、その地をいくらか切り取ってしまおうということである。

オルレアンとアルジャークが正面きって戦えばアルジャークが勝

つに決まっている。その時、指をくわえて見ているだけではオルレアン一国を丸ごとアルジャークに取られてしまう。この機会に三国同盟を成立させるという選択肢もあるが、それではアルジャークと事を構えることになってしまう。それは時期尚早、というのがゲゼル・シャフトの考えだった。

ならばオルレアンとアルジャークが凌ぎを削りあっている間に悠々と事を運ぶのが一番よい。やっていることは強盗か火事場の泥棒と変わらないのだが、おこなう主体が国家になると立派な戦略になりえる。

およそ七万の兵を率いてルードレン砦に入ったゲゼル・シャフトは、目の前に広がるオルレアンの大地を見て嗜虐的な胸の高鳴りを覚えた。阻むものが何もないこの大地をさてどれほど切り取ってやろうか、と頭の中で皮算用は進む。乱世の王としてこの時代で輝き歴史に名を残すのだという自負が、今の彼のうちには確かにあった。

しかしこの時すでに、事態は彼の想像を超えたところで推移していた。

カンタルクが宣戦布告しルードレン砦を落としたことを知ると、オルレアンはすぐさまアルジャークに降伏したのである。

使者が携えていたオルレアン国王エラウドの親書をクロノワは一読する。そこにはアルジャーク帝国に降伏する旨と、カンタルク軍を駆逐するための援軍の申し入れが記されていた。

「了解しました。その旨したためた新書を用意しますので、エラウド陛下にお渡ししてください」

クロノワがそういった瞬間、「オルレアンとアルジャークが争い、その隙にカンタルクが暗躍する」という構図は消えてなくなった。代わりに浮かび上がってきたのは、「オルレアン＝アルジャーク連合対カンタルク」という新たな極彩色の構図であった。

この辺りが、後の歴史家たちが詐術の臭いを感じる第一の原因であろう。決断と事態の進展が早すぎるのだ。

オルレアンにしてみればアルジャークとカンタルクの二カ国を同時に相手にするなど、まず不可能である。ならば、どちらかにさっさと降伏して共同でもう一方に対処した方が最終的な傷は浅い、と考えることに不思議は無い。

問題は「なぜアルジャークを選んだのか」である。

カンタルクとアルジャークを比較すれば、アルジャークの方が“安全な選択”であるといえるだろう。しかし、だからこそカンタルクの方が高く売り込める、ともいえる。それにカンタルクが提案していた三国同盟の枠組みを使えば、わざわざ降伏する必要もないかもしれない。

にもかかわらず、オルレアンは頭を下げる相手としてアルジャークを選んだ。しかも即決と言っていいほどの早さでそれを決めたのである。

さらに不思議な点がもう一つある。

確かにエラウドの親書には降伏する旨と援軍の要請について記されていた。しかし肝心の降伏の条件について、ほとんど何も記されていないのである。

これを無条件降伏と見るのは、あまりに善意に過ぎるだろう。それはクロノワも重々承知していたはずである。それにもかかわらず、クロノワもまた即決で了解の返事を返した。アールヴェルツェを始めとする周りにいた者たちが、それについて何も言わなかったこともまた不思議である。

以上の点を踏まえて、こんな説を唱える歴史家がいる。

曰く「オルレアンとアルジャークは、一連の流れについてあらかじめ密約を交わしていたのではないか」

オルレアンはカンタルクからかなり圧力を掛けられていた。その圧力から逃れカンタルクの影響力を排除するために、アルジャーク帝国と芝居を打ったのではないか。そんなふうに考える歴史家は少なからずいる。

この説を証明する証拠はまだ見つかっていない。しかしここまでの流れと、そしてこの遠征の結末を知ると、そう疑いたくなるのも分るだろう。

閑話休題。なにはともあれ、オルレアンの大地は激動している。今はその動きを注視するとしよう。

エラウドの親書を受け取り、即席ではあるがオルレアン軍との共同戦線を成立させた遠征軍は、旧テムサニス軍四万を国境付近に残して補給線を確保させると、純粋なアルジャーク軍十万のみでさらに西へ向かった。目指すはカンタルク軍が居座るルードレン砦、ではなくその少し東を流れる大河キュイブールであった。

キュイブール川は長大な大河である。オムージュにある三千メートル級の山を水源に持ち、川幅は最大で二百メートル近くある。水量も豊富で、多くの支流や合流する河川を持ち、その水で大地を潤いしていた。

実際の国境線はともかくとして、オルレアン人の心理的な西の国境といえばこのキュイブールであった。実際、カンタルクとの国境の一部とポルトールとのほとんどはこのキュイブールである。

キュイブール川の水量は豊富だ。深いところでは人の背丈をはるかに越えた水深を持っている。当然この川を歩いて渡るのは、通常不可能である。しかし、この時期はちょうど川の水量が少なくなる時期であった。

「ですが、徒歩で渡るのは不可能でしょう」

川の様子を見てきたイトラ・ヨクテエルが軍議でそう報告する。水量が少なくなっているとはいえ、キュイブールはもともとの水量が多いのだ。

「ですが、水量が半分になれば渡れるのでは？」

そう発言したのはカルヴァン・クグニスであった。イトラは少し考え込んでから、「それならば恐らくは」と答えた。

「しかし、カンタルク軍はわざわざそのような真似をするでしょうか？」

これはレイシェル・クルーディである。キュイブール川の対岸にはすでにアルジャーク軍が展開している。それを認めながらカンタ

ルク軍はわざわざ川の水量を減らすための工事を行うだろうか。

「まさか。我々が減らしてやるのですよ。カンタルク軍のために」

カルヴァンは面白そうな笑みを浮かべてそういった。軍議の席についている者たちは皆不可解そうな顔をするが、彼が説明を始めると次第にその表情は真剣なものになっていった。

「いかがでしょうか、陛下」

最後にアールヴェルツェがクロノワにそう問いかける。アールヴェルツェが特に反論しなかったということは、カルヴァンの策は彼の中で及第点に達しているのだろう。そしてクロノワもまた、その策に欠陥を見つけることは無かった。

「その策でいくことにしましょう。細かい指示はアールヴェルツェが出してください」

「「「「御意」」」」

歴史上稀に見る完勝への策は、こうして採用された。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アールヴェルツェはイトラとレイシェル、それに魔導士部隊に命じて、キュイブール川の上流で川幅が狭くなっている部分に堤を築くように命じた。今、土属性の魔道具を持つ者たちが中心となって土嚢を作っている。イトラとレイシェルの隷下にあるのは四万で、一人が一つずつ土嚢を作ることになっていた。

その作業の様子をリリーゼ・ラクラシアが手持ち無沙汰に眺めて

いる。周りが忙しく働いているときに自分だけ何もしないというのは、どうにも彼女の性分にあわなかった。いや、落ち着かない理由は恐らくはそれだけではないのだろうが。

「少し落ち着きなさいな。わたしたちの仕事はこの後よ」

そわそわとした様子を見せるリリーゼに、彼女と同じ水属性の魔道具を愛用する女性の魔導士が声を掛けた。彼女はこれまでの旅路の間、なにかとリリーゼの世話を焼いてくれている。変人が多い魔導士部隊においては、稀有な人材といえるだろう。その女性魔導士の言葉にリリーゼは頷くが、やはり居心地の悪さは消えない。

なぜここにリリーゼ・ラクラシアがいるのか、少し説明しなければなるまい。

シラクサでの協議が終わった後、視察団はシラクサ側の代表者をつれて船でヴェンツブルグに向かった。宰相のラシアートやシラクサ側の代表者を交えて、話し合ってきた内容について最後の調整をするためである。この最後の調整が済み、そのあと皇帝たるクロノワの承認を得ればシラクサとの通商条約は発効することになる。

この時ラシアートは帝都オルクスにいたが、クロノワはテムサニス視察のために帝都にはいなかった。そこで最終調整が終わると、フィリオたちは再びヴェンツブルグから船に乗って今度はカルフィスクを目指した。クロノワとシラクサの代表による調印を行い、通商条約を発効させるためである。この時、リリーゼもまた同行していた。

折しもこの時、クロノワはオルレアン遠征に向けて動いていた。フィリオやラシアートが条約の最終調整を行っている間にもアール

ヴェルツェは兵を揃えて遠征の準備をしており、フィリオとリリーゼがヴェンツブルグから出航したころにはすでにテムサニスに向けて出立していた。

ただ船のほうが足が速かったのか、テムサニスのヴァンナークに着いたのはフィリオたちのほうが早かった。

すでに「共鳴の水鏡」を駆使して連絡を受けていたクロノワは、フィリオがヴァンナークにやって来ても驚きはしなかった。それどころかあらかじめ準備を進めており、到着後わずか一日で通商条約の調印式が開かれ、クロノワとシラクサ代表による調印が行われたのであった。

こうして「シラクサとの間に通商条約を成立させる」という大仕事を終えたフィリオを待っていたのは、テムサニス併合の事後処理とオルレアン遠征への準備という激務であった。帝都オルクスに帰ってしばらくゆっくり、などという彼の甘い計画は音を立てて瓦解していったのである。

当然、リリーゼもこの激務を手伝うことになった。後に彼女はこの時のことを、

「忙しかったけど、モントルム総督府で働いていたときのようで楽しかった」

と振り返っている。

そうこうしているうちに、アールヴェルツェがヴァンナークに到着し、本格的にオルレアン遠征が動き出す。今回は必ず親征すると決めていたクロノワは、残りの膨大な書類仕事をフィリオに押し付けて馬上の人となった。

この時、リリーゼが「水面の魔剣」という優れた魔道具を持っており、またその訓練を欠かしていないことを思い出したクロノワは、彼女を遠征軍の魔導士部隊に誘ったのである。あるいはこの時すでに、彼は今回の遠征で水を使った作戦があると予見していたのかもしれない。

ちなみにフィリオは、

「優秀な部下と職場の潤いを同時に持っていかれた」

と大仰に嘆いていた。

そのようなわけでリリーゼ・ラクラシアは今、アルジャーク軍魔導士部隊の一人としてキュイブール川のほとりにいる。彼女が落ち着かないのは、これが初めての戦場であるという事情も無関係ではあるまい。

戦場とはいえ、実際に敵兵と相対し殺し合いを演じることは無い、とクロノワや魔導士部隊の部隊長からは言われている。当てにされているのは「水面の魔剣」という強力な水属性の魔道具であり、その扱いに慣れた魔導士だ。作戦の概要を説明されたリリーゼも、そのことは理解している。

が、頭で理解していても体はそう簡単にいうことを聞いてはくれない。

（ああ、もう……、落ち着かない……！）

どうにも落ち着かない。しかしやることもない。立ち上がってはウロウロと歩き回り、そしてまた座る。座っても体を揺らしてソワソワしている。

そんなリリーゼの様子を、世話好きな女性魔導士は呆れつつも温かく見守っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大将軍ウォーゲン・グリフォードを伴い、およそ七万の軍勢を率いてルードレン砦に入ったゲゼル・シャフト・カンタルクは、そこでマルヴェス・フォン・ソルロバ率いる先遣部隊五万と合流し、カンタルク軍の総勢はおよそ十二万となった。

その軍勢を率いて、ゲゼル・シャフトは意気揚々と東進を開始した。オルレアン軍の主力は東から侵入したアルジャーク軍に対処するべく動いているはずで、抵抗を受けたとしてもカンタルク軍の進軍を阻むほどの部隊はこの近くには無いはずであった。しかしキュイブール川に近づいたとき、その対岸にたなびく旗はオルレアンのものではなかったのである。

深紅の下地に漆黒の一角獣（ユニコーン）。それはアルジャークの旗であった。その軍勢はおよそ六～七万といったところか。

「なぜ……、ここにアルジャーク軍が……」

ゲゼル・シャフトの呟きには、二つの意味がある。

一つは距離的な意味である。アルジャーク軍は東の国境から、そしてカンタルク軍は西の国境からオルレアンに侵入した。東西の端から入ったもの同士がこんなにも早く出会うものだろうか。

しかしゲゼル・シャフトはオルレアンの地理的な特徴を失念していたというべきだろう。すなわち、南北に細長いその国の形である。

南北に細長いということは、逆に言えば東西に短い。他の国ならばいざ知らず、オルレアンに限れば東西の踏破にそう時間はかからない。

二つ目は戦略的な意味合いである。そしてこちらが主たる心情であったろう。

アルジャークはオルレアンに宣戦布告したのではなかったのか。なぜこんなところでカンタルク軍に対して戦闘陣形を取っているのか。戦うべき相手が違うのではないか。

「ウォーゲンよ、どう思う？」

そういってゲゼル・シャフトは大将軍に意見を求めた。ウォーゲンは太い指で顎を撫でながら少し考えてから、こう答えた。

「なぜアルジャーク軍がここにいるのか、それについては分りかねます。ですが、陛下がアルジャークとことを構えるつもりが無いのでしたら、その旨を伝えるべきかと」

ちょうどクロノワ陛下も親征されていると聞きます、とウォーゲンは付け加えた。

それを聞くと、ゲゼル・シャフトの顔色が変わった。彼はもともと虚栄心や名誉欲が強い。そんな彼にとって、クロノワ・アルジャークが直接率いる軍を撃破する、という軍事的偉業とそれに伴う栄誉は喉から手が出るほどほしいものだった。

見ればアルジャーク軍の数は六～七万。十二万を誇るカンタルク軍は、圧倒的な数的優位にあるといえる。それにここで勝ってアル

ジャーク軍を撤退させれば、オルレアンは丸ごとカンタルクのものとなる。それは現状で最も大きな軍事的成功であり、また富国強兵をなすための手っ取り早い手段ではないだろうか。

とはいえ、ゲゼル・シャフトはすぐさまアルジャーク軍に攻撃を仕掛けるような真似はしなかった。ともかく使者を立てた。幸いなことにキュイブール川の水量は多くない。使者は馬に乗って川を渡った。

カンタルク軍は知らなかったが、川の水が少なくなっているのはアルジャーク軍の仕業であった。イトラとレイシェルの部隊が作った土嚢四万個を使い、上流で川の水をせき止めているのである。無論完全には程遠い。あちらこちらから水が漏れているし、放っておけば一日程度で溶けて決壊するだろう。しかし一日程度とはいえ、キュイブール川の水量を半減させることに成功していた。もしかしたら、上流の支流ではいきなり水量が増えて驚いているかもしれない。

ゲゼル・シャフトは使者にこう問わせた。

曰く「我が国が宣戦布告をしたのはオルレアンである。なにゆえアルジャーク帝国が我が方に軍を向けるのか」

それに対する答えはこうであった。

曰く「すでにオルレアンはアルジャークに降伏し、貴軍に対する共同戦線の申し出がなされている。我が国はこれを受理しており、すなわちオルレアンに対する宣戦布告は我が国に対するそれと同義である。このままルードレン砦を返還して国に戻るのであればよし。しかしなお軍を進めるというのであれば、我が軍がお相手いたす」

その返答を聞いて、ゲゼル・シャフトは唸った。オルレアンがア

ルジャークに降伏することは織り込み済みだ。しかし、こうも早い時期に降伏するとは思っていなかった。というよりも、オルレアンはカンタルクが宣戦布告した後すぐに、それこそ一戦する前にアルジャークに降伏したとしか思えない。

「オルレアンの腰抜けどもが……」

自分の予定が狂ってしまったことに、ゲゼル・シャフトは苛立つ。

「陛下、進言いたします」

馬上で爪を噛むゲゼル・シャフトの前に進み出たのは、先遣部隊を率い、今は先鋒を務めるマルヴェス・フォン・ソルロバであった。

曰く。

オルレアンが戦う前に降伏したのであれば、アルジャーク軍は無傷のはずである。にもかかわらず目の前にいるのは六，七万で、これは少なすぎる。思うにアルジャーク軍は足の速い兵のみでここまで来たのであって、時間を置けば敵兵力はさらに増大する。ならば数で勝っている今のうちにこれを退け、戦略的優位を築いておくべきである。

「ふむ……」

マルヴェスの言うことは正しいようにゲゼル・シャフトには聞こえた。特に時間を置けば敵兵力はさらに増大する、というのは確実であろう。アルジャーク軍がどれだけの余力を残しているかそれは定かではないが、少なくともオルレアン軍は丸ごと残っているはずなのだ。

この二軍が連合して立ちはだかれば、カンタルク軍は劣勢に追い込まれるだろう。勝つためにはそれぞれを確固撃破するのが望ましく、アルジャーク軍しかいない今はまさにその好機ではないだろうか。

ゲゼル・シャフトは改めてアルジャーク軍の陣形を見た。

アルジャーク軍は、軍を大きく二つに分けている。同じ規模の部隊を、縦に二つ並べた形だ。一つの部隊につき、およそ三万といったところか。手前、つまりキュイブール川に近いほうの部隊は両翼がある。いや、“両翼”と呼ぶにはあまりにも小規模だろう。目算であるが片方二，三千といったところで、“翼”というよりはどこからか部隊を借りてきたように見える。

（変則的、いや、急きょ編成した、といったところか……）

ゲゼル・シャフトはそれをアルジャーク軍の焦りと判断し、その判断が彼の心を決めた。

「マルヴェスに命じる。五万の兵を率いてキュイブール川を渡り、敵先鋒部隊を撃破せよ」

ゲゼル・シャフトの攻撃命令に、マルヴェスは喜色を浮かべて頭を下げた。

「大将軍、なにか言うことがあるか」

「……水のある戦場じゃ。決して油断せぬよう」

――――水のある戦場には気をつけろ。

これは古来より言われてきたことで、軍を率いる用兵家たちには常識とされることだ。マルヴェスは表向き神妙に聞いていたが、内心では「何を今更」とせせら笑っていた。貴族でもないウォーゲンが大将軍の地位にいることが、彼は気に食わないのである。

マルヴェスが自分の部隊に戻ると、戦況を見るためにゲゼル・シャフトも馬を進めて前に出た。もしアルジャーク軍が先鋒のみならず後ろの部隊も動かすのであれば、カンタルク軍も本隊を動かすつもりである。

一人残ったウォーゲンのそばに、副官のアズリアが馬を寄せる。その手には相変わらず銀色の魔弓があった。

「……大丈夫でしょうか？」

アズリアはアルジャーク軍の布陣に不気味なものを感じている。それを上手く言葉には出来ないが、一つだけ明確な疑問がある。アルジャーク軍の動き方が、これまでと明らかに違うのだ。

用兵の基本は「遊軍をつくらないこと」、そして「数で相手を上回ること」である。これは作戦を立案する者の一般常識と言ってもいい。

しかし今回、アルジャーク軍は遊軍を作り数的劣勢に陥りながらも、戦場をここに定めた。少なくともオルレアン軍と合流すれば数的劣勢を挽回できるのに、である。

アルジャーク軍は何か企んでいるのではないか。アズリアが抱いているその疑問を、上官であるウォーゲンが抱いていないはずがない。

「分らぬ。我々も油断せぬことだ」

ウォーゲンの言葉にアズリアは頷き、白銀の魔弓「夜空（ミーテ）を切り裂く（イア）箒星」を強く握り締めた。

自分の部隊に戻り馬にまたがったマルヴェスは興奮していた。彼は先遣部隊として宣戦布告の後すぐにオルレアン領内に侵入しルードレン砦を制圧したが、それはいわば空き家に上がりこんだようなもので、戦功を上げたとは言い難い。

（しかしアルジャーク軍を撃破してみればどうだ？）

精強と名高いアルジャーク軍である。それを撃破したとなれば、彼の勇名は全土に轟くのではないだろうか。その様子を想像して、マルヴェスは武者震いした。

（そうなればあの老いぼれを蹴落として大将軍になることも夢ではあるまい）

キュイブール川の対岸に整然と陣を構えるアルジャーク軍。それはマルヴェスの目にはもはや戦功のための生贄にしか映らなかった。

第八話　王者の器？

カンタルク軍が動いた。動いた部隊の数は、目算ではあるがおよそ五万。翼を持つ獅子を描いた旗が揺れカンタルク軍が前進するが、しかしその動きは遅い。

ウォーゲンに言われたからではないだろうが、マルヴェスはやはりキュイブール川を警戒していた。アルジャーク軍が罠を仕掛けているとしたら、あの川の中に違いない。そう考えると、川に入るのは躊躇われる。

「川はアルジャーク軍に渡らせればよい」

マルヴェスはそう考えた。すでにわずかではあるが前進して交戦の意思を明示して見せた。「我が軍がお相手いたす」と大見得を切った以上、敵軍は動かないわけには行くまい。敵が川を渡りきったところで戦えばよいのだ。

カンタルク軍が動き、しかしキュイブール川を渡る気配が無いのを見ると、カルヴァンは先陣を切って川に入り敵軍を目指した。彼が指揮するおよそ三万の軍勢がその後を追う。ただ、カルヴァンの部隊の両脇に控えていたそれぞれ三千の部隊は動いていない。この部隊は全て歩兵で構成されており、長槍と盾を持った兵士が一千、弓兵二千で、この部隊が二つあり、合計で六千となっている。

カルヴァンは川の中を進み、ついには対岸に達した。アルジャーク軍が次々と岸に上がってくるのを認めて、マルヴェスは攻撃を命じた。カンタルク軍の動きが加速する。両軍は戦意をみなぎらせて間の距離を瞬く間に詰めていく。

マルヴェスは敵軍の側面を突くことはせず、最短距離である真正面からぶつかった。数の優位を全面にだして押し込めるつもりであった。

ついに両軍が激突する。当初アルジャーク軍のほうが勢いで勝り、カンタルク軍はそれを受け止めるために停止とわずかな後退を余儀なくされたが、数的優位を生かしてすぐに踏みとどまって戦況を五分に戻した。

カルヴァンは自分の周りを精強と名高いアルジャーク兵の中でもさらに選りすぐりの精鋭たちで固めている。自軍の足が止まったことを認めると、カルヴァンは自分の周りを固めているそれらの兵士たちに、

「驚け、怯えろ」

と命令した。

たちまち、深紅の下地に漆黒の一角獣（ユニコーン）を描いたアルジャークの旗数十本が一斉に乱れた。それは見ている者に分りやすくアルジャーク軍の劣勢を印象付ける。そしてその印象を最も強く受けたのは、相対するカンタルク軍を率いるマルヴェスだった。

趨勢の天秤は徐々にカンタルク軍に傾いていく。アルジャーク軍は隊列を乱されて防戦一方となり、少しずつキュイブール川の中に押し戻されていった。

「精強を誇るといえどこの程度か！」

カンタルク軍を率いるマルヴェスは興奮のままに吼えた。アルジャーク軍の精強さはエルヴィヨン大陸中、特にその東半分では良く

知られている。ただ、カンタルクはアルジャークとこの戦いを除けばおよそ百年間は交戦したことが無く、ただ噂話としてその精強さを知っているだけだ。

噂話というのは尾ひれがつきやすい。そのことはマルヴェスも承知している。最近はアルジャークの遠征活動が盛んだったため武勇の噂は彼も良く耳にしていたが、五割は差っ引いて聞くようにしていた。

が、こうして実際に相対してみると、どうやら五割では足りなかったようである。目の前のアルジャーク軍は、マルヴェスが思っていたよりも随分と脆く弱い。川の中に押し戻されたアルジャーク軍はすでに対岸に向かって退き始めており、そのせいでカンタルク軍との間に距離が開き始めている。

「逃がすな！追え！！」

優勢に立ったことで気を良くしたマルヴェスは、自分の指揮する全部隊を使ってアルジャーク軍に追撃を仕掛る。優勢と信じて疑わないカンタルク軍の兵士たちは次々と川の中に入ってアルジャーク軍を追う。しかし川の中では淵をさけて移動しなければいけないため、自然と隊列が横に広がっていく。そのせいで追撃の圧力は弱まり、効果的な攻撃はできていない。

それでもカンタルク軍優勢は変わらない。ついにアルジャーク軍はキュイブール川から追い出され、全軍が川岸に上がってしまった。それでもカンタルク軍の勢いは止まらず、その先頭は川を横断して岸に上がり、さらに敵軍を追い回す。

「苦戦しておりますな」

戦況を後ろから眺めながら、アールヴェルツェが呟く。しかしその口調からは焦りは感じられず、むしろ苦笑しているかのようだった。

「ええ、カルヴァンは上手い」

味方が劣勢であるはずの戦況にもかかわらず、クロノワの声にも焦りは感じられない。それもそうだろう。全ては織り込み済みの行動だ。良く見てみれば、追われているはずのアルジャーク軍にほとんど戦死者が出ていないのが分る。

そして、カンタルク軍が半分近く岸に上がりその最後尾がキュイブール川の真ん中辺りに来たところで、ついにカルヴァンは動いた。手に持っていた槍を天に向かって突き上げたのである。

「狼煙を上げろ！」

その合図を認めたアールヴェルツェが鋭く命令を発する。赤い狼煙が、空に向かって立ち上った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

赤い煙が一筋、空に向かって昇っていく。その合図を見た瞬間、キュイブール川の上流で待機していた魔導士部隊に緊張がさざなみのように広がった。いやそれを見た瞬間に緊張を感じたのは、もしかしたらリリーゼだけだったのかもしれない。

なんにせよ、その合図を確認したことである種覚悟が決まったのは確かだ。先ほどまでの落ち着かない居心地の悪さは消えてなくな

り、背中に鋼の支柱が差し込まれたかのように背筋が伸びた。

「いい顔ね」

ずっとそばにいてくれた世話好きな女性魔導士がそう言ってくれる。その言葉にリリーゼは無言で頷き、鞘に収めてある「水面の魔剣」を抜いた。その魔剣の刀身は相変わらず美しい。魔力を込めることで波紋が広がるような輝きを見せるその刀身は、今は主の心を表現するかのように美しくも力強い光を放っていた。

あらかじめ定められていた所定の位置につく。リリーゼは一つ大きく息を吐くと意識を集中して研ぎ澄まし、「水面の魔剣」に徐々に魔力を込めていく。彼女の周りでは、同じように魔道具に魔力を込める魔導士が数多く見受けられた。

川辺に立っている魔導士の手には、リリーゼと同じ水属性の魔道具がある。急造した堤防の辺りには土属性の魔道具を持つ者たちが多く集まっている。

「銅鑼三回目に合わせろ!!」

イトラ・ヨクテエル将軍の声が響く。将軍の横には銅鑼を構えた兵士が立っていた。

――――ドガラァァアアンン!!

低くて鈍い金属音が響く。リリーゼは目をつぶりその銅鑼の音に全神経を集中させ、それと同時に「水面の魔剣」に込める魔力を増やしていく。

――――ドガラァァアアアンン！！

二度目の銅鑼の音が響く。「水面の魔剣」に全力で魔力を込める。魔剣が強い光を放っているのか、目を閉じているはずなのに視界が蒼く輝いている。リリーゼはそのままキュイブールの水に意識を向け、可能な限り多くの水を掌握していく。そして……。

――――ドガラァァアアアンン！！

そして三度目の銅鑼の音。その音が響いた瞬間、リリーゼは目を見開いた。

「いいいいいいいっけぇぇぇぇぇ！！！」

その瞬間、複数のことが同時に起こった。まず土属性の魔道具を持っている魔導士達が中心になって、土嚢を積み上げて作られた堤防を決壊させた。そして水属性魔道具を持っている魔導士達がその堤防によって溜められていた水を、魔道具の力を使って一気に下流に流したのである。

水属性の魔道具は水が無ければ役に立たない代わりに、水さえあれば大きな効果を比較的容易に得られる。これこそが「水がある戦場には気をつけろ」と古来より言わしめてきた理由である。

今、リリーゼの目の前にはキュイブール川が満々と水を湛えている。彼女は手にした「水面の魔剣」に全力で魔力を込めながら、なるべく多くの水を下流へ下流へと流す。流された水は崩された土嚢の土を巻き込み、濁流となって川を猛然と下り始めた。

「つっ！」

そして限界が訪れる。もうこれ以上魔力を込め続けることができなくなり、リリーゼは水を操ることをやめた。魔力の供給が途切れた魔剣はその輝きを弱め、リリーゼ本人も体を折り曲げて肩で息をしている。

しかし、それに見合う成果は挙げた。先ほどまで満々と水を湛えていたキュイブール川は、今は劇的に水量を減らしている。徒歩で歩いて渡ることは出来なくもないだろうが、しかし随分と危険なように思えた。それにこうしている間も、減った水量は徐々に回復している。

「お疲れさま」

こちらはまだ余裕を残している女性魔導士がリリーゼの肩に手を置く。その一言でリリーゼの中に達成感が生まれ、そしてそれは徐々に体中に広がっていく。自然と、笑顔になる。

「はい、お疲れさまでした」

これで魔導士部隊の仕事は終わりだ。よほど戦況が不利になれば、今度は前線での仕事があるのかもしれないが、この作戦が上手くいけばそのようなことはあるまい。

「後は将軍たちに任せましょう」

そういう女性魔導士の視線の先では対岸でイトラとレイシェルの両将軍が出撃の準備を整えている。

戦局は最終局面へと転がっていく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アルジャーク軍の本陣と思しき場所から赤い狼煙が上がったとき、ウォーゲンは背中に氷刃を差し込まれたかのような錯覚を覚えた。殴られたわけでもないのに、内臓が重く痛みさえ訴えている。その全てを無視して、ウォーゲンは叫んだ。

「早く川から出ろ！！」

今から引き返しても間に合わない。ならば先鋒部隊全てを一秒でも早く対岸に上げてしまうしかない。そのためならば隊列が乱れてしまってもいい。しかし、その命令が実現されることは無かった。

――――ドドドドド……！

低い地響きが戦場にこだまする。その地響きは徐々に大きくなっていく。その音に負けないよう、ウォーゲンは馬を走らせて前に出て声の限り川から出るように叫んだ。

しかし、彼の努力は報われなかった。キュイブール川の上流から濁流が凄まじい勢いで流れてきて、川を渡りきれずにいたマルヴェス率いるカンタルク軍先鋒部隊のおよそ後方半分を流し去ったのである。

つい先ほどまでそこにいた仲間が濁流に飲まれて流されるのを見て唖然としているカンタルク軍を尻目に、アルジャーク軍は素早く反転して敵軍を川辺に追い詰めていく。さらにこれまで動いていなかった二つの部隊も動いてその包囲を堅固なものにする。たちまち、カンタルク軍は川辺に半包囲された。

半包囲と言っても後ろは水かさが一気に増したキュイブール川である。事実上、退路は断たれている。カンタルク軍を半包囲したアルジャーク軍は近矢を射、また遠矢を射、射すくめつつその包囲網を狭めていく。

マルヴェスは必死に戦線を維持しようとしたが、このときすでに事態は彼の統率力を超えていた。周りにいる数百名を別にすれば、もはや誰も彼の命令を聞いてはいなかった。この時指揮していたのはウォーゲンであれば、と考えるのは後世の歴史家の悪い癖なのかもしれない。

カンタルク軍の多くの兵が浮き足立ち逃げようとした。敵兵がいない場所は後ろしかない。その後ろとは水かさの増したキュイブール川であり、とてもではないが徒歩で渡れる状態ではない。川に最も近い位置にいたカンタルク軍の兵士たちは川に入ることを躊躇ったが、後ろからやってくる味方に押され、押し倒され、踏みつけられてへい死するものが続出した。川の中に突き落とされて溺死した者も多い。

そうやって味方の死体を踏みつけて川に入ろうとした者のうちいくらかは、後ろからアルジャークの弓兵に射られて川の中で倒れ流されていく。攻撃をまぬがれて川に入った者たちも、その多くは流され溺死した。運よく対岸まで泳ぎきることが出来たのは、本当に少数だった。

実際アルジャーク軍に殺された兵士よりも、踏まれてへい死した兵士や川で溺れた兵士のほうが多かった。

マルヴェスの最後はひどくあっけない。乗っていた馬に矢が当た

り振り落とされたマルヴェスは立ち上がる前に槍で滅多ざしにされて死んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ゲゼル・シャフト・カンタルクは、目の前で起きていることが現実だと認められずにいた。

つい先ほどまで優勢だったのだ。川を渡ってきたアルジャーク軍を、先鋒部隊は逆に押し返し対岸まで攻め立てた。圧倒的優勢だった、といえるだろう。

しかし、あの濁流が全てを一転させた。先鋒部隊のおよそ半分を流し去ったあの濁流は、同時にカンタルク軍の勝利も流し去ってしまった。

渡ることのできない川辺に押し込まれた後は、一方的な展開だった。ゲゼル・シャフトが放心している間にも、カンタルク軍の兵士たちは次々に倒れていく。敵軍から逃れるために川に飛び込んだ者たちのうち、果たしてどれだけ生き残れたであろうか。

気がつけば、カンタルク軍先鋒は壊滅していた。いや、“壊滅”という言葉ですら生ぬるい。“全滅”してしまった、というべきであろう。少なくとも対岸でアルジャーク軍と交戦しているカンタルク兵はもはや一人もいない。

五万の兵が、消えていなくなったのである。

対岸で武器を掲げて歓声をあげるアルジャーク軍を、ゲゼル・シャフトは血の気の引いた青白い顔で呆然と眺めた。目に入るもの、

耳に入ってくるもの全てが希薄で、現実感が薄い。まるで夢（間違いなく悪夢であろうが）を見ているようだった。

「アルジャーク軍襲来！！」

悲鳴にも似たその報告で、ゲゼル・シャフトはここがまだ戦場であることを思い知らされた。

しかし、アルジャーク軍はどこから来るというのか。キュイブール川は増水してとてもではないが渡れるものではない。

その答えはすぐに現れた。キュイブール川の上流から、アルジャークの旗を掲げる軍勢が猛然と近づいてきたのである。

その軍勢を見た瞬間、ゲゼル・シャフトは馬首を翻して走り出した。

「陛下！」

「ふ、防げ！」

途中、声を掛けてきたウォーゲンに短くそう命じ、ゲゼル・シャフトはルードレン砦に向かって遁走した。およそ一万の兵が、軍旗と隊列を乱しながらその後に従う。

「浮き足立つな！！」

戦場に取り残され動揺する兵士たちを、ウォーゲンは一喝した。ざわついていた兵士たちが、その一言で静かになる。

「急いで逃げれば敵も急いで追う。隊列を整えて隙を見せるな。そ

れからゆっくりと引くのじゃ」

ウォーゲンはそういって浮き足立ち混乱していた兵士たちに明確な指示を与えた。その指示に従うことで、カンタルク軍およそ六万は統率を取り戻していく。

その様子は、急襲したアルジャーク軍からも見えていた。

「混乱に乗ずるつもりだったが、アテが外れたな」

「ああ。ウォーゲン・グリフォード大将軍だな。優れた将というのは、どの国にも一人はいるものらしい」

二万ずつ、合計四万の兵を率いるイトラとレイシェルの二人は、馬を疾駆させながら馬上でそう言葉を交わした。

カンタルク軍に隙は見当たらず、態勢を立て直された以上急襲は失敗したといえる。このまま数に劣る状態で攻めかかっても、守りに入ったカンタルク軍を効果的に攻撃することはできず、むしろ跳ね返されてこちらの損害が増えるばかりであろう。そうなればせっかくの完勝に水をさすことになる。

実際、二人はじりじりと後退するカンタルク軍に追撃を加えることはしなかった。それは当初の予定が崩れたからでもあったが、恐らくはそれ以上にウォーゲン・グリフォードへの敬意を表した結果だろう。

一方、ゲゼル・シャフトは馬を走らせルードレン砦に逃げ込んだが、その砦が彼に安心感を与えることは無かった。

ルードレン砦は小さな砦だ。それは国境を守るための拠点ではな

く、見張るための砦であり、いうなれば物見小屋でしかない。オルレアン人の心理的な国境線はキュイブール川であり、国防もこの川を中心にして考えられている。そのためこの砦は堅牢な城壁など備えていないのである。

「我が身を守るためにはカンタルクに帰るしかない」

ゲゼル・シャフトがその結論に達するのに、そう時間はかからなかった。しかし後ろからはアルジャーク軍が迫ってくる。彼らに対してなんの備えもしないで背中を見せることに、ゲゼル・シャフトはいい様のない恐怖を感じた。

「五千の兵を率いてルードレン砦に残りアルジャーク軍を防げ」

六万の軍勢と共に砦に帰還したウォーゲン・グリフォード大将軍にゲゼル・シャフトはそう命じた。殿、それも生き残れる可能性が極めて低い「死に残り」であることは誰の目にも明らかであった。顔を青くして絶句する副官たちを尻目に、しかしウォーゲンはその命令を淡々と承諾した。

「閣下……」

「勅命には従わねばならぬ。それが軍人というものじゃ」

国家の“武”を体現する軍人たちが王の命令に従わなくなれば、ただそれだけで国は崩壊する。ましてやウォーゲンは大将軍である。彼は戦場にいる全ての兵士たちの規範とならねばならない存在であった。

「モイジュよ」

「ここに」

ウォーゲンの副官の一人であり、名前を呼ばれたモイジュ・フォン・ハルゲンドは一歩前に進み出た。

「お主はゲゼル・シャフト陛下の御側に控え、陛下をお助けせよ」

「それは……！」

それはこの砦を離れて生き残れ、と言われたに等しい。しかしここで喜色を浮かべられるほど、モイジュは恥知らずにはなれなかった。

「私もここに！」

「命令じゃ！」

残る、とモイジュがいう前にウォーゲンが一喝した。それから彼は厳しい相好を崩してモイジュの肩に手を置いた。

「話は儂の方で通しておく。期待しておるぞ」

「……微力を、尽くさせていただきます……」

その答えに、ウォーゲンは満足したように頷いた。

その夜、夜陰に紛れるようにしてゲゼル・シャフトはルードレン砦を発ち、その進路を西に取った。彼に従うのは六万五千のカンタルク軍だ。当初十二万を誇っていた軍勢の半分程度しかいないことになる。惨敗して逃げ帰った、と言っていいだろう。夜陰に紛れて進まなければいけない惨めさが、ゲゼル・シャフトの誇りを傷つける。

さらに追い討ちを掛けるように次々と兵が夜陰の向こうへ逃げて

いった。勝手に故郷を帰ってしまったのである。夜ごとに隊列を離れて逃げ出す兵の数は増え、最終的に六万五千の兵のうち、カンタルク王都フレイスブルグまでゲゼル・シャフトに従ったのはたったの三万のみであった。自国民にまで見限られたようなもので、惨めを通り越して哀れですらあった。

明かりも付けずに夜陰に紛れていくゲゼル・シャフトと軍勢を見送ったウォーゲンは、後ろに控えている二人の副官に、

「すまんな」

と短く謝った。

「閣下とご一緒ならば、地獄の底までもお供いたします」

「もとより、カンタルクで私の居場所は閣下の御側しかありません」

ウィクリフ・フォン・ハバナとアズリア・クリークの二人は悲壮感を微塵も見せずにそういった。

士気が高いのはこの二人だけではない。砦に死に残った五千の兵全てが、悲壮感を見せずむしろ誇りすら感じているようであった。

「大将軍と共に死のう」

兵士たちは口々にそう言い合っていた。その刹那的な感情が良いものなのかはさておき、死に残ったこの五千の兵士たちの士気の高さは、ゲゼル・シャフトと共に砦を離れた兵士たちの士気の低さと対照的であった。

次の日の正午前、ついにアルジャーク軍はルードレン砦に迫った。その砦にまだカンタルク軍がいることを知ると、クロノワはすぐさま攻撃を命じた。

「我が方有利、ですな」
「そうですね」

クロノワは昨日のキュイブール川での戦いと同じように後ろから戦況を見守っている。ただ彼の護衛をしているのは、アールヴェルツェではなくカルヴァンだった。アールヴェルツェはイトラとレイシェルの二人の将を従え、合計で七万の兵を率いて今ルードレン砦に猛攻を仕掛けている。

戦況は終始アルジャーク軍優位だが、カレナリア軍に目を引くものが一つだけあった。断続的に砦から放たれる、魔道具と思しき強力な一撃である。

「確かに強力ですが、あまり意味は無いでしょう」

大軍を相手にするには魔道具の数が、あるいはその攻撃範囲が足りない。当たって一人二人死ぬだけならば普通の弓矢と大差は無く、これではただ目立つだけの攻撃である、とカルヴァンは冷静に判断を下した。

彼のその判断は正しいのだろう。その一撃は一射ごとに轟音と土煙を立てているが、趨勢の傾きを止めることは出来ていない。

しかし、クロノワの感想は少し違う。

（似ている……）

彼はそう思っていた。何と似ているかといえば、彼が友人であるイストからもらった魔道具である「雷神の槌（トール・ハンマー）」の一撃に良く似てい

るのである。

あの時彼は「雷神の槌（トール・ハンマー）」について、「ある魔道具の簡易版だ」と言っていた。その基になった魔道具を持っているものが、あの砦にいるのだろうか。

「味方が砦の内部に侵入したようです」

カルヴァンのその言葉で、クロノワは意識を目の前の戦場に引き戻した。見れば砦から放たれる矢がめっきり減っている。もうしばらくすれば完全にやむだろう。強力なあの一撃も、すでに放たれなくなっていた。

「私たちも行くとしましょう」

砦から放たれる矢が完全にやんだのを見計らってクロノワは前進を命じた。ルードレン砦に近づくと、その門のところにアールヴェルツェがいた。どうやらここで内部の制圧状況について報告を聞き、随時指示を出しているようだ。

「陛下」

クロノワに気づいたアールヴェルツェが馬を寄せてくる。

「状況はどうですか？」

「小一時間もあれば完全に制圧できると思います。ただ、居残った敵兵たちの士気が予想外に高く、局地的には攻めあぐねている部分もあるようです」

アールヴェルツェの言葉にクロノワは頷いた。カンタルク軍の士

気が思いのほか高いことは、先ほどまでの観戦でも良く分る。よほど兵に慕われている将が殿として残ったのだろう。

「捕らえさせますか？」

その将を、ということだろう。確かに話をしてみたい気はするが、追い詰められた手負いの獣を捕らえるというのは難しい。

「いえ、無理に捕らえる必要はありません」

首を振りながらクロノワはそう答えた。自軍の兵士たちに損害を出してまで捕らえたいとは思わない。アールヴェルツェは頷き特に命令を出すことはしなかったが、それから少しして思いがけない報告がもたらされた。

「報告します！敵将ウォーゲン・グリフォードを捕らえました！」

その報告はクロノワに二重の驚きをもたらした。まず敵将を捕らえられたということ、そしてその敵将がかの大将軍ウォーゲン・グリフォードであったことだ。思いがけず名将の名前が出たが、アールヴェルツェはどこか納得したような様子を見せていた。

「それで、大将軍はいまどこに？」

聞けば、浅からぬ傷を負ったウォーゲンは、アルジャーク軍が確保した一室でその傷の手当てを受けているという。

報告に来たその兵士に案内をさせ、十数人ほどの護衛を引き連れたクロノワはウォーゲンのもとに向かった。

部屋の中に入ると、ウォーゲンはまだ手当ての途中であった。随分と深手を負ったらしく、巻かれた白い包帯にすでに血が滲み始めている。クロノワに気づいた彼は、手当ての途中にも関わらず椅子から立ち上がり、床に膝をつき頭をたれた。

「クロノワ・アルジャーク陛下とお見受けします」

「はい。確かに私がクロノワです」

それを聞くと、ウォーゲンはなお一層深く頭をたれた。彼がさらに何か言う前に、クロノワが口を開いた。

「砦内のカンタルク兵たちに降伏を呼びかけてはもらえませんか？」

「……すでに降伏はやむなきこと。ですがこの戦の責任は全てこのウォーゲンにありまする。事はこの首一つで収め、どうか降伏した兵たちには寛大なご処置を……！」

自分の首で降伏した兵たちを救おうというのである。もしかしたらこれを見越して、彼は自害しなかったのかもしれない。ウォーゲンのその言葉には力があり、それでいて配下の兵士たちへの愛情に溢れている。どことなくアレクセイに近いものを、クロノワは感じた。

「武器を捨て降伏した兵士全ての命を保障します。もちろん貴方も」

死ぬに及ばず、とクロノワは言ったのである。最後の一言は、もしかしたらアレクセイを死なせてしまった後悔が言わせたのかもしれない。

クロノワはウォーゲンを立たせるともとの椅子に座らせ、手当ての続きを受けさせた。それから兵士たちに彼を丁重に扱うよう命じ

てから、その部屋を出た。

部屋を出ると、クロノワは「ウォーゲン・グリフォード大将軍は降伏した」と砦のあちこちで呼ばわらせた。同時に大将軍は生きていること、投降する全てのものの命を保障することを告げる。この呼びかけは効果的で、砦のあちこちに立てこもっていたカンタルク兵たちは次々に投降した。

戦況も収束へ向かい一安心と思っていたクロノワの目に、一人の敵女性仕官が連れて行かれるのが映った。まだ若く、クロノワと同じくらいの年齢だろうか。両腕を拘束されているにもかかわらず黒くて長い髪を乱して抵抗を続けており、目は敵意と憎悪で燃えているように見えた。

「何ごとですか？」

「殺せ！」

クロノワのことをアルジャーク軍の将官と勘違いしたのか、連れて来られた女性仕官はそう吼えた。

「どうやら、魔導士のようでして……」

恐らく、あの強力な一撃を放っていたのは彼女だったのだろう。兵の一人が彼女が使っていたという、魔弓と思しき白銀の弓をクロノワに見せた。

「これは……！」

その弓を見たとき、思わず驚きの声が漏れた。クロノワはその魔弓に既視感があったのだ。いや、既視感というのはおかしい。クロ

ノワがこの白銀の魔弓を見るのは間違いなく初めてだからだ。だがクロノワは間違いなくこの魔弓を知っている。より正確には、この魔道具を作った職人を知っている。

「ああ、まったく。君は本当に……」

ここにはいない友人が得意げに笑う様子を想像し、クロノワは楽しげな苦笑を浮かべる。どうも“縁”というやつは奇妙なところで繋がっているらしい。

面白そうに笑うクロノワに、事情がつかめていない兵士たちは怪訝な表情を見せる。拘束されている女性仕官も、毒気を抜かれてしまった様子だ。

「お名前をお聞きしても？」

「……アズリア・クリークだ」

思いのほか素直に答えてくれて、クロノワは満足そうに頷いた。

「ではアズリアさん、実はウォーゲン大将軍が負傷されて看病が必要です。お願いしてもいいですか？」

その言葉を聞くと、アズリアの表情が明るくなった。ウォーゲンが生きていることは叫ばせていたのだが、もしかしたら信じていなかったのかもしれない。

「……分りました」

「では、彼女を案内してあげてください」

アズリアの腕をつかんで拘束している兵士たちにそう命じる。兵

士たちは真意を量りかねる様子であったが、それでも「かしこまりました」とクロノワに応じ、アズリアの拘束を解いた。

「ああ、それと」

二歩ほど歩いたところで、何かを思い出したようにクロノワは振り返ってアズリアのほうを見た。

「この魔弓は私が預かっておきます。いずれ、お返しできる日が来るのを待っていますよ」

そう笑いかけられて、アズリアは本当にわけが分らないといった顔をした。そんな彼女の表情を見て、クロノワはやはり面白そうに笑う。

なんとなく、いい気分だった。

第八話　王者の器　エピローグ

ルードレン砦の攻防戦において、ウォーゲン・グリフォード大将軍率いるカンタルク軍は奮戦した、と言っていい。砦に居残った五千の兵のうち生き残って捕虜となったのはおよそ三千であり、残りは全て戦死した。驚異的な事実として、その砦から逃げ出した兵士は一人もいなかったのである。

生き残った三千のうち、そのほとんど全てが負傷者であった。無傷のものは百数十名ほどしかおらず、カンタルク軍の奮戦が窺える。オルレアン遠征全体として惨敗を喫したカンタルク軍であったが、最後に汚名を雪いだといえるだろう。

さて、話は戦いの後の戦後処理に移る。

アルジャークによるオルレアン遠征には詐術の臭いがする、と以前書いた。その理由については、ルードレン砦の戦いのあとの各国、つまりアルジャークとオルレアンそしてカンタルクの動きについて大まかにでも見てもらえれば分ってもらえると思う。

ルードレン砦の戦いのあと、アルジャークはすぐさまカンタルクと講和条約を結ぶ方向で動いた。賠償金の額やルードレン砦で捕虜にしたカンタルク兵たちの身柄の引き渡し条件など、大雑把ではあるが内容をまとめて素案を作成し、アールヴェルツェがサインをした。クロノワの名前を使わなかったのは、これはあくまでも条約の叩き台という位置づけであったからだろう。

余談になるが、ここでアルジャークが講和条約を主導するのは、

少し不思議である。カンタルクが直接宣戦布告をしたのはオルレアンであり、アルジャークはその同盟国、いわば“代理人”として戦ったにすぎない。もっともオルレアンはアルジャークに“降伏”しており、オルレアンの権利はアルジャークの権利、と言えなくもない。実際問題としてオルレアンは一戦もしていないわけだし。

話を元に戻す。作成された素案をカンタルク王都フレイスブルグにいるゲゼル・シャフトのもとに持っていく使者として選ばれたのは、ウォーゲンの副官であるウィクリフ・フォン・ハバナであった。そのほかに十名ほど、共の者が選ばれた。

本来ならば、この使者にはアルジャークの人間が選ばれるべきであったろう。にもかかわらずカンタルクの人間を選んだのは、もしかしたらゲゼル・シャフトに危機感を持たせるためだったのかもしれない。返事が遅れればすぐにでもカンタルク領内に侵攻する、という無言の脅しを掛けたと考えられる。

一方でアルジャークの方から条件を提示したということは譲歩でもある。カンタルクにしてみれば講和のための条件を、優位なはずのアルジャークから提示してもらったことになる。素案をそのまま飲むかは別として、交渉はかなり楽になると見ていい。

さて、ウィクリフらを送り出した後、クロノワは捕虜にしたカンタルク兵を連れてルードレン砦から軍を引き上げ、キュイブール川を渡った先にあるオルゴット砦に入った。こちらは堅牢な要塞であり、オルレアン東国境の第二防衛線の要である。アルジャーク軍と入れ替わるようにしてオルレアン軍およそ十万が到着し、国境線近くに展開した。備えであると同時に脅しだ。

ただし、レイシェルは二万の兵と共にルードレン砦に残った。こ

れは戦力を当てにしてのことではなく、カンタルクとの交渉の主導権をアルジャークが握るためであった。実際、レイシェルにはカンタルクの使者が持ってきた書簡の中身を改め、それをクロノワに届けるか、あるいはつき返すかを判断する権限が与えられていた。事実上交渉の全権を任されていた、と言っていい。

さて、その交渉である。レイシェルがカンタルクの使者が持ってきた書簡に目を通すと、たちまち彼の眉が跳ね上がった。

「いかがですかな」

そう問いかける使者の言葉を無視して、レイシェルはその書簡に書かれた、いや書かれていないことの意味を推察しようとする。

（つまりは、そういうことか……！）

ある結論に達したレイシェルが抱いたのは、いい様のない嫌悪感であった。しかし彼の責として判断は冷静に下さねばならない。結局レイシェルは、カンタルクの使者たちをオルゴット砦に通すことにした。

オルゴット砦でカンタルク側の返答を知ったクロノワもまた、レイシェルが感じたのと同じ嫌悪感を覚えた。

書簡に書かれている内容は、おおよそアルジャーク側が通達した素案に沿ったものと言っていい。ただ一点、捕虜の引渡しに関する条件がごっそり削除されている以外は。

（ゲゼル・シャフト陛下は、捕虜になった兵士たちを見捨てたのか……）

そう判断するしかない。しかしそうなると気になることがある。

「こちらの書簡を届けてもらったウィクリフ殿らは如何しておられるだろうか」

悪い予感を覚えつつ、クロノワは使者たちに問うた。

「陛下は彼らを処刑された」

事実であった。カンタルク王都フレイスブルグに彼らが到着し、そのことがゲゼル・シャフトに伝わると、彼はすぐさまウィクリフらを捕らえさせたのである。彼らが預かってきた書簡はなんとか高官の手に渡り、そこからゲゼル・シャフトのもとへとたどり着いたが、ウィクリフらの状況が好転することはなかった。結局、フレイスブルグに到着してから三日後、彼らは処刑された。

罪状は不敬罪とされているが、彼らがフレイスブルグに到着してから拘束されるまでの間に、不敬を犯すような暇があったとは思えない。

「ゲゼル・シャフトの腹いせか八つ当たりであろう」

というのが、後世の歴史家たちのおおよその見解である。

遠征に失敗したこと、王都フレイスブルグに帰還するまでの間に兵の半分以上が逃げてしまったこと、その一方でウォーゲンと共に居残った兵士たちは一人も逃げなかったこと、そして自分がクロノワ・アルジャークに及ばなかったこと。その他にも数多くの要因が彼の心をかきむしったのだろう。

実際、この頃からゲゼル・シャフトは乱れ始める。昼間から酒を飲んで泥酔し、女と戯れるようになった。気に入らないことがあればすぐに剣を抜いて暴れ周り、臣下が諫言しようものならその場で手討ちにすることさえあった。

閑話休題。話を元に戻そう。

使者の態度や話から、ゲゼル・シャフトに捕虜を取り戻す気が皆無であることを悟ったクロノワは、カンタルク側の講和条件を飲んだ。捕虜に関すること以外は素案に沿った内容であり、一度提示した以上文句を言うのもはばかられたのだ。

カンタルクとの間に締結された講和条約の中身を一言で要約すると、

「カンタルクは賠償金として一億シク（金貨一億枚）を支払う」

となる。

これはカンタルクの国家予算からすれば、およそ五分の一から四分の一に相当する金額だ。莫大な金額ではあるが、しかし同時に払えない額でもない。それにカンタルクにはポルトールという別の財布もあることだし。

そのほかに戦費の全額負担という項目もあったが、それ以上のこと、つまり領土の割譲や長期的な賠償金の支払いを求めなかったことが、カンタルクに素早い決断を促したものと思われる。

カンタルクの使者たちは務めを果たせて満足した様子で帰っていったが、一方で不穏な雰囲気となったのが捕虜になったカンタルク兵たちであった。

自分たちが王であるゲゼル・シャフトからどうも見捨てられたらしいという話は、すぐさま彼らの中に広がった。講和条約がまとまればすぐにでも祖国に帰れると思っていた彼らは絶望の底に叩き落されたといっていい。

その絶望は刹那的な行動に直結し、あわや暴動が起こる事態となった。兵を落ち着かせることが出来るはずのウォーゲンが、怪我で寝台から動けなかったことも原因の一つだろう。

しかし、その暴動は未然に防がれた。クロノワがそれらの捕虜たちをアルジャーク国民として受け入れることを確約したからである。少し先の話になるが、捕虜となった兵たちはオムージュ領のカンタルクとの国境近くで生活することとなった。彼らのうちの半分ほどは、後に祖国に戻ることが出来たようである。

さて、次にオルレアンとの交渉である。

最初にアルジャークがオルレアンに締結を迫った通商条約はかなり不平等なものであった、という話は以前にもした。しかし、降伏したはずのオルレアンとアルジャークが結んだ条約は、なぜか至極公平な内容となっていた。関税の引き下げなど、アルジャークに対する優遇措置はいくつか盛り込まれているが、それはオルレアン側にも適用される場合が多く、「友好国に対する配慮」の範疇に十分収まるものであった。

つまりオルレアンとアルジャークは対等な同盟を締結した、と解釈していい。国力に差がある以上完全に対等ではないだろうが、少なくともこの時点でオルレアンは何も失わなかったのである。

ただ何も失わなかった反面、オルレアンは何も得なかった。カン

タルクの賠償金一億シクは丸ごとアルジャークの懐に入ることになっており、オルレアンの取り分は銅銭一枚もなかった。まあ、実際に戦ってはいないから当然といえば当然だが。

今回の戦いの総括を簡単にまとめると、アルジャークは賠償金と友好国を手に入れ、オルレアンは独立主権を失わずに友好国を手に入れ、カンタルクが一人負けした、といったところであろうか。オルレアンにとって最も良い終わり方をしているといえ、その辺りがアルジャークとの密約を疑われる最大の原因なのだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さて、ウォーゲン・グリフォードの死について書かねばならない。

ルードレン砦の攻防戦において深手を負ったウォーゲンは、アズリアの看病も虚しく日に日に衰弱していった。それでも講和条約が結ばれ終戦を見届けるまでは死ねないと気力を振り絞っていたのだが、そんな中ゲゼル・シャフトが捕虜を見捨てたという話が彼の耳にも入った。

「噂は、まことであろうか……？」

見舞いに訪れたクロノワにウォーゲンは噂の真偽を問うた。すっかり弱々しくなってしまった彼の姿に痛々しいものを覚えながらも、クロノワはその場しのぎの慰めに嘘を付くことはしなかった。

「事実です。カンタルク側は捕虜について一言も触れてきませんでした。ウィクリフ殿も処刑されたとか」

クロノワがそう答えると、ウォーゲンは横になったまま目をつぶ

り悔しそうに顔をゆがめて「なんと愚かな……」と呟いた。その後ろではアズリアが目を見開いて絶句している。

「……クロノワ陛下……！」

ウォーゲンは痛みに堪えながら必死に手を伸ばして身を起こした。アズリアが静止するも聞かず、結局彼女はウォーゲンの背中を支えた。

「このようなことを頼める立場ではないことは重々承知しております。しかし、それでも、どうか……！」

ウォーゲンの声は擦れており張りもない。しかしそれを上回る彼の必死さが、言葉に精気と力強さを与えていた。

「どうか兵士たちのこと、よろしくお願い致します……！」

「はい。委細承知しました。どうぞご心配なく」

クロノワはウォーゲンの手を握りそう答えた。その言葉に誠意の響きを感じたウォーゲンは、安心したように微笑むと再び横になった。クロノワが捕虜たちをアルジャークの国民として迎え入れるという決定をしたのは、もしかしたらウォーゲンに対するはなむけだったのかもしれない。

その晩、カンタルクの名将は静かに逝った。全ての仕事をやり終えたかのような、穏やかな死顔であったという。

彼の遺体は、オルゴット砦の一角に埋葬された。彼の懐に忍ばせてあった古い遺書には、

「墓は要らず、名も要らず。ただ我の槍か剣を突きたてよ」

と書かれており、それにしたがって彼が最後まで使っていた愛用の無骨な剣が一本、突き立てられた。

ウォーゲンの埋葬の際、クロノワは捕虜たちが参列することを許した。参列したカンタルク兵たちは皆一様に泣き崩れ、偉大な大将軍の死を悼んだのである。

埋葬も終わり、カンタルク兵たちが引き上げてもアズリアは一人その場に残っていた。昔、母親に教わった花冠を作っていたのである。作り方を覚えているか不安だったが、ひとたび始めると体は勝手に動いてくれた。その花冠を地面に突き立てられた剣に掛け、アズリアは跪いて黙祷を捧げた。

その隣に一人の男が立ち、彼女と同じように黙祷を捧げる。クロノワ・アルジャークであった。

「……大将軍のこと、ありがとうございました」

「いえ、当然のことをしたまでです。大将軍は兵の方々に慕われていたのですね……」

「はい、とても……」

しばらく二人の間に沈黙が下りる。それを先に破ったのはクロノワのほうだった。

「これから、どうされるおつもりですか？」

「……わかりません」

そういってアズリアは首を振った。もはやカンタルクに帰ることはできない。いや仮に帰れたとしても、ウォーゲンがいないカンタルクに彼女の居場所は無いだろう。

「もしよろしければ、アルジャークの海軍に来ませんか？」

アルジャーク帝国は自国の海上権益を守るために、これから海軍を整備しなければならない。アズリアが持っていたあの白銀の魔弓は対艦戦でこそ真価を発揮するとクロノワは考え、魔導士部隊ではなく海軍に誘ったのである。

「……なぜ、そこまでわたしにしてくださるのですか？」

あの魔弓が対艦戦で真価を発揮するというのであれば、わざわざアズリアを海軍に誘う必要はない。魔弓をだれか他の魔導士に持たせればいいのだ。そもそもクロノワは最初からアズリアに甘い部分があった。それは一体なぜなのか。

「あの魔弓を作ったのは、イスト・ヴァーレという流れの魔道具職人ではありませんか？」

「……！」

思いがけない名前が出たことに、アズリアは絶句して目を見開く。そんな彼女を見て、クロノワは「ああ、やっぱり」と面白そうに笑った。

「私は別に自分の目や貴女を信頼しているわけではありません。ただ、貴女にあの魔弓を渡した友人のことを信頼している。ただそれだけです」

その生涯が一遍の詩となる者を英雄と呼ぶ。アズリア・クリークの生涯が一遍の詩となるかはさておき、彼女のこれまでの人生が激

動続きであったことは間違いない。そして恐らくはこれからも。あるいは、それはアバサ・ロットから魔道具をわたされた者の宿命なのかもしれない。シラクサに向かう船の中で、アズリアはふとそう思った。

―第八話　完―

第八話　王者の器　エピローグ（後書き）

というわけで「第八話　王者の器」いかがだったでしょうか。

このタイトルはあまり深く考えず直感的につけたのですが、結果的に内容に沿ったものになったと新月は思っています。今までにないくらい、王だの皇帝だの出てきましたからね……。

惜しむべきはクロノワとアズリアの絡みがあまりなかったことでしょうか。いえ、最初からこうするつもりではいたのですが、書き上げてみるとちょっともったいない気もしますね。

さて、この「乱世を往く！」という話自体、そろそろ終わりが見えてきました。予定では、この次に幕間を挟み、その後はあと二話で完結となります。

とはいえその二話がどれだけの分量になるかまったくの不明。よっていつ終わるのかもまったく分りません。

こんな感じですが最後までお付き合いいただければ嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6654p/

乱世を往く！

2012年1月8日10時30分発行